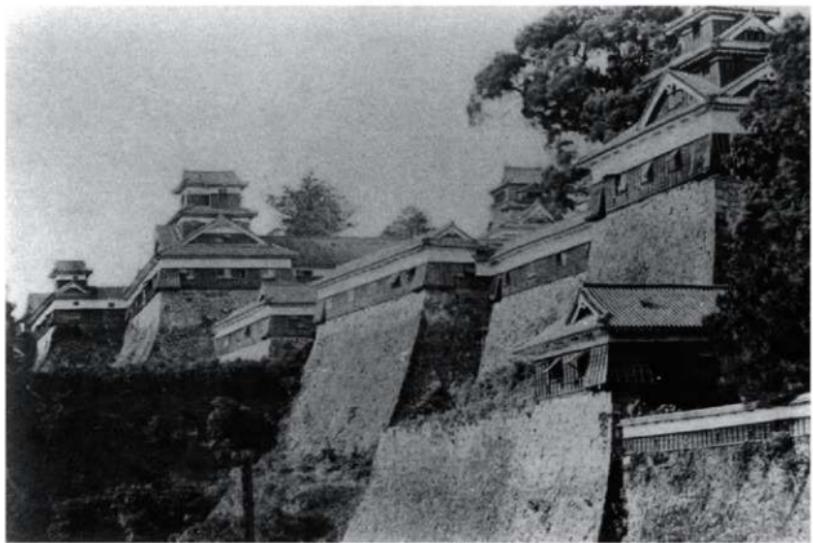


熊本城跡発掘調査報告書 1

– 飯田丸の調査 –

2014

熊本市熊本城調査研究センター



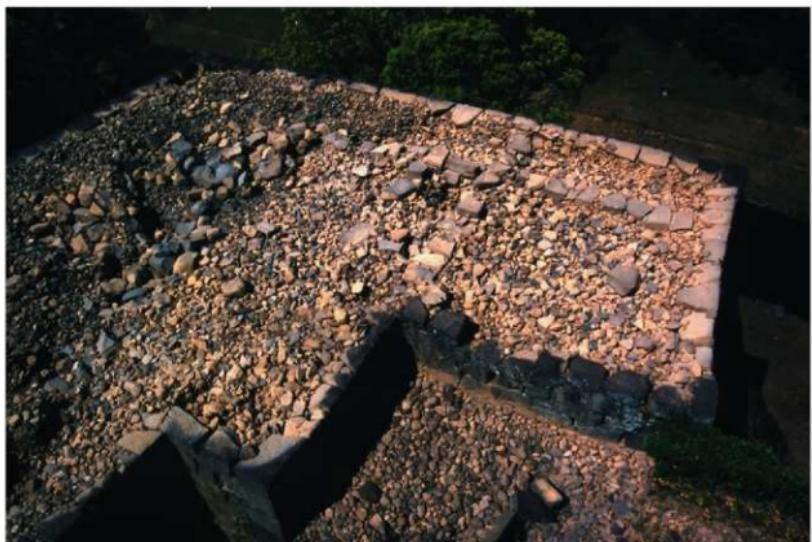
明治初年の飯田丸・数寄屋丸の遠望（長崎大学附属図書館蔵古写真）



明治初年の大天守から飯田丸方面の俯瞰（長崎大学附属図書館蔵古写真）



備前堀から飯田丸を望む



五階御櫓跡発掘調査状況

熊本城跡発掘調査報告書 1

－飯田丸の調査－

2014

熊本市熊本城調査研究センター

序 文

このたび、熊本城飯田丸一帯復元整備事業に伴う発掘調査の報告書を刊行いたしました。

熊本城調査研究センター最初の出版物です。

熊本城は、廃藩置県後の西南戦争では城跡内の建造物の多くが焼失するなどの憂き目に遭いましたが、壮大な石垣群とともに宇土櫓をはじめとする櫓や門、堀などが残る歴史遺産です。学術上の価値が特に高く、わが国文化の象徴たるものとして評価され、特別史跡熊本城跡として指定を受けており、13の建造物も重要文化財となっています。

石垣・櫓群の保存修理は、西南戦争後も続けられてきました。昭和35年には市民の熱意があつて天守外観が復元され、その後も熊本城跡をより一層理解し易いよう、失われていた歴史的建造物が復元されてきました。現在では、市民や県民に止まらず国内外を問わないう多くの人々が訪れるところとなっております。

云うまでもなく、文化財は保存・整備・活用の三位一体が相まって国民の財産として認識され後世に継承していくものです。修理や整備事業に際しては遺構の埋没状況確認のため発掘調査などの実施が必須であり、学術的な根拠を明らかにするとともに、保存活用のあるべき姿を求めて慎重に進めていく必要があります。

このため、熊本市では平成25年10月に「熊本城調査研究センター」を設置し、当該特別史跡の保存・整備・活用の前提に必要となる基礎的な調査と研究を進めていくこととしております。今後は、本丸御殿復元事業や石垣保存修理事業などの発掘調査の成果を世に送り出すとともに、縄張り、石垣、歴史的建造物、出土品、古文書、絵図、古写真など、多面にわたる資料を集めて総合的に解析します。熊本城跡の価値をより高めていく作業を積み重ねて後世に継承し、名実ともに日本を代表する歴史遺産として廣く周知ができるように努めていく所存です。

平成26年11月

熊本城調査研究センター

所長 渡辺 勝彦

例 言

1. 本書は、特別史跡熊本城跡復元整備事業の一環である飯田丸一帯における石垣保存修理・建造物復元整備事業に伴って実施した発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査（現場作業・整理作業）は熊本市教育委員会が行なった。報告書作成作業は、平成25年度は熊本市教育委員会の補助執行機関である熊本市観光文化交流局文化振興課が、平成26年度は熊本市観光文化交流局熊本城調査研究センターが行なった。
3. 発掘調査期間（現場作業）は、平成10年10月1日～平成11年3月31日、平成12年7月25日～平成13年3月28日である。
4. 発掘調査（現場作業）は松村（國武）真紀子（熊本市教育委員会文化財保護主事）が担当した。
5. 整理作業・報告書作成は、熊本城調査研究センター内の作業室において行なった。
6. 現場作業における実測図作成は松村と調査作業員が、写真撮影は松村が行なった。
7. 現場作業における土層の色調表記は『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著）に基づく。
8. 座標数値は、国土調査法第II座標系数値である。
9. 整理作業・報告書作成作業における図面作成は、熊本城調査研究センター職員が作成し、一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステム・株式会社九州文化財研究所に業務委託した。
10. 遺物写真は熊本城調査研究センター職員が撮影した。
11. 出土品のうち動物遺存体の分析については、土井ヶ浜遺跡人類学ミュージアム沖田絵麻氏に依頼し、その分析概要を第7表に掲載した。
12. 図面・写真・出土品は熊本城調査研究センターに保管している。
13. 本書の執筆分担は下記の通りである。

第1章、第3章、第4章1：國武真紀子（熊本城調査研究センター文化財保護主任主事）
第2章1・2、第4章3（1）～（7）：金田一精（熊本城調査研究センター文化財保護主任主事）
第2章3、第4章3（8）：木下泰葉（熊本城調査研究センター文化財保護主事）
第2章4、第5章1：鶴嶋俊彦（熊本城調査研究センター文化財保護主幹）
第4章2、第5章2：美濃口雅朗（熊本城調査研究センター文化財保護主幹兼主査）
14. 本書の編集は熊本城調査研究センター職員が行なった。
15. 調査に際し、下記の方々・機関よりご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げる（50音順）。
現地調査指導：今村克彦、北野 隆、五味盛重、文化庁文化財部記念物課
絵図・古写真等の調査・掲載許可：熊本県立図書館、熊本市総務厚生課歴史文書資料室、
熊本市立熊本博物館、公益財団法人永青文庫、国立科学博物館、長崎大学附属図書館
報告書作成指導：浅川道夫、石井 啓、宇土市教育委員会文化課、扇浦正義、小川 淳一、
株式会社明治、川商フーズ株式会社、木山貴満、熊本市文化交流局文化振興課、來本雅之、
東坂和弘、富田紘一、中原幹彦、日本製缶協会、乗岡 実、宮崎 拓、宮本千恵子、吉田 寛、
陸上自衛隊北熊本駐屯地（以上敬称略）
16. 飯田丸の発掘調査の成果は、古写真分析などとともに同年度の建造物復元基本設計、平成12年度の石垣保存修理・石垣復元、さらに同年度の建造物復元実施設計に反映され、当該発掘調査の概要は『特別史跡 熊本城跡飯田丸一帯復元整備事業報告書』（熊本市2005）に所収されている。なお、飯田丸五階櫓復元工事は、平成13年度に着手し、平成17年3月に完了している。

目 次

本文

第1章 序説

1. 調査に至る経緯	1
2. 調査組織	1
3. 調査の経過	3

第2章 位置と環境

1. 地理的環境	6
(1) 概要	6
(2) 金峰山塊の岩質	6
(3) 熊本城跡の地形	9
2. 歴史的環境	10
(1) 周辺遺跡の概要	10
(2) 熊本城と城下町の変遷	14
3. 文献資料にみる飯田丸	29
(1) 南北朝～戦国時代の隈本城	29
(2) 加藤清正の入国と古城・新城	30
(3) 重臣飯田覚兵衛と熊本城	31
(4) 細川家入国後の熊本城	32
(5) 文獻・絵図資料にみる飯田丸の変遷	33
(6) 西竹之丸と竹ノ丸殿(淨光院)	35
(7) 廃藩置県後の熊本城	36
(8) 西南戦争前後の飯田丸	37
4. 飯田丸の曲輪と石垣	47
(1) 曲輪	47
(2) 石垣	48

第3章 調査の方法

1. 調査の方法	75
2. グリッドの設定	75
3. 基本層序	75

第4章 調査の成果

1. 遺構	79
(1) 五階御櫓跡	79
(2) 百間御櫓跡	85
a. 第1棟	85
b. 第2棟	91
c. 第3棟	92
d. 第4棟	92

(3) 西櫓御門跡	96
(4) 隅御櫓・堀跡	96
a. 南辺石壙	100
b. 東辺石壙	100
(5) 鉄炮藏跡	102
2. 遺物 1	107
(1) 五階御櫓跡出土遺物	107
a. 陶磁器・土器類	107
b. 金属製品	109
c. 石製品	113
(2) 五階御櫓跡下トレンチ出土遺物	114
a. 土師質製品	114
b. 金属製品	114
(3) 百間御櫓跡出土遺物	116
a. 陶磁器・土器類	116
b. ガラス製品	122
c. 金属製品	122
d. 石製品	132
(4) 隅御櫓・堀跡出土遺物	133
a. 陶磁器・土器類	133
b. 金属製品	133
(5) その他の出土遺物	133
a. 陶磁器	133
b. ガラス製品	134
c. 金属製品	134
(6) 動物遺存体	136
3. 遺物 2	148
(1) 軒丸瓦	149
a. 三巴紋軒丸瓦	149
b. 日足紋軒丸瓦	162
c. 桐紋軒丸瓦	163
d. 蛇の目紋軒丸瓦	164
e. 桔梗紋軒丸瓦	164
f. 九曜紋軒丸瓦	166
(2) 軒平瓦	174
a. 宝珠紋軒平瓦	174
b. 桐紋軒平瓦	187

c. 下三葉紋軒平瓦	188	第2図 熊本市周辺の地質図	5
d. 上三葉紋軒平瓦	188	第3図 金峰火山の地質と採石推定地	7
e. 立木紋軒平瓦	191	第4図 熊本市域の山地分布図	7
f. 蓮華紋軒平瓦	191	第5図 熊本城周辺図	8
g. 鳥紋軒平瓦	191	第6図 熊本城築城以前の景観推定図	9
h. 筒紋軒平瓦	192	第7図 「茶臼山ト隈本之絵図」	10
i. 半菊紋軒平瓦	193	第8図 周辺遺跡位置図	12
j. その他	193	第9図 城内調査地点	13
k. 桔梗紋軒平瓦	194	第10図 寛永6～8年 「熊本屋舗割之下絵図」	17
l. 九曜紋軒平瓦	195	第11図 寛永11年 「肥後國熊本城廻普請仕度所絵図」	18
m. 滴水瓦	201	第12図 「平山城肥後國熊本城廻絵図」	19
n. 垂瓦	214	第13図 「肥後國熊本城廻之絵図」	20
o. 軒目板（棟）瓦・軒棟瓦	214	第14図 「熊本城図」	21
(3) 鬼瓦・鰐	216	第15図 「御城図」	22
a. 桔梗紋鬼瓦	216	第16図 「御城内御絵図」	24
b. 九曜紋鬼瓦・その他	217	第17図 文政7年 「熊本城図」	27
(4) 隅木蓋瓦	217	第18図 明治11年（明治25年写）「両軍配備図」	
(5) その他の道具瓦	218	第19図 「旧熊本城飯田丸 第六師団彈薬庫上石垣崩壊之景」（写真）	28
(6) 丸瓦	219	第20図 飯田丸石垣配置図	30
(7) 平瓦	221	第21図 百間御橹台写真	51
(8) 刻印	262	第22図 百間御橹台イ面写真	51
a. 瓦の刻印について	262	第23図 百間御橹台ロ面写真	52
b. 瓦師について	263	第24図 百間御橹台ハ面写真	52
第5章まとめ		第25図 百間御橹台ニ面写真	53
1. 遺構	282	第26図 百間御橹台本面写真	53
2. 遺物	286	第27図 百間御橹台ヘ面写真	54
(1) 陶器・土器類	286	第28図 百間御橹台ト面写真	54
a. 概要	286	第29図 向埋御門南口写真（保存修理後）	55
b. 網田焼皿の認定	286	第30図 向埋御門北口写真	55
c. 英国ドーソン窯産の硬質陶器小皿	287	第31図 向埋御門内部写真（南口から）	56
d. 不明壺	287	第32図 A面石垣南隅角写真	56
(2) 金属製品	288	第33図 B面石垣写真	57
a. 概要	288	第34図 C面石垣写真	57
b. 鉄釘（和釘）	288	第35図 D面石垣写真	58
c. 近世の武器類	288	第36図 E面・F面の出隅写真	58
d. 近代の武器類－西南戦争関連武器類の出土状況	289	第37図 G面石垣写真	59
e. 錢貨	294	第38図 V面石垣西端写真	59
挿図		第39図 U面石垣南隅角写真	60
第1図 熊本市全図	4		

第40図 W面石垣写真	60	第78図 五階御櫓跡出土陶磁器・土器類実測図2	110
第41図 X面石垣南隅角写真	61	第79図 五階御櫓跡出土金属製品実測図1	110
第42図 X面とY面の出隅写真	61	第80図 五階御櫓跡出土金属製品実測図2	111
第43図 H面石垣写真	62	第81図 五階御櫓跡出土金属製品実測図3・石製品 実測図	113
第44図 飯田丸復元整備後の現況写真	62	第82図 五階御櫓下トレンチ出土土師質製品実測図	114
第45図 A面石垣立面図	63	第83図 鉄釘分類模式図	114
第46図 B・D面石垣立面図	64	第84図 五階御櫓下トレンチ出土金属製品実測図1	115
第47図 C面石垣立面図	65	第85図 五階御櫓下トレンチ出土金属製品実測図2	116
第48図 E面石垣立面図	66	第86図 不明壺b類製作工程模式図	117
第49図 F面石垣立面図	67	第87図 百間御櫓跡出土陶磁器・土器類実測図1	118
第50図 G・H面石垣立面図	68	第88図 百間御櫓跡出土陶磁器・土器類実測図2	120
第51図 I～P面石垣立面図	69	第89図 百間御櫓跡出土陶磁器・土器類実測図3	121
第52図 飯田丸「向埋御門」(R面石垣)立面図	70	第90図 百間御櫓跡出土陶磁器・土器類実測図4	123
第53図 熊本城跡飯田丸石垣横断面図	71	第91図 百間御櫓跡出土ガラス製品実測図	123
第54図 調査グリッド配置図	76	第92図 百間御櫓跡出土金属製品実測図1	123
第55図 調査区・グリッド配置図	77	第93図 火縄銃部品参考写真	124
第56図 遺構配置図	78	第94図 百間御櫓跡出土金属製品実測図2	125
第57図 遺構実測図1 五階御櫓	81	第95図 百間御櫓跡出土金属製品実測図3	126
第58図 遺構実測図2 五階御櫓断面	82	第96図 百間御櫓跡出土金属製品実測図4	127
第59図 遺構実測図3 五階御櫓下1トレンチ	83	第97図 百間御櫓跡出土金属製品実測図5	129
第60図 遺構実測図4 五階御櫓下2・3トレンチ	84	第98図 百間御櫓跡出土金属製品実測図6	130
第61図 遺構実測図5 百間御櫓第1棟	86	第99図 百間御櫓跡出土金属製品実測図7	131
第62図 遺構実測図6 百間御櫓第1棟部分	87	第100図 百間御櫓跡出土石製品実測図	133
第63図 遺構実測図7 2トレンチ断面	88	第101図 隅御櫓・堀跡出土遺物実測図	133
第64図 遺構実測図8 3・24トレンチ断面	89	第102図 その他出土陶磁器・ガラス製品実測図	134
第65図 遺構実測図9 6・7トレンチ断面	90	第103図 その他出土金属製品実測図1	135
第66図 遺構実測図10 百間御櫓第1・2棟	93	第104図 その他出土金属製品実測図2	136
第67図 遺構実測図11 1・8トレンチ	94	第105図 金属製品計測部位凡例	136
第68図 遺構実測図12 百間御櫓第3・4棟	95	第106図 瓦部位名称模式図	148
第69図 遺構実測図13 百間御櫓第3・4棟断面	97	第107図 軒丸瓦実測図1	156
第70図 遺構実測図14 百間御櫓断面	98	第108図 軒丸瓦実測図2	157
第71図 遺構実測図15 第4棟不明壺出土状況	99		
第72図 遺構実測図16 曲輪南辺	101		
第73図 遺構実測図17 曲輪南東部	103		
第74図 遺構実測図18 曲輪東辺暗渠	104		
第75図 遺構実測図19 10トレンチ断面	105		
第76図 遺構実測図20 トレンチ断面	106		
第77図 五階御櫓跡出土陶磁器・土器類実測図1	108		

第109図	軒丸瓦実測図3	158	第149図	丸瓦実測図3	233
第110図	軒丸瓦実測図4	159	第150図	丸瓦実測図4	234
第111図	軒丸瓦実測図5	160	第151図	平瓦実測図	235
第112図	軒丸瓦実測図6	161	第152図	平瓦他実測図	236
第113図	軒丸瓦実測図7	162	第153図	出土瓦刻印拓本1	266
第114図	軒丸瓦実測図8(菊丸)	175	第154図	出土瓦刻印拓本2	267
第115図	軒丸瓦実測図9	176	第155図	出土瓦刻印拓本3	268
第116図	軒丸瓦実測図10	177	第156図	出土瓦刻印拓本4	269
第117図	軒丸瓦実測図11	178	第157図	出土瓦刻印拓本5	270
第118図	軒丸瓦実測図12	179	第158図	出土瓦刻印拓本6	271
第119図	軒丸瓦実測図13	180	第159図	出土瓦刻印拓本7	272
第120図	軒丸瓦実測図14	181	第160図	出土瓦刻印拓本8	273
第121図	軒丸瓦実測図15	182	第161図	出土瓦刻印拓本9	274
第122図	軒丸瓦実測図16	183	第162図	出土瓦刻印拓本10	275
第123図	軒丸瓦実測図17	184	第163図	出土瓦刻印拓本11	276
第124図	軒丸瓦実測図18	185	第164図	出土瓦刻印拓本12	277
第125図	軒丸瓦実測図19	186	第165図	出土瓦刻印拓本13	278
第126図	軒平瓦実測図1	202	第166図	出土瓦刻印拓本14	279
第127図	軒平瓦実測図2	203	第167図	出土瓦刻印拓本15	280
第128図	軒平瓦実測図3	204	第168図	出土瓦刻印拓本16	281
第129図	軒平瓦実測図4	205	第169図	西南戦争籠城時の官軍守備配置図	284
第130図	軒平瓦実測図5	206	第170図	四斤山砲と石星内壁の撤去関係図	285
第131図	軒平瓦実測図6	207	第171図	西南戦争関連武器類出土分布図1	292
第132図	軒平瓦実測図7	208	第172図	西南戦争関連武器類出土分布図2	293
第133図	軒平瓦実測図8	209			
第134図	軒平瓦実測図9	210			
第135図	軒平瓦実測図10	211	表		
第136図	軒平瓦・滴水瓦実測図	212	第1表	周辺遺跡一覧表	11
第137図	滴水瓦・垂瓦実測図	213	第2表	熊本城年表	39
第138図	軒目板(棟)瓦実測図1	222	第3表	陶磁器・土器類観察表	137
第139図	軒目板(棟)瓦実測図2	223	第4表	金属製品観察表	141
第140図	軒目板(棟)瓦実測図3・鬼瓦実測図	224	第5表	ガラス製品観察表	146
			第6表	石製品観察表	146
			第7表	動物骨観察表	146
第141図	鬼瓦他実測図	225	第8表	瓦観察表	237
第142図	隅木蓋瓦実測図	226	第9表	軒丸瓦・軒平瓦計測表	243
第143図	道具瓦実測図1	227	第10表	西南戦争関連武器類出土位置一覧	291
第144図	道具瓦実測図2	228			
第145図	道具瓦実測図3	229	写真図版		295
第146図	道具瓦実測図4	230			
第147図	丸瓦実測図1	231	報告書抄録		317
第148図	丸瓦実測図2	232			

第1章 序説

1. 調査に至る経緯

熊本城跡では、昭和25年に現存する宇土櫓を含む13棟の建造物が国の重要文化財に（昭和8年には旧法による国宝指定済み）、昭和30年には城域約98haのうち約51.2haが特別史跡に指定されている。史跡指定範囲の大部分は昭和43年に計画決定された都市公園区域（56.3ha）とも重なるため、史跡内の保存整備事業は文化庁、国土交通省（旧建設省）、熊本県教育庁の指導・補助を受けて実施している。

史跡の保存管理については、昭和57年度に「特別史跡熊本城跡保存管理計画」を策定しており、城域内の環境整備は特別史跡としての熊本城跡を良好な状態で保存していくことを最優先に考え、残存する遺構の維持保存だけでなく、城域の境界を明確にするために石垣や堀の積極的な復元なども行うべきであるとまとめている。また、平成9年度には「熊本城復元整備計画」を策定し、地域の貴重な歴史遺産であり文化の象徴でもある熊本城跡の価値をより一層高めるため、歴史的建造物の保存と復元、都市のうるおい空間としての環境整備、サービス空間の創出、この3つを基本方針として、城域全体を対象に史実に基づいた建造物・遺構の復元・修理を行うことを決定した。この「復元整備計画」は短期・中期・長期に分けて進められており、短期スケジュールの第1期では西出丸（奉行丸）一帯を対象に復元整備工事と事前の発掘調査が実施された。

飯田丸一帯は短期スケジュール第2期の整備対象地区で、五階御櫓の復元と共に、石垣の孕みが著しい箇所や明治初期に撤去された部分の石垣解体修理および復元整備工事が行われることになり、平成12年度の工事着工前に遺構の残存状況を確認するための発掘調査を実施した。平成10年度は地形測量、五階御櫓台・百間櫓台上面の発掘調査と飯田丸曲輪内でのトレーニング調査、平成12年度は石垣立面図作成を行った後、五階櫓復元のための素屋根基礎工事および石垣解体修理工事に伴い、工事発生土からの遺物採集と遺構の残存状況確認調査および検出遺構の図面作成作業を行った。

2. 調査組織

平成10年度 発掘調査

調査期間：平成10年10月1日～平成11年3月31日

調査主体：熊本市教育委員会文化課

調査総括：今村克彦（文化財専門員）

調査責任：鳩野 敬（文化課長）

調査庶務：西川公夫（文化課技術参事）

　　村田忠久（文化課埋蔵文化財係長）

　　國武雅春（文化課主事）

調査担当：松村真紀子（文化課文化財保護主事）

調査作業：内園せつ子・梅木信子・太田美保子・河野 徹・川淵雅行・川本裕子・修理保子・

　　田中孝治・寺本 透・中村一子・西山チカエ・馬場和子・林田アサエ・早田ゆみ子・

　　平山伸啓・松永ひとみ・右田嘉子・山田京子・米村蝶子・和田賢一

平成11年度 遺物整理作業

作業期間：平成11年4月1日～平成13年3月31日

作業主体：熊本城総合事務所整備振興課・熊本市教育委員会文化財課

作業責任：今村克彦（熊本城総合事務所長）

富田紘一（文化財課長）
作業庶務：西川公夫（文化財課技術参事）
 村田忠久（文化財課埋蔵文化財係長）
 大城康雄（文化財課主任文化財保護主事）
 國武雅春（文化財課主事）
作業担当：松村真紀子（文化財課文化財保護主事）
 甲斐美紀・新改孝子・永広絢代・平林正子・前田芳江

平成12年度 石垣解体修理工事に伴う調査と出土遺物整理作業

調査期間：平成12年7月25日～平成13年3月28日
調査主体：熊本城総合事務所整備振興課・熊本市教育委員会文化財課
調査責任：今村克彦（熊本城総合事務所長）・富田紘一（文化財課長）
調査庶務：西川公夫（熊本城総合事務所整備振興課復元整備班技術参事）
 村田忠久（文化財課埋蔵文化財係長）
 大城康雄（文化財課主任文化財保護主事）
 國武雅春（文化財課主事）
調査担当：松村真紀子（文化財課文化財保護主事）
調査作業：荒木えみ子・石田佳子・石原秋子・岩崎さゆり・梅木信子・太田美保子・奥村宣子・
 小野寺美代子・川口時子・川本裕子・黒川美代子・修理保子・末松良子・徳永藤子・
 林田由紀子・早田ゆみ子・福永温子・松村頼子・右田嘉子・山田京子
整理作業：甲斐美紀・新改孝子・永広絢代・平林正子・前田芳江・松村頼子

平成25年度 報告書作成作業

作業期間：平成25年10月1日～平成26年3月31日
作業主体：熊本城調査研究センター・熊本市文化振興課埋蔵文化財調査室
作業責任：清田 稔（熊本城調査研究センター所長兼埋蔵文化財調査室長）
作業庶務：堀坂太郎（埋蔵文化財調査室主任主事）
作業担当：松村真紀子（熊本城調査研究センター文化財保護主事兼埋蔵文化財調査室文化財保護主事）
整理作業：岩崎さゆり・岩下典子・倉石れい子・小林美和子・新改孝子・藤本直子・前田芳江・
 松田昌美・松村由美子

平成26年度 報告書作成作業

作業期間：平成26年4月1日～平成26年9月31日
作業主体：熊本城調査研究センター
作業責任：田上聖子（観光文化交流局次長兼熊本城調査研究センター所長）
 渡辺勝彦（熊本城調査研究センター所長）
作業庶務：河田日出男（熊本城調査研究センター副所長）
 古賀丈晴（熊本城調査研究センター主査）
 益田知子（熊本城調査研究センター主任主事）
作業担当：鶴嶋俊彦（熊本城調査研究センター文化財保護主幹）
 美濃口雅朗（熊本城調査研究センター文化財保護主幹兼主査）

金田一精（熊本城調査研究センター文化財保護主任主事）

國武真紀子（熊本城調査研究センター文化財保護主任主事）

木下泰葉（熊本城調査研究センター文化財保護主任）

嘱託：村田理恵（熊本城調査研究センター嘱託）

竹田知美（文化振興課埋蔵文化財調査室嘱託）

整理作業：岩崎さゆり・倉石れい子・小林美和子・長館ひろ子・松村由美子

3. 調査の経過

平成10年度発掘調査

平成10年10月1日 機材搬入。五階櫓台上面に遺構の残存状況確認のためにトレーナーを設定。

10月5日 奉行丸と頬当御門前から基準点を移動し、五階櫓台上他にグリッド設定。

10月6日 五階櫓台上面の表土上層を重機で除去。樹木伐採。

10月7日 人力での掘り下げ作業再開。

10月13日 百間櫓台裾に内面石垣の残存状況を確認するためのトレーナーを設定し、掘り下げ。
隨時、図面作成。

10月20日 五階櫓台上面南西部で、大量の瓦片を含む落ち込み確認。

10月30日 五階櫓台石垣平面図等作成開始。

11月9日 五階櫓台上面土層断面図等作成開始。

12月1日 百間櫓台上面にグリッド設定。

12月2日 百間櫓台上面の掘り下げ開始。

12月9日 百間櫓台上面の土層断面図等作成開始。

12月15日 五階櫓台上面の裏込め等に遺構確認のためのトレーナー設定し、掘り下げ。

平成11年1月7日 百間櫓台石垣平面図等作成開始。

2月15日 五階櫓台横のケヤキを伐採し、抜根。排土から瓦片採集。

2月17日 百間櫓台石垣裾や西櫓御門の周囲など、曲輪内に遺構の残存状況および土層の堆積状況を確認するためのトレーナーを設定し、掘り下げ。

随时、図面作成。

3月31日 作業終了。撤収。

平成12年度発掘調査

平成12年7月25日 五階櫓台西・南面裾の小段に、土層の堆積状況と遺構の残存状況を確認するためのトレーナーを設定し、掘り下げ。

8月1日 図面を作成し、撤収。

12月5日 石垣解体修理工事開始。

素屋根建設のため、五階櫓台西面小段の表土除去。排土から遺物採集。

12月13日 百間櫓台内面石垣検出のため、表土を除去。排土から遺物採集。

12月21日 百間櫓台内面に残存する石垣を検出・精査。

平成13年1月4日 石垣平面図等実測のため、グリッド設定。

1月9日 百間櫓台石垣の図面作成作業開始。

1月25日 作業終了。撤収。

第2章 位置と環境



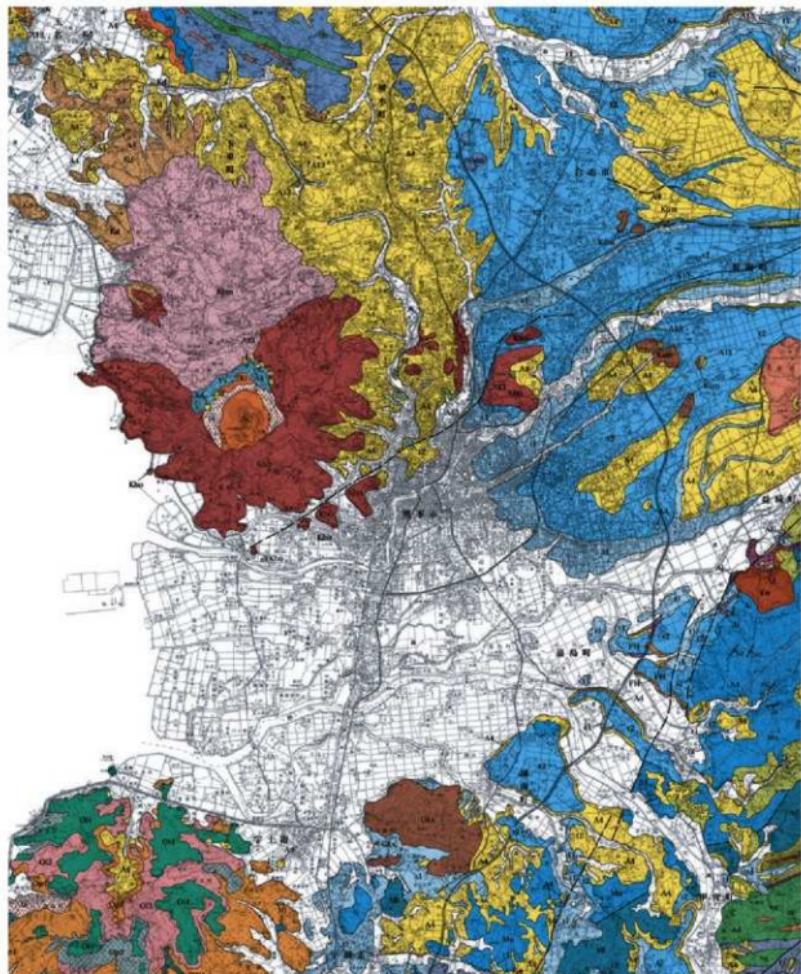


Fig. 熊本市周辺の地質図 熊本県地質図（10万分の1）説明書（2008）より加筆引用

凡例

M: 阿蘇-4 火砕流堆積物 Kbo: 金峰火山古期噴出物 A13: 阿蘇-1～3火砕流堆積物 t1: 低位段丘堆積物 t2: 中位段丘堆積物
 Ki: 金峰火山新期堆積物 Ys: 芳野層 ta: 崖邊堆積物 Klm: 金峰火山中期噴出物 Kum: 熊本層群 A1: 李井火山(武川溶岩)
 Mu: 御船層群上部層 FH: 布田層・花房層 MI: 御船層群下部層 vg: 苦鉄質火山岩類 cc: 結晶質チャート um: 超苦鉄質岩類
 Gks: 離回山層 O11: 大岳古期輝石安山岩溶岩 O13: 大岳新期角閃石安山岩溶岩 O14: 大岳新期輝石安山岩火砕岩
 Opl: 大岳新期角閃石安山岩火砕岩 Opl2: 大岳新期輝石安山岩火砕岩

○の範囲は調査地、○の範囲は自然堤防の範囲を示す。

第2図 熊本市周辺の地質図

※熊本県教育委員会「熊本県文化財調査報告第30集 熊本城跡道路群」2014より改変・転載

1. 地理的環境

(1) 概要

熊本市は、熊本県の県庁所在地として発展し、平成20年に富合町、平成22年に植木町・城南町と合併した結果、人口が73万人に達し政令指定都市となった。この合併により市域は格段に拡大し、面積は、熊本県の5.3%にあたる約390km²を占めている。以下に、熊本城跡周辺を中心に熊本市域の地勢について概観する。

市域は大きく分けて、有明海と内陸部を隔てている中央西側の金峰山塊、市域南側にあって有明海に望み、台地と山地で縁どられた広大な熊本平野、北部・東部・南部にかけての台地（火碎流台地・河岸段丘）、で構成される。市域には、北東から西に貫流する白川、南東から西に貫流する緑川の水系があり、熊本平野に望む台地は両水系によって開析され、活発な沖積作用により熊本平野が形成された。

東部の台地は、先端の熊本平野から東方へ向かって高度を増し、阿蘇外輪山西側斜面へと続く。北側の台地も熊本平野から北へ向かってやや高度を増しながら続き、国道208号線・県道30号線付近を境に高度を下げて、山鹿盆地・玉名平野に望む。先の道路付近が分水境界となり、境界から北側は木葉川や合志川などの菊池川水系の河川に開析されている。

熊本城跡は、通称京町台地先端の茶臼山一帯に立地する。この台地は、阿蘇火山起源の火碎流堆積物が基盤をなす。阿蘇火山からの大規模な火碎流は、数万年の間隔をおいて4回起こり、約9万年前といわれる最後で最大規模の火碎流（Aso-4、以下 Aso-4）が熊本平野周辺を覆っている。京町台地より東側の台地は、さらに Aso-4 以後の砂礫層に覆われているが、この砂礫層は京町台地までは到達していない。このため、京町台地を含めて金峰山塊までの間は Aso-4 の端部の様相を呈し、火碎流が金峰山塊にのし上げた格好になるため、噴出源である阿蘇火山に対して逆傾斜になる。火碎流は花岡山にも到達し、その先は沖積平野の下に潜っている。この火碎流による堆積物は、深い部分では溶結し硬質の溶結凝灰岩となり、浅い部分は溶結が進まず軟質の非溶結凝灰岩となる。

Aso-4 の後は、地形に影響するような大きな火山活動は無く、熊本市域の洪積台地は主に阿蘇火山や雲仙火山起源の火山灰に覆われる。火山灰層の上部は腐食の集積した黒土層で、黒ボクと呼ばれ現在の表土となる。下部は粘性の強い褐色土で赤ボクと呼ばれる。黒ボクの下位には、約29000～26000年前とされる鹿児島湾の姶良大噴火に起因する姶良 Tn 火山灰が混入し、肉眼でもガラス火山灰を観察できる。その上には、明るい色調が特徴の鬼界カルデラの噴火に起因するアカホヤ火山灰（約7300年前）もみられ、遠隔地の火山活動による火山灰が人類史を区分する鍵層となっている。

火碎流堆積物と火山灰によって形成された京町台地は、白川水系の坪井川・井芹川とその支流により開析され、河川の主な流下方向である南北方向に長く伸びる。河川の浸食は、非溶結凝灰岩だけでなく溶結凝灰岩も樹枝状に解析し、京町台地は急崖に縁どられる特徴的な地形を呈している。台地の表面の起伏は弱く、基盤である火碎流堆積物と同様に北東から南西へ緩やかに下がりながら熊本平野へ至る。

(2) 金峰山塊の岩質（第3・4図）

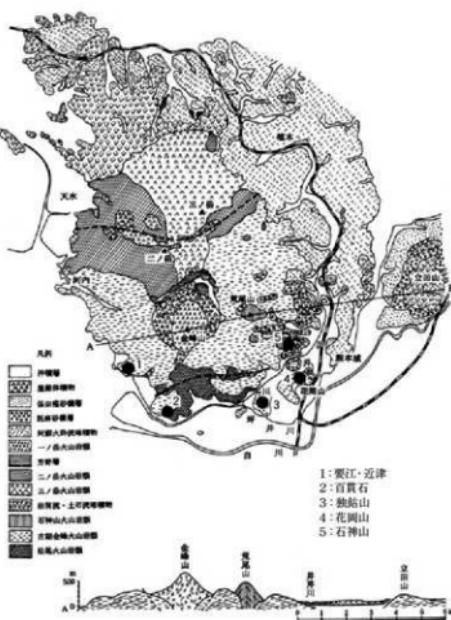
熊本城跡の石垣の大半は輝石安山岩である。これは金峰山塊で産出される安山岩の一つで、立地も含めて考慮すれば金峰山塊が主産地であることは容易に想定される。実際に、矢穴の痕が残る転石も確認されている。以下に石垣石材の生成に絡む金峰山塊について記す。

金峰山塊は、一つの大きな成層火山ではなく、多くの火山の集合体である。火山の活動は2期に大別され、古期噴出物としては、80～120万年前の活動による松尾山火山岩類・古期金火山岩類・石神山火山岩類があり、新期噴出物としては、三ノ岳火山岩類・二ノ岳火山岩類・カルデラ形成後に成長した一ノ岳（中央火口丘）火山岩類がある。古期噴出物の岩質は、玄武岩・輝石安山岩・角閃石安山岩など多様であ

り、うち、角閃石を少量含む輝石安山岩が主体をなす。これは、粘性の強い溶岩噴出によって生成されたもので、肌理が細かく、また割るのにも適していることから、加工石材として現在も広く利用されている。現在の安山岩類の採掘場は、古期噴出物から形成される地域、すなわち外輪部の南東-南-西側で数箇所が知られる。

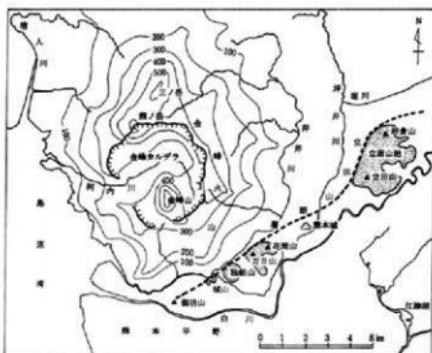
外輪部とはやや離れるが、地質的に同質の火山噴出物で構成された丘陵がみられる（第4図）。岩倉山・立田山・花岡山・万日山・独鉢山・城山・御坊山で、北東-南西方向に並び、南西になるにつれて、順次、面積・高さが小さくなる。この丘陵群は、西側・北東側斜面が急であるのに対して、東側・南西側斜面が緩やかな非対称な断面形を呈する傾向を示す。これは丘陵群にそって立田山断層が存在することに起因しており、本来、外輪部であった丘陵群が断層活動によって金峰山塊から切り離されたためである。立田山断層は、熊本城の北側付近を走ると想定されている。城内と京町を分ける新堀も、立田山断層に起因する丘陵の狭隘部を利用したとされ、京町台地と茶臼山丘陵を分ける高低差もこの断層によるずれとも考えられている。なお、地質図（第2図）によれば津浦・高平・徳王付近にも同質の噴出物が表示されている。

熊本城石垣の石取場の推定については、富田紘一氏の研究がある。これによれば、石垣採石により地形が大きく変化している可能性が高いことから、大量の熊本城石垣の供給を賄い得た場所として、坪井川河口付近の要江・近津を主要採掘地の有力候補としている（富田2007）。この他、岩石学的成果の援用、「肥後国誌」等の伝承、矢穴の痕跡を認める転石などの存在から、石神山・花岡山・独鉢山・百貫石付近などを採石地として紹介している（第3図）。



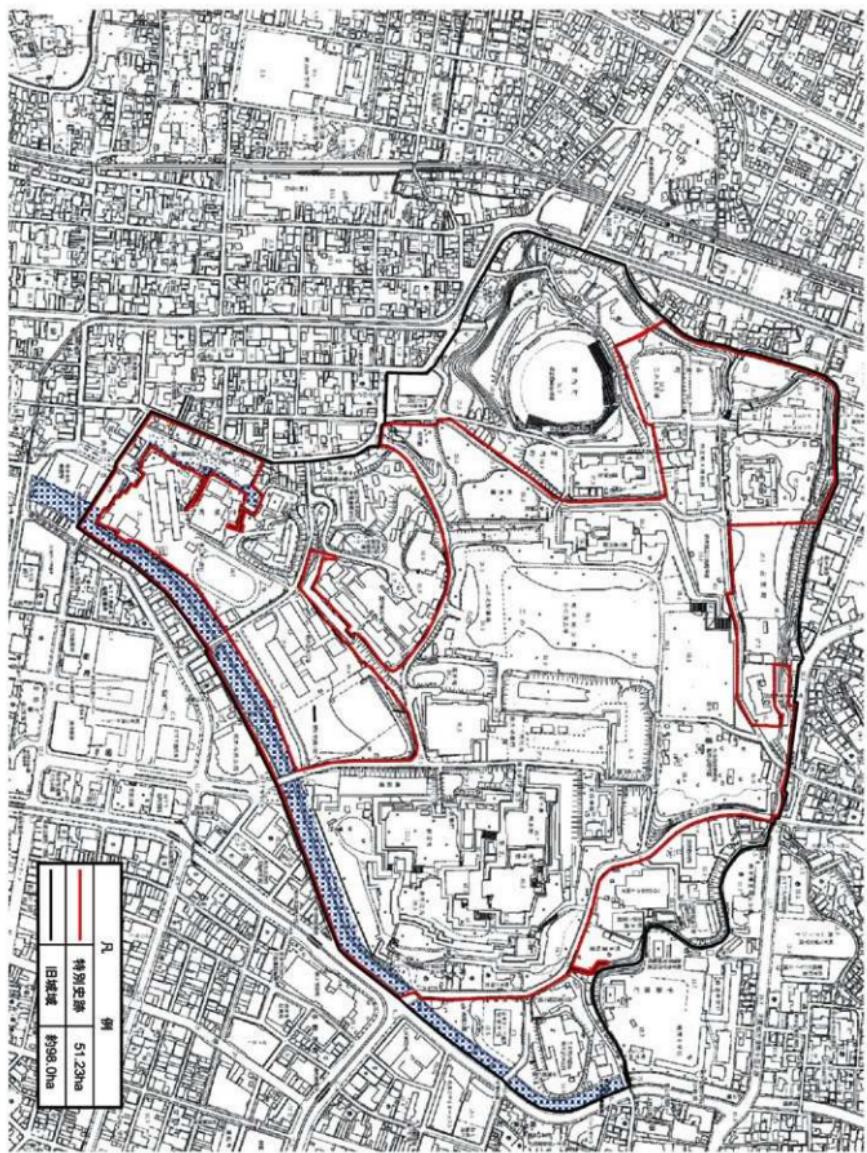
第3図 金峰火山の地質と採石推定地（縮尺任意）

※渡邊一徳（熊本市1998）より加筆転載



第4図 熊本市域の山地分布図（縮尺任意）

※渡邊一徳（熊本市1998）より転載



第5図 熊本城周辺図（縮尺任意）

(3) 熊本城跡の地形（第5図）

京町台地の先端は、現在の新堀橋付近で東西幅が狭くなり、古来から茶臼山とも呼ばれていたように独立丘陵状を呈する。平面形は、解析による大小の弧の連続で構成されており、全体としては現在の熊本県立第一高等学校（以下、第一高校）を要とし、東の千葉城、西の段山を両端とした扇形の地形を呈する。京町台地の特徴的な崖地形が隨所にみられ、第一高校グランド、藤崎台球場南側、清爽園などの崖面に基盤の Aso-4 火砕流堆積土の非溶結凝灰岩露頭がみられる。

崖面の形成は、河川によって削られたものだが、富田絢一氏の研究成果（富田1996）によれば、熊本城築城時、白川も茶臼山に接して流れていたとされる（第6図）。氏は、慶長国絵図などをもとに、現在熊本城跡の南を流れる白川が、世継橋から北側へ大きく蛇行し、市役所付近で坪井川と合流していたものを、加藤清正が、17世紀初頭に白川を直線化し、現在の流路に付け替えたとする。氏の旧白川跡想定地には、現在でも窪地がみられる。この河川の流路変化と合わせて城内の南崖面を概観すると、第一高校のグランドに面した崖面、国立病院機構熊本医療センター（以下、国立病院）と元熊本西税務署の間の段差、桜馬場と奉行丸との間の段差、東竹之丸の高石垣と連続した高低差の大きい弧状の地形は、白川・坪井川の浸食面であった可能性を想定できる。実際、桜馬場の発掘調査や第一高校校長官舎建設に伴う発掘調査の際に、流路であった部分を 2~5 m ほどの厚さで埋め立てていることが確認されている。本来は、白川に削られた崖面が連続していたのであろう。飯田丸は、浸食面と思われる地形の一部に当たると思われるが、郭はやや南へ突出した地形となっている。

築城前の旧地形を知る資料としては、「茶臼山ト隈本之古圖」がある。築城前の地形が独立丘陵状に描かれ、「クワンノン堂」など築城前の土地利用状況を示している。しかし、先の白川の蛇行の表現も無く、



河川の原流路推定

熊本城築城以前の景観推定図

第6図 熊本城築城以前の景観推定図（縮尺任意）

©富田絢一 (2000) より転載



第7図 「茶臼山ト隈本之絵図」

いつ頃に描かれたものかわかつてない。ただ旧地形は、この絵図にあるように、現在の本丸付近を最高所として東へは急に、西へは緩やかに下がる地形であった。

2. 歴史的環境

(1) 周辺遺跡の概要（第8図、第1表）

熊本城跡の土地利用の概略としては、古代から中世に国府所在地である二本木遺跡群と各所へ向かう官道などの交通の要所、中世の寺院、戦国期の城を経て、近世城郭の築城となり、近代の軍用地を経て現在に至る。城下町は、中世までの国府を核とした二本木遺跡群の町屋・寺院を、加藤清正が古町に移して隈本城時代の城下町と融合し、現在に至る。

以下に、熊本城跡遺跡群周辺の旧石器時代～中世について、時代ごとに記す。

市域における旧石器時代の遺跡は、金峰山麓・立田山麓にみられ、山麓から派生する丘陵裾部でも近年出土例が増加している。第5図に示した熊本城周辺域ではまだ出土例がない。

縄文時代の遺跡は、金峰山丘陵裾部に濃密に分布する。特に後晩期の遺跡が多く、井芹川上流には太郎追遺跡や四方寄遺跡など著名な遺跡もある。熊本城跡遺跡群周辺域では、二本木遺跡群で中期から晩期の土器・石器、京町台遺跡で晩期の遺物、熊本城跡遺跡群の西縁部に当たる段山遺跡で打製石斧や磨製石斧が採集されている。また、近年の調査で、熊本城天守閣南の地蔵門の脇から縄文時代後期の土器片がまとまって出土している。

弥生時代の遺跡は、市域全体で早・前期は少なく、中期から急増する傾向がある。早・前期の資料は、二本木遺跡群から出土している。縄文時代晩期で途切れで弥生時代に連続しない遺跡が多い中で、この二本木遺跡群は、縄文時代晩期から継続して弥生時代早・前期の資料がみられる希少な遺跡である。扇状地と低地の境界に立地している点など、縄文時代から弥生時代への過渡期を考える上で注目される。弥生時代中期の甕棺も出土し、後期には塚や多数の堅穴住居群が出土している。銅鏡の出土例もあり有力な集落が形成されていたようである。京町台地の先端から南南西に伸びる、後に城下町が形成された白川右岸の緩扇状地・自然堤防上では、船場町遺跡の中期の甕棺、古町遺跡の中期の甕棺（唐人町遺跡）や、後期の堅穴住居群が出土しており、弥生時代中期頃から本格的な土地利用が始まったようである。後期には、古町遺跡・二本木遺跡群・八島町遺跡・南新宮遺跡など、数百mから1km程度の距離をおきながら集落が営

まれており、各集落間の関係性が注目される。他にも井芹遺跡・牧崎遺跡・藤園中学校校庭遺跡で中期の甕棺が出土している。

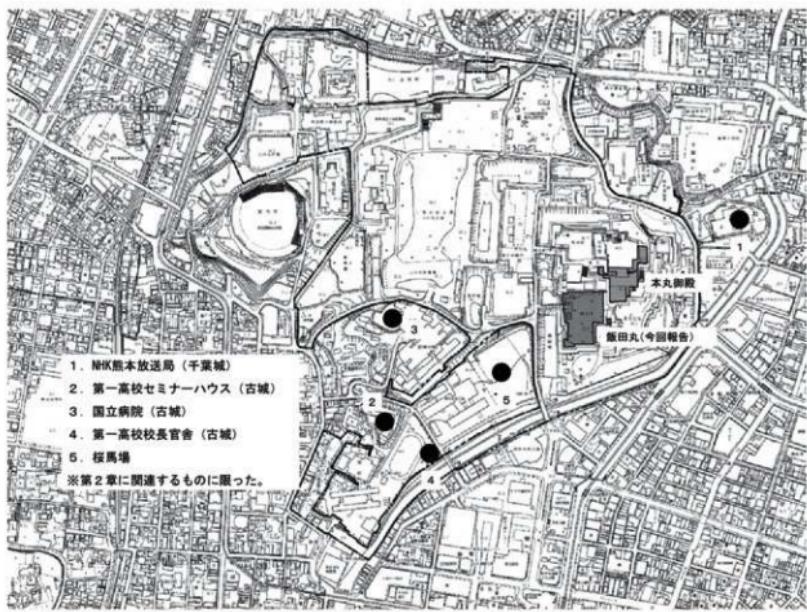
古墳時代の熊本城跡遺跡群周辺については、前期・中期は不明瞭だが、後期には京町台地に特徴的な崖地形に多数の横穴墓が造られている。熊本城跡遺跡群内にも古城横穴群・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群がある。さらにも北には、寺原横穴群や、津浦一の谷横穴群などがあり、熊本市域の横穴墓集中地の一つである。古城横穴群は、崖面に3段にわたって築かれ、数回の発掘調査で53基の横穴墓が確認されている。そのうち39号には「火守」あるいは「火安」と読める文字が刻まれた閉塞石があり、墓室からは鉄滓が出土している。被葬者の職制を反映したものと想定されている。千葉城横穴群は、昭和37(1962)年にNHK熊本放送局建設の際に発掘調査が行われ、10基の横穴墓が出土した。横穴墓の配置は、「コ」字状に前庭部を開むようで、前庭部を共有した横穴群であった可能性もある。これらの横穴墓群の集中に対して、墳丘を持つ古墳の分布は少ない。緩扁状地上にあった船場山古墳・長迫古墳・山崎古墳は、開発によって消滅し位置も不明瞭である。その中で山崎古墳は、長瀬真幸の調査記録により、寛政8(1796)年に主体部が発見されたことが知られる。発見の経緯と人骨や遺物の良好な出土状況は、長瀬の知友であった伴信友の『信友隨筆』などに収録されて今日に伝えられている。

第1表 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	主要な時代	備考
1	本妙寺B箱式石棺群	古墳時代	
2	本妙寺A箱式石棺群	古墳時代	
3	井芹城跡	中世	
4	井芹遺跡(井芹甕棺遺跡)	弥生中期	
5	本妙寺北遺跡		
6	中尾丸城跡	中世	
7	小山田遺跡		
8	島崎遺跡	繩文	
9	牧崎遺跡(牧崎甕棺遺跡)	弥生中期	1966年、甕棺14基出土。
10	京町台遺跡群	繩文～近代	伝赤尾丸城跡
11	寺原横穴群	古墳	
12	京町2丁目遺跡	近世	
13	伝大道寺跡遺跡群	弥生～近世	
14	内坪井遺跡	弥生	
15	石神原遺跡	繩文	
16	千原台遺跡群	繩文	
17	戸坂遺跡	弥生・古代	
18	迎田遺跡		
19	熊本城跡遺跡群	繩文～近代	国指定特別史跡熊本城跡・段山遺跡・千葉城横穴群・磐根橋際横穴群・古城横穴群・茶臼山廃寺・藤崎宮跡
20	藤園中学校校庭遺跡	弥生中期	甕棺出土
21	新馬借遺跡	古代・中世	
22	船場町遺跡(新町2丁目甕棺遺跡)	弥生中期	1977年、下水道工事中に甕棺出土。
23	山崎古墳	古墳	消失、位置不明瞭。
24	花畠邸跡	中世・近世	加藤・細川時代の藩主邸宅の一部、世継神社跡地
25	辛島町遺跡		
26	吉祥寺横穴群	古墳	
27	花岡山・万日山遺跡群	古墳・近世	花岡山箱式石棺群・万日古墳・万日山東古墳・万日山重古墳・妙解寺跡
28	古町遺跡	弥生～近世	
29	北岡神社境内古墳	古墳時代	
30	二木本遺跡群	繩文～近世	北岡神社古墳・北岡神社横穴群・春日町遺跡・古町小学校校庭遺跡・龜田国府推定地
31	石塘遺跡(白川橋遺跡)		
32	本山城跡(本庄城跡)	中世	
33	本庄遺跡(熊大病院敷地遺跡)	繩文～近代	
34	平田町遺跡	弥生～中世	



第8図 周辺遺跡位置図



第9図 城内調査地点（縮尺任意）

京町台地から離れたところでは、花岡山・万日山遺跡群や二本木遺跡群で墳墓がみられる。古墳についてはいずれも現存していないが、注目事例を記す。花岡山箱式石棺群（花岡山・万日山遺跡群）では、箱式石棺群の近くから中期の土師器壺が出土している。この壺には、中に碧玉製勾玉2個・碧玉製管玉1個・ガラス玉26個が納められており、地鎮行為に伴い埋納されたものと考えられている。万日山古墳（花岡山・万日山遺跡群）は、石室の構造、出土遺物から7世紀前半に比定される。全長12.3mの特異な構造の横穴式石室は、玄室の左右に石屋形を設け、奥壁には割り貫き式の家形石棺を設置している。家形石棺については畿内的要素がみられる。これらの点から、本古墳は当該地域における首長墳と捉えられ、安閑2（535）年に当該地域に設置されたとされる春日部屯倉との関連も考慮される。北岡横穴群（二本木遺跡群）は、火砕流堆積物の南端に立地する横穴墓群で、上下3段に展開しており、下段の横穴墓群においては、枝分かれ状に伸びる長い前庭部が設けられている。前庭部を派生させて新たな造墓を行ったもので、県下には例は少なく、北部九州、特に遠賀川流域に認められる要素である。

墳墓に対して、集落の様相は調査例が少なく不明瞭で、京町台遺跡群・古町遺跡・本庄遺跡で古墳時代の堅穴住居、二本木遺跡群で井戸などが出土している。

古代において最も注目されるのは二本木遺跡群で、7世紀後半～10世紀代の埋蔵文化財が認められる。特に8世紀後半～9世紀前半において充実している。これまでの発掘調査で、大規模な建物を含む規格的な配置の建物群や、陶硯・瓦の大量出土から官衙施設と想定される遺構が出土している。少なくとも都衙以上の規模と内容を持った施設で、国府の可能性も指摘されている。官衙施設の周辺には、堅穴住居や掘立柱建物で構成される大規模な集落が広がっており、輸入陶磁器・国産陶器や腰帶具・文字土器などの希少遺物も大量に出土している。特に集落の端にある村落内寺院遺構付近で出土した唐三彩陶枕は注目される。二本木遺跡群以外に、古代飽田郡の施設とみられるのが伝大道寺遺跡群である。京町一帯は近世に武

家屋敷・町人町として開発され、そのまま現代の市街地になっているため、近世以前の様相はわかりにくいかが、本遺跡からは7世紀後半～9世紀の瓦が出土している。この期間の瓦が継続して出土する遺跡は、熊本市域では本遺跡だけである。伝大道寺遺跡群付近には、西海道の養蚕駅から西へ延びた官道が想定されており、飽田郡の重要な地点に造られた施設であった可能性もある。なお、熊本城跡内でも二の丸・三の丸・監物台で古瓦や土師器・腰帶具が出土している。

中世においても遺物や遺構の集中は二本木遺跡群にあり、11～16世紀代にかけての資料が途切れなく認められる。10世紀代に当該域に国府が移転・設置され、これに連動して肥後国の中心として周辺域が発展したことによると思われる。遺構・遺物ともに膨大・多様であり、溝による半町単位の矩形土地区画がみられるなど都市的な様相を呈する。資料数・範囲は、10世紀後半～11世紀代においては限られるが、12世紀代には急増・拡大してピークをみる。その後も多くの資料が認められ、都市として繁栄したことが窺われるが、17世紀前半頃には急減・衰退する。これは加藤清正入国により、熊本城下（古町遺跡）に町屋・寺院が移転したことによるものと想定されている。古町遺跡にも中世の資料があるが、これは二本木遺跡群における都市の拡大・伸張に伴うものと想定される。

中世城としては、国衆といわれる在地土豪の居城とされる隈本城跡（千葉城跡・古城跡－いずれも熊本城跡遺跡群内）、鎌倉御家人詫磨氏の居城とされる本山城があげられる。古城跡の現第一高校セミナーハウスについては、発掘調査により散兵線とされる溝や版築土塁を検出している。本山城跡は、字名から城域が想定されているが、現況の地形や試掘確認調査の成果からは城の存在は不明瞭である。中世の石造物資料は、熊本城内（熊本城跡遺跡群）や古町遺跡内の寺院に分布している。熊本城内のものとしては、地蔵門脇の大永2（1522）年銘「釈迦立像線刻板碑」、本丸御殿南に大永4（1524）年銘「如意輪觀音像線刻板碑」、天文5（1536）年銘「阿弥陀三尊種子板碑」など、銘があるだけで12基確認されている。五輪塔地輪も礎石や石垣の一部に転用されており、茶臼山に中世寺院（茶臼山廃寺）が想定されている。古町遺跡の寺院内には、善教寺境内の建長2（1250）年銘宝塔塔身が最古例としてあり、15世紀末から16世紀前半の板碑が多くみられる。

（2）熊本城と城下町の変遷

熊本城や城下町について、発掘調査等で考古学的所見が得られた点について、時代を追ながら記述する。文献資料からの所見は次節で詳述する。

熊本城が文献に登場するのは、南北朝時代である。肥前国松浦の大島堅と大島政の永和三年（1377）の軍忠状にみえる「隈本城」が初出で、位置の特定はされていない。

熊本城跡群内の端緒は、応仁年間に出田秀信が茶臼山の東側に迫り出した千葉城と呼ばれる一帯に城を築いたとされることに始まる。地名としての千葉城は熊本城跡群の東端台地にあるが、地形等の変更が大きく詳細は不明である。先述のN H K 熊本放送局建設の際の発掘調査でも城跡としての確証は得られていない。その後、「肥後國誌」によれば、明応5（1496）年に鹿子木親員（寂心）が築き、城親冬が天文19（1550）年に入城したという隈本城の城域は、第一高校から国立熊本病院敷地内（以下、国立病院）一帯と想定されている。発掘調査としては、第一高校セミナーハウス建築に伴う調査で15世紀半ばから16世紀後半の陶器が出土し、国立病院の看護学校建設に伴う調査で16世紀前葉からの掘立柱建物群が出土している。この掘立柱建物群は堀・柵・櫓で構成された防御施設で、鹿子木氏・城氏の在城時期と合致することから、当時の城域を考える上で重要な調査成果となった。

隈本城には、天正15（1582）年に佐々成政が、翌天正16年には加藤清正が入城し、清正是中世の城を織豊城郭に改修を進めている。現在でも古城という地名が残り、第一高校周辺には城内最古の石垣が良好な状態で残存している。その後、加藤清正是隈本城を拡大して、京町台地南端の茶臼山一帯に熊本城を築城

した。出土資料として、「慶長四年八月吉日」銘の滴水瓦があり、少なくとも慶長4（1599）年には天守等の主要建築等が行われていたと考えられる。本城整備に伴って、白川・坪井川の改修、城下町の再編成も行われた。先述のように、大きく蛇行していた白川の流路を直線的に付け替え、それまでの白川流路と隈本城懇構を利用して坪井川を開削したと考えられている。これにより、熊本城南側の防御線は、坪井川が内堀、白川が外堀に相当することで強化され、同時に城下の洪水解消、武家屋敷の面積拡大、船運路の整備につながった。

旧白川の流路にあたると想定される桜馬場での発掘調査でも、17世紀初頭に埋めたてられた流路が確認されている。同じ旧流路の下流にあたると想定される第一高校の校長官舎建築に伴う発掘調査でも、厚さ5メートルにわたる版築層が検出され、その下位に河道を示す砂地が確認されている。いずれも旧白川の埋め立てを証明する調査成果である。国立病院の看護学校建設に伴う調査では、加藤期と想定される道路が出土しており、築城に際した資材運搬用の修羅道の可能性が指摘されている。

城下町は、加藤清正が古府中（二木本遺跡群）から、古町（古町遺跡）へと町屋や寺院の移転を行い、新町部分を侍町（武家地）とした城下町をつくった。

加藤治世期の末、寛永6～8（1629～1631）年頃の作と推定される「熊本屋舗割下絵図」（第10図）は、拡大・再編された城下町の様子を知る最古の資料である。この絵図にみえる城下町の範囲は、東から南は白川、北は出京町、西は段山から新町の高麗門・古町西側の坪井川・井芹川・石塘までである。北側の町は、京町台地の東側・西側が急崖で囲まれており、北端に空堀と土塁を設けていた。

現在の新町は、隈本城時代の侍町として始まり、その後懇構として整備された。懇構は、西側には新町西側の水堀と、堀の東側に土塁を設け、南側は新たに掘削した坪井川で区切った。懇構と城内を区切るのは、「新一丁目御門」で、現在の法華坂の清爽園付近にあった。枠形を伴う櫓門であったが、枠形を含めて現存しない。門の前は広場となり、高札が掲げられ札ノ辻と呼ばれ、各方面に伸びる街道の基点となつたとされる。懇構の西側は城の裏鬼門にあたるため寺町を整備し、懇構との連絡に「こうらい（高麗）門」が設けられた。鉄道高架化事業に伴う「高麗門」・「御成道」の調査がある。この調査で、高麗門跡からは「慶長四年八月吉日」銘の滴水瓦が出土している。高麗門は、いわゆる高麗門形式から絵図や古写真にみられる櫓門形式に変更したと指摘されている。御成道は、高麗門から細川家菩提寺である妙解寺への参道である。先の鉄道高架化事業に伴う発掘調査で、御成道の路面であった硬化面が確認されている。

妙解寺は寛永19（1642）年に細川光尚によって建立された寺院である。細川忠利以来の歴代藩主の墓や、殉死者の墓が良好な状態で保存されており、「熊本藩主細川家墓所」として国指定史跡になっている。この妙解寺の四塔頭の一つである智照院には細川尚房一族が葬られていたが、九州新幹線開道工事に伴い発掘調査が行われ移築された。大名一族の墓所をまとめて調査した稀有な事例である。上部構造にみられる当主との縁性や、墓室構造の階層性、人骨にみられる形質など、得られた情報の影響は大きい。寺町として整備された現在の横手界隈は、加藤清正が母親の供養のために建立した妙水寺や、加藤清正御室の本覚院が葬られた本覚寺六角堂など日蓮宗の寺院が、地割を維持して今も建ち並ぶ。本覚院墓所は、改葬に伴う発掘調査で棺の装飾と思われる大量の金銅製の金具や副葬品が出土している。寛永期の加藤家の墓制を知る上で希少な調査事例で、出土品は市指定有形文化財になっている。

懇構の南側の古町には、古府中から移転した町屋が整備された。古町遺跡の発掘調査資料は、このことを反映しており、16世紀末～17世紀初頭から増加する。懇構内の新町が短冊形の町割で、「T」「L」字状の道が多いのに対して、古町は方一町の碁盤目状の区画の中央に寺院を配置するという特異な町割が形成された。町割形成当初の武家地と町屋の違いと考えられ、その間は坪井川で明確に区切られている。懇構と町屋の連絡には、懇構側に新三丁目門と坪井川に現明八橋が設けられた。新三丁目門は、絵図では枠形を伴う櫓門であることが分かっていたが、近年発見された長崎大学図書館所蔵の古写真で、城内の櫓門

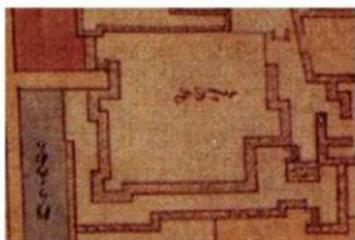
に匹敵する規模の櫓門であったことが分かった。古町の一角の阿弥陀寺周辺には土塁の残存がみられ、想構のように戦略上の配慮や水害対策が施されていた可能性もある。

明治維新の後、明治4（1871）年に、城内に鎮西鎮台が設置され、その後熊本城は第2次世界大戦終了まで陸軍の管理下に置かれた。明治初期には、各地の城郭と同じように熊本城でも櫓・堀・石垣の解体や改修が行われ、明治10（1877）年には西南戦争の主戦場の一つとなり天守をはじめとする本丸中心部の大半の櫓が焼失した。本丸御殿の発掘調査では、焼失した御殿の建築材、金具などが焼損した状態で焼土とともに多量に出土している。西南戦争では城下町も戦場となり、「射界の清掃」戦略で意図的に火が放たれ、大半が焼失した。その痕跡は新馬借遺跡での確認調査や、古町遺跡での発掘調査で確認されている。古町遺跡の発掘調査では、江戸期の表土を広範に覆う焼土層が確認され、この焼土を含む遺構出土の陶磁器が明治初期に限定できることから、西南戦争時の焼土層と判断された。

西南戦争の後、軍施設はさらに整備され、明治21（1888）年には第六師団となる。軍の組織が整備されるに伴い、城内各所に新たな施設が建てられ、現在の天守前広場には大正6（1917）年に師団司令部が置かれた。桜馬場地区は、西南戦争以前から砲兵隊が置かれ、その後兵器工廠となった場所で、平成20・21（2009・2010）年に行われた同地区の確認調査で、大正年間に造られた工廠のレンガ造り建物の基礎が確認されている。西南戦争で焼失した城下町にも、戦後、山崎練兵所など軍関係の施設が整備されていく。

明治22年に就任した第3代熊本市長辛島格は、熊本市を九州地方の中枢管理都市にすべく尽力し、周辺町村との合併や三大事業と呼ばれる上水道・市電の整備、二十三連隊の移転を推進した。旧城下町にあたる山崎練兵所などの軍施設の移転は、当時の時代性もあり難航を極めたが、飽田郡大江村（現在の熊本県中央区大江）に移転することで同意がなされた。移転は明治33（1900）年に行われ、市街地を分断していた練兵所跡地は新市街となり、現在につながる市街地形成が行われた。山崎練兵所が移転した先の大江遺跡群では、移転後、軍による大規模な造成が行われ、土地が平坦化されるとともに多くの遺跡が失われた。発掘調査では、三角兵舎の柱穴跡や塗壕跡がしばしば確認され、第2次世界大戦頃の軍用品が出土することも少なくない。

熊本城は、大正末期から城跡の保存・顕彰が叫ばれるようになり、熊本城跡保存会が発足した。この会が中心となって、昭和2（1927）年、宇土櫓を解体・修理、長堀を改築している。昭和8（1933）年には、熊本城全域が史跡となり、残存していた建造物が国宝に指定されている。昭和25（1950）年、文化財保護法により、国宝建造物が重要文化財に指定され、昭和30（1955）年には城内の主要部分が特別史跡に指定されている。昭和35（1960）年には、大天守が小天守とともに鉄筋コンクリートで外観復元された。昭和50（1975）年には、西出丸戊亥櫓門跡から西大手櫓門跡の石垣を復元。昭和57（1982）年には、「保存管理計画書」がまとめられ、保存と整備の方針が決まる。昭和56（1981）年には西大手櫓門の再建が行われ、平成元（1989）年には、宇土櫓の修復と数奇屋丸二階御広間の復元を行った。平成3（1991）年、台風19号の襲来により、長堀中央部分が倒壊。平成5（1993）年には、熊本城三の丸一帯を熊本市が買収し、東子爵町にあった旧細川刑部邸を移築復元している。平成11（1999）年、台風18号により、西大手櫓門が倒壊する。平成14（2002）年に南大手櫓門の復元をはじめ、平成15（2003）年には戊亥櫓、未申櫓、元太鼓櫓、西大手櫓門と西出丸一帯の復元が完了した。平成17（2005）年には、飯田丸五階櫓の復元が完成する。平成19（2007）年には、熊本城築城400年を記念して本丸御殿大広間を復元し、平成20（2008）年から公開している。



(飯田丸部分拡大)

第10図 寛永 6~8 年「熊本屋舗割之下絵図」(熊本県立図書館蔵)



第11図 寛永11年「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」(熊本県立図書館蔵)



第12図 「平山城肥後国熊本城廻絵図」(熊本県立図書館蔵)

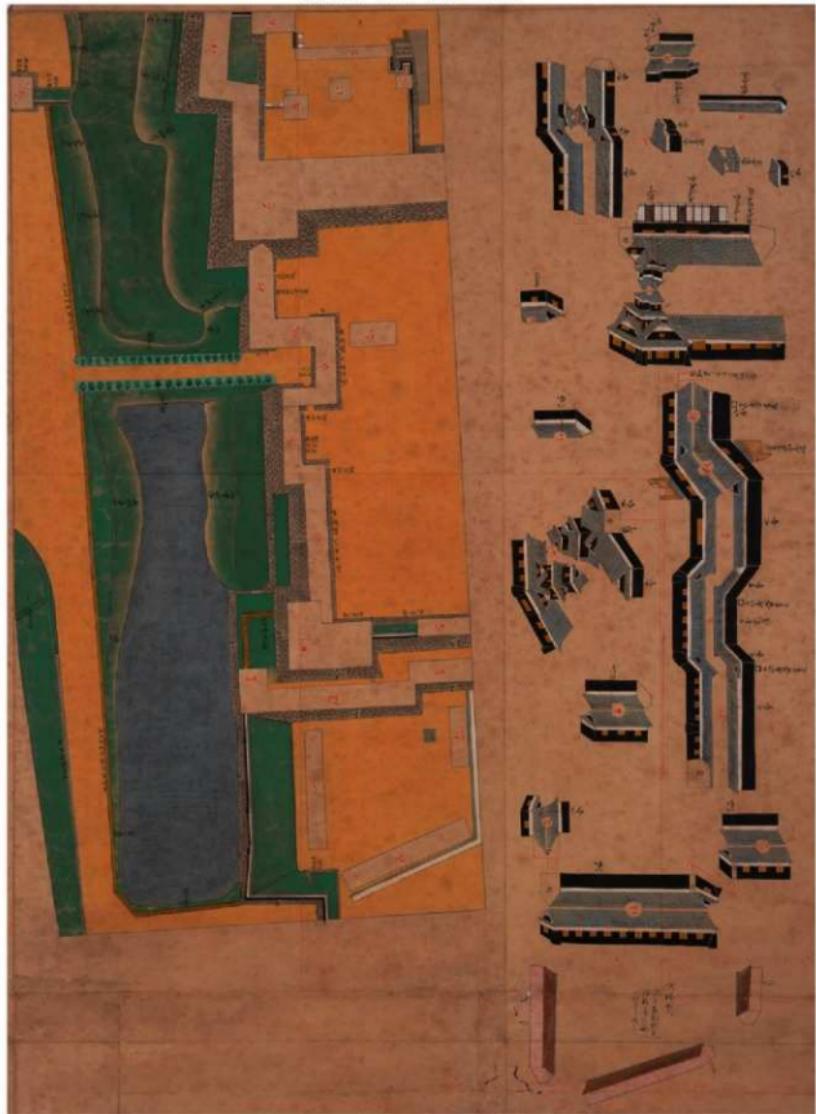


第13図 「肥後國熊本城廻之絵図」(熊本県立図書館蔵)



第14図 「熊本城図」（公益財団法人永青文庫蔵）

(飯田丸五階櫓・百間櫓付近)



第15図-1 「御城図」(公益財団法人永青文庫蔵)

(飯田屋敷御台所付近)



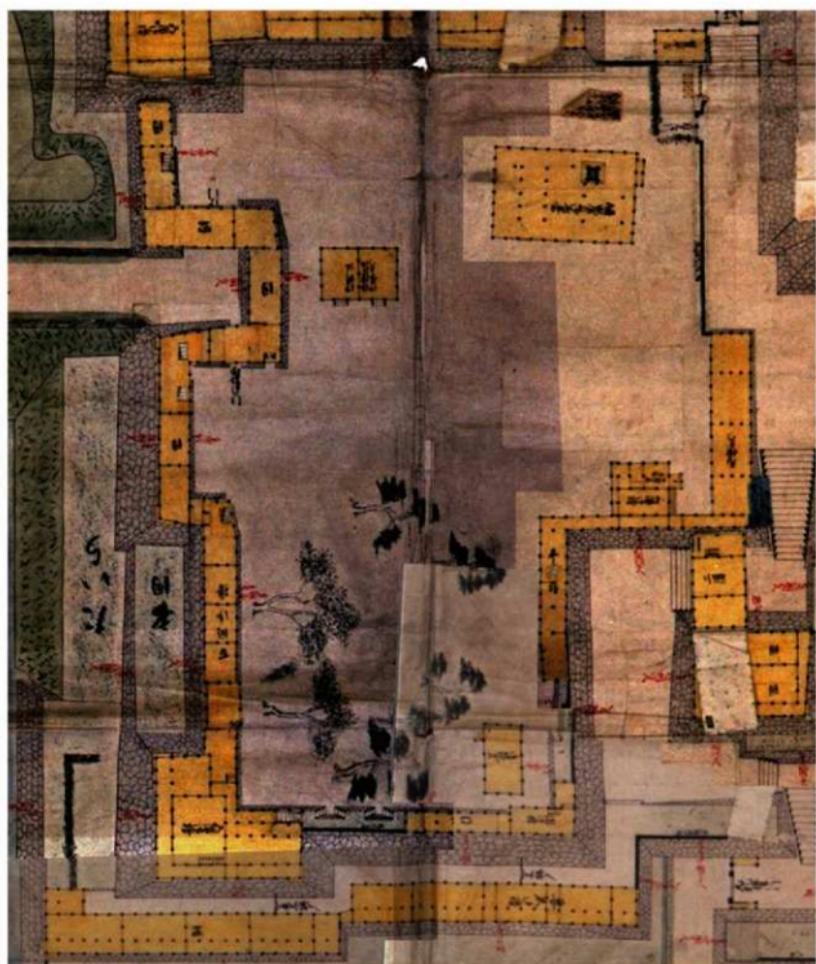
(西竹之丸五階櫓付近)



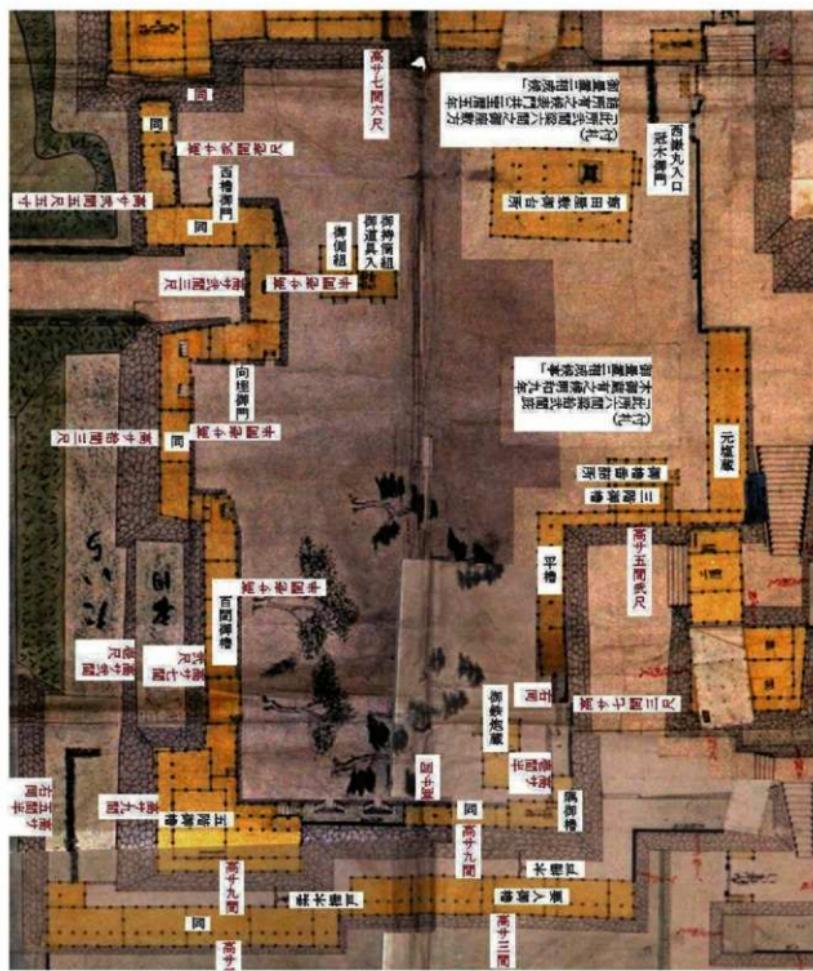
第15図－2



第16図－1 「御城内御絵図」



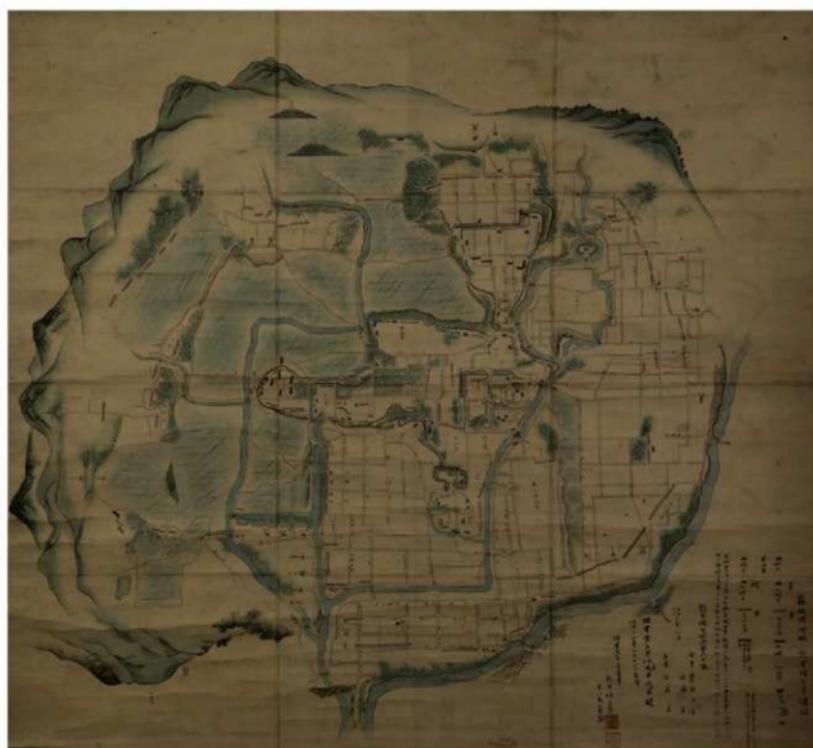
第16図－2 「御城内御絵図」の飯田丸部分拡大



第16図－3 「御城内御絵図」の飯田丸部分の积文



第17図 文政7年「熊本城図」(公益財団法人永青文庫蔵)



(部分拡大)

第18図 明治11年（明治25年写）「両軍配備図」（熊本市立熊本博物館蔵）

3. 文献資料にみる隈本城

(1) 南北朝～戦国時代の隈本城

隈本城の存在を確認できる最も古い史料は、南北朝時代後期となる永和3（1377）年9月の「大島堅軍忠状」・「大島政軍忠状」¹⁾とされる。この時期、肥後は南朝の懷良親王や菊池武光を中心とする征西府の支配を受けていた。貞治6（1367）年、足利義満が室町幕府三代將軍に就任すると、応安3（1370）年に幕府管領である細川頼之の推挙を受けて、今川貞世（了俊）を九州探題に任命した。応安4（1371）年、貞世は九州へと向かい、翌5（1372）年8月には大宰府の征西府攻略を果たす。この後、今川軍は肥後の侵攻を開始する。大島堅政の軍忠状は、この2名が肥後侵攻と「隈本城」攻撃にあたって忠節を尽くしたことと記し、貞世の息子である今川義範が証判を加えたものである。また、同年9月30日付の「宗金書状写」²⁾でも、今川氏が「肥後隈本城」に侵攻してきたが、数百人の負傷者を出しながらも防いだと記されている。これらの史料から、隈本城が南朝側の城であったことが判明する。しかし、この隈本城の具体的な場所については明らかでない。

従来、南北朝期の隈本城の場所については、①藤崎台説と②詫磨氏居城である本山城説がある³⁾。①については、永和4（1378）年の「安芸大朝莊一分地頭虎熊丸代市原經顯忠状」⁴⁾に「隈元敵城」に対抗する城として「藤崎城」が存在していたことが記されている。このことから、藤崎台に存在した城は藤崎城と呼ばれており、隈本城と同一のものとは考えられない。②については、本山城＝隈本城であれば今川軍の攻撃対象になっていることから、北朝方の詫磨氏の居城とするのは成り立たない。つまり、「隈本城」は藤崎城ならびに本山城とは別に存在した城である。しかし、南北朝期の隈本城の位置については、史料の制約から特定することは難しい。近年では、上記の2説に加え、花岡山（祇園山）を隈本城とする説も提起されている⁵⁾。

隈本城の位置を、近世に成立した編纂史料によって見ていく。まず、17世紀後半の肥後の儒学者である辛島道珠が記した「肥後古城主考」には、「菊池四代藤原經宗の甥ニ出田経信アリ、十四代ノ孫、出田秀信始メ隈本ノ城に居住スト菊池家譜ニ見エタリ」とある。次に、熊本藩士である森本一瑞の手によって明和9（1769）年に成立した『肥後國誌』には「出田筑前守秀信所領八十町ヲ領シ初メ隈本在城云千葉城ナリ」とある。隈本城が千葉城に存在したとする根拠は示されていないが、18世紀後半には出田氏の居城が千葉城に存在したとする認識が定着していたとみえる。なお、出田氏は「新撰事蹟通考」⁶⁾の系図によれば菊池氏三代経頼を祖とし、のちに菊池郡出田を領したことから出田姓を名乗るようになったとされる。

次に、出田氏と茶臼山の関係を一次史料で見ていく。文明年間（1469～1489）とみられる「菊池重朝書状」⁷⁾では、出田山城守が藤崎宮の遷宮祝儀を宮内荘給人に催促することを守護である菊池氏が認めている。また、文明4（1472）年の「藤崎宮官番次第」⁸⁾の裏書には「惣政所出田山城守御代番帳御うつし」と記されており、文明頃に出田山城守は藤崎宮の惣政所職、つまり行政実務担当者である所司・政所・本司といった人々を統括する立場にあったことが判明する。以上の2点の史料は、出田山城守が実質的に藤崎宮領の宮内荘をはじめとする茶臼山周辺の土地を治めていたことを示す。隈本城は出田氏の拠点として機能していたと考えられる。

この時期の隈本城の様子を示すのが文亀2（1502）年4月23日付の「菊池武運（能運）書状」⁹⁾である。この頃、菊池能運は守護の座を追われ島原半島に亡命していたが、相良氏の協力を得ながら地位回復を狙って挙兵した。史料中には、能運と小山右京亮や立田伊賀守などの地域の武士団およそ730名が隈本城に在城し守りを固めていたが、11日に中条対馬守が裏切り隈本城を出奔し、続いて小山・立田氏も居所に帰ってしまったことが記されている。出田刑部少輔父子3名と親類20余名、そして能運の側近の者たちは城に残ったが、「城内拵所々役所」などの持ち場を守りきれなくなり、出田氏と共に島原に退却することになった。その後、能運は守護職回復に成功したとみえるが、永正元（1504）年3月に死去したことによ

り、再び守護職の後継をめぐって阿蘇氏や大友氏らが介入し、混乱が起きた。

その後、守護として隈本城に入城したのは、大友義長の息子である菊池義武とされる。大友氏の初代は鎌倉幕府に仕えた貴族である中原氏であり、同じ中原氏の系譜をひく鹿子木氏も政治的立場を高めるために大友氏の肥後支配に協力したと考えられる。鹿子木氏は鎌倉時代より飽田郡・詫磨両郡を治める国人領主となっていたようである。永正16（1519）年の「鹿子木親貢書状」¹⁰⁾では藤崎宮の社役について百姓役を定めていることからも、社領だけでなく郡内の支配を行っていたと考えられる。

永正17年に肥後に入国し、郡本を拠点に肥後の支配を行った義武は、天文2（1533）年に大内氏と結び筑後国に出兵した。これにより、翌年大友氏は肥後に出兵し、義武は島原まで退去することになった。この間、寂心は大友方に属していたため、天文18（1549）年に死去するまで隈本城に留まつたと考えられる。その後、義武は相良氏の協力を仰ぎながら肥後奪還に臨むが、天文12（1543）年に義武の兄である大友義鑑が室町幕府より肥後守護職を与えられる。しかし、天文19（1550）年に義鑑が家臣に殺害される事件が起きると、義武は鹿子木氏・田嶋氏を味方につけ、再び隈本城に入った。これに対し、義鑑のあとを継いだ義鎮は隈本城を攻め、義武は再び島原へ亡命した。これにより鹿子木・田嶋氏は没落し、隈本城には城親冬が入ることとなった。

城氏は菊池氏の一族で、赤星・隈本氏と並ぶ老者（家老）の地位にあった。親冬が隈本に入ったのはおそらく天文19年の義武と義鎮の合戦の論功行賞によるものであろう。鹿子木氏に替わって飽田・詫磨の二郡を領することとなったと考えられる。親冬のあとを親賢が繼ぐが、その年代は明らかでない。

天正6（1578）年、大友氏が日向耳川の戦いで島津氏に敗れると、大友氏の領国の国人たちは独自の動向を見せるようになった。城氏もその一人で、大友氏から自立する動きを示す。これに対し、大友方の御船城主甲斐宗運が出兵し、天正8（1580）年に旦過瀬の地で城・名和氏らと合戦した。城親賢は島津氏に救援を要請し、島津の軍勢が隈本城に入城している。

その後、天正9（1581）年12月に親賢が死去すると、嫡子である十郎太郎（久基）が跡を継いだが、若年のため出田基親を後見人とした。基親は親賢の弟であり、出田氏の養子となっている。このほかにも、城親冬の弟である政冬や、親賢の次男武房が出田家の養子となっているように、出田氏と城氏は深い関係にあった。

その後、島津氏は肥後侵攻を進め、天正13（1585）年には島津義弘が肥後國の守護代となる。さらに、大友方の甲斐宗運が死去すると阿蘇氏も降伏させ、島津氏は本格的な肥後支配と豊後侵攻を開始した。天正15（1587）年4月、島津攻めのため豊臣秀吉が隈本城に入城する。秀吉の右筆が記した「九州御勤座記」¹¹⁾には、隈本城について「城十郎太郎と云者相踏候、数年相搭たる名城也」と賞賛している。さらにつけて、「五千計の大将、さしも島津一方之かためを為頼待といへとも、就御勤座無一文、居城に降参申、證人を出、御味方參候」とあり、城氏は島津氏にも信頼の置かれていた武将であったが、秀吉に対して抵抗することなく降参し味方になったと記されている。同年6月、肥後國は佐々成政に与えられ、成政は隈本城に入城した。成政の入国にあたって秀吉は、①肥後の52人の国人の知行を以前の通り認めること、②3年間検地をしないこと、③百姓が疲弊しないようにすること、④一揆がおこらないようにすること、⑤上方の御手伝普請を3年間免除することなどを記した定書を出した。しかし、成政による国人たちの知行の削減と検地の断行により、7月には国衆の一揆が発生する。

（2）加藤清正の入国と古城・新城

肥後国衆の一揆を招いた佐々成政は、天正16（1588）年閏5月14日に切腹させられる。成政に代わって肥後北半国を加藤清正、南半国を小西行長が治めることになった。清正是戦国期の領主たちが居城とした古

城の隈本城に入ったと考えられ、その後隈本城の普請・作事を行っていることが史料より判明する。居城の普請に関する具体的な指示を出している史料で最も古いものは、天正18（1590）年2月26日付の「加藤清正書状」¹²⁾である。これによれば、清正是重臣たちに対し磊（石垣）・堀の普請を指示している。その後、天正から文禄年間にかけて居城の普請に関する具体的な指示がなされている。この時普請しているのは、現在の第一高校にあたる古城と推測されている。同年4月には、本丸に「おうへ」を建てるための材木の準備や、「てんしゆへはし」が架設されている。なお、天正20（1591）年9月21日の「加藤清正覚書案」には「其元さふらいまち、さうかまへのへいかせ、よろつ丈夫ニ可申付候」とあるように、武家屋敷や惣構の堀を含めた城下一帯の整備も進められている¹³⁾。

一方、茶臼山での熊本城の築城時期は、通説では「続撰清正記」の記述から慶長6（1601）年の着工とされているが、近年の研究ではその説に疑問が呈されている¹⁴⁾。「続撰清正記」の著者は、牛方・馬方騒動で美濃国岩村松平家乗に預け身となった和田備中一政の息子の和田利重である。本書は父の話と書き残された文書を元にし、さらに不分明な点を信州高島藩源詮頼水に預け身となった中川周防に尋ね、寛文4（1664）年に著述された。のことからも比較的信憑性の高い記事が多いが、熊本城築城については「予若年の時、肥後國退出いたし、其後見ざるにより、失念いたしたる所あまた有故、委不記候」と述べており、「続撰清正記」の記述を熊本城完成の根拠とするにはいま少し慎重さが求められる。

茶臼山に形成された熊本城に関して、残されている一次史料で最も古いものは、慶長5（1600）年10月26日付の加藤喜左衛門・下川又左衛門宛の清正書状とされる¹⁵⁾。これによると、「如水其元被通候者、新城ニ而振舞候て可然候間、得其意、天守之作事差急、疊以下可取合候」とあり、島津討伐のために熊本を通過する黒田如水を「新城」で歓待するために天守の作事を急がせている。この時点で天守は疊を敷く段階まで作事が進んでいた。

のことから、熊本城の着工の時期は清正が朝鮮出兵から帰国した慶長3（1598）年末から翌4年頃と想定される。なお、熊本城内から「慶長四年八月吉日」銘の瓦が出土している。また、小山の瓦職人であった福田家の先祖附には、初代五右衛門が慶長3年の熊本城造営の際に瓦師棟梁職に任じられたと記されている¹⁶⁾。この時期には建物に葺く瓦を準備する段階にまで城の普請・作事が進んでいたとみることができる。

熊本城の完成時期については、乃美家蔵とされる文書に「隈本之文字之事、今度御城出来候ニ付御改候而、熊本と御書被成候」とあることから、慶長12（1607）年とされてきた¹⁷⁾。なお、慶長12年4月24日付の並河金右衛門宛の清正書状¹⁸⁾では「其地普請如何申付候哉、漸出来之時分ニ候」と述べられており、完成間近の状態であった。同年7月22日に比定される書状では本丸の広間の絵や花畠屋敷の作事についての指示も見られる¹⁹⁾。本丸御殿と花畠屋敷については慶長15（1610）年4月の清正書状²⁰⁾でも作事を指示しており、この頃には天守や櫓などが完成し、居住空間である御殿の作事が行われていたと想定される。

（3）重臣飯田覚兵衛と熊本城

現在、飯田丸と呼ばれている曲輪は、一般的に加藤家の重臣であった飯田覚兵衛が預かっていた曲輪と言われている²¹⁾。覚兵衛の概略を述べておくと、まず飯田家は鎌倉初期に信濃国飯田郷に居住したことから飯田姓を名乗ったとされる。室町期には大和国添上郡北小路城主となり、覚兵衛の父直澄が大和の三好長慶・左京親子に仕えた。三好家が織田信長に滅ぼされた後は浪人となったと考えられ、その後加藤清正に家臣として召抱えられたようである。

飯田覚兵衛は永禄8（1565）年に生まれた。この頃、父直澄は三好家に仕えている頃であるから、出生地は大和国であろう。加藤清正が幼少期、山城国山崎に居住し隣家に森本力士（のち儀太夫）と飯田才八（のち覚兵衛）が住んだことから君臣の約を交わしたと今日伝説的に語られているが、この時期父の直澄は三好家に仕えていることから、このエピソードは後世の創作によるものと思われる。

現在残されている一次史料で、清正と覚兵衛の関係を示す最も古いものに、天正17（1589）年12月8日付の知行宛行状がある。これは、天草五人衆を攻めた際の論功行賞として清正より覚兵衛に発給されたものである。これによって、覚兵衛の知行は加増され、合計して1000石となっている。その後、覚兵衛の知行高は数度加増を受け、慶長16（1611）年の清正の死後間もなく作成されたとされる「加藤家臣知行高書上案」には知行高3189石と記されている²²⁾。その後、忠広代にも加増を受けており、元和8（1622）年には4506石1斗2升となっている²³⁾。

覚兵衛は優れた武将であるとともに、築城の技術に長けた人物として多くのエピソードが語られている。江戸中期の儒学者である荻生徂徠は著書「鈴録」のなかで次のように述べている。

愚按するに、石垣は加藤清正の一流あり、彼家の士に、飯田覚兵衛、三宅角左衛門を、両かくと稱して、石垣の名人と云しものなり、石垣を築くには、幕を張て、一間に外人に見せずと云

また、熊本城新堀御門脇の覚兵衛屋敷前の百間石垣は覚兵衛の手によるものとされている。このように、覚兵衛や三宅角左衛門といった清正重臣が熊本城普請に大きな功績を残したと伝えられているが、それを示す一次史料は意外にも少ない。三宅角左衛門については、吉村左近宛の清正書状²⁴⁾で、石垣普請の手伝いのために角左衛門を派遣しているだけでなく、若い家臣に石垣普請の技術を学ばせるように述べており、角左衛門の石垣構築技術が清正によって認められていたことを窺わせる。

一方、覚兵衛が飯田丸または百間石垣の造成に関わったとする一次史料は現在のところ確認できていないが、覚兵衛が熊本城普請に携わっていたことを示す史料は数点確認することができる。そのなかで最も古いものは先述した天正18年2月29日付の清正書状で、飯田覚兵衛ほか5名と組頭中に宛てられたものである。

また、慶長4（1599）年と推定される2月11日付の覚兵衛宛清正書状には、「其許普請番等入情」と記されている。さらに、慶長10（1605）年8月8日付とされる書状では、覚兵衛から送られた「其許普請之絵図」を上洛中の清正が披見したと記されている²⁵⁾。慶長10年には幕府より江戸城の御手伝普請が命じられており、「其許普請」が熊本城普請を示すという確証はないが、覚兵衛が加藤家の普請担当責任者として位置づけられていたと考えられる。

最後に、忠広代の家臣團における覚兵衛の位置について述べる。清正の死去後、熊本の様子を長州藩密偵が調査し、慶長16（1611）年7月10日に作成した「肥後国熊本様子聞書」²⁶⁾には、「家中としより」として加藤美作・鍋田進右衛門・飯田覚兵衛・森本儀太夫・三宅角左衛門・加藤平左衛門の名が挙げられている。また、幼少の忠広政権は幕府の監視のもと、並河金右衛門・下川又左衛門・加藤與左衛門・加藤清左衛門・加藤美作の5名による合議体制がとられた。5名の重臣による起請文が幕府に提出されており、その際に覚兵衛も使者として同行したとみられている。忠広新政権となった加藤家中において、覚兵衛が重要な位置にあったことを示すものといえる。

（4）細川家入国後の熊本城

寛永9（1632）年、加藤忠広が改易となり、肥後国には細川忠利が入国する。忠利は12月9日に熊本城に入城しているが、この時の感想を「事外ひろき国にて候、城も江戸之外にはこれほとひろき見不申候」と、息子の光尚に伝えている²⁷⁾。

「肥後御入国宿割帳」²⁸⁾には、入国後から屋敷割がされるまでの間、家臣たちは城下の寺や商人の家に宿泊したことが記されている。忠利が家臣らの屋敷割の際に使用したと考えられる「熊本屋舗割之下絵図」（熊本県立図書館蔵、第10図）が現在伝わっている。この絵図は書かれている家臣の名前から、寛永6～8年の加藤忠広代の絵図と推定されている。異筆で細川家臣の名前が書き込まれていることから、加藤氏から引き継いだ絵図を細川家が屋敷割のために使用したものと考えられる。「熊本屋舗割之下絵図」の記載範囲は、北は出京町、南は白川と坪井川の合流地点、東は白川、西は井岸川となっている。加藤家末期

の熊本城ならびに城下は、細川家時代の熊本城・城下のはば原型を示している。

細川家は入国後、加藤氏から引き継いだ熊本城の補修や改変をしていることが、絵図や古文書より判明する。まず、寛永10（1633）年8月5日付の「肥後國隈本城廻り普請仕度所目録」²⁹⁾によれば、水道・堀・土手の11箇所988間、石垣25箇所1503坪、塀4箇所130間、新槽27つ（うち4つは櫓門）、新門13箇所を普請場所として挙げている。さらに、翌11（1634）年3月17日、忠利は江戸幕府の土井利勝・酒井忠勝宛に「肥後代」（加藤代）よりの堀・櫓の修復や、前年に破損した石垣の修築を願い出ている。本史料中に普請箇所の詳細は「間数如絵図」とあるように、文書とは別に絵図を付して提出したことが分かる。この提出された絵図と考えられるものが「肥後國熊本城普請仕度所絵図」（熊本県立図書館蔵、第11図）である。

絵図には「公儀へ上ル絵図にハ古矢藏無之」とあることから、本絵図は幕府へ提出された絵図の控である。新しく普請を行う箇所を朱で示している。本丸部分の補修は比較的少なく、二ノ丸や三ノ丸の堀や石垣、門の増築が多く計画されている。絵図の端には石垣・櫓台等27箇所、土手切立5箇所、塀4箇所、櫓28箇所、門12箇所、堀の拡張4箇所、水通し1箇所の普請と堀の浚渫の許可を願う旨が記されている。これに対し、4月14日には江戸幕府老中の連署による熊本城普請許可の奉書が出された。この絵図と前年8月に作成された「肥後國隈本城廻り普請仕度所目録」と比較すると、新たに堀の浚渫と花畠屋敷北の石垣1箇所、坪井川沿いの石垣2箇所が普請場所として追加されているほか、櫓が1箇所増加し、逆に門は1箇所減少しているのが分かる。

普請の進捗としては、寛永13（1636）年には江戸幕府老中酒井忠勝に対して「先年差上候絵図」に記載された普請箇所のうち、半分も着手していないと述べている。その後、寛永11年に申請された普請に関する史料として、「御自分御普請」に収録されている寛永21（1644）年2月12日付の「熊本御城御普請所之目録」がある。本史料には普請が完了していない場所を白付紙で示している。また、「此目録絵図之書付ニ引合、間数・所数相違無御座候」とあり、おそらく11年に作成した絵図で間数と普請場所とを照らし合わせて確認したと考えられる。

この文書によって寛永21年の段階で普請・作事の終了した場所を確認すると、土手は5箇所のうち3箇所、石垣は27箇所のうち12箇所、塀は4箇所のうち3箇所、水通しと堀はすべての箇所の普請が終了している。また、新しく建てる計画であった櫓は28箇所のうち8箇所、門は12箇所のうち3箇所が完成している。以上の普請申請箇所は、最終的に完了しなかったものが複数あることが、幕末までに作成された熊本城関係の絵図から見てとれる。

また、寛永11年に申請した普請箇所以外にも、同17（1640）年には白川から川尻までの井手の拡張や、本丸東の孕んだ石垣の修復を申請し、二代藩主の光尚の時期には洪水による城廻りの破損について、その修復許可を求め、許可されている。これ以降、幕末にいたるまで普請願絵図なども複数残されており、細川期の熊本城の変遷を追うことができる。

（5）文献・絵図資料にみる飯田丸の変遷（第10～17図）

現在伝えられている絵図と古文書によって飯田丸の変遷を見ていく。まず、清正代の熊本城を描いたと考えられる絵図の一つに、慶長16～17（1611～1612）年頃に長州藩の密偵によって描かれた「肥後國隈本城略図」（山口県文書館蔵）がある。現在の西出丸部分に中川寿林屋敷と米蔵が描かれ、奉行丸には下川又左衛門の屋敷が描かれている。飯田丸に該当する部分を見ると、堀に沿って多層の櫓と長櫓、その奥に大きな櫓が描かれている。これらの位置から、前者は現在の飯田丸五階御櫓と百間御櫓、後者は西竹之丸五階御櫓と推定される。密偵が本丸の内部まで入って調査したとは考えにくいことからこの絵図を全面的に信頼することは難しいが、慶長16～17年の時点では城内の主要な建築物は完成していたようである³⁰⁾。なお、「肥後國年歴」³¹⁾には安永8（1779）年に乾櫓の修復が行われた際に発見された棟札について、慶長

7 (1602) 年10月に出丸において18棟目に「大黒矢倉」(乾櫓)が完成したと記されている。

次に、加藤家末期の熊本城・城下の様子を示す「熊本屋舗割之下絵図」(第10図)では、現在の西出丸に「佐々平馬屋敷」と「御藏」、奉行丸に「加藤平左衛門中屋敷」とある。また、現在の平左衛門丸には「加藤平左衛門屋敷」があった。このことが平左衛門丸の名称の由来となっていると考えられる。寛永14 (1637) 年に細川家によって平左衛門屋敷が解体された際の記録には、屋敷は「御広間」・「御書院」・「御居間」・「けしやうノ間」・「御うへ」・「御台所」からなっていた³²⁾。

飯田丸に着目すると、曲輪の名称は「たけの丸」と記されている。また、西櫓御門、札櫓御門、冠木御門が描かれているが、櫓などは描かれていない。この絵図によって、飯田丸は加藤時代より「たけの丸」と称されていたことが判明する。

一方、細川氏入国直後に作成された寛永11 (1634) 年の「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」(第11図)では、飯田丸を「二丸」と記している。入国直後のため、曲輪の名称が確立していない時期と見ることができる。第12～14図は正保元 (1644) 年頃に幕府の命によって作成された一連の国絵図と城絵図の記載方法と共に通性のみられる絵図である。これらの絵図では飯田丸は「本丸之内」と記されている。これ以降、飯田丸は「本丸」に位置づけられる。

細川時代の飯田丸は「西竹之丸」と呼ばれた。寛文6 (1666) 年に作成された「御城分間」³³⁾という文書には、本丸内の主要な櫓の高さや石垣の高さが記されている。そのうち、西竹ノ丸についてみると、「西竹之御丸五階御矢蔵」・「西竹之御丸大塚甚右衛門預ノ五階御矢蔵」と記されている。前者が平成17 (2005) 年に復元された飯田丸五階御櫓、後者が西竹ノ丸五階御櫓であると考えられる。「西竹之御丸五階御矢蔵ノ高サ」は18間であり、うち9間半が「五階御櫓土台より瓦棟迄」、8間半が「石垣ノ高サ」となっている。「西竹之御丸大塚甚右衛門預ノ五階御矢蔵」の高さは16間2尺、「五階御矢蔵土台より瓦棟迄」が9間、「石垣ノ高サ」が7間2尺と記されている。

西竹ノ丸に存在したその他の建造物の名称を「御城内御絵図」(第16図)によって見ていく。「御城内御絵図」は、熊本城の本丸、平左衛門丸、数寄屋丸、西竹ノ丸、東竹ノ丸、竹ノ丸、西出丸、奉行丸に存在した建物の平面や石垣の高さ等を描いている。現在は原本と、昭和9 (1934) 年3月に魚住景雄によつて墨写されたものが伝わっている。また、原本の写として藩政時代に作成されたとみられる絵図が、奈良文化財研究所所蔵のガラス乾板として残されている³⁴⁾。

「御城内御絵図」は従来、明和6 (1769) 年の作成とされてきた。これは、昭和9年の写に「明和六年製 作者不明」と記されたことにより、正確な年代比定がなされてこなかったことによるものと考えられる。しかし、原本の付札等を確認すると、①西竹ノ丸に存在し、明和9 (1772) 年に解体された蔵が描かれていないこと、②東竹ノ丸と本丸に安永2 (1773) 年に建てられた「仮番所」2棟が描かれていることから、少なくとも安永2年以降の様相を示していることが判明する。

この絵図がどのような目的で作成されたかについて、付札の内容から考察すると以下のようことが言える。まず、絵図の下部の付札には「此黄色合印付札御置ニ相候候分、間数・年号御大工棟梁手前ニ扣置候分、元文三年以来相知候分迄書記申候」とあり、解体された建物等を黄色の付札で示してあることが分かる。宝暦13 (1763) 年に熊本藩の作事所の焼失によって記録等が失われたために、大工棟梁の手元に残された控をもとに、元文3 (1738) 年以降に解体した建物の間数や年号などを記している。次に、青色の付札には「明和六年 何相済未仕直相成不申候分」とあり、明和6年に建物の改修について伺いを立てたが、未だ着手できていないものを示していることが分かる。以上の2点より、「御城内御絵図」は元文3年以降の熊本城内の建築物の解体等を記録し、明和6年に予定された改修箇所の未着手分を示したものと想定できる。

曲輪内の建築物としては、西南隅に五階御櫓（飯田丸五階櫓）があり、五階御櫓から数寄屋丸にむかっ

て百間御櫓が繋がっている。百間御櫓の途中には西櫓御門が描かれている。五階御櫓から東にもかかって隅御櫓、平櫓、三階御櫓と櫓番詰所、元塩蔵があった。さらに、西櫓御門の東側に御道具入（御側組と御持筒組）、隅御櫓の北側に御鉄炮蔵があった。また、「西嶽丸入口冠木御門」から入ってすぐの場所に「飯田屋敷御台所」が存在した。なお、「西嶽丸入口冠木御門」とあるように、この曲輪自体の名称は「西嶽丸」であったことが分かる。

また、「御城内御絵図」の付札によれば、曲輪内で解体された建物は2棟存在したようである。一つは「飯田屋敷御台所」の北側に存在した「二間梁六間之御座敷方詰所」で、宝暦5（1755）年に解体されている。一つは元塩蔵の西側に「六間梁拾武間」の蔵があり、明和9（1772）年に解体されている³⁵⁾。

この2棟の建物は、第15図の「御城図」（永青文庫蔵）にも確認できる。本絵図は城内の櫓や御殿を立体的に把握するために作成されたものである。白峰匱氏は「木形」を絵図の上に置いて城普請の状況を立体的に把握したことを述べているが³⁶⁾、熊本藩でも寛永11（1634）年の「肥後国熊本城廻普請仕度所絵図」（第11図）に併せて出された文書に、「木がたの絵図」を幕府に提出したことが記されている³⁷⁾。また、寛文6（1666）年にも熊本城の「木形」が完成しており、さらに延宝4（1676）年には「御城形」と呼ばれるものが作成され、江戸へ送られている³⁸⁾。おそらく、「木がたの絵図」・「木形」・「城形」とは城の建築物や構造を立体的に把握する目的で作成されるものであり、「御城図」も同様の性格を持つ絵図であると考えられる。

「御城図」が作成された年代は、従来の研究では江戸中期とも江戸後期ともされている³⁹⁾。しかしながら、宝暦5年に飯田丸で解体されたはずの建物が「御城図」に描かれていること等を勘案すれば、「御城内御絵図」よりも作成年代は古いと考えられ、「御城図」の作成年代は18世紀初頭から半ばにかけての時期と想定される。

また、文政7（1824）年に矢野良敬によって描かれた「熊本城図」（永青文庫蔵・第17図）には「御城内御絵図」の作成時点で存在した建物がすべて描かれており、曲輪のなかに建物の解体や増改築等の大きな変化は見られない。

（6）西竹之丸と竹ノ丸殿（淨光院）

飯田丸が「たけの丸」や「西竹丸」と称された由来であるが、これを示す明確な史料は確認できていない。清正の側室に「竹之丸殿」（淨光院）があり、彼女がこの曲輪に居住したことが名称の由来ではないかと考えられる。忠広代の家臣団構成を示す「肥後加藤侯分限帳」には「竹ノ丸台所」や「竹丸女房共」という文言が散見される。清正には5人の女性と夫婦関係を結んでいたことが水野勝之・福田正秀両氏の研究で明らかにされている⁴⁰⁾。分限帳には「本丸居候女房共」、「竹丸女房共」、「江戸居候肥後守母」、「江戸居候肥後守姉」など、彼女たちの居所を示すものが含まれる。このうち、「江戸居候肥後守母」は忠広の生母の正応院であり、「江戸居候肥後守姉」とあるのは、清正と竹丸殿（淨光院）との間に生まれ、阿部正澄に嫁いだまま姫（古屋姫）と考えられる。

また、「本丸居候女房共」が仕えているのはおそらく清正の正室であった清淨院と考えられる。さらに分限帳には「川尻に居候主計母召仕候女房共」とあり、清正の次男である主計頭忠正の母本覚院は川尻に住んだことが明らかとなる。また、清正の肥後入国以前からの妻である山崎氏は文禄2（1593）年の清正書状には病を患っていることが記されているが、その後の彼女の消息を伝える文書は発見できていない。山崎氏の弟である百助が清正の養子となっているが、慶長9（1604）年以降に養子縁組を解消されていることから、この頃に山崎氏も加藤家を離れたと考えられる。

以上、元和8（1622）年の分限帳より清淨院、正応院、本覚院の居所を比定してきたが、残る「竹丸女房共」が仕える人物とは、竹ノ丸殿と呼ばれた淨光院の可能性が高い。なお、加藤家改易後に肥後を拝領

した細川家は、「肥後国熊本城中家迄ニ而少も明地無御座候、左様ニ御座候へハ、去年も切々地しんゆり申候、左様之時可能出明地無御座候ニ付、城中之家少々くづし候へ」と指示している^⑪。これに連して、寛永14（1637）年に平左衛門丸に存在した平左衛門屋敷の広間・書院・居間・台所・化粧の間・御うえの6軒の建物と、西竹ノ丸台所を解体したことは前述したが、解体されたこれらの部材については運賃が記されていることから、何處かへと運ばれ再利用されたと考えられる。加藤家分限帳にある「竹ノ丸台所」が、解体された西竹ノ丸台所と同一のものと考えると、西竹ノ丸（飯田丸）一帯に淨光院の居住空間が形成されていたと想定される。

（7）廃藩置県後の熊本城

明治4（1871）年、廃藩置県により熊本県庁は旧藩主の邸宅であった花畠邸に置かれた。同年8月20日、鎮西鎮台の設置が決定すると、本営を熊本県庁に置いた。これにより、県庁は二ノ丸の有吉邸へと移ることとなった。鎮西鎮台に花畠邸が引き渡されたのは明治5（1872）年4月3日のことである。明治6（1873）年、鎮西鎮台は熊本鎮台へと改称し、鎮台は熊本城に置かれた。この年3月に二ノ丸の操練場の兵営の建設が始まる。その後、明治7（1874）年6月に熊本城は陸軍用地に編入され、熊本城本丸に鎮台本営が移転する。さらに明治8（1875）年4月15日、歩兵第十三連隊が編制され、二ノ丸に屯営した。同年4月には砲兵第六大隊が発足し、現在の熊本市民会館付近に仮営していたが、翌年には新兵舎が備前屋敷跡（現在の合同庁舎付近）に落成し、移転した。また、同年に編制された予備砲兵第三大隊も砲兵第六大隊の兵舎へ同居した。さらに、同年4月17日には工兵第六小隊が発足、花畠邸内に兵舎が置かれていたが失火のため全焼し、棒安坂下仮兵舎へ移転している。

以上のように、廃藩置県から鎮台の設置によって熊本城内は様々な改変がなされた。明治15（1882）年に刊行された『熊本鎮台戦闘日記』^⑫（以下、「戦闘日記」と略記）には、明治10（1877）年2月14日から10月6日までの西南戦争の戦闘の景況等がまとめられている。これによれば、2月14日より城郭内外の籠城の準備に取り掛かっていることが記されている。竹ノ丸では炊事場を設置し、糧米500石と薪・炭などを貯蔵した。また、職人を雇い「地雷火」を製造させている。15日には竹ノ丸と櫓方の両所に火薬庫を設け、敵弾による爆発を避けるため数箇所に分けて貯蔵した。16日に棒安坂上から空堀へ降りる道を開通させ、17日には新堀門から法華坂にいたる道の一般人の通行を禁じ、翌18日、地雷や櫻を設置し、砲塹を築造した。また、元薩摩藩士であり、西南戦争では歩兵第十三連隊第一大隊第三中隊長として熊本城に籠城した隈岡長道の戦闘日誌によれば、第三中隊の守備地では地雷を古城坂・鞍掛坂・法華坂の三ヶ所に埋設している（『西南戦争隈岡大尉陣中日誌』^⑬、以下「陣中日誌」と略記）。

そして19日、熊本城の天守をはじめ、大多数の建物が炎上する。この火災の原因については官軍の自燃説、薩軍の放火説、失火説、市中の火事の類焼説など様々あるが、未だ明らかでない。火災により、籠城のための糧食を焼失し、これ以降城下での糧食の蒐集に奔走している。なお、兵器・弾薬類は幸いにも焼失を免れた。

市中の火災については、官軍が火を放ったものと考えられる。これは「射界の清掃」と呼ばれるもので、城下の民家などが薩軍の隠れ家や陣地となることを防ぐために、鎮台によって戦略的に行われたものである^⑭。「射界の清掃」について、「東京日日新聞」は「熊本鎮台にてハ初めより籠城の軍略にてあれバ、城の近辺に人家ありては障りになるゆえ、拠ころ無く十八日に、明十九日正午十二時に市街人民の居宅を焼き払ふから立ち退くやうとの」達を出し、それによって城下は避難する人々で大混乱になったことを告げている。19日以降も鎮台によって障害物とみなされた民家等が度々焼き払われた。なお、家屋だけではなく、下馬橋をはじめとする主要な橋も薩軍の侵入を防ぐために官軍によって撤去された。

2月21日、薩軍が城下に侵入し熊本城での薩軍との戦闘が開始する。午後1時20分に熊本電信分局より

伊藤博文参議院に「唯今戦争始め候、大砲しきりに放つ」との電報が打たれている。龍城の際、鎮台は守備隊を①千葉城付近守備隊、②下馬橋付近守備隊、③古城付近の守備隊、④藤崎台付近の守備隊、⑤京町方面の守備隊の五大地区に分割し、予備隊を西出丸北地区に分置、本営を宇土橋に置いた。

鎮台兵の主要武器としてはスナイドル銃が使用された。熊本鎮台は他鎮台に先駆けて明治9（1876）年秋にスナイドル銃が支給されている⁴⁵⁾。『戦闘日記』によると、第十四連隊から入城した山脇鉄太郎大尉と丸井政亞大尉の中二隊は旧式のエンフィールド銃を所持していたようだが、25日にスナイドル銃に交換されている。なお、スナイドル銃の弾薬の欠乏を防ぐため、夜間の探偵射撃にはエンフィールド銃を使用することとした。そのため、エンフィールド銃や弾薬は各堡壘に供給されていた。

熊本城に設置されていた電信分局は2月21日午後3時40分に断線した。4月8日に鎮台より川尻方面に発出した突撃隊が征討軍と連絡を通じるのによく成功したこと、川尻方面の官軍が15日に熊本城に入城し、2ヶ月に及ぶ龍城戦は終了した。

（8）西南戦争前後の飯田丸

藩政時代、現在飯田丸と呼ばれている曲輪は「西竹之丸」という名称で呼ばれることが多かったことは前述した通りである。では、「飯田丸」の名称はいつごろ現れてくるのであろうか。『戦闘日記』や『陣中日誌』には「飯田丸」の呼称が確認でき、この頃には名称が定着していたと判明する。

次に、西南戦争期の飯田丸がどのように使われていたのかについて述べていく。まず、富重利平によつて明治8（1875）年から9（1876）年頃に撮影されたと考えられる2点の古写真から、明治9年頃に百間御櫓の北側の部分が撤去されていることが確認できる。飯田丸五階御櫓の石垣は火災による高熱を受けた形跡がみられないため、西南戦争以前に残る百間御櫓とともに五階御櫓も撤去されたとされている。

飯田丸での戦闘開始は『戦闘日記』によれば2月22日である。薩軍が城の西南にある安巳橋・長六橋から侵攻した際に、下馬橋の砲台から攻撃を開始し、さらに飯田丸・千葉城の砲兵や竹ノ丸の歩兵も加わって防衛が行われた。「飯田丸砲台ヨリ榴弾及び榴霰弾ヲ連発シ、下馬橋ノ守兵ト共ニ防戦ス」とあり、飯田丸に砲台が置かれていたこと、その戦闘に榴弾・榴霰弾が用いられていたことが判明する。

また、2月23日の記述では、薩軍が花岡山と四方池村に砲台を設置したことに対し、「飯田丸ノ砲台ヨリ山野砲及ヒ二十挺白砲ヲ連発シ」、掃討を試みている。薩軍の応戦にあうが、野砲榴弾によって四方池村の砲台の砲車を破壊した。このことから、飯田丸には野砲・白砲に加えて山砲も配備されていたことが判明する。西南戦争の翌年に熊本鎮台によって作成された「両軍配備図」（熊本博物館蔵・第18図）には、砲台2つと白砲台1つが描かれているのが確認できる。

さらに、27日の記述には「飯田丸ノ守兵山砲一門ヲ櫓ノ焼跡ニ備へ坪井横町ノ賊軍ヲ砲撃ス」とあり、飯田丸に配備されていた山砲一門が移されている。移動先の「櫓ノ焼跡」の場所を特定することは難しいが、山砲が坪井横町方面の薩軍への砲撃に利用されていることから城の北東方面の守備地であり、さらに19日の火災によって櫓の大部分が焼失した本丸の可能性が考えられる。

また、戦闘が激しくなり武器の損傷や弾薬の消耗が進んだため、22日に飯田丸に武器の支給場を設置したとある。そこでは若干名の銃工たちが置かれ、少しの損傷であれば飯田丸で修理しており、毀損が激しいものは工廠で修理させている。

弾薬の貯蔵場所については、2月15日に竹ノ丸と櫓方の両所に火薬庫を置いたと述べたが、23日に薩軍の砲撃の危険を避けるため、飯田丸から平左衛門丸へ向かう屈曲した地点、ならびに地蔵櫓御門跡に坑倉を掘り、各種の弾薬を移転させている。また、砲銃の弾薬は空堀の射的場に置き、薩軍の砲弾を避けている。薩軍の主要な砲台は、花岡山・四方池村・長六橋・安巳橋に置かれていた。飯田丸にも度々薩軍の砲弾が飛来しており、兵器庫に落下し武器が損傷を受けるなどしている。なお、飯田丸にも弾薬の格納所があり、

飛来する砲弾の被害を防ぐため、厚さ1寸の板数十枚で屋根が補強された。

西南戦争後も、熊本城は陸軍によって管理され、改変を受けた。明治18（1885）年5月には第十一旅団の本部が千葉城に置かれた。同21（1888）年5月には、熊本鎮台は第六師団となり、歩兵第十一旅団は本部を千葉城から飯田丸へと移す。また、歩兵十三連隊が二ノ丸に、歩兵第二三連隊が花畠旧藩邸と監物台に分屯した。騎兵第六大隊は山崎町に、砲兵第六連隊は城内備前屋敷に、輜重第六大隊は古京町に置かれた。工兵第六大隊は千葉城に置かれたが、明治22（1889）年6月に大江渡鹿村の新兵營に移転している。明治27（1894）年には花畠旧藩邸の新築兵舎が完成し、歩兵第二三連隊はすべて花畠に移った。その後、師団のほとんどの兵舎は大正14（1925）年頃までに城内から移転し、終戦後まで同じ位置にあったのは輜重第六大隊のみであった。

明治22年7月28日、熊本地方でマグニチュード6.3と推定される強い地震が発生した。震源地は金峰山東麓付近であったことから、金峰山地震と呼ばれる。この地震によって熊本城内も大きな被害を受けた。白川新聞の発行者である水島貫之は、「熊本明治震災日記」に被災状況を記している。師団営内の石垣の崩壊箇所は頗当門より数寄屋丸・間門入口及び間門内の左右の石垣、元飯田丸跡、軍法会議所北、同会議所内（元櫓方）及び衛戍兵営彈薬庫内、百間石垣、東竹の丸石垣など、29箇所に及んだ。なお、間門や西出丸の火薬庫、飯田丸の石垣等は、日本地震学会が調査のために撮影した古写真（第19図）が残されている。崩落した石垣は、軍によって復旧された。



第19図 「旧熊本城飯田丸 第六師団弾薬庫上石垣崩壊之景」(写真) 画像提供：国立科学博物館

第2表 熊本城年表

凡例：主な出典資料は次のように略記した。

〔新熊〕 = 〔新熊本市史 史料編 近世I〕、〔県史中〕 = 〔熊本県史料 中世篇 第五卷〕、〔県史近〕 = 〔熊本県史料 近世篇〕

年	西暦	備 考	事 項	備 考
天正16年	1588		5月 豊臣秀吉が佐々成政に切腹を命じる 6月 肥後を二分し、加藤清正（隈本城）と小西行長（宇土城）に分け与える 10月 肥前名護屋城、加藤清正・小西行長・黒田長政らの連張により築造着手	
天正18年	1590	広島大学所蔵猪熊文書（「新熊」） 中沢広勝氏所蔵文書（「新熊」）	2月26日 石垣・堀の普請について家臣團に指示 4月24日 清正、聚楽より御糞糞・材木の調達・城普請に付き下川又左衛門に指示	
天正19年	1591	下川文書（「県史中」） 同上 渋沢栄一氏蔵文書（「新熊」）	5月11日 織工町の町人の入れ替えを行う 8月6日 城内に米蔵設置を指示 8月13日 隈本城作事のこと、肥前名護屋城作事のための材木準備について指示 ・文禄の役	
天正20年 (文禄元年)	1592	西村清氏蔵文書（「新熊」） 同上	9月21日 侍町の櫓構の解の建築について指示 11月12日 本丸の「おうへ」の作事について指示	
文禄2年	1593	遠見真吾氏所蔵文書（「新熊」）	7月 西生浦城普請	
文禄3年	1594	高林兵衛氏蔵文書（「新熊」）	3月12日 櫓の建て方、櫓の建て直しなどについて指示	
文禄4年	1595	高林兵衛氏蔵文書（「新熊」）	11月28日 清正、櫓構の解の修復、年貢徵収、造船、鉄砲者・侍の散集、瓦の発注などを留守家老に指示	
慶長元年	1596	『加藤清正伝』 『肥後国誌』	5月 清正帰國。11月、朝鮮再征の先陣として隈本を発す ・この頃清正、古府中の画家・寺院を隈本城下に移すという	
慶長2年	1597		10月 嶋山城普請	
加藤清正			10月16日 高麗より帰国後は年貢のほか人夫諸役も2・3年免除との制札を出す 12月 朝鮮より帰国	下川文書（「県史中」）
慶長3年	1598		・城普請始まる	御大工棟梁善蔵間覚控
慶長4年	1599		・慶長四年八月吉日銘の滴水瓦製作（瓦師福田家の先祖附には初代福田五右衛門が慶長3年に瓦師棟梁を拝命とある）	出土瓦、『熊本県史』
慶長5年	1600		・闇ヶ原の戦い。清正是黒田如水とともに九州で軍事行動を展開	
慶長6年	1601	中澤広勝氏所蔵文書（「新熊」）	10月26日 黒田如水を「新城」で歓待するため、天守の作事を急がせる	
慶長7年	1602	続撰清正記	8月 鶴川康家の許可を得て、隈本新城（茶臼山）造築の歴はじめ（諸説あり）	
慶長11年	1606	肥後国年歴（肥後近世史年表）	・西出丸の大黒櫓（乾櫓）完成	
			・江戸城普請	
慶長12年	1607	下川文書（「新熊」）	2月 駿府城普請	
		新撰事蹟通考（肥後後文献叢書）	7月22日 本丸広間の絵、花畠作事について指示	
慶長15年	1610	『加藤清正伝』	・新城完成、隈本城を熊本城と改める、町の名も熊本と改称する	
			4月 熊本城大広間及び花畠の作事。間もなく終了か	
慶長16年	1611		・名古屋城普請	
			6月24日 清正没する	
		肥後国熊本様子聞書	7月10日 萩藩の密偵、肥後国を探査（この頃、「肥後熊本城略図」作成か）	
慶長17年	1612	下川文書（「新熊」）	6月 忠広、道賀相続を安堵される	
慶長19年	1614		10月 大坂冬の陣	
慶長20年 (元和元年)	1615		・一国一城令。支城の破却	
元和2年	1616		4月 大坂夏の陣	
元和4年	1618		5月 中尾山に本妙寺が移される	
寛永2年	1625		・牛方・馬方騒動	
		『加藤清正伝』	6月 熊本地方に大地震、城内被害甚だしく煙硝蔵爆発。天守その他石垣にも被害あり	
寛永9年	1632	『徳川実記』	6月 忠広改易につき、幕府上使東城の受け取りなど	
細川忠 利			7月22日 上使衆、熊本・八代両城を受け取り	
			10月4日 細川忠利、肥後拝領	
			12月9日 忠利、熊本城に入城	部分御印記 国都と人民部
寛永10年	1633	綱考輯錄卷三十四	2月19日 熊本城本丸修理のため忠利は花畠屋敷に移る	

寛永11年	1634	3月17日 熊本城の石垣・堀・櫓・門などの改修を幕府に願い出る 4月14日 幕府より熊本城の堀・櫓の修理、二ノ丸、三ノ丸の修理許可される 8月2日 熊本城の各所、松園での申請通りに普請を行うことを許可される 8月15日 忠利、本丸作事成就につき花畠より移る ・岡藩密偵、熊本城・城下の様子を探査	肥後国熊本城遷普請仕度所絵図 (県立図書館蔵) 御自分御普請 (永青文庫蔵) 御自分御普請 総考輯録卷三十五 圖國様子聞合帳 (中川家文書)
寛永12年	1635	・武家諸法度の改正 7月25日 九州地方大風、肥後に損害多く、城堀・櫓・民家被損多し 11月 本丸天守の修理、花畠屋敷の作事おおかた成就	総考輯録卷三十六 部分御旧記 御書附井御書部廿三 (『県史近』2:259)
寛永13年	1636	細川忠利 ・江戸城普請 7月15日 本丸に落雷	『大日本近世史料細川家史料』
寛永14年	1637	閏3月 熊本城普請を中止する 7月 鮎田郡下立田村に泰勝寺建立 10月 天草・島原一揆起こる ・平左衛門丸の屋敷、西竹ノ丸の台所など計7軒を解体	部分御旧記 普請作事部 (『県史近』3:776) 『肥後国誌』 平左衛門元星敷家材本覚帳 (永青文庫蔵) ほか
寛永16年	1639	10月 花畠作事小屋番所より火事 12月 花畠屋敷の前の橋、百間馬屋の上角の櫓大方出来る。古城両所の櫓の普請に取りかかる	部分御旧記 災変部 部分御旧記 御書附井御書部廿一 (『県史近』2:181)
寛永17年	1640	6月1日 白山より川尻までの井手の拡張と三ノ丸の内坪井川、町人その他のため鉗の許可を幕府に申請し、14日、許可される ・熊本城丸東方石垣争みのため、築直を幕府に申請	御自分御普請 『大日本近世史料 細川家史料』
寛永18年	1641	3月17日 忠利死去 5月5日 光尚、道領相続する	
寛永20年	1643	2月 妙解寺建立	『肥後国誌』
寛永21年 (正保元年)	1644	細川光尚 6月25日 熊本町、農村ともに大雨洪水。熊本城石垣・土手・堀・櫓破損する 7月10日 熊本洪水のため、破損箇所の修復を幕府に申請 8月23日 幕府、熊本城石垣・土手・堀・櫓の破損修理、三ノ丸虎口櫓脇の川岸崩についての新堤上塁、水抜き1箇所の修理を許可する ・幕府、国絵図と城絵図の作成を命じる	渡辺玄察日記 (『肥後文献叢書』)、 『沢施和尚書簡集』 御自分御普請 神雜 (永青文庫蔵)
正保2年	1645	5月13日 太鼓櫓の門普請につき、門を開け普請者を通す 7月27日 九州・中国・大風で熊本城はか各地の城郭が多く破損する	奉日 (『熊本藩年表稿』) 『徳川実紀』
慶安2年	1649	8月14日 本丸艮方石垣崩れにつき、修復が許可される 12月26日 光尚、死去	総考輯録卷六十四
慶安3年	1650	4月 紗利、道領相続	
承応2年	1653	8月 肥後大風にて大木倒れ、幅広き石を吹き割る。故に岩削風といふ	渡辺玄察日記
万治元年	1658	3月27日 熊本坪井町より失火にて400余軒焼失	渡辺玄察日記
寛文元年	1661	3月 坪井の火事	渡辺玄察日記
寛文2年	1662	3月 熊本城丸御殿の修繕につき、大工の食事を本丸内にて行いたいこと、それに応じ竹ノ丸の出入許可を願出	奉日 (『熊本藩年表稿』)
寛文3年	1663	7月 肥後大地震、翌日まで中小地震3回	渡辺玄察日記
寛文5年	1665	9月 夜、大地震あり	渡辺玄察日記
寛文7年	1667	2月 熊本坪井町より失火あり、500余軒焼失す 4月 熊本城取より出火、焼死40余人。熊本地方大地震	渡辺玄察日記
延宝4年	1676	3月14日 千葉城の塙硝礬が焼失 ・火の用心のため花畠御長屋並びに堀を瓦葺に改める ・大雨洪水により城内石垣、堀、土居、水抜きなど破損のため修復願 12月11日 熊本城坤方石垣普請について幕府の許可	本藩年表 (永青文庫蔵) 本藩年表 御自分御普請、御家譜続編 (永青文庫蔵) 神雜1364
元禄3年	1690	・本丸より申西 (新一丁目御門付近) の堀の深瀧を申請	絵図 (永青文庫蔵)
元禄4年	1691	2月 坪井、大火事 8月 2月の大風の結果、道幅を広める事、町屋と待候敷を変更する事に付、是月幕府の指令ありて着手し11月工事終る。＊坪井広町という ・本丸より子の方角の川岸、大雨のため崩落につき、修復申請	渡辺玄察日記 本藩年表、御家譜続編 絵図 (永青文庫蔵)

元禄 8 年	1695	4月 大地震あり	渡辺玄昌日記
元禄10年	1697	・堀の浚渫と修茶の申請	絵図（永青文庫蔵）
元禄15年	1702	8月 9日 小天守下（石門付近）の石垣孕み、その他4箇所の修復申請	絵図（永青文庫蔵）
元禄16年	1703	8月 小天守下石垣孕み、石垣普請につき櫓2箇所取除	御奉行所覚帳（永青文庫蔵）
宝永元年 (元禄17年)	1704	3月 この頃、天守北側の石垣を大補修	石門内に「元禄17年甲申3月吉日」と刻字あり
宝永3年	1706	4月 この月、大地震所々岩石抜け大地破裂、家屋倒れ圧死する者果多し	『肥後近世史年表』
宝永4年	1707	10月 肥後大地震	南藤曼鶴録 『肥後近世史年表』
宝永6年	1709	10月 7日 熊本城石垣破損のため、6箇所修補願い	絵図（永青文庫蔵）
正徳2年	1712	7月 6日 繩利隠居願い、11日許可	
正徳5年	1715	・宣記、熊本藩主となる	
享保元年	1716	4月 熊本城石垣破損、5箇所修補方出願の処許可あり	本藩年表
細川宣紀	1719	9月30日 千葉城長岡内懐家より出火し、竹ノ丸下の竹小屋焼失、下通から宝町筋、白川瀬まで焼失	『熊本藩町政史料一』、本藩年表、御家譜続編
享保4年	1720	9月 熊本城丸、子の方石垣1箇所、丑寅の方石垣1箇所孕み、外曲輪末申の方外川岸上留・石垣1箇所崩壊につき修補を先月願出たところ、許可あり	御家譜続編
享保7年	1722	5月 新町1丁目御門外櫻2箇所、坪井方面3箇所浚渫について申請し、幕府の許可あり	『熊本藩町政史料一』、御家譜続編
享保13年	1728	9月 熊本城新櫻御門の晋請あり	本藩年表
享保14年	1729	4月28日 戯の内より出火し、京町1丁目・2丁目・今京町まで頃焼	『熊本藩町政史料一』
享保17年	1732	6月26日 宣紀、江戸に没する	
享保20年	1735	8月25日 宗孝、道領相続	
元文3年	1738	5月 熊本城小天守に落雷	本藩年表
細川宗孝	1740	5月 大風雨により埋門脇板櫓倒壊、以後再建なし	公私便覧後編
寛保3年	1743	8月 東竹ノ丸堀底、大破につき壊す	本藩年表
延享元年	1744	閏7月9日 熊本城外曲輪高麗門脇左右の堀、木下伊織屋敷脇の堀の浚渫について、幕府より許可あり	本藩年表、御家譜続編
延享4年	1747	5月 熊本諸所修築について願出の通り完了	御家譜続編
寛延2年	1749	6月2日 竹ノ丸松木に落雷	肥後国年歴（『肥後近世史年表』）
宝暦4年	1754	11月 熊本城石垣崩れ孕み3箇所修復、堀浚渫について幕府認許	御家譜続編
宝暦6年	1756	4月12日 熊本城石垣崩れ孕み3箇所修復、堀浚渫について幕府認許	本藩年表、御家譜続編
宝暦8年	1758	8月15日 繩川宗孝江口城内において切られ、翌日死去	御家譜続編
宝暦13年 (明和元年)	1764	10月 重賛跡を離ぐ	
明和2年	1765	4月 城内北側門脇の明地に植方役所を建てる	旧章略記（『熊本法學』第21号）、本藩年表はか
明和4年	1767	5月 熊本御作事所雷火	
細川重質	1768	12月15日 城内二ノ丸に藩校「時習館」を開設する	御家譜続編
明和5年	1769	12月 医学校再開館創設、翌年開講	旧章略記
明和7年	1770	3月 西大手門修繕につき往来差し止め	『藩法集7』
安永6年	1777	4月 坪井立田口構際番所修繕	『藩法集7』
安永8年	1779	1月 作事所焼失	年々覚頭書、御城内御絵図
天明元年	1781	6月 熊本城大天守に落雷	本藩年表（水）
天明2年	1782	9月 竹ノ丸入りの川手の櫓に地引合見図帳を格納	年々覚頭書
天明4年	1784	4月 小天守下平黒御門解体	公私便覧後編
天明5年	1785	閏6月25日 坪井から出火、47軒焼失、内坪井、京町、新堀、岩立はか・熊本城北西隅の森木焼失	本藩年表（水）ほか
		7月25日 肥後大風で南御門を櫓中程より吹き破られ、家屋倒壊29,000軒余	本藩年表（水）
		5月 熊本城乾櫓修復、櫓札発見	肥後国年歴（『肥後近世史年表』）
		5月27日 熊本城外曲輪水堀3箇所の浚渫を申請し、6月に幕府より許可される	絵図（永青文庫蔵）、御家譜続編
		・花畠屋敷大書院・中柱・歌仙の間などの屋根が銅瓦となる	本藩年表
		・本丸より丑寅・午・未の方の石垣三箇所孕みのため築直し申請	絵図（永青文庫蔵）
		・天明元年に申請したものを幕府に再提出	絵図（永青文庫蔵）
		8月 熊本大風、倒家669軒、田畠損耗甚大	本藩年表
		・水堀（一丁目御門付近）の浚渫を申請	絵図（永青文庫蔵）
		9月 御花畠広間銅瓦となる	『熊本藩町政史料一』
		10月 重賛死去	

天明 5 年	1785	細川 治年	12月12日 治年、通領相続 6月 城内竹ノ丸往来差紙付のはか禁止 9月 治年死去 ・立札（宇土支藩藩主）、道領相続し齊茲と改める	
天明 6 年	1786		1月 熊本城本丸より卯の方及び木の方石垣孕みの修補について幕府に申請 2月 熊本城元竹小屋跡に犬追物稽古場出来る 4月 1日 烈風の眉山崩れ、大津波発生	絵図（永青文庫蔵） 学校方改帳
天明 7 年	1787		2月 熊本城修理許可 11月 権方裏御石垣普請幕府に届け出 6月 熊本大洪水、古今未曾有の洪水、熊本府内京町山崎の外全域浸水、漁家292軒等	本藩年表 絵図（永青文庫蔵） 本藩年表
寛政 2 年	1790		7月 立田口子劍方面に堤防築（一夜塘とも豊年塘とも言う）	「肥後先哲尊蹟」
寛政 4 年	1792		12月 東竹ノ丸明地の大追物稽古場、元通りに戻すため稽古停止（稽古場は田邊町に移転）	学校方改帳
寛政 5 年	1793	細川 齊茲	・熊本城修理 11月 権方裏御石垣普請幕府に届け出 6月 熊本大洪水、古今未曾有の洪水、熊本府内京町山崎の外全域浸水、漁家292軒等	本藩年表 絵図（永青文庫蔵） 本藩年表
寛政 8 年	1796		7月 立田口子劍方面に堤防築（一夜塘とも豊年塘とも言う） 12月 東竹ノ丸明地の大追物稽古場、元通りに戻すため稽古停止（稽古場は田邊町に移転）	「肥後先哲尊蹟」 学校方改帳
寛政10年	1798		・熊本城修理、7間に21間建添あり 11月10日 齊茲邸居し、齐樹が家督相続	本藩年表
文化 7 年	1810		12月 熊本城本丸より子の方（権方）檐下の石垣孕に付、修補願を幕府に提出	絵図（永青文庫蔵）
文政 3 年	1820	細川 齊樹	1月 熊本城石垣手入願、許可される ・権方裏御石垣普請完成	本藩年表 内側石垣に「文政五年六月竣工」の刻字あり
文政 4 年	1821		6月 作事所材木藏雷火にあう	本藩年表
文政 5 年	1822		6月 古京町長内膳屋敷に二ノ丸御屋形完成。本山旧屋形は解体し、内膳宅は牧崎に引越	本藩年表ほか
文政 7 年	1824		2月 齊樹死去。齐渡（宇土支藩藩主）本家相続 ・御天守方椽板、雨戸板は杉材をやめ、楠とする	年々覚頌書（永青文庫蔵）
文政 9 年	1826		3月 御城西大手門作事につき、往来通行止め 10月23日 貿物所倒油方御蔵2戸焼失	壁書扣（「熊本藩年表編」） 「肥後近世史年表」
文政12年	1829		・十四間櫓再建	棟札
天保10年	1839	細川 齊渡	・雲台橋架橋着工。二ノ丸屋敷落雷	「肥後近世史年表」
天保11年	1840		12月 数十年来甚な強震のため、熊本城の諸所の石垣も崩れ、または孕み、会所の倒壊なども破壊される	「肥後近世史年表」
天保15年 (弘化元年)	1844		2月 竹ノ丸作事所火灾	本藩年表
弘化 3 年	1846	細川 齊渡	・七間櫓修理 ・安巳橋架設	柱墨書 「肥後先哲尊蹟」
弘化 4 年	1847		6月 強風雨、熊本城一の天守の軒吹き折られる	肥後国年歴（「肥後近世史年表」）
嘉永元年	1848		・源之進櫓改築	権札
安政 4 年	1857		・監物櫓修理	権札
安政 5 年	1858		・齐渡死去、詔邦遣領相続	権札
安政 6 年	1859		・東十八間櫓、北十八間櫓、五間櫓修理	権札
安政 7 年 (万延元年)	1860	細川 詔邦	・田子櫓修理 ・四間櫓修理、不開門大修理（再建）	懸魚 権札
文久元年	1861		6月17日 詔邦、版籍奉還により熊本県知事となる	「肥後藩国事史料卷十」
慶応元年	1865		7月 時習館、駒学校・洋学所・再春館を廃止。藩序を花畠邸に移す 9月 知事譲りが熊本城廻稟を申し出る	「肥後藩国事史料卷十」 「肥後藩国事史料卷十」
慶応 2 年	1866		10月 古城医学校開校 ・熊本城内を一般に公開する	
明治 2 年	1869		3月 時習館を解崩して兵式操練場とする 7月 城内に錦山神社創建	「肥後藩国事史料卷十」
明治 3 年	1870	細川 譲久	7月14日 废藩置縣 8月20日 鎮西鎮台の設置。本營を熊本に置く 9月 洋学校開校	法令全書
明治 4 年	1871		4月 3日 鎮西鎮台に花畠旧藩邸引渡し 6月 明治天皇肥後巡幸	「肥後藩国事史料卷十」
明治 5 年	1872		6月 熊本県庁、二ノ丸から二木本に移転。白川郡と改称 7月12日 新町3丁目に郵便役所開設（西南戦争で焼失） ・新宇（懲役場）を手取本町（現熊本市役所）に設置	「肥後藩国事史料卷十」

明治 6 年	1873	1月 9 日 鎮西鎮台から熊本鎮台に改称 6 月 二ノ丸の操練場の兵営建設始まる 6 月 30 日 鎮西鎮台病院（鎮西鎮台病院）を熊本鎮台病院に改称 9 月 月見橋・取付橋以下大破により撤去 12 月 熊本鎮台暴動発生	法令全書 熊本県公文類纂12-2 公文別録 大日記	
明治 7 年	1874	5 月 12 日 熊本師範学校開校 6 月 熊本城、陸軍用地に編入される。本丸に鎮台本営が移転 ・錦山神社を城内より京町に移転		
明治 8 年	1875	3 月 古城駁学校、駁校 4 月 15 日 歩兵第十三連隊、二ノ丸に屯營 4 月 駆兵第六連隊が発足。現在の熊本市民会館付近に仮営 4 月 一新小学校開校 11月 24 日 県庁が二木本より古城病院跡に移転		
明治 9 年	1876	2 月 白川町を熊本県に改称 4 月 17 日 工兵第六大隊が発足、花畠邸内に兵舎が置かれていたが失火のため全焼し、博安坂下假名倉へ移転 9 月 熊本地方裁判所設置	法令全書 熊本県公文類纂12-2 公文別録 大日記	
明治10年	1877	9 月 洋学校廻。洋学校跡に臨時裁判所、県警本部を設置 10月 24 日 神風連の乱 ・砲兵第六大隊の新兵舎が備前屋敷跡（現在の合同庁舎付近）に落成し、移転。 予備砲兵第三大隊も砲兵第六大隊の兵舎へ同居		
明治11年	1878	2 月 西南の役 2 月 19 日 天守、本丸御殿その他の焼失、広く城下も焼失 ・下馬橋撤去、槊替え		
明治17年	1884	・薩摩宮、井川潤澤に移転 ・裁判所、京町に移転 7 月 1 日 歩兵第十三連隊の一部を分離し、歩兵第二三連隊第一大隊を設置。山砲兵第六大隊を最戦第六連隊と改称し、元備前屋敷に設置 ・宇土櫓及び監物櫓改修（降陣）		
明治20年	1887	1 月 1 日 熊本駅廻。古城より南千手畠町に移転		
明治21年	1888	5 月 14 日 熊本鎮台、第六師団と改称		
明治22年	1889	6 月 1 日 熊本市役所開庁 6 月 13 日 工兵隊第六大隊が千葉城から大江村渡鹿の兵営に移転 7 月 28 日 大地震あり、頬当門より數寄屋丸の石垣、暗がり門通りを軽て師団司令部まで左右の石垣、竹ノ丸の中程（飯田丸五階櫓台）、下馬橋の石垣、百間石垣の上部が倒れる（金峰山地震）		
明治23年	1890	4 月 1 日 歩兵隊設置		
明治24年	1891	7 月 1 日 城内居屋敷に熊本電燈会社が開業		
明治27年	1894	4 月 20 日 歩兵第二三連隊が花畠旧藩邸に兵営移転		
明治30年	1897	8 月 野戰砲兵第六連隊第一大隊兵舎が大江村に移転 9 月 監物台に陸軍幼年学校設置（昭和 2 年廃止）		
明治32年	1899	・桜橋架橋、城外と古城の北側を結ぶ		
明治35年	1902	5 月 熊本電灯会社解散 11 月 陸軍特別大演習、本丸が大本営となる ・旧南坂下馬橋通りを改修して行幸坂を新設、城内通路改修 ・下馬橋は下流に架け替えられ行幸橋と改称		
明治42年	1909	・清正公三百祭。錦山神社を加藤神社と改称		
大正 6 年	1917	・第六師団司令部、天守台前に落成		
大正14年	1925	5 月 24 日 歩兵第十三連隊、渡鹿の新兵舎に移る		
大正15年	1926	1 月 12 日 熊本城址保存会結成 6 月 15 日 新町清裏園開場式		
昭和 2 年	1927	3 月 31 日 陸軍幼年学校廻校 7 月 30 日 熊本陸軍教導学校が城内に開校 4 月 1 日 熊本城のドン（午砲）復活 ・宇土櫓解体修理、長岡改築、谷村計介銅像建立（行幸橋際の書物櫓跡） ・電車敷設（辛島町一段山線）のため段山の基部を掘り削る		
昭和 3 年	1928	6 月 29 日 熊本銀行社、千葉城跡に新築落成式		
昭和 4 年	1929			

昭和 8 年	1933	1月23日 宇土橋、国宝に指定される 2月 4 日 熊本城跡が史跡に指定される
昭和11年	1936	3月28日 熊本貯金局が花畠町に落成
昭和14年	1939	4月 1 日 熊本陸軍幼年学校が熊本陸軍教導学校内に開校（15年清水町に移転）
昭和18年	1943	8月 1 日 熊本陸軍教導学校が熊本予備士官学校となる
昭和20年	1945	10月 米軍進駐。旧幼年学校や工兵・騎兵・砲兵各隊兵舎に入る 10月 宇土橋一般公開 ・三の丸に化血研発足
昭和24年	1949	・大蔵省が熊本城を熊本市に貸下げ
昭和25年	1950	・新文化財保護法により熊本城跡を史跡に、国宝建造物を重要文化財に指定
昭和26年	1951	9月17日 熊本城の管理者に熊本市を指定
昭和27年	1952	6月 5 日 本丸御殿司令部跡に市立熊本博物館開館 11月 8 日 陸軍幼年学校跡に監物台樹木園開園 ・熊本城保存修理工事を國の直轄事業として、27年度から5ヵ年継続で実施
昭和28年	1953	5月10日 長塀が910m（810m）にわたって倒壊 6月26日 熊本大水害 ・平橋保存修理起工式
昭和29年	1954	・櫓方門崩壊（現加藤神社） ・新堀橋下樹木園東北隅屋崩れ ・長廊解体修理、宇土橋半解体修理工事着手 ・西出丸の石垣（軍の火薬庫跡）を取り除く
昭和30年	1955	12月29日 史跡熊本城跡が特別史跡に指定される ・新堀橋（監物橋）解体修理 ・櫓方門を解体保存
昭和31年	1956	・不開門・源之進橋解体修理工事着手 ・西櫛門を改修
昭和32年	1957	・宇土橋の解体修理工事完了 ・櫓方門を竹ノ丸入り口に移築 ・田子橋、七間橋、十四間橋、四間橋の解体修理に着手
昭和33年	1957	12月 熊本県立圖書館が千葉城町に完成（昭和60年、出水町に移転開館）
昭和34年	1958	4月 1 日 天守閣再建起工式 8月20日 熊本県営熊本城プール完工式 ・重文建造物（宇土橋・不開門・平橋・監物橋・長廊）の管理団体に指定 ・竹の丸旧軍倉庫解体時に長廊52mが倒壊 ・五間橋下石垣根元の補強工事の実施
昭和35年	1960	5月14日 熊本駅第一高校（古城町）落成式 9月22日 天守閣再建完成。本丸20ha 有料化 10月15日 藤崎台県営野球場完工 ・十四間橋、四間橋、解体修理完了 ・五間橋・北十八間橋解体修理着工（36年完了）
昭和36年	1961	1月16日 二ノ丸に合同庁舎完成 ・平御橋再建完成 ・東十八間橋解体修理工事着手（37年完成）
昭和37年	1962	4月11日 熊本駅第二高校が二ノ丸に開校 ・熊本市が源之進橋、四間橋、七間橋、田子橋、東十八間橋、北十八間橋、五間橋の管理団体に指定 ・加藤神社、現在の位置に移る
昭和38年	1963	3月 1 日 NHK 熊本放送会館が千葉城町の旧銀行社跡に完成
昭和39年	1964	・特別史跡熊本城跡の管理団体に熊本市が指定される
昭和41年	1966	・馬具橋再建完成 ・月見櫓跡石垣修理 ・牛飼台の石垣一部崩壊を復旧
昭和42年	1967	・石門の石垣修理工事に着手（昭和44年に完成） ・二ノ丸広場開路、駐車場造成工事に着手（都市公園整備）
昭和43年	1968	・県立第二高校が健軍東町の新校舎に移転

昭和44年	1969	<ul style="list-style-type: none"> ・加藤神社裏、平櫓前、馬具櫓前石垣復旧工事完了 ・宇土櫓部分修理工事
昭和45年	1970	<ul style="list-style-type: none"> ・西出丸、亥亥櫓跡から西大手門跡間の石垣復元工事に着手
昭和47年	1972	<ul style="list-style-type: none"> ・長櫛屋根保存修理工事完了
昭和50年	1975	<ul style="list-style-type: none"> ・西出丸亥亥櫓跡から西大手門跡間の石垣復元工事完成 ・集中豪雨により樹木園の崖、二ノ丸から崖の崖などが崩壊する ・城内一帯の樹木調査及び二ノ丸御門跡虎口の発掘調査を実施 ・西竹ノ丸五階櫓（独立櫓）石垣修理及び要入櫓跡復元工事着手 ・棒庵坂石垣工事の実施
昭和50年	1975	<ul style="list-style-type: none"> 3月4日 二ノ丸に熊本県立美術館開館 ・西竹ノ丸五階櫓（独立櫓）石垣修理完了
昭和51年	1976	<ul style="list-style-type: none"> ・昭和50年の崖崩れ等の災害復旧工事完了 ・二ノ丸御門跡整備工事着手 ・平櫓部分修理工事着手
昭和52年	1977	<ul style="list-style-type: none"> ・西南の役百周年龍城記念祭が飯田丸で開催される ・二ノ丸御門跡整備工事完成 ・長櫛部分修理工事完了
昭和53年	1978	<ul style="list-style-type: none"> 4月1日 熊本城内古京町に熊本市立熊本博物館が完成 ・不開門板道整備工事着手 ・監物櫓部分修理工事完了
昭和54年	1979	<ul style="list-style-type: none"> ・源之進櫓部分修理工事完了 ・不開門板道整備工事完了 ・三ノ丸森本儀太夫櫓跡周辺整備工事完成
昭和55年	1980	<ul style="list-style-type: none"> ・棒庵坂石垣修理第一期工事着手 ・数寄屋丸の地図石垣修理工事完了 ・西大手門復元整備工事着手 ・不開門部分修理工事完了
昭和56年	1981	<ul style="list-style-type: none"> 3月15日 花畠町の勤業館跡地に産業文化会館開館 ・田子櫓、七間櫓、十四間櫓、四間櫓保存修理工事 ・棒庵坂石垣修理第一期工事完了 ・西大手門復元整備工事完成 ・宇土櫓、櫓台石垣学み状況調査の実施
昭和57年	1982	<ul style="list-style-type: none"> 8月10日 熊本県伝統工芸館開館 ・宇土櫓西側石垣修理工事完了 ・千葉城跡（国技局所管）石垣修理工事完了
昭和58年	1983	<ul style="list-style-type: none"> 3月 特別史跡熊本城跡保存管理計画策定 ・平櫓下石垣保護のため坪井川に擡壁石垣築造（59年完成） ・棒庵坂石垣修理第二期工事着手
昭和59年	1984	<ul style="list-style-type: none"> ・棒庵坂石垣修理第二期工事完了 ・平櫓屋根補修工事完了
昭和60年	1985	<ul style="list-style-type: none"> ・宇土櫓保存修理（半解体）工事着手 ・美術館西側石垣修理工事着手
昭和61年	1986	<ul style="list-style-type: none"> ・美術館西側石垣修理工事完了 ・坪井川護岸及び護床工事完了
昭和63年	1988	<ul style="list-style-type: none"> ・西出丸（奉行所跡）東側石垣保存修理工事着手 ・櫻前櫓整備工事着手、平成元年3月完成 ・数寄屋丸石垣復元整備工事完了
平成元年	1989	<ul style="list-style-type: none"> ・宇土櫓保存修理工事完了・平櫓保存修理（部分修理工事）工事完了 ・数寄屋丸二階御門復元整備工事完成 ・埋門（金木門形式にて）再建整備工事完成 ・三ノ丸地区に県指定重文「旧細川刑部邸」の移築復元工事着手 ・古城垣復元のため発掘調査の実施及び一部復縫工事の実施
平成3年	1991	<ul style="list-style-type: none"> 9月14日 台風17号により長櫛等に被害を受ける 9月27日 台風19号が日本列島を縦断し各地に甚大な被害をもたらす。熊本城においても重要文化財（長櫛、十四間櫓、源之進櫓、田子櫓、東十八間櫓、宇土櫓）が被害を受け、特に長櫛は最大瞬間風速56m/hの南風によって中央部が倒壊した。また、石垣も2箇所が崩壊し、城内全城にわたって樹木の倒木、枝折れ等の被害を受けた ・豪雨により城内数カ所で崖崩れ等の被害を受ける

平成 4 年	1992	・台風19号による災害復旧（長崎・源之進槽他・石垣等）工事完了
平成 4 年	1992	・西出丸（奉行所跡東側）石垣保存修理工事完了 ・二ノ丸御門周辺整備（第二期）工事完成
平成 5 年	1993	・天守閣災害復旧（台風19号）工事着手 9月11日 県指定重要文化財「旧細川刑部邸」移築復元、公開開始
平成 5 年	1993	・西出丸（奉行所跡西側）石垣保存修理工事着手
平成 6 年	1994	・宇土槽ほか5棟補修工事完了
平成 7 年	1995	・三ノ丸（古町町）北側石垣修理工事完了 ・西出丸（奉行所跡西側）石垣保存修理工事完成 ・奉行所跡遺構調査の実施
平成 8 年	1996	・二ノ丸御門跡石垣保存修理工事完成 ・西出丸（奉行所跡）南側石垣一部復元工事完了
平成 9 年	1997	・南大手門跡石垣及び南坂一部復元整備工事着手（平成10年3月完成） ・熊本城復元整備計画策定
平成11年	1999	・西出丸一帯復元整備工事着手（平成16年3月完了）
平成13年	2001	・飯田丸一带復元整備工事着手（平成17年3月完了）
平成15年	2003	・本丸御殿大広間復元整備工事着手（平成20年3月完了）
平成23年	2011	3月 桜の馬場城彩園オープン
平成25年	2013	10月 熊本城調査研究センター開所

〔参考文献〕

- 平野流香『熊本市史』熊本市 1932
- 辻善之助編註『沢庵和尚書簡集』株式会社岩波書店 1942
- 生田宏『肥後近世史年表』日本談義社 1958
- 熊本県『熊本県史料 近世篇第一』～『熊本県史料 近世篇第二』1965
- 熊本県『熊本県史料 中世篇第五』1966
- 藩法研究会『藩法集7 熊本藩』創文社 1966
- 武藤敬男・宇野東風・古城貞吉編『肥後文献叢書（三）』株式会社歴史図書社 1971
- 同『肥後文献叢書別巻（一） 肥後先哲偉蹟』株式会社歴史図書社 1971
- 鎌田浩『旧章略記一熊本藩法制資料（五）一』『熊本法学第21号』熊本大学法学会 1973
- 細川藩政史研究会『熊本藩年表稿』1974
- 細川家編纂所『改訂肥後藩国史資料 復刻版』國書刊行会 1974
- 中野嘉太郎『加藤清正傳』青潮社 1979
- 細川藩政史研究会『熊本藩町政史料一』1985
- 神戸大学文学部『中川家文書』臨川書店 1987
- 土田將雄編『出水叢書4 編考輯録 第四巻 忠利（上）』汲古書院 1989
- 東京大学史料編纂所『大日本近世史料 細川家史料十三』東京大学出版会 1992
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 史料編 第二巻古代・中世』熊本市 1993
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 史料編 第三巻近世Ⅰ』熊本市 1994
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 史料編 第四巻近世Ⅱ』熊本市 1996
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第八巻現代Ⅰ』熊本市 1997
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第五巻近代Ⅰ』熊本市 2001
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第六巻近代Ⅱ』熊本市 2001
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第七巻近代Ⅲ』熊本市 2003
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 別編 第三巻年表』熊本市 2003
- 熊本県立美術館編『熊本城築城400年記念 激動の三代展』熊本城築城400年記念展実行委員会 2007

4. 飯田丸の曲輪と石垣

(1) 曲輪

第12図「平山城肥後国熊本城廻絵図」(熊本県立図書館所蔵)、第13図「肥後国熊本城廻之絵図」(左同)、第14図「熊本城圖」(永青文庫所蔵)の3点の絵図は、熊本城を中心に郊外の山まで含んで広く描いた絵図、惣構えの範囲までを描いた絵図、本丸・二ノ丸の主郭部分に限定して描いた絵図というように、それぞれが描く範囲が異なる。しかし、朱線で表す街道や本丸への動線、堀の深さや幅、石垣の高さなどを記入すること、櫓や石垣を姿図として描く方法などが全く同一で主郭部分に限れば相似形となっている。こうした表現の特徴は、幕府が正保元年に国絵図とともに提出を義務づけた所謂「正保城絵図」の基準に則ったものである。一連の城絵図は藩控えの「正保城絵図」の下絵図か控絵図と推定される。「正保城絵図」の提出は、幕府が慶長20年(元和元年、1615)に示した「一国一城令」によって固定化することになった各藩の居城の軍事性をあからさまにさせたものであり、城郭統制の基準資料として江戸城に保管されていて⁴⁶⁾。城絵図としての資料性が極めて高く貴重である。

上記熊本城絵図では、どの曲輪にも曲輪名の記載がないが、天守・御殿曲輪、平左衛門丸、数寄屋丸、飯田丸、東竹ノ丸の五つの曲輪は、各々が石垣で区画された重層的な曲輪構成をとりながら、曲輪群を包括する外縁となる高石垣で囲繞され、西側・北側には水濠・空堀があり、要所には出入口となる虎口を開けていて、天守を中心とした求心的曲輪配置となっている。

このうち矩形を呈した飯田丸では「本丸之内」「東西四十七間、南北五十八間」という記載があり、東竹ノ丸とともに本丸を構成する空間として扱っていた。本丸外縁部にあたる飯田丸は、本丸内では最も下位の曲輪となり、東西幅最大95m、南北長117mの南北に長い矩形の空間となっている。備前堀側の西辺より内枡形虎口となった「西櫓御門」があり、推定「正保城絵図」では正面大手の出入口の「頬当御門」や本丸東部の十八間櫓近くの東竹ノ丸への出入口「御門櫓」と同じく、二ノ丸など本丸外からの進入口となる三つの門の内の一つとして使用された重要な門であった。同図では飯田丸南東の「元札櫓御門」から平左衛門丸に通じた通路に面した箇所には門ではなく開放的な曲輪であったが、18世紀前半代とみられる「御城図」では門は描かれないが内枡形をつくる塀が東側通路に対して設けられ、安永2年(1773)以降の18世紀後半代の様子を描く「御城内御絵図」では「冠木御門」を、文政7年(1824)の「熊本城図」では瓦葺きの薬医門風の門を描いていて、飯田丸が次第に閉ざされた空間に変貌していく様子が読み取れる。さらに、これらの絵図では「西櫓御門」に付属する門番所が描かれていないことを勘案すると、18世紀後半になると西櫓御門が通常は閉鎖されていて、曲輪内的一般通行がなかった可能性が高い。

この閉鎖的な曲輪にあった櫓以外の建物は、「御城内御絵図」によれば、北東部に井戸を屋内に取込んだ桁行11間梁間8間の「飯田屋敷御台所」、西櫓御門の東に桁行6間梁間4間で棟割りの部屋となった「御側組」と「御持筒組」の道具蔵があり、南東隅に桁行6間梁間3間の「鉄炮蔵」、東辺に桁行14間梁間3間の「元塙蔵」があったように、専ら戦争時の武器や兵糧用の塙などを収蔵していた空間であった。空闊地となる中央付近にはマツ4本、スギ1本、クス2本とみられる樹木が描かれているのみである。因みに、そのうちのクスは現在も大木1本が残り、樹齢800年とされている。そうであれば、城郭普請前の茶臼山の台地南端を示した樹木となる。

平面が略矩形の飯田丸の星線は、西・南・南東が高石垣で囲繞され、数寄屋丸下から南西隅の五階櫓までの西辺石垣は幅5m内壁の高さ4mで、梁間2間~3間の多開櫓が石垣を余すことなく使用して建てられていて、中途にある「西櫓御門」を含めた延長は125mとなり「百間櫓」と呼ばれていた。「西櫓御門」は、数寄屋丸石垣下から南へ24mの地点の石垣が内枡形となった部分にあった。門と石垣上の櫓は合計4棟ほどの長櫓が連続したものだったが、櫓内部は相互に往来が出来て一連の空間として利用できるよう設計されていた。

「五階御櫓」は曲輪隅が張出したうえに石垣からさらに半間ほど高い櫓台にあって、本丸一角の防御を誇示するように屹立し、城下から最も間近に仰ぎ見られていた重層櫓建築だった。明治初期撮影の古写真数葉があり建築意匠や構造から熊本城では古式の櫓に属するとされるが、櫓台は当初の石垣を拡幅したもので、櫓の意匠年代と合わないので、移築された櫓と考えられている^⑦。今後は櫓台の年代を含めて慶長17年6月の水俣・宇土・矢部の支城破却令に伴う支城天守を移築した可能性がないか、検討が必要である。

五階櫓の東方石垣には塀があり、東南隅には平屋の桁行15間梁間2間の「隅御櫓」、東辺の屈曲した石垣上には梁間2間の「平櫓」が建ち、途中に桁行5間梁間4間半の「三階御櫓」が建つ。櫓の位置が不自然なことから飯田丸の南西隅にあった初期の隅櫓ではないかと推定されている^⑧。さらに平櫓からは虎口に独立して築かれた「(西竹ノ丸)五階御櫓」を通じた三階建ての「札櫓御門」があった。また、平櫓の北側の石垣上東辺には桁行14間梁間4間の「元塩蔵」が置かれ、北東隅の冠木門まで塀で閉ざしていた。この東辺石垣の足下には幅・深さともに約1mの大型の水路が設けてあるが、飯田丸側面の石垣を直接水路の側壁に使ったもので、現在見られる石段の下に古い通路が埋没している可能性もある。

(2) 石垣

本丸を構成する各曲輪の標高は、天守東面で49.7m、下位曲輪となる平左衛門丸45.1m、数寄屋丸44.7m、飯田丸33.5m、東竹ノ丸36.5mとなっていて、その曲輪間の段差は全て石垣によって形成され、その間に防護のために屈曲する通路が折形虎口として置かれている。熊本城の石垣に使用された石材は、西方に聳える標高660mの金峰山を噴出源にその山麓に分布する輝石安山岩とされていて、その採石場は「六こう山」「きおん山」「おかみがたけ」「つのうら」にあったことが「御大工棟梁善藏聞覚控(写)」という寛永10年の記録にある^⑨。それぞれ独鉱山・祇園山(現花岡山)・河内町の押ヶ石巨石群・津浦に比定できるが、この他に島崎地区や谷尾崎地区などには明治まで多数の石工が居住しており、近在の山間に産する石材の切出しや加工を生業としていたらしい。熊本城で大規模に石垣が普請されている一因として、城地近郊に石垣の適材が大量に確保できたことが大きかったと考えられる。

飯田丸の一部石垣は平成12・13年度の保存整備の際に石垣立面図が作成され、解体修理を行った石垣部分に関しては石材の固体計測も実施している。ここではそうした石垣解体時の所見も勘案しながら、飯田丸の石垣の特徴などについて改めて言及する(石垣面の箇所については第20図を参照)。

イ・ロ・ハ・ニ・ホ・ヘ・ト面は西櫓御門の両側の石墨である。高さは概ね3m、上面幅は約5mで、上面全ては長櫓の土台となった。西櫓御門近くの石墨隅角の石積みは算木積みを意識した重箱積みだが、控えは短く、一部の角石は縱石積みとなっている。角石の角は丸く面取りし、稜線は真っ直ぐ通っている。北側の数寄屋丸五階櫓台の南面石垣が控えを交互に長短とする明確な算木積みを採用した後出の技法で積まれた石垣であることから、数寄屋丸石垣に接続する石墨部分は一度解体し、数寄屋丸石垣の完成後に積み直されたと考えられる。また、二面の西端上部6石は算木積みとなっていて、後世の積み直し部分と推定される。築石は大型の半割石が多く見られ、横目地が通らない乱積みである。築石間の隙間には細かな削石で詰めている。石垣勾配は外壁となるイ面で60度、内壁のハ面で77度となり、高さが低いために両面とも直線状勾配となっている。

なお、西櫓御門は上部の櫓部分が明治初期に撤去され平屋の門として現代まで保存してきたので、その礎石などの保存状態は良好に残っている。門は本部の劣化があり、現在は保存のために解体して別所に保管している。

R面は「御城内御絵図」では東隅角近くに小階段が描写されているが、現在はその痕跡は確認できないので後世の積み直しが想定される。また、同絵図には「向埋御門」と記載されたニ面とR面を貫通する埋門が描写されている。この門は現在も同箇所に幅2.2m高さ2.5mの構造で残されている。「御城内御絵図」

によれば、「向埋御門」の構造は石柱を正面1間×奥行き2間に配置する合計6本の石柱であったが、現在のそれは正面1間、奥行き7間、石柱合計16本と改変されている。現構造は、柱上部に石製梁を渡し、この梁に桁材となる石材を隙間なく敷き詰めたものである。石柱は矢穴によって粗削されたもので、矢穴痕が浅く、近世のそれとは明らかに異なる。埋門上部の築石は石材角に鎬が明瞭に残り、石壇の当初石材の加工法とは大きく異なっていて、江戸初期から存在した施設ではないことが分かる。先述したように、江戸中期になると「西櫓御門」は閉鎖されて原則不使用とされていた可能性が強いことを勘案すると、「向埋御門」はその代用となる通用門として新しく設けられた施設の可能性がある。なお、その上部の石壇内壁は、ちょうど石門を中心に長さ10mにわたって石材が外されている。石壇東隅角近くの小階段をなくした改修と同時に埋門天井への加重を減らす目的で改修したものとみられる。

A面は、高さが16m以上の高石垣である。中間までの進入角は58度で、その上部で64度と角度が増し、天端から2.5m下で78度となって反りをもたせている。隅角は西櫓御門付近の石壇と同様に算木積みの意識は弱く、基本的に重箱積みである。築石面は丸岩を石矢で半裁した削石を多用した乱積みで、細かな間詰石を丁寧に用いている。

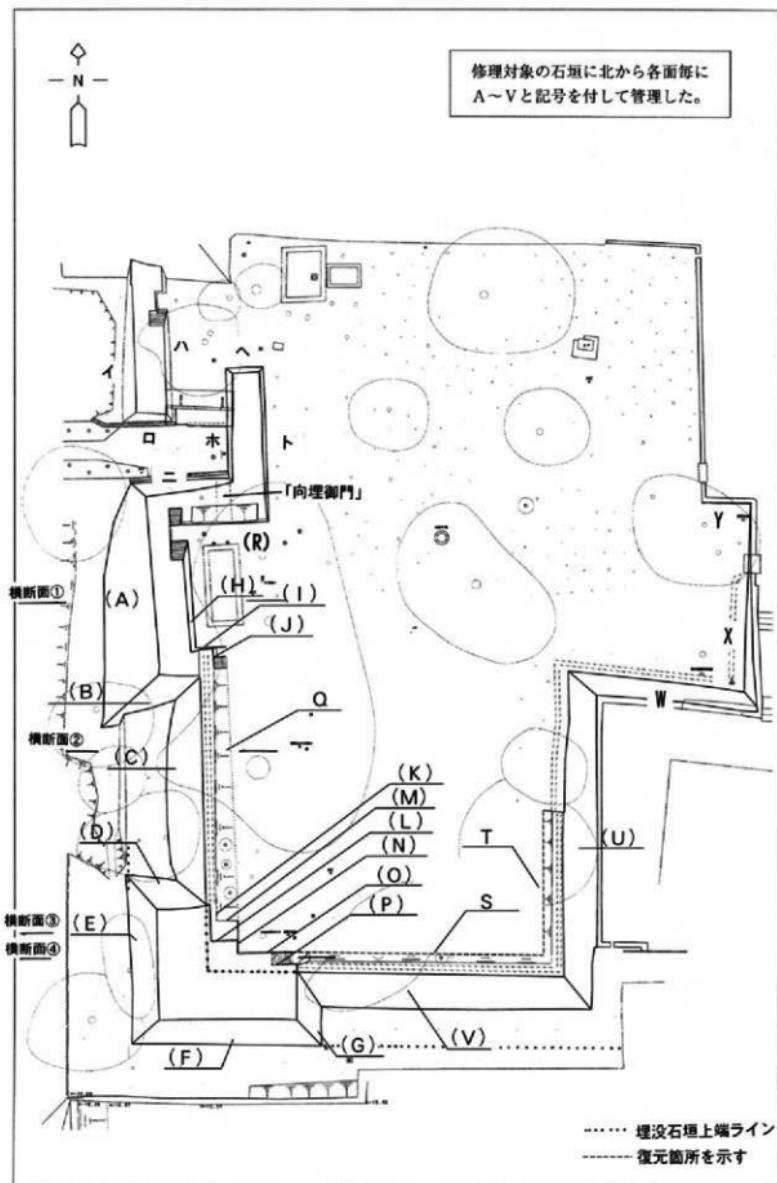
入隅を造るB面・C面は交互に石を積んでいて、A面と同様の特徴を持つことからも同時期に施工された石壇である。また、五階櫓復元に伴う石壇解体では、C面石壇の南延長部がD面E面石壇に埋め殺された状態で検出され、当初の石壇C面の前面に7mほど拡張して櫓台を造成したことが明らかとなっている。当初石壇の隅角は櫓台本体に埋もれて確認できないが、東に折れた延長が曲輪南面石壇のV面であることは確実である。さらにV面の延長となるU面W面X面Y面も共通した石積み技術であり、基本的に同時期に構築された石壇である。なお、C面の足元には幅7mの犬走りの小段がある。この小段の石積み技法もA面やC面などと同一で、同時期に築かれた石壇の足元を固めた石壇である。その南延長は拡張された五階櫓台石壇根元まで伸び、其の先は櫓台に埋没するが、C面と同様に櫓台内部で東方に折れてV面の下の小段に埋没し、その先端の隅角が元札櫻御門西側の東面石壇に同化している状態が確認できる。

西辺・南辺の石壇内壁のQ面・S面・T面の石壇石材は、きれいに外されていてスロープとなっていた。『御城内御絵図』によれば、これらの石壇は「高サ壇間半」とあり高さ約3mの石壇であった。また、Q面には北端と南側に階段が付き、南側のそれは合坂となり百間櫓に床下から上った。S面では五階櫓近くの二箇所に合坂があり石壇上の堀や櫓に取り付けるようになっていて、T面では中間に階段があり、両端の隅櫓や平櫓、堀に至る進入口となっていた。

一方、改修によって石壇を張出している五階櫓台は、西面となるE面石壇では高さ13.5mで、中間までの下半部の進入角は約67度、上半部から約77度となって緩やかな曲線を描いて天端に至る。その隅角は算木積みが確立し、小面と大面の長さの比率がおよそ1対2の割合となっていて、かつ明瞭な隅脇石が採用されている。また築石も長方体に近い形態を基本とした粗加工の石材が多く、その高さもほぼ揃えていて自ずと積み方が布積みとなっている。このようにA面等の当初石壇に対して、後出する五階櫓台となるD面・E面・F面・G面では石壇普請技術に明らかな相違があり、時代差が看取される。

なお、明治22年の金峰山地震でF面の上半部が崩落していて（第19図写真参照）、現在の石壇はその後の復旧によるものである。大きく見える一部石材は、崩落した石材を積み直す際に底面（上面）を前面に使用したためであろう。ただし、今回の石壇修理の対象となっていないように被災後の復旧での積み方はしっかりと行われたようである。

さて、平成12年度に実施した石壇保存修理工事では、外した石材については横、縱、控の長さを固体計測している。A面とD面をモデルに間詰石を除いた築石と角石のデータを用いて横の寸法より控の寸法が短い石材の割合を計算したところ、A面の場合は64個中35個で54.7%を占めるのに対して、D面では126個中34個の26.9%となり明瞭な差が確認できた。この数値は急角度の石壇を築くには石材の控を長く



第20図 飯田丸石垣配置図（縮尺任意）

※『特別史跡熊本城跡飯田丸一帯復元整備事業報告書』図3-2-3を引用加筆



第21図 百間御櫓台写真 *石垣修理後の平成26年段階、以下同じ。



第22図 百間御櫓台イ面写真



第23図 百間御櫓台口面写真



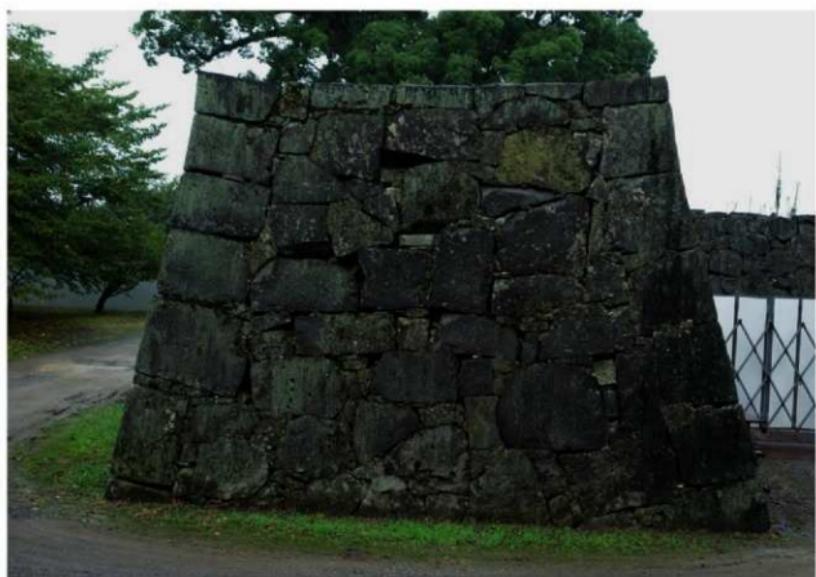
第24図 百間御櫓台八面写真



第25図 百間御櫓台二面写真



第26図 百間御櫓台木面写真



第27図 百間御櫓台へ面写真



第28図 百間御櫓台上面写真



第29図 向埋御門南口写真（保存修理工後）



第30図 向埋御門北口写真



第31図 向埋御門内部写真（南口から）



第32図 A面石垣南隅角写真



第33図 B面石垣写真



第34図 C面石垣写真



第35図 D面石垣写真



第36図 E面・F面の出隅写真



第37図 G面石垣写真



第38図 V面石垣西端写真



第39図 U面石垣南隅角写真



第40図 W面石垣写真



第41図 X面石垣南隅角写真



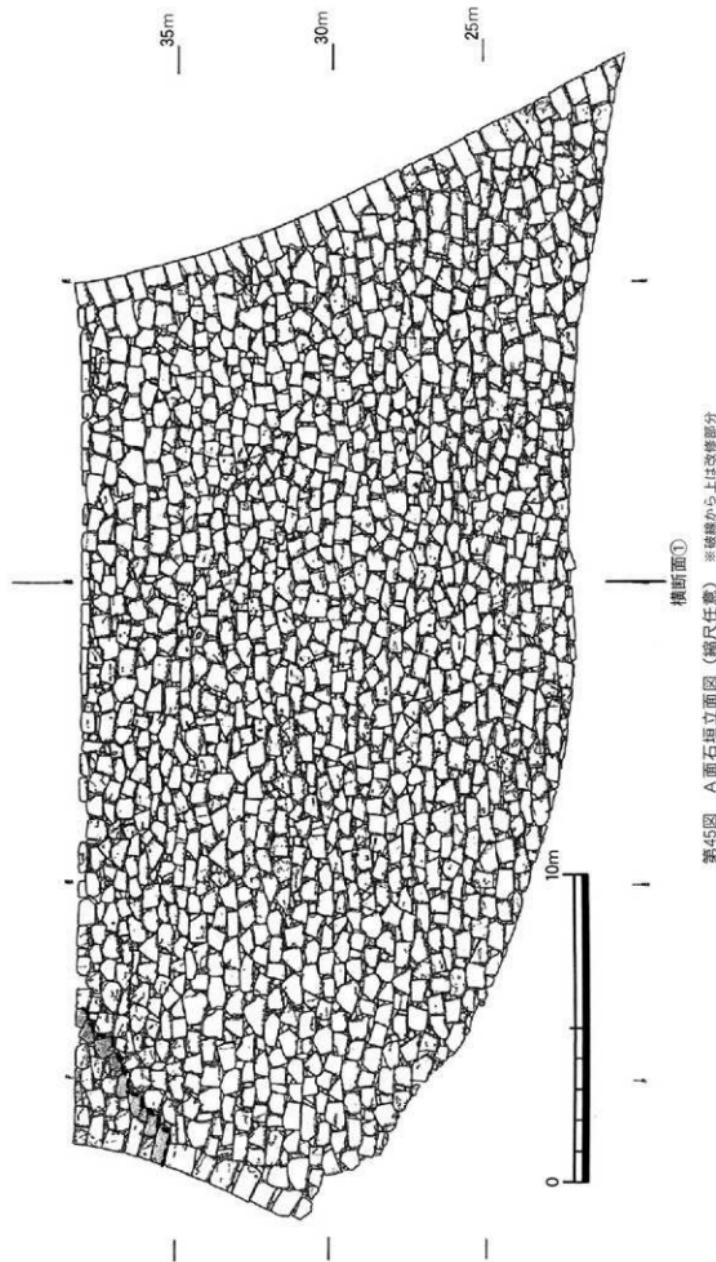
第42図 X面とY面の出隅写真



第43図 H面石垣写真

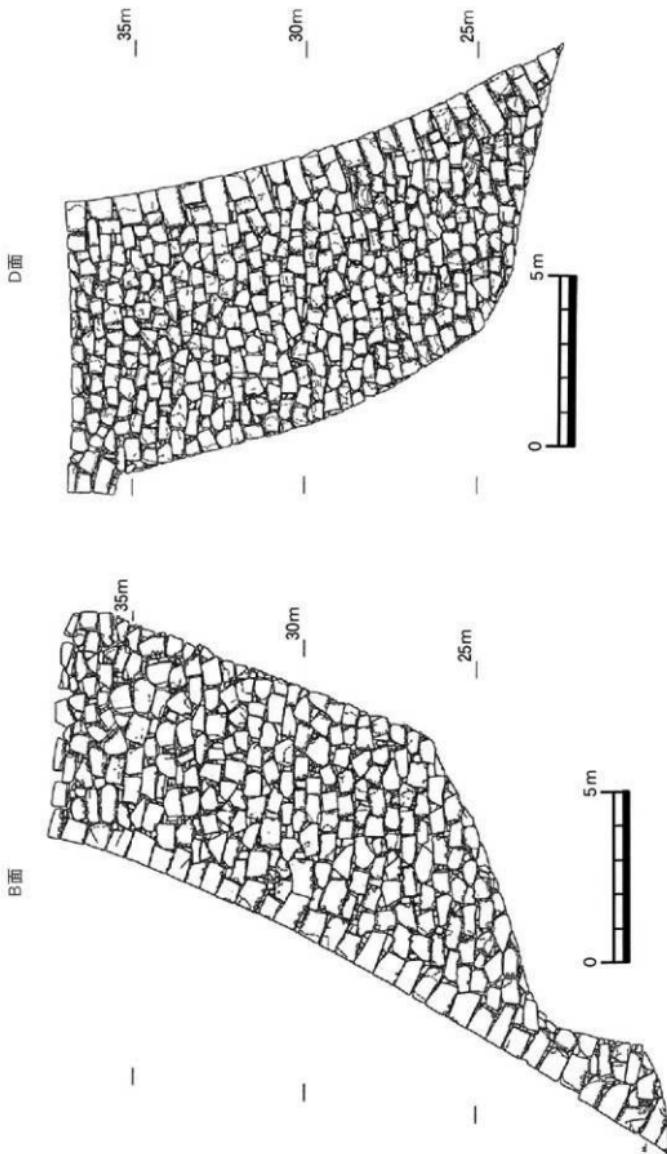


第44図 飯田丸復元整備後の現況写真

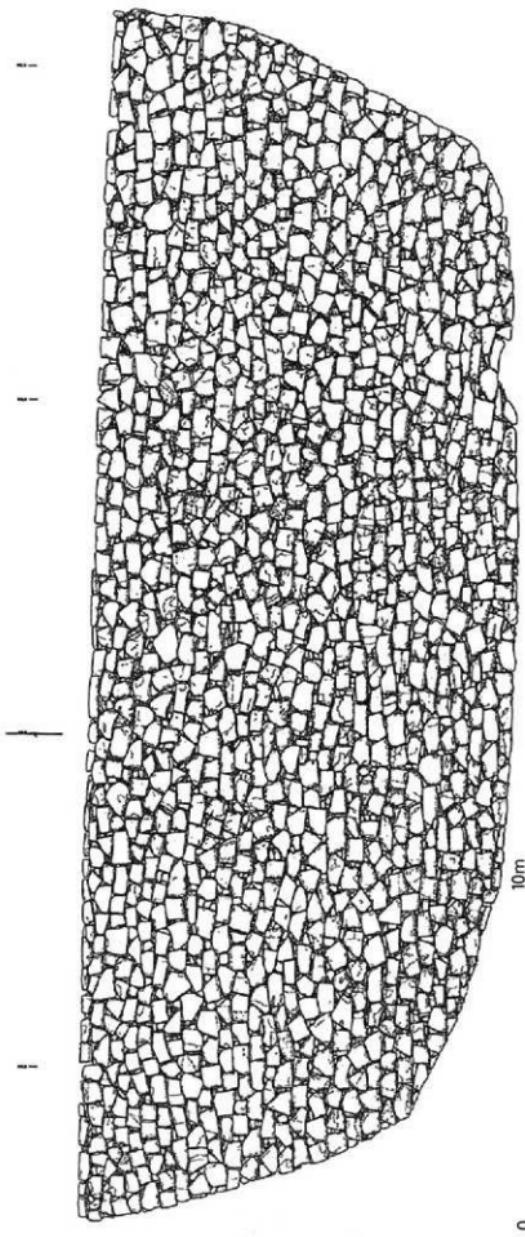


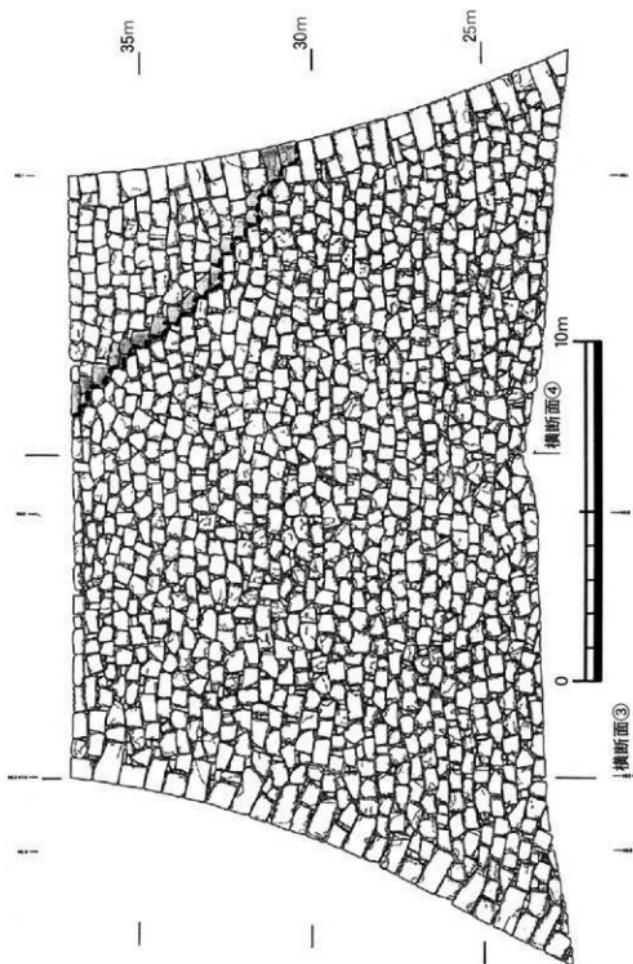
第45図 A面石垣立面図（縮尺任意）※破線から上は改修部分

第46図 B・D面石垣立面図（縮尺任意）

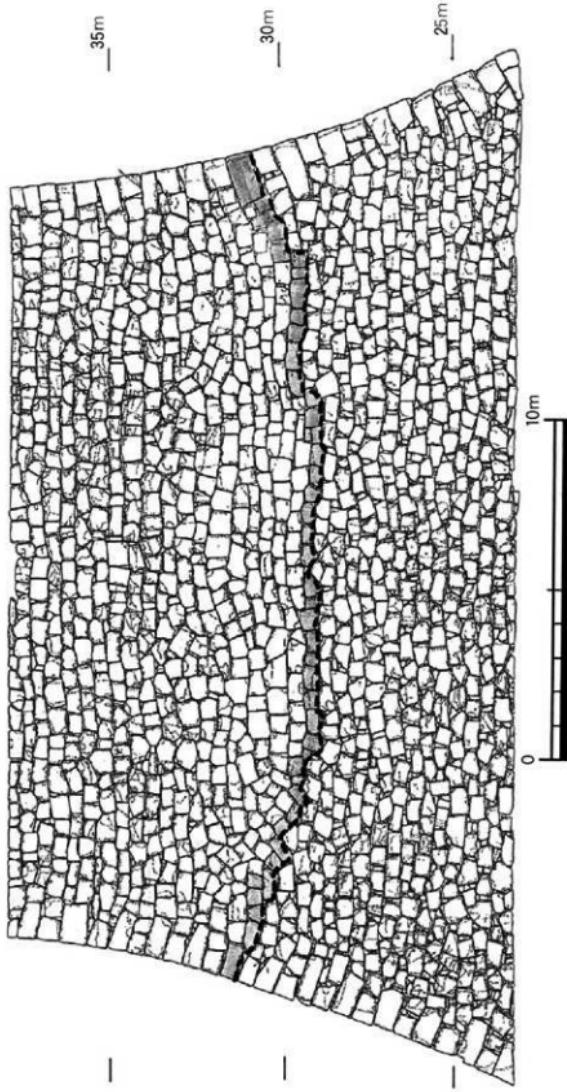


第47図 C面石垣立面図（縮尺任意）



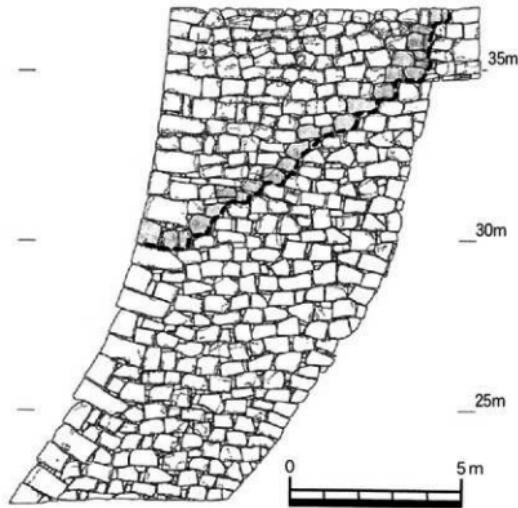


第48図 E面石垣立面図 (縮尺任意) ※破線から上は略記



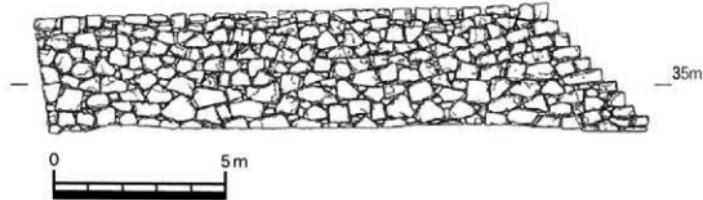
第49図 F面石垣立面図（縮尺任意）※壁端から上は明治の改修

G面

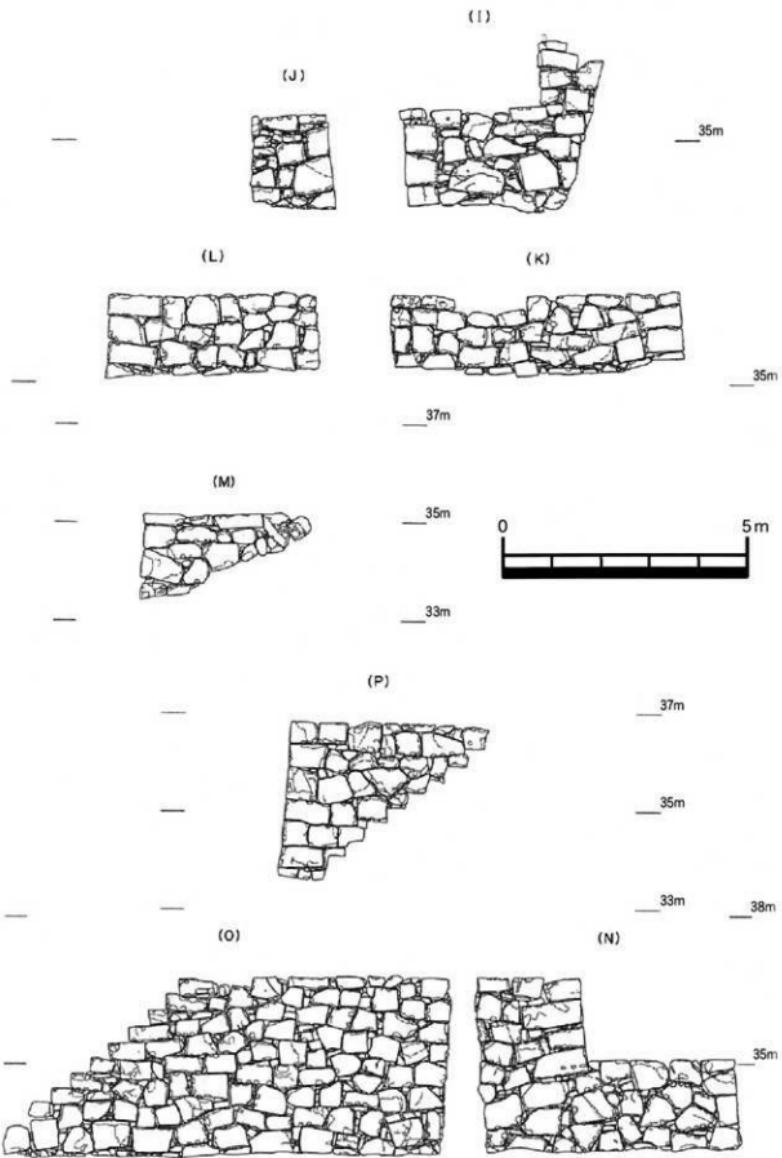


40m

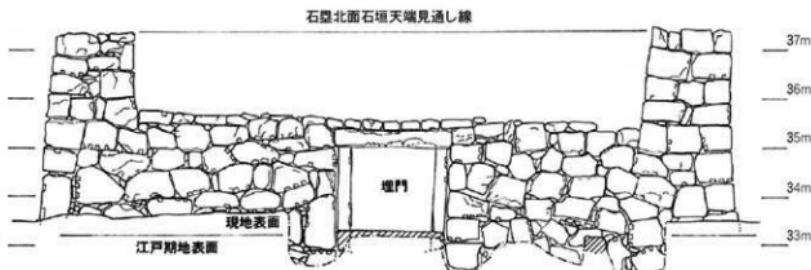
H面



第50図 G・H面石垣立面図（縮尺任意）※破線から上は明治の改修



第51図 I～P面石垣立面図 (1／100)



第52図 飯田丸「向埋御門」(R面石垣)立面図 (1 / 100)

となることが必要という土木的な要請を反映したものとみられ、控を長くとるため加工度を高めて長方体の石材を造り出すことになったとみられる。さらに縦の寸法が揃いだしたことから乱積みから布積みに変化していく要因ともなったと考えられる。

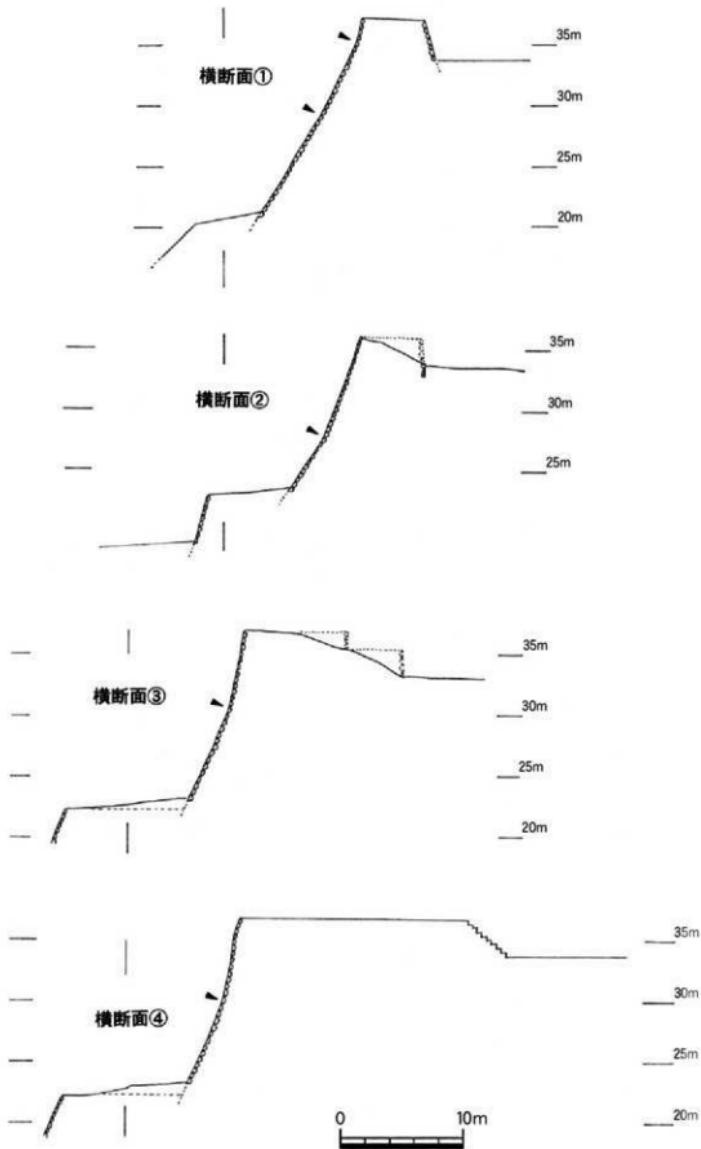
一方、A面などの先行する石垣は、石材の加工が丸岩を石矢で半裁しただけといった粗い割り方で自然面が多く残した割石が多用されているように、周囲の石材との接着面が少なく滑りやすいため、高石垣を築くには石垣勾配を緩くする必要があったことを示唆しているようである。

石垣は急勾配ほど敵兵の侵入の障害となる。また、横矢を効果的に掛けるため、墨線から大きく張出した石垣の折れや隅櫓が工夫された。そのため、手間はかかるが、石材加工度を高めて長方体に成形を行うようになった。熊本城では宇土櫓、西出丸の戊亥櫓・未申櫓、櫛方櫓などの隅櫓が類例となる。

なお、飯田丸五階櫓の櫓台構築にあたっても幅10mの犬走り状の小段が再度設けられていて、南側では高さ6mの石垣となって竹ノ丸境の石垣となり、西面は備前堀の石垣ともなっている。飯田丸石垣のF面やV面の下では「要人御櫓」二棟が小段のほぼ全面を作事空間としていた。小段の主たる役割は、五階櫓台の増築に対する地盤の強化と推量できるが、延長部となる「西櫓御門」前や土橋を越えた数寄屋丸西側、「頬当御門」手前まで、切岸のままの状態で直接空堀壁となっている。この状態では高石垣の根元の地盤が僅かな犬走りとなって残されているだけの脆弱な基盤であり、本来は宇土櫓東方の小段のように堀底までを石垣で覆ってしっかりした小段を設ける計画であったのではないだろうか。

熊本城石垣の編年案としては、矢野和之氏と富田紘一氏の作業があり、最近では富田編年を参考に公儀普請（天下普請・手伝い普請）の事例を考慮した市川浩文氏の編年がある³⁰⁾。矢野・富田の両氏の説は絶対年代の比定では相違点が多いが、石垣技術の変遷については類似し、相対的な編年としては大差がない。なお、富田・市川編年では加藤清正が最初に普請に着手した隈本城（後に「古城」と呼ばれる箇所）の石垣を対象としていない。

さて、飯田丸では五階櫓周辺で確認されたように当初石垣と増築石垣、二つの石垣が確認できる。矢野説ではB類・C類とD類とされ、その年代は当初石垣が慶長年間に、増築石垣が江戸中期に推定されている。富田説ではII期とV期となり、当初石垣が慶長5年、増築を慶長12年～寛永9年としている。また、市川編年ではA-2類とB-3類となり、当初石垣が慶長初期（慶長4～5年頃）、増築石垣を慶長後半（慶長15年の名古屋城手伝い普請以後）～元和年間（元和6年の大坂城1期手伝い普請頃）に推定している。市川編年は、名古屋城や大坂城の普請に出仕した加藤家の手伝い普請の石垣を参考としており、全国的な石垣技術の変遷も加味したところに特長がある。



第53図 熊本城跡飯田丸石垣横断面図（1／400）

（三角印は勾配の変化点）

〔註〕

- 1) 「来島文書」(『新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世』269頁)
- 2) 「築山トキ氏旧蔵文書」(『新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世』555頁)
- 3) 『新熊本市史 通史編 第二卷中世』
- 4) 「吉川家文書」(『新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世』254頁)
- 5) 村上豊喜「隈本城のはじまり (一) ~ (五)」『熊本城 第80~84号』2010~2011
- 6) 武藤敬男・宇野東風・古城貞吉編『肥後文献叢書(三)』株式会社歴史図書社 1971
- 7) 「藤崎八幡宮文書」(『新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世』667頁)
- 8) 同上666~667頁
- 9) 「相良家文書」(『新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世』316~317頁)
- 10) 「藤崎八幡宮文書」(『新熊本市史 史料編 第二卷古代・中世』667~668頁)
- 11) 『新熊本市史 史料編 第三卷近世I』
- 12) 「広島大学所蔵猪熊文書」(『新熊本市史 史料編 第三卷近世I』22頁)
- 13) 「中沢広勝氏蔵文書」(『新熊本市史 史料編 第三卷近世I』22~23頁)、「西村清氏蔵文書」(同32~36頁)
- 14) 森山恒雄「加藤清正伝記『続撰清正記』の成立とその追加集の紹介 (一)」『熊本大学教育学部紀要42号』1993
- 15) 「中澤広勝氏所蔵文書」(『新熊本市史 史料編 第三卷近世I』73~74頁)
- 16) 平野流香『熊本市史』熊本市 1932
- 17) 「新撰事蹟通考」(『肥後文献叢書(三)』所収)
- 18) 「大阪城天守閣蔵吉村文書」(『新熊本市史 史料編 第三卷近世I』80~81頁)
- 19) 「下川文書」(『新熊本市史 史料編 第三卷近世I』81頁)
- 20) 中野嘉太郎『加藤清正傳』青潮社 1979
- 21) 註文献20) と同じ
- 22) 『新熊本市史 史料編 第三卷近世I』
- 23) 山田康弘・高野和人編『青潮社歴史選書4 肥後加藤侯分限帳』青潮社 1987
- 24) 熊本県『熊本県史料 中世篇第五』1966 262頁
- 25) 「猪熊信男氏所蔵文書」(『熊本県史料 中世篇第五』62頁)
- 26) 『新熊本市史 史料編 第三卷近世I』86~90頁
- 27) 東京大学史料編纂所『大日本近世史料 細川家史料十三』東京大学出版会 1992
- 28) 『新熊本市史 史料編 第四卷近世II』3~28頁
- 29) 「御自分御普請」(『新熊本市史 史料編 第三卷近世I』177~201頁)
- 30) 小野将史・北野隆「毛利家文庫の絵図『肥後熊本城略図』について - 加藤氏時代の熊本城に関する研究 (その1)」『日本建築学会計画系論文集 第561号』2002、「加藤清正末期の熊本城について - 加藤氏時代の熊本城に関する研究 (その2)」『日本建築学会計画系論文集 第566号』2003、「加藤忠広による熊本城改修と熊本城小天守について - 加藤氏時代の熊本城に関する研究 (その3)』『日本建築学会計画系論文集 第576号』2004
- 31) 生田宏『肥後近世史年表』日本談義社 1958
- 32) 北野隆『城郭・侍屋敷古地図集成 熊本城』至文堂 1993
- 33) 『新熊本市史 史料編 第三卷近世I』201~203頁
- 34) 「御城内御絵図」の原本は喜多流能楽師狩野丹秀氏より熊本市に寄贈を受けた。なお、下記報告書に

よれば奈良文化財研究所所蔵のガラス乾板に映った絵図は現在行方知れずとなっている。

熊本市熊本城総合事務所『特別史跡熊本城跡本丸御殿復元整備事業報告書－大広間・大台所・数寄屋－』2009

- 35) 後者の付札は剥落により現在は確認することができないが、奈良文化財研究所所蔵のガラス乾板によって今回確認することができた。
- 36) 白峰句「若狭国小浜城修築に関する城主酒井忠勝の指図内容について－データベース化の試み－」『史学論叢 36号』別府大学 2006
- 37) 『新熊本市史 史料編 第三巻近世I』190頁
- 38) 細川藩政史研究会『熊本藩年表稿』1974、「御奉行所観帳并同日記頭書草稿」(永青文庫蔵)ほか
- 39) 北野隆『城郭・侍屋敷古地図集成 熊本城』至文堂 1993、熊本大学文学部附属永青文庫研究センター編『永青文庫叢書 細川家文書 絵図・地図・指図編I』吉川弘文館 2011
- 40) 水野勝之・福田正秀「加藤清正「妻子」の研究」ブイツーソリューション 2007、「統・加藤清正「妻子」の研究」ブイツーソリューション 2012
- 41) 土田将雄編『出水叢書4 緯考輯録 第四巻忠利（上）』汲古書院 1989 395頁
- 42) 日本史籍協会『熊本鎮台戦闘日記』東京大学出版会 1977
- 43) 原口長之・永田日出男・中村哲也校訂『西南戦争隈岡大尉陣中日誌』熊本史談会 1980
- 44) 猪飼隆明『西南戦争 戦争の大義と動員される民衆』吉川弘文館 2008
- 45) 陸上自衛隊北熊本修身会『新編西南戦史』原書房 1977
- 46) 千田嘉博「正保城絵図の製作と特色」「図説 正保城絵図」新人物往来社 2001
- 47) 矢野和之・細川道夫『熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』熊本市 1990
- 48) 許文献47) に同じ。
- 49) 清正の時代に大工棟梁だった善藏の記憶を書き留めた弟子善三郎の記録で、原本は不明だが澤田延音「民政記録」(熊本県立図書館所蔵)に収められている。
- 50) 矢野和之・細川道夫『熊本城宇土櫓保存修理工事報告書』熊本市 1990、富田紘一「熊本城の築城と構造」「定本 熊本城」郷土出版社 2008、市川浩文「九州における近世城郭石垣の変遷について（2）」「（諸大名家の石垣）7 加藤家（肥後）」「城郭石垣の技術と組織」石川県金沢城調査研究所 2012

〔主要参考文献〕

- 熊本市教育委員会『熊本市北部地区文化財調査報告書』1971
- 熊本市教育委員会『熊本市中央南地区文化財調査報告書』1978
- 熊本市教育委員会『熊本城三の丸森本櫓跡漆烟遺跡調査報告書』1979
- 熊本市教育委員会『熊本市中央北地区文化財調査報告書』1980
- 熊本市教育委員会『特別史跡熊本城跡保存管理計画策定報告書』1982
- 荒木栄司『肥後古城物語』熊本日日新聞社 1982
- 田村実『熊本の土地の生い立ち』熊本地学会 1985
- 靖国神社社務所『靖国神社忠魂史 西南の役』青潮社 1990
- 横山勝三ほか「熊本城および周辺地域の地形・地質の概要と研究課題」「市史研究くまもと 第2号」1990
- 大塚虎之助「唯今戦争始メ候 電報にみる西南役」熊本日日新聞情報文化センター 1991
- 熊本大学『熊本大学放送公開講座 熊本城を科学する』熊本大学学生部 1992
- 乙益重隆「壇に埋取した玉」「弥生農業と埋納習俗」六興出版 1992
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 別編第一巻 絵図・地図上 中世・近世』熊本市 1993

- 富田紘一「古写真に探る 熊本城と城下町」肥後上代文化研究会 1993
- 森山恒雄「肥後加藤政権と重臣飯田角兵衛（一）—飯田家所蔵文書の紹介と解説—」「市史研究くまもと 第5号」熊本市 1994
- 富田紘一「白川・坪井川流域と城下町の形成」「市史研究くまもと 第7号」熊本市 1996
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 史料編 第一巻考古資料』熊本市 1996
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第八巻現代Ⅰ』熊本市 1997
- 平野敏也・工藤敬一『図説 熊本県の歴史』河出書房新社 1997
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第一巻 自然 原始・古代』熊本市 1998
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第二巻 中世』熊本市 1998
- 富田紘一「熊本三河川と城下町の形成」「市史研究くまもと 第11号」熊本市 2000
- 柳田快明「南北朝期から戦国期の『隈本城』を考える」「市史研究くまもと 第11号」熊本市 2000
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第九巻現代Ⅱ』熊本市 2000
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第三巻近世Ⅰ』熊本市 2001
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第五巻近代Ⅰ』熊本市 2001
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第六巻近代Ⅱ』熊本市 2001
- 新熊本市史編纂委員会『新熊本市史 通史編 第七巻近代Ⅲ』熊本市 2003
- 熊本県立美術館編『熊本城築城400年記念 激動の三代展』熊本城築城400年記念展実行委員会 2007
- 小川原正道『西南戦争 西郷隆盛と日本最後の内戦』中公新書 2007
- 富田紘一「『熊本城の歴史と探訪』第6回 加藤清正の熊本城築城」「熊本城 復刊68号』2007
- 富田紘一『熊本城 歴史と魅力』熊本城顕彰会 2008
- 富田紘一『定本熊本城』株式会社郷土出版会 2008
- 熊本市教育委員会『智照院細川家墓所』2008
- 熊本市教育委員会『熊本城跡 桜馬場地区－熊本城遺跡群桜馬場地区埋蔵文化財確認調査報告書－』2011
- 熊本県立美術館『生誕450年記念展 加藤清正』生誕450年加藤清正展実行委員会 2012
- 熊本日日新聞社編『加藤清正の生涯 古文書が語る実像』熊本日日新聞社 2013

第3章 調査の方法

1. 調査の方法

平成10年度の調査では、まず五階槽台上面に約1m四方の試掘トレンチを5ヶ所設定して人力で掘り下げを行い、遺構面までの深さを確認した。その後、表土層の一部を重機で除去し、以下を人力で掘り下げた。百間槽台では、内側の石垣が消失した部分についてはトレンチを設定し、槽台・石垣上面も含め、すべて人力で掘り下げて調査を行った。曲輪内部では、土層の堆積状況の確認や槽台石垣の根石や埋没した雨落ち溝などを検出するため、24か所にトレンチを設定した。表土層は重機で除去し、以下は人力で掘り下げた。槽台上面の調査面積は五階槽で330m²、百間槽で640m²、トレンチの総面積は240m²である。調査による発生土は遺物を採集後コンテナに仮置きし、城外へ搬出・廃棄した。遺構・遺物の出土状況等の実測は、測量機械を併用しながら手作業で行い、主に縮尺20分の1と10分の1の図面を作成した。

平成12年度は、五階御櫓の建造物復元整備工事に伴う素屋根基礎掘削工事に先立ち、五階槽台西側裾の小段から南側の要人御櫓跡までを対象にして、土層の堆積状況と遺構の残存状況等を把握するための確認調査を実施した。幅60cm（部分的に1m）のトレンチを五階槽台の西側裾に2か所、南側に1か所設定し、人力で掘り下げを行った。土層断面や平面の実測は手作業で行い、縮尺20分の1の図面を作成した。11月より素屋根基礎設置部分の掘削と石垣解体修理工事が開始されたため、掘削によって発生した堆土を曲輪内に仮置きし、遺物の採集を行った。石垣の解体修理工事については、解体完了後の遺構精査と根石の検出、図面作成作業等を中心に行った。

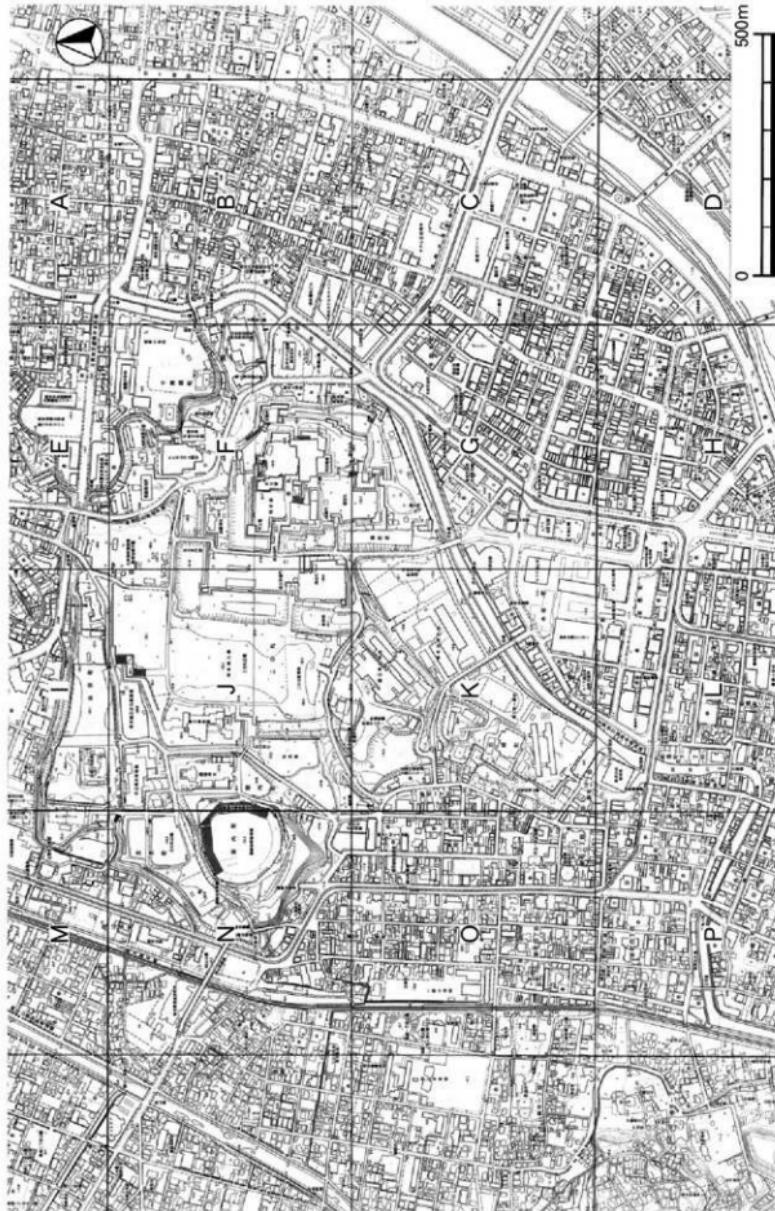
2. グリッドの設定（第54・55図）

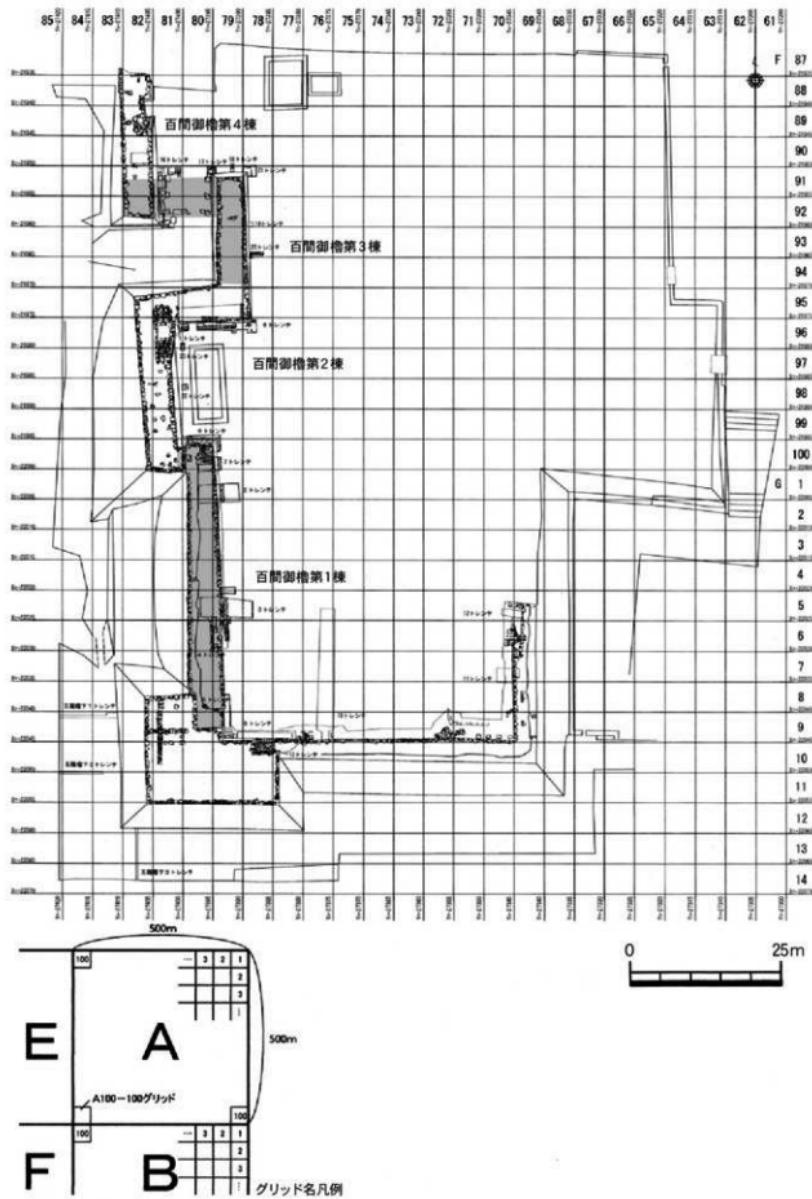
調査グリッドは、縮尺2,500分の1の地図上において日本測地系座標を基に設定した。まず、熊本城域全体を覆うように500m×500mの大グリッドを設けてA～Mのアルファベットを冠し、それぞれのグリッド中に5m×5mの小グリッドを設定して北から南、東から西へ1～100の番号をつけ、アルファベットの大グリッド名と小グリッドの数字2つを組み合わせてグリッド名とした。（例：A100-100グリッド）

3. 基本層序

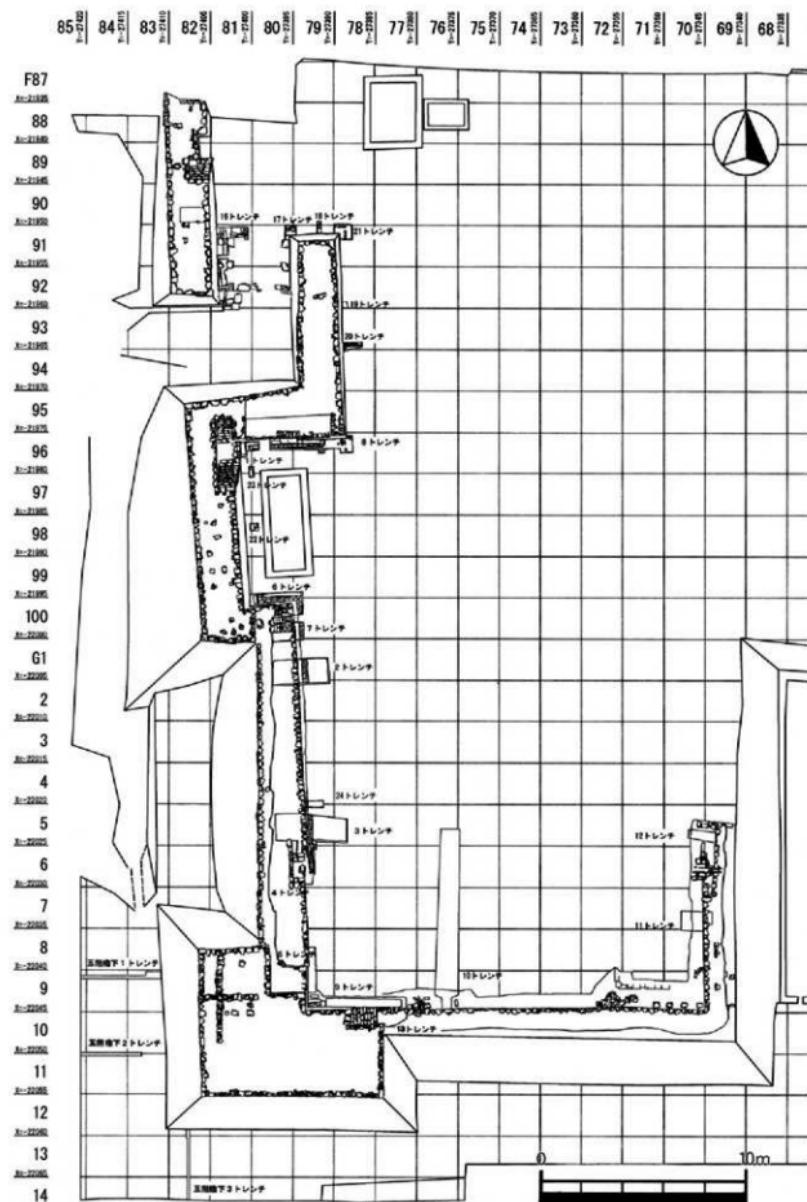
- 基本土層はI～IV層に大別する。調査区・トレンチごとの土層内容は、実測断面図を基に報告する。
- I層：現代の表土・擾乱層。砂礫・瓦片等を含む黒褐色～暗褐色土。槽台の上面や植栽の周辺以外は非常に固くしまる。
 - II層：近代～現代の堆積土。主として明治初期以降の堆積土。熊本鎮台および第六師団による整地や、城内の整備に伴う客土等も含むと思われる。砂礫・瓦片等を大量に含む黒褐色～暗褐色土で、非常に固くしまる。III層に類似している。
 - III層：近世～近代の堆積土。主として幕末～明治初期の堆積土。明瞭な細分ができなかった部分が多い。混入物・土質はII層に類似している。
 - IV層：近世の堆積土。近世の整地土および遺物包含層。主に灰白色・明黃褐色・暗褐色・黒褐色等の色調を呈する粘質土または砂質土、凝灰岩質の二次堆積土等からなる。縄文時代・古代・中世の遺物や近世瓦片、漆喰片を含む場合もある。
- 飯田丸の曲輪内では、明瞭な自然堆積層を確認できなかった。

第54図 調査グリッド配置図（1／10,000）





第55図 調査区・グリッド配置図 (1 / 800)



第56図 遺構配置図 (1 / 600)

第4章 調査の成果

1. 遺構（第56～76図）

飯田丸曲輪内の建物の変遷については第2章で詳しく述べている。「御城内御絵図」によれば、曲輪の西面には総延長125mの「百間櫓」と「西櫓御門」が設けられ、南西隅には「五階御櫓」、曲輪の南面と東面には塀を挟みながら「隅御櫓」、「平櫓」、「三階御櫓」、「元塩櫓」が並び、曲輪内の平場には「飯田屋敷御台所」と「鉄炮蔵」が建っていた。これらの建造物は、古写真資料の検証等から明治10年（1877）の西南戦争の際に解体されたと考えられており¹⁾、現存するのは上部櫓が外された「西櫓御門」の門部分のみであった。

調査前の現況では、百間櫓台の南側約2分の1と曲輪の南・東辺石垣の内側の石垣が失われており、斜面の状態であった。石垣は、櫓群の解体と同じ時期に撤去されたものと考えているが、調査では詳細な時期を示す出土遺物は得られていない。五階櫓台の形状はほぼ原形を留めていたが、明治22（1889）年7月28日夜半に起きた金峰山地震によって南面の石垣が大きく崩れており、その状態を撮影した古写真が残っている。調査前の石垣観察では、櫓台の西面にも積み直しの痕跡が認められた。

（1）五階御櫓跡（第57～60図）

五階櫓台は曲輪の外周より南・西側に張り出しており、平面形は概観でL字形を呈する。櫓台の規模は天端南面で長さ約22m、西面では約18mで、面積は約300m²である。石垣天端の標高は36.7m前後で、曲輪内の平場側の地表面より3.8m高い。曲輪南面の石垣は五階櫓台より2.3m低く、百間櫓台は同じく1.3m低い。櫓台東面には、東側の石垣へ下る幅約2m（6尺5寸）の石階段がみられる。石階段は、櫓台の東面より約3m西へ入った部分の天端石を含めて9段検出され、1段につき幅40cm～1mの安山岩が2～3石並んでいた。踏面は約40cm、蹴上は約30cmである。

櫓台の南西部では、表土の下位で大量の瓦片と裏込め石、礎石・墓石様の石材、割石片等を含む暗褐色土の落ち込みが確認された。この落ち込みは当初、櫓の解体後に掘削された不定形の土坑状遺構と想定していたが、遺構外と考えていた裏込め中にも、落ち込みの埋土に類似する土や瓦片がまとまって混入する部分があることなどから、遺構の形状や性格を確定できずにいた。また、櫓台の南東部では裏込めが石垣の天端よりも高く残っていたが、礎石等の痕跡は確認されず、南西部と同様に裏込め中に瓦片や土の混入が目立った。

櫓跡の礎石が残存していたのは櫓台の北西部のみで、約80m²の範囲である。表土の下位で、櫓台の西辺から約2m東側の位置に北～南方向に連なる礎石列、北辺から約5m南側に東～西方向の礎石列が検出され、この礎石列と一定の間隔をもつて点在する単独の礎石が数石みられた。礎石列は、石垣と同じ安山岩を主体とした上下二段の石積みで、下段の列は櫓台の中心に向かって徐々に傾斜していた。上段の石は、石垣の天端と沈んだ礎石列の高さを調整したものと思われ、下段の石が低い部分では厚く、櫓台の端部に近いほど自然礫や割石等の形や大きさが不揃いで薄い石が目立った。上段には側面に矢羽根の刻印をもつ石材が1石認められた。検出された礎石列は、櫓台との位置関係が「明和の絵図」にみられる間仕切り位置と一致していたため、櫓の土台遺構が部分的に残存しているものと判断した。櫓台や礎石等の実測によって得られた遺構配置が「御城内御絵図」の平面とほぼ合致したため、基準柱間寸法は6尺5寸と推測できた。裏込めの上面は固くしまる褐色粘質土で厚く覆われていたが、表面は礎石列等の天端よりやや低い位置で均されており、意図的に整地を行ったものと考えている。褐色粘質土の下位では北～南方向の礎石列の続きが検出されたが、褐色粘質土・礎石列共に前述した不定形の落ち込みの埋土の下で途切れていった。礎石列が途切れる付近では、礎石・墓石様の安山岩がまとめて出土しており、裏込めの入り方にも

特徴が認められたため、改めて裏込め全体の精査を行ったところ、残存する礎石列の南端と櫓台東側の石階段の南西隅付近を結んだ線を境に、北側と南側では礎石の色調や形状等が異なっていることを確認した。この裏込め石の検出状況と櫓台南部の裏込め全体に土や瓦片等の混入が目立つこと、金峰山地震による被害状況等を併せた結果、土坑状遺構と想定した落ち込みは部分的なものでなく、地震によって崩れた櫓台南面の石垣を修復した痕跡の一部であると判断した。整地土と考えている褐色粘質土からは、少量の瓦片と19世紀後半の陶器片、エンフィールド銃弾等が出土しており、櫓の解体から地震によって石垣が崩落するまでの間に客土が行われたものと考えている（写真図版P296下段・P297上段参照）。

発掘調査後の石垣解体工事によって、五階御櫓台には古い石垣が埋没しており、その隅部に張り出し部分を継ぎ足してつくられていたことを確認している。

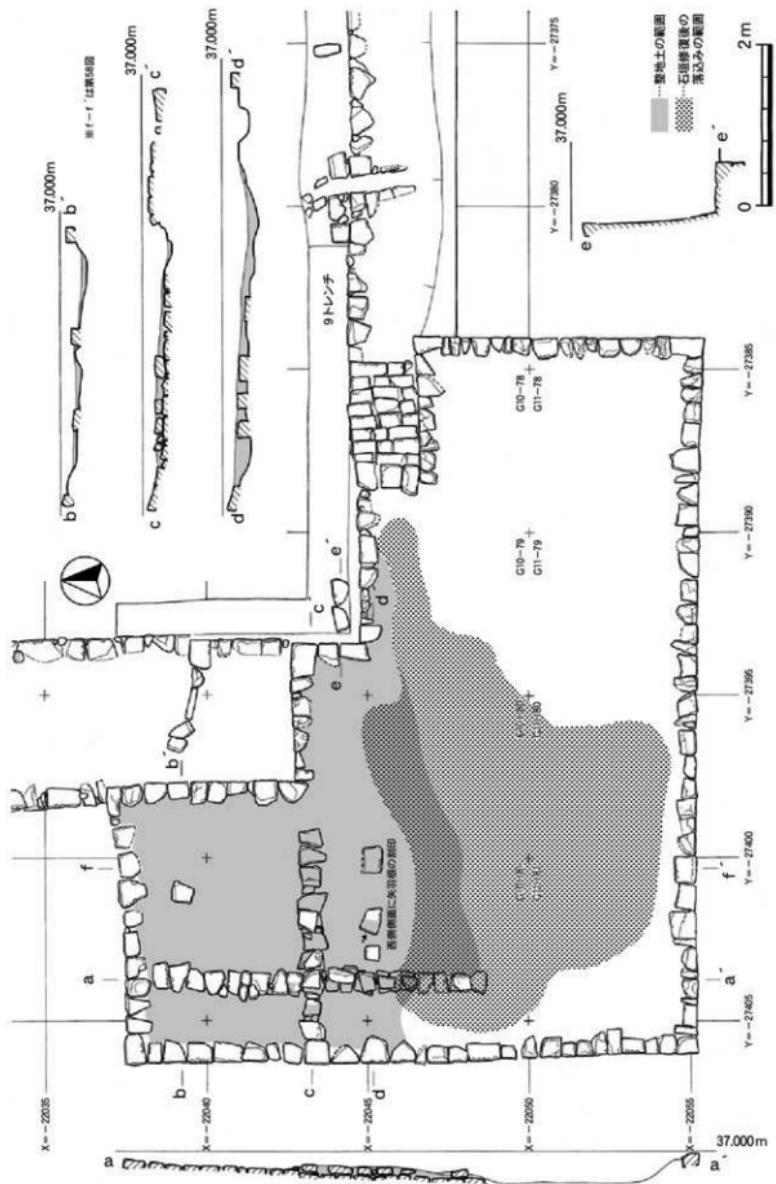
櫓台の周辺では、北東の入り口附近に9トレンチ、東の石壘へ下る石階段裾に13トレンチを設けた。9トレンチでは、櫓台の天端より4.3m下の部分に小規模な石積みが検出された。石材は櫓台の築石と同じ安山岩で、露出する石材は幅60～70cm、奥行40～50cm、高さは40～50cmである。櫓台の北面石垣を背にして東西に2石、上下2段積まれており、全体の高さは約1mである。石積みの北・東面および櫓台石垣との間には間詰石が入り、尻側が下がる石の上面には面側との高さを調整したと思われる薄い割石もみられた。ケヤキの大木の根があったため土層の堆積状況を詳細に確認できていないが、石積みの上面より15cmほど下がった部分を近世の旧地表面と考えている。石積み上面と周囲の旧地表面上には櫓台の裏込めと同じ栗石がみられた。検出状況からみて、この場所に意図的に築かれた石積みと思われるが、性格は不明である。13トレンチを設定した場所には、五階御櫓の石階段下から曲輪東面の石壘側に斜めに延びる石垣が築かれていた。裏込めの崩落を防ぐための石垣と思われる。石壘の内面石垣は、石階段の最下段より低い部分まで撤去されており、トレンチ内では石壘の天端より最大で約2m下がっていた。

発掘調査終了後、五階御櫓の復元作業のため、櫓台周辺に仮設の素屋根を架けることになり、基礎工事の際に掘削が行われる櫓台下の小段上面で事前の確認調査を行った。小段西面から南西出隅付近までの石垣天端は標高が22.1～22.4mで、五階櫓台より約15m下がっている。「御城内御絵図」によれば、南面の石垣天端寄りに梁間3間で桁行22間と23間の要人御櫓2棟が建っており、櫓の北側は通路となっていた。小段西面に1・2トレンチ、南面に3トレンチを設定した。

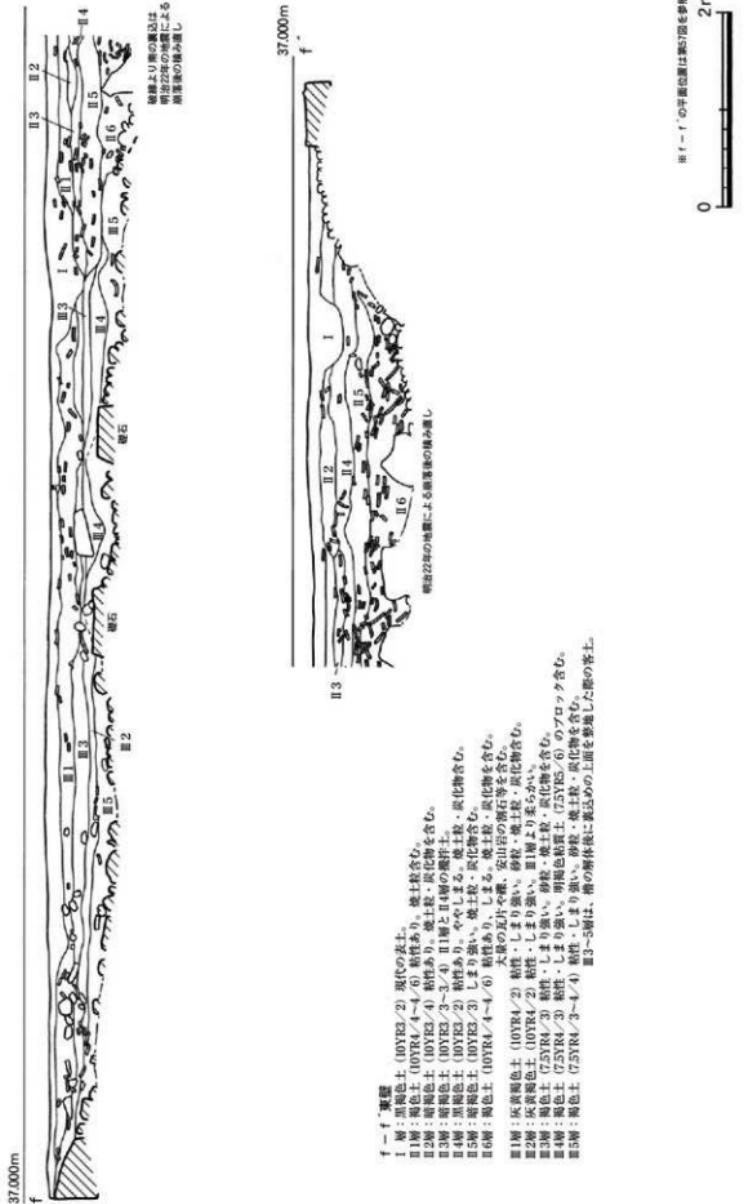
1トレンチでは、五階櫓台裾の現地表面が小段外周の石垣天端より1m高く、厚さ10cmの表土の下位には大量の瓦片を含む2次堆積土（黒褐色～暗褐色土）が約80cmの厚さで堆積していた。小段の裏込めは、石垣天端の外端から5.6m内側の部分までが安山岩の割栗石を主体とし、そこから五階櫓台裾までは直径1mm大の黒色砂を含む暗褐色土で整地されていた。この暗褐色土は、五階櫓台裾では厚さ約10cmで、下位には前述の黒色砂を主体とする砂質土が約80cmの厚さで堆積し、その下に栗石層が検出された。

2トレンチは、石垣天端の外端から東側へ6.8mの地点まで掘り下げを行った。表土と2次堆積土の厚さはトレンチ東端で約1m。裏込めは第1トレンチと同じ割栗石を主体とし、小段外周の石垣天端より約30cm下がっていた。

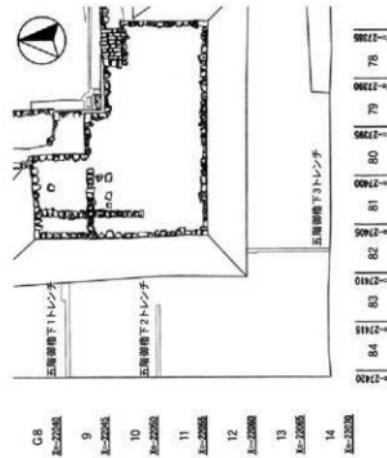
3トレンチは要人御櫓跡に設定した。五階櫓台裾の現地表面は小段外周の石垣天端より約40cm高く、表土とその下位の黒褐色土中には、瓦片のほか割栗石と漆喰片が多く含まれていた。近世の地表面は現地表面下50cmの部分で確認され、小段の石垣外端部から約7mの地点で、櫓に伴うと思われる雨落ち溝が検出された。溝は凝灰岩製で、側石の幅10cm、内法で幅約40cm、深さ約10cmである。近世の地表面である暗褐色土は、石垣外端から約6mの部分まで直径2～10cmの栗石を多量に含んでいたが、ここより雨落ち溝までの間は栗石の混入が認められず、非常に硬くしまっていた。硬化した部分は通路として利用された痕跡と思われる。五階櫓台裾では、暗褐色土の下に1トレンチと同じく厚さ80cmの黒色砂を主体とする層があり、その下位は割栗石による裏込めとなっていた。



第57図 遺構実測図1 五階街傍（1／150）



第58図 造構実測図2 五階御船断面 (1 / 50)

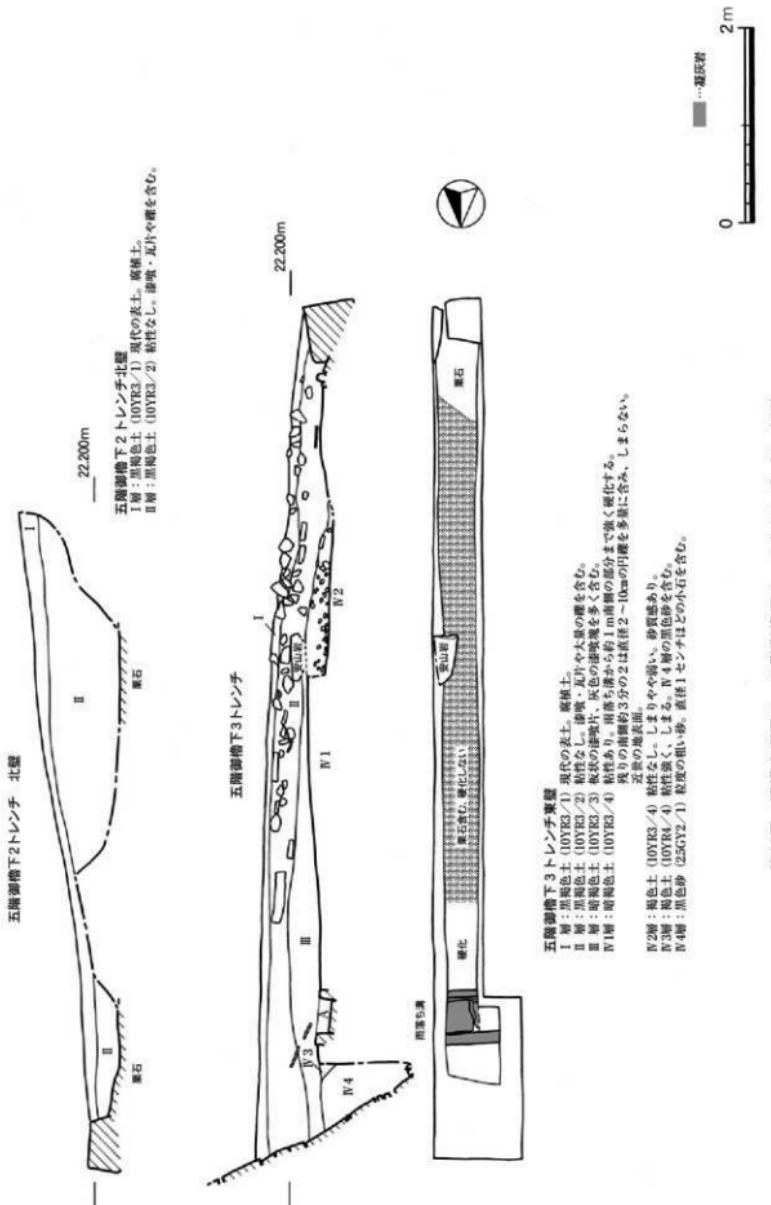


五種類以下トランche 難盤

- I: 黒鰐色土 (I0YR3-2) 現代の表土、礫層土、
II: 亂斑鰐色土 (I0YR3-2) 粘性土とし、上・下片を含む。
- II: 黑鰐色土 (I0YR3-2) II層より色調明るい、E片は少ない。
III: 黑鰐色土 (I0YR3-2) 粘性土なし、灰化するところとする。上・中、灰化物を含む。
- IV: 黑鰐色土 (I0YR3-2) 黄褐色の色調を含む。近世の表土層。
- V: 黑鰐色土 (I0YR4) 程度強く、しるし下部の黒色の土を含む。
- VI: 黑鰐色土 (I0YR4) 程度弱い、セメント化の跡を含む。
- VII: 黑鰐色土 (I0YR4) 程度弱い、下部の黒色の土を含む。



第59図 遺構実測図 3 五階御櫓下1トレシチ(1/50)



第60図 造構実測図4 五階御槽下2・3トレンチ (1 / 50)

(2) 百間御櫓跡（第61～71図）

五階御櫓から北へ延びる長大な続櫓で、棟違いの4棟を総称して「百間御櫓」という。便宜上、南から北へ順に「第1～4棟」の仮称を付け、棟ごとに報告を行う（第55図）。

a. 第1棟（第61～66図）

五階御櫓の付櫓を含む南北棟と、その北端から第2棟側へ延びる桁行1間の部分を併せて第1棟とする。外面石垣の天端部分での長さは36.5mで、北端から西へ1.5m延びて第2棟の櫓台に続く。天端の標高は五階櫓台際で35.4m、北端で約36mである。「御城内御絵図」から想定される第1棟の規模は、南北棟部分で桁行23間、梁間3間、西へ折れた部分が桁行1間、梁間2間である。内面石垣が失われた部分を中心に2～7トレンチを設定し、石垣の残存状況等の確認を行った。

櫓に直交するように設定した2・3・6・7トレンチでは、現地表面下20～60cmの深さに石垣の下部が残存しており、同じく現地表面より50～80cm下の部分（標高32.4～32.8m）で近代以降の擾乱を受けている土層（第63～65図、IV1層）が確認された。

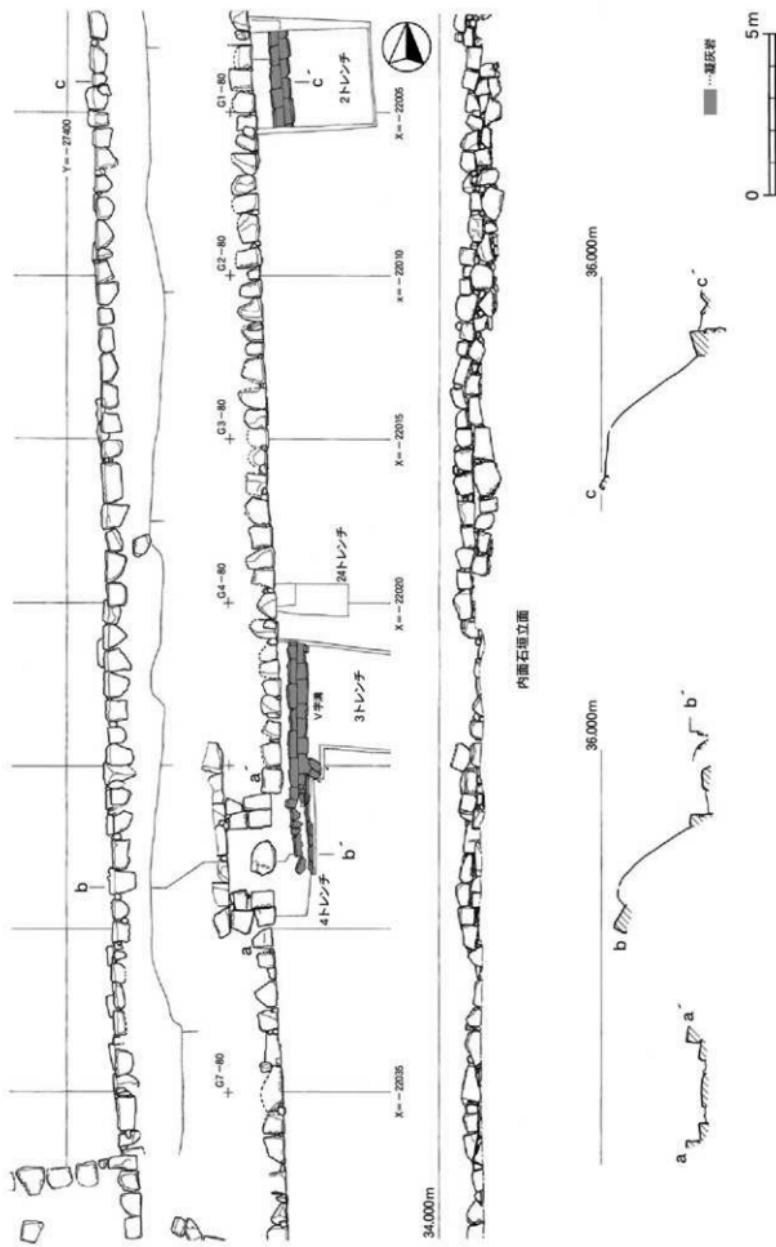
残存石垣の東側では、IV1層より上位で凝灰岩をV字形の溝状に組み合わせた石組造構（以下V字溝とする）が検出されている。V字溝は厚さ約10cm、短辺約40cm、長辺が20～80cmの板石状に加工した凝灰岩を組み合わせたもので、石材の長辺側面の角同士を突き合わせて組んだ場合と、片側の石材を斜めに寄せた上にもう一方の側面を重ね合わせた場合がある。寸法は内法で上端幅が50～60cm、深さ10～20cmで、形状からみて排水用の溝として使用され、南側へ導水していたものと推定される。内面石垣が残存していた6トレンチの入隅部分では、溝の中心と石垣天端との間隔が東面で2.2m、北面では1.3m離れているため、百間御櫓の雨落ち溝とは考えにくく、各トレンチの土層の堆積状況から、内面石垣が外された後に構築されたものと推測している。石材の石質や形状は、城内で一般的にみられる断面箱形の雨落ち溝の部材に類似するものがあり、近世遺構からの転用材を使用した可能性が高い。

6・7トレンチ間に幅約2m、奥行2.6mの東～西方向の石階段があり、7段の階段が残存する。1段につき幅40cm～1mの安山岩が2～3石並んでおり、踏面は約40cm、蹴上は約30cmである。この石階段は内面石垣が失われた後の斜面に築かれたもので、北東の出隅部分に「御城内御絵図」と同じ北～南方向の石階段が残存していた。東西幅は約2mで、5段に亘り幅40cm～1mの石材が部分的に残っていたが、原位置を保っているのは下から3段分で、踏面は20～30cm、蹴上は30～40cmである。現地表面から約60cm下の部分（標高32.8m）で近代の堆積（IV1層）が確認されているため、検出した最下段は使用時にも埋没した状態だったと考えている。「御城内御絵図」では第2棟との境界付近にも階段様の表現が2カ所みられるが、現状では第1棟の折れ口部分にのみ段差があり、西側の石垣が約1m高くなっていた。

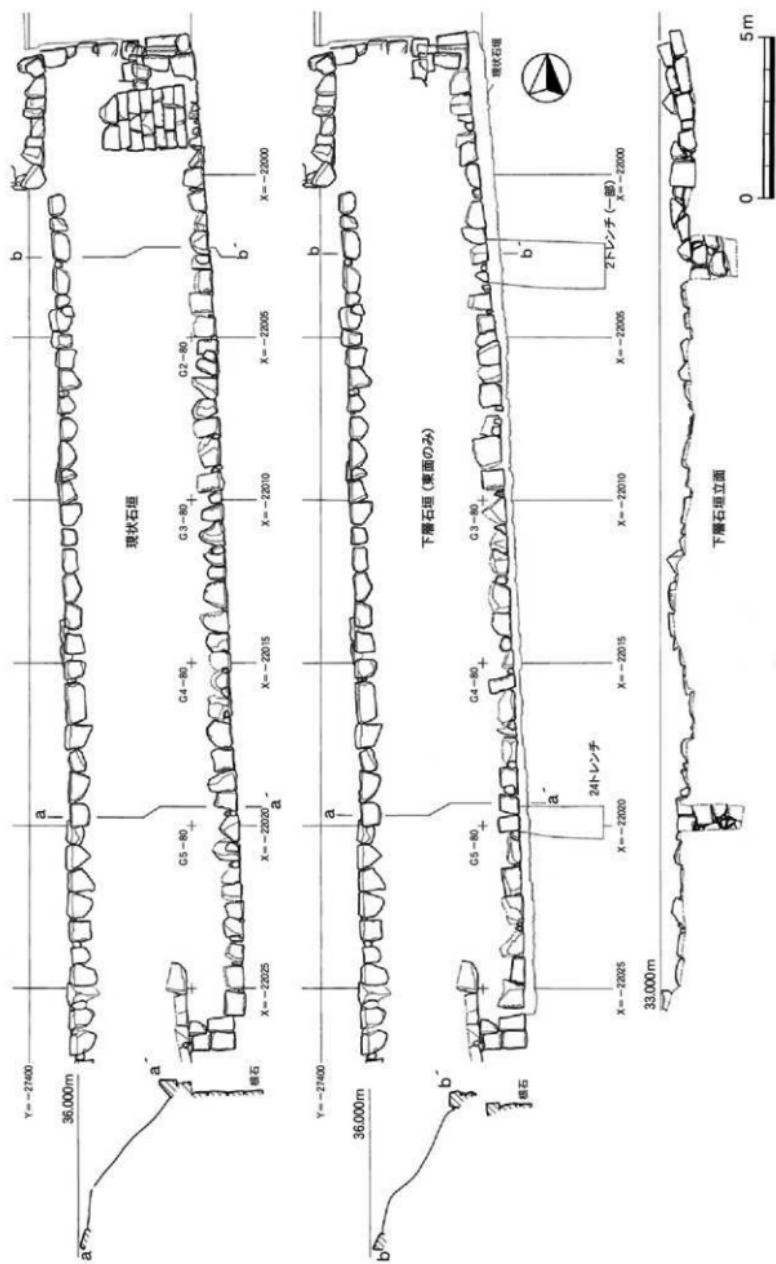
4トレンチは「御城内御絵図」にある合坂部分を確認するために設定した。下から2段分の石階段と奥壁の石垣が残存しており、平場部分の南北幅は約2m、東西の奥行が1.4mである。石階段は、1段に幅40～70cmの安山岩が2石並んでおり、踏面は約50cm、蹴上は最下段で約20cm、2段目で約40cmである。平場には裏込めと同じ栗石が敷かれており、その中央東寄りの位置に長辺約1m、短辺約80cmの安山岩がほぼ水平に座った状態で検出された。「御城内御絵図」では合坂部分にも柱位置の表現があり、安山岩は櫓の東面地覆材を支える礎石と推測される。上面には3個の矢穴が穿たれたままであった。

4トレンチでもV字溝が検出されている。トレンチの南端では石材が箱形に組まれた部分があり、そこから南東側へ分岐していた。

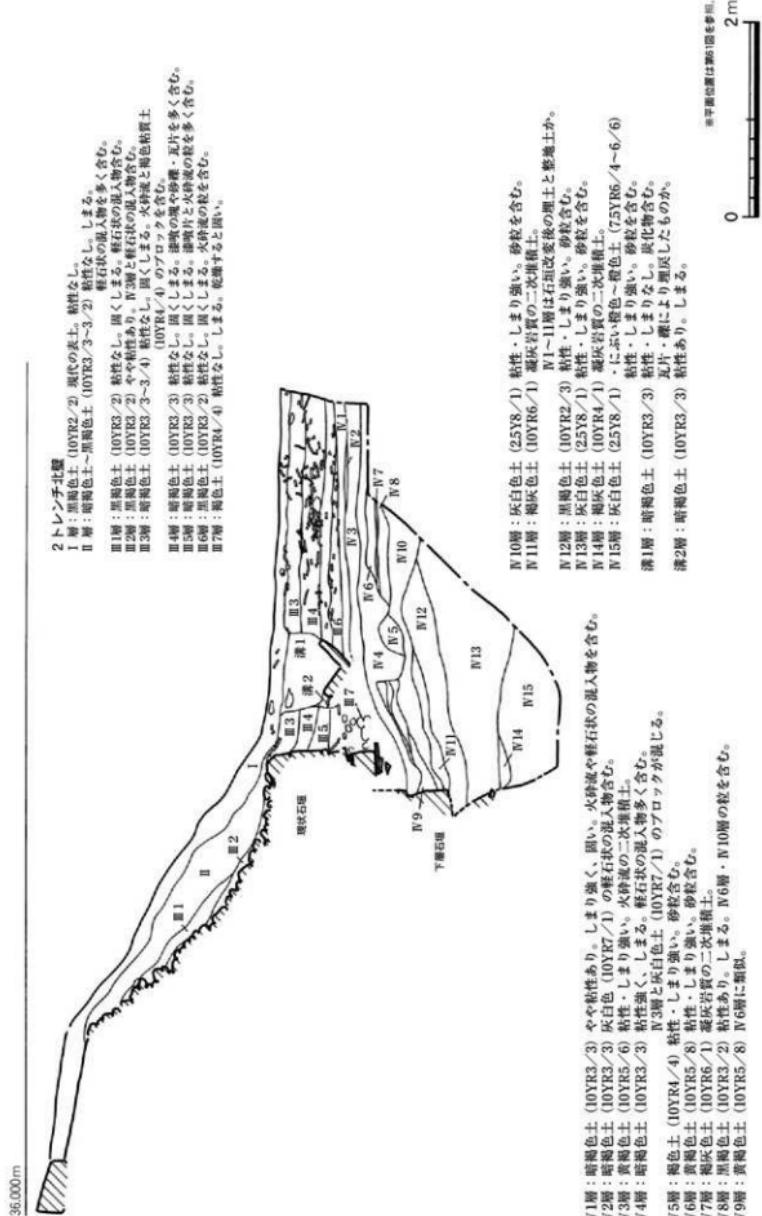
解体修理工事の際に第1棟の内面石垣全体を検出したところ、4トレンチの合坂から北側と南側では石垣の通りが合わなかったため、2トレンチ内にサブトレンチ、3トレンチの北側に24トレンチを設定し、合坂以北では残存石垣の下位に別の石垣が存在することを確認した。下位の石垣は上位のものより西側を通り、北に向かって徐々に櫓台の内側へ入っていくため、「御城内御絵図」にみられる北～南方向の石階



第61図 遺構実測図 5 百間御塔第1棟 (1 / 150)

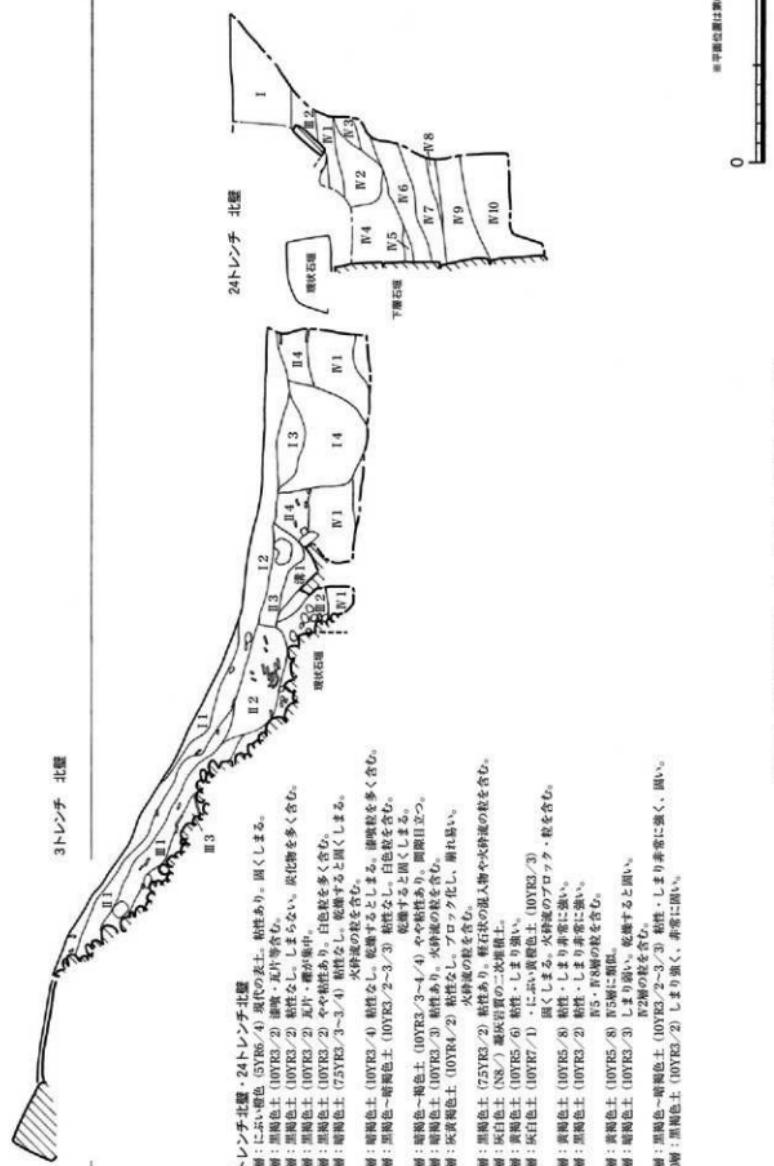


第62図 遺構実測図 6 百間御塔第1棟部分 (1 / 150)

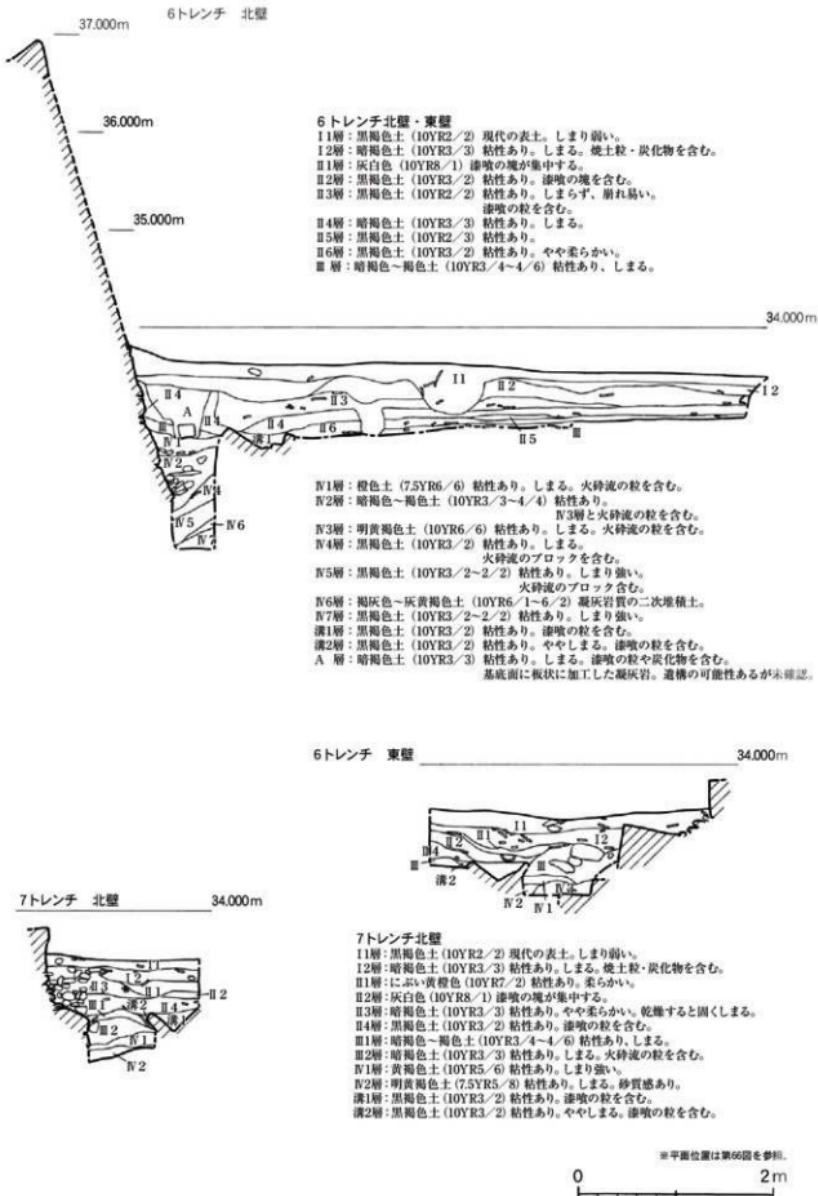


第63図 造構実測図 7 2 レンチ断面 (1 / 50)

35,000m



第64図 透構実測図 8 3・24トレンチ断面 (1 / 50)



第65図 遺構実測図9 6・7トレンチ断面 (1/50)

段の幅は1.5mとなった。「御城内御絵図」でも第1棟の北端は幅が狭くなつており、下位の石垣の状態を記録した可能性がある。調査では、拡幅の時期を示す遺物は得られなかつた。

第1棟の南端には5トレンチを設定した。五階櫓の付櫓部分に残つてゐる石垣は北・東面共に長さ約3mで、天端は平場から1.7m高く、五階櫓台より約1.5m低い。天端には延石状に細長く加工した安山岩なども使用されていた。百間櫓台の内面石垣が撤去された後の斜面上に載つており、五階櫓台際に残る内面石垣と裏込めの崩落を防ぐために新しく築かれたものと考えている。「御城内御絵図」では五階御櫓側へ上る階段が描かれているが、痕跡は認められなかつた。

b. 第2棟（第66・67・70図）

第1棟より西側へ張り出す南北棟と、その北端から東へ折れる東西棟を第2棟とする。南北棟の規模は天端部分で長さ29m、幅約5mである。天端の標高は外面石垣で37.2～37.5m、内面石垣ではそれより20cm前後下がる。「御城内御絵図」によれば桁行14間、梁間3間の櫓跡である。

櫓台の上面では、南端部分を中心にして天端や裏込めに亂れが認められたが、礎石が数石残存しており、石垣天端の平面配置等から推測される柱間寸法は約2mと推測される。内面石垣の北端には合坂があり、天端を含めて北側に10段、南側に11段の石階段を有する。階段の東西幅は上端で約2m、下端は北側が1.5m、南側は2.6mで、1段につき幅40cm～1.1mの安山岩が2～4石並ぶ。いずれも踏面は20～40cm、蹴上は40cmを主体とするが、北側は階段全体の奥行が約50cm短く、南側より傾斜がきつい。最下段は栗石の敷き詰められた平場と同じ高さに座つており、後述する1トレンチで平場からの下り口となる石階段が検出された。石階段は平場を含めて上下2段あり、1段ごとに幅20～70cmの安山岩が3、4石並ぶ。下段の踏面は約40cm、蹴上は約30cmで、下段の表面から約30cm下で近世の地表面（第67図、IV I層）を確認している。東西棟の規模は、天端部分の計測で合坂際から櫓台東端までの長さが約14m、南北の幅は同じく合坂際で5m、東端では6mである。北面石垣の天端の標高は37.3m前後で、東端の入隅には櫓台の下部を抜ける幅2.3mの向理御門が現存する。「御城内御絵図」によれば、櫓の規模は合坂際より東側で桁行7間、梁間3間で、平面形は矩形を呈していない。南面の向理御門より上位の石垣は、両端に幅1.5m分を残して失われており、立面形は四形を呈していた。裏込めの露出部分は両側面に奥行2.5mの新たな石垣が築かれており、その間は栗石が減らされた後を客土が覆い、斜面となっていた。「御城内御絵図」では、東の出隅近くに櫓台に切り込む形の石階段が描かれていたが、痕跡は確認できなかつた。

第2棟の周辺には1・8・22・23トレンチを設定した。東西棟の南面石垣沿いに設定した8トレンチでは、表土の下位でV字溝と東西方向に並ぶ石敷造構が検出された。V字溝には幅20cm、厚さ10cmの延石状に加工された凝灰岩が使用されており、内法で上端の幅が20cm、深さ10cmである。底の部分には漆喰様の白色の目地材が使用されており、第1棟側のトレンチで検出されたものとは異なつてゐる。溝は、南から櫓台の東側出隅近くに突き当たつて東へ折れ、出隅から北は櫓台に沿つて走る。第3棟横の20トレンチで再び東へ折れており、曲輪の東側へ導水していたようである。石敷造構は、V字溝際から西側へ延びており、長さ30～90cm、幅約30cm、厚さ5～8cmの板状の凝灰岩が7～8枚、約4mの長さで並んでいた。表土直下の検出で、掘り込みは確認されておらず、造構の性格は不明である。

8トレンチの西側と合坂横に設定した1トレンチでは、断面形が箱形を呈する凝灰岩製の溝が検出された。側石の幅は約10cm、寸法は内法で幅約30cm、深さ約10cmで、1トレンチでは折れ口が検出されており、基底面の傾斜から南側へ導水していたことがわかる。溝の中心から櫓台天端までの距離は東西棟との間が約90cm、南北棟との間は約2mと離れているが、櫓台と平行に走つており、櫓に伴う雨落ち構の可能性が高い。溝の東側は櫓台の東端から西へ約2.4mの地点で塞がれており、小口近くでは南北に細長く並ぶ長辺90cm、短辺50cmの安山岩と、長辺70cm、短辺30cmの凝灰岩が検出された。二つの石は西側の端を揃え、上面は溝の側石とほぼ同じ高さで据えられていた。位置的には「御城内御絵図」に描かれている石階段と

の関連を想定させるが、性格は不明である。1トレンチの雨落ち溝の延長線上に22・23トレンチを設けたが、いずれも3・4トレンチ等で検出されたものと一連のV字溝が検出された。

向埋御門の南口では、雨落ち溝に沿って東西長2.2m、奥行60cmの安山岩が検出されている。石の表面は概ね平滑であるが未調整で、矢穴が穿たれたままになっており、わずかに溝側へ傾けて据えられていた。石の北側に小規模なトレンチを設定して掘り下げたところ、地表面から約30cm、南口の安山岩より約20cm低い部分で別の水平に座った安山岩が検出されたため、門の北口に向かって下る階段状の配石を想定している。門内は両側壁に沿って計16本の石柱が並んでおり、南口では左右の石柱に36cm角、長さ約2.4mの安山岩を渡し、その上に長さ約90cm、幅約40cm、厚さ約20cmの安山岩を並べて天井部としている。「御城内御絵図」では、門内の柱配置は東西1間、南北2間で描かれており、現況の石柱は後世に追加されたものである。北面石垣にも門の上部を中心とする積み直しの痕跡が認められることから、東西棟部分では向埋御門の補強に伴って石垣の改修が行われ、門にかかる荷重を減らすために凹形に整えられたものと推測している。南口右手の石柱は長さ2.1mで、土台石は南口の安山岩より約30cm低く座っており、石の上にはややしまる暗褐色土（第67図、Ⅲ層）が約10cmの厚さで堆積していた。Ⅲ層上面には2~3cmの厚さで炭化物と灰が堆積しており、ある時期の生活面と捉えられる。Ⅲ層中から時期を示すような遺物は出土していないが、樁台上の客土の出土遺物からみて解修の時期は近代以降と考えている。

c. 第3棟（第68~70図）

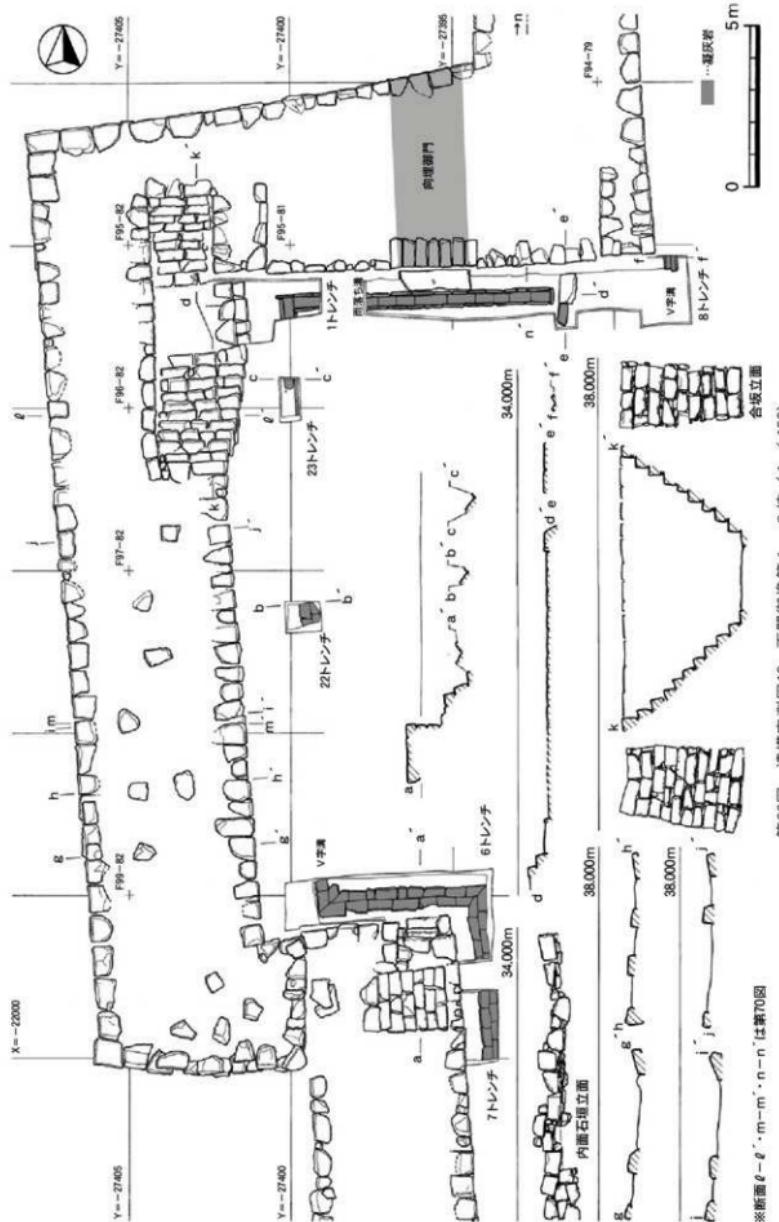
第2棟から続く南北棟と西櫓御門の上部樁を第3棟とする。南北棟と上部樁の東側が架かる樁台の規模は、天端部分の計測で南北長17.5m、東西幅約5mである。天端の標高は37.3~37.4mで、北側がやや高い。「御城内御絵図」では、南北棟部分に桁行9間、梁間2間の樁があり、二つの樁台を跨いで桁行10間、梁間3間の西櫓御門の上部樁が続いている。

上部樁の東側が載る部分では表土が薄く、裏込めが石垣天端とほぼ同じ高さで検出された。礎石はみられず、後世に栗石が追加された可能性がある。南北棟の部分では礎石の可能性のある安山岩が検出されたが、周辺の裏込めが乱れており、原位置を保ったものか判断できなかった。上部樁西側の樁台上面でも礎石は残存していないかった。

d. 第4棟（第68~71・76図）

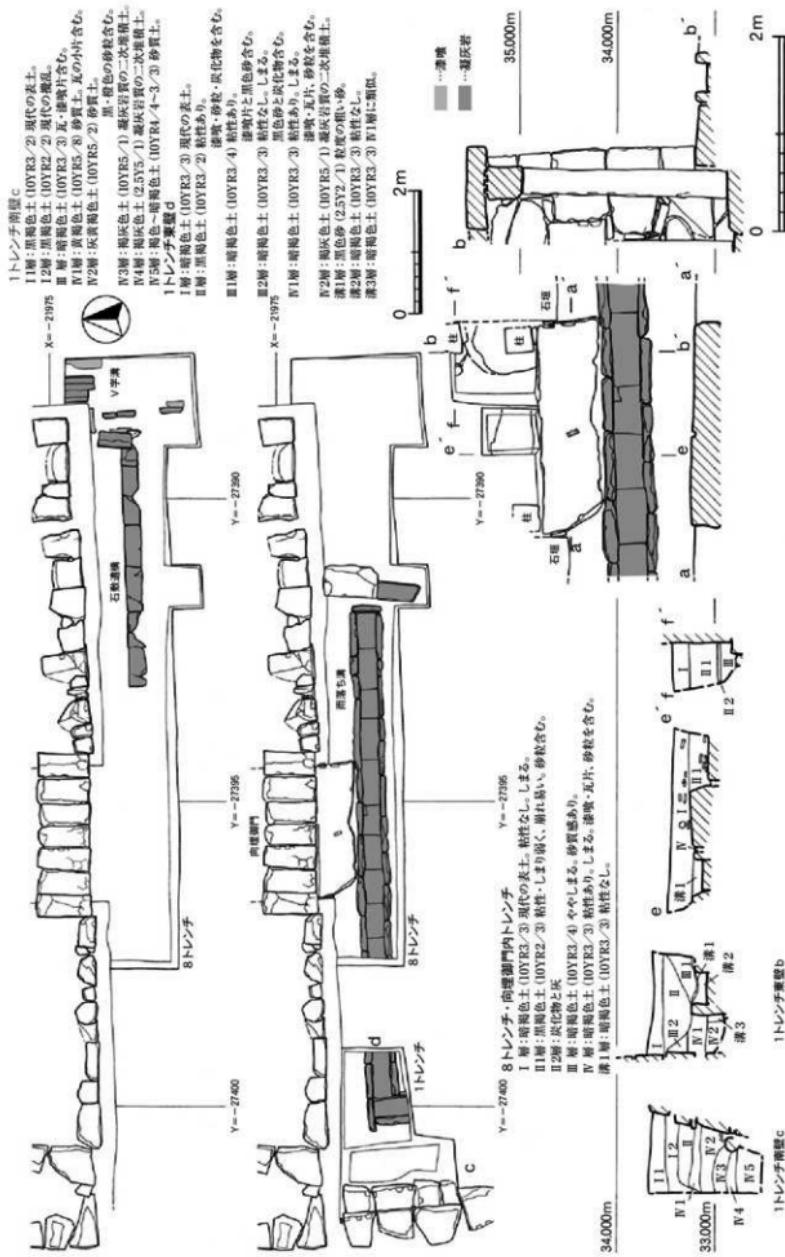
数寄屋丸直下の樁台において、西櫓御門の上部樁以北を第4棟とする。樁台全体の規模は天端上面で南北長23.5m、東西幅約5mで、そのうち第4棟に相当する部分の長さは16.5mである。天端の標高は37.6~37.8mで、北側がやや高くなっている。第4棟は、「御城内御絵図」によれば桁行9間、梁間3間の建物で、南側は西櫓御門の上部樁に続いている。樁台の中程から北側に、天端を含めて9段分の南へ上る石階段が残存していた。石階段の東西幅は、上端では2.3mで、天端より6段（2.2m）下がった位置に約1m四方の平場がつくれられているため、7段目以下は1.5mに狭まる。1段に幅40cm~1mの安山岩が2~4石並び、踏面は30~40cm、蹴上は20~40cmである。

樁台の北端では、約20cm角で、長さ60~80cmに加工された安山岩が数寄屋丸の石垣裾に沿って並んでおり、石垣との隙間はモルタル様の目地材で埋められていた。北西隅の天端では、安山岩の割石が数寄屋丸の石垣に寄せ掛けるように積み重ねられており、背後には安山岩の割栗石を主体とする裏込めが充てられていた。この安山岩の石積みは、樁台天端からの高さが北端で約2.6mに達し、西側は天端よりも20~30cm外側にせり出している。石積みが無い場合、樁台上面と曲輪外との比高差は他の部分より小さく（現状では2.5m）、数寄屋丸側の石垣もあるため、ここから曲輪内に侵入することは比較的容易と思われる。よって、樁の撤去後に外からの侵入を防ぐ目的で積まれたものと推定される。石積みの中には九曜紋を陽刻した鬼瓦様の石材がみられたが、今のところ、いつの時代に、どの場所で使われていたものかはわからぬ。石積み裏込めの割栗石が、樁台の北端に並ぶ安山岩と目地材の上に被っていたため、石積みの方が

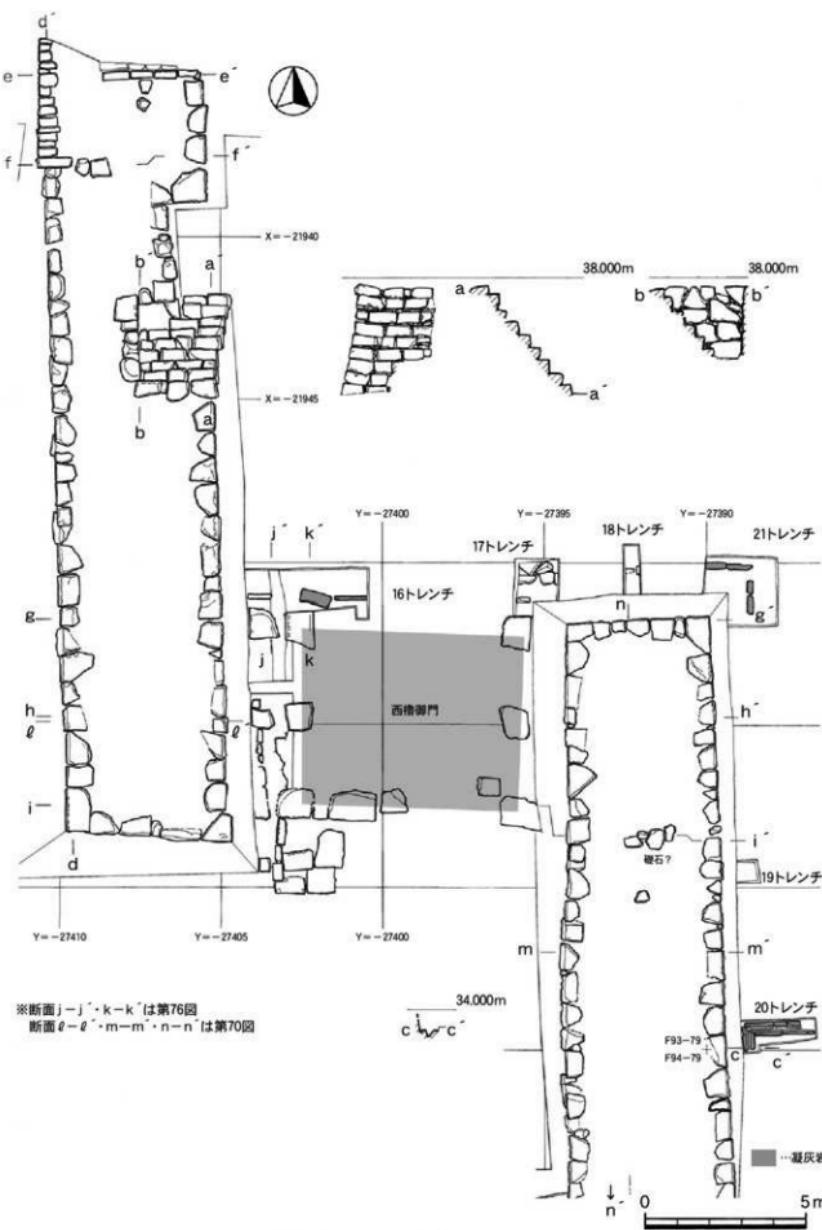


第66図 遺構実測図10 百間御檻第1・2棟 (1 / 150)

※断面a-a'・m-m'・n-n'は第70図



第67図 遺構実測図11 1・8トレンチ (1 / 80・1 / 50)



第68図 遺構実測図12 百間御檜第3・4棟 (1 / 150)

新しいと考えている。石積みの南端近くでは、櫓台の天端から1.5m内側に入った位置で櫓の礎石に相当すると思われる安山岩が1石検出された。

櫓台北端の12mの範囲には、表土の下位に焼土粒と炭化物の混入が目立つ2枚の遺物包含層（第71図、II1・II2層）が存在していた。色調等の違いから分層したが、II1・II2層共に用途不明の壺（以下、不明壺とする）の破片がまとまって出土しており、堆積の時期に大きな差はないと考えている。不明壺の破片は第3棟の表土中からも一定量出土したが、II1層の出土総重量は40kgを越えており、意図的にこの場所に廃棄された、あるいは置かれたものと推測している。包含層を取り除いた後の櫓台上面には、櫓の礎石や石垣天端とはほぼ同じ高さで座った安山岩の割石が点在していたが、位置関係に規則性は認められなかつた。

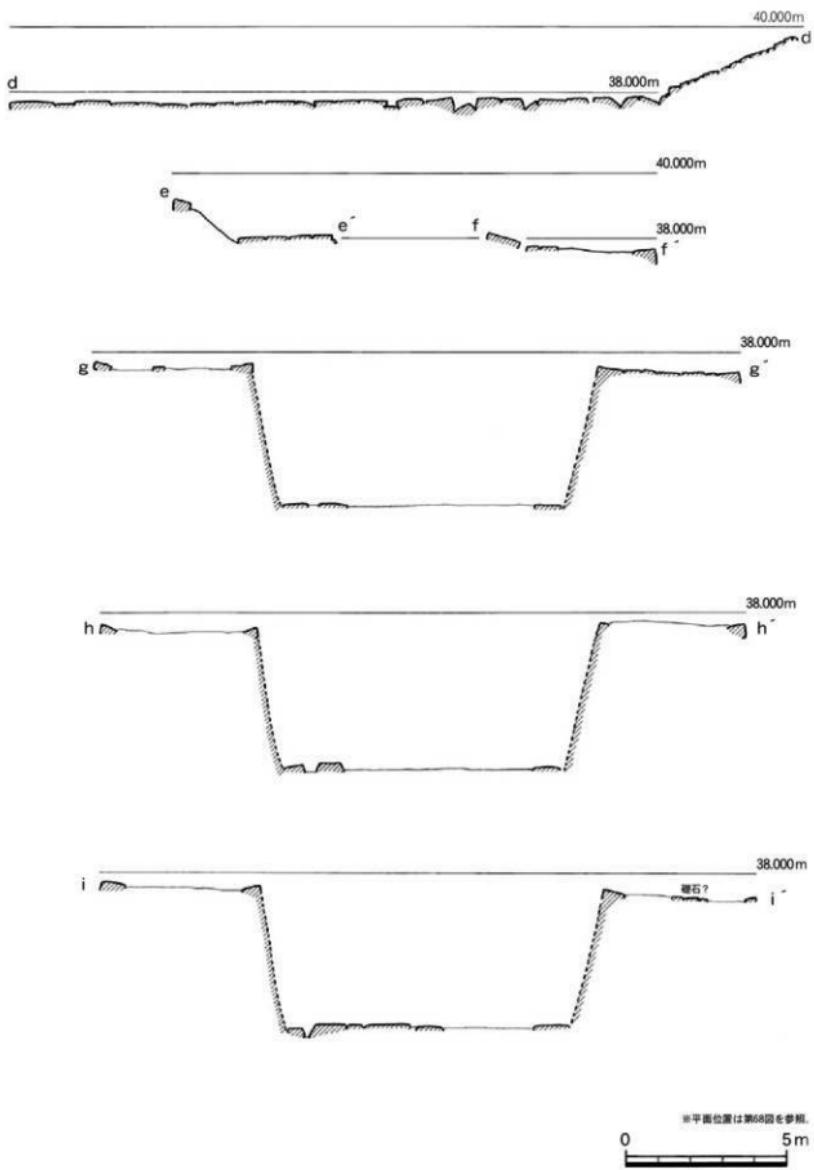
（3）西櫓御門跡（第68・69・76図）

西櫓御門は、下部の門構造に屋根を架けた状態で現状保存されていたため、礎石等について可能な範囲で平面図を作成し、周辺に16～18・21トレンチを設定した。「御城内御絵図」によれば、左右の櫓台をまたいで平行10間、梁間3間の上部櫓が渡っており、西側に潜戸が設けられている。鏡柱の通りで計測した左右石垣裾の間隔は8.8mで、柱間は大門で4.8m、潜戸は1.8mである。門の内側は、控柱と上部櫓を支える柱の列にそれぞれ3石ずつ計6石の礎石が並んでおり、梁間方向の柱間寸法は2.7mである。門の外側は、作業用車両の通用門として盛土保護され、斜面となっているが、遺構の露出する西端部分には奥行1.5mの平場と2段の石階段が認められる。潜戸と西側の櫓台の間には排水のための溝が切られており、礎石の間を埋めるように凝灰岩製の側石が並べられているが、石材が入れ替えられたと思われる部分や失われたままの部分がみられた。

門の北側に設定した16トレンチでは、上部櫓を支える柱の礎石から約40cm北側の位置で、東西方向に連なる幅10cm前後の凝灰岩の石列が検出された。北側のトレンチ外から延びている現代の瓦質管が、石列の一部を破壊して潜戸横の溝につながれており、その際に石列から抜き取られたと思われる長辺90cm、短辺40cmの板石状に加工された凝灰岩が出土している。17トレンチでも、16トレンチの石列の延長線上に出土状況の類似する遺構が検出されており、一連の遺構と思われる。また、門の東側櫓台裾に設定した18・21トレンチでは、石垣裾から50～70cm離れた位置を、石垣と平行に走る幅15～20cmの凝灰岩の石列が検出されている。21トレンチの石列は櫓台の出隅を回って南へ折れていたため、南側に19トレンチを設定したが、痕跡は認められなかった。18・21トレンチの石列は石材の規模や形状が不揃いであるが、16・17トレンチの石列と平行に走っており、天端の高さはほぼ同じである。トレンチ内では底石や明瞭な溝状の堆積などは確認されなかったが、2条の石列は西櫓御門脇の溝へ向かう排水溝の一部と推測している。16トレンチでは、II1層中から20点を超える未使用的エンフィールド銃弾が出土した。

（4）隅御櫓・堀跡（第72～76図）

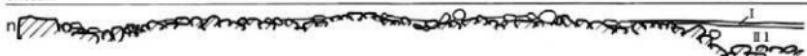
曲輪南辺の南面石垣は、天端部分の計測で長さ約43mである。調査前の立面観察では、明瞭な石垣改変の痕跡は認められなかったが、明治22年の地震の際には影響を受けた可能性がある。東面石垣は、南の出隅から26.5mの地点より北側では、天端の高さが約1.5m下がっている。天端の高さが変わるものには北向きの石垣が築かれており、この部分が「御城内御絵図」にみられる平櫓の北端に相当する可能性もある。ただし、現況では地表面上に露出した部分は後世の積み直しである。天端の標高は、南面と東面の高い部分が34.5m前後、東面の低い部分が33m前後である。「御城内御絵図」によれば、曲輪南辺の石垣には2つの合坂と長さ11間の堀があり、南東出隅には梁間2間、矩折15間の隅御櫓が存在し、東辺の石垣には、南から順に隅御櫓の南北棟、長さ12間の堀と北へ下る石階段、曲輪の境に沿って矩折に延びる平櫓が並ん



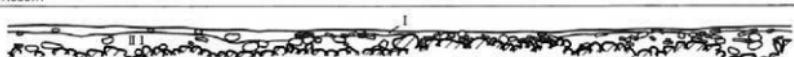
第69図 造構実測図13 百間御橋第3・4棟断面 (1 / 150)

百間御櫓第3棟n-n' 東壁

37.500m



37.500m



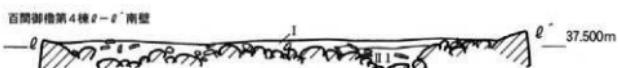
37.500m



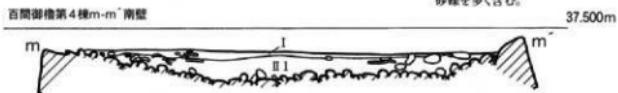
ø - ø' 南壁

I 層: 黒褐色土 (10YR3/1) 現代の表土。粘性なし。しまり弱い。

II1層: 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性なし。しまる。乾燥すると固くしまる。



37.500m



ø - ø' - m-m' 南壁

I 層: 黒褐色土 (10YR3/1) 現代の表土。粘性なし。しまり弱い。

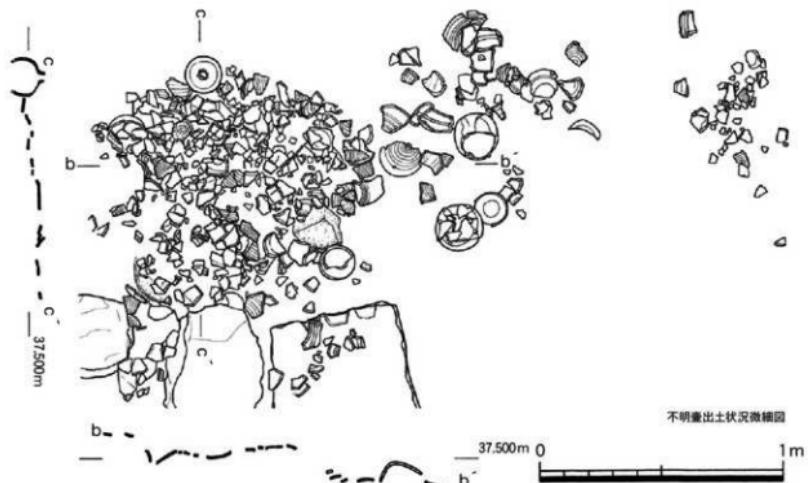
II層: 暗褐色～暗褐色土 (10YR4/4-3/4) 粘性・しまり強い。乾燥すると固くしまる。
火碎流粒・炭化物を含む。



※平面位置は第66・68図参照

0 2m

第70図 遺構実測図14 百間御櫓断面 (1 / 50)



第71図 遺構実測図15 第4棟不明壺出土状況 (1/50・1/20)

でいた。五階櫓台との比較から、両石垣の天端部分の幅は約3mと推測された。

発掘調査時には、曲輪南辺に直交する10トレンチ、東辺に直交して11・12トレンチを設定して石垣の残存状況を確認し、石垣の解体修理工事の際に残存していた石垣の検出作業と平面・立面図の作成を行った。

a. 南辺石垣（第72・73・75図）

合坂付近に10トレンチを設定した。曲輪平場の現地表面（標高33m前後）を約20cm掘り下げた部分に内面石垣の下部が残存しており、そこから約2m下、標高30.8mの部分で石垣の根石を検出した。残存部分では、石垣の上位よりも根石の方がわずかに裏込め側へ入っており、根石の直下と前面には根固めの栗石がみられた。土層の堆積状況を確認するため、トレンチを北側へ拡張したところ、標高32.4m前後から下位では、火砕流堆積物等を含む粘質土が厚さ数cm～数十cm、幅1m～数mの単位で互層状に堆積する様子が認められた。土層の堆積状況から、南辺石垣の石垣普請と曲輪の造成は同時期に行われたものと推測される。根固め付近から続く造成土の堆積は、石垣の内面石垣より約18m北側で立ち上がる様子が認められたが、トレンチ内では造成土と純粋な地山層の差を認識することができず、自然堆積層の確認には至らなかった。

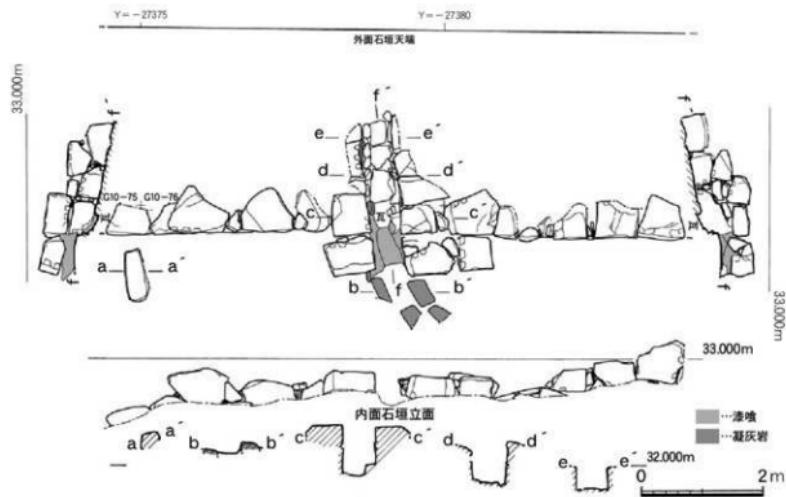
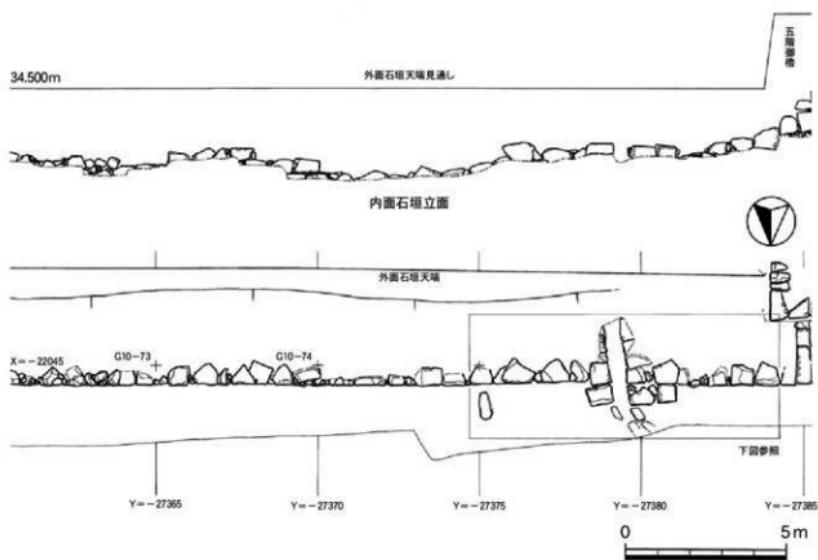
解体修理工事では、五階櫓台東面の石垣から約5m離れた地点で、内面石垣の裾に設けられた幅50cmの開口部から裏込めの中へ続く暗渠が検出された。暗渠の両側面には基底面から60～80cmの高さで石垣が残存していたが、天井部は失われており、内部は栗石や瓦片を含む黒褐色土で完全に埋没していた。開口部手前の平場には築石と同じ安山岩が東側に1石、西側は横並びに2石置かれており、この安山岩と開口部の基底面から側面にかけて漆喰が塗られていた。裏込め内部に向かって基底面が大きく下がった部分では、下段の基底面に凹面を上にした状態で平瓦が敷かれ、それより奥は凝灰岩の割石と栗石が敷き詰められていた。実測した平面図と「明和の絵図」を比較すると、暗渠の位置は五階櫓台側の合坂の平場付近と推測されるため、開口部両脇の3石の安山岩は石階段の部材であった可能性もある。本来は石垣の外側に排水口が存在したはずであるが認められず、現状石垣は、五階櫓台と同じく明治22年の地震時に崩落し、積み直されたものと推測している。暗渠には、北北西方向から接続する凝灰岩製の側石の残欠がみられたが、残存状況が悪く、導水施設の形状は不明である。百間御櫓沿いで検出されたV字溝と向理御門前の雨落ち溝は、いずれも基底面が南に向かって傾斜していたため、このような暗渠へ導水していたものと考えている。

南東隅の隅御櫓跡では、石垣内面石垣の前面に4石の礎石が検出された。実測した数値では、礎石の中心から南面石垣の天端外端までの距離が平均4.5m、西端の礎石の中心から東面石垣の天端外端までは9.8mで、「御城内御絵図」にみられる東西棟の礎石に相当するものと思われる。礎石の西側では、石垣の築石と思われる安山岩の集石が検出された。

b. 東辺石垣（第73・74・76図）

東面は、天端の高さが変わる部分までを調査対象とした。11トレンチでは、曲輪平場の現地表面から約30cm掘り下げた部分に石垣の内面石垣が残存しており、そこから約2m下まで掘り下げたが、根石の深さを確認することはできなかった。石垣はほぼ直立しており、標高32m前後で近世以前の土層を確認した。12トレンチでは、同じく平場の現地表面から1.3m掘り下げた部分で、内面石垣の一部と思われる安山岩2石を検出していた。

東辺石垣内面の残存していた石垣は、隅御櫓跡の出隅より約17mの地点から北側では二重になっており、内面石垣から1～18m東へ奥まった部分にも石垣が検出された。「御城内御絵図」からみて、東側の石垣は石階段の奥壁に相当すると推測され、石階段の最下段と思われる石材も検出されている。石垣の南側でも、内面石垣より1.5m東側の位置で、裏込め上に西へ面向て座る安山岩が検出されたが、この性格は不明である。



第72図 遺構実測図16 曲輪南辺 (1 / 150・1 / 80)

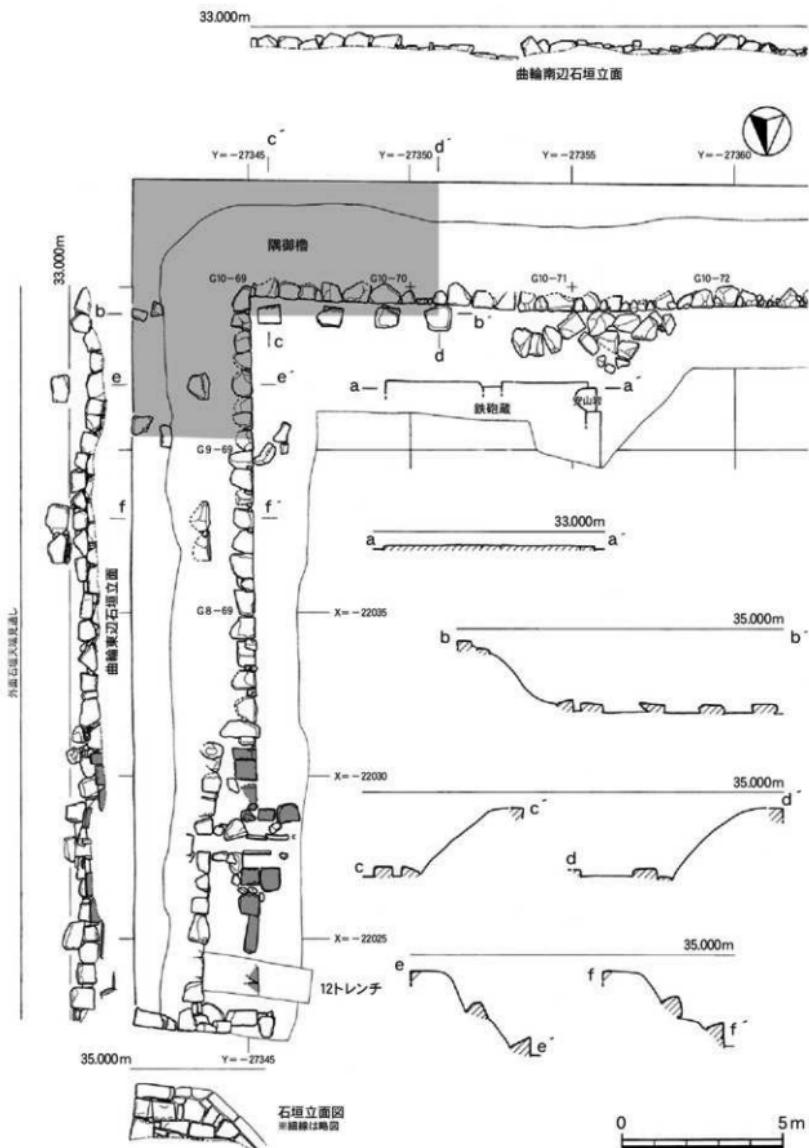
石階段の北側では、南面石墨と同じく裏込めの中へ続く暗渠が検出された。奥壁側に残る暗渠の開口部は、天井石に幅70cm、厚さ25cmの安山岩が使用されており、寸法は内法で幅50cm、高さが約60cmである。開口部の前面には、安山岩の割石と板状に加工された凝灰岩による側石が並んでいたが、検出範囲内に底石はみられなかった。基底面はややしまる暗褐色土で、側石状の安山岩から奥の約2mについては、基底面から側面にかけて漆喰が塗られていた。暗渠は、石階段の奥壁より手前では有蓋だった可能性が高いが、痕跡はみつかっていない。暗渠につながる導水施設も確認できなかった。外面石垣には、調査区北端の東西方向の石垣周辺以外に大きな変更は無く、天端から約2m下の部分に暗渠の排出口が残存していた。この排出口の東側には、割石で埋められた別の排出口も存在し、より古い排水施設が存在したものと思われる。

(5) 鉄炮蔵跡（第73図）

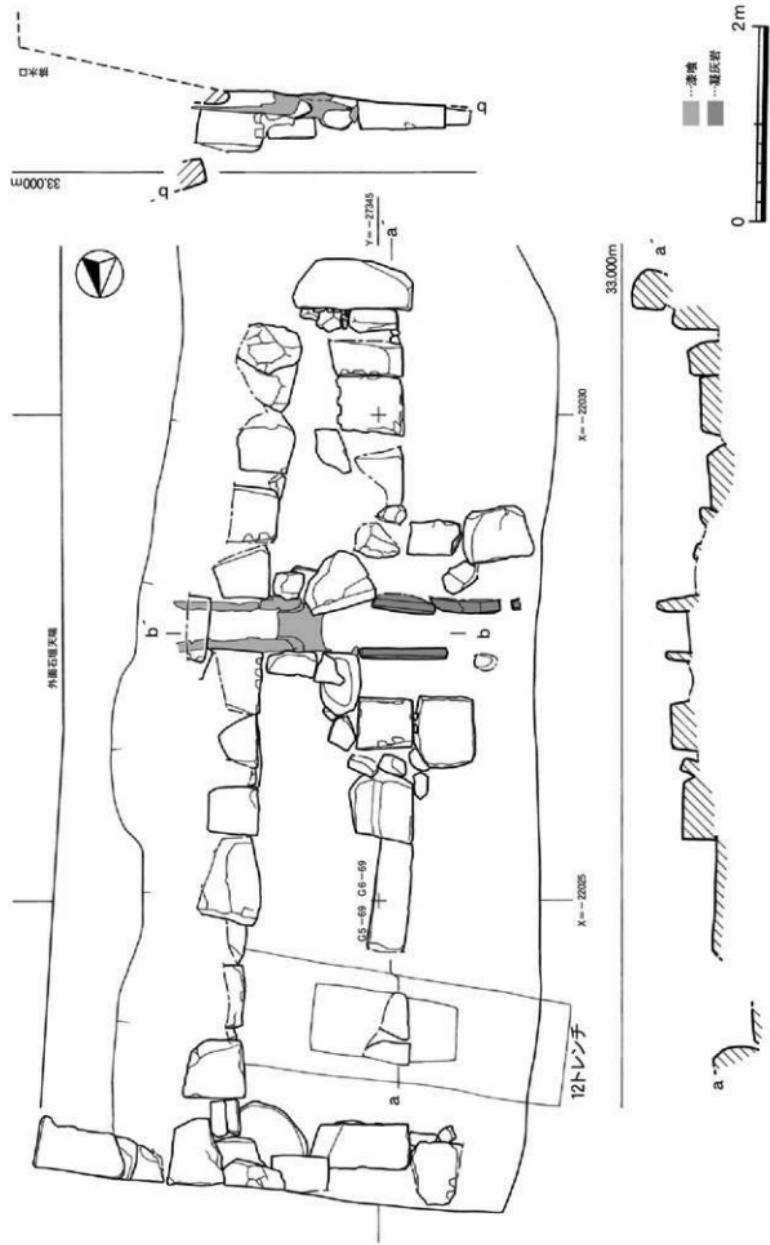
隅御櫓跡の北東側で、建物の基礎と思われる東西長6.5mの土台石の並びが検出された。出土地点から、「御城内御絵図」に記された鉄炮蔵の遺構と思われる。絵図によれば桁行6間、梁間3間の南北に長い建物で、北から1間の位置に階段の表現がみられる。検出したのは南端の土台部分で、天端の幅50cm、長さ約3mと2.6mの凝灰岩が東西方向に2石並んでおり、2石の間と南西隅には安山岩が据えられていた。土台の石材は隙間なく組み合わされており、南西隅では、安山岩の形に合わせて凝灰岩の端部が加工されていた。検出した範囲では上部構造を示すような痕跡は認められなかった。

〔註〕

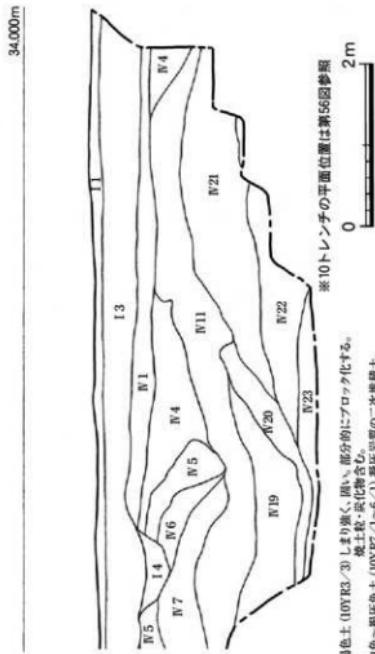
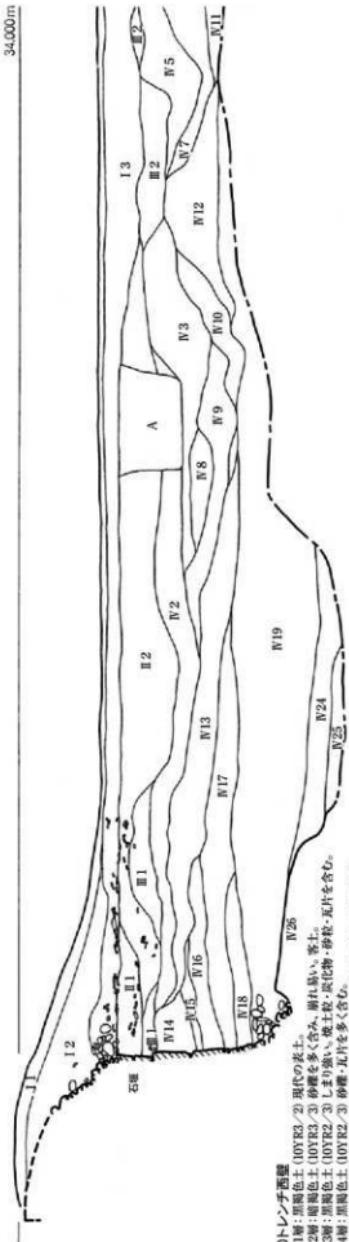
1) 富田紘一「古写真に探る 熊本城と城下町」肥後上代文化研究会 1993



第73図 遺構実測図17 曲輪南東部 (1 / 150)

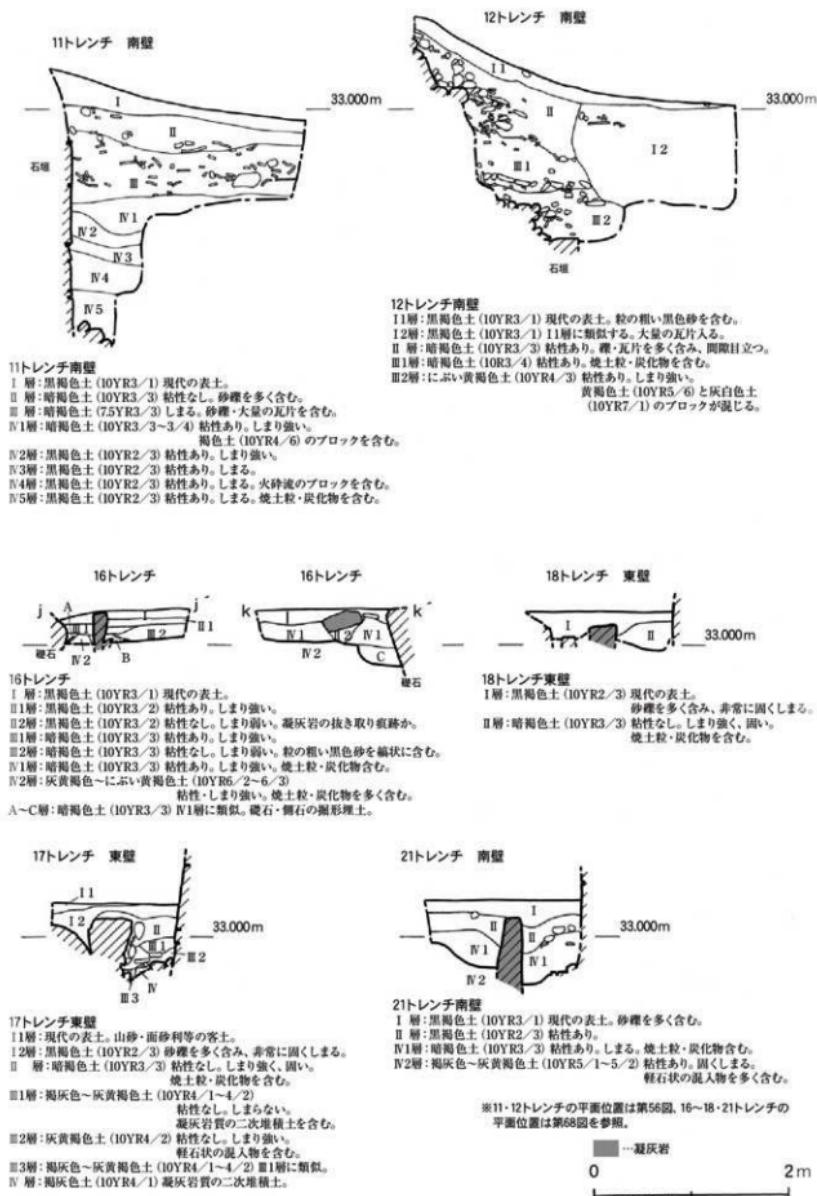


第74図 遺構実測図18 曲輪東辺暗渠(1 / 50)



※10トレンチの平面位置は第56図参照
W25層: 嘉陽色土 (10YR 3 / 3) しまり強。火柱・火柱化物を含む。
W26層: 灰白色土-鵝卵色土 (10YR 3 / 3) 灰白色土-鵝卵色土。
A 層: 嘉陽色土 (10YR 3 / 3) 大部分は瓦片と層。発達度5%。

第75図 通構実測図19 10トレンチ断面（1／60）



第76図 遺構実測図20 トレンチ断面 (1 / 50)

2. 遺物 1

出土遺物には、陶磁器・土器類、瓦、ガラス製品、金属製品、石製品、動物骨などがある。

遺物報告に先立ち、3点、お断りをしておく。1点目は、本報告書では石製品のうち石塔・石臼の報告は行わないことである。これらの石塔・石臼は、石垣の裏込めに使用されたもので、石垣解体修理工事の際に出土し、採集した破片・各部位片であるが、採集後の管理不備から整理作業着手が遅れ、報告書作成期限に掲載を間に合わせることができなかった。記してお詫びしたい。これらについては、今後、稿を改めて報告することとする。2点目は、本報告における金属製品の材質の記述についてである。金属製品の材質は、肉眼観察により同定が可能な主成分のみを記述する。理化学的分析を行なっていないため、また、表面の鋳化・腐蝕化もあって、多くの場合、それらの混合成分・比率の判断、それに伴う名称の細分はできなかった。例えば銅の場合、多様な合金がありそれぞれに名称が異なるが、一括して「銅」としている。3点目は、磁器色絵の写真撮影についてである。本報告では、近代に位置付けられる色絵磁器を掲載しているが、これらの多くは上絵が剥落しており、そのまま撮影したのでは文様が全く写らなかった。そこで、窮余の措置として、硬度の軽らかい鉛筆を塗って文様を浮き立たせることとした。資料の保存を考えれば望ましいことではないが、やむを得ず採った措置としてご理解いただきたい。

(1) 五階御櫓跡出土遺物

櫓台および周辺の9・13トレンチから出土した遺物である。陶磁器、金属製品、石製品がある。

a. 陶磁器・土器類

中世（第77図1、第3表）

1は備前焼擂鉢である。口縁部上面は平坦で、口縁部から体部にかけて明確な器厚の変化は認められない。外面体部はエビ押え後横ナデ、内面は横ナデ後擂目を施す。備前焼中世2期に位置付けられる。備前焼の拡散期に先行する時期の資料と評価され、この時期の資料の出土は県内初例である。

近世（第77図2～17、第3表）

2～8は碗をまとめた。2は漳州窯系の青花碗である。内面にのみ白化粧が確認され、内底には福字文が認められる。3・4は肥前産磁器碗で、3は青磁、4は染付である。3は外面にヘラ描き細線による花文を、4は内外面に菊花文・氷烈文（地文）、高台見込みに角福鉢を施している。5～8はヘラ描き肥前系端反碗である。8の外文文様は、間隔が粗く太線で描かれた雜なタッチのよろけ編文とみられる。

9～15は皿類をまとめた。9～11は肥前産陶器皿である。9は内底に胎土目（肥前Ⅰ期）、10・11は内底に砂目（肥前Ⅱ期）が認められる。12は網田焼の磁器染付皿である。以下の特徴が網田焼（窯製品）と共通することから認定を行なっている。具須は暗緑色の発色で、内面には二重格子文を描いている。内底の蛇の目釉剥ぎは粗く、釉が搔き取りきれずに筋状に残っており、さらに、重ね焼きした上部の個体の高台の圧痕が認められる。高台下位（内外）と内底において釉の爛れが顕著であり、爛れた部分には透明な短い針状の付着物が認められる。13は、英國ドーソン窯産の硬質陶器小皿である。内面は型押しにより花弁状を呈し、施文は酸化クロム（緑色）を用いた銅版転写による。高台見込みには2種の施文方法の裏印が認められる。すなわち、刻印（インプレスドマーク）は円形のデザインで、不明瞭ではあるが「DAWSON 3」が陰刻されている。銅版転写（プリントドマーク）は「GEM/D & Co」（Gは刻印の産みにより転写されず）で、「GEM」は文様パターンを、「D & Co」は会社名を表すものである。ドーソン窯硬質陶器の出土は県内初例である。14は黒象嵌を施す陶器皿である。外国産の可能性が高いとみられる。15は土師器壺である。外底に静止ヘラケズリを施す調整技法などから近世の所産と考えられる。

16は景德鎮窯系の芙蓉手小鉢である。17は備前焼の擂鉢で、直方向（放射状）に加えて斜方向の擂目が認められることから備前焼近世1期に位置付けられる。



第77図 五階御櫓跡出土陶磁器・土器類実測図1 (1/3)

近代以降（第78図18～28、第3表）

18～20は碗をまとめた。18は磁器飯碗である。褐釉を施し、発色は釉が厚い部分では紫色を帯びている。高台見込みに戦時統制下の生産者別標示記号（通称「統制番号」「岐945」）の陽刻が認められる。19・20は磁器釉下彩碗である。19は、外面文様が宝と花で、主文は暗い緑青色の吹き墨（エアスプレー）により描いている。他、小桙下げ紐の縁の点と花弁中心の点を赤褐色顔料により盛り上げている。20は、外面筒部に鉄釉による変形の縞状文を描き、外面腰部・高台内には鉄漿を塗付している。

21は磁器染付皿である。酸化コバルトによる施文で、内底には蛇の目釉剥ぎ、アルミナ塗布が認められる。22は釉下彩磁器小皿である。内面は呉須による施文で、高台見込みは酸化クロムを用いたゴム版絵付けによる統制番号「岐」（他は欠）が認められる。

23～28は磁器小壺である。23～27は染付で、いずれも胎土はガラス質で光沢を帯びる。23・24は器形・法量・文様とも共通しており、セット関係が評価される。26は酸化コバルトを用いたゴム版絵付けにより3単位の梅花文を施すもので、前記と同じ理由から、百間御槽跡出土の第89図42とのセット関係が評価される。28は釉下彩小壺で、内面文様は吹き墨による。

b. 金属製品

調度具（第79図29、第4表）

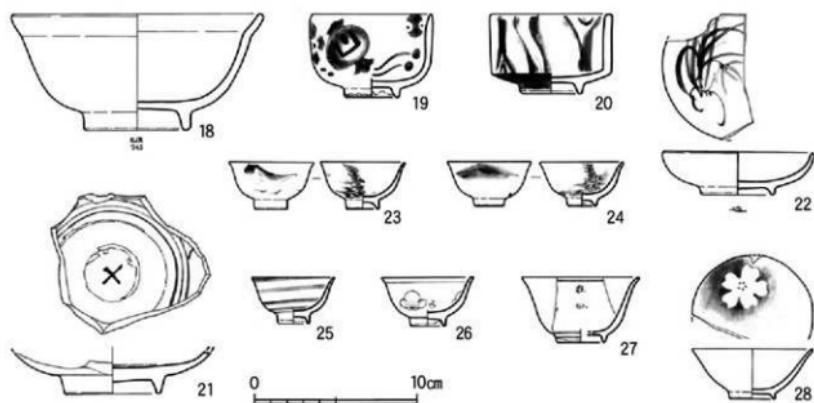
29は銅製の飾り金具である。連続する帯状の花灯形の頂部に宝相華様の飾りが付く形状である。表は平滑で光沢が認められ、緩やかに膨らんでいる（裏は四面状）。仏具の飾りであろうか。

武器・軍用品（第79図30～第81図79、第4表）

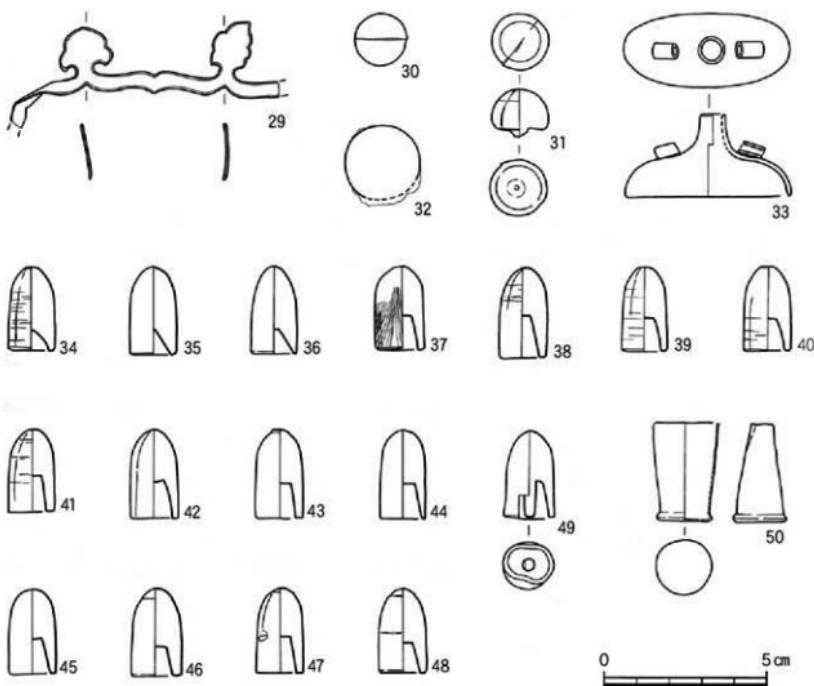
30・31は鉛製の火縄銃弾あるいはゲペール銃弾である。31は、薺のような形状を呈する。不整品か、あるいは、薺形のノーズ（先端部）と短い筒形のベース（基部）の2つの部品を組み合せる形態の銃弾のノーズ部かとみられる。W.Reid McKee・M.E.Mason.jr.の著作¹⁾によれば、サウスカロライナ州において少量ながら確認されたという31の類似品があり、これはアメリカ独立戦争で使用されたものである。なお、30・31とともに未使用弾である。通常、銃弾は、鉛製については、銃腔を通る際の急激な摩擦により铸バリは消失し、着弾のショックにより大きく変形する。鉄製については破損する。30・31には铸バリが確認され、铸造時の形状がほぼ保たれている。なお、次項においても、使用の未・既の判断は同様に行なう。32は鉄製の火縄銃弾である。33は銅製の口薬入れで、扁壺形の本体の口縁～肩部を覆う部品とみられる。肩部2箇所に紐掛け用の小管を溶接している。

34～48はエンフィールド銃弾である。いずれも圓溝が無い形態であり、弾底凹部の断面形状により2種に大別される。すなわち、ブリチエット弾といわれる断面三角形（円錐形）のものと断面台形（円柱形）のものの2種である。前者をa類、後者b類とする²⁾。なお、この分類は次項以降の報告でも用いる。34～36はa類、37～48はb類である。46～48は先端付近に圓状の小さな段が巡る。この特徴は、16トレンチにおいて出土した多量のエンフィールド銃弾に共通するものである（〔3〕百間御槽出土遺物、a. 金属製品、武器・軍用品）参照）。34・38～42・47においては、縦方向の铸バリや铸造時の横皺が認められる。49は、弾底凹部内に突起があるミニエー銃弾である。オランダの古い型式で、アメリカ南北戦争使用銃弾にも類例数種があり、日本では幕末に使用され、鳥羽・伏見の戦場跡における出土例があるという³⁾。また、幕府陸軍の教育係を務めた大島圭介の著作「手銃論」（慶應3年-1687）に類似品の図面が掲載されているという⁴⁾。なお、34～49のうち、使用弾は37のみである。これら椎の実形の鉛弾の場合、銃腔を通る際の摩擦により施条痕が残り、一方、铸バリは消失し、また、着弾のショックにより大きく変形する。37は、縦方向の施条痕が認められ（斜め方向の条線は後世の傷）、また先端が潰れている。

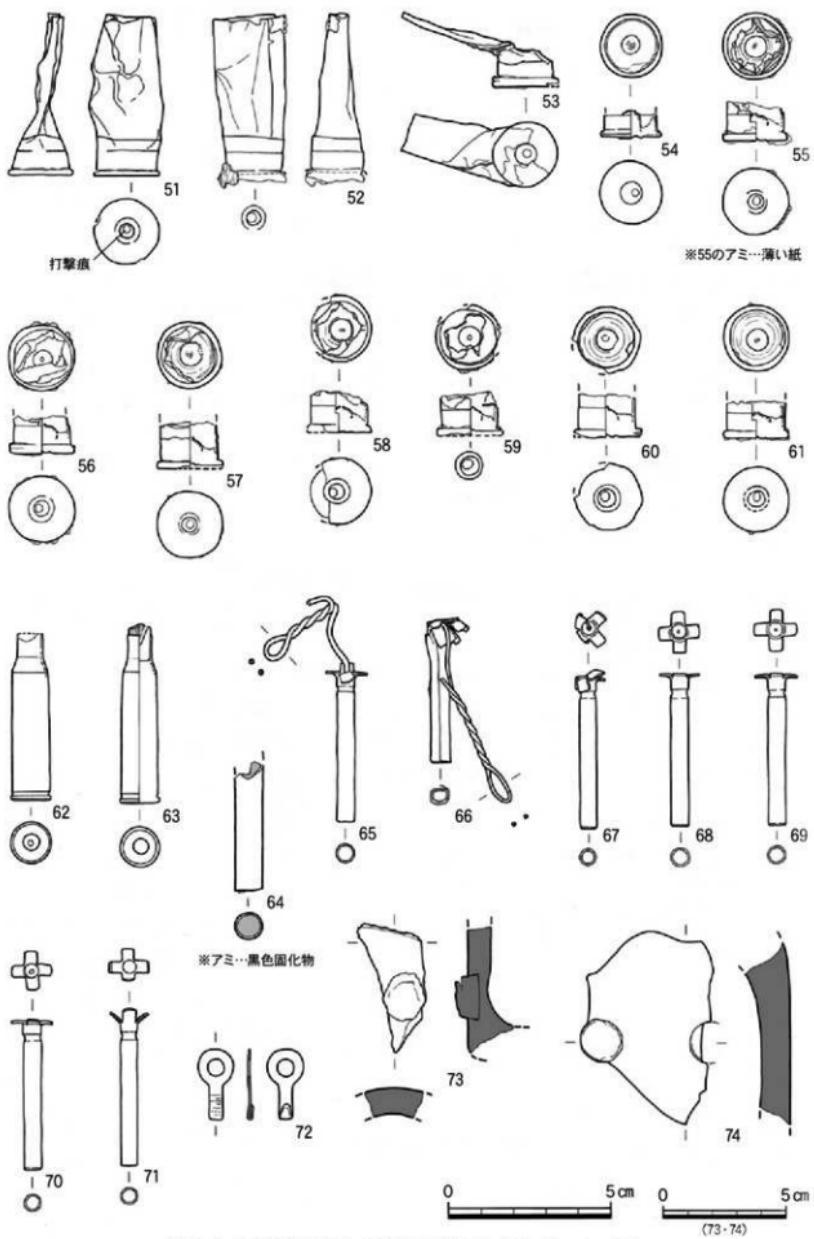
50はスペンサー銃薬莢である。リムファイヤー式の銅製薬莢であり、発射時、底板の辺縁を打撃して発火するものであるが、本資料の辺縁に打撃痕は認められない。また、スペンサー銃薬莢の特徴として、成



第78図 五階御櫓跡出土陶磁器・土器類実測図2 (1／3)



第79図 五階御櫓跡出土金属製品実測図1 (2／3)



第80図 五階御橋跡出土金属製品実測図2 (2/3・1/2)

形時の縫ぎ目は認められない。51～61はスナイドル銃薬莢である。スナイドル銃薬莢は、銅板を巻いてケース（薬筒部）を成形するため、ケースが残存するものについては、いずれも縫方向の縫ぎ目が認められる。54は、ディスク（底板）とカップともに銅製、一体形で、カップに縫ぎ目は認められない。加えて内部の雷管が直筒形を呈することから、マークI型式の可能性が高い。雷管の周辺には黄ばんだ色調の綿状の充填物が確認できる。54以外はディスクが鉄製、他の部位が銅製でカップが二重（インナーコイル・アウターカップ）になる型式である。ケースが欠失する55～61については内部の雷管とその周辺の蠟で固めた巻紙が認められる。52にはケース外面に紙の痕跡が付着しており、54～56・60・61についてはケースとカップあるいはインナーコイルの間に挟まれた薄い紙が認められる。なお、51～61のいずれも既使用品である。スナイドル銃薬莢はセンターファイサー式で、発射時、外底中央の雷管を打撃することによって発火するものであり、51～61のいずれも打撃痕が明瞭である（51については図中に指示）。62・63は30式銃あるいは38式銃の銅製薬莢である。30式銃は明治30年に制式銃として採用され、38式銃は30式を改良し明治38年に制式銃として採用されたものであり、日露戦争の主力兵器となった小銃である。62は外底中央の雷管に打撃痕（発射痕）が認められる。63は口径部に木栓が装着され、薬莢内部には火薬が充填している。訓練の際の空砲に使用するものとみられる。

64は管形の不明銅製品である。管の内部には火薬とみられる黒色の固体化物が詰まっている。シャーブス銃のベレット形の雷管を束ねるためのディスクブライマーであろうか。

65～71は銅製の摩擦管である。火砲の発射の際、火門孔に差し込み、付属するワイヤーループ（環線）を勢い良く引き抜くことで発火する器具である。いずれもI字形摩擦管で、細い管の先端が花弁形（四つ股）に開き、その下部に括れを有する形態である⁵⁾。65～67はワイヤーループが残る未使用品であるが、67については根元で切断している。68～70は筒内にワイヤーループを固定するための木栓のみが残存しておらず、木栓中央には約1mm大のワイヤーループが抜けた穴が認められる。66は、素材となる銅板が薄くミルフィーユ状に剥がれており、これは銅板の成形時、複数回折り疊んで叩き延ばしたこと示している。72は杓子形銅製品である。用途は不明だが、摩擦管に関わるものと想定されるものである。73・74は四斤砲弾片、75は型式不明の大形ライフル砲弾片である。いずれも鉛製の茸翼（スタッド）が認められる。

76は銅製の刀の切羽である。

77・78は銅製のベルト金物である。軍衣に使用するベルトバックルの雌カンとみられる。79は銅製の鉗で、周縁に刻みを施している。同形態品が、西南戦争の陸軍関係戦没者を葬った八代市若宮官軍墓地の発掘調査において、墓坑内から出土している⁶⁾。

銭貨（第81図80～89、第4表）

80は洪武通宝である。やや薄い作りで鋳上がりも悪く、和銅錢の可能性が高い。正面は、文字の細かい箇所が潰れ、方孔の郭上辺が不明瞭である。背面も、上位に文字が存在することは確実ながら全体に鋳潰れ、明確に訛読することができない。背面の文字は拓本では表現できないが、さんずい偏が辛うじて確認でき、これを重視すれば、本資料は加治木錢であろう。81～84は寛永通宝で、81・82は古寛永、83・84は新寛永である。83は背面に「元」が認められ、これは寛保元年（1741）より大坂高津新地の錢座にて鋳造が開始されたものである。「元」の字はやや小さい。84は「永」の上の点が草書風になっている特徴はかの一致が、元禄13年（1700）、京都七条で鋳造されたものと共通する。なお、「寶」の下にはミミズ腫れ様の小さな鋳溜りが認められる。85は十銭錫貨である。昭和19年（1944）公布の臨時補助貨幣制の勅令により昭和19年（1944）のみ鋳造されたものである。腐蝕により不鮮明ながら、正面には菊・桐・瑞雲文と「十銭」、背面には「大日本・昭和十九年」が認められる。86は五銭白銅貨である。正面には菊・桐文と「五銭」、背面には八葉文と「大日本・大正十一年」が認められる。五銭白銅貨には大正6～9年（1917～1920）発行の大型と大正9年～昭和7年発行（1920～1932）の小型があり、本資料は小型である。

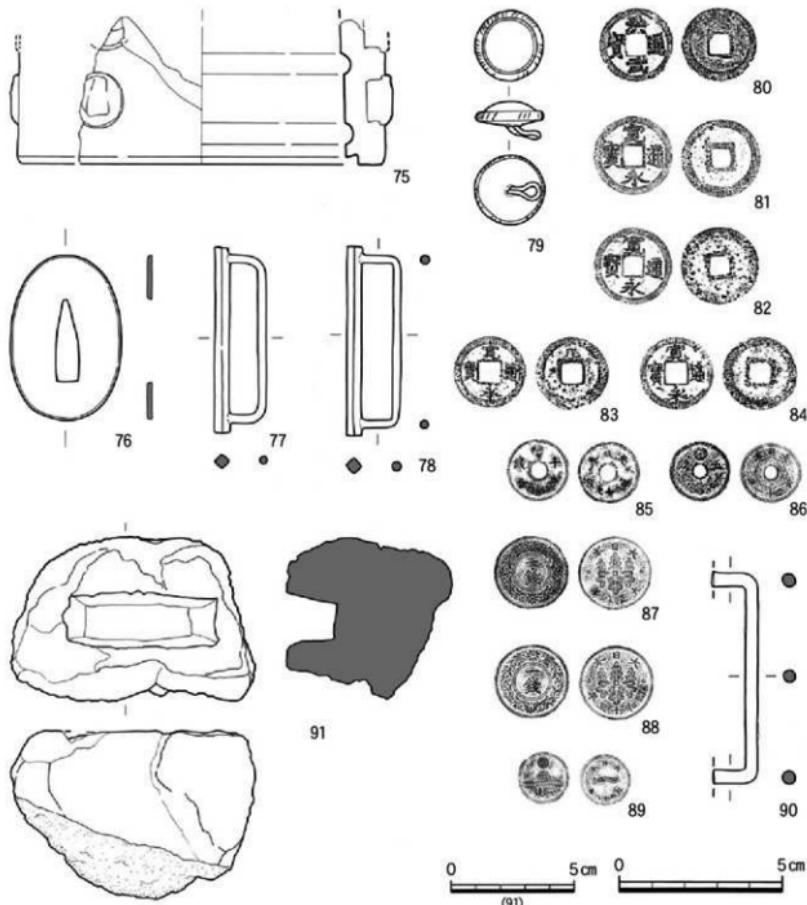
87・88は一銭銅貨である。正面には菊・唐草文と「一銭」が、背面には桐・桜花文と発行年銘が認められる。87は大正8年（1919）、88は昭和13年（1938）の発行である。89は一銭アルミ貨である。正面には菊・富士文と「一銭」、背面には「大日本・一・昭和十八年」が認められる。富士文の一銭アルミ貨は、昭和15年（1940）公布の一銭臨時補助貨幣制の勅令により昭和16～18年（1941～1943）にのみ発行されたものである。

その他の金属製品（第81図90、第4表）

90は不明銅製品である。断面円形の棒状の素材をコの字形に折り曲げたもので、棒状の両端部には溶接の痕跡が認められる。本体に取り付けた把手状の部位であろうか。

c. 石製品（第81図91、第6表）

91は軽石製の加工品である。側面・上面を粗く削り、上面には整形した四角い窪みが認められる。



第81図 五階御橋跡出土金属製品実測図3・石製品実測図(2/3・1/2)

(2) 五階御櫓跡下トレンチ出土遺物

五階御櫓台下の帶曲輪（小段）に設けた1～3トレンチから出土した遺物である。土師質のフイゴ羽口、金属製品がある。金属製品は鉄釘の出土が多い。

a. 土師質製品（第82図1, 第3表）

1は土師質のフイゴ羽口である。棒状の芯に粘土を巻き付けて成形している。炉内に挿し込まれた上位（口縁部付近）にはガラス質溶融物の付着が顕著である。筒形の下位が幅広がりになる形状から、江戸時代後期以降の所産と想定される⁷⁾。

b. 金属製品

建築金物（第84図2～第85図16, 第4表）

2は鉄製の端金物とみられる。角柱状の木材の端部に取り付けたものとみられ、部分的に木質の付着が認められる。両長辺の上端面の、ともに中央付近が窪んでいるのは、使用時、他の金具等にぶつかって潰れた可能性を示している。

3～16は鉄釘である。成形技法からa・bの2種に分類する。すなわち、頭部と胴部の境の折り曲げた箇所の形状に注目するものである（第83図参照）。

a類：頭部を成形する際に繩で刻みを入れ、刻みを入れた面を谷折りにして頭部を折り曲げるものである。平頭釘・巻頭釘の場合、刻みを境にして頭部側を叩き潰し、その後、折り曲げるため、折り曲げた箇所には刻みによる段差が形成される。皆打釘の場合は、刻みによる僅かな窪みが残るか、折り曲げた箇所にシャープな谷角が形成される。

b類：繩で刻みを入れないで頭部を叩き潰して成形するものである。折り曲げた箇所は段差が無く、頭部から胴部の境は緩やかに移行する。

上記2種は、釘の機能差・時期差に関わるものではないが、技法上の癖、すなわち工人の単位差を反映したものと捉えられる。熊本城の普請において、複数の工人の単位が関わったことを示すものとして注目したい。

なお、この分類は次項以降の報告でも用いる。3～7

は平頭釘で、3・4はa類、5・6は瓦釘b類、7は五寸釘a類である。5・6の瓦釘は、それぞれ長さが287mm、274mmと通常よりも長いことから、平葺きではなく、葺き間が厚い箇所に使用したものとみられる。9～16は巻頭釘で、9～15はa類、16はb類である。12・13・16については、頭部が潰れていないことから未使用品と判断される。

武器・軍用品（第85図17・18, 第4表）

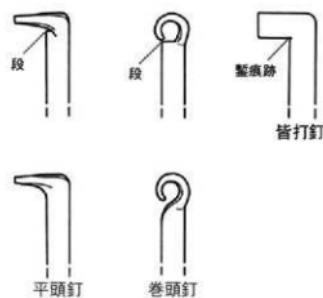
17は鉄製の火縄銃弾である。18は四斤砲弾片で、鉛製の薙翼（スタッド）が認められる。

その他の金属製品（第85図19）

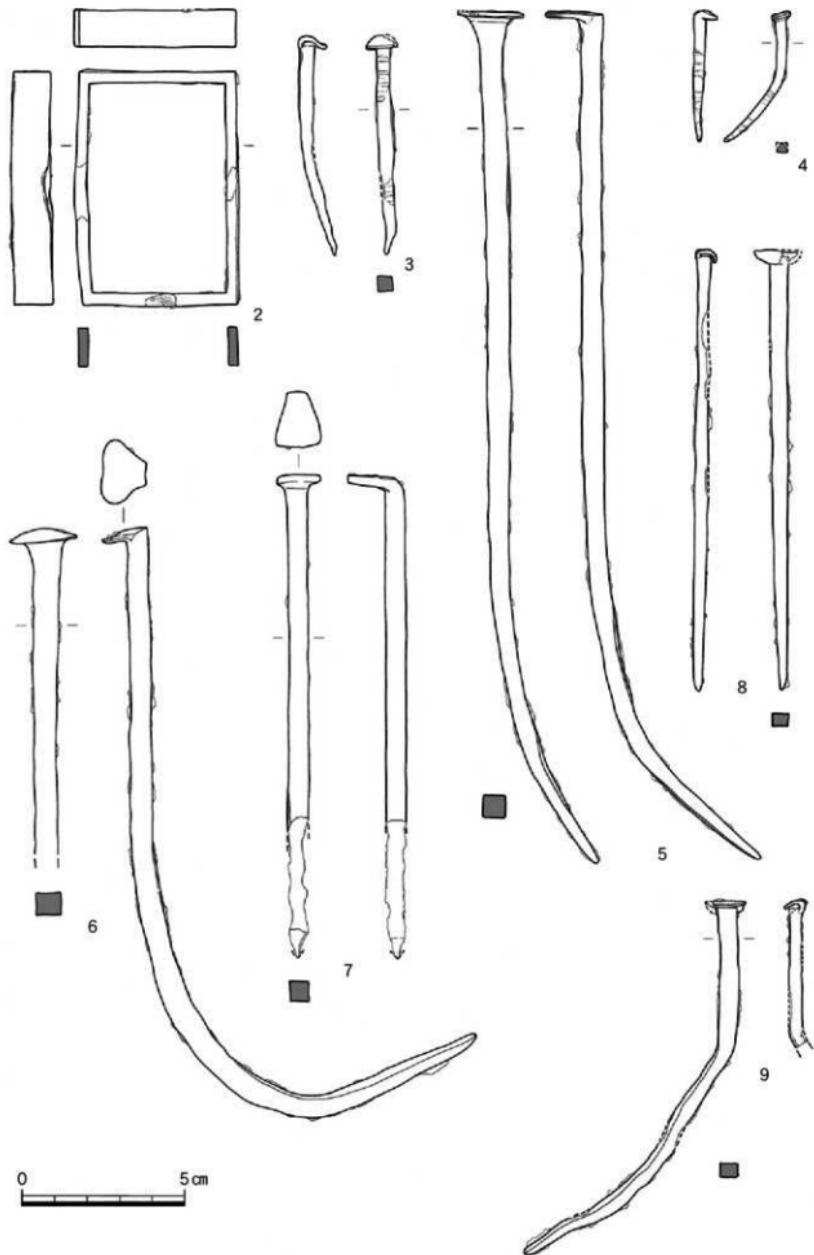
19は不明鉄製品である。断面長方形の棒状を呈するもので、先端面には浅い抉りが認められる。



第82図 五階御櫓下トレンチ出土
土師質製品実測図（1／3）



第83図 鉄釘分類模式図



第84図 五階御櫓下トレンチ出土金属製品実測図1 (2／3)

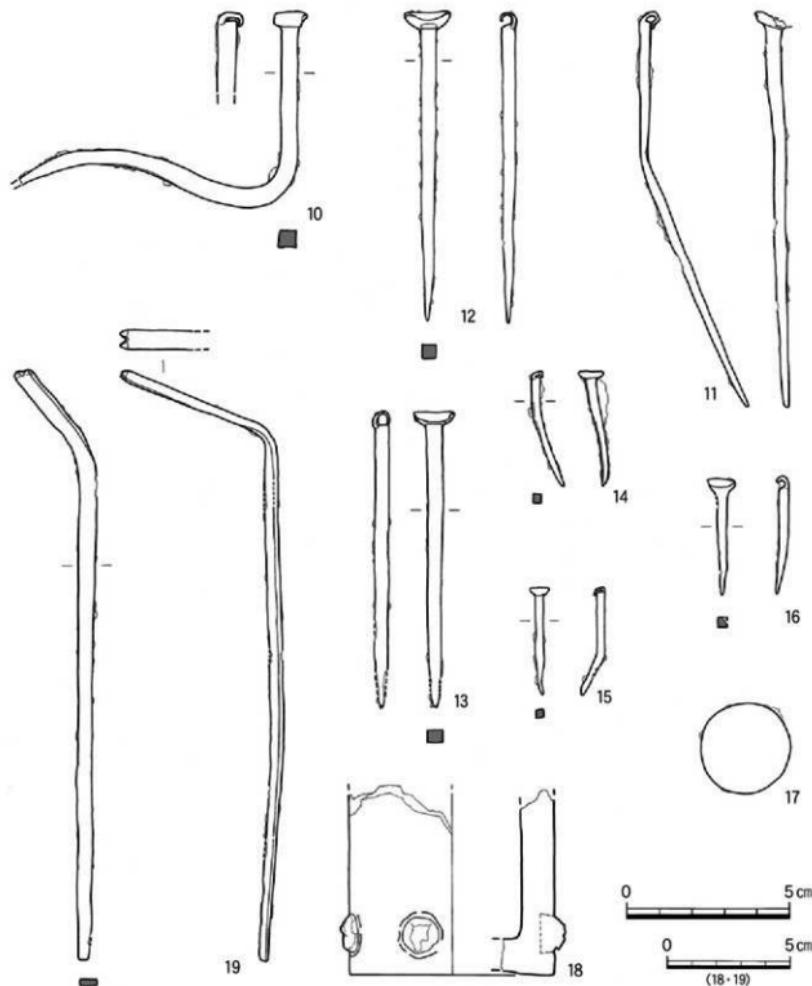
(3) 百間御櫓跡出土遺物

櫓台および周辺の1~8トレンチ、16~23トレンチから出土した遺物である。陶磁器・土器類、ガラス製品、金属製品、石製品がある。

a. 陶磁器・土器類

中世（第87図1~3、第3表）

1・2は土師器坏である。2は器形から15・16世紀の所産とみられる。3は瓦質土器火鉢で、深鉢形を



第85図 五階御櫓下トレンチ出土金属製品実測図2 (2/3・1/2)

呈するものである。この形態は、14世紀代から17世紀前半にかけて存続しており、16世紀代以降は外面上位に櫛描き波状文が盛行するなどの型式的特徴が認められる。

近世（第87図4～9、第3表）

4・5は肥前系磁器染付で、4は端反碗蓋、5は端反碗である。6～8は皿類をまとめた。6は肥前産陶器皿で、内底に砂目を認める（肥前Ⅱ期）。7は漳州窯系磁器青花皿である。内外とも化粧土が確認され、内底は蛇の目釉剥ぎを施す。8は土器小皿である。1・2などに比べて器壁が薄く、焼成が良く、明るい発色であることなどから、17世紀中頃以降の所産とみられる。9は備前焼の擂鉢で、直方向（放射状）に加えて斜方向の擂目が認められることから備前焼近世1期に位置付けられる。

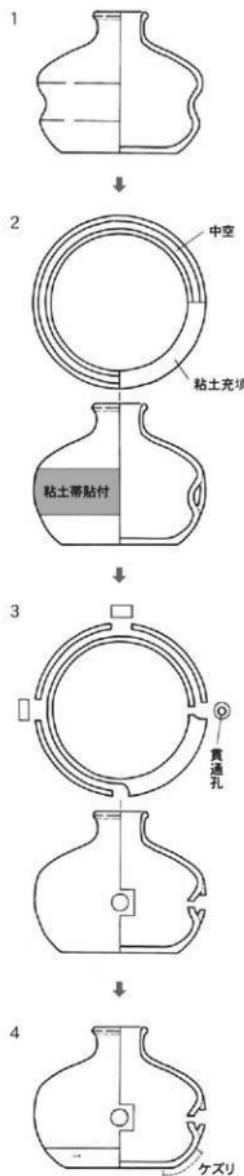
近代（第87図10～第89図47、第3表）

10～18は、時期・产地・用途ともに不明の壺である（以下「不明壺」）。14を除き、出土状態から一括廃棄されたものと判断される（第71図）。共伴資料に近代の陶器片（19）が含まれていることなどから本項で扱うこととした。焼成形態・器形から以下2種に分類する。

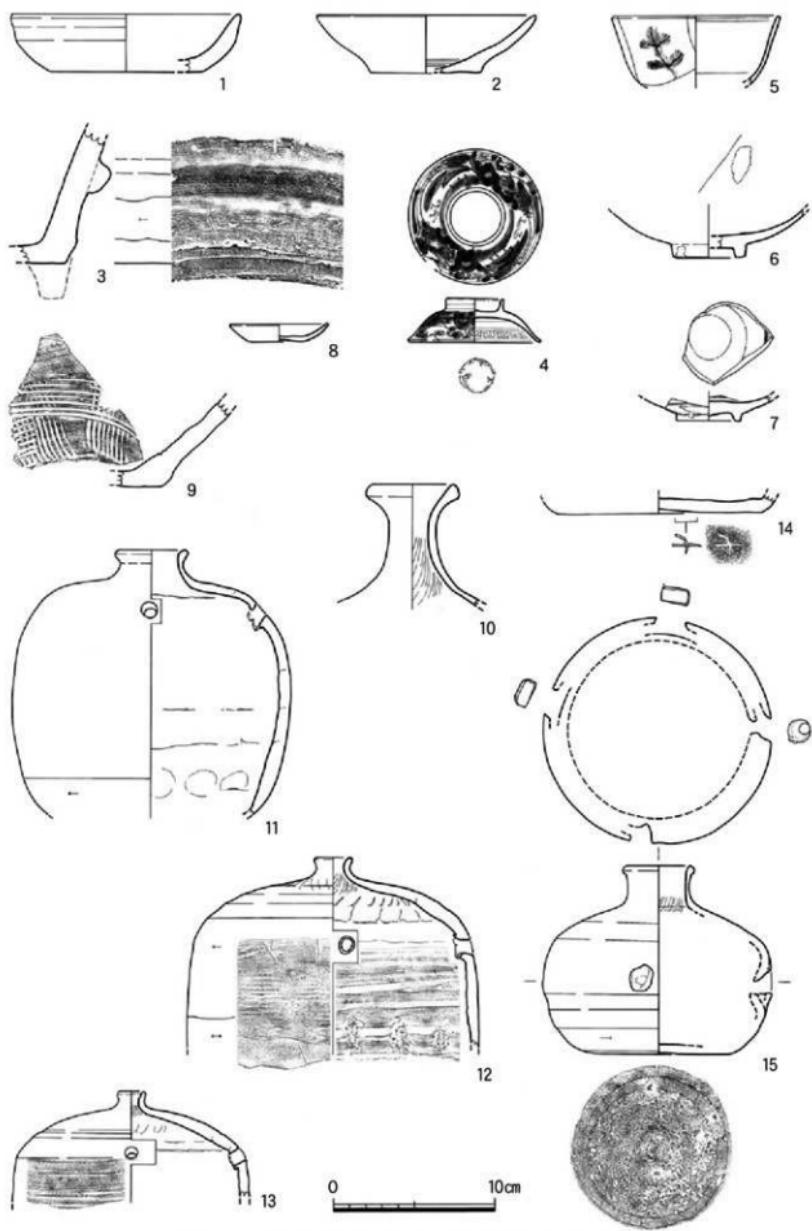
a類（10～12・14）：焼成には2種がある。すなわち、肥前陶器のような赤褐色の胎土を呈する陶器質（13）と、その他の焼成が良好な土器質である。残存状態の良好な11～13は細頸で、肩部に90度ごとに4箇の円孔が認められる。円孔は口頸部成形後、円管状の工具を外側から突き刺して穿たれたものである。体部下位が残存する11・12・14をみると、いずれも外面に回転ヘラケズリを施す。

b類（15～18）：焼成は、やや焼きの甘い焼締め陶器である。特異な成形を行なっているため、第86図をもとに製作工程を記す。①輪積みにより外面胴部中位が括れた形状をつくる。②胴部中位の括れを覆うように粘土帯を巡らせる。この時、全周のうち90度については括れ部にも粘土を充填させ、270度については充填させず、括れ部との間に中空を設ける。③覆った粘土帯に90度ごとに4箇の孔を設ける。この孔には2種がみられる。円形（不整なものもあり）と横長の方形であり、ともに銳利なヘラ状工具によって切り取るように穿孔している。孔の位置は前工程を踏まえて設定されており、結果、孔のうち3箇の間に胴部を3/4周（270度）巡るような中空が形成される。なお、15～17については、円孔のうち1箇所に、円孔よりも径の小さい円管状工具を突き刺して胴部器壁を貫通させている。18も同様の貫通が認められるが、突き刺した工具形態が異なる。内面から貫通部をみると縦長の略長方形（1.0×0.3cm）の工具を突き刺しており、この工具は刀子のような形状が想定される。④外面胴部下位～底部外周に回転ヘラケズリを施す。なお、本工程と前工程との前後関係が確認できたのは15のみである。

以上、不明壺a・b類は焼成・器形・製作技法ともに異なるが、以下の点から相互の関連が指摘できる。1つはa類14とb類18において、同じ部位（外底のほぼ中央）に、ともに細いヘラ状工具により施した同形のヘラ記



第86図 不明壺b類
製作工程模式図



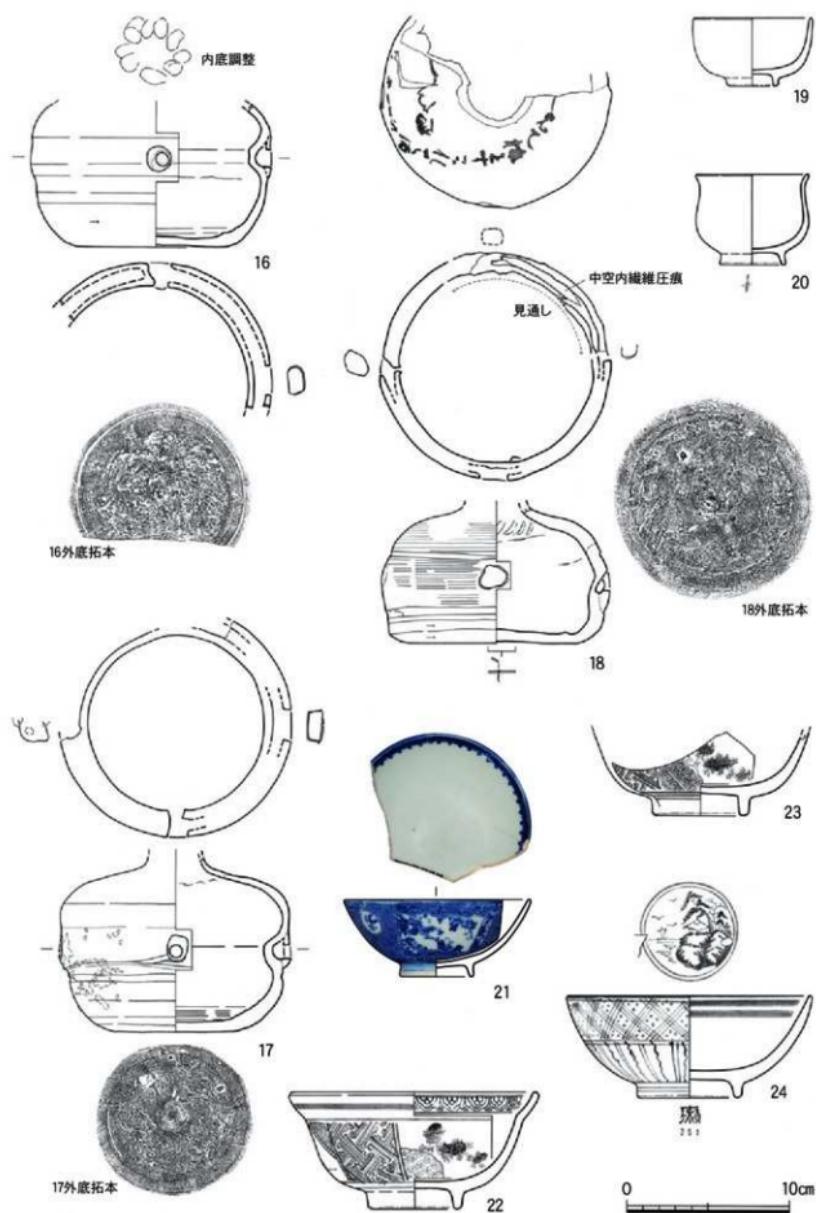
第87図 百間御橋跡出土陶磁器・土器類実測図1 (1／3)

号様の線刻が認められることである。もう1つはa・b類の出土状況である。前述のように一括廃棄された共伴資料であり、同様のこととは1960年、再建以前の熊本城大小天守櫓台の上において採集された同類の不明壺にも認められる。熊本市立熊本博物館蔵のこれら採集品は、多量の破片資料で、a・b類が混在しており、出土状況において本報告資料と同義性を指摘できるものである。なお、各資料は、器形、製作技法において小異が認められ、このことは同じ用途を意図しながらも、未だ製作技法が安定していないかった状況を示すものと考えられる。以下、この点に留意しながら個々について記す。10～12・14(a類)は土師質焼成である。10は長頸で、口縁部が肥厚する。11は、やや広口の器形で、内面頸部のしづり痕は認められず、胴部は内外面ともに平滑である。12は胴部に叩き整形が施されており、外面には平行条線タタキ、内面には同心円当て具痕が認められる。内面胴部の叩き後の横ナデは、器面の凸部が潰れるほどに強く施されている。13(a類)は12とはほぼ同じ器形・技法であるが、焼成は陶器質で、外面と内面口縁部には鉄漿塗布あるいは塗土が認められる。15～18(b類)は焼締め陶器である。15は、内面頸部にしづり痕が認められる。16は内底に底部板を整形した際のユビ押えが認められる。17は肩が張る器形で、外面胴部下位には自然釉が認められる。18は、外面体部に条線・横沈線が施されている(工程は条線後横沈線)。胴部の中空内壁面には繊維状の圧痕が認められ、これは粘土帯を覆う際(前述②工程)、胴部の抉れと粘土帯との間に紐状の粗い繊維を挟み込んだことを示している。さらに、外面肩部には朱書きが認められる。剥落・欠失により釈読が難しいが「津乃□□」欠「□免(め)テ梅をす(あるいは開カ)□礼□酒等□□本…」と読める。文中の「酒」の文字は、あるいは本資料の用途に関わるものであろうか。

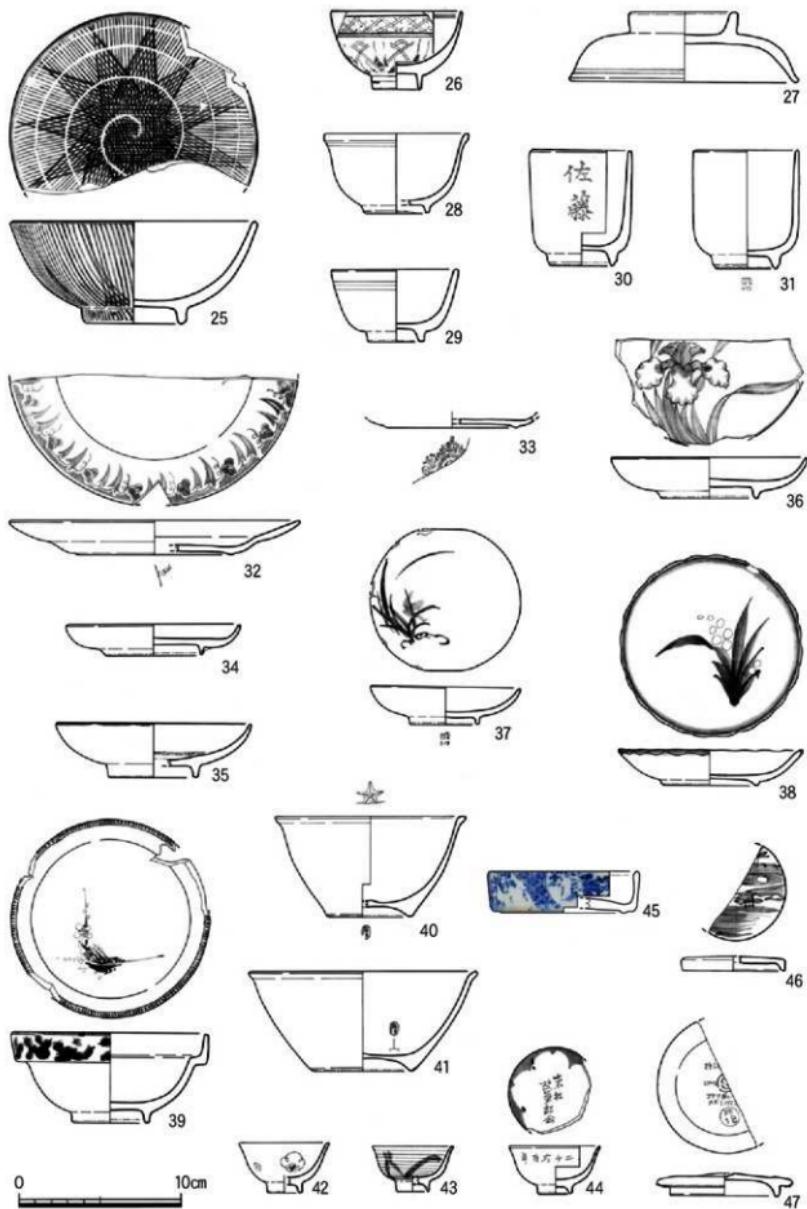
19～31は碗をまとめた。19・20は関西系陶器碗である。19は前述のように不明壺との共伴資料である。20は、高台見込みに赤絵銘「星甫」が認められる。21は肥前系染付の平形碗である。文様は酸化コバルトを用いた型紙摺りによる。22・23は同形態の磁器色絵飯碗で、セット関係が評価される。ゴム版絵付けによる施文で、上絵は殆どが剥げており、僅かに赤色が残存している。24は磁器染付碗である。文様は、酸化コバルトを用いたゴム版絵付けで、高台見込みには統制番号「瀬351」が認められる。25は磁器釉下彩碗で、酸化クロム(青緑色)により内外に繪文を施すものである。その他出土の第102図5と同形態であり、これとのセット関係を評価し得る。26は磁器染付小碗である。主文様の意匠・施文技法は24と共に通するが、本資料には内底文様・統制番号は無い。27～31は軍用食器である。27～29は磁器釉下彩で、軍用食器に特徴的な酸化クロムを用いた外面横線が認められる。27は飯碗蓋、28・29は小碗である。30・31は湯呑碗である。30は磁器色絵で、色が剥げているものであるが、外側面に「佐藤」の手描きが認められる。この「佐藤」は使用者を示すものである。東京都大橋遺跡の同形態の出土品について、第二次大戦中、実際に出土品を使用した人物(当時軍曹)から聞き取り調査を行なった事例がある。それによれば、当該出土品(湯呑碗)は、下士官集会場にあって着任した時に支給されたこと、名前だけで姓の下に階級が書かれていないものは当時の雇用人のものであったことなどが判明している⁸⁾。31は磁器釉下彩である。高台見込みに酸化クロムを用いたゴム版絵付けによる統制番号「岐462」が認められる。

32～38は皿類をまとめた。32・33は硬質陶器の洋皿で、ともに酸化クロムを用いた裏印が認められ、32は、その意匠から東洋陶器製と判断される。34は青磁小皿である。35は青磁染付皿で、内面青磁釉、外面透明釉を掛け分けし、口唇部と内面に酸化コバルトによる圈線を描いている。36～38は磁器釉下彩である。36は、酸化コバルトを用いた銅版転写により菖蒲文を描き、小円子(桃色)により花弁を塗っている。37は変形皿で、内面に酸化コバルトによる手描き文、高台見込みに酸化クロムを用いたゴム版絵付けによる統制番号「岐219」が認められる。38は輪花皿で、口縁部の破面をみると、ガラス質の胎土に酸化コバルトの色調が浸透している。内底の万年青文は、草は酸化コバルト、花は盛り上った赤褐色にて描いている。

39は磁器釉下彩鉢である。口唇部の塗りは酸化コバルト、外面口縁帶文様は黒色の不整形な連続スタンプで、内面の折枝梅文は、枝は酸化コバルトの手描き、雄しべは酸化コバルトのゴム版絵付け、花弁・蕾



第88図 百間御櫓跡出土陶磁器・土器類実測図 2 (1 / 3)



第89図 百間御櫓跡出土陶磁器・土器類実測図3 (1／3)

は白盛り絵により描いている。口縁部帯の形状から重ねて収納することを意図して作られたものと想定される。40・41は白磁の軍用食器鉢である。40は内底中央に旧日本陸軍の星章文が貼付され、40・41ともに内底に統制番号「有8」が陰刻されている。同器形で法量が異なることから両者は入れ子と考えられる。

42～44は磁器小壺で、胎土はいずれもガラス質で光沢を帯びる。42・43は染付である。42は酸化コバルトを用いたゴム版絵付けにより3単位の梅花文を施すもので、五階御槽跡出土の第78図26とのセット関係が評価される。44は色絵の記念壺で、内面桜花文の輪郭は酸化クロムによる吹き墨、内底「末社改築記念」、外側面「(皇紀)二千六百年」(括弧内欠)の銘は赤絵による手書きである。本資料に関して熊本県内の事例を探したところ、皇紀二千六百年 = 昭和15年(1940)において末社を創建した事例が確認された。それは1940年、熊本市清水台の陸軍幼年学校(現在は陸上自衛隊北熊本駐屯地)の設置に伴い、陸軍施設に付属する宮内社として創建された雄健(おたけび)神社で、加藤神社・菊池神社の靈位を分祀したものである⁹⁾。すなわち、当時、軍神として信仰された加藤清正と南朝方の忠臣として信仰された菊池氏3代を祀る神社からの分霊、合祀であり、熊本における宮内社の祭神としてまさに相応しいものといえる。陸軍幼年学校は旧来、熊本城内にあったものを1940年に清水台に移設したので、宮内社も同様の状況とみられ、そのため本資料の銘は「改築」となっていると考えられる。

45は肥前系磁器染付の段重である。文様は酸化コバルトによる型紙摺りである。47は磁器釉下彩の缶詰(防衛食容器)蓋である。蓋上面には鉄軸を用いたゴム版絵付けで、「特許(真空容器)／→(←)／フタタ取ル(ニハ釘デ)／クボミニ穴ヲ(アケ)」、丸内「防18」(／は改行、括弧内は欠)とある。

時期不明(第90図48～52、第3表)

48は白磁製糸管である。細い円柱に粘土を巻き付けて成形したもので、管の端面のみ施釉している。近現代の所産である。49～52は土師質のフイゴ羽口である。49～51は、炉内に挿し込まれた上位(口縁部付近)にガラス質溶融物の付着が顕著である。51・52は小形品で、52については体部に陰刻が認められる。49～52とも胎土観察から江戸時代中期以降の所産とはみられるが、詳細は不明である。

b. ガラス製品(第91図53～56、第5表)

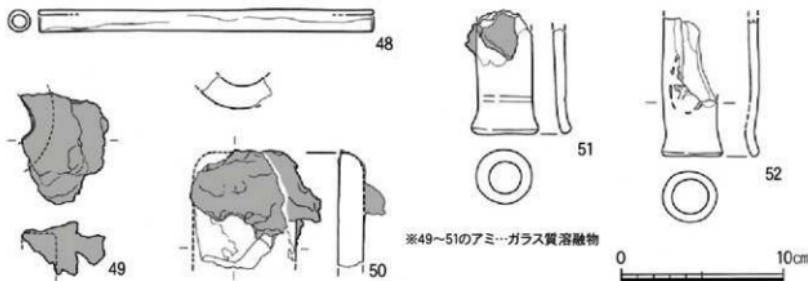
ガラス製品の報告に際しては以下の分類を行なう。すなわち、成形技法により分類される2種である。
a類：ガラス管を軸に挿しこみ、これを回転させながら過熱し、軟化したガラスを外側から押圧して成形するものである。外底面や上面などの平坦部に、回転により生じる同心円状の僅かな渦が認められる。
b類：所謂モールドガラス。溶解したガラスを型に流し込んで成形するものである。器面に鋳型を継ぎ合わせた際のバリが認められる。

なお、上記の分類は次項以降でも用いる。53は瓶蓋である(a類)。薄い緑色の発色で、全体に微気泡が目立つ。軸部には成形時に生じた皺が認められる。なお、軸部下面には撃ち欠きによる破面が認められるが、これが消失か、あるいは成形時の取り外しによるものか、弁別は難しい。54は小瓶である(a類)。ほぼ透明で、頸部に大きめの気泡が認められる。55も小瓶である(b類)。青緑色の発色で、底部付近に気泡が目立つ。成形は口頭部と体部が別作りで、これらを継ぎ合わせている。56は卓上インク入れである(b類)。明緑色の発色で気泡は少ない。二穴で、底部板は花形を呈し、外底面には放射状文の陽刻が認められる。優品といえる。花形の底部外周に鋳バリが廻っており、鋳型は本体部に底面を塞ぐような形状であったことが推測される。

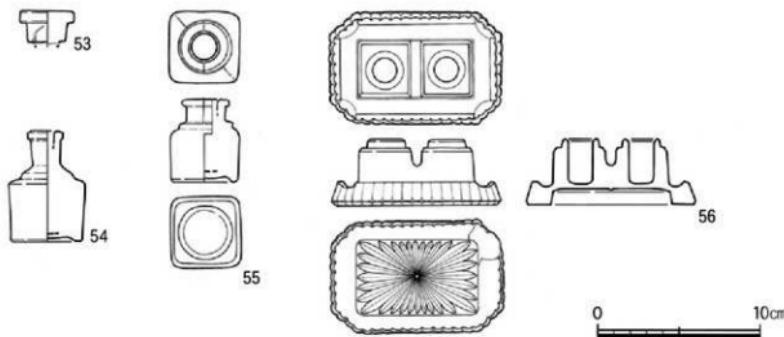
c. 金属製品

調度具(第92図57・58、第94図59～64、第4表)

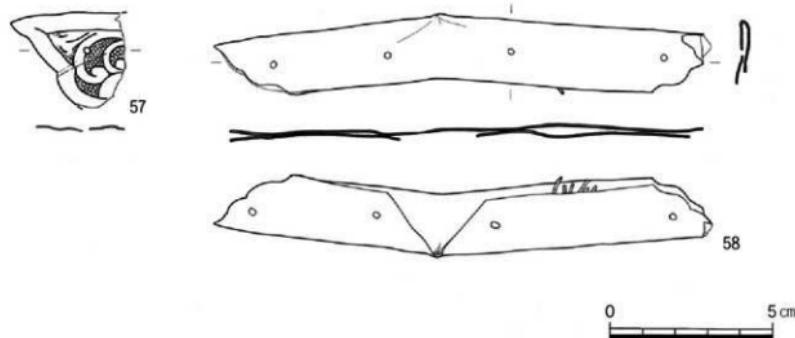
57は金銅製の板金物である。薄い花弁形の銅板表面に金箔を貼ったもので、金箔下の黒漆が確認される。主文様は盤による筋彫りの唐草文、地文は魚々子打ちの小円文である。58～64は金物で表面のみを鍍金している。58～61の平面形は「く」字状に曲がっており、上辺が緩やかな屋根形を呈する板状形態の



第90図 百間御櫓跡出土陶磁器・土器類実測図 4 (1/3)



第91図 百間御櫓跡出土ガラス製品実測図 (1/3)



第92図 百間御櫓跡出土金属製品実測図 1 (2/3)

本体に装着されたものとみられる。58は屋根形の頂部を飾る金具で、折り疊んだ隙間に銅製針金が挟まっている。59～61は同じ平面形であるが、針穴の数、中央の折り目（山折り）に差異が認められる。折り目は、59・60が1箇所、61が2箇所で、61の2箇所の折り目間隔は約1.3cmである。なお、57～64のいずれも、針穴に鉄を打ち込んだ圧痕が認められることから未使用品と判断される。

建築金物（第94図65～第95図73、第4表）

65は鉄製の蓋金物である。1本の棒状の鉄板を折り曲げて成形したもので、胴部下位は二股となっている。扉板などに打ち込み、二股部を曲げ抜けて固定するものであるが、本資料は二股部が直線状であることから未使用品の可能性を指摘できる。66～73は鉄釘である。66は鉄製の鉈釘である。頭部は叩いて整形しているため、やや歪んでいる。67は皆折釘a類、68は平頭釘a類、69は平頭釘b類、70は巻頭釘a類、71～73は巻頭釘b類である。巻頭釘は全て頭部が潰れていることから使用品と判断される。なお、上記65～73の出土位置は、全て槽台上の2つの隣接するグリッド（F95-79グリッド・F95-80グリッド）であり、明らかな偏在性が認められる。

武器・軍用品（第95図74～第98図176、第4表）

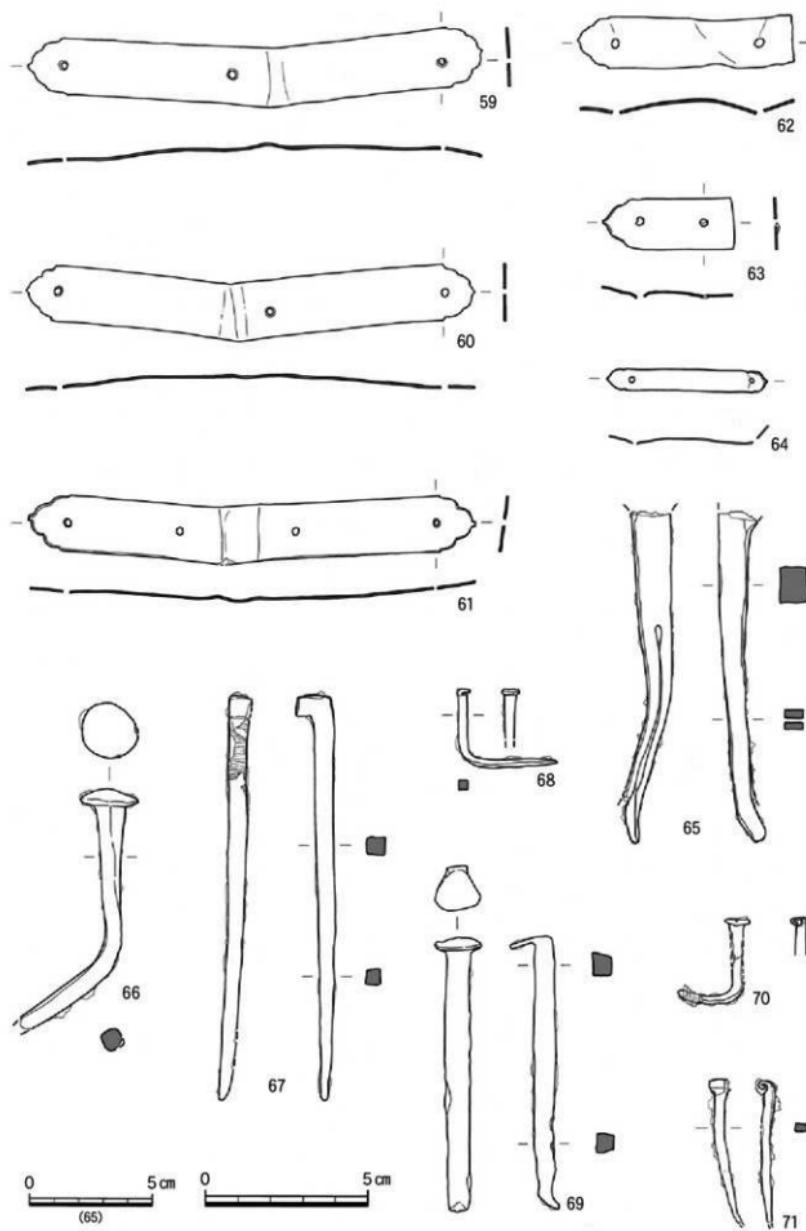
74は鉛製の火矢筒あるいは大鉄砲の銃弾である。鋳造時のバリや同心円状の皺が明瞭に残っており、未使用弾と判断される。1箇所、1.1～1.2cm径の平坦面が認められるが、これは着弾によるものではなく、鋳造時の鉛材の充填不足と考えられる。75～81は鉛製の火縄銃弾、82～85は鉛製の火縄銃弾あるいはゲベール銃弾である。75～84は未使用弾で、85については使用の未・既の判断が難しい。86～93は鉛製の火縄銃弾である。88～92は鋳造時のバリが認められ、90・91については銃口の痕跡がバリの線上の小突起として認められる。92の小さな凹部は、鋳造時の鉛素材の充填不足あるいは挟雜物の痕跡とみられる。94は鉛製の火縄銃弾あるいは榴散弾の弾子で、錆化が著しい。

95～100は火縄銃の銅製のカラクリ部品である（第93図参照）。95は雨覆、96～98は雨覆の下部に接してこれを支える部品（名称不明）で、96・97は竹節状の装飾を施している。99は火蓋鉄で、火皿と火蓋との蝶番部分を留めるものである。100は矢筈鉄で、彈金の端部を台に留めるものである。101～103の銅製鉄も素材・形状から火縄銃部品の可能性を指摘できる。なお、95～100の出土位置は、全て槽台上の2つの隣接するグリッド（F90-82グリッド・F91-82グリッド）である。

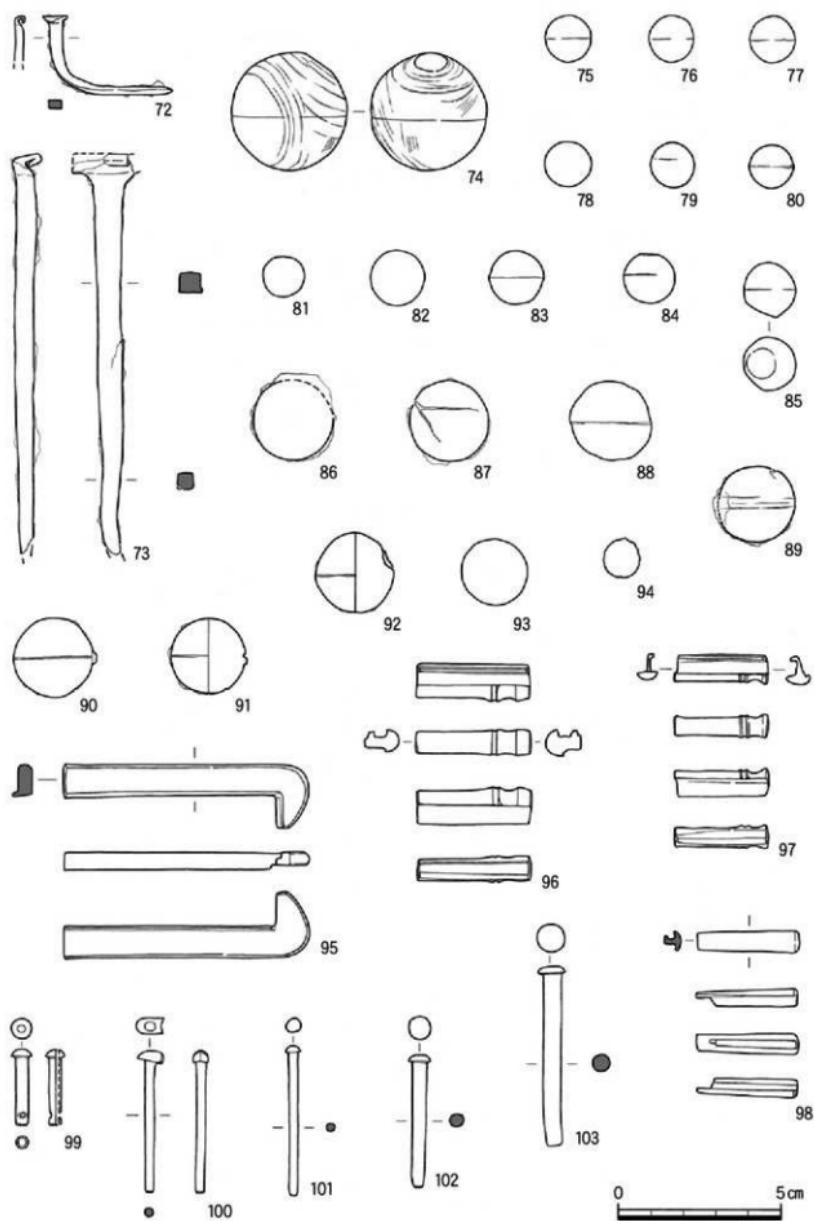
104～143は鉛製のエンフィールド銃弾である。うち、104～130は西槽御門の北側に設けた16トレンチからの出土である。傷や歪みを認めるものもあるが、いずれも未使用弾である。104・105は弾底凹部の圧入木栓が残存しており、106には弾底凹部壁に木栓表面の木質が付着している。107は小銃弾の圧入木栓であるが、形状や出土位置（エンフィールド銃が多く出土した16トレンチ）からエンフィールド銃弾に伴う可能性が高い。108・109は縦方向の鋸バリが認められる。16トレンチ出土資料をみると、全て同じ形態で



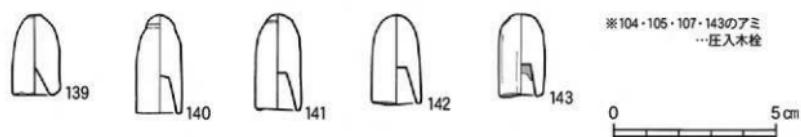
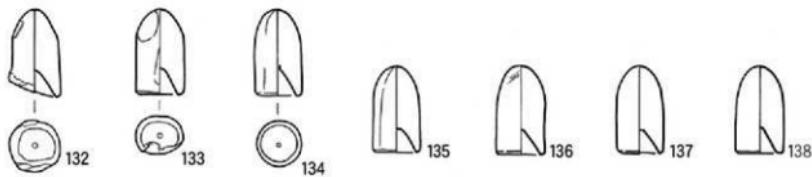
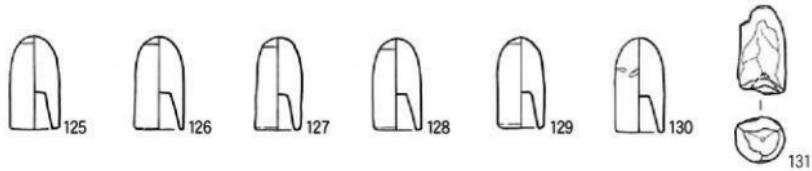
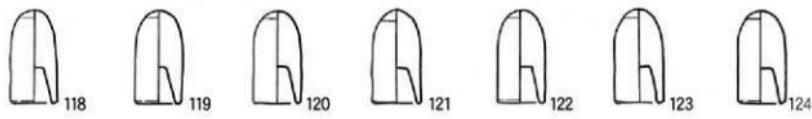
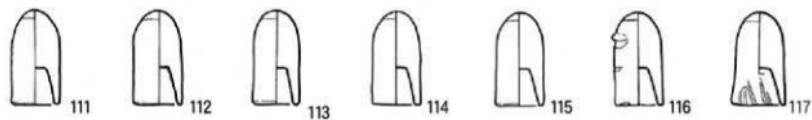
第93図 火縄銃部品参考写真（熊本市熊本博物館所蔵）



第94図 百間御櫓跡出土金属製品実測図2 (2/3・1/2)



第95図 百間御櫓跡出土金属製品実測図 3 (2 / 3)



第96図 百間御櫓跡出土金属製品実測図4 (2/3)

あり（b類）、分けても先端付近に圓状の小さな段が巡るという特徴が注目される。この共通性は（出土位置も勘案して）、これらが同じ鋳型で鋳造された可能性を示すものである。131～143は16トレンチ以外の出土品をまとめたものであるが、西櫛御門付近の櫛台出土資料が多い点が注目される。131～139は弾底凹部が円錐形を呈するa類、140～143は円柱形を呈するb類である。134は弾底凹部の先端にさらに細い空洞が続いており、これは鋳造時の充填不足などによるものとみられる。なお、131～133・143は使用弾である。143は、外面は施条痕が認められ、内面は発射の衝撃により圧入木栓が弾底凹部天井面にまで入り込んでいる。144は未成型の鉛素材である。飯田丸において弾薬の供給が行なわれた（第5章2において詳述）ことを勘案すれば、銃弾鋳造に関わる可能性を指摘し得るものである。

145はスペンサー銃実包、146はスペンサー銃薬莢である。145・146ともに辺縁の打撃痕（発射痕）は認められず、146については内部に火薬（黒色の固形化物）が残存する。147～153はスナイドル銃薬莢である。ケース（薬筒部）が残存するものについては、いずれも縦方向の縫合目が確認できる。147はディスク（底板）・カップとも銅製、一体形の型式で、カップに縫合目は認められない。148～153はディスクが鉄製、他の部位が銅製でカップが二重（インナーコイル・アウターカップ）になる型式である。ケースが欠失する151・152については内部の雷管とその周辺の端で固めた巻紙が認められる。148・149はケース外面に紙の痕跡が付着しており、148～151についてはケースとインナーコイルの間に挟まれた薄い紙が認められる。なお、外底中央の雷管において打撃痕（発射痕）が明瞭なものは153のみである。

154は銅製の小銃スリングである。大小の環が連接する形状であり、小さな環を銃本体に、大きな梢円形の環を皮製の背負い紐に掛ける構造である。後者は棒状の素材を折り曲げて成形しており、棒の両端を溶接して縫合した痕跡が認められる。

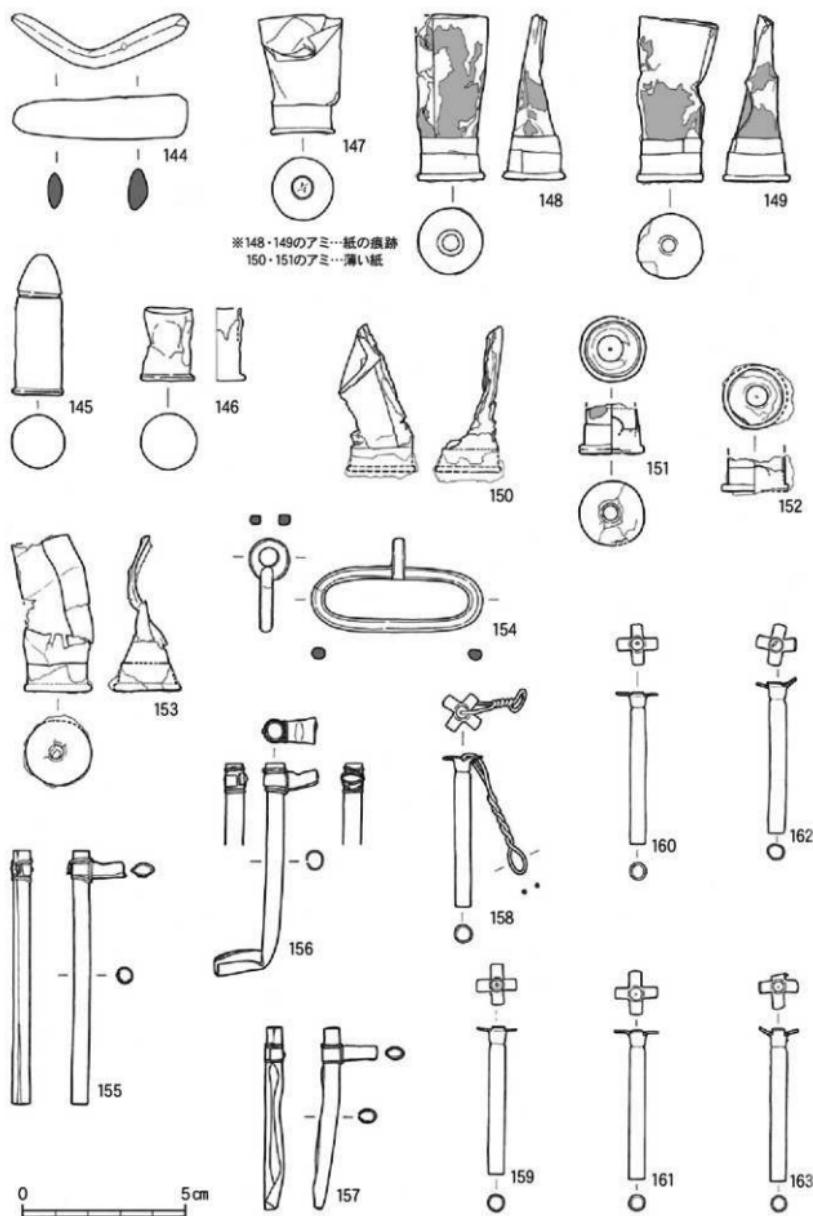
155～163は銅製の摩擦管である。155～157はL字形摩擦管である。本体（縦軸の管）の上位に横軸の短い管を直交するように取り付ける形態で、横軸の管は細い銅線を巻いて本体に固定している。なお、縦軸の管の上端は小さい円板で塞ぐが、この円板が残存するのは157のみである。155～157のいずれもワイヤーループは認められない。158～163はI字形摩擦管である。158はワイヤーループが残存する未使用品である。159～163は、筒内にワイヤーループを固定するための木栓のみが残存しており、木栓中央には約1mm大のワイヤーループが抜けた穴が認められる。以上の摩擦管のうち、157には赤い塗付物が、161・163には黒い塗付物が表面に認められる。後者については錫の鍍金あるいは箔押しの可能性を指摘しておく¹⁰⁾。

164～166は刀の部品である。164は銅製の小柄である。表の文様彫刻は花文陽刻で花卉や葉の脈を毛彫りにより表現している。別の文様素材を嵌め込んだもの（地板嵌込み式）ではなく、地板を直接彫刻して文様を浮き彫りにしたもの（棒小柄）である。地文は魚子地で、細密な小円文が施されている。内部には鋸彫れた茎が残存している。165・166は銅製の切羽である。ともに外縁に細かい刻みを施すもので、165については茎孔の周辺が僅かな段差をもって、その外周よりも薄くなっている。167は銅製の洋式剣の鎧で、鞘の木質部が残存している。逆宝珠形の先端金物は鎧本体の銅板を円筒形に巻いて固定しており、鞘は3本の鉄を刺し込み、さらに鉄の先端を折り曲げることにより固定している。逆宝珠形の先端金物の頂部が潰れているのは、剣の使用者が地面を突いたためであろう。

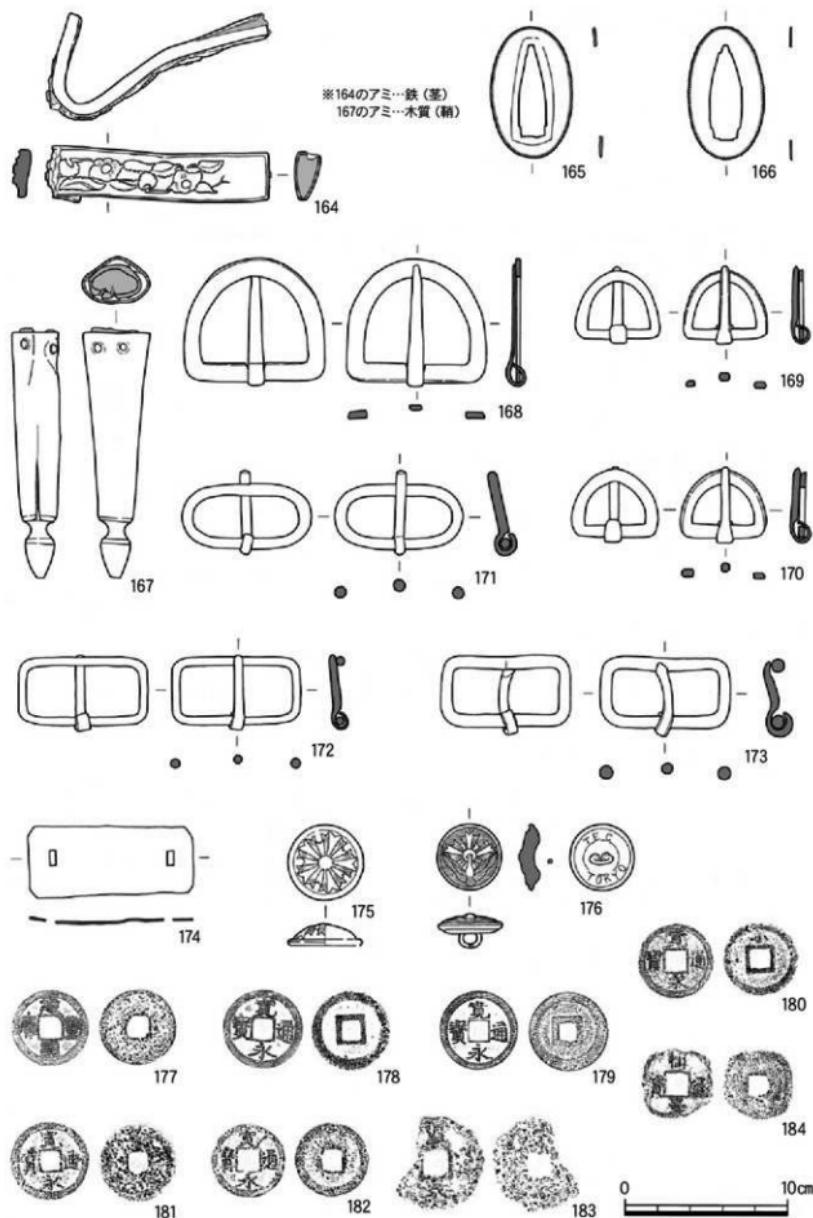
168～173はピンバッカル式の銅製のベルト金具である。平面形には、半円形（168～170）、梢円形（171）、長方形（172・173）があり、大きさも様々である。断面形は、半円形のものが平たい方形、梢円・長方形のものが円形を呈する。後者は棒状の素材を折り曲げて成形したもので、172・173には棒の両端を溶接して縫合した痕跡が認められる。

174は銅製の帽章の裏金である。2つの方孔間の距離は約3.4cmであり、明治8年制の正帽・軍帽に用いられたものと考えられる。

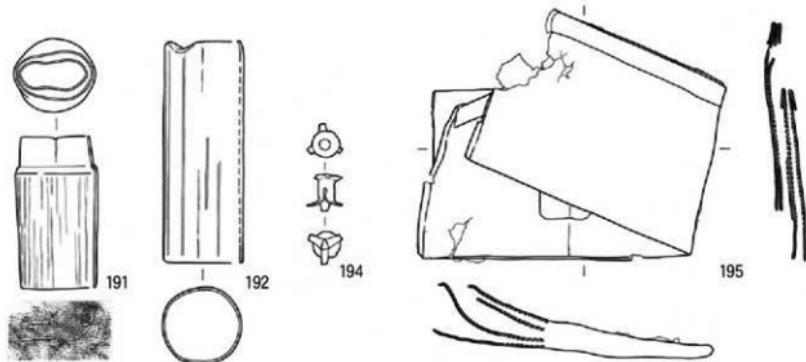
175・176は、真鍮製とみられる鉤である。175は警察（旭日章）、176は警察予備隊（鳩と旭日章）のも



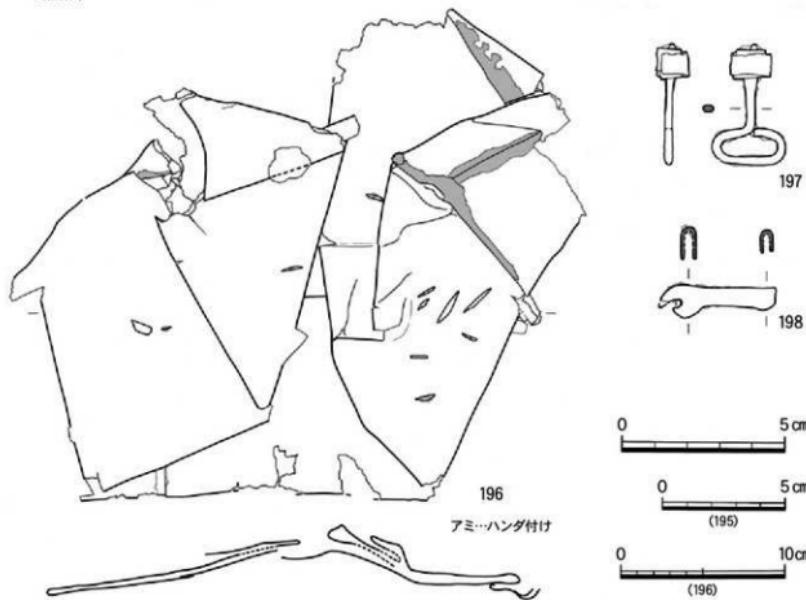
第97図 百間御櫓跡出土金属製品実測図 5 (2 / 3)



第98図 百間御櫓跡出土金属製品実測図 6 (2 / 3)



内面拓本



第99図 百間御櫓跡出土金属製品実測図 7 (2/3・1/2・1/3)

ので、176については裏蓋に「TEC TOKYO」の陰刻が認められる。ともに現代の产品で、176は警察予備隊の存続期（1950～1952年）の製品と考えられる。

銭貨（第98図177～第99図189、第4表）

177は元豊通宝（篆書体）である。北宋期、元豊元年（1078）の初鋳である。表裏面とともに意図的な摩滅が認められる。178～183は寛永通宝で、178・179は古寛永、181～182は新寛永、183は鉄四文銭である。180は背面に「小」が認められることから、元文2年（1737）、江戸本所小梅の錢座で鋳造が開始されたものと判断される。181は「永」の縦線が中心よりも左に寄る、「通」の上がマになっているなどの特徴が、享保11年（1726）、京都七条で鋳造されたものに共通する。182は「寛」と「通」の間に鈎留りがある、「寶」の下位が鋳潰れているなど、鋳上りが悪い。183は鋳化が著しく、背面の文字の有無は判断できない。鉄四文銭は万延元年12月（1861）から江戸深川海辺新田にて鋳造されたものである。184は仙台通宝である。平面形から「撫角錢」と称される銭貨で、天明4年（1784）、石巻にて鋳造が開始され、天明8年（1788）、幕命により鋳造が停止されたものである。幕府が仙台藩に鋳造を許可した条件は仙台領内のみの通用とすることであったが、実際には領外にも大量に流出し、全国の錢相場を混乱させる要因となつたという¹¹⁾。本資料の出土は、そうした流出状況を示すものであろう。熊本県内における初例である。185は十銭白銅貨である。正面には菊・桐文と「十銭」、背面には八葉文と「大日本・大正九年」（1920）が認められる。186は十銭錫貨である。文様・記銘は腐蝕により不鮮明である。正面には菊・桐・瑞雲文と「十銭」が、背面には「大日本」の「日」のみが認められる。臨時補助貨幣の制定により昭和19年（1944）のみ鋳造されたものである。187は一銭銅貨である。正面には菊・唐草文と「一銭」、背面には桐・桜花文と「大日本・大正十年」（1921）が認められる。188は一銭アルミ貨である。正面には菊・富士文と「一銭」、背面には「大日本・一・昭和十六年」（1941）が認められる。189は1セント銅貨である。正面にはリンカーン肖像と「IN GOD WE TRUST・LIBERTY・1947」、背面には麥と穂の文様と「ONE CENT・UNITED STATE OF AMERICA」が認められる。なお、表裏では上下が逆になつてゐるので、拓本図も上下を逆に掲載している。本資料は、現代の所産ではあるが、戦後、城城の桜馬場地区においてGHQの兵舎が建設され、その統治下にあったことなどに関連する可能性を示すことから掲載した。

その他の金属製品（第99図190～198、第4表）

190は煙管の雁首で、火皿・脂返しの湾曲が小さい型式である。肩は鉄製である。

191～193は銅製の用途不明の筒状品である。191・192は銅板を巻いて成形している。191は、外面に粗い縦方向の条線が施され、内面には成形前（巻く前の銅板が平坦な状態）に軋などにより陰刻した「九十一」の文字が認められる。192は外面に縦方向の細い沈線が等間隔で施されている。筒内には黒漆を塗布した薄い残存本質が入っていた。194は銅製の留具であろうか。195・196はブリキ製であろうか、端部を折り返して整形した薄い帯状の銅板が畳まれたものである。ともにハンダ付けによって継いでおり、195は継ぎ目に補強板を貼っている。196については鋭利な工具で突き開けた不整な穴が認められる。195・196は完成品ではなく、製品化する前の一次加工素材と考えられる。

197はコンビーフ缶の開封に用いる、付属の巻き取り鍵である。巻き取り鍵は、1950年、当時の野崎産業株式会社が国産初のコンビーフ缶詰を発売した際に導入した缶の開封具であり、以降、現在に至るまで採用されている¹²⁾。198は缶ジュースの開封に用いる、付属の缶切である。缶ジュースの缶切は、1954年、当時の明治製菓株式会社が国産初の缶ジュース「明治天然オレンジジュース」を発売し、それ以降に開発されたものである。なお、この型式の缶切は、1965年、イージーオープンエンド方式の缶蓋が導入され、以降、これが急速に普及したことによって減少している¹³⁾。

d. 石製品（第100図199・200、第6表）

199は石硯である。赤褐色の緻密な石材で、所謂赤間石製の可能性を指摘できる。200は黒碁石である。

(4) 隅御櫓・堀跡出土遺物

槽台および周辺の10~12トレンチ、14・15トレンチから出土した遺物である。陶磁器・土器類、金属製品、石製品がある。

a. 陶磁器・土器類（第101図1~5、第3表）

1・2は土師器坏で、外底を除き赤彩が施されている。9世紀前半~中頃の所産である。3は底部糸切り離し技法の土師器小皿である。法量・器形から13世紀末~17世紀前半に位置付けられる。

4は土師器坏である。薄づくりで焼成は硬い。底部は丸底気味で、外底は切り離し後へラケズリを施している。これらの特徴から江戸時代後期以降の所産と考えられる。なお、内外とも油煙が付着している。5は肥前産陶器皿である。内底に砂目が認められる（肥前Ⅱ期）。

b. 金属製品（第101図6~7、第4表）

6はスナイドル銃薬莢である。ディスク（底板）が鉄製、他の部位が銅製でカップが二重（インナーカップ・アウターカップ）になる型式である。ケース（薬筒部）外面にはやや不明瞭ではあるが紙の痕跡が付着している。打撃痕（発射痕）の有無は不明である。7は銅製の刀の縁である。側面には斬により斜方向の条線が刻まれている。柄側の内面には、継ぎ目を補強するため薄く銅を溶着させた力金が認められる。8は祥符元宝あるいは祥符通宝の破片である。いずれにせよ北宋期、大中祥符年間の初鑄である。

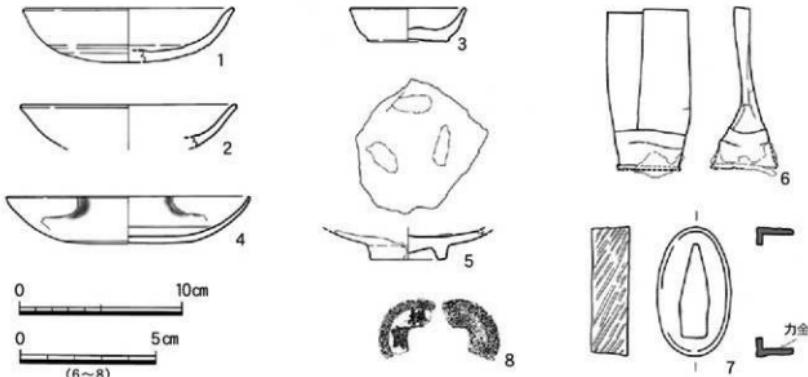
(5) その他の出土遺物

石垣解体修理工事の際の採集品、表面採集品である。出土位置が不明確で、前記(1)~(4)への帰属が難しいため、本項「その他」を設けて報告することとした。陶磁器・土器類、金属製品がある。

a. 陶磁器（第102図1~5、第3表）

1~4は近世資料である。1は肥前産陶器碗で、肥前Ⅰ期の所産である。2・3は肥前系磁器染付碗で、2は端反碗、3は小丸碗である。4は肥前系磁器染付猪口である。外底は蛇の目凹形を呈する。

5は近代産の磁器釉下彩碗で、酸化クロム（青緑色）により内外に縞文を施すものである。百軒御櫓跡



第100図 百軒御櫓跡出土石製品
実測図 (1/2)

出土第89図25と同形態であり、これとのセット関係を評価し得る。

b. ガラス製品（第102図6、第5表）

6は大日本麦酒株式会社製のビール瓶（大瓶）である。溶解したガラスを型に流し込んで成形したもので、縦方向の鋸刃が認められる（b類）。外側面に「TRADE」・○（円文）・「MARK」・社標、「BREWERY CO LTD DAINIPPON」、外底面に「14」・☆（星文）・「6」のエンボスが認められる。外底面の「14・6」の意味は不明である。なお、大日本麦酒株式会社は、明治36年～昭和24年（1906～1949）の存続である¹⁴⁾。

c. 金属製品

建築金物（第103図7～13、第4表）

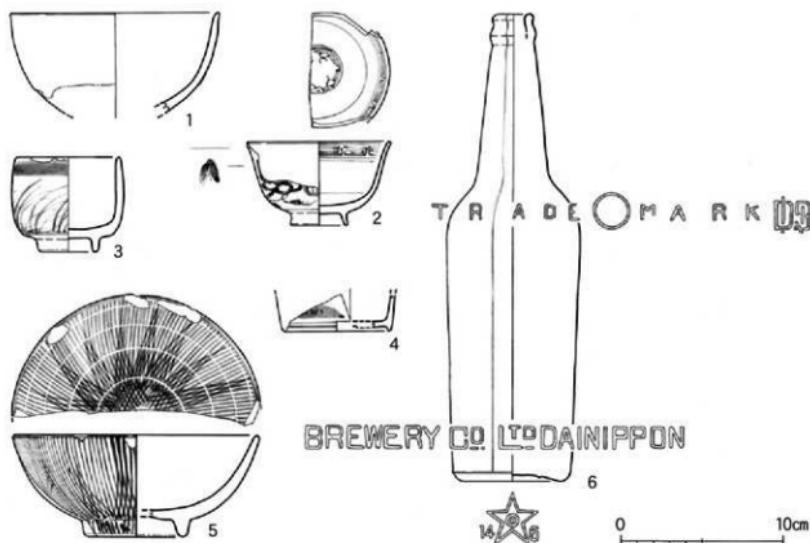
7は鉄製の肘金具で、扉の開閉に伴う金具である。円柱形の軸を一方の端に挿み込むように鉄板を折り曲げ、これを叩いて成形したもので、下面には僅かに折り曲げた鉄板の縫目が認められる。側面には目釘穴が穿たれている。8～12は鉄釘で、8・9は平頭釘a類、10は平頭の瓦釘b類、11・12は巻頭釘a類である。12は頭部が潰れていないことから未使用品と判断される。13は鉄製の鉤である。断面長方形の細い鉄板をコ字形に折り曲げたもので、曲げた部分の角は緩やかである。

武器（第104図14・15、第4表）

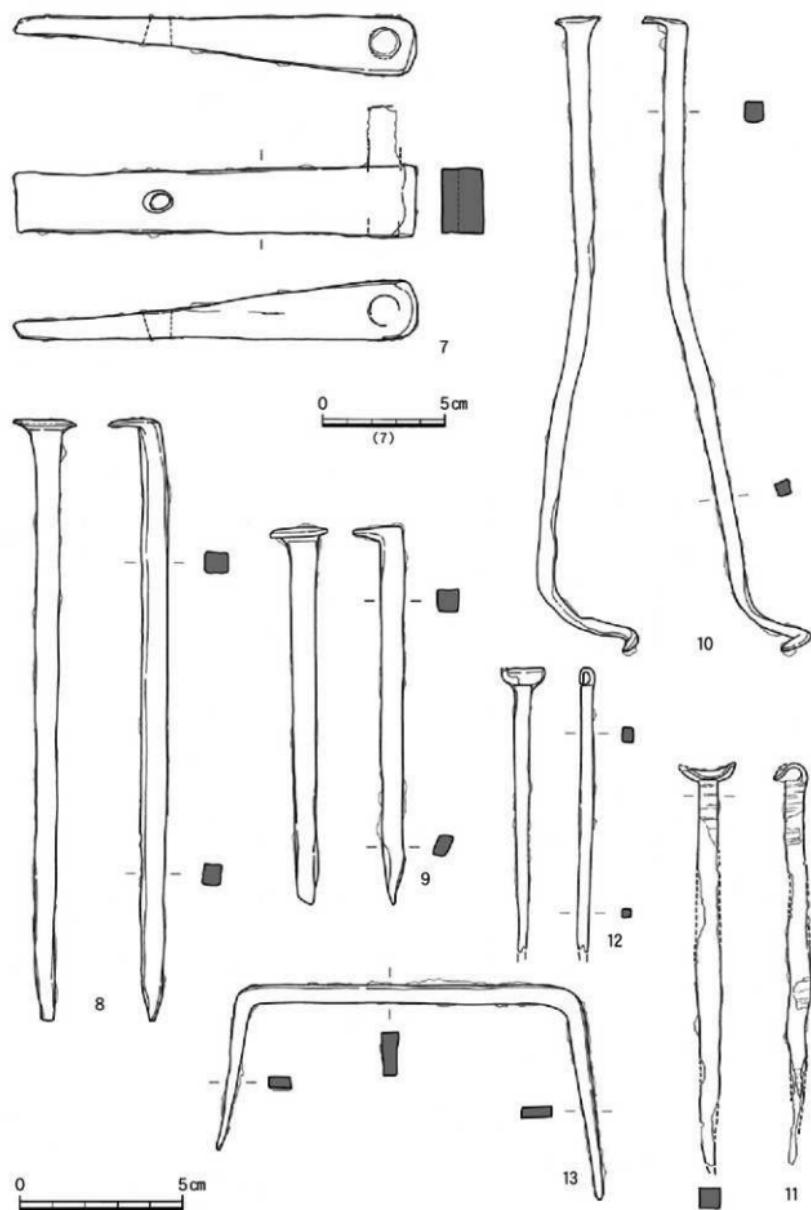
14は村田銃の銅製薬莢である。口径が約11mmであることから十三年式～十八年式の型式とみられる。雷管はペルダン型で、打撃痕（発射痕）は認められない。15は鉄製の白砲弾片である。推定径は184mmであり、比較的大形で砲壁は厚い。20ドイム白砲弾とみられる。

銭貨（第104図16・17、第4表）

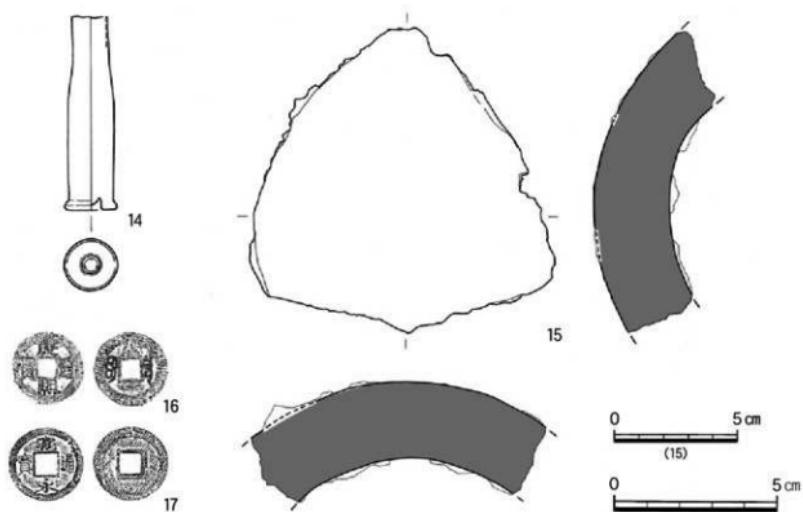
16は康熙通宝である。背面には、左右に铸造局名を表す滿州文字「宝泉」が認められる。清朝順治18年（1661）の初鑄である。正・背面ともに意図的な摩滅が認められる。17は寛永通宝である。新寛永で、各字銘は元文2年（1737）、江戸亀戸にて铸造されたものに共通する。



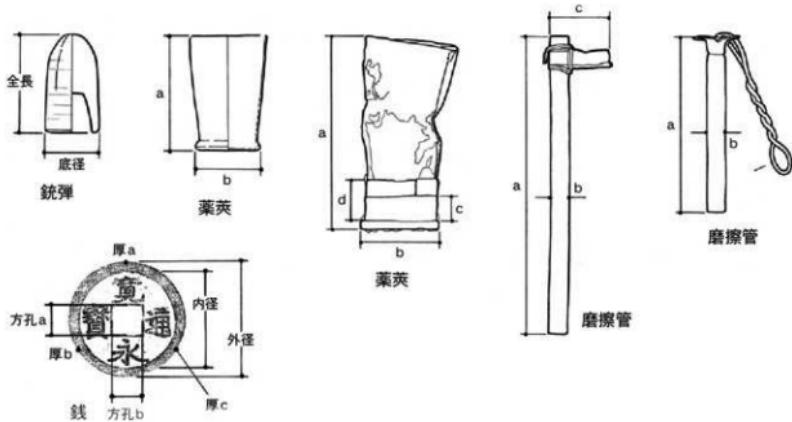
第102図 その他出土陶磁器・ガラス製品実測図（1／3）



第103図 その他出土金属製品実測図1 (2/3・1/2)



第104図 その他出土金属製品実測図 2 (2/3・1/2)



第105図 金属製品計測部位凡例

(6) 動物遺存体 (第7表)

動物骨・人骨が少量ながら出土している。平成26年度、熊本城における他の調査区出土資料とともに、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム沖田絵麻氏に同定を依頼し、現在、原稿作成中である。本報告書では観察表をもって記す。動物骨については沖田絵麻氏、人骨については同ミュージアム大藪由美子氏より観察所見をいただいている。なお、詳細報告は別稿にて掲載することとする。

第3表 陶磁器・土器類観察表

※統制陶磁器における生産者別標示記号(通称「統制番号」)と生産者名の対象は註文献に従う¹⁵⁾。

五階御櫓跡出土陶磁器・土器類

報告 図-Nr	実測Nr	出土位置	焼成形態	器種	計測値(単位:cm、括弧内は復元値)	产地	生産年代
77-1	陶50	9トレンチ	陶器	搖鉢		備前	13c 中～14c 前
		備前燒中世2期、口縁部上面は平坦、外面部ユビ押え後模ナデ、内面模ナデ後摺目					
77-2	陶42	G1080. I層	青花	碗	底径(42)	瀬戸窯系	16c 末～17c 初
		外面部高台まで施釉(高台内流れ込みあり)、内面は白化粧確認。内底文字「福」					
77-3	陶18	G1081. I層	青磁	碗	口径(11.8)	肥前	17c 中
		外面部文様は織紋線による花文					
77-4	陶106	G1180. II層	磁器染付	碗	口径11.8 高台径5.0 器高6.4	肥前	17c 末～18c 初
		内外とも菊花文・水照文(地文)、高台見込み角振路					
77-5	陶16	G1081. I層	磁器染付	碗(端反)	口径(10.8) 高台径4.8 器高5.9	肥前系	19c 初～中
		内底蛇の目軸済ぎ、外面部文様は雪持笠、内底文様は井桁					
77-6	陶19	G1081. I層	磁器染付	碗(端反)	口径(10.8)	肥前系	19c 初～中
		外面部主文は鶴・海・連山、内面部露文					
77-7	陶9	G9-81. I層	磁器染付	碗(端反)	口径(10.7)	肥前系	19c 初～中
		外面部虫籠文、内面部縁部露文					
77-8	陶17	G1081. I層	磁器染付	碗(端反)	高台径4.4	肥前系	19c 初～中
		内底蛇の目軸済ぎ、外面部文様はよろけ筋、内底文様は岩波					
77-9	陶46	G10-79. I層	陶器	皿	底径3.9	肥前	1590～1610年代
		灰釉(表面灰黄褐色)、外面部下位以下露胎、内底胎土、内底鉄釉の斑					
77-10	陶48	搅乱(G9-81)	陶器	皿	底径(4.5)	肥前	1610～1630年代
		胎土橙色、灰釉(表面にぶい橙色、白濁目立つ)、高台殷付以外施釉、内底砂目					
77-11	陶47	G1080. I層	陶器	皿	底径4.5	肥前	1610～1630年代
		灰釉(表面灰オリーブ色、賞入目立つ)、總輪、内底砂目、高台殷付は片付着輪					
77-12	陶58	G1181. I層(主) * G10-81. I層	磁器染付	皿	口径(13.6) 高台径5.6 器高4.0	網田焼	19c 中
		外須は暗緑色、内面部文様は二重格子、内底成なる緋の目軸済ぎ、高台下位(内側)と内底に釉纏れ					
77-13	陶109	G1181. II層	硬質陶器釉下彩	小皿	口径(10.7) 高台径5 器高3.0	F-ソーン窯	1840～1864年
		内面型押しによる花弁、銅版転写、酸化クロム、高台内黄印(GEM D & Co)(Gは底面により転写されず)・刻印(除削)は円形(DAWSONS3)(不明瞭)					
77-14	陶41	G10-79. I層	陶器	皿		国外か	不明
		胎土淡灰色、キメ細かい。内面は墨象嵌による崩離・流文					
77-15	陶52	G1181. I層	土器師	环	口径(15.1) 底径(11.0) 器高3.2	在地	17c
		厚手、胎土にぶい橙色・混入物多(長石・石英・角閃石粒目立つ)、外面部縁部～体部・内面部縁部～底部外周回転ナデ、外底手持もハラケズリ					
77-16	陶43	G10-79. I層	青花	小鉢		景徳鎮系	16c 末～17c 初
		波状口縁、美舟手、外面部内面文様による難・難					
77-17	陶14	G9-80. III3層	陶器	搖鉢		備前	16c 末～17c 初
		備前燒近世1期、斜方向の槽日は9本1單位					
78-18	陶80	搅乱(G9-81)	磁器	飯碗	口径15.2 高台径6.2 器高6.2	岐阜	1941～46年
		胎土やや黄ばむ、褐釉、高台見込み統制番号「岐945」(陽刻)、生産者:岐阜県駄知町 加藤深三郎					
78-19	陶72	G10-80. I層	磁器釉下彩	小碗	口径7.3 高台径3.1 器高5.1	不明	19c 末～20c 前
		吹き墨、外面部文様は宝・花弁、吹き墨は暗い緑褐色、小楕下げ紐の緒の点と花弁中心の点は赤褐色(盛り上り)、高台内施釉は掛けこぼし					
78-20	陶73	G11-78. I層	磁器釉下彩	碗(筒形)	口径(7.6) 高台径3.6 器高4.9	不明	20c 前～中
		胎土ガラス質、外側面は綫方向の変形縞(鉢袖)、外面部腰部・高台内は鉄葉積付					
78-21	陶10	G8-81. III3層	磁器染付	皿	高台径5.8	肥前系	19c 後(近代)
		酸化コバルト、内底蛇の目軸済ぎ・アルミナ布、内外とも体部露文、内底十字文					
78-22	陶83	G9-78-79	磁器釉下彩	小皿	口径(9.2) 高台径4.3 器高2.7	岐阜	1941～46年
		平面精円形、内面文様は蘭(矢須)、高台見込み統制番号「岐」(ゴム版、酸化クロム)、第89回37とセットか					
78-23	陶66	G11-79. I層	磁器染付	小杯	口径5.2 高台径1.9 器高2.9	不明	近代
		胎土ガラス質、酸化コバルト、外面部文様は東山山水・蓬山風景、24とセット					

78-24	陶68 G11-78. I層	磁器染付	小环	口径5.1 高台径1.7 器高2.7	不明	近代
	胎土ガラス質、酸化コバルト、外面文様は東屋山水・蓬山風景、23とセット					
78-25	陶69 G11-78. I層	磁器染付	小环	口径5.0 高台径1.8 器高2.8	不明	近代
	胎土ガラス質、酸化コバルト、外面文様はクロロ回転を利用した螺旋状線					
78-26	陶65 G11-80. I層	磁器染付	小环	口径5.5 高台径2.0 器高3.0	不明	20c前～中
	胎土ガラス質、酸化コバルト、ゴム版給付、外面主文は梅花(3単位)、第389回42とセット					
78-27	陶70 G10-80. III層	磁器染付	小环	口径7.1 高台径2.8 器高4.0	不明	19c
	胎土ガラス質、外面主文は文字(牡丹(ほたん)) (同一個体小片には「黄」)、高台見込みにも同様あり					
78-28	陶67 G11-79. I層	磁器釉下彩	小环	口径7.3 高台径2.7 器高3.1	不明	20c前
	内面花文、吹き墨(花卉輪郭)は酸化コバルト・墨しへは桃色					

五階御櫓跡下トレニチ出土土器類

報告 団-№	実測№	出土位置	焼成形態	器種	計測値(単位:cm, 括弧内は復元値)	産地	生産年代
82-1	陶15	2トレンチI層	土師質	フイゴ羽口	口径6.5 底径8.6 高さ13.3	不明	江戸後期以降
		搬広がり、上位(口縁部付近)にガラス質粉物付、表面浅黄褐色・体部中位は変色(黄ばんだ灰白色)、外面筒部ナデ、瓶部は内外とも回転ナデ					

百間御櫓跡出土陶磁器・土器類

報告 団-№	実測№	出土位置	焼成形態	器種	計測値(単位:cm, 括弧内は復元値)	産地	生産年代
87-1	陶35 F91-82. I層	土師器	环	口径(14.0) 底径(9.4) 器高3.6	在地か	中世	
		厚手、胎土浅黄褐色、内外面とも口縁部～体部回転ナデ、外底調整不明					
87-2	陶54 F90-82. I層	土師器	环	口径(13.6) 底径(6.8) 器高3.6	在地か	15c～16cか	
		厚手、胎土明赤褐色・混入物多(赤褐色・角石目立つ)、内外とも口縁部～体部回転ナデ、外底系切り離し、内底螺旋状の沈線					
87-3	陶24 F95-82. I層	瓦質土器	火鉢	-	在地	14c～17c前	
		深鉢形、胎土角石目立つ、外面下位回転ナデ後回転ヘラケズリ、外面底部脇部はヘタリを処理するための横ナデ					
87-4	陶59 6トレンチ	磁器染付	碗蓋	口径8.3 つまり徑3.5 器高2.7	肥前系	19c初～中	
		端反碗蓋、外面文様は海浜風景・松竹梅、内面文様は口縁雷・見込み松竹梅円形					
87-5	陶32 F93-79. II層	磁器染付	碗(端反)	口径(10.2)	肥前系	19c初～中	
		呂須溝なし、外側若松文					
87-6	陶28 F94-79. II層	陶器	皿	高台径(4.4)	肥前	1610～1630年代	
		胎土浅黄色、灰釉(オーリーブ色を帯びた灰白色)、外面高台外側面まで施釉(高台内流れ込みあり)、内底砂目					
87-7	陶44 F95-80. I層	青花	皿	底径(4.0)	津州窯系	16c末～17c初	
		外側体部下位以下露胎、内外面とも化粧土難認、内底蛇の目剥落ぎ、内外圈輪線					
87-8	陶53 G8-80. I層	土師器	小皿	口径(5.9) 底径3.2 器高1.1	在地	17c中以降	
		薄手、胎土浅黄褐色、外面口縁部～体部、内面口縁部～底部回転ナデ、外底糸切り離し					
87-9	陶49 3トレンチ	陶器	擂鉢	-	備前	16c末～17c初	
		備前焼近世1期、標目は縱方向10本1単位、斜方向7本1単位					
87-10	陶1 F88-82. II層一括資料	土師質	不明壺	口径4.8	不明	不明	
		a.類、長颈、胎土雲母微粒目立つ、燒成硬い、内面指部しほり痕					
87-11	陶6 F88-82. II層一括資料	土師質	不明壺	口径4.5 脚部最大径17.1	不明	不明	
		a.類、肩部4箇所穿孔、頭頂、胎土雲母粒目立つ、燒成硬い、内外とも脚部回転ナデ					
87-12	陶5 F88-82. II層一括資料	土師質	不明壺	口径2.1 脚部最大径(18.0)	不明	不明	
		a.類、肩部4箇所穿孔、短・細頸、胎土雲母粒目立つ、燒成硬い、脚部叩き彫形(外面平行条縞タキ・内面同心円当て具)、内面頭部しほり痕、肩部ユビ押え					
87-13	陶3 F88-82. II層一括資料	陶器	不明壺	口径1.5 脚部最大径14.6	不明	不明	
		a.類、肩部4箇所穿孔、細頸、胎土赤褐色、外面～内面口縁部鉄錆 or 地上布、内面露胎、外面脚部平行条縞タキ					
87-14	陶4 F94-79. I層	土師質	不明壺	底径12.6	不明	不明	
		a.類、胎土雲母微粒目立つ、燒成硬い、外底糸切りナデ後ハ記号					
87-15	陶12 F88-82. II層一括資料	陶器	不明壺	口径4.0 底径8.1 脚部最大径14.1 器高11.6	不明	不明	
		b.類、脚部V型帶・4箇所穿孔(1箇所は貫通)、胎土紫褐色～灰褐色、内面頭部しほり痕					
88-16	陶11 F88-82. II層一括資料	陶器	不明壺	底径8.3 脚部最大径(15.4)	不明	不明	
		b.類、脚部V型帶・4箇所穿孔(2箇所は残存、1箇所は貫通)、胎土赤褐色、内底中央にユビ押え(底部板整形)					
88-17	陶105 F88-82. II層一括資料	陶器	不明壺	底径7.8 脚部最大径14.2	不明	不明	
		b.類、脚部V型帶・4箇所穿孔(3箇所残存、1箇所は貫通)、胎土紫褐色、外面中下位に自然韌					

報告 団 - N 番号	実測No	出土位置	焼成形態	器種	計測値(単位: cm) 梱弧内は復元値	産地	生産年代
							参考
88-18	陶104	F88-82. II 1層一括資料	陶器	不明壺	底径10.4 脚部最大径14.1	不明	不明
b 鍋	副部中央空部の内壁裏直・4箇所穿孔(1箇所は貫通)、胎土灰色~紫褐色。外面体部沈線・条線(3~4本/cm)、外底へテ記号。外面肩部朱書き文字						
88-19	陶61	F88-82. II 1層一括資料	陶器	小碗	口径(7.2) 高台径2.8 器高4.2	関西系	19c 後(近代)
	不明壺群と一括出土。胎土黄ばむ。灰釉(細かい貫入目立つ)。高台見込み上絵紋「星宿」(赤)						
88-20	陶74	F94-79. II 1層	陶器	小碗	口径(6.9) 高台径3.9 器高5.6	関西系	近代
	胎土黄ばむ。灰釉(細かい貫入目立つ)。高台見込み上絵紋「星宿」(赤)						
88-21	陶107	F95-79. II 1層	磁器染付	平形碗	口径(11.2) 高台径4.3 器高4.7	肥前系	19c 後~ 20c 初
	型紙捺り。酸化コバルト。外面主文は瓜・鳥・変形蓮瓣、内面口縁部文様は幾唐						
88-22	陶64	F93-79. I 層	磁器色絵	飯碗	口径15.1 高台径5.3 器高7.3	不明	20c 前~中
	胎土ガラス質。上絵は赤色が残存。ゴム版絵付け。外面主文は沙綾・四方陣・菊、内面口縁文は幾唐						
88-23	陶63	F93-79. I 層	磁器色絵	飯碗	高台径5.4	不明	20c 前~中
	胎土ガラス質。上絵は赤色が残存。ゴム版絵付け。外面主文は沙綾・四方陣・菊						
88-24	陶79	F92-79. I 層(主) + F93-79. I 層 磁器染付	碗	口径14.8 高台径6.0 器高6.3	岐阜	1941 ~ 46年	
	胎土ガラス質。酸化コバルト。ゴム版絵付け。外縁主文は上位四方陣・下位よろけ縞。内底文様は海浜鳳凰。高台見込みに統制番号「岐351」(ゴム版)、口紅(口唇部鉢輪)						
89-25	陶76	F93-79. I 層	磁器釉下彩	碗	口径14.9 高台径5.8 器高6.3	不明	20c 前~中
	胎土ガラス質。酸化クロム(青緑色)。外面文様は15本1単位の縱縞。内面文様は17本1単位の縱縞と墨書きによる螺旋。口紅。第10285とセット						
89-26	陶75	8トレンチ	磁器染付	小碗	口径(8.1) 高台径2.9 器高4.9	不明	20c 前~中
	胎土ガラス質。酸化コバルト。ゴム版絵付け。外面主文は沙綾・四方陣・体部二重斜格子とよろけ縞						
89-27	陶81	F92-79. I 層 + F93-79. I 层	磁器釉下彩	飯碗蓋	口径14.2 つまり6.6 器高4.3	不明	20c 前
	軍用食器。酸化クロム。外面口縁部に二重縞						
89-28	陶86	F93-79. I 層	磁器釉下彩	小碗	口径(8.9) 高台径3.8 器高4.9	不明	20c 前
	軍用食器。胎土ガラス質。酸化クロム。外面口縁部下に二重縞						
89-29	陶87	F92-79. I 層	磁器釉下彩	小碗	口径7.8 高台径3.4 器高4.4	不明	20c 前
	軍用食器。酸化クロム。外面口縁部下に三重縞						
89-30	陶91	F92-79. I 層	磁器色絵	湯呑碗	口径6.0 高台径4.0 器高7.1	不明	20c 前
	軍用食器。胎土ガラス質。外面体部の上絵は手書き「佐藤」(色は消失)						
89-31	陶90	F92-79. I 層	磁器釉下彩	湯呑碗	口径(6.3) 高台径3.7 器高7.3	岐阜	1941 ~ 46年
	軍用食器。胎土ガラス質。高台見込み統制番号「岐462」(ゴム版、酸化クロム)。生産者: 岐阜県定林寺 丹羽竹夫						
89-32	陶97	F92-79. I 層	硬質陶器色絵	皿	口径(17.7) 高台径(9.4) 器高2.1	小倉か	20c 前
	内面口縁の上絵はゴム版絵付けか。葡萄文(色は消失)。高台内裏印は銅版転写(酸化クロム)「(TOYOTO) KI」(岐351内丸、東洋陶器(1917年以降))						
89-33	陶98	22トレンチ	硬質陶器釉下彩	皿	底径(8.0)	不明	20c 前~中か
	高台内裏印の印章不明・ゴム版絵付け・酸化クロム						
89-34	陶96	F95-80. I 層	青磁	小皿	口径(10.7) 高台径(6.0) 器高1.9	不明	近代以降
	胎土ガラス質。青磁は青緑色。高台内には透明釉						
89-35	陶95	21トレンチ	青磁染付	皿	口径(12.0) 高台径5.3 器高2.3	肥前系	19c 後(近代)
	胎土灰色味。内底絞の目輪剥落・泥漿付着。内面青磁釉・外面透明釉。口沿の垂りと内底の二重巻頭は酸化コバルト						
89-36	陶94	F98-81. I 層	磁器釉下彩	皿	口径(12.1) 高台径5.9 器高2.5	不明	19c 末~ 20c 前
	胎土ガラス質。内面文様は銅版転写による菖蒲(緑は酸化コバルト・花弁緑は桃色)。外面高台脇と高台内に圓線(酸化コバルト)。口紅						
89-37	陶82	F92-79. I 層	磁器釉下彩	変形小皿	口径2.2 ~ 8.6 高台径4.2 器高2.4	岐阜	1941 ~ 46年
	平面稍円形。内面文様は蘭(酸化コバルト)。高台見込み統制番号「岐219」(ゴム版、酸化クロム)。生産者: 岐阜県尾市之倉村 安藤喜七						
89-38	陶93	G10-81. I 層	磁器釉下彩	鉢	口径11.3 高台径5.8 器高2.2	不明	20c 前~中頃
	口縁外側から連続押捺による輪花。胎土ガラス質(酸化コバルトの色調が胎土に浸透)。内底文様は万葉音、草は酸化コバルト。花は赤褐色(盛り上り)						
89-39	陶78	F92-79. I 層(主) + F99-81. I 層	磁器釉下彩	鉢	口径11.8 高台径4.5 器高5.5	不明	20c 前~中
	胎土ガラス質。口唇は刷毛目・酸化コバルト。外面口縁文様は不整形の連続スタンプ(黒色)。内面文様は折枝梅、枝は手描き・墨・シベはゴム版(酸化コバルト)。花弁・葉は白盛り絞						
89-40	陶89	F93-79. I 層	白磁	鉢	口径(11.8) 高台径5.1 器高6.2	有田	1941 ~ 46年
	軍用食器。内底は陸軍の皇章文貼付。外底統制番号「有8」(陰刻)。41と入子						
89-41	陶88	F92-79. I 層	白磁	鉢	口径(14.1) 高台径6.0 器高6.2	有田	1941 ~ 46年
	軍用食器。内底統制番号「有8」(陰刻)。40と入子						

89-42	陶71 F98-81. I層	磁器染付	小环	口径(5.5) 高台径(1.9) 器高3.1	不明	20c 前～中
胎土ガラス質、酸化コバルト、ゴム版販付け、外面文様は梅花(3単位)、第78回26とセット						
89-43	陶103 8トレンチ	磁器染付	小环	口径(4.9) 高台径(1.9) 器高2.8	不明	近代
胎土ガラス質、酸化コバルト、外面文様不明(唐草か)						
89-44	陶85 8トレンチ	磁器色絵	小环	口径5.6 高台径2.1 器高3.0	不明	1940年
胎土ガラス質、内面桜花の輪郭は釉下彩吹き墨(酸化クロム)、赤絵で内底に「末社改築記念」、外側面に「(皇紀)二千六百年」括弧内欠						
89-45	陶108 F98-82. II層	磁器染付	段重	口径(9.0) 高台径(7.6) 器高2.6	肥前系	19c 後～20c 初
型紙折り、酸化コバルト、外面主文花鳥・花菱、高台脇(露輪)に泥染付着						
89-46	陶31 F94-79. II層	磁器染付	麦食蓋	口径(6.3) 器高0.9	肥前系	19c 後(近代)
内面天井部細かい溝状の凸凹(テテ調整無し)、外面文様は東浦山水(酸化コバルト)						
89-47	陶84 8トレンチ	磁器釉下彩	缶詰蓋	口径6.7 受け部径8.4 器高1.4	肥前系	1941～46年
防衛容器蓋、鉄輪、ゴム版販付け、上面特許(真空容器)→(-) / フタツ取ル(ニハ釣) / クボミニ穴ワ(アケ)・丸内「防18括弧内欠						
90-48	陶62 F100-82. I層	白磁	骨質	長さ20.7 外径1.4 内径0.8～0.9	不明	19c 末～20c
細い円柱に粘土を巻き付けて成形(外面接合痕)、管の端面のみ施釉						
90-49	陶110 F95-81. I層	土師質	マイヨロ		不明	江戸中期以降
上位(口縁部付近)片、ガラス質溶融物付着						
90-50	陶27 16トレンチ	瓦質	マイヨロ		不明	江戸中期以降
胎土白色微粒・黒灰色粒目立つ、焼成度低い(二次被熱によるものか)、上位(口縁部～体部上位)ガラス質溶融物付着顕著						
90-51	陶25 F95-79. II層	土師質	マイヨロ	底径4.2 体部径3.4～3.5	不明	江戸中期以降
小形、体部下位に二重沈線(雜)、上位(口縁部～体部上位)ガラス質溶融物付着・表面剥落、表面浅黄褐色・体部上位は変色(橙色を帯びた灰白色)						
90-52	陶26 16トレンチ	土師質	マイヨロ	底径3.8 体部径3.2～(3.5)	不明	江戸中期以降
小形、体部中位胴張り、表面浅黄褐色、外面斜削(小判形の枠内文字、訛説不明)						

隕御櫓・堀跡出土陶磁器・土器類

報告 図-N 備考	実測No	出土位置	焼成形態	器種	計測値(単位:cm、括弧内は復元値)	産地	生産年代
101-1	陶22 11トレンチ	土師器	环	口径(12.9) 底径(8.4) 器高3.3	在地	9c 前～中	
胎土金雲母微粒目立つ、内外とも口縁部～体部回転ナダ、外底ヘラ切り離し後未調整、内底静止ナダ、外底を除き赤彩							
101-2	陶39 11トレンチ	土師器	环	口径(13.3)	在地	9c 前～中	
胎土金雲母微粒目立つ、内外とも口縁部～体部回転ナダ、口縁～体部赤彩							
101-3	陶56 12トレンチ	土師器	小皿	口径(7.0) 底径(5.0) 器高2.1	在地	13c 末～17c 前	
厚手、胎土にぶい黄褐色、内外とも口縁部～体部回転ナダ、外底糸切り離し、内底回転ナダ後粗い静止ナダ							
101-4	陶55 12トレンチ	土師器	环	口径(14.8) 底径(7.9) 器高2.9	在地	江戸後期以降	
薄手、焼成直、胎土黄ばんだ灰白色、内外とも口縁部～体部回転ナダ、外底糸切り離し後ヘラケズリ、内底ナダ(平滑)、内面下位沈線、内外とも油煙付着							
101-5	陶21 11トレンチ	陶器	皿	高台径4.7	肥前	1610～1630年代	
胎土浅黄褐色、灰釉(表面にぶい黄褐色)、外面体部下位露胎、内底紺目							

その他出土陶磁器

報告 図-N 備考	実測No	出土位置	焼成形態	器種	計測値(単位:cm、括弧内は復元値)	産地	生産年代
102-1	陶51 石垣工事(東)	陶器	碗	口径(12.8)		肥前	1590～1610年代
灰釉(表面灰化、白濁目立つ、外側体部下位は物縮れ)							
102-2	陶7 石垣工事(南)	磁器染付	碗(端反)	口径(8.7) 高台径(3.4) 器高5.2	肥前系	19c 初～中	
外面は中央に花灯形の枠(仲文様欠)・両脇に花文(牡丹か)、側面に難文、内面は口縁部畫文・底部松竹梅円形文							
102-3	陶60 石垣工事(南)	磁器染付	碗(小丸)	口径(6.3) 高台径3.4 器高5.9	肥前系	19c 初～中	
外面主文は風に舞く薄、高台疊付は白色泥染付着顕著							
102-4	陶8 石垣工事(南)	磁器染付	猪口	底径(6.5)	肥前系	18c 末～19c 中	
蛇の目彫高台、文様は地面のみ							
102-5	陶77 石垣工事(東)	磁器釉下彩	碗	口径(14.9) 高台径(5.8) 器高6.3	不明	20c 前～中	
胎土ガラス質、酸化クロム(青緑色)、外面文様は14本1単位の報縞、内面文様は10本1単位の報縞と墨書きによる螺旋、口紅、第89回25とセット							

第4表 金属製品観察表

凡例：計測値（長さ）はmm単位である。数値は、鉄製品については鋸化しているため整数、銅製品・鉛製品等については小数点第1位までを表記している。なお、折れ曲がったり、波打つように歪んだりした資料、部位については、巻尺を当てて計測している。その場合、表記は整数としている。なお、いくつかの形態については計測部位を記号化している（第105図参照）。

五重階櫓出土金属製品

団-Na	実測No	出土位置	名称	計測値(mm, g)	備考
79-29	金228	G10-80, I層	飾り全具		金銅、仏具の飾りか
79-30	金188B	G10-81, III層	火薬筒界orゲベル筒界	径16.0～16.2 重さ233	鉛製、錫パリあり、未使用
79-31	金188A	G10-81, III層	火薬筒界orゲベル筒界	径12.5 变形幅15.1 重さ232	鉛製、異形(算様)、錫パリあり、未使用
79-32	金195	G10-80, III層	火薬筒界	径24～25 重さ49.5	鉛製
79-33	金194	G10-80, III層	口巻入れ蓋	高さ25.5 幅51.2×22.2 1kg±7.7	銅製、本体のカバー
79-34	金158	G9-81, I層	エンフィールド銃弾	全長25.3～25.4 底径14.1～14.2 重さ340	鉛製、a類(ブリチエット弾)、錫パリあり、未使用
79-35	金187B	G8-81, III層	エンフィールド銃弾	全長26.7～26.9 底径14.3～14.5 重さ324	鉛製、a類(ブリチエット弾)、未使用
79-36	金187A	G11-81, II層	エンフィールド銃弾	全長27.6 底径14.5～14.7 重さ346	鉛製、a類(ブリチエット弾)、未使用
79-37	金161	G10-80, I層	エンフィールド銃弾	全長25.1～25.4 底径13.0～15.2 重さ332	鉛製、b類、使用弾(施条があり)
79-38	金184B	G8-80, I層	エンフィールド銃弾	全長27.5～27.6 底径14.4～14.5 重さ324	鉛製、b類、錫パリあり、未使用
79-39	金154	G9-80, I層	エンフィールド銃弾	全長26.6 底径14.5～14.6 重さ339	鉛製、b類、錫パリあり、未使用
79-40	金162	G10-80, I層	エンフィールド銃弾	全長25.5 底径14.2～14.4 重さ318	鉛製、b類、錫パリあり、未使用
79-41	金189B	G10-81, III層	エンフィールド銃弾	全長25.6～25.8 底径14.4～14.5 重さ315	鉛製、b類、錫パリあり、未使用
79-42	金189D	G10-81, III層	エンフィールド銃弾	全長27.4～27.8 底径12.1～15.6 重さ334	鉛製、b類、錫パリあり、未使用
79-43	金189E	G10-81, III層	エンフィールド銃弾	全長26.8～26.9 底径14.4 重さ342	鉛製、b類、未使用
79-44	金192	G8-80, III層	エンフィールド銃弾	全長27.6～27.7 底径14.0～14.2 重さ313	鉛製、b類、未使用
79-45	金189C	G10-81, III層	エンフィールド銃弾	全長16.4～16.5 底径14.6 重さ328	鉛製、b類、未使用
79-46	金175	G10-81, I層	エンフィールド銃弾	全長26.5～26.7 底径15.2～15.8 重さ339	鉛製、b類、未使用
79-47	金189A	G10-81, III層	エンフィールド銃弾	全長25.2 底径14.5～14.6 重さ31.1	鉛製、b類、錫パリあり、未使用
79-48	金184A	G10-80, I層	エンフィールド銃弾	全長25.9～26.0 底径14.7～14.9 重さ331	鉛製、b類、未使用
79-49	金176	G10-81, I層	ミニエー銃弾	全長26.8 底径11.3～15.2 重さ30.4	鉛製、異形(弾底凹部に突起)、未使用
79-50	金157	G9-81, I層	スペンサー銃素弾	a 30 b 16	銅製、打痕認められず
80-51	金150	G9-80, I層	スナイドル銃素弾	a 49 b 20 c 10 d 6	底板は鉛製・他は銅製、打痕明瞭
80-52	金152	G9-80, I層	スナイドル銃素弾	a 50 b 20 c 10 d 6	底板は鉛製・他は銅製、打痕明瞭
80-53	金185B	G11-81, II層	スナイドル銃素弾	a約43 b 20 d 5	底板は鉛製・他は銅製、打痕明瞭
80-54	金185A	G11-81, II層	スナイドル銃素弾	b 18.5～19.0 d 4.7～4.8	底板・カッコとも銅製・一体、マークIか、打痕明瞭
80-55	金173	G10-81, I層	スナイドル銃素弾	b 20 c 10 d 6	底板は鉛製・他は銅製、打痕明瞭
80-56	金170	G10-81, I層	スナイドル銃素弾	b 20 c 10 d 6	底板は鉛製・他は銅製、打痕明瞭
80-57	金151	G9-80, I層	スナイドル銃素弾	b 20 c 11 d 7	底板は鉛製・他は銅製、打痕明瞭
80-58	金172	G10-81, I層	スナイドル銃素弾	b 20 c 10 d 6	底板は鉛製・他は銅製、打痕明瞭
80-59	金171	G10-81, I層	スナイドル銃素弾	b 20 c 11 d 6	底板は鉛製・他は銅製、打痕明瞭
80-60	金191	G10-81, III層	スナイドル銃素弾	b 20 c 10 d 6	底板は鉛製・他は銅製、打痕明瞭
80-61	金174	G10-81, I層	スナイドル銃素弾	b 20 c 10 d 5	底板は鉛製・他は銅製、打痕明瞭
80-62	金163	G10-80, I層	30式or38式銃素弾	a 50.7 b 12.2 外口径7.4～7.5	銅製、打痕明瞭
80-63	金164	G10-80, I層	30式or38式銃素弾	a 54.9 (本栓込み) b 12.2 外口径7.4	銅製、打痕認められず、本栓あり、火薬残存
80-64	金182	G11-80, I層	筒形不明銅製品	長さ4.5～ 管径6.9～8.6	火薬？充填、シャープス銃ディスクブライマーか
80-65	金159	G9-81, I層	I字形摩擦管	a 45.3 b 5.3～5.5	銅製、未使用(ワイヤーラーブあり)
80-66	金181	G11-80, I層	I字形摩擦管	a 44.2 b 5.5～5.7	銅製、未使用(ワイヤーラーブあり)
80-67	金190	G11-80, III層	I字形摩擦管	a 45.5 b 5.6～5.7	銅製、未使用(ワイヤーラーブは根元で切断)
80-68	金168	G10-80, I層	I字形摩擦管	a 45.8 b 5.4～5.5	銅製、ワイヤーラーブ無し
80-69	金169	G10-80, I層	I字形摩擦管	a 45.7 b 5.3	銅製、ワイヤーラーブ無し
80-70	金165	G10-80, I層	I字形摩擦管	a 45.7 b 5.3～5.5	銅製、ワイヤーラーブ無し
80-71	金153	G9-80, I層	I字形摩擦管	a 45.6 b 5.5～5.8	銅製、ワイヤーラーブ・本栓無し
80-72	金226	G9-81, III層	杓子形銅製品	複数 球部幅11.0 軸部幅～4.2	軸部に数箇の深い溝あり、軸部先端折れ曲がる
80-73	金186	G11-81, II層	四斤砲弾		鉛製、砲翼は鉛製
80-74	金183	G10-80, II層	四斤砲弾		鉛製、砲翼は鉛製
81-75	金167	G10-80, I層	ライフル砲弾	推定底部径14.7	鉛製、初期は鉛製、内面に凹線

81-76	金227	G10-80. III層	切羽	長約50.6 短約32.3 厚さ13~16	銅製
81-77	金156	G8-81. I層	ベルト金具	輻軸長56.6 幅15.7	銅製、バックル部カン
81-78	金193	G8-80. II層	ベルト金具	輻軸長58.2 幅20.5	銅製、バックル部カン
81-79	金177	G10-81. I層	鉗	上蓋21.0 能高11.5 上蓋高7.0	銅製。周縁に刻み、若宮官軍墓地に同形態あり
81-80	金229	G10-80. I層	洪武通宝	外径9.2 内径18.7 方孔 a6.2 b6.4 厚さ1.1 b1.0 c1.3	和銅錢(加治本錢)か
81-81	金251-2	G9-80. III層	寛永通宝	外径24.4 内径19.5 方孔 a5.7 b5.8 厚さ1.3 b1.3 c1.5	古寛永、寛永3年(1626)初鋤
81-82	金253-2	G10-79. I層	寛永通宝	外径24.1 内径19.7 方孔 a5.6 b5.6 厚さ1.3 b1.3 c1.4	古寛永、寛永3年(1626)初鋤
81-83	金250	G9-79. I層	寛永通宝	外径22.9 内径17.4 方孔 a6.3 b6.3 厚さ1.1 b1.0 c1.1	新寛永、齊元、寛保元年(1711)大阪高津新堆にて初鋤
81-84	金251-1	G9-80. III層	寛永通宝	外径22.9 内径18.2 方孔 a6.5 b6.4 厚さ1.1 b1.2 c1.1	新寛永、元禄13年(1700)京都七条橋に共通
81-85	金178	G10-81. I層	十錢銀貨	外徑19.5 孔径5.0 緯厚17~18	昭和19年(1944)
81-86	金253-1	G10-79. I層	五錢白銅貨	外徑19.0 孔径3.8 緯厚12	大正11年(1922)、小型
81-87	金166	G10-80. I層	一錢銅貨	外徑22.0 緯厚13	大正8年(1919)
81-88	金160	G10-78. I層	一錢銅貨	外徑22.0 緯厚14	昭和13年(1938)
81-89	金180	G11-79. I層	一錢アルミ貨	外徑16.0 緯厚13	昭和18年(1943)
81-90	金155	G9-80. I層	不明銅製品	緯65.3 横(現況)145	把手か

五階御櫓跡下トレンチ出土金属製品

図-N	実測N	出土位置	名称	計測値(mm, g)	備考
84-2	金207	1トレンチII層	鍍金物か	鍵 96 橫64~67 幅13~16	鉄製、木質付着、長辺上端面削む(使用痕か)
84-3	金199	3トレンチI層	平頭釘	長57.0	鉄製、a類、胴部に木質付着
84-4	金204	1トレンチIII層	平頭釘	長5.48	鉄製、a類、胴部に木質付着
84-5	金222	2トレンチI層	平頭釘(瓦釘)	長さ287	鉄製、b類
84-6	金221	1トレンチI層	平頭釘(瓦釘)	長さ274	鉄製、b類
84-7	金197A	3トレンチII層	平頭釘	長さ148	鉄製、a類
84-8	金208	1トレンチI層	卷頭釘	長さ134	鉄製、a類
84-9	金209	2トレンチII層	卷頭釘	長さ138	鉄製、a類
85-10	金197B	3トレンチII層	卷頭釘	長さ142~	鉄製、a類
85-11	金206	1トレンチII層	卷頭釘	長さ128	鉄製、a類
85-12	金210	1トレンチII層	卷頭釘	長さ95	鉄製、a類、未使用
85-13	金197C	3トレンチII層	卷頭釘	長さ90	鉄製、a類、未使用
85-14	金203	1トレンチII層	卷頭釘	長さ37	鉄製、a類
85-15	金202	1トレンチIII層	卷頭釘	長さ534	鉄製、a類
85-16	金205	1トレンチII層	卷頭釘	長さ35	鉄製、b類、未使用
85-17	金200	2トレンチI層	火薬鉄弾	径28~29	鉄製
85-18	金196	3トレンチII層	四斤砲弾	釐定底径83	鉄製・砲身は鉛製
85-19	金223	1トレンチI層	不明鉄製品	長さ284	棒状、先端に抉り

百間御櫓跡出土金属製品

図-N	実測N	出土位置	名称	計測値(mm, g)	備考
92-57	金66	7トレンチ	板金物	厚さ0.5	金銅製、筋彫りによる唐草文、地は魚々打ち
92-58	金4	F88-82. II層	銅金物	長さ152 現幅20 広げた幅37	金銅製(表面のみ鍍金)、屋根形頂部の飾り、未使用
94-59	金5	F88-82. II層	銅金物	長さ139 幅18	金銅製(表面のみ鍍金)、山折り1箇所、未使用
94-60	金3	F88-82. II層	銅金物	長さ137 幅17	金銅製(表面のみ鍍金)、山折り1箇所、未使用
94-61	金1	F88-82. II層	銅金物	長さ137 幅17	金銅製(表面のみ鍍金)、山折り2箇所、未使用
94-62	金128	F91-82. I層	銅金物	長さ67 幅16	金銅製(表面のみ鍍金)、未使用
94-63	金9	F88-82. II層	銅金物	長さ41 幅16	金銅製(表面のみ鍍金)、未使用
94-64	金129	F91-82. I層	銅金物	長さ52 幅7	金銅製(表面のみ鍍金)、未使用
94-65	金26	F95-79. I層	銅金物	長さ139	鉄製、未使用か
94-66	金87	F95-80. I層	鉗釘	長さ90~	鉄製、頭部整形は叩き出し
94-67	金82	F95-80. I層	荷釘釘	長さ125	鉄製、a類、胴部に木質付着
94-68	金81	F95-79. I層	平頭釘	長さ53	鉄製、a類
94-69	金19	F95-79. II層	平頭釘	長さ84	鉄製、b類

図-N	実測N	出力位置	名称	計測値(mm, g)	備考
94 - 70	金29	F95-79, I層	卷頭釘	長さ48	鉄製, a類, 頭部に木質付着
94 - 71	金78	F95-79, I層	卷頭釘	長さ42 ~	鉄製, b類
95 - 72	金80	F95-79, I層	卷頭釘	長さ59	鉄製, b類
95 - 73	金84	F95-80, I層	卷頭釘	長さ123 ~	鉄製, b類
95 - 74	金6	F88-82, II層	火矢筒 or 大鉄砲鉄弾	径35.0 ~ 35.8 重さ264.3	鉄製, 銛バリ・鋳造時の覗あり, 未使用
95 - 75	金106	F100-81, I層	火繩鉄弾	径14.0 ~ 14.4 重さ16.6	鉄製, 銛バリあり, 未使用
95 - 76	金107	F100-81, I層	火繩鉄弾	径14.0 ~ 14.3 重さ15.7	鉄製, 銛バリあり, 未使用
95 - 77	金105	F100-81, I層	火繩鉄弾	径14.0 ~ 14.4 重さ16.0	鉄製, 銛バリあり, 未使用
95 - 78	金140	F90-82, I層	火繩鉄弾	径14.4 ~ 15.0 重さ15.1	鉄製, 未使用
95 - 79	金104	F100-81, I層	火繩鉄弾	径13.6 ~ 14.0 重さ15.1	鉄製, 銛バリあり, 未使用
95 - 80	金141	F90-82, I層	火繩鉄弾	径13.0 ~ 13.3 重さ12.4	鉄製, 銛バリあり, 未使用
95 - 81	金109	F97-82, I層	火繩鉄弾	径12.5 ~ 12.6 重さ11.0	鉄製, 未使用
95 - 82	金120	F92-82, I層	火繩鉄弾 or ゲベール鉄弾	径16.7 ~ 16.9 重さ27.2	鉄製, 未使用
95 - 83	金139	F90-82, I層	火繩鉄弾 or ゲベール鉄弾	径16.7 ~ 16.8 重さ26.6	鉄製, 銛バリあり, 未使用
95 - 84	金12	F95-79, II層	火繩鉄弾 or ゲベール鉄弾	径15.5 ~ 15.6 重さ21.3	鉄製, 銛バリあり, 未使用
95 - 85	金121	F92-82, I層	火繩鉄弾 or ゲベール鉄弾	径16.0 ~ 16.9 変形部幅14.4 重さ524.6	鉄製, 銛バリあり
95 - 86	金57	3レシナ	火繩鉄弾	径25 ~ 26 重さ55.1	鉄製
95 - 87	金138	F90-82, I層	火繩鉄弾	径24 重さ48.9	鉄製
95 - 88	金122	F92-82, I層	火繩鉄弾	径25 ~ 26 重さ50.0	鉄製, 銛バリあり
95 - 89	金125	F91-82, I層	火繩鉄弾	径23 ~ 25 重さ47.6	鉄製, 銛バリあり
95 - 90	金7B	F88-82, II層	火繩鉄弾	径24 ~ 25 重さ52.6	鉄製, 銛バリ・銅口痕あり
95 - 91	金7A	F88-82, II層	火繩鉄弾	径23 ~ 24 重さ47.2	鉄製, 銛バリ・銅口痕あり
95 - 92	金7C	F88-82, II層	火繩鉄弾	径24 ~ 25 重さ52.2	鉄製, 銛バリあり
95 - 93	金123	F92-82, I層	火繩鉄弾	径21 ~ 22 重さ32.0	鉄製
95 - 94	金126	F91-82, I層	火繩鉄弾 or 檻弾の弾子	径11 ~ 12 重さ52	鉄製
95 - 95	金124	F91-82, I層	南覆	平面75.9×9.4 ~ 9.9 幅~ 5.7	銅製
95 - 96	金142	F90-82, I層	火繩鉄弾部品	平面353×6.3 ~ 6.9 幅10.4 ~ 11.5	銅製, 竹節状装飾
95 - 97	金143	F90-82, I層	火繩鉄弾部品	平面292×6.1 ~ 7.6 幅7.1 ~ 8.4	銅製, 竹節状装飾
95 - 98	金127	F91-82, I層	火繩鉄弾部品	平幅312×5.2 ~ 6.6 幅~ 5.7	銅製
96 - 99	金130	F91-82, I層	火薙鉢	長さ229 頭部径6.9 輪外径38	銅製
95 - 100	金134	F91-82, I層	矢苦鉢	長さ43.4 頭部幅6.0×5.1 輪径27 ~ 33	銅製
95 - 101	金132	F91-82, I層	火繩鉄弾部品か	長さ45.8 頭部幅5.0 輪径2.8 ~ 3.3	銅製鉄
95 - 102	金133	F91-82, I層	火繩鉄弾部品か	長さ40.1 頭部幅7.4 輪径3.6 ~ 4.7	銅製鉄
95 - 103	金131	F91-82, I層	火繩鉄弾部品か	長さ55.3 頭部幅8.7 輪径5.2 ~ 5.5	銅製鉄
96 - 104	金32	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.4 ~ 28.7 底径15.0 ~ 15.8 重さ34.8	鉄製, b類, 広入木栓あり, 未使用
96 - 105	金49	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.0 ~ 28.2 底径14.8 ~ 15.0 重さ35.1	鉄製, b類, 広入木栓あり, 未使用
96 - 106	金45	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.0 底径14.1 ~ 14.6 重さ34.6	鉄製, b類, 広入木栓の木質付着, 未使用
96 - 107	金51	16トレンチ	柱入栓	高さ6.2 上面径7.3 ~ 7.4 底径11.1	木製, エンフィールド鉄弾に伴う
96 - 108	金46	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.6 ~ 28.7 底径14.5 ~ 15.2 重さ34.5	鉄製, b類, 銛バリあり, 未使用
96 - 109	金44	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.3 ~ 28.4 底径14.4 ~ 14.6 重さ35.0	鉄製, b類, 銛バリあり, 未使用
96 - 110	金42	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.6 ~ 28.9 底径14.4 ~ 14.7 重さ35.6	鉄製, b類, 未使用
96 - 111	金30	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.3 ~ 28.4 底径14.4 ~ 14.5 重さ35.2	鉄製, b類, 未使用
96 - 112	金27	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.3 底径14 ~ 14.7 重さ34.8	鉄製, b類, 未使用
96 - 113	金41	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.3 底径14 ~ 14.5 重さ34.8	鉄製, b類, 未使用
96 - 114	金35	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.5 底径14 ~ 14.3 重さ35.4	鉄製, b類, 未使用
96 - 115	金47	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.0 ~ 28.1 底径14.6 ~ 14.8 重さ34.5	鉄製, b類, 未使用
96 - 116	金34	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.1 ~ 28.2 底径14.2 ~ 14.4 重さ34.8	鉄製, b類, 未使用
96 - 117	金28	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.1 ~ 28.2 底径10.9 ~ 15.6 重さ34.7	鉄製, b類, 未使用
96 - 118	金43	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.2 ~ 28.3 底径14.3 ~ 14.5 重さ34.7	鉄製, b類, 未使用
96 - 119	金39	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.4 底径14.3 重さ35.0	鉄製, b類, 未使用
96 - 120	金26	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.0 ~ 28.2 底径14.3 ~ 14.4 重さ34.8	鉄製, b類, 未使用
96 - 121	金29	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.2 ~ 28.3 底径14.2 ~ 14.7 重さ35.0	鉄製, b類, 未使用
96 - 122	金50	16トレンチ	エンフィールド鉄弾	全長28.1 底径14.3 ~ 14.7 重さ34.9	鉄製, b類, 未使用

図-N	実測N	出土位置	名称	計測値(mm,g)	参考
96-123	金25	16トレンチ	エンフィールド銃弾	全長281～283 底径14.2～14.3 重さ347	鉛製、b類、未使用
96-124	金38	16トレンチ	エンフィールド銃弾	全長281 底径14.5～14.7 重さ347	鉛製、b類、未使用
96-125	金36	16トレンチ	エンフィールド銃弾	全長280～281 底径14.2～14.4 重さ346	鉛製、b類、未使用
96-126	金31	16トレンチ	エンフィールド銃弾	全長279～280 底径14.4～14.8 重さ343	鉛製、b類、未使用
96-127	金40	16トレンチ	エンフィールド銃弾	全長282 底径14.3～14.4 重さ348	鉛製、b類、未使用
96-128	金48	16トレンチ	エンフィールド銃弾	全長283～284 底径13.9～14.4 重さ349	鉛製、b類、未使用
96-129	金37	16トレンチ	エンフィールド銃弾	全長281～282 底径14.0～14.5 重さ350	鉛製、b類、未使用
96-130	金33	16トレンチ	エンフィールド銃弾	全長285 底径14.3～14.4 重さ348	鉛製、b類、未使用
96-131	金147	F88-82, I層	エンフィールド銃弾	全長263～267 底径13.4～15.1 重さ331	鉛製、a類(ブリヂエット弾)、使用弾
96-132	金118	F92-82, I層	エンフィールド銃弾	全長237～272 底径14.6～15.6 重さ367	鉛製、a類(ブリヂエット弾)、使用弾
96-133	金114	F93-79, I層	エンフィールド銃弾	全長262～265 底径11.9～14.9 重さ311	鉛製、a類(ブリヂエット弾)、使用弾
96-134	金56	3トレンチ	エンフィールド銃弾	全長264～266 底径14.5 重さ356	鉛製、a類(ブリヂエット弾)、説バ(ア)、未使用
96-135	金146	F88-82, I層	エンフィールド銃弾	全長266～267 底径14.4～14.8 重さ367	鉛製、a類(ブリヂエット弾)、説バ(ア)、未使用
96-136	金59	4トレンチ	エンフィールド銃弾	全長272～273 底径12.0～15.6 重さ372	鉛製、a類(ブリヂエット弾)、未使用
96-137	金135	F90-82, I層	エンフィールド銃弾	全長268～269 底径14.0～14.7 重さ364	鉛製、a類(ブリヂエット弾)、未使用
96-138	金10	F92-79.2層	エンフィールド銃弾	全長271 底径14.4 重さ368	鉛製、a類(ブリヂエット弾)、未使用
96-139	金119	F92-82, I層	エンフィールド銃弾	全長246～247 底径14.7～14.9 重さ354	鉛製、a類(ブリヂエット弾)、未使用
96-140	金110	F96-82, I層	エンフィールド銃弾	全長303～304 底径14.0～14.1 重さ349	鉛製、b類、未使用
96-141	金137	F90-82, I層	エンフィールド銃弾	全長293～294 底径12.6～14.9 重さ339	鉛製、b類、未使用
96-142	金136	F90-82, I層	エンフィールド銃弾	全長273～274 底径12.1～15.7 重さ333	鉛製、b類、未使用
96-143	金115	F95-78, I層	エンフィールド銃弾	全長248～251 底径14.4～14.0 重さ315	鉛製、b類、使用弾、圧入本栓あり
97-144	金75	18トレンチ	鉛素材	長さ63 幅～13 重さ302	未成型、鉛弾铸造に間違か
97-145	金62	6トレンチ	スペンサー銃弾壳	全長43.0～43.1 葉黄 a39.6～39.9 b15.8 ～15.9 外口径13.0～13.4 重さ30.8	銅製、打痕認められず、未使用 銃弾鉛製、表面銅製、打痕認められず
97-146	金65	7トレンチ	スペンサー銃弾壳	a 22.2 b 16.8～16.9	銅製、打痕認められず、内部に火薬残存
97-147	金13	F95-79, II層	スナイドル銃弾壳	a約50 b 19.4～19.6 d 5.7	底板・カップとも銅製・一体、打痕認められず
97-148	金18	F95-79, II層	スナイドル銃弾壳	a 50 b 19 カイル11 d 6	底板は鉛製・他は銅製、打痕認められず
97-149	金16	F95-79, II層	スナイドル銃弾壳	a 51 b 20 c 10 d 6	底板は銅製・他は銅製、打痕認められず
97-150	金63	6トレンチ	スナイドル銃弾壳	a約48 b 21 c 10 d 6	底板は銅製・他は銅製、打痕不明瞭
97-151	金113	F96-81, I層	スナイドル銃弾壳	b 20 c 10 d 6	底板は鉛製・他は銅製、打痕認められず
97-152	金17	F95-79, II層	スナイドル銃弾壳	b 20 d 6	底板は銅製・他は銅製、打痕不明瞭
97-153	金116	F92-82, I層	スナイドル銃弾壳	a約50 b 20 c 10 d 6	底板は鉛製・他は銅製、打痕明瞭
97-154	金99	F100-81, I層	小銃のスリング	幅28.6 大環径19.8×52.1 小環径10.1	銅製、大小の環が連接する形状
97-155	金72	19トレンチ	L字形摩擦管	a 78.0 b 5.0 c 17.5	銅製、ワイヤーループ無し
97-156	金111	F95-79.2層	L字形摩擦管	a 89.0 b 5.4 c 16.3	銅製、ワイヤーループ無し
97-157	金71	19トレンチ	L字形摩擦管	a 56.1 b 4.5 c 16.85	銅製、ワイヤーループ無し、赤色漆布物あり
97-158	金144	F90-82, I層	I字形摩擦管	a 45.7 b 5.1	銅製、未使用(ワイヤーループあり)
97-159	金149	F89-82, I層	I字形摩擦管	a 45.0 b 5.1	銅製、ワイヤーループ無し
97-160	金148	F88-82, I層	I字形摩擦管	a 45.7 b 5.3～5.5	銅製、ワイヤーループ無し
97-161	金73	19トレンチ	I字形摩擦管	a 45.5 b 5.3～5.4	銅製、ワイヤーループ無し、黒色漆布物あり
97-162	金117	F92-82, I層	I字形摩擦管	a 45.6 b 5.1～5.2	銅製、ワイヤーループ無し
97-163	金73	19トレンチ	I字形摩擦管	a 45.6 b 5.1～5.2	銅製、ワイヤーループ無し、黒色漆布物あり
98-164	金61	4トレンチ	小柄	長さ106 品目15	銅製、棒小柄、内部に筋割れした茎あり
98-165	金70	19トレンチ	切羽	長径399 短径25.4 厚さ10	銅製、外縁に細かい刻み、茎孔周囲段落ち(薄い)
98-166	金69	19トレンチ	切羽	長径408 短径23.9 厚さ9	銅製、外縁に細かい刻み
98-167	金64	6トレンチ	洋式銃の鎗	高さ75.7 上端径13.9～20.4	先端(逆宝珠形)は滑れる、鎗(木質)を新削め
98-168	金21	F95-79, I層	ベルト金具	幅20.7 高さ25.6 留め金長38.2	銅製、ビンバッカル式、半円形
98-169	金24	F93-79, II層	ベルト金具	幅20.7 高さ25.6 留め金長24.1	銅製、ビンバッカル式、半円形
98-170	金23	F93-79, II層	ベルト金具	幅20.5 高さ27.2 留め金長22.6	銅製、ビンバッカル式、半円形
98-171	金112	F96-82, I層	ベルト金具	幅19.8 桁40.0 留め金長26.0	銅製、ビンバッカル式、格円形
98-172	金100	F100-81, I層	ベルト金具	幅21.2 桁39.9 留め金長22.8	銅製、ビンバッカル式、長方形
98-173	金108	F97-82, I層	ベルト金具	幅21.4 桁40.2 留め金長24	銅製、ビンバッカル式、長方形
98-174	金22	F93-79, II層	綿草裏金具	長さ50.6 幅20.0～21.4 方孔周33.8	明治8年制正帽・軍帽の裏金具

98-175	金111	F96-82. I層	鉢	上蓋22.8 上蓋高6.3	真鍮製。警察章、表蓋・輪足欠
98-176	金5	F98-82. II層	鉢	上蓋徑20.0 輪高10.6 上蓋高6.9	真鍮製。警察予備隊章、裏蓋「TEC TOKYO」
98-177	金254	F94-79. II層	元慶通宝	外径23.7 内徑18.5 方孔 a65 b65 厚さ1.1 b1.0 c0.9	篆書体。元慶元年(1078)初鋤。表裏とも意匠的な摩滅
98-178	金249-I	F98-82. I層	寛永通宝	外径24.6 内徑19.9 方孔 a61 b6.0 厚さ1.2 b1.3 c1.3	古寛永。寛永3年(1626)初鋤
98-179	金103	F100-81. I層	寛永通宝	外径24.7 内徑19.5 方孔 a59 b5.7 厚さ1.2 b1.2 c1.2	古寛永。寛永3年(1626)初鋤。背面摩滅(指板あり)
98-180	金252-I	F97-82. I層	寛永通宝	外径23.3 内徑18.8 方孔 a63 b6.6 厚さ1.2 b1.2 c1.1	新寛永。小梅鉢(背「小J」)。元文2年(1737)江戸小梅にて初鋤
98-181	金252-II	F97-82. I層	寛永通宝	外径24.2 内徑19.2 方孔 a60 b5.8 厚さ1.1 b1.2 c1.2	新寛永。享保11年(1726)京都七条寮に共通
98-182	金255	2トレンチ	寛永通宝	外径23.0 内徑18.8 方孔 a65 b5.9 厚さ1.6 b1.3 c1.4	新寛永。跡上り悪い
98-183	金60	4トレンチ	寛永通宝	推定外径28.0	鉄四文銘。万延元年(1861)江戸深川にて初鋤
98-184	金20	F95-79. II層	仙台通宝	縦22 横22	鉄鉢。彌形鉢。天明4~8年(1784~1788)
99-185	金101	F100-81. I層	十錢白銅貨	外径22.0 孔径4.4 緯厚1.3	大正9年(1920)
99-186	金249-II	F98-82. I層	十銭銅貨	外径19.0 孔径4.8 緯厚1.7~2.0	腐蝕により不鮮明。昭和19年(1944)
99-187	金102	F100-81. I層	一銭銅貨	外径23.0 緯厚1.2~1.3	大正10年(1921)
99-188	金249-3	F98-82. I層	一銭アルミ貨	外径16.0 緯厚1.5~1.6	昭和16年(1941)
99-189	金145	F90-82. I層	1セント銅貨	外径14.5 緯厚1.4~1.5	1947年。米と穀の文様
99-190	金15	F95-79. II層	煙管首扇	全長49 火皿20~12.7 扇径33 扇厚13	肩は鉄製
99-191	金14	F95-79. II層	不明銅製品	全長46.5 扇頭9.4 下端外径22.3~23.1	筒形。縱方向の不整条線。内側面刻み「九・十一」
99-192	金58	3トレンチ	不明銅製品	長さ67.2 外径23.6~25.5	筒形。縱方向の細辺線。筒内に黒漆塗り本質
99-193	金1	F98-82. II層	不明銅製品	長さ49.9 外径7.0	筒形。外側面に円形の窪みあり
99-194	金74	19トレンチ	不明銅製品	高さ10.6	留め具か
99-195	金88	F95-80. I層	ブリキ板か	幅70	帯状。継ぎ目ハンダ付け(補強板あり)
99-196	金225	F95-79. I層	ブリキ板か	幅190~200	帯状。継ぎ目ハンダ付け。不整な穴あり
99-197	金77	F95-79. I層	コシビーフの巻き取り皿	縦38 つまみ(縦)幅23	鉄製。1950年以降
99-198	金86	F95-80. I層	缶ジユースの缶切り	縦35~	鉄製。1954年以降

隅御櫓・堀跡出土金属製品

図-N	実測N	出土位置	名称	計測値(mm, g)	備考
101-6	金67	10トレンチ	スナイル鉢蓋裏	a 49 b 21 c 10	底板は鉄製・他は銅製。打痕不明瞭
101-7	金68	10トレンチ	刀の締	長径39.1 短径20.3 幅11.0	銅製。側面条縞文。内面に力丸あり
101-8	金256	10トレンチ	祥符元宝	推定外径25.0 番定内径18.7 厚さ1.3	破片。「祥」・「寶」を判読。大中祥符間初鋤

その他の出土金属製品

図-N	実測N	出土位置	名称	計測値(mm, g)	備考
103-7	金93	石垣工事(南)	財物	高さ54 長さ163 幅~24 軸径13	鉄製。成形時の継ぎ目あり、盤面に目釘穴
103-8	金91	石垣工事(東)	平頭釘	長さ184	鉄製。a類
103-9	金97	石垣工事(南)	平頭釘	長さ117	鉄製。a類
103-10	金90	石垣工事(東)	平頭釘(瓦釘)	長さ220	鉄製。b類
103-11	金201	工事中表採	卷頭釘	長さ123~	鉄製。a類。胴部に木質付着
103-12	金95	石垣工事(南)	卷頭釘	長さ97~	鉄製。a類。未使用
103-13	金89	石垣工事(東)	釘	幅66 横119	鉄製
104-14	金94	石垣工事(南)	村田裁業裏	a 59.3 b 16.6 外口径12.3~12.7	銅製。13年式~18年式。打痕認められず
104-15	金92	石垣工事(東)	20ドライム印砲弾	推定外径184 厚さ約30	鉄製。20ドライムは口径約20cm砲
104-16	金96	石垣工事(南)	康熙通宝	外径23.4 推定内径16.9 方孔 a5.3 厚さ5.3 b6.9 c0.7	背面は満州文字「宝泉」。清朝順治18年(1661)初鋤。加工鉄
104-17	金230	表採	寛永通宝	外径23.2 内径18.2 方孔 a65 b6.9 厚さ1.3 b1.4 c1.3	新寛永。元文2年(1737)江戸寛永製に共通

第5表 ガラス製品観察表

出土城	国-Na	実測No	出土位置	名称	計測値(cm)	備考
百間御櫓跡	91-53	ガ4	F93-79, I層	瓶蓋	最大径3.4 傷部底径2.3 高さ(現況)2.1	a類、薄い緑色。全体に気泡目立つ
百間御櫓跡	91-54	ガ1	F88-82, I層	小瓶	口径1.8 底径4.3 器高6.8	a類、透明。頸部にためめの気泡あり
百間御櫓跡	91-55	ガ2	F92-79, I層	小瓶	口径1.9 底面38×38 器高5.1	b類、青緑色。底部付近気泡目立つ
百間御櫓跡	91-56	ガ3	F95-80、採集	草上インク瓶	口径2.0 (二穴とも)、底面10.7×6.9 器高4.1	b類、明緑色。二穴、底板花形、外底放射文(陽刻)
その他	102-6	ガ5	不明	ビール瓶	口径2.0 底径6.2 器高28.8	b類、暗褐色。大日本ビール大瓶。1906~1949年

第6表 石製品観察表

出土城	国-Na	実測No	出土位置	名称	計測値(cm)	備考
五階御櫓跡	81-91	石1	G11-80, I層	不明加工品	幅10.0×6.7 高さ6.9 底面半面6.2×2.3 底み深さ1.7~2.1	軽石。外表面形は粗い(底面は自然面)、底みは金属工具により四角く整形
百間御櫓跡	100-199	石3	F93-79, II層	侃	幅5.6 高さ1.1	赤褐色の緻密な凝灰岩(赤開石)。表面研磨
百間御櫓跡	100-200	石2	F93-79, I層	碁石	外径2.19~2.20 厚さ0.49	黒色の粘板岩。表面研磨

第7表 動物骨観察表

凡例

部類略号【I：切歯 C：犬歯 P：小白歯 M：大臼歯】 骨端の状態【UF：未化骨】

破損痕跡【小型 tm : 小動物の齧り痕 中型 tm : 中型獣の齧り痕 c m : 刃物による切削】 燃焼痕跡【×:変化なし】

cm の分類記号は「富岡直人ほか(2002)「脊椎動物遺存体像と切削に関するデータベース構築」日本文化財科学会第19回大会研究発表会要集:170-171】による。

城:【五:五階御櫓跡 百:百間御櫓跡 間:隅櫓・塀跡】

城	出土位置	分類	部位	L/R	部分	破損痕跡	燃焼(色調)	計測値	備考
五 G10-80, II6層	哺乳綱	ウマ	中手骨/中足骨 (II/V)	?	骨幹片 (遠位部)	小型 tm あり	×	(J-74)	
五 G10-79, II6層	鳥綱	ハト科	手根中手骨	R	完全	-	×	(J-74)	GL:34.9, L:34.6, Bp:99, Bd:7.4
五 G 9-79, I層	鳥綱	ハト科	上腕骨	L	完全	骨幹前面に複数浅い傷があるが cm かどうか不明	×	(J-74)	GL:46.0, Bp:15.8, Bd:11.0
五 G10-80, II6層	鳥綱	目不明 不明(四肢骨)	?	骨幹片	明瞭な cm なし	×	(J-74)		
五 G10-80, II6層	硬骨魚綱	プリ属	歯骨	R	前位部片	-	×	(J-74)	大型個体
五 G10-80, II6層	硬骨魚綱	プリ属	第1椎骨	M	ほぼ完全	-	×	(J-74)	椎体長: 10.6 全体幅 28.2±
五 G10-80, II6層	硬骨魚綱	プリ属	終尾椎	M	椎体	-	×	(J-74)	大型個体
五 G10-80, II6層	硬骨魚綱	目不明 不明	-	破片	-	×	(J-74)	破片5点	
五 G10-79, I層	-	-	-	-	-	-	-	-	未送付資料
百 F88-82, II2層	哺乳綱	ヒト 成人	上顎 I 2	R	完全 (造歯歯)	-	×	(J-74)	エナメル質形成(ライ ン2本あり)、シケベル型 切歯、鈎歯状咬合
百 41レント II2層	哺乳綱	ウマ	上顎M2	L	歯冠 (造歯歯)	-	×	(J-74)	咬合面幅: 26.3±, 歯冠高: 36.7以上
百 21レント II4層	哺乳綱	ウシ 若駄?	大腿骨	R	骨端片、骨幹	骨幹前面などに複数の cm(D1a)	×	(J-74)	骨端と咬合面破損
百 21レント II4層	哺乳綱	ウシ 若駄?	不明(四肢骨)	?	骨幹部	-	×	(J-74)	シカの左大腿骨遠位部に 似るが、幼駄にしては緻 密質が厚すぎる。
百 21レント II4層	哺乳綱	ニホン ジカ	大腿骨	L	骨幹	近位部後面と遠位部前面 に mf(D1a)、両端部中心に 中型 tm 多数あり	×	(J-74)	
百 21レント 門	脊椎動物 門	網不明	不明(四肢骨)	?	骨幹部	-	×	(J-74)	鳥類の可能性あり、片方 の端部は骨端に近い部位 で独特の質感を持つ
鶲 101レント	哺乳綱	ウシ	桡骨	L	近位端~骨幹 中央部内側~ 後面	中型 tm 多数あり	×	(J-74)	

〔註〕

- 1) W.Reid McKee・M.E.Mason.jr.『CIVIL WAR PROJECTILES II SMALL ARMS & FELD ARTILLERY』Rapidan Press 1980
- 2) エンフィールド銃弾の分類は下記文献に従う。
玉東町教育委員会『玉東町文化財調査報告第8集 玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』2012
- 3) 清川道夫氏・中原幹彦氏のご教示による。
- 4) 宮崎 拓氏のご教示による。
- 5) 摩擦管やその関連遺物の名称は下記文献に従う。ただし、本報告では「型」ではなく「形」を用いる。
玉東町教育委員会『玉東町文化財調査報告第8集 玉東町西南戦争遺跡調査総合報告書』2012
- 6) 八代市教育委員会『八代市文化財調査報告第16集 若宮官軍墓地跡・横手官軍墓地跡』2002
- 7) 熊本市二本木遺跡群における調査事例では、下位が幅広がりになる形態のフイゴ羽口は、現状においては18世紀末段階から出現することが確認されている。この形態が出土した廃棄土坑の共伴資料をみると肥前産磁器染付の筒形碗が盛行している。
- 8) 桜井準也「聞き取り調査、モノの記憶－近現代考古学の方法をめぐって－」『ものが語る歴史14 考古学が語る日本の近現代』同成社 2007
- 9) 熊本偕行会『熊本の陸軍遺跡』2011
- 10) 下記文献では、西南戦争時の摩擦管表面にぶい銀色の発色部について蛍光X線分析を行ない、錫の鍍金あるいは箔押しとの結果を得、さらに、錫の塗付は下地の銅の腐蝕、内部の火薬が湿らないようにするための措置と考察している。本報告資料(161・163)も、これと同義の可能性を指摘しておきたい。
山田拓伸「摩擦管の科学的分析」『西南戦争之記録 第2号』西南戦争を記録する会 2003
- 11) 仙台市『仙台市史 通史編5 近世3』2004
- 12) 現在「ノザキのコンビーフ」を製造・販売している川商フーズ株式会社よりご教示を得た。
- 13) 日本製缶協会、株式会社明治よりご教示を得た。
- 14) 大分市教育委員会『大分市埋蔵文化財調査報告書 第100集 下郡遺跡群Ⅲ』2010
- 15) 美濃古窯研究会『昭和16年3月 岐阜県陶磁器工業組合連合会所属生産者別標示記号(統制番号)』
『美濃の古陶 美濃古窯研究会会報 第8号』1999
他、いくつかの文献では、本報告資料において統制番号と生産者名が一致するものは無かった。

〔主要参考文献〕

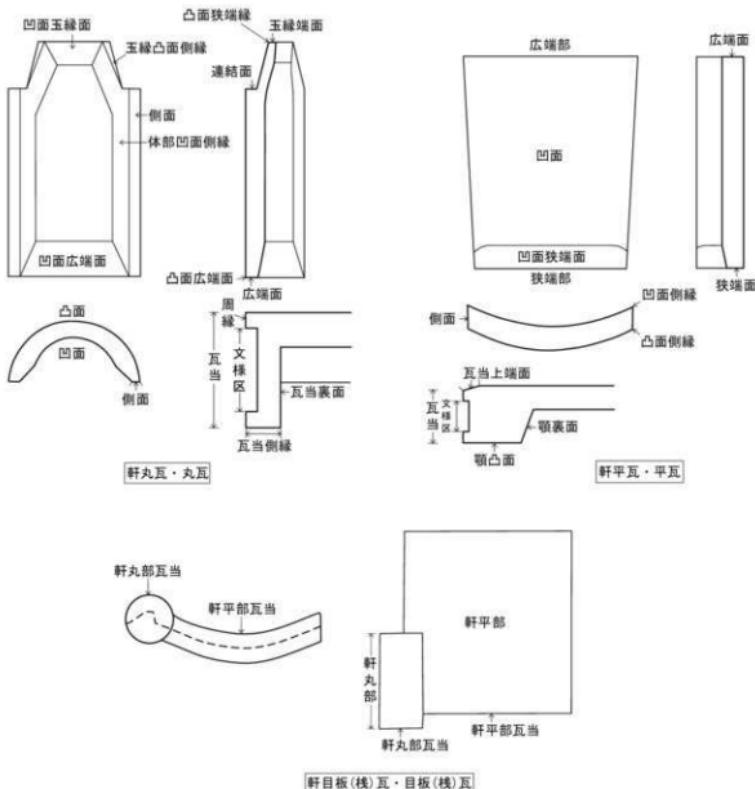
- 浅川範之『飯茶碗の考古学』『近世・近現代考古学入門』慶應義塾大学出版会株式会社 2007
江戸遺跡研究会編『図説 江戸考古学研究事典』柏書房 2001
九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』2000
所 庄吉『新版 図説古銃事典』雄山閣 2006
長佐古真也『続・お茶碗考－近代・現代の中形碗に飯碗を探る－』『ものが語る歴史14 考古学が語る日本の近現代』同成社 2007
中西立太『改訂版 日本の軍装－幕末から日露戦争－』大日本絵画 2006
乗岡 実『備前』『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料編』全国シンポジウム「中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年」実行委員会 2005
幕末軍事史研究会『武器と防具 幕末編』新紀元社 2008
藤光秀雄『寛永通宝 収集・分類・整理』文芸社 2013
歴史群像編集部『図解 日本刀事典』学習研究社 2006

3. 遺物 2 (瓦)

今回の飯丸丸地区の発掘調査では、土糞袋約8000袋の瓦が出土した。出土瓦のうち、軒丸瓦・軒平瓦・軒目板(棟)瓦・鬼瓦や飾瓦を含む道具瓦を抽出して報告する。出土量の大半を占める丸瓦・平瓦については、完形資料を中心に報告する。

今回は、発掘調査の対象が明治以降に手が加えられた櫓台や、トレンチによる調査であり、出土地点を重視した分析より、瓦の種類が多種であることの報告が優先と判断している。熊本城内の評価や、他城との対比、時間的位置付けについては本丸御殿発掘調査出土瓦の報告の後に改めて分析することとした。

瓦の解説時に使用した部位については、第106図の模式図に示した名称で呼称する。文様についてには、三巴紋軒丸瓦などの固有名詞的に使用する場合は「紋」、文中で文様の記述を行う際は「文」を使用している。文様の記述は、文様(瓦当面)に向かった方向で上下左右を表現した。丸・平瓦部の調整の記述で、縦とは瓦当面に直交方向、横とは瓦当面に平行方向である。ナデやケズリなどの調整についてはカタカナ表記している。



第106図 瓦部位名称模式図

(1) 軒丸瓦

瓦当文様によって分類する。飯田丸では、三巴文、日足文（李朝系）、桐文、桔梗文、蛇の目文、九曜文が出土している。なお、コビキに関しては1984年の森田克行氏の「畿内における近世瓦の成立について」（文献4）で示されたコビキA・Bを参考にしているが、糸切りと鉄線切りの区別が認識しにくかつたため、緩弧線状のものをコビキA、横筋状のものをコビキBとした。

a. 三巴紋軒丸瓦

諸説あるが、水が渦巻く様を意匠化した文様で、火災除けとして平安時代末の建物から使用されるようになる。いずれも3つの巴を円状に配した三巴文で、文様区は巴とその周りに珠文がめぐる。巴の回転方向、珠文の数、巴の頭の形状、巴の長さで分けた。

同范瓦の存在が指摘されている肥前名護屋城の分類案を参考にしている（文献7・8）。分類記号については以下凡例の通り。

凡例 L11A : L・R (巴文の尾の方向)、数字 (珠文数)、アルファベット大文字 (巴文の種類)。

ア. 三巴紋軒丸瓦 L 7 A (第107図1・2)

巴が左巻きで珠文が7個巡るもの。10点出土した。瓦当の全形が残っているものはない。瓦当の復元径は16～16.5cmで、文様区の内区径約7cm、外区幅約2cmである。巴頭は鈎状で、断面形は角のとれた台形を呈する。巴首のくびれは不明瞭である。尾は巴頭に比べて細く、短い。巴頭から約3/4回転し、次の巴頭を越えたところで隣の尾に接続し、圓線をつくる。圓線は細く、断面形は半円形を呈する。珠文はナデ調整が施され、断面形は低い半円を呈する。珠文の配置はほぼ均等であるが、7か所の内1か所だけ間隔が広い。珠文の位置、巴頭同士の間隔の一一致などから同范の可能性がある。周縁部と瓦当側縁・裏面はナデ調整で、裏面下部は周縁に沿ったナデ調整の痕跡が明瞭である。

丸瓦が残る資料は2点ある。1は、丸瓦の体部長は約28cm、幅・瓦当径とともに約16cmである。丸瓦は、瓦当部の上端よりやや下に接合するため、瓦当上端が反っている。接合部にはカキヤブリがみられる。丸瓦凸面の調整は縦方向のケズリを行った後、同方向のミガキに近いナデ調整、玉縁側の端部に横方向のナデ調整を行っている。凸面中央の玉縁側端部から約2cmの部分に「丸に一引文」の刻印があり、約5cmのところに直径1.3cmの釘穴が穿たれている。凹面にはコビキBと布目の痕跡が残る。瓦当との接合部から側面にかけて面取りと強いナデ調整が施され、角が消えている。胎土は、密で白・黒色の粒を含むものと、粗く白・褐色の粒を含むものがある。後者はやや焼成が悪い。

イ. 三巴紋軒丸瓦 L 8 A (第107図3・4)

左巻きの巴文に8個の珠文が巡る。4点出土した。瓦当径16.5～17.5cm、文様区の内区径は約8cm、外区幅約1.5cmである。瓦当径・周縁幅共に横広なものがみられる。文様区内の特徴と巴頭間の范傷の一一致から少なくとも3点は同范の可能性がある。3のみが瓦当面が完形。巴頭は歪な円形で、断面形は台形を呈する。巴首のくびれは明瞭である。尾は巴頭から3/4回転をやや過ぎたところで隣の尾に接続し、圓線をつくる。圓線の幅は太く高さもあり、断面形は三角形か半円形を呈する。珠文は軽く押さえられており、断面形は半円形を呈する。珠文の間隔はほぼ均等である。珠文の表面以外はほぼ未調整。周縁部と瓦当側縁・裏面はナデ調整で、裏面下部は周縁に沿ったナデの痕跡が明瞭である。丸瓦との接合部にはカキヤブリがみられる。

丸瓦が残る資料は4の1点である。玉縁部は残っていない。瓦当面は1/4程度の残存で、中心部を欠くため同范関係は不明。瓦当上端は反っている。丸瓦凸面の調整は、縦方向のケズリを行った後、同方向

のミガキに近いナデ調整、玉縁側は横方向のナデ調整で仕上げる。凹面にはコビキBと布目の痕跡が残り、粗い編み物の痕跡もみられる。丸瓦の側面は面取りと強いナデ調整が施され、角が消えている。玉縁側の丸瓦部凸面端から4cmの位置に菊花様の円形の刻印、9cmのところに一辺1.5cmの方形の釘穴がみられる。胎土は密で、白・黒色の粒を含む。

ウ. 三巴紋軒丸瓦L 9 A (第107図5)

左巻きの巴文に9個の珠文が巡るもの一つ。4点出土した。瓦当径は17cm、文様区の内区径は7.8cm、外区幅は1.8cmである。瓦当面の完形資料は無いが、文様の配置と中心部の範傷の一致から少なくとも3点は同范の可能性がある。いずれも瓦当の厚さが薄い特徴がある。5は内区が完形。巴頭は鉤状で、断面形は台形を呈する。巴頭の最大幅は1.3cm、間隔は0.2cmで、巴首はわずかにくびれている。尾は、巴頭から3/4回転したところで隣の尾に接続し、圈線をつくる。圈線は細く、断面形は三角形に近い。珠文を軽く押さえた程度で、文様区はほぼ未調整のようである。珠文は残存部分で見る限り、ほぼ均等に配置されている。周縁部と瓦当側面・裏面はナデ調整である。胎土は密で、白・黒色の粒を含む。

エ. 三巴紋軒丸瓦L 9 B (第108図6)

左巻きの巴文に9個の珠文が巡るもの一つ。5点出土した。瓦当径は15.5cm、文様区の内区径は6.6cm、外区幅は2.1cmである。瓦当面の完形資料は無いが、文様の配置と中心部の範傷の一致から少なくとも2点は同范の可能性がある。その他の2点は小片で詳細は不明瞭。6は、瓦当面の1/4と丸瓦部を欠いている。巴頭は勾玉状で、断面形は半円形を呈する。巴頭の最大幅は1.3cm、間隔は0.4cmで、巴首のくびれは不明瞭である。尾は、巴頭から3/4回転をやや過ぎたところで隣の尾に接続し、圈線をつくる。圈線は細く、断面形は三角形である。珠文は軽く押さえられており、断面形は低い台形を呈する。珠文の間隔は、広い部分と狭い部分がある。文様区外区と周縁の間にナデ調整が施され、珠文が変形している。周縁部と瓦当側縁・裏面はナデ調整である。丸瓦部との接合面にはカキヤブリがみられる。胎土は密で、白・黒色の粒を含む。黒色粒が目立つ。

オ. 三巴紋軒丸瓦L 10 A (第108図7~10)

左巻きの巴文に10個の珠文が巡るもの一つ。7点出土した。瓦当径は16~16.5cmで、文様区の内区径は6cm、外区幅は2~2.5cmである。文様の配置と、中央の範傷の一致から全て同范の可能性がある。重み・範それが目立つ。7は、瓦当面が完形の資料。巴頭は鉤状で、巴首のくびれは弱い。巴頭の先端が隣の巴頭に接しており、1つは先端がつぶれて勾玉状に見える。巴頭の断面形は半円を縱に二分したようである。巴首のくびれは不明瞭で、巴首から尾までは徐々に細くなる。尾は1回転し、巴頭を越えたところで隣の尾に接続し、圈線をつくる。圈線は細く、断面形は巴頭に類似する。文様区の調整は軽いナデ調整が一部にみられる程度で、ほぼ未調整。珠文は、乱れているものが多く、ほぼ均等に並ぶが1か所だけ間隔が広くなっている。周縁部と瓦当側縁・裏面はナデ調整である。胎土は密で、白・黒色の粒を含む。

8は、丸瓦がほぼ完形の資料。体部長が28cm、玉縁部の長さが3cmである。瓦当径16cmに対し、丸瓦部狭端側の外径は14.5cmと差がある。また、体部に大きな重みがみられる。丸瓦の接合は、瓦当上端のやや下で、瓦当上端はわずかに反っている。体部凸面の調整は、縱方向のケズリを行った後、同方向のミガキに近いナデ、玉縁側の端部、玉縁部の凸面は横方向のナデ、玉縁端面はケズリで仕上げている。体部凹面にはコビキBと布目の痕跡が残り、粗い編み物の痕跡もみられる。玉縁側の体部端から5.2cmの位置に直径1.2cmの釘穴がある。胎土は密で、白・黒色の粒を含む。

カ. 三巴紋軒丸瓦 L 10B (第108図11～13)

左巻きの巴文に10個の珠文が巡るもの一つ。6点出土した。瓦当径は16.5cm前後、文様区の内区径は6.5～6.7cm、外区幅は1.8～1.9cmである。瓦当面が完形の資料は無い。11は、周縁の一部を欠く程度で全体の文様構成がわかるもの。巴頭は梢円形で、一つだけ他より小ぶりに見える。断面形は半円形を呈する。巴頭の間隔は0.2cm、巴首のくびれは明瞭である。巴首から尾にかけて徐々に細くなり、1回転して隣の尾に接続するが、2つの尾は先が細すぎて途切れているように見える。尾の断面形は隅丸の台形を呈する。珠文はやや大きめで、ナデ調整が施されており、低い台形を呈する。周縁部と瓦当側縁・裏面はナデ調整である。胎土は白・黒・褐色の粒を含む。13は、瓦当面の下半を欠く。文様の表出が明瞭である。わずかに残存している丸瓦から、丸瓦の接合は瓦当上端のやや下で、瓦当上端はわずかに反っていることと、コビキがB類であることが分かる。

いずれも珠文の形状と範傷が一致することから同范と判断した。13を除き、文様が不明瞭で瓦当部が厚く、軟質に焼きあがっている。

キ. 三巴紋軒丸瓦 L 10C (第109図14～16)

左巻きの巴文に10個の珠文が巡るもの一つ。瓦当径は15.5～16.5cm前後で、歪みが目立つものがある。文様区の内区径は6.3～6.9cm、外区幅は1.8～2cmである。文様構成と巴文の曲がり具合が一致する。範傷の一一致は無いが、同范の可能性が高い。14・15のように瓦当径が16cm以下で、文様が明瞭なものと、16のように瓦当径が16.5cm前後で、文様が前者と比べやや不明瞭なものに分かれる。焼きあがりも前者が黒味がかり、後者は明るい灰色である。いずれも瓦当裏面中央が窪み気味で指頭圧痕がみられる点は共通する。巴頭は勾玉形で、断面形は隅丸の台形を呈する。巴頭の間隔は0.3cmである。巴首は不明瞭で、尾は徐々に細くなり、3/4回転して隣の尾に接続し、圓線をつくる。尾の断面形は半円形で、先端は三角形を呈する。珠文の断面形は半円形を呈し、ほぼ等間隔に配されている。周縁部と瓦当側縁・裏面はナデ調整で、周縁の瓦当下部に強いナデを施している。胎土は白・黒色の粒が多く、褐色の粒もわずかに含む。

確認された丸瓦は、中程から玉縁側を欠損している。大きく歪んでおり、瓦当端は、膨らむように反る。体部凸面の調整は、縱方向のケズリを行った後、同方向のミガキに近いナデ調整で仕上げている。凹面には布目痕が残るが、コビキA・Bの判別はできない。瓦当接合部から側面にかけてナデ調整が施されており、側面は丸みを帯びている。瓦当上端から17cmの位置に釘穴がみられる。

ク. 三巴紋軒丸瓦 L 11A (第109図17～19)

左巻きの巴文に11個の珠文が巡るもの一つ。7点出土している。瓦当部の全形が残っているものは17のみ。瓦当の復元径は15.5～15.9cm、周縁幅1.9～2.4cmで、内区径8cm前後、文様区の深さは最大で0.8cmである。文様構成は一致するが、輪郭が明瞭なものと不明瞭なものがある。範傷が一致する部分があり同范と思われるが、製作過程で範が不鮮明になったことが伺われる。巴頭は鉤状で、断面形は角のない台形を呈する。巴頭の間隔は0.2cmである。巴首から尾にかけて急に細くなり、1/4回転したところで隣の尾に接続し、圓線をつくる。断面形は半円形を呈する。珠文は梢円形で低く、間隔は乱れている。長径は0.9～1.2cm、断面形は半円形を呈する。18は、範が不鮮明になったもの。文様区と周縁の間の段も乱れている。17を除き、瓦当部の厚さが薄いものが多く、瓦当裏面中央が窪み指頭圧痕がみられる。周縁部と瓦当側縁・裏面はナデ調整で、裏面下部は周縁に沿ったナデの痕跡が明瞭である。丸瓦との接合部には周縁に直交するカキヤブリがみられる。コビキについては、文様が鮮明なものはコビキAで、不鮮明なものにコビキBがみられる。胎土は白・黒色の粒が多く、褐色の粒も含む。

ケ. 三巴紋軒丸瓦 L 11B (第109図20・21)

左巻きの巴文に11個の珠文が巡るもの一つ。9点出土している。瓦当部の全形が残るものは無い。瓦当の復元径は16cm前後、周縁幅2.2~2.5cm、内区径7.5cm前後、文様区の深さ0.7cmである。文様構成と中央の范傷が一致するものが大半で、范は一つであった可能性が高い。巴頭は先端の尖る鉤状で、断面形は角の無い台形を呈する。巴頭と尾の差は不明瞭で、急に細くなり、1/2回転したところで隣の尾に接続し圓線をつくる。断面形は稜を持つ三角形を呈する。珠文の表面は調整されているが、范ずれが目立つ。周縁部と瓦当側縁・裏面はナデ調整で、裏面下部は周縁に沿ったナデの痕跡が明瞭である。丸瓦が残存しているものは無いが、接合部には周縁に直交するカキヤブリがみられる。

コ. 三巴紋軒丸瓦 L 12A (第109図22)

左巻きの巴文に12個の珠文が巡るもの一つ。1点出土している。瓦当径は14.7cm、周縁幅2.1cm、内区径7.8cm、文様区の深さ0.6cmである。巴頭は先端の尖る鉤状で、断面形は角の無い台形を呈する。巴頭と尾の差は不明瞭で、急に細くなり、1/2回転したところで隣の尾に接続し圓線をつくる。尾の断面形は、稜を持つ三角形を呈する部分もあるが、半円形の部分が大半である。珠文は等間隔に配されているが、一部間隔が広い部分がある。周縁部と瓦当側縁・裏面はナデ調整で、裏面下部は周縁に沿ったナデの痕跡が明瞭である。丸瓦が残存しているものは無いが、接合部には周縁に沿ったカキヤブリがみられる。

サ. 三巴紋軒丸瓦 L 12B (第110図23~25)

左巻きの巴文に12個の珠文が巡るもの一つ。8点出土している。瓦当部の全形が残るものは無い。瓦当の復元径は16cm前後、周縁幅2.2~2.5cm、内区径8.5cm前後、文様区の深さ0.8cmである。范傷の一致は無いが、文様構成と巴文の歪な部分は一致しており、范は一つであった可能性が高い。巴頭は先端の尖る鉤状で、断面形は角の無い台形を呈する。巴頭と尾の差は不明瞭で、急に細くなり、1/2回転したところで隣の尾に接続し圓線をつくる。圓線は正円ではない。尾の断面形は半円形である。珠文は小ぶりで等間隔に配置されるが、一部間隔が狭い部分がある。周縁部と瓦当側縁・裏面はナデ調整で、裏面下部は周縁に沿ったナデの痕跡が明瞭である。瓦当は、23のように薄く瓦当裏面中央が窪むものと、25のようにはほぼ平坦なものがある。丸瓦が残存している23からは、瓦当と丸瓦は鈍角ぎみに接合され、瓦当上端が反っていることが分かる。また、凹面にコビキ Aと吊り紐の痕がみられる。丸瓦の接合部には周縁に沿ったカキヤブリがみられる。

シ. 三巴紋軒丸瓦 L 12C (第110図26~27)

左巻きの巴文に12個の珠文が巡るもの一つ。6点出土している。瓦当部の全形が残るものは無い。瓦当の復元径は17cm前後、周縁幅2.5cm前後、内区径7.5cm前後、文様区の深さ0.7cmである。巴頭は先端の尖る長い鉤状で、断面形は半円形を呈する。巴頭同士はほぼ接している。巴頭から尾に向かって自然と細くなり、1/3回転する。隣の尾とは接せず、圓線はつくらない。尾の頂部には稜を持ち、断面形は三角形である。珠文は歪な円柱状のものと、断面形が半円形になるものがあり、配置はほぼ等間隔である。周縁部と瓦当側縁・裏面はナデ調整で、裏面下部は周縁に沿ったナデの痕跡が明瞭である。26は、玉縁以外の丸瓦部の大半が残存する。丸瓦部の全長は28cm。瓦当から14cmに「〇に井」の刻印と、19cmに長径2cmの釘穴がみられる。丸瓦の接合は、瓦当上端のやや下で、瓦当上端はわずかに反っている。丸瓦部凸面の調整は、縱方向の丁寧なナデ調整で仕上げられている。凹面にはコビキ Bと布目の痕がみられる。側面は面取り後にナデ調整を施している。胎土には黒色の粒子がやや目立つ。

ス. 三巴紋軒丸瓦 L 13 A (第110図28)

左巻きの巴文に13個の珠文が巡るもの一つ。28が1点出土した。瓦当面はほぼ完形である。瓦当径16cm、周縁幅1.8cm、内区径9.5cm、文様区の深さ1.5cmである。文様は全体的に丸みを帯びている。巴頭は勾玉状で断面形は半円形を呈する。巴頭から尾に向かって自然と細くなり、1/3回転する。隣の尾とは接せず、圈線はつくらない。尾の頂部は丸みを帯び、断面形は半円形である。珠文はほぼ等間隔で配置され、断面形は半円形である。周縁部と瓦当側縁・裏面はナデ調整で、裏面下部は周縁に沿った強いナデの痕跡がみられる。丸瓦の接合は、瓦当上端のやや下で、瓦当上端はわずかに反っている。凸面の調整は、縱方向のケズリ後、ナデ調整で仕上げられている。凹面にはコビキAの痕がみられる。胎土には黒色の粒子がやや目立つ。

セ. 三巴紋軒丸瓦 L 15 A (第110図29)

左巻きの巴文に15個の珠文が巡るもの一つ。29が1点出土した。

ソ. 三巴紋軒丸瓦 L 17 A (第111図30～32)

左巻きの巴文に17個の珠文が巡るもの一つ。3点出土した。いずれも瓦当面はほぼ完形。瓦当径は14.5～15cm、周縁幅は2cm、内区径7.4cm、文様区の深さ0.9cmである。文様構成は一致するが、一致する範囲は無い。巴頭は勾玉状で断面形は半円形を呈する。巴頭から尾に向かって自然と細くなり、1/2回転する。隣の尾とは接せず、圈線はつくらない。尾の頂部は丸みを帯び、断面形は半円形である。珠文はほぼ等間隔で配置され、断面形は半円形である。30は瓦当面に細かな砂がみられ、文様の表面はナデにより砂が無くなっている。31は、範囲が進んでおり文様は不鮮明である。32は、瓦当面全面に指頭による調整がみられる。瓦当側縁・裏面はナデ調整で、30・31の裏面下部には周縁に沿った強いナデの痕跡がみられる。30は、丸瓦部も玉縁の一部を除きほぼ完形である。丸瓦の接合は瓦当上端のやや下で、瓦当上端は反っている。瓦当と丸瓦の接合角度はやや鈍角である。丸瓦凸面の調整は、格子目タタキの後に、縱方向のケズリを施し、ナデ調整で仕上げられている。凹面にはコビキAの痕がみられる。胎土には黒色の粒子がやや目立つ。

タ. 三巴紋軒丸瓦 L 21 A (第111図33)

左巻きの巴文に21個の珠文が巡るもの一つ。33の1点だけ出土した。

チ. 三巴紋軒丸瓦 L 24 A (第111図34、第112図35)

左巻きの巴文に24個の珠文が巡るもの一つ。34・35の2点が出土した。いずれも瓦当面はほぼ完形で、35は丸瓦部まではほぼ完形。34の瓦当径は17cm、周縁幅は1.5cm、内区径8.5cm、文様区の深さ1.2cmである。35の瓦当径は15.7cm、周縁幅は1.5cm、内区径7.9cm、文様区の深さ1cmである。瓦当面の大きさにやや差があるが、文様全体の配置と珠文の間隔が不安定な点が一致するため同范の可能性が高い。巴頭は勾玉状で中心が山状に突出する。断面形は山形を呈する。巴頭から尾に向かって急激に細くなり、1/2以上回転する。隣の尾とは接せず、圈線はつくらない。尾の頂部は弱い稜を持ち、断面形は三角形である。珠文はほぼ等間隔で配置されるが、一部間隔が不安定な部分がある。断面形は半円形。周縁・瓦当側縁・裏面はナデ調整で、裏面下部には周縁に沿ったナデの痕跡がみられる。丸瓦の接合は瓦当上端のやや下で、瓦当上端は強く反っている。瓦当と丸瓦の接合角度はやや鈍角である。丸瓦凸面の調整は、縱方向のケズリを施し、ナデ調整で仕上げられている。玉縁側の端から3.5cmの位置に直径11.5cmの釘穴が穿たれている。凹面にはコビキAの痕と、布目・吊り紐の圧痕がみられる。胎土は密で、黒色の砂粒が目立つ。

ツ. 三巴紋軒丸瓦 L 24 B (第112図36)

左巻きの巴文に24個の珠文が巡るもの一つ。36の1点が出土した。瓦当面は文様区外区・周縁を1/3程欠いている。瓦当径16.2cm、周縁幅2~2.3cm、内区径7.8cm、文様区の深さ1cmである。文様は全体的に丸みを帯びている。巴頭は勾玉状で断面形は半円形を呈する。巴頭から尾に向かって急激に細くなり、3/4回転し隣の尾と接し圓線をつくる。尾の頂部は弱い稜を持ち、断面形は三角形である。珠文はほぼ等間隔で配置され、輪郭は不明瞭だが三角形に突出するものが多い。断面形は三角形または半円形である。巴文の表面に軽いナデ調整が施される以外、瓦当面はほぼ未調整のようである。瓦当側縁・裏面はナデ調整で、裏面中央が緩やかに窪む。丸瓦は完全に欠損しており、接合部に周縁に沿ったカキヤブリがみられる。胎土には白色の粒子が目立つ。

テ. 三巴紋軒丸瓦 R 13 A (第112図37・38)

右巻きの巴文に13個の珠文が巡るもの。2点出土している。37は、周縁の1/3と丸瓦部を欠く。瓦当径16cm、周縁幅2cm、内区径8.6cm、文様区の深さ0.8cmである。37・38は、文様構成の一一致と、黒味がかかった焼き上がりは近似しており、同范の可能性が高い。また、名護屋城跡出土軒丸瓦 I -R13 a類と同范の可能性がある。巴頭は勾玉状で断面形は半円形を呈する。巴頭から尾に向かって急激に細くなり、3/4回転し隣の尾と接せず圓線をつくらない。尾の頂部は弱い稜を持ち、断面形は三角形である。珠文の間隔はまちまちで、輪郭は不明瞭だが山形に突出するものが多い。断面形は三角形または半円形である。瓦当面は、周縁含めてほぼ未調整のようである。瓦当側縁・裏面はナデ調整で、裏面下部には周縁に沿った強いナデの痕跡がみられる。丸瓦は残存していない。胎土は細かな砂粒を多く含み、角閃石がやや目立つ。

ト. 三巴紋軒丸瓦 R 14 A (第112図39)

右巻きの巴文に14個の珠文が巡るもの。39の1点が出土した。瓦当径が小ぶりである。周縁の1/3、珠文帯の一部、丸瓦を欠く。瓦当径13.5cm、周縁幅1.5~1.8cm、内区径9.5cmである。全体が黒みがかる。巴頭は勾玉状で、断面形は角の取れた台形状を呈する。巴頭から尾に向かって自然に細くなり、3/4回転し隣の尾と接せず圓線をつくらない。珠文はほぼ等間隔で配置され、輪郭は不明瞭だが山形に突出するものがある。大半の断面形は半円形である。文様区と周縁間の段は立ち上がりが不安定で、筋を持って斜めに立ち上がる部分がある。この部分は珠文も不鮮明である。丸瓦は欠損し、瓦当上端も欠損するが、瓦当の先端は比較的大きく反るようである。胎土は軟質で、黒色土が縞状に入る。

ナ. 三巴紋軒丸瓦 R 19 A (第112図40~43)

右巻きの巴文に13個の珠文が巡るもの。4点出土した。瓦当面が完形の資料は無いが、瓦当径が小ぶりの資料である。瓦当径14.5cm、周縁幅1.3cm、内区径8.3cm、文様区の深さ1cm前後である。文様構成と中央の范傷が一致するため、同范と判断している。いずれも黒味がかかった焼き上がりで、胎土も近似している。40は、周縁の2/3、珠文帯の1/3、丸瓦部を欠く。巴頭は先端の尖る鈎状で、断面形は角の無い台形または半円形を呈する。巴頭から尾にかけて自然に細くなり、巴文は1/2回転する。隣の尾とは接続せず圓線をつくらない。尾の断面形は半円形である。珠文は比較的大ぶりで間隔がまちまちである。周縁部と瓦当側縁・裏面はナデ調整で、裏面下部は周縁に沿ったナデの痕跡が明瞭である。丸瓦部が残存している資料はないが、接合部にはカキヤブリがみられる。

ニ. 三巴紋軒丸瓦 R 21 A (第112図44~46)

右巻きの巴文に21個の珠文が巡るもの。3点出土した。瓦当面が完形の資料は無いが、瓦当径が小ぶり

の資料である。当径14.3cm、周縁幅1.6～2cm、内区径8.3cm、文様区の深さ1cm前後である。文様構成と珠文帯の範が一致することから同范と判断している。いずれも焼き上がりの雰囲気が同じで、胎土も近似している。44は、周縁の1/3、珠文帯の一部、丸瓦部を欠く。巴頭は鉤状だが、先端の尖りは弱い。巴頭の断面形は半円形を呈する。巴頭から尾にかけて自然に細くなり、巴文は1/2回転する。隣の尾とは接続せず圓線をつくる。尾の断面形は三角形である。珠文は小ぶりで歪である。間隔はまちまちで、範が周縁に接するものがある。瓦当側面・裏面はナデ調整で、裏面下部は周縁に沿った強いナデの痕跡が明瞭である。丸瓦が残存している資料はないが、接合部にはカキヤブリがみられる。

ヌ、三巴紋軒丸瓦・その他（第113図47～54）

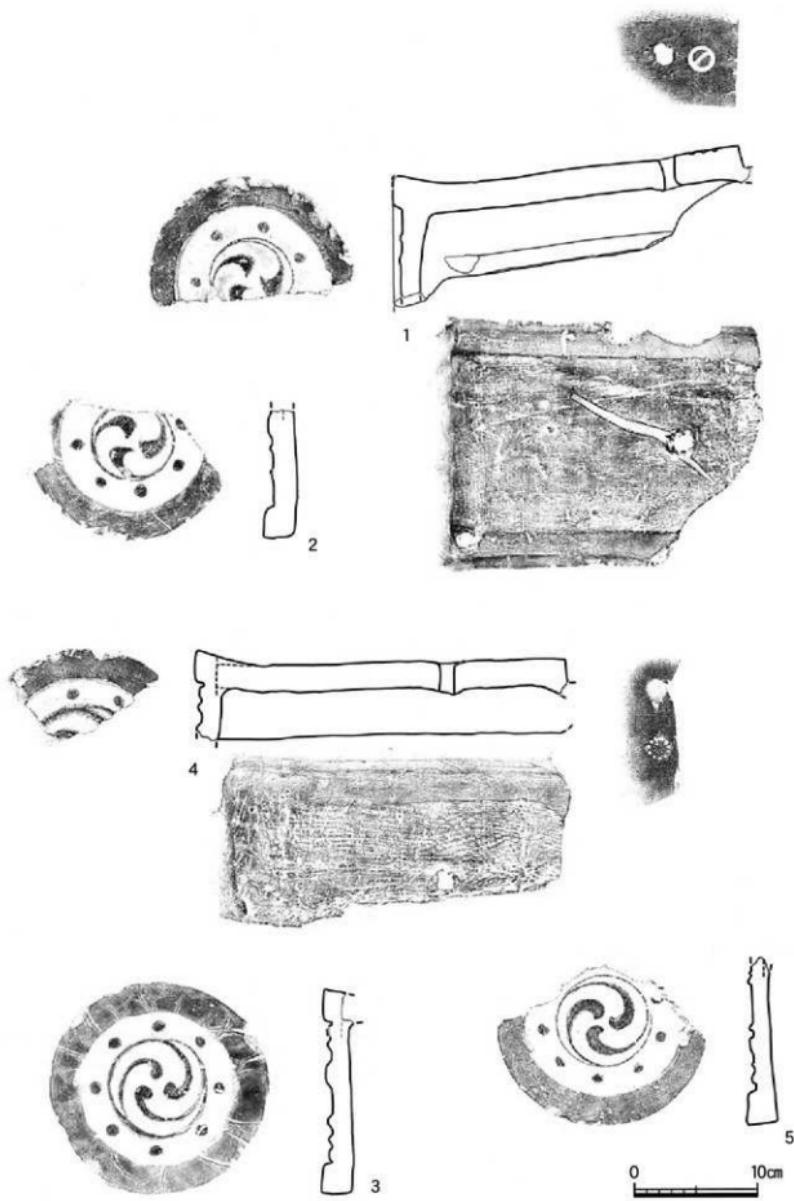
破片資料であり、珠文の数が不明瞭なもの。47・48・49は巴文が左巻きのもの。47は瓦当面の大半は残存しているが、同じ文様構成のものが無く、珠文の数が確定できない。勾玉状の巴頭で、断面形は三角形に近い。巴首から尾に向かって自然に細くなり、1/2回転する。隣の尾とは接せず、圓線は形成しない。尾の断面形は三角形。瓦当側縁・裏面はナデ調整で、裏面下部は周縁に沿った強いナデの痕跡が明瞭である。丸瓦が残存している資料はないが、接合部にはカキヤブリがみられる。48・49の両者の雰囲気は似るが珠文の間隔などが異なる。48は文様区と周縁の間に範がが多い。49は、勾玉状の巴のようで、尾の先端は隣の尾とは接せず圓線はつくる。

巴文が右巻きのものが50・51・52・53・54。50は瓦当面の1/2は残存するが、同じ文様構成が無く、珠文数が確定できない。珠文の数を復元すると20前後のようなである。文様の輪郭は明瞭で、文様全体が丸みを帯びている。巴頭は勾玉状で断面形は半円形。巴頭の間隔は0.3cmである。巴頭から尾にかけて自然に細くなり、1/2回転して隣の尾と接続し圓線をつくる。瓦当面には細かな砂がみられる。瓦当側縁・裏面はナデ調整が施されている。瓦当側縁が厚いため、瓦当裏面が窪んだように見える。丸瓦部は残存していない。51は、太く丸みを帯びた巴文で、巴頭は先端の尖る鉤状。先端は右側の巴にほぼ接している。巴頭から尾へは自然と細くなり、1/2回転する。隣の尾とは接せず圓線はつくる。52の文様は高く盛り上がる。巴は勾玉状で、巴頭の頂部は平らに調整されている。巴頭から尾へ自然に細くなり、3/4回転する。隣の尾とは接せず圓線はつくる。尾の頂部には棱があり、断面は三角形を呈する。53は中央部を欠く。巴頭は鉤状だが、先端の尖りは鈍い。巴頭から尾へは自然と細くなり、1/2回転する。隣の尾とは接せず圓線はつくる。珠文は大めである。54も中央部を欠く。巴頭は鉤状で先端は尖る。巴文は太く、巴頭から尾へは自然と細くなり、1/2回転するようである。隣の尾とは接せず圓線はつくる。

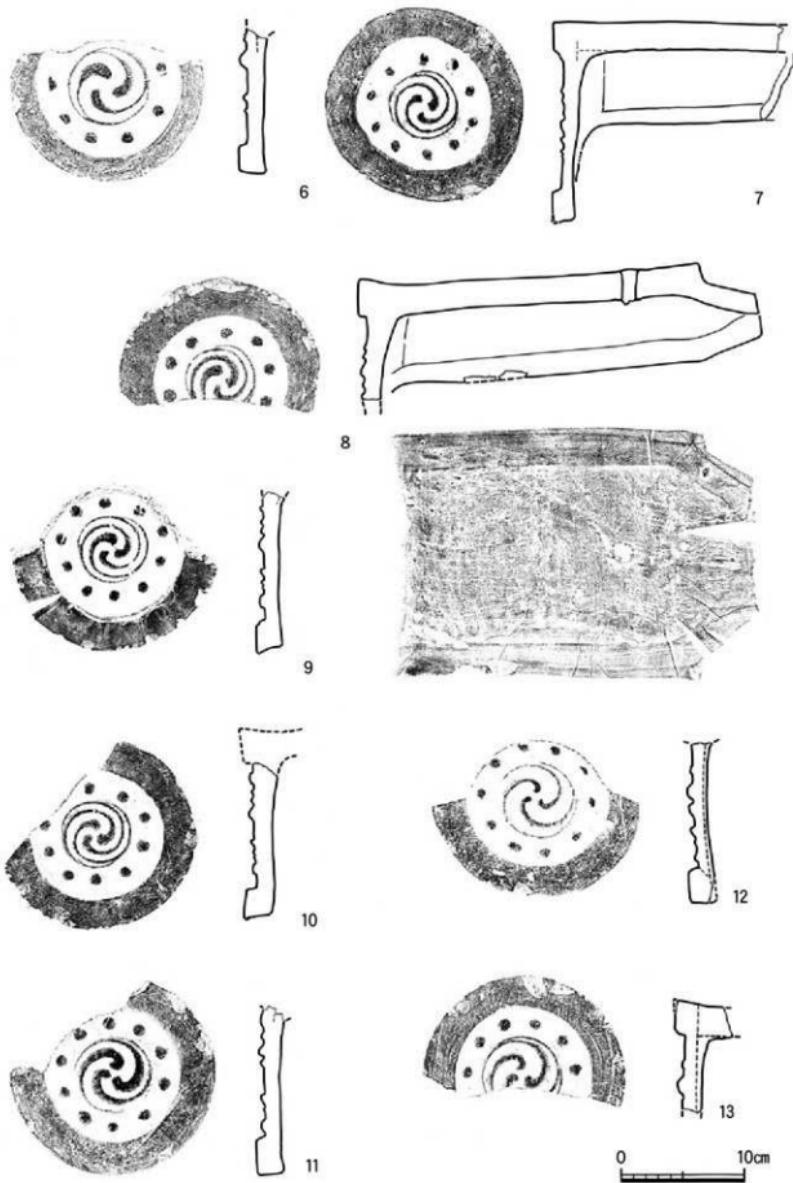
ネ、三巴紋菊丸（第114図55～62）

体部長が短い瓦。8点出土している。巴文が左に巻くものが55・56・57・58・59・60。瓦当面が完形のものが無いため、珠文の数は不明。巴文は丸みを帯び、珠文の配置も似ているため、同范の可能性もあるが、根拠となる一致部分を見出せていない。59は、瓦当面の1/3を欠いている。巴頭は勾玉状で、断面形は半円形。巴頭から尾にかけては自然に細くなり、3/4回転して隣の尾と接続して圓線をつくる。周縁・瓦当側縁・裏面はナデ調整である。体部は瓦当面から11.5cm。他のものでは7.5～11.5cmである。いずれも瓦当側が大きく反る。56・57・59では、コビキAがみられる。

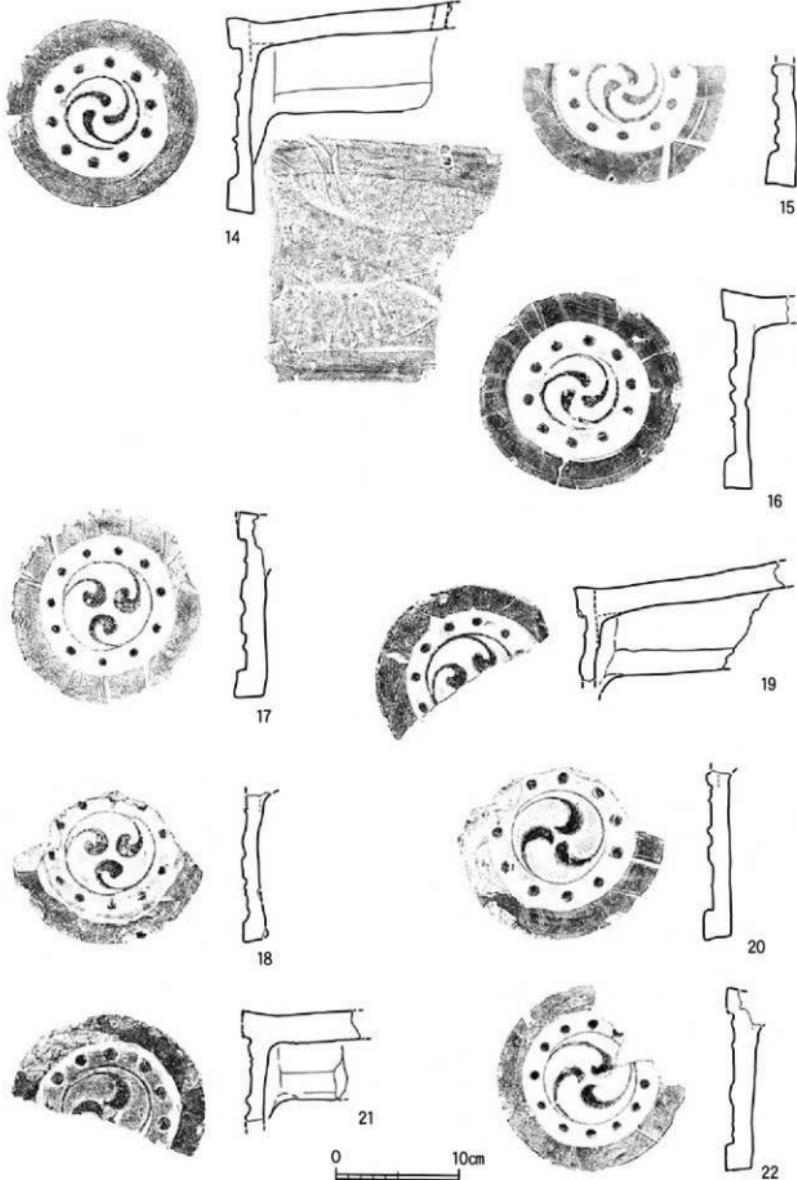
61・62は巴文が右に巻くもの。61は文様が不鮮明で、62の瓦当面はわずかにしか残存していない。同范関係は無い。61は体部長が12cmで、体部の四面にコビキAの可能性がある圧痕がある。62は、体部長11cmで、四面にケズリによる段がみられる。



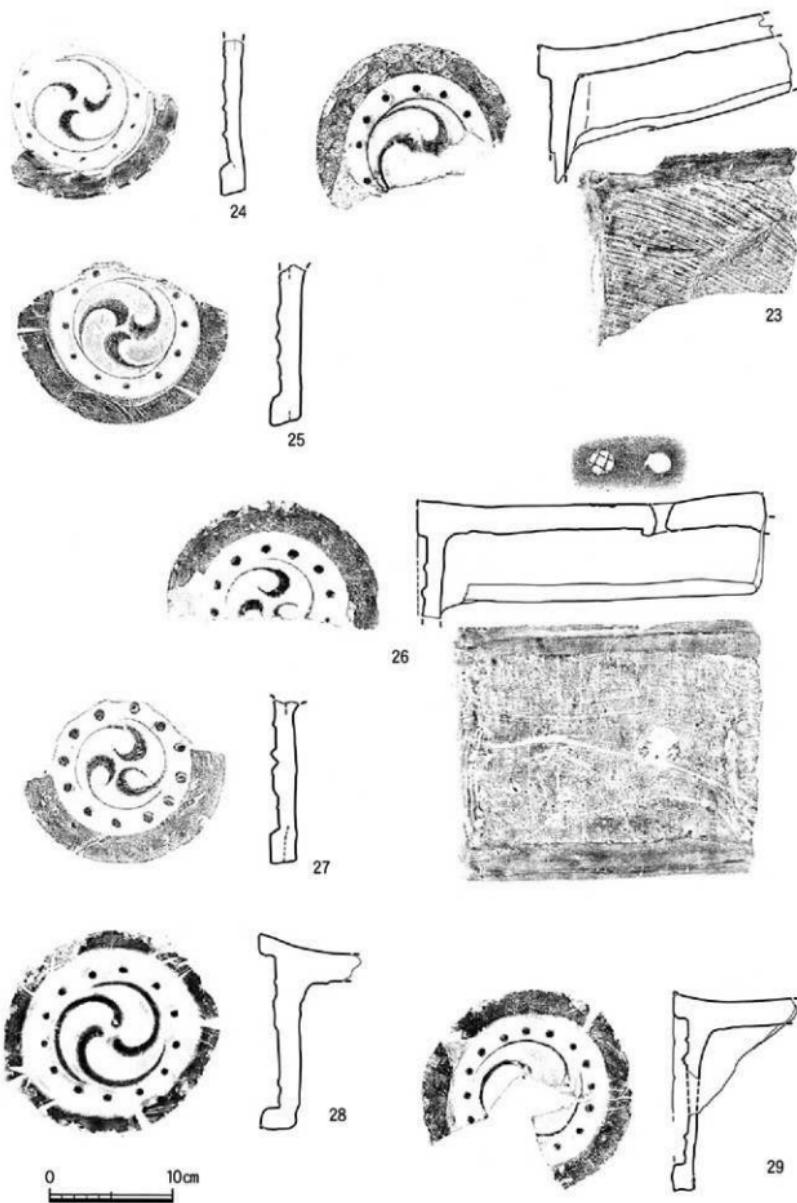
第107図 軒丸瓦実測図1 (1/4)



第108図 軒丸瓦実測図2 (1/4)



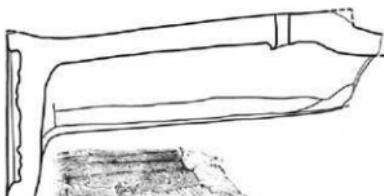
第109図 軒丸瓦実測図3 (1/4)



第110図 軒丸瓦実測図4 (1/4)



30



31



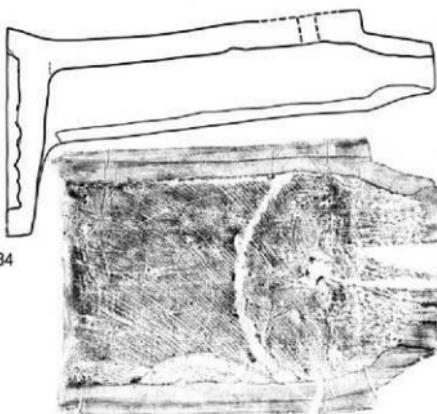
32



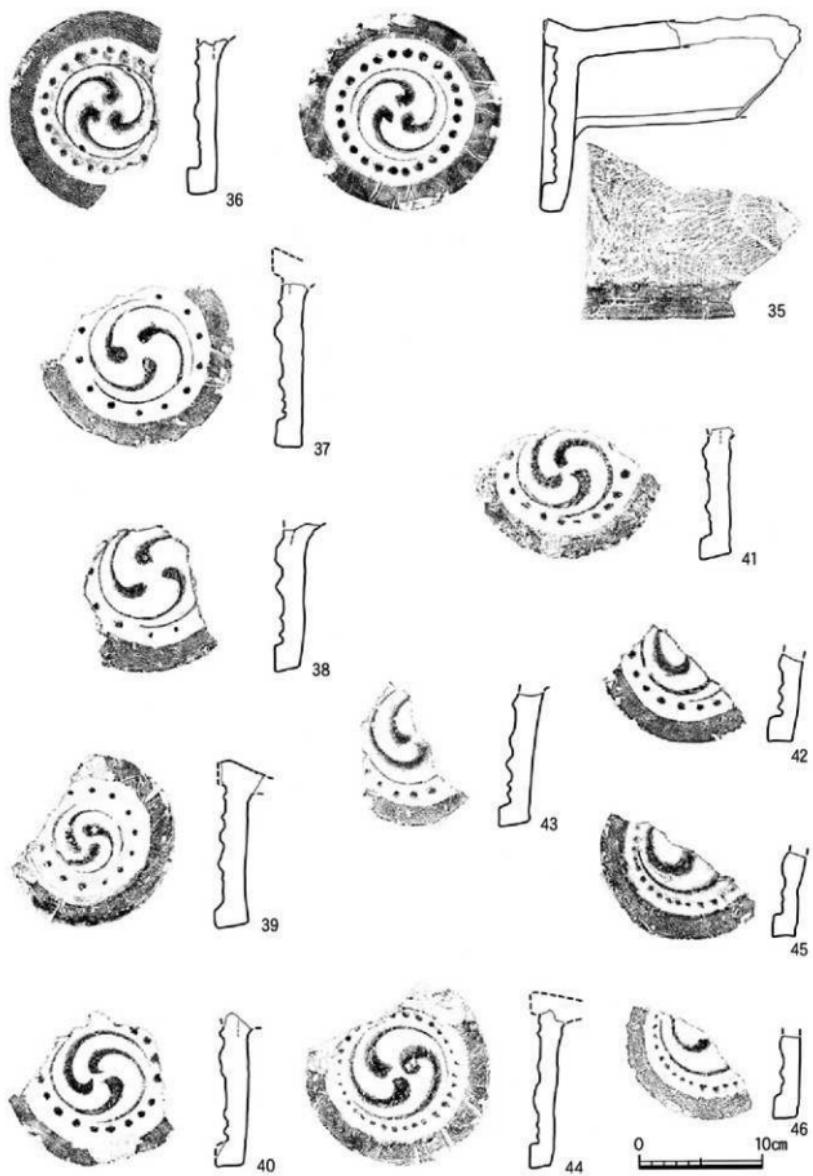
33



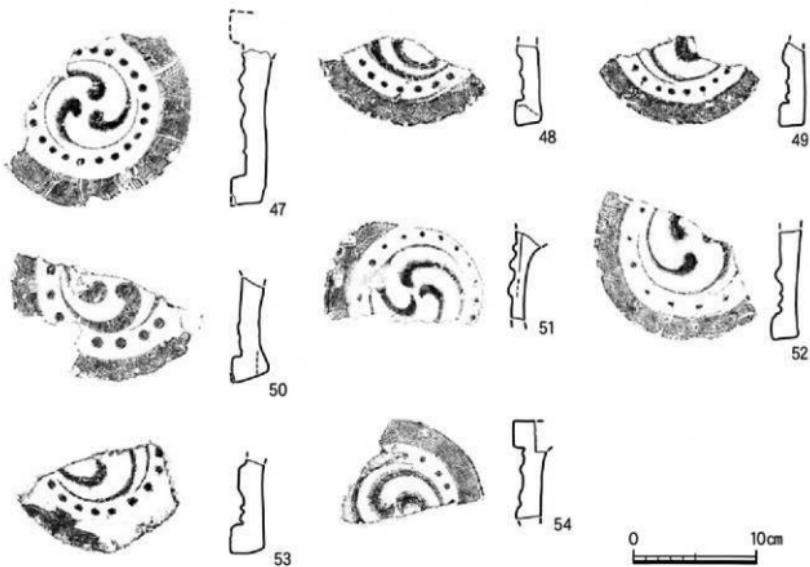
34



第111図 軒丸瓦実測図5 (1/4)



第112図 軒丸瓦実測図 6 (1/4)



第113図 軒丸瓦実測図7 (1/4)

b. 日足紋軒丸瓦 (第115図63~71)

日足紋は、太陽光線を圖案化したものとされる。熊本城内で出土する日足紋は、文様モチーフを朝鮮半島の李朝瓦の蓮華紋を祖形とし、佐敷城跡で出土した光芒線状文様を介して変化したもので、「李朝系瓦」である。熊本城跡出土のものは、佐敷城跡出土例からさらに意匠化され、重なった「弁」が中房から放射状に三角形や菱形で表される。9点が出土した。いずれも破片資料であり、同范関係は不明。文様は、まず周縁の幅が広いものと狭いものに分かれる。幅が広いものは2点出土しており、いずれも文様の凸凹が深く、丸みを帯びる。63は、瓦当面の1/3程度の破片。中房を欠くが2重の圓線はわずかに残り、内側から外側へ三角形一大菱形一小菱形が配されている。文様間は谷になっており、文様の先端は周縁に接する。周縁は未調整または軽いナデ調整で仕上げられている。丸瓦は、瓦当裏面の頂部からやや下がった部分に接合され、凸面側に1cmほどの厚さの補足粘土があるため瓦当側が反りあがる。丸瓦凹面にはコビキAの痕跡がみられる。64は、瓦当面の1/4の破片で、丸瓦は完全に欠損している。丸みを帯びた中房に2重の圓線がめぐる。内側から外側へ放射状に三角形一大菱形一小菱形が配され、文様間に2mmほどの平らな面がある。文様の先端は周縁とほぼ接するが、周縁との間にナデ調整が施されている。周縁・側縁・瓦当裏面はナデ調整で仕上げられている。

周縁幅が1.7cm以下の狭いものは6点出土している。文様の端部と周縁の間に空間があるもの(3点)と、無いもの(3点)がある。65・66・67は空間があるもの。文様の凸凹が浅く、頂部に弱い稜線がみられる。文様構成は二重の圓線から三角形一大菱形一小菱形となる。65は、瓦当のみ1/4程度の破片。内区から周縁はほぼ未調整。側縁・瓦当裏面はナデ調整。丸瓦は欠損しているが、接合部にカキヤブリがみ

られる。64は、内区はほぼ未調整だが、周縁はナデ調整で、側縁・瓦当裏面もナデ調整で仕上げられる。丸瓦は欠くが、接合部にはカキヤブリがみられる。67は、他に比べ表面が風化して文様も丸みを帯びている。周縁の間に空間が無いものは、68・69・70。文様の凹凸が浅く、文様の表面がナデ調整で丸みを帯びる。68は、瓦当面の中房を欠いた1/3程度の破片。周縁は軽いナデ調整か。丸瓦は大半を欠くが、残存部分では瓦当側から体部側へラケズリに近い強いナデ調整が凸面にみられる。69は文様が不鮮明。70は周縁を欠く。残存した丸瓦凸面にケズリ調整が施され、凹面にコビキAの痕跡がみられる。丸瓦と瓦当は鈍角に接合されている。71は周縁を欠き文様と周縁の関係は不明瞭。63のように文様の間に2mm幅の平らな面がみられる。

c. 桐紋軒丸瓦

桐文は、キリの花や葉を図案化した文様。桐文は豊臣秀吉が朝廷から下賜された文様で、瓦への使用も秀吉によって制限され、秀吉から使用が認められたと考えられている。17点出土しているが、すべてが破片で完形資料は無い。文様がわかるものは五三の桐と四三の桐のようである。五三の桐で2種類の同範関係があり、四三の桐で范が1種類あり、他の五三の桐と合わせて范は4種類以上存在する。

ア. 五三の桐（第115図72～79）

72は、瓦当面の1/4程度の破片。周縁の一部が残存し、丸瓦は全く残存していない。花の形は丸みを帯びた形。花と葉の結節点に珠文がある。珠文の位置、中央の花茎に向かって左側上から2番目の花と茎の間の形状、中央茎と向かって左茎との間の配置の一一致から73・74を同范と判断した。いずれも文様の表出が曖昧で、茎や花の断面形は丸みを帯びる。周縁の調整は不明瞭だが、側縁から瓦当裏面にかけてはナデ調整が施されている。丸瓦の欠損部分にはカキヤブリがみられる。胎土は3点ともほぼ同質で、黒色砂粒が目立ち、1cmほどの石をまばらに含んでいる。

75は、瓦当面向かって中央上、1/5程度の破片。76は、瓦当面中央の破片。77は、瓦当面に向かって右下1/4程度の破片。花の形状、中央茎と右茎の配置、葉の形状と起伏の一一致から同范と判断した。色調は、黒味が強い灰色、灰色、褐色と三様である。文様は弱いナデ調整が施されており、やや平板である。周縁から側縁・瓦当裏面はナデ調整で仕上げられている。いずれも丸瓦は残存していないが、欠損部分にはカキヤブリがみられる。胎土は、75・77は近似するが、76は赤褐色粒子が目立つ。名護屋城跡出土桐紋軒丸瓦II-1b類と同范か。

78は、菊丸。瓦当面から瓦尻までが11cm。瓦当面は向かって左下1/4ほどを欠く。左右の花茎が一直線ではなく、向かって右側の葉が細めな点が前者とは異なる。周縁の外側から側縁・瓦当裏面にかけてナデ調整が施される。丸瓦は瓦当裏面の上端から下がった部分に接合され、支持粘土のため丸瓦から瓦当側へ反っている。丸瓦凸面はナデ調整で仕上げられ、凹面にはコビキBの痕跡がみられる。79は、向かって左茎先端の花と周縁の一部が残る。78と同范の可能性がある。78と同じ菊丸で、瓦当面から後端まで14cm。瓦当上端が無いため不明瞭だが、補足粘土で瓦当側が反っているようである。丸瓦凸面はケズリ調整後ナデ調整で仕上げられ、凹面側にはコビキAの痕跡と、側縁の面取りがみられる。

イ. 四三の桐（第115図80～82）

80・81・82は、中央の葉の先端が右に曲がり、両端の葉が外側に反るもの。中心茎に4花、脇茎にそれぞれ3花で、花はほぼ四角で表現されている。花茎の元は弧状に盛り上がる。文様は軽くナデ調整を施す程度ではほぼ未調整。内区と周縁の間はほぼ直角に立ち上がり、80は指頭による成型がみられる。周縁は、弱いナデ調整が施される。側縁と瓦当裏面はナデ調整で、丸瓦はいずれも残存していないため不明瞭。接

合部には粗いカキヤブリがみられる。3点とも胎土はほぼ同じ。

ウ、その他（第115図83～87）

83・84は中央葉と右葉の破片。同範の可能性が高く、72・73・74と同範の可能性もあるが一致部分は少なく根柢が弱い。これに近似した85・86・87の拓本を掲載している。

d、蛇の目紋軒丸瓦（第116図88）

大小の同心円からなる文様で、加藤家の本來の家紋。3点出土した。88は、瓦当面は完形だが丸瓦を欠く。内区は直径5.6～5.7cmの円柱状に窪む。幅広の周縁はほぼ未調整で、外端から1cmほどのところに弱い沈線がある。側縁と瓦当裏面はナデ調整で仕上げられている。丸瓦は、瓦当裏面のは上端に接合されている。少量の支持粘土がみられるため、瓦当面に向かってわずかに反っている。接合面には同心円状のカキヤブリがみられる。瓦当面・側縁・瓦当裏面・丸瓦凸面には、キラコがみられる。

e、桔梗紋軒丸瓦

加藤家の家紋である桔梗文は、キキヨウの花・葉・茎を圖案化したもの。一般に尾藤知宣の改易に伴い、農臣秀吉から押領した家紋とされるが、清正の4代先代の頼方の頃から土岐桔梗紋を使い始めたとする説もある。文様の構成は、珠文で表された雌蕊から放射状に先端が尖った5つの花弁を配し、花弁の中心線に雄蕊が重なる点で共通する。桔梗文だけのものと、桔梗文の周間に珠文が入るものに大別され、前者は、花弁が接し輪郭が直線的なものと、花弁が接し輪郭が丸みを持つもの、花弁同士が離れ丸みを持つものに分かれる。後者は、珠文の数でさらに分かれる。なお、本丸御殿の調査で出土した花弁が直線的なものを桔梗紋軒丸瓦1としている。2b・3bも本丸御殿では出土しているが、飯田丸での出土例は無い。

ア、桔梗紋軒丸瓦2a（第116図89～91）

花弁の間が離れているもの。文様は立体的で、肉厚な弁の中央が船底上に窪み、雄蕊が配置されている。雄蕊は、先端が剣先状になり、長さは弁の長さの半分を超える。文様の表面は、ナデ調整が施されるが、文様以外の部分はほぼ未調整のようである。6点出土している。範傷の一一致は無いが、文様の構成や雰囲気から同範の可能性が高い。91は雌蕊がいびつだが、成型時に変形した可能性がある。周縁・側縁・瓦当裏面はナデ調整で仕上げられている。いずれも丸瓦を欠いているが、接合面にはカキヤブリがみられる。

イ、桔梗紋軒丸瓦2c（第116図92）

92の1点出土した。花弁が接し、輪郭が直線に近い。瓦当面の1/3程の破片で、2つの弁が残存している。雄蕊は、先端が剣先状で花弁の長さの約半分まで伸びる。花弁の中心線の稜は弱く、弁全体が輪郭線から雄蕊に向かって緩やかに窪む。瓦当面には細かな砂がみられ、内区はほぼ未調整のようである。周縁は内区表面から1cmほど突出し、周縁の外側にナデ調整が施される。丸瓦は瓦当裏面の上端近くに接合されているが、支持粘土のため瓦当側がわずかに反っている。丸瓦の大半は欠損しており、詳細は不明瞭。胎土に細かな白色砂粒が目立つ。

ウ、桔梗紋軒丸瓦2d（第116図93～95）

花弁が接し、輪郭が丸みを帯びるもの。10点出土している。範傷の一一致は無いが、文様の構成からは同範の可能性がある。花弁はやや幅のある輪郭線から雄蕊に向かって緩やかに窪む。弁間は比較的明瞭な稜線で分けられている。雌蕊は小さく、多角形状になったものもある。雄蕊は、先端が剣先状だが、曖昧な

ものも多い。内区は、文様の表面と周縁側の端部をナデ調整している程度で、ほぼ未調整。周縁・側縁・瓦当裏面はナデ調整を施す。94のように、瓦当裏面が窪むものがある。丸瓦が残存しているものが無く、丸瓦部の状況は不明瞭。接合面にはカキヤブリがみられる。

以下は、桔梗文の周囲に珠文が巡るもの。桔梗文は、陽刻された円内に配され、珠文帯とは段差がある。

工. 桔梗紋軒丸瓦 3 a (第116図96～102, 第117図103)

珠文が9個巡り、雌蕊と雄蕊の境界が明瞭で、雄蕊の中心に沈線があるもの。26点出土した。文様の形状、珠文の配置から同范の可能性がある。花弁の輪郭は丸みを持ち、各弁は雄蕊に向かって緩やかに窪む。弁の中心線は曖昧。雄蕊は中心に沈線があり、先端は劍先状に尖る。雌蕊と珠文の頂部は平坦である。瓦当面に対する丸瓦の接合位置が少なくとも3種類ある。96・97・98は同じ位置に接合したもの。8点出土している。いずれも瓦当面に細かな砂がみられ、文様の端部や周縁の一部にナデ調整が施される以外、瓦当面はほぼ未調整である。周縁の端部は細い面取りが施され、胎土も黒色砂粒や白色砂粒が目立つ点など近似している。丸瓦は瓦当裏面の上端近くに接合され、凸面側の支持粘土のため、瓦当側がわずかに反る。丸瓦凹面はナデ調整が施され、96はコビキA、97はコビキBの痕跡がみられる。

99・100・101・102・103は、前者と瓦当面に対する丸瓦接合位置が約60度異なる。この接合のものは13点出土している。100は、瓦当面に細かな砂がみられ、他のものにはみられない。周縁以外はほぼ未調整で周縁・側縁・瓦当裏面はナデ調整で仕上げる点、周縁端部に面取りがみられない点は共通する。103は丸瓦が残る。丸瓦は瓦当裏面の上端近くに接合するが、凸面側は支持粘土が施されており瓦当側が1cmほど反る。凸面側は、瓦当接合後にナデ調整で仕上げられており、瓦当側から21cmに直径1.5cmの丸い釘穴がある。玉縁側の凸面に菱形の刻印がある。凹面にはコビキBの痕跡がみられ、側面は面取りによって尖り気味になる。

この他にも、丸瓦の接合が前者とほぼ180度違うものや、接合角度は不明瞭だが周縁幅が広いものがある。

才. 桔梗紋軒丸瓦 3 c (第117図104)

珠文が9個巡り、雌蕊と雄蕊の境界が曖昧で、雄蕊の中心に沈線は無いもの。文様は、表出が甘いものや、風化したものがあるため対比が困難だが、雌蕊から弁の先端を通る直線上に珠文が乗る部分で合わせると、珠文の位置と雄蕊の長短が一致し、同范の可能性がある。文様の断面は全体的に丸みを帯びる。弁の輪郭線は幅広で、雄蕊に向かって緩やかに窪む。雌蕊は五角形に近く、雄蕊の先端は劍先状に尖る。104の内区はナデ調整がみられるが、他のものは軽いナデ調整、もしくはほぼ未調整である。周縁から側縁・瓦当裏面にかけてナデ調整で仕上げられている。いずれも丸瓦は欠損しており、詳細は不明瞭。胎土は、赤褐色粒子が目立つものがある。

力. 桔梗紋軒丸瓦 4 (第117図105～107)

完形資料は無いが、珠文が7つと想定されるもの。城内の西出丸で完形資料が出土している。今回の調査では4点出土しているが、同范関係は不明瞭。他のものと比べ雌蕊が大きく、丸みを帯びて突出する。雄蕊は中心に線があり、先端は劍先状に尖る。105・106は、瓦当面に細かな砂がみられる。雌蕊を含んだ珠文の表面と弁の輪郭にナデ調整を施す程度で、内区はほぼ未調整。周縁もナデ調整を軽く施す程度。周縁と側縁の間を細く面取りしている。側縁から瓦当裏面はナデ調整で仕上げている。105は丸瓦の一部が残存している。丸瓦凹面には、コビキAと思われる痕跡がみられる。

f. 九曜紋軒丸瓦

細川家の家紋である九曜文は、本来星を表したものとされる。大きな中心の珠文とそれを囲む8つの珠文で構成される文様区と、周縁で瓦当を形成する。報告の便宜上、珠文を「曜」と呼ぶ。中央の曜は中心曜、それを囲む曜を周曜とする。また、瓦当部と丸瓦部の接合関係から、瓦当面に上下を示し、一番上に来る周曜から向かって右回りに第1～8曜と個別名称を設定する。

範の差を見出しにくい文様であり、分類は瓦当内区径－中心曜径－周曜径の差で26群に分けている。製作技法の中で、瓦当側縁・瓦当裏面のナデ調整仕上げ、丸瓦接合面のカキヤブリはほとんどの九曜紋軒丸瓦に共通する。

ア. 九曜紋軒丸瓦9.5-3-2（第117図108～110）

文様区の直径が9.4～9.7cm、中心曜径が3～3.2cm、周曜径が1.8～2cmのもの。12点出土している。周縁幅が広く、文様区が狭い瓦。いずれも焼成が甘く、瓦当表面に細かな砂がみられる。丸瓦は瓦当上端に接合されるが、瓦当側がやや反るものがある。範等の一一致が確認できないが、特徴が近似した一群である。108は瓦当面が完形の資料。各曜は正円に近く、配置も均等である。文様区はほぼ未調整のようである。曜の表面は平らで、各曜の断面形は台形を呈する。文様区と周縁の段は、ほぼ直角に立ち上がる。周縁は、ナデ調整が施されるが不安定で、未調整の部分には細かな砂粒がみられる。109は、瓦当下半を欠く。丸瓦の瓦当から18cmのところに直径1.5cmの釘穴がみられる。丸瓦凹面には、コビキBの痕跡と吊り紐の痕跡が認められる。胎土には白色砂粒が目立つ。110も瓦当下半を欠く。丸瓦の瓦当から17cmのところに直径1.5cmの釘穴がみられる。丸瓦凹面には、コビキBの痕跡が認められる。

その他のものもほぼ同様。カキヤブリがみられないものもある。

イ. 九曜紋軒丸瓦10.5-3.3-1.8（第117図111～113、第118図114・115）

文様区の直径が10.5～10.8cm、中心曜径が3.2～3.6cm、周曜径が2～2.5cmのもの。8点出土している。同範の可能性があるもの1種があるのみで、範や調整に差がある。111は、瓦当面がほぼ完形のもの。同範の可能性が高いものが他に1点出土している。各曜が小ぶりで曜の形も中心曜以外は不安定。曜の表面はナデ調整が施され、丸みを帯びる。文様区の表面は未調整または軽いナデ調整か。文様区と周縁の段は直角に立ち上がる。外縁から側縁、瓦当裏面にかけてはナデ調整が施されている。丸瓦は瓦当上端に接合される。いずれも瓦当面から丸瓦部凹面にかけてキラコがみられる。112は、曜が小ぶりで四凸が弱く、文様が不明瞭なもの。同範とは言えないが、数値と特徴が近似したものが2点出土している。いずれも曜の表面にナデ調整が施されている。文様区と周縁の段は有筋で斜めに立ち上がる部分が多い。周縁はナデ調整が施されている。丸瓦の接合は瓦当上端で、断面はほぼ直角である。いずれも瓦当面から丸瓦凹面にかけてキラコがみられるが、曜の表面には薄い、またはみられない。113は、瓦当面がほぼ完形。表面が風化しており調整は不明瞭。各曜の凹凸は明瞭で、表面は平ら。中心曜の断面は円柱状になる。文様区と周縁の段は直角に立ち上がる。丸瓦は瓦当上端に接合されるが、瓦当側にやや反りがある。丸瓦凹面にはコビキBがみられる。114は、瓦当面が完形の瓦。文様の表出が弱く、各曜の形も不安定である。112に近いが中心曜の大きさが異なる。曜の表面はナデ調整が施されている。文様区の表面はほぼ未調整のようである。文様区と周縁の段はほぼ直角だが、第4・5曜付近から端部がなめらかになり、第6・7曜付近は周縁の1/3ほどから斜めになる。周縁はナデ調整が施される。丸瓦は瓦当上端に接合され、断面はほぼ直角をなす。丸瓦凹面にはコビキBと思われる痕跡があるが不明瞭。瓦当から丸瓦凹面にかけて、キラコがみられるが、曜の表面にはみられない。115は、瓦当下半を欠いた全長が53cmの長い軒丸瓦である。周曜の径が大きく、周曜間の間隔が狭い。曜の表面は調整が施され、丸みを帯びる。文様区表面はほぼ未調整

のようである。文様区と周縁の段は丸みを帯びて立ち上がる。本資料は丸瓦が完形である。丸瓦は瓦当上端に接合され、断面はほぼ直角。丸瓦凸面は、瓦当接合後に瓦当側から全長の半分から2/3ほどまで幅1~2cmの縱方向のミガキに近いナデ調整が施されている。このナデ調整の前にも2cmほどの幅のナデ調整が行われている。凹面は、瓦當から約20cmまでは布目痕が明瞭だが、それから玉縁側は不明瞭になる。瓦當から28.5cmで粘土板の縦ぎ目と思われる接合痕が認められる。接合部から瓦當側にはコビキBの痕跡が認められるが、接合部から玉縁側では不明瞭である。瓦當から23cmと43cmに2箇所釘穴が設けられている。後端から玉縁部の凹面側にかけて面取りが施され、面取り後に軽いナデ調整で仕上げられている。キラコは瓦當面にほぼ限られる。胎土には黒色砂粒がやや目立つ。

ウ. 九曜紋軒丸瓦10.5-3.9-2(第118図116)

文様区の直径が10.5~10.6cm、中心曜径が3.7~3.9cm、周曜径が1.8~2.3cmのもの。5点出土した。いずれも文様の凹凸が明瞭で、丸みを帯びて突出する。周曜径に差があり、同範関係は不明。116は、周縁幅が不安定で、文様区と周縁の段も斜めや内傾した部分がある。丸瓦は、瓦當裏面の上端に接合され、断面はほぼ直角。瓦當から16.5cmに釘穴がみられる。凹面には糸縦り痕がみられる。焼成がやや不良で、色調に黒味がなく、瓦當面に細かな砂がみられる。丸瓦凹面にコビキBの痕跡が認められるものがある。焼成が良好なものは色調が黒味かかり、瓦當面にキラコがみられる。

エ. 九曜紋軒丸瓦10.5-4-2(第119図117~119)

文様区の直径が10.5~10.7cm、中心曜径が3.8~4.1cm、周曜径が2~2.2cmのもの。10点出土した。いずれも各曜は正円に近く、配置はほぼ均等。断面は丸みを帯びる。文様の凹凸、文様区・周縁の調整、範傷などに差があり、範は複数ある。117は、第1~3・7・8曜に比べ第4~6曜の凹凸は浅い。曜の表面には指紋または布目痕がみられる。曜以外の文様区はナデ調整で仕上げられている。文様区と周縁の段差は0.5cmで、周縁より中央曜がわずかに突出する。丸瓦は瓦當裏面の上端に接合され、断面はほぼ直角である。丸瓦の凹面にはコビキBの痕跡と粘土板の縦ぎ合わせ目がみられる。瓦當面から8.2cmで釘穴がみられる。キラコは瓦當面から丸瓦部の凸面にかけてみられる。同範とは言い切れないが調整等が近似したものがある。118は、周縁の一部を欠く。第3・4曜が梢円形に近い。文様区は、曜の表面のみ調整しており、他はほぼ未調整。曜の表面には指紋または布目痕がみられる。文様区と周縁の段差は明瞭で直角に立ち上がる。外縁から瓦當裏面は丁寧なナデ調整が施されている。丸瓦は残存していないが、瓦當上端に接合される。この瓦には第8曜付近の範傷を根拠とした同範例が出土している。胎土に黒色の砂粒が目立つ。119は、丸瓦部が長い瓦。瓦當は周縁の1/3を欠き、丸瓦部は瓦當から35.5cmで欠損している。文様区は、曜の頂部以外はほぼ未調整で、文様区と周縁の段はほぼ直角に立ち上がる。側縁は丸瓦側に下がり、断面が斜めになる。丸瓦部凸面は、ミガキに近いナデ調整で仕上げられ、瓦當から18cmに釘穴がある。凹面は、瓦當から21cmまでは全面的な細かな布目痕と紐痕、それ以後は2mm幅の粗い編み物痕と布目痕がみられる。この境界には布目の端部を糸で綴った痕がみられる。

他に文様の凹凸が浅いものや、文様区に範傷が目立つものがある。

オ. 九曜紋軒丸瓦10.5-4.2-2(第119図120~123)

文様区の直径が10.5cm前後、中心曜径が4.2~4.5cm、周曜径が1.9~2cmのもの。4点出土した。同範関係はない。120は瓦當が完形のもの。中央曜が4.5cmで、周縁を調整され円柱状に立ち上がる。周曜はやや不安定な円形。九曜の凹凸は浅い。曜の上面は、ナデ調整がみられる。文様区の表面は、軽いナデ調整が施されている。文様区と周縁の段差は浅い。周縁から瓦當裏面にかけてはナデ調整が施されている。丸瓦

は大半が欠損しているが、残存部分ではコビキBと思われる痕跡が認められる。丸瓦は瓦当裏面上端に接合される。瓦当面から丸瓦にキラコがみられる。121は、左側の周縁の一部を欠く。各曜は比較的安定した円形を呈し、配置も安定している。曜の周囲には工具による細い調整がみられる。九曜の凹凸は浅い。曜の表面はナデ調整が施され、文様区の表面も軽いナデ調整が施されているようである。文様区と周縁の段差は不安定で、最大5mm幅の段がみられる。周縁はナデ調整が施されている。瓦当面にキラコが認められるが、各曜の調整された部分にはキラコがみられない。丸瓦は瓦当の上端に接合され、断面は直角をなす。丸瓦凹面にはコビキBがみられる。キラコは丸瓦凸面にもみられるが、瓦当面ほど明瞭ではない。122は、瓦当面向かって右側1/4を欠く。文様の凹凸は比較的大きく周曜が小ぶりにみえる。曜の表面は調整され、周曜は丸みを帯び、中心曜の断面は台形状に突出する。文様区と周縁の段差は明瞭で、2段になる部分はない。周縁はナデ調整が施されている。側縁から瓦当裏面にかけてはナデ調整が施されている。丸瓦は瓦当裏面の上端に接合されている。断面は直角をなす。丸瓦と瓦当の接合部分凸面にヘラ状の工具痕がみられる。123は、文様区径が10.8cmでやや大きい。瓦当側が明褐色を呈する。各曜は黒味がある。曜の頂部はナデ調整され、文様区の表面はほぼ未調整で、周縁はミガキに近いナデ調整が施されている。

力、九曜紋軒丸瓦11-3.5-2（第119図124、第120図125）

文様区の直径が11cm、中心曜径が3~3.5cm、周曜径が1.9~2.2cmのもの。4点出土している。中心曜が小さく、各曜が離れてみえる。いずれも焼成は良好で、色調も黒味がある。同范ではない。124は、瓦当面は完形で丸瓦部を欠く。この瓦は、周曜が小さくいびつで、特に各曜が離れている。曜の表面と文様区表面は軽いナデ調整が施されている。文様区と周縁の段は、シャープで直角に立ち上がる。文様区には、第1曜と第8曜の間、第3曜と第4曜の間に范傷がある。丸瓦の調整は不明。瓦当の表面にはキラコがみられる。125は、外縁の一部と、丸瓦部を欠く。瓦当上半に蓮状の圧痕がみられる。各曜の平面形は不安定で、配置も各曜まちまちであり、第1・2曜付近は明瞭なナデ調整が施されている。各曜の表面もナデ調整が施され、丸みを帯びる。文様区と周縁の段は直角に立ち上がるが、第4・5曜付近は斜めになっている。周縁は比率として幅が狭い。表面はナデ調整が施されている。丸瓦は瓦当の上端に接合される。胎土は黒灰色の砂粒が目立つ。瓦当面から平瓦凸面側にキラコがみられる。

キ、九曜紋軒丸瓦11-3.8-23（第120図126・127）

文様区の直径が11~11.3cm、中心曜径が3.8~4.1cm、周曜径が2.3cmのもの。5点出土している。いずれも文様の凹凸が明瞭。同范例は無い。126は、全長の長い軒丸瓦である。瓦当面がほぼ完形で、丸瓦は瓦当から41cmのところで欠損している。曜の表面は調整が施され、頂部はほぼ平らである。文様区表面はほぼ未調整のようで、文様区から周縁にかけて細かな砂が目立つ。文様区と周縁の段はほぼ直角に立ち上がる。周縁の一部はナデ調整が施されている。丸瓦は瓦当裏面上端に接合され、断面はほぼ直角である。丸瓦凸面は、風化している部分があるが幅1~2cmの縱方向のミガキに近いナデが施されている。瓦当面から18cmのところに釘穴がある。凹面は、瓦当から約25cmまでは布目痕が明瞭だが、それからは2mmほどの幅の粗い編み物痕になる。また、コビキBの痕跡が認められる。胎土には黒色・白色砂粒がやや目立つ。127は、瓦当面が完形で丸瓦が欠損している。周縁幅が狭く、瓦当径が14.5cmと小さい瓦。文様区と周縁の段差が小さい。瓦当から丸瓦凸面にかけてキラコがみられる。

この他にも范傷が激しいもの、瓦当面に細かな砂がみられるものがある。

ク、九曜紋軒丸瓦11-4-1.9（第120図128～130）

文様区の直径が10.8～11cm、中心曜径が4～4.1cm、周曜径が1.8～1.9cmのもの。8点出土している。いずれも文様の凹凸が明瞭。范傷から2種の同范例を確認した。128は、瓦当の上端から丸瓦部が欠損している。中心曜据と第4曜周囲の范傷の一一致から同范と判断したものがこの他に1点ある。瓦当面には曜の表面以外にキラコが目立ち、器面が滑らかである。文様区表面は未調整と思われるが判然としない。文様区と周縁の段は不安定で直角の部分もあれば斜めに立ち上がる部分もある。129は、周縁の一部が欠損している。第3曜据と第7曜付近の文様区縁の范傷の一一致から同范と判断したものが他に1点ある。瓦当面は曜の表面と中心曜や文様区端にナデ調整の痕跡がある。器面は荒れている。130は、瓦当面が完形。同范とは言えないが調整が近似するものが他に1点ある。文様区にキラコを施した後でナデ調整をほぼ全面に施している。調整していない部分にキラコが残存している。中心曜と第4～7曜にかけてはナデ調整により曜の輪郭が崩れている。

その他に瓦当面にキラコが目立つものの瓦当裏面にキラコがみられるものがある。キラコの分布は右手の人差し指から小指の4指に一致し、親指と思われる圧痕は丸瓦凸面にある。親指部分にはキラコがみられない。製作時に手で掘んだ痕跡である。

ケ、九曜紋軒丸瓦11-4-2（第120図132、第121図131・133～135）

文様区の直径が10.7～11.2cm、中心曜径が3.9～4.1cm、周曜径が1.8～2.3cmのもの。34点出土している。この内、文様の凹凸が弱く稜線があいまいなため文様が不明瞭なものが9点出土している。同范の根拠はない。文様区と周縁の段は安定しており、ほぼ明瞭な直角である。周縁の幅には差がある。このグループは、文様区の仕上げで2分される。大半は瓦当面に細かな砂がみられるもので、文様区の調整はほとんどみられず、曜の頂部に軽いナデ調整が施されている程度。砂がないものは文様区に軽いナデ調整が施されている。131は、瓦当面に砂が多く、瓦下半を欠く。丸瓦部はほぼ完形。丸瓦は瓦当上端に接合され、断面はほぼ直角である。凸面には瓦当接合後のミガキ調整が散漫に施されている。「五」の刻印が認められる。凹面側にはコビキBの痕跡と粗い編み物の痕跡が認められる。凹面側の体部と玉縁の境は緩やかで、断面観察では凸面側に粘土を足して玉縁の段を形成していることがわかる。丸瓦凸面に「五右衛門」の刻印がみられるものがある。

その他の25点は、いずれも文様の凹凸が明瞭。范傷から2種の同范例を確認した。134は、瓦当が完形で丸瓦を完全に欠いている。第3曜据、中心曜～第4曜～周縁間の范傷が一致する同范例がこの他に1点ある。范傷は他にも文様区と周縁の間などに多数みられる。文様区の表面は風化のためか細かな凹凸が目立つ。曜の表面は、ナデ調整が施されたと思われるが、文様区の調整は全体的に不明瞭。文様区と周縁の段はほぼ直角に立ち上がる。周縁はナデ調整が施されている。丸瓦の詳細は不明瞭だが、接合は瓦当裏面のはば上端で、斜め方向のカキヤブリが認められる。本瓦の瓦当裏面は中央部が厚くなっている。同范例は、丸瓦側面を水平にした場合、周縁間が瓦当の上端となり、第1曜が曖昧となる。135とは瓦当と丸瓦の接合位置がわずかにずれるようである。135は、瓦当が完形で丸瓦を完全に欠いている。第1・4・5・6・7曜の凹凸が一致するため同范と判断したものが他に1点ある。調整などもほぼ同一である。文様区の調整は曜の頂部にナデ調整を施す程度で、表面はほぼ未調整である。文様区と周縁の段はほぼ直角に立ち上がり、周縁はナデ調整が施されている。丸瓦の接合は瓦当裏面のはば上端で、カキヤブリがみられる。

同范が確認できなかったものには、明瞭な范傷が確認できたもの（16点）と明瞭な范傷は確認できなかったもの（5点）がある。范傷が確認できたものは、文様区が曜の頂部以外のはば未調整で、風化による凹凸がみられるものもある。中には、ナデ調整により曜の凹凸や文様区表面の凹凸が乱れ、瓦当がいびつになり稚拙な仕上がりにみえるものもある。胎土は、黒色の砂粒を多く含み硬質に仕上がっているものが

大半だが、白色の細かな砂粒が目立つものもある。また、砂粒の混入が少なく細かな胎土で、焼成は良好だが軟質に仕上がったものもある。いずれにもキラコや細かな砂の付着はみられない。

范傷が不明瞭なものも技法的な差異はない。瓦当面に細かな砂粒が目立つものが1点ある。

コ. 九曜紋軒丸瓦11-4-2.1 (第121図136, 第122図137~139)

文様区の直径が10.7~11.2cm、中心曜径が3.8~4.1cm、周曜径が2~2.1cmのもの。18点出土している。瓦当面から丸瓦まで完形のものが2点と同范例が2種ある。136は、瓦当面から玉縁端まで34cm。瓦当の文様区は、曜の頂部以外はほぼ未調整。キラコや細かな砂はみられない。文様区と周縁の段はほぼ直角に立ち上がる。周縁外側はナデ調整で仕上げるが、側縁と瓦当裏面下部のナデ調整はやや強め。丸瓦は瓦当裏面の上端に近い部分に接合するが、上端に支持粘土を足しているためやや反りがみられる。丸瓦部凸面には瓦当を接合した際のミガキに近いナデ調整が瓦当側から2/3ほどまで施されている。凸面の瓦当側寄りに「猿渡甚」と読める刻印がみられ、瓦当から22cmのところに釘穴がある。凹面側は布目痕と2mmほどの幅の編み物の圧痕がみられる。コビキの判別は不明瞭。玉縁との段差は不明瞭で、体部から自然に絞り込まれている。丸瓦部側面から玉縁側端まで面取りが施されている。137は、瓦当面から玉縁端まで35.2cm。瓦当の文様区は曜の頂部にナデ調整がみられる以外は風化のために不明瞭。キラコや細かな砂はみられない。文様区と周縁の段はほぼ直角に立ち上がる。周縁外側はナデ調整で仕上げる。丸瓦は瓦当裏面の上端に接合する。丸瓦部凸面には瓦当を接合した際のミガキに近いナデ調整がほぼ全体に施され、瓦当から18.5cmのところに釘穴がある。凹面側は布目とコビキBの痕跡がみられる。玉縁との段差は不明瞭で、体部から自然に絞り込まれている。丸瓦側面から玉縁側端まで面取りが施されている。138は、瓦当面の1/4を欠く。第4~7曜の凹凸の合致から同范と判断したものがこの他に1点ある。

139は瓦当面の一部が欠損している。第2・3・6曜の范傷と第7曜の凹凸の一一致から同范と判断したものがこの他に1点ある。

同范が確認できなかったものには、范傷が明瞭なもの（8点、うち1点が137）、不明瞭なもの（6点、うち1点が136）がある。范傷が明瞭なものは、曜の頂部と文様区表面にナデ仕上げを施したものと頂部以外ほぼ未調整のものがあり、後者が多い。文様区と周縁の段は直角に立ち上がるものが多いが、斜めに立ち上がるものもある。瓦当面のキラコや細かな砂はみられない。范傷が不明瞭なのもほぼ同様。瓦当面にキラコはみられないが、細かな砂がみられるものが1点ある。

サ. 九曜紋軒丸瓦11-4-2.2 (第122図140~142, 第123図143)

文様区の直径が10.8~11.3cm、中心曜径が4~4.1cm、周曜径が1.8~2.4cmのもの。30点出土している。3種の同范例を確認した。140は、第1曜と第8曜の間の范傷が合致する同范例がある。瓦当がほぼ完形で、第2・3・4曜の平面形がいびつ。各曜の表面はナデ調整が施されている。中心曜の周りと、文様区の周縁に沿った部分にナデ調整が施されている。周縁もナデ調整が施されているが、ナデ調整後に平行条線が部分的にみられる。丸瓦の接合は瓦当上端で、断面形はほぼ直角である。同范例では、文様区表面の調整が施されておらず、多数の范傷がみられる。また、瓦当裏面に周縁に沿った強いナデ調整がみられる。141は、瓦当面が完形。丸瓦側縁を水平にした場合、周曜間が周曜の上端となり、第1曜が曖昧となる。第2曜外側・第5曜内側・第6曜内側の范傷が一致する同范例がある。各曜の表面や、文様区の周縁沿いはナデ調整が施されているが、その他の文様区表面はほぼ未調整。瓦当側端下側は斜めに仕上げられている。丸瓦は瓦当裏面上端に接合されており、断面形は直角である。同范例もほぼ同様の技法だが、周曜が文様区上端に一致する。142は、瓦当面が周縁の一部が欠けているが、ほぼ完形。曜の凹凸は浅い。第7~8~1曜間の范傷が一致する同范例が他に3点ある。曜の表面はナデ調整が施されているが、文様区の

表面調整は粗い。文様区の周縁沿いにナデ調整が施されているが全周せず、周縁がいびつになっている。文様区と周縁の段も内傾した部分もあれば、斜めに立ち上がる部分もある。丸瓦は完全に欠落しており詳細は不明。同范例も同様の調整だが、周縁は安定しており、文様区と周縁間の段もほぼ直角に立ち上がる。

同范が確認できなかったものには、明瞭な范傷が確認できたもの（8点）と明瞭な范傷は確認できなかったものがある。143は瓦当が完形で、丸瓦が残存しているもの。第3曜・第4曜・第7曜付近に范傷がある。瓦当面には全面に細かな砂がみられる。調整は不明瞭。丸瓦は瓦当裏面の上端に接合されるが、瓦当側がわずかに反りあがる。凸面側の補充粘土から丸瓦にかけて弱いナデ調整が施され、この部分に細かな砂がみられる。丸瓦の凹面には漆喰が付着しており布目痕以外の調整は不明瞭。

范傷が不明瞭なものは、瓦当面に細かな砂が目立つかどうかで2分する程度で、技法的な差異は見出せていない。砂が目立つものは瓦当面のナデ調整等が目立たない傾向にある。

シ. 九曜紋軒丸瓦11-4-2.5（第123図144・145）

文様区の直径が10.8～11cm、中心曜径が3.9～4.1cm、周曜径が2.5cmのもの。6点出土した。同范関係の根拠は無いが、各曜の丸みのある形状、黒味の強い色調、全てにキラコがみられる点、仕上がりの雰囲気など、近似する点が多い。145は、瓦当面が完形で丸瓦は完全に欠損している。側面に灰色の漆喰が付着している。文様区と周縁の高低差が小さく、瓦当の厚さが薄い。文様区と周縁の段は不安定で、斜めになる部分や2段になる部分もある。同様の特徴を持つものが他に2点ある。144は、周曜の形が不安定。曜の表面と文様区の表面はナデで仕上げられている。文様区と周縁の段差は浅く、不安定。周縁幅も不安定である。周縁から瓦当裏面にかけてはナデ調整が施されている。丸瓦は瓦当の上端に接合され、断面は直角をなす。丸瓦は凹面にコビキBの痕跡がみられる。この他の2点は文様区と周縁の段が比較的深いもので、曜の凹凸が近似する。同范の可能性もあるが、同范の場合、瓦当面に対する丸瓦の接合位置が約180度異なる。確認できるものは全て丸瓦接合のためのカキヤブリがみられる。

ス. 九曜紋軒丸瓦11-4.2-2（第123図146・147）

文様区の直径が10.7～11.1cm、中心曜径が4.1～4.3cm、周曜径が1.8～2cmのもの。9点出土している。いずれも文様の凹凸が明瞭。范傷から1種の同范例を確認した。146は、瓦当面はほぼ完形で、丸瓦の一部が残存する。文様区は曜の頂部以外はほぼ未調整で、器面が粗い。第2曜と第7曜の周縁側に明瞭な范傷がある。文様区と周縁の立ち上がりはほぼ直角。周縁の幅はまちまちで、全体としてはややいびつなみえる。周縁はナデ調整で仕上げられている。丸瓦は瓦当裏面の上端に接合され、丸瓦凸面にわずかに補足粘土が施されている。丸瓦凹面にはコビキBの痕跡がみられる。147は、瓦当面が完形で、丸瓦の一部が残存する瓦。第1・4・6曜の曜周辺の范傷の一致から同范と判断したものが1点ある。文様区は曜の頂部以外はほぼ未調整のようで、文様区縁を中心に范傷がみられる。文様区と周縁の段は、不安定で直角の部分もあれば斜めに立ち上がる部分もある。周縁はナデ調整で仕上げられている。丸瓦は瓦当裏面の上端に接合され、断面はほぼ直角である。瓦当表面にはキラコがみられるが、丸瓦凸面にはみられない。

その他のものにも、同范の根拠は無いが仕上がりが近似したものや、瓦当にキラコが目立つものがある。

セ. 九曜紋軒丸瓦11-4.2-2.2（第123図148・149、第150・151）

文様区の直径が10.8～11.2cm、中心曜径が4.2～4.3cm、周曜径が2.1～2.2cmのもの。18点出土している。1種の同范例を確認している。148は、瓦当面がほぼ完形で丸瓦部も残る。文様区の周縁沿いの范傷の一一致から同范と判断したものがこの他に1点ある。両者の技法や胎土はほぼ同一。曜の頂部はナデ調整が施されているようだが明瞭ではない。文様区の表面は滑らかだが、范傷の残存状況からは未調整である可能

性が高い。文様区と周縁の段はほぼ直角に立ち上がる。周縁はナデ調整で仕上げている。丸瓦は瓦当上端に接合されるが、支持粘土のため丸瓦から瓦当に向かってわずかに反る。瓦当から18cmに釘穴が設けられている。丸瓦四面には細かな布目痕がみられる。コビキBと思われるが判然としない。瓦当面にキラコや細かな砂はみられない。

同范例以外の範と技法は様々である。149は、瓦当面がほぼ完形で丸瓦の一部が残存している。曜の頂部以外の文様区表面はほぼ未調整だが、文様区の周縁沿いに完周するナデ調整がみられる。特筆すべきは丸瓦凸面にヘラ描きがみされることである。「□七」と判別できる。150は、瓦当面がほぼ完形で、丸瓦の大半は欠損したもの。周曜の周囲や、第5・6曜付近の文様区縁に範傷がある。151は、瓦当面が完形で曜がわずかに大きいもの。中心曜は円柱状で、周曜も表面がほぼ平らである。曜の表面以外の文様区は未調整で、周縁はナデ調整が施されている。調整が甘い部分には細かな砂がみられる。

他に、瓦当面にキラコがみられるものや、細かな砂がみられるものも含まれるが客体的である。

ソ、九曜紋軒丸瓦11-4.3-24 (第124図152・153)

文様区の直径が10.8～11.3cm、中心曜径が4.2～4.4cm、周曜径が2.3～2.5cmのもの。12点出土している。文様が丸みを帯び稜線があいまいで文様が明瞭でないもの、文様の凹凸が弱いもの、文様が明瞭で瓦当に細かな砂がみられるものなど、それぞれ特徴を見出せるものがある。範傷による明らかな同范はない。

文様が不明瞭なものは1点で、瓦当に細かな砂がみられる。胎土に白色砂粒が目立つ。152は、文様の凹凸が弱いもの。瓦当面にキラコが目立つ。焼成は良好で黒みがかる。

文様が明瞭で瓦当面に細かな砂が多いものは3点出土している。うち2点は、周曜の起伏や調整・焼成は近似するが同范ではない。この2点は文様区と周縁の段も直角に立ち上がる。もう1点は、文様区と周縁がいびつで、段が不安定で斜めに立ち上がる。文様区と外縁の境目に粘土の単位と思われる線がみられる。153は、焼成が甘いため明褐色を呈する。曜の表面はナデ調整が施されている。曜の平面形は不安定。文様区と周縁の段は直角に立ち上がる。文様区の端部に指頭状の圧痕がみられる。

他7点は文様が明瞭で、先の特徴がないもの。いずれも曜の表面はナデ調整を施しているが、曜の立ち上がりから文様区の表面はほぼ未調整。曜の形状は不安定。文様区と周縁の段は不安定で、内傾や斜めに立ち上がる部分がある。丸瓦の残存が悪いため丸瓦の調整は不明瞭だが、凹面に粗い布の痕跡がみられる。

タ、九曜紋軒丸瓦11-4.6-25 (2.3) (第124図154～156)

文様区の直径が10.7～11.3cm、中心曜径が4.6～4.7cm、周曜径が2.2～2.5cmのもの。7点出土している。文様が浅いもの（4点）と、深いもの（3点）がある。浅いものは、同范の根拠はないが、文様の凹凸や調整が近似している。各曜はほぼ正円で、配置も均等である。曜の表面は調整され、丸みを帯びる。いずれも瓦当面から丸瓦凸面にかけてキラコが目立つ。色調は黒みが強いもの（3点）と灰色のもの（1点）がある。丸瓦は、瓦当裏面の上端に接合されている。154は黒みが強いもの。瓦当面は完形の瓦。文様区と周縁の段差は浅く斜めに立ち上がる。周縁は文様区側にわずかに下がりぎみで、ナデ調整が施されている。丸瓦は瓦当裏面上端に接合されている。丸瓦凸面が瓦当上端より上になるため、断面はわずかに鈍角になる。丸瓦四面にはコビキBと思われる痕跡がみられるが明瞭ではない。瓦当面と丸瓦凸面にキラコがみられるが、曜の表面、瓦当面の下側縁部分にはほとんどみられない。

文様が深いものは3点出土している。155は、第4曜と周縁の一部を欠く。各曜は比較的正円に近い。曜の上面に軽いナデ調整が施されている以外は、文様区はほぼ未調整。第2・7曜付近の範傷の一一致から同范と判断したものが1点ある。文様区と周縁の段差は深く直立する。周縁はナデ調整が施されるが部分的。調整が文様区側にわずかに下がる。丸瓦は瓦当裏面上端に接合され、断面は直角をなす。丸瓦の大半

を欠くため丸瓦の調整は不明。全体的に焼きムラのある瓦で、范傷から同范と判断できる例が1点ある。胎土には白色砂粒が目立つ。156の瓦当面は、周縁の一部にナデ調整が施されている以外はほぼ未調整で、細かな砂がみられる。丸瓦は完全に落しているため技法等は不明。この瓦は瓦当の厚みが薄く、中央に向かって緩やかに窪む。

チ、九曜紋軒丸瓦11.5-4-2.2（第124図157・158、第125図159～161）

文様区の直径が11.3～11.5cm、中心曜径が3.9～4.2cm、周曜径が2～2.2cmのもの。完形のもの1点を含む計16点出土しており、同范例が1種ある。157は、中心曜を含んだ瓦当下半部。文様の凹凸が深く、瓦当が分厚い。瓦当裏面はほぼ平らにナデ調整されている。周縁から側縁のナデ調整も丁寧である。158は瓦当から丸瓦までほぼ完形の瓦。文様区は、曜の表面以外はほぼ未調整。文様区と周縁の段はほぼ直角に立ち上がる。側縁は丸瓦側にやや下がり、断面形は斜めになっている。丸瓦は、瓦当裏面の上端に接合され、断面はほぼ直角。丸瓦凹面はミガキに近いナデ調整で仕上げられている。瓦当から22cmに釘穴があり、その脇に「土山 甚九□（郎）」の刻印がみられる。凹面には、布目・粗い編み物痕がみられ、吊り紐の圧痕もみられる。コビキはBと思われるが不明瞭。側面から玉縁側端部まで面取りが施されている。159は、丸瓦と周縁の1/3、第1・2・8曜、中心曜を欠く。第5・6曜間の范傷の一一致から同范例がこの瓦以外に161を含めて4点ある。曜の表面を含め、文様区の表面はほぼ未調整で、范傷がみられる。曜は丸みを帯びて突出している。文様区と周縁の段は直角に立ち上がるが、周縁の調整のためか内傾気味になった部分もある。周縁はナデ調整ではほぼ平らである。丸瓦接合の際に、瓦当裏面と丸瓦凹面にそれぞれカキヤブリが施されていたようである。161は159と同范。瓦当面はほぼ完形だが、風化が激しい。曜の頂部はナデ調整が施されているが、文様区の表面調整は不明瞭。周縁はナデ調整で仕上げられている。丸瓦の接合は瓦当裏面の上端で、断面はほぼ直角。この瓦の同范例には、范傷の位置は一致するが范傷の太さが異なるものがあり、范傷の進行を示す可能性がある。また、この一群は142と同范の可能性がある。

160は、瓦当面の第1曜を欠く。文様の凹凸が浅く、周縁より中心曜がわずかに突出する。周縁の幅がやや不安定。曜の表面以外の瓦当面から丸瓦凹面にかけてキラコがみられる。色調は黒みがかる。胎土の粒子が細かく砂粒が少ないためか焼成が良好な割りに軟質である。

他に、文様区に范傷が目立ち須恵質に焼き上がったものがある。曜の頂部以外は未調整であり、中心曜の周囲など輪郭が明確ではない部分がある。また、瓦当面に細かな砂が目立つものが1点ある。

ツ、九曜紋軒丸瓦11.5-4.2-1.9（第125図162）

文様区の直径が11.5cm、中心曜径が4.1～4.3cm、周曜径が1.9cmのもの。3点出土しているが同范例は無い。周曜が小さくみえる。162は、瓦当がほぼ完形で丸瓦の一部が残る。文様区と周縁の高低差があり、文様面が深くみえる。曜の頂部以外はほぼ未調整で、文様区の縁に軽いナデ調整が部分的にみられる。周縁はナデ調整で仕上げられている。丸瓦は瓦当裏面の上端に接合され、断面は直角。丸瓦凹面にはコビキBの痕跡がみられる。

この他に、第3・4・7・8曜と中心曜にかけて范傷が多数ありキラコがみられるもの、范傷はほとんど無くキラコがみられるものがある。

テ、九曜紋軒丸瓦11.5-4.5-2.3（第125図163）

文様区の直径が11.5～12cm、中心曜径が4.3～4.8cm、周曜径が2.2～2.3cmのもの。中心曜径にはばつきがあるが、文様区径と周曜径の大きさを優先してまとめている。4点出土した。同范関係は無いが、技法に大差は無い。中心曜径が大きいものには多数の范傷がみられる。キラコがみられるものもある。

ト. 九曜紋軒丸瓦12-4.3-2 (第125図164・165)

文様区の直径が11.8～12cm、中心曜径が4.2～4.3cm、周曜径が2.1cmのもの。文様区径が12cm前後のものはそれ以下の中にも出上数が少ない。3点出土している。総じて周縁幅が狭いため瓦当径が大きくならない。164は、周縁の一部と丸瓦を欠く。周曜は丸みを帯び、中心曜は表面が平らで断面が円柱状。文様区の縁から周縁にかけてナデ調整が施されている。周縁はナデ調整で仕上げられる。165は、瓦当がほぼ完形で丸瓦の一部が残る。文様区には木目に起因すると思われる範傷が多数みられる。周曜の周縁はほぼ未調整だが、裾の稜線が曖昧なものが多い。文様区には中心曜の周縁と文様区縁にナデ調整が施されている。文様区と周縁の段は不安定で、上下の稜線が曖昧な部分がある。周縁はナデ調整で仕上げられている。丸瓦は瓦当裏面の上端に接合されているが、瓦当側がわずかに反っている。

ナ. 九曜紋軒丸瓦12-4.7-2 (第125図166)

文様区の直径が12～12.2cm、中心曜径が4.6～4.7cm、周曜径が2.1～2.3cmのもので、周曜が小ぶりにみえる。前者と同様に出土数は少ない。同范例は無い。166は、瓦当面が完形で丸瓦を完全に欠いている。各曜ともに正円に近く、ナデ調整により丸みを帯びている。周縁も縁が丸く仕上げられている。文様区と周縁の段は、内傾ぎみである。

他に範傷が多く、周曜が丸みを帯びるものがある。胎土に砂が多く、赤褐色の砂粒が目立つ。

二. 九曜紋軒丸瓦 その他 (第125図167・168)

167は、丸瓦が長い軒丸瓦。瓦当面から36cmのところで欠損している。文様区径は11.5cmで周曜径は2cmだが、中心曜部分に強いナデ調整があり中心曜径が不明瞭。他の丸瓦部が長いものとの同范関係は無い。文様区と周縁の段はほぼ直角に立ち上がる。周縁はナデ調整で仕上げられているが、周縁の外側には強いナデ調整が施されているため窪みがみられる。瓦当面には曜の頂部位外にキラコがみられる。丸瓦は瓦当裏面の上端に接合される。丸瓦は、凸面に瓦当接合時のミガキに近いナデ調整がみられる。瓦当面から17cmと35cmに釘穴が施され、瓦当側に釘が残存している。凹面には白色の漆喰が残存しており、丸瓦の製作技法は観察できないが、布目痕とコビキBの痕跡がみられる。胎土は、砂粒が少なく粒子が細かいため、焼成が良好な割りに軟質である。

168は、菊丸と思われる。1点出土した。瓦当の下半のみの残存で、中心曜も欠く。文様区径が9cm前後で、周曜径も1.7cmと他の九曜紋軒丸瓦に比べて格段に小さい。製作技法は他の九曜紋軒丸瓦と大差はない。丸瓦は完全に欠損しており技法は不明。胎土は白色砂粒が目立つ。

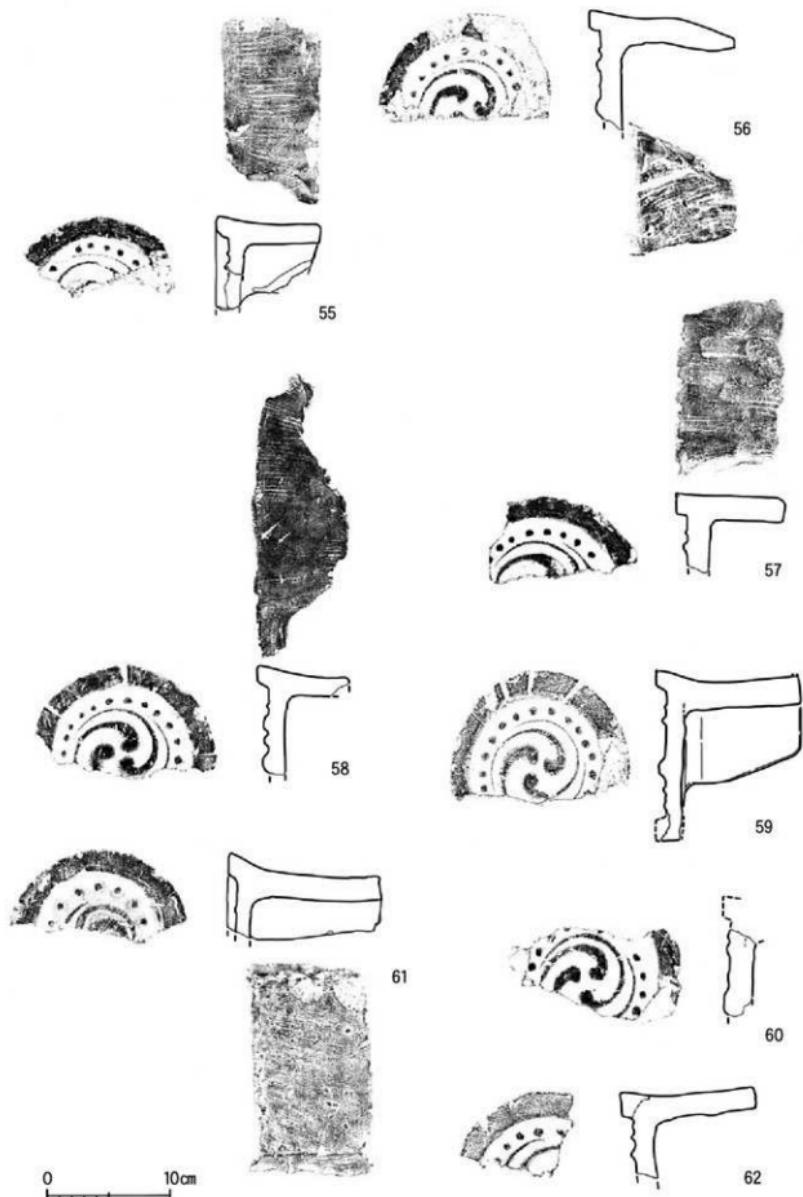
(2) 軒平瓦

飯田丸では、宝珠文、桐文、三葉文、立本文、蓮華文、鳥文、篆文、半菊文、桔梗文、九曜文などの軒平瓦が出土している。瓦当文様によって分けて記述する。また、滴水瓦・垂瓦も軒平瓦の一種として、通常の軒平瓦の後に記述する。

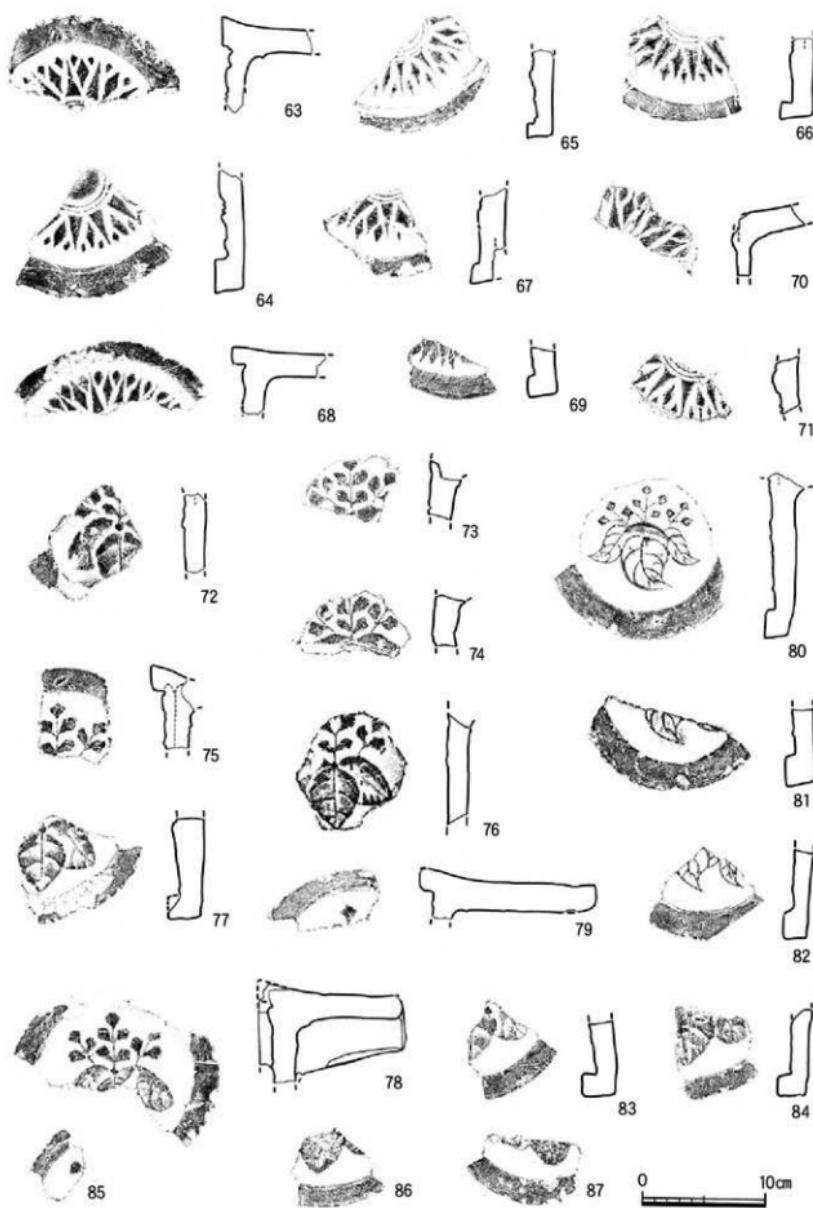
瓦当の形成については、平瓦凸面に粘土を足し、平瓦端部と足した粘土が瓦当面になるものを顎貼り付け技法と呼んだ。今回報告する資料は全て顎貼り付け技法であった。平瓦にみられるコビキ痕については、糸と鉄線の差が不明瞭であり、斜め方向のものをコビキA、端部の辺に平行のものをコビキBとする。

a. 宝珠紋軒平瓦 (第126図169)

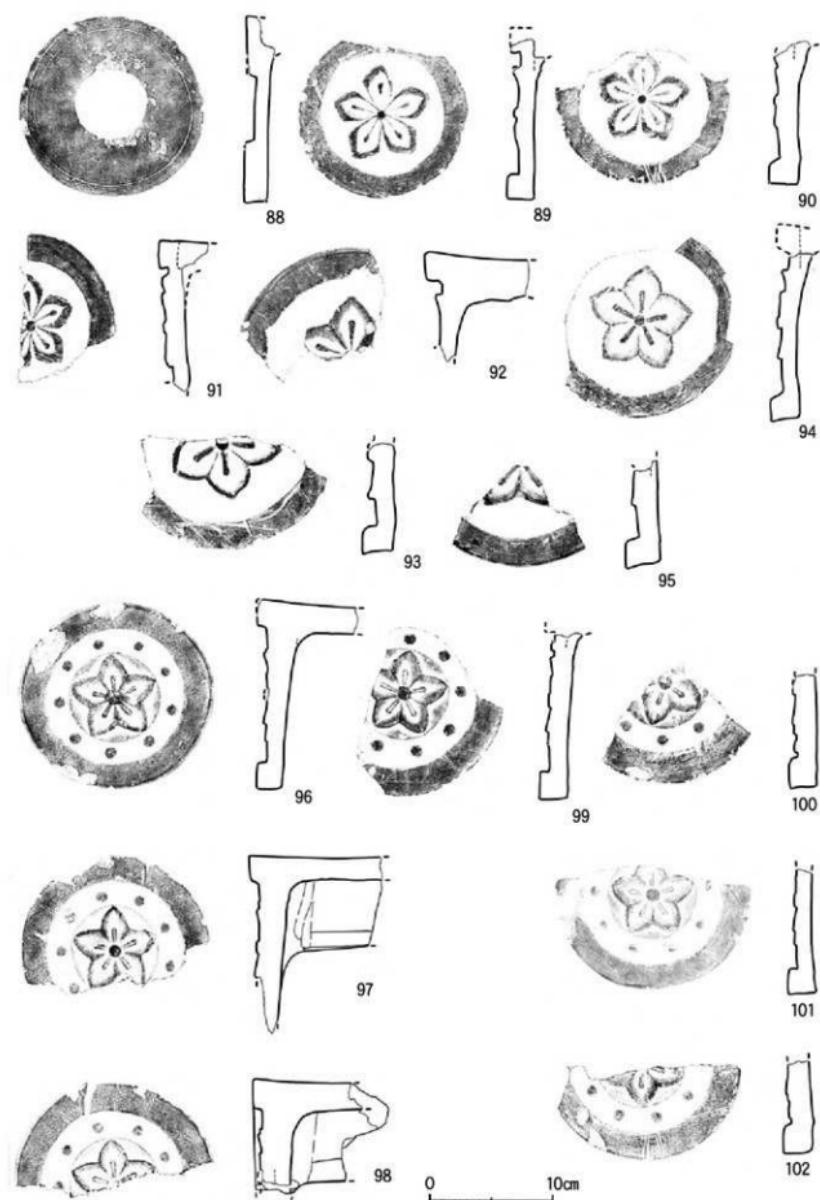
中心飾に宝珠文を用い、左右に唐草文を配する。宝珠を線刻で表現している。宝珠の中心のやや下から2回反転する唐草が伸びる。5点出土しており、范は2種類以上ある。169は、瓦当面の右側と、平瓦の



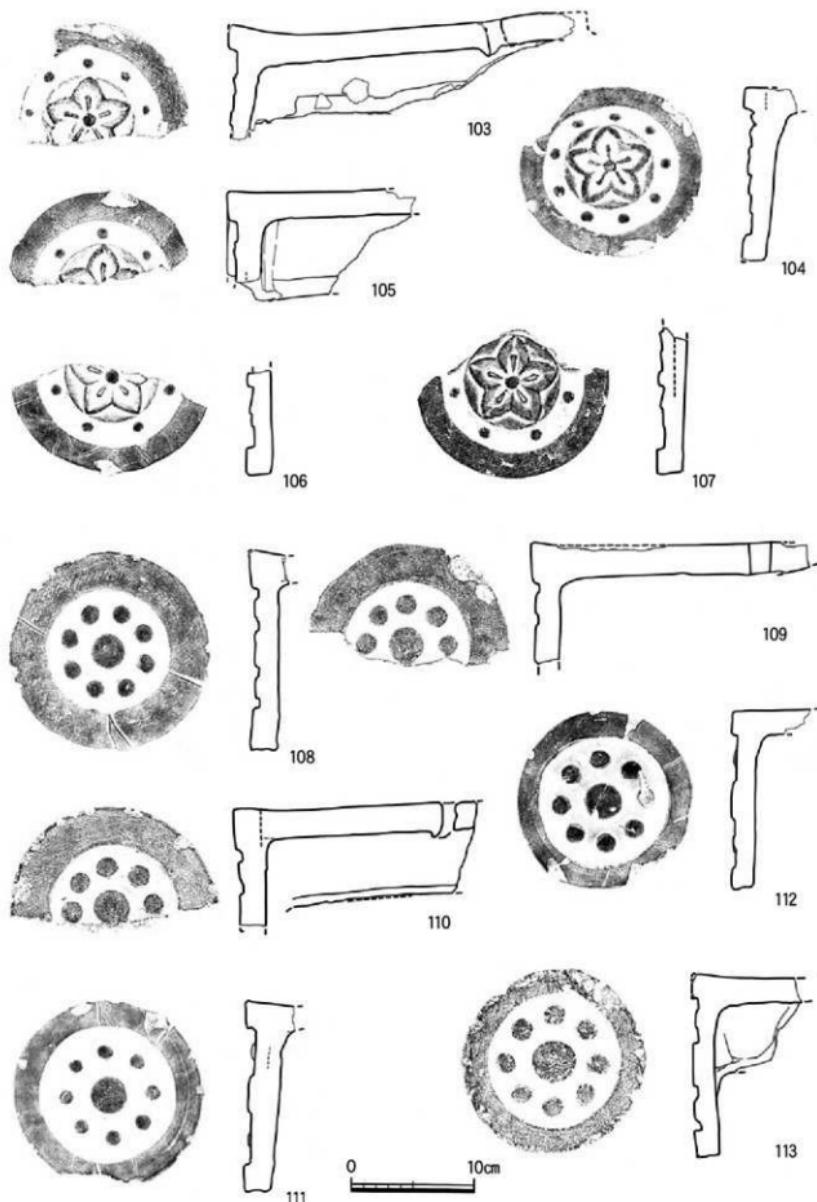
第114図 軒丸瓦実測図8（菊丸）（1／4）



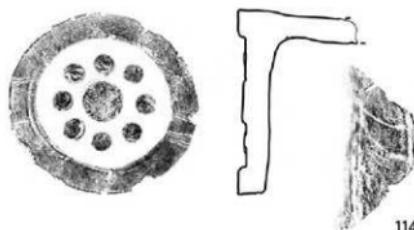
第115図 軒丸瓦実測図9 (1/4)



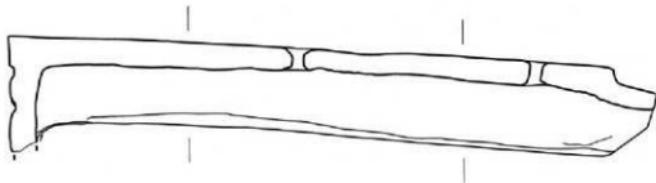
第116図 軒丸瓦実測図10 (1/4)



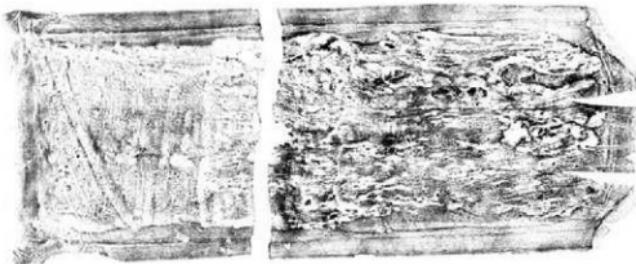
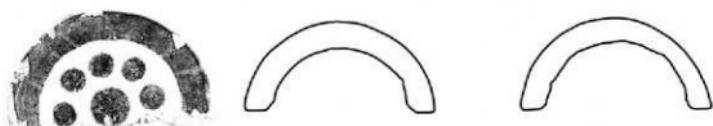
第117図 軒丸瓦実測図11 (1 / 4)



114



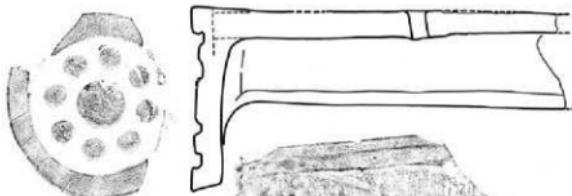
115



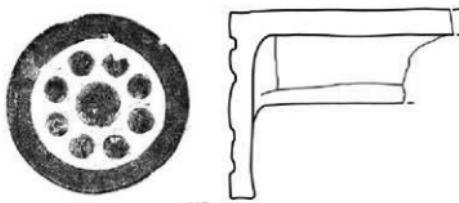
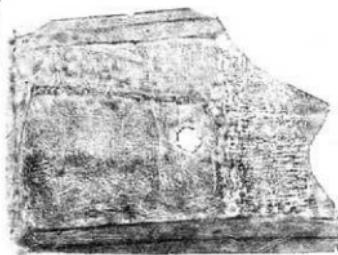
116



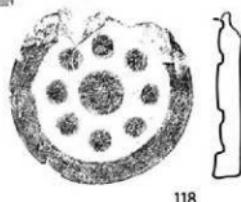
第118図 軒丸瓦実測図12 (1/4)



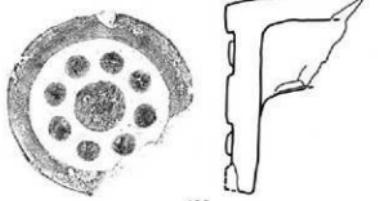
119



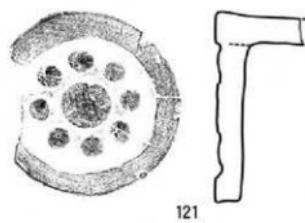
117



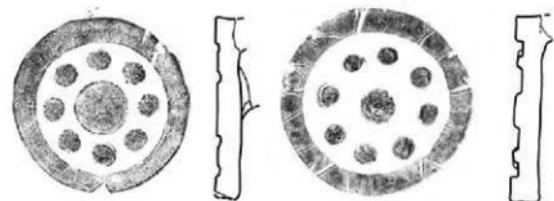
118



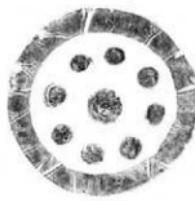
123



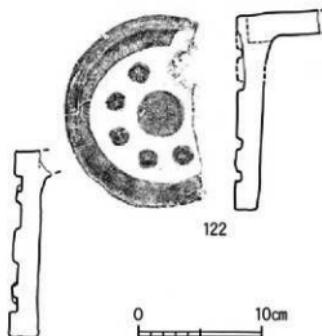
121



120



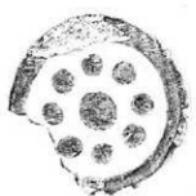
124



122

0 10cm

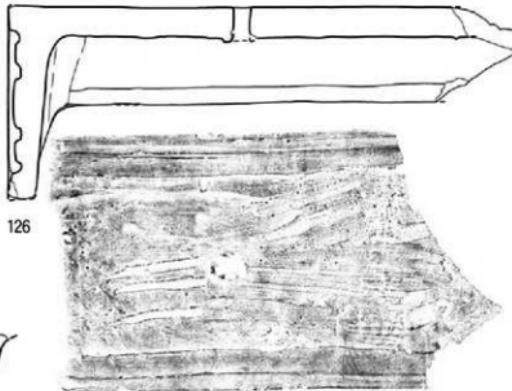
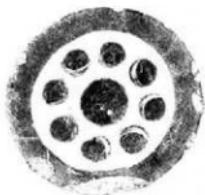
第119図 軒丸瓦実測図13 (1/4)



125



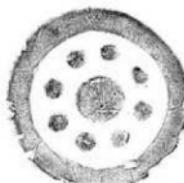
127



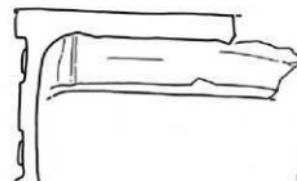
126



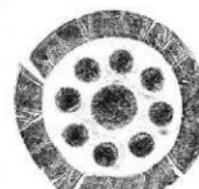
128



130



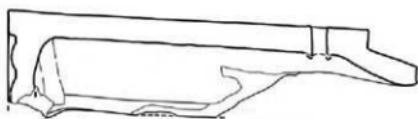
129



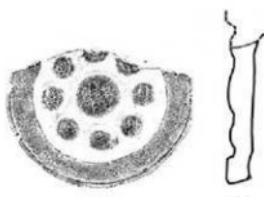
132



第120図 軒丸瓦実測図14 (1/4)



131



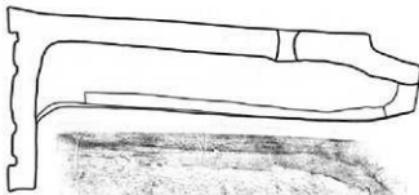
133



134



135



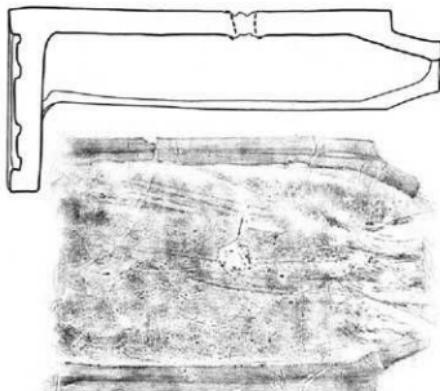
136



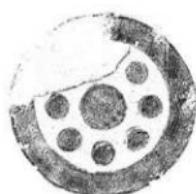
第121図 軒丸瓦実測図15（1／4）



137



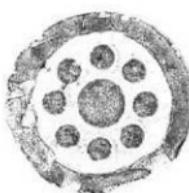
138



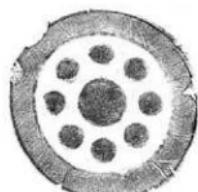
139



140



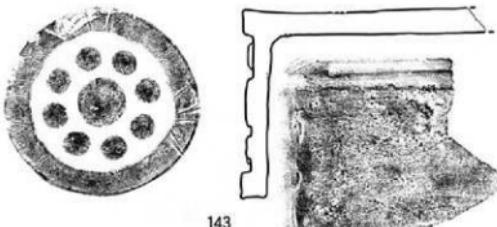
142



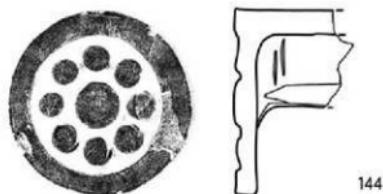
141

0 10cm

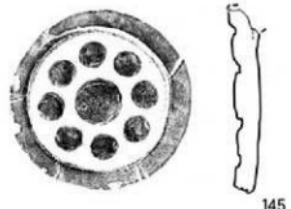
第122図 軒丸瓦実測図16（1／4）



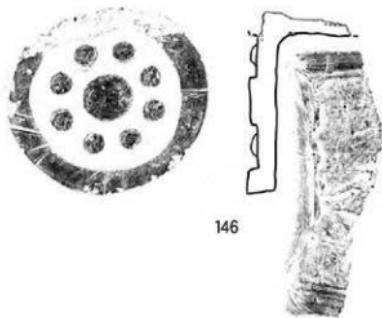
143



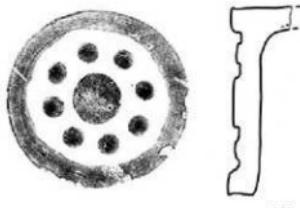
144



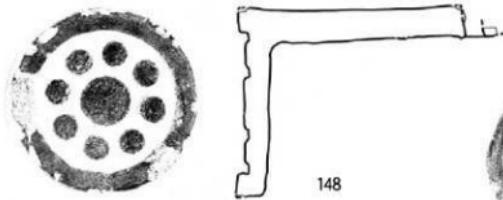
145



146

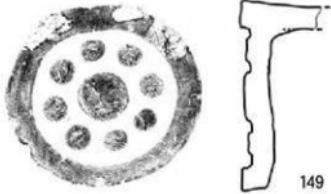


147



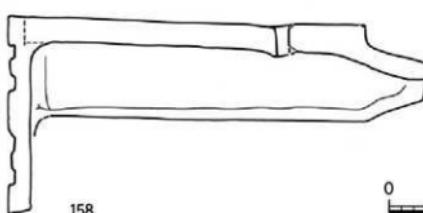
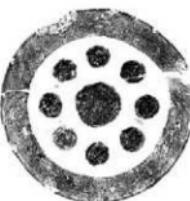
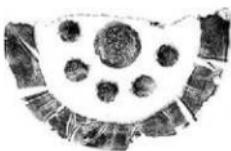
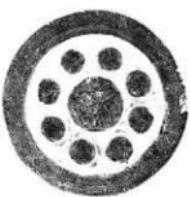
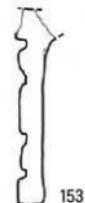
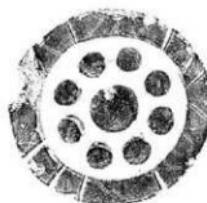
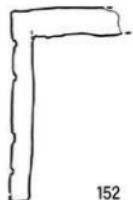
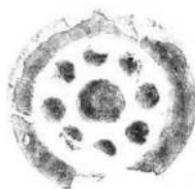
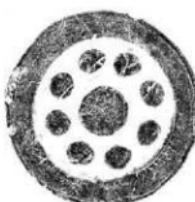
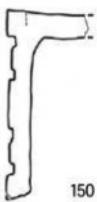
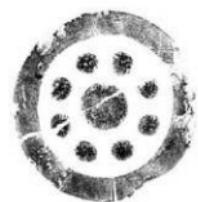
148

0 10cm



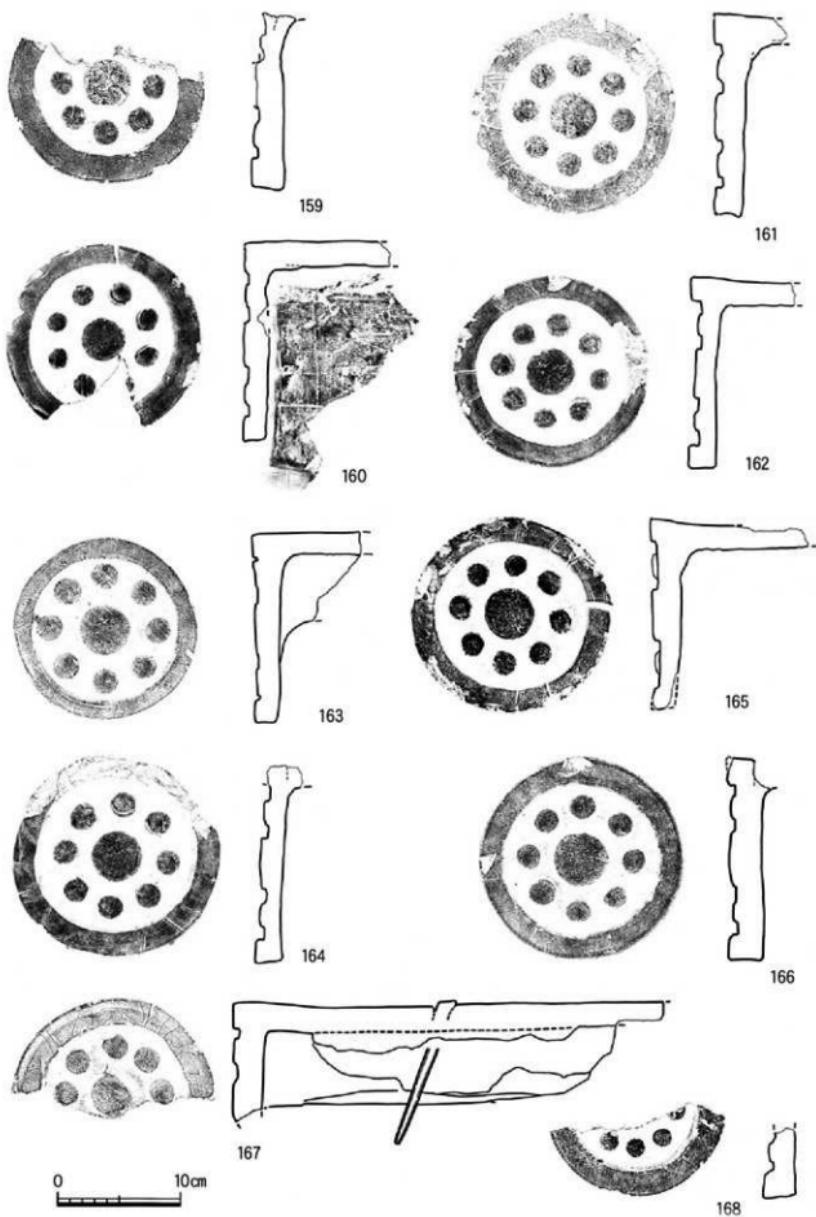
149

第123図 軒丸瓦実測図17 (1/4)



0 10cm

第124図 軒丸瓦実測図18 (1/4)



第125図 軒丸瓦実測図19 (1/4)

大半を欠く。瓦当は額貼り付け技法で、接合面にカキヤブリがみられるものもある。瓦当面はほぼ未調整で瓦当上端の面取りは施されていないようである。平瓦凹面は凸型台の痕跡と、横方向のナデ調整がみられる。凸面には横方向のナデと、沈線状の工具痕がみられる。瓦当面と平瓦部の未調整部分に細かな砂がみられる。その他のものでは、四面の凸型台の痕跡は共通するが、コビキAがみられる例もある。凸面の調整も工具による縱方向の調整が主体である。

b. 桐紋軒平瓦

中心飾に桐文を用い、左右に唐草を配する。文様の違いから3種類に分かれる。

ア. 桐紋軒平瓦A（第126図170・171）

上に伸びる3本の茎の先端に花が珠文で表現され、唐草が1回反転する。2点出土したが、唐草の形状が異なり同範ではない。170は中心飾と唐草がほぼ残存している。文様の凹凸は明瞭で、桐文の葉は棱を持ち、唐草は2重に巻く。瓦当は額貼り付け技法で、平瓦凹面側のナデは強く額部の厚さは薄い。瓦当上端の面取りは細いが、右端は太くなる。平瓦凹面には凸型台の痕跡と、横方向のナデ調整がみられる。コビキAの痕跡もうっすらと残る。凸面側はナデがみられるがムラが多く、細かな砂がみられる。171は中心飾の一部と左側の唐草が残る。唐草の下に範傷がみられる。瓦当は額貼り付け技法で、額部の厚さは薄い。瓦当上端の面取りは最大幅で7mm。平瓦の凹面にはわずかに凸型台の痕跡とナデ調整がみられ、凸面にはコビキAの痕跡がみられる。

イ. 桐紋軒平瓦B（第126図172・173）

3本の茎が細線で表現され、花の表現は無い。唐草は2回反転するが、反転ごとに分離して巴文状になる。最初の反転の下に小ぶりな珠文がある。6点出土しているが、瓦当面が完形のものは無く、珠文が確認できないものもある。子葉の巻き方に差があり同範ではない。172は文様構成がわかるもの。文様区の端部に段差がある。瓦当は額貼り付け技法で、接合部にカキヤブリがみられる。平瓦の凹面は、横方向のナデ調整で仕上げられるが、凸型台の痕跡も残る。また、瓦当面から7~8cmに横方向の粘土のつなぎ目がみられる。凸面はケズリ後に弱いナデ調整で仕上げられる。173は、軟質で全体的に風化が激しい明褐色の瓦。文様は右端の唐草と瓦当面下部を欠く。珠文の有無は不明。瓦当は額貼り付け技法で、額部の厚さは薄い。瓦当上端には最大幅1cmの面取りが施される。平瓦凹面には凸型台の痕跡がみられる。縱方向のコビキ状の痕跡もあるが判然としない。

ウ. 桐紋軒平瓦C（第127図174~176）

ほぼ桐紋軒平瓦Bに近い。外側の唐草がやや間延びする。小片を含めて10点出土した。174のように文様区が大きく文様が全体的に太いものと、文様区が小さく文様が明瞭なものに大別できる。174は、文様の右側を欠く。瓦当上端の面取りは5mm程の幅である。瓦当は額貼り付け技法で、接合部にはカキヤブリがみられる。平瓦は広端狭端の差が明瞭で、広端側に瓦当を付けている。平瓦凹面にはコビキBの痕跡と凸型台の痕跡がみられ、横方向のナデで仕上げている。凸面側は、ケズリ後弱いナデで仕上げている。狭端側に弓状圧痕がみられる。175・176は、文様区が小さな瓦。文様構成と中心花茎の凹凸の一一致から同範の可能性が高いものが他に3点あり、文様・調整・焼成が近似するものがさらに2点ある。瓦当は額貼り付け技法で、額部の厚さは薄く平瓦凸面のナデは強い。瓦当上端は、面取り後にナデ調整が施されている。平瓦凹面は丁寧なナデ調整が施され、凸型台の痕跡はわずかに残るものが多い。凸面は、縱方向のケズリ調整後ほぼ未調整のようである。焼成は良好で、硬質で須恵質に焼きあがったものが多い。この一群の凹

面側には「○に二引き文」の刻印があるものが5点確認できる。

c. 下三葉紋軒平瓦

中心飾に下方に向いた三葉文を用い、左右に唐草を配する。三葉文に分類しているが、桐文の葉の意匠と近似することから、桐文に近いものと想定している。文様の違いから4種類に分けた。

ア. 下三葉紋軒平瓦A（第127図177）

最も写実的な葉の表現である。唐草の大半は欠損しており、全体の文様構成は不明。2点出土している。頸部の厚さは薄い。177は中心飾の部分。瓦当は頸貼り付け技法のようである。頸部の調整はケズリ後にナデで仕上げている。瓦当上端は面取りが施されているようだが、ナデ調整を施しており不明瞭になっている。平瓦はごくわずかに残存するのみで、凹面には凸型台の痕跡がみられる。

イ. 下三葉紋軒平瓦B（第127図178）

中心飾の部分の178が1点出土した。全体の文様構成は不明だが、中央上端の小さな涙滴形の文様から、左右の唐草と下方向に三葉が伸びている。三葉は、左の脇葉が陽刻で外側に開き、中央葉が輪郭を線で表現し先端を右に曲げ、右の脇葉が輪郭と葉脈を線で表現し外側に開く。唐草は、最初に下に伸びて波打ちながら伸びるようである。子葉は上下に反転するが、間隔は短い。2回目の反転から外側の唐草については欠損しているため不明。頸部の調整はケズリとナデがみられる。

ウ. 下三葉紋軒平瓦C（第127図179・180）

瓦当が完全に残存するものが無く、文様構成は不明。中心飾の中心葉は陽刻、脇葉は線刻で表現される。唐草は中心飾の上を通り左右に展開する。中心葉の上に下向きの三角形の突出部がある。左の唐草は内側から上・下・上の3回反転する。下に比べて上の巻きが強い。右は上に反転し、その先は不明。反転も左右対称ではない。4点出土しており、残存部分の文様構成からは同範の可能性が高い。179は瓦当が最もよく残るもの。硬質に焼きあがっているが、他の3点は軟質である。いずれも瓦当は頸貼り付け技法で、瓦当裏面のナデ調整には強弱の差がある。瓦当上端の面取りは施されていない。179の平瓦凹面には凸型台の痕跡と、ナデ調整が施されている。180には、工具によるハケメがみられる。179の平瓦凸面には一部ハケメがみられる。

エ. 下三葉紋軒平瓦D（第127図181）

5点出土した。瓦当が完全に残存するものが無く、文様構成は不明。脇葉が開き気味の三葉が陽刻されている。脇葉の上端から唐草が伸び、2回反転するが反転ごとに分離している。181は、瓦当下部の一部。瓦当は頸貼り付け技法で、接合面にカキヤブリがみられる。瓦当裏面のナデ調整は強め。凹面にはコビキAの痕跡、凸型台の痕跡、ナデ調整がみられる。凸面にはケズリ調整がみられる。

d. 上三葉紋軒平瓦

中心飾に上を向いた三葉文を用い、左右に唐草を配する。バリエーションは多く、5種類に大別し、さらに9種類に分けた。

ア. 上三葉紋軒平瓦A

中心飾が三葉と珠文からなるもの。文様の差からさらに4種類に分かれる。

・上三葉紋軒平瓦 A a (第127図182)

182の1点のみ出土した。中心飾の各葉は肉厚に陽刻され、下部の珠文から放射状に配されている。脇葉の下から伸びた唐草は緩やかに波打ち、小ぶりの子葉が内側から上下に反転する。文様区の左右が欠けているため、全体の文様構成は不明。瓦当は額貼り付け技法のようで、額はナデで丁寧に仕上げられ断面形は逆台形である。瓦当上端の面取りは不明瞭で、端部はナデ調整により丸みを帯びる。平瓦の凹面はナデ仕上げが丁寧で凸型台の痕跡は判然としない。

・上三葉紋軒平瓦 A b (第128図183・184)

5点出土した。各葉に弱い稜がみられ、脇葉がやや外反する。全て破片資料で文様の全体構成がわかるものはないが、珠文から伸びた唐草は下側に1回反転して終わるようである。同范関係は不明。183は中心飾が残存するもの。瓦当面の高さが高い。瓦当は額貼り付け技法で、瓦当裏側が斜めに長く、平瓦凸面の接合幅が約5cmになる。瓦当上端の面取りの幅は1.3cmで、大きく斜めに切られている。瓦当凹面はまばらなナデ調整と細かな砂がみられる。凸面はケズリ調整か。184は中心飾の左側が残存している。文様は脇葉も唐草も太い。瓦当は額貼り付け技法と思われる。額部はケズリにより稜を持って仕上げられている。瓦当上端の面取りは小さく、ナデ調整を行っているため丸みを帯びている。平瓦の凹面にはナデ調整と凸型台の痕跡がうっすらとみられる。

・上三葉紋軒平瓦 A c

小片が1点出土した。中心飾の一部が残る。脇葉が稜を持った三角状になっている。瓦当は額貼り付け技法。瓦当裏面はケズリとナデにより断面が稜を持った台形状に仕上げられている。瓦当上端の面取りは無いようである。

・上三葉紋軒平瓦 A d (第128図185・186)

中心飾の各葉が稜を持たない三角形で、脇葉も上を向いている。唐草は下・上に2回反転し、反転毎に分離している。8点出土しており、各葉の裾をつなぐような細線や、右側の唐草にみられる傷の一一致から同范の可能性が高い。瓦当は額貼り付け技法で、額は強いナデにより稜を持って仕上げら、断面が長方形に近い。瓦当上端の面取りも大きく斜めに切っている。この面取り後ナデ調整により丸みを帯びているものもある。凹面には凸型台の痕跡とナデ調整がみられる。凸面はケズリがみられ、側縁に凸型台の痕跡がみられるものがある。いずれも硬質な焼き上がりである。

185は右端を欠き、186は左側の唐草を欠く。186の凹面にはコビキBと思われる痕跡がみられる。

イ、上三葉紋軒平瓦 B

中心飾に珠文を持たない上三葉文。文様の差からさらに3種類に分かれれる。

・上三葉紋軒平瓦 B a (第128図187・188)

中心飾の三葉の各葉は稜を持ち、脇葉は大きく外反する。文様の全体構成がわかるものはないが、唐草は三葉の裾から出て下と上に2回反転するようである。子葉の巻きは強く反転毎に分離している。5点出土した。同范の可能性が高いが、いずれも破片資料であり判然としない。187は、最も文様の残存が良好なもの。瓦当は額貼り付け技法であり、額部は強いナデにより稜を持っている。瓦当上端の面取りは弱く、施していないものもある。188では、凹面にコビキBと思われる痕跡がみられる。

・上三葉紋軒平瓦 B b (第128図189・190)

中心飾の三葉は小ぶりで、各葉は稜を持ち放射状に配されている。唐草は三葉の裾から伸びて下方に2回反転する。唐草の巻きは弱く、反転毎に分離している。10点出土したが、文様区が完形のものは無い。同范の可能性が高いが、範傷の一一致を見出せていない。製作技法や胎土は近似しているが、焼成は良好なものと不良なものがある。

189は、文様区の右側を欠く。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデで仕上げられ、瓦当裏側は丸みを帯びる。瓦当上端の面取りは、最大幅1cmで斜めに切られており、ナデで仕上げられているため丸みを帯びる。平瓦凹面は、丁寧なナデで仕上げられており、凸型台の痕跡とコビキBの痕跡がうっすらとみえる。凸面は粗いケズリがみられる。190は文様区の左側を欠く。顎部の調整や、瓦当上端の面取りなど、189とはほぼ同様である。

・上三葉紋軒平瓦 B c (第128図191)

191の1点のみが出土した。中心飾の右側の小片であり、文様の全体構成は不明。右側の脇葉は稜を持って外側に大きく開く。唐草は、中心飾の下から上に伸び、波打ちなが下・上に反転する。子葉は比較的大きく巻き、唐草は反転ごとに分離している。瓦当は顎貼り付け技法のようである。顎部の厚さは薄く、端部は丸みを帯びる。瓦当上端は、幅0.8～1.2cmで大きく斜めに面取りされている。平瓦の残存はわずかで、凹面に凸型台の痕跡がうっすらとみられる。

ウ. 上三葉紋軒平瓦 C (第128図192)

中心飾に輪郭や葉脈を線で表現した三葉文が陽刻されている。192の1点のみの出土で、瓦当の完形資料はない。唐草は中心飾の下を通り左右に展開するようである。唐草は、文様区中央を外側へ伸び、先端は双葉状に開き軽く反転する。子葉は蔓の下側に3葉みられ、内側の子葉は軽く内向きに反転するが、他の2葉は直線的で、外向きの斜め下方に伸びる。瓦当は丁寧に成型されており、平瓦の凹面にもナデが及ぶ。瓦当上端の面取りはみられない。

エ. 上三葉紋軒平瓦 D (第128図193)

中心飾の文様は、直上に伸びる茎と湾曲して上に伸びる脇茎が線で表現され、その先端に菱形の葉が付く。完形の瓦当面が無いため全体の文様構成は不明だが、唐草は左右に3回反転するようである。唐草は反転ごとに巴文状になるが、完全には分離していない。3点出土しているが、同范関係は無いようである。193は、文様区が広い。文様区の左側を欠く。瓦当は顎貼り付け技法で、強いナデ調整によって仕上げられ、顎部には明瞭な稜がある。瓦当上端の面取りはみられない。平瓦凹面は、まばらなナデで仕上げられており、凸型台の痕跡が明瞭である。斜め方向のコビキの痕跡がうっすらとみえる。この他のものには、瓦当上端の面取りが明瞭なものもある。

オ. 上三葉紋軒平瓦 E (第129図194)

中心飾が三葉文で左右に文字が配されている。范に正位のくずし字で彫りこんでいるため、瓦当面では反転した文字になっている。194は瓦当面と平瓦部がほぼ完全なもの。瓦当面の右側を上にして范に陰刻したようで、中心飾の右は「□(花びらの意匠)山助七之事」、左は「拾月一日」と読める。瓦当面の左端には范端と思われる段差がある。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部のナデは強い。瓦当上端の面取りも大きく斜めに切られている。平瓦凹面は、コビキAの痕跡と凸型台の痕跡がみられ、ナデで仕上げられている。凸面は粗い縱方向のナデ調整で、細かな砂が目立つ。側縁に凹型台の痕跡と、端部に弓形圧痕がみ

られる。

瓦当面の左を上に陰刻したものもあり、中心飾から右側が「□□左第」と読めるものがある。

e. 立木紋軒平瓦（第129図195）

中心飾に枝分かれする植物のような文様を用い、左右に唐草を配する。瓦当面が完形の資料は無く、全体の文様構成は不明。破片から復元すると、唐草は中心飾の下から蔓が波打ちながら伸び、先端で下向きに小さく巻き、子葉は上下につつず直線的に出ているようである。唐草の太さから2分でき、それぞれ同範の可能性があるが、細部が対比できないため判然としない。195は唐草が細いもの。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部のナデは強い。瓦当上端の面取りも大きく斜めに切られている。平瓦凹面には、コビキAの痕跡と凸型台の痕跡がみられ、ナデで仕上げられている。凸面はケズリか。焼成が良好で、全体に自然軸がみられる。他の細い唐草では、瓦当上端の面取りが不明瞭なものもある。唐草が太いものは、左側唐草の内側子葉の先端が下向きに巻いているものがある。また文様区の中央に瓦当の円弧に沿った工具痕が認められるものがある。平瓦と顎の接合線を消すための調整か。

f. 蓮華紋軒平瓦

中心飾にハスの花のような文様を用い、左右に唐草を配する。唐草の違いで2種類に分けた。

ア. 蓮華紋軒平瓦A（第129図196）

涙滴状の意匠から角状に花弁が突出し、下部からは短い唐草が上下に伸び反転する。この外側に緩やかに波打つ分離した3個の唐草が、全長の半分を隣の唐草の上下に重ねながら上・下・上に反転する。唐草の上下に、菱形や珠文状の小さな凹凸がみられるが、文様として意図したのかは判然としない。小片を含めて4点出土している。瓦当面の完形資料は無く、全体の文様構成は不明。196は、瓦当面の左側を欠く。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。顎部の厚さは薄い。瓦当上端は最大幅5mmほどの面取り後にナデを施しており、丸みを帯びる。平瓦凹面には、コビキAの痕跡とナデ調整、凸面にはケズリ後に粗いナデが施されている。瓦当面に196と先の小さな凹凸が一致するものがあり、同範の可能性がある。また、文様がつぶれ気味の2点には、瓦当面に細かな砂がみられる。

イ. 蓮華紋軒平瓦B（第129図197）

蓮華紋軒平瓦Aの中心飾から短い唐草を無くし、3個の花弁をほぼ同じ大きさにしたような中心飾である。唐草も3回反転でそれぞれが分離している。反転は内側から下・上・下で、隣の唐草との重なりはまちまちである。3点出土しているが、瓦当面が完形のものは無く同範関係は不明。197は中心飾の一部から左側の文様区を欠く。文様区に細かな砂が目立つ。瓦当は顎貼り付け技法のようである。顎部はナデで仕上げられているが、瓦当面側の端部や平瓦凹面の接合部に細かな砂がみられる。瓦当上端の面取りは最大幅1.2cmで大きく斜めに切られている。その他の2点も顎部の仕上げはやや粗く、細かな砂がみられるものもある。

g. 鳥紋軒平瓦

中心飾に左右の唐草を合わせて鳥を抽象化したような文様を用い、さらに左右に唐草を配する。中心飾の違いで2種類に分けた。

ア. 鳥紋軒平瓦A（第129図198）

中心の鳥の胴体から羽状に開き下へ反転する唐草と、同じ展開の唐草が外側に配されている。唐草はそれぞれ分離している。10点出土しているが、瓦当面が完形の資料は無い。大半は同范の可能性が高い。文様の表出に差があり、細く鮮明なものが主で太くはやけたものもある。技法に大差は無いが、頸部の調整や瓦当上面の面取りに個体差がある。瓦当は顎貼り付け技法で、接合部にはカキヤブリがみられる。頸部のナデ調整は強めで、平瓦凸面の接合部にはナデによる窪みがみられるものもある。平瓦凹面には凸型台の痕跡とナデ調整がみられる。凹面の瓦当側に「〇に一引両文」の刻印がみられるものが3点ある。198は、文様区がほぼ完形。

イ. 鳥紋軒平瓦B（第129図199）

鳥文Aと文様構成が近似するが、中心飾が逆Z字状で、唐草も全体的に太くなり、外側は釣針状になる。8点出土しているが、瓦当面が完形の資料は無い。文様構成や瓦の雰囲気からは同范の可能性が高い。瓦当は顎貼り付け技法で、瓦当面に平瓦の端部が段や窪みとしてみられ、文様にも影響しているものが多い。頸部のナデ調整は強めで、端部には明瞭な稜がある。瓦当上端の面取りは、199のように大きく斜めに切ってナデ調整をしているため、丸みを帯びるものが多い。凹面には凸型台の痕跡とナデ調整がみられる。コビキBの痕跡が残るものもある。

ヒ. 筒紋軒平瓦

中心飾に笹文を用い、左右に唐草を配する。文様の違いで3種類に分けた。

ア. 筒紋軒平瓦A（第129図200）

1つの笹の葉が五葉のもの。4点出土しているが、瓦当面の完形資料は無い。文様を復元すると3つの笹文で構成されているようである。左右は五葉だが、中心葉は不明。左側の笹文の対比では同范の可能性が高い。200は、文様区の中央を欠いている。瓦当は顎貼り付け技法で、頸部のナデ調整は強めである。瓦当上端は、部分的な面取りの後ナデ調整を行っている。平瓦凹面には、凸型台の痕跡とナデ調整がみられる。凸面も粗いナデ調整で仕上げられている。その他のものでは、瓦当上端の面取りは個体差が大きい。また平瓦凹面にコビキAと思われる痕跡がみられるものもある。

イ. 筒紋軒平瓦B（第129図201）

1つの笹の葉が六葉のもの。201の1点のみの出土である。文様区右端の破片で、笹文が一つと外区右端に花文の刻印がある。瓦当は顎貼り付け技法で、平瓦の端部との接合線が瓦当面に窪みとして残る。文様区にも接合線を消したと思われる痕跡がある。頸部の調整は強めで頸の断面形は逆台形である。瓦当上端の面取りは幅8mmほど。平瓦の凹面には凸型台の痕跡とナデ調整、凸面にはケズリ調整がみられる。

ウ. 筒紋軒平瓦C（第130図202）

中心の笹の葉が六葉で右側の笹の葉が五葉のもの。202の1点のみが出土した。文様区の左側を欠く。中心葉は笹ずれのためか2重の部分もあり、右側の葉も不鮮明である。笹文Aと同范の可能性もある。瓦当は顎貼り付け技法のようである。頸部のナデ調整は強めで、平瓦凸面には横方向のナデが窪みとなっている。瓦当上端は、面取り後ナデ調整を行っており丸みを帯びている。平瓦凹面には凸型台の痕跡が比較的明瞭で、ナデ調整は粗い。

i. 半菊文軒平瓦（第130図203）

中心飾に菊の花を半裁したような文様を用い、左右に唐草を配する。いずれも小片で、全体の文様構成は不明。中心飾は上端に珠文を置き、5個の細長い花弁状のものが下方に放射状に広がる。花弁の先端には輪状に尖る意匠を持つものがある。同じ文様が4点あるが、部分的であり同范とは言い切れない。唐草は中心飾の上端から下へ伸びて反転し、さらに伸びて上に反転する。子葉の巻きは軽い鉤状で、反転ごとに分離している。瓦当は顎貼り付け技法で、丁寧なナデで仕上げられているが、ケズリがみられる個体がある。瓦当上端の面取りも個体差がある。平瓦凹面には、コビキA・凸型台の痕跡・ナデ調整がみられる。203は、文様区の左側を欠く。瓦当面と平瓦凹面にうっすらとキラコがみられる。胎土に黒色砂粒が目立つ。

j. その他（第130図204～214）

稜を持つ紡錘形の中心飾から唐草が上・下・上に反転する。16点出土している。完形資料は無いが、文様構成や范傷の一一致から同范の可能性が高い。204は、文様区の左側を欠く。瓦当は顎貼り付け技法で、顎のナデ調整は強く顎の断面は稜を持つ逆台形。瓦当上端の面取り幅は5mm程度と細め。平瓦凹面には横方向のコビキと思われる痕跡と、凸型台の痕跡がうっすらと見える。凸面はケズリ後に弱いナデで仕上げているようである。205は、中心飾から右が欠けている。技法は204とほぼ同様だが、瓦当上端の面取りは不明瞭である。この他のものも瓦当上端の面取りは均一では無い。

206・207は橋文か。可能性が高いものを含めて7点出土したが、瓦当面が完形のものは無い。範は2種類以上か。中心飾は二つの葉の間から伸びた細い線の上に逆さまのハート型をした橋の実が肉厚に陽刻されている。唐草は実の部分から左右に緩やかに波打ちながら配され、下・上に反転する。反転の巻きは弱く、反転毎に分離している。瓦当は顎貼り付け技法。顎は丁寧なナデで仕上げられており、比較的薄く、端部は明瞭な稜がある。瓦当上端は面取りの後、ナデが施されているため丸みを帯びる。平瓦凹面には凸型台の痕跡が206では明瞭だが、他の資料ではうっすらとみられる。208も橋文か。実の先端が尖り桃状でもある。中心飾から左側を欠く。唐草は3個に分離し、それぞれで波打ちながら反転する。それぞれの蔓は隣の蔓の波に合わせて上・下に配されている。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデで仕上げられている。顎部は比較的薄く、端部は明瞭な稜がある。瓦当上端は大きく斜めに面取りした後、ナデが施されているため丸みを帯びる。平瓦凹面には凸型台の痕跡がうっすらとみられる。

209は、牛角状の意匠の中央に線で珠文を配した特異な中心飾の瓦。1点のみの出土で、文様区の左端と右側を欠くため、全体の文様構成は不明。牛角の上部と、裾部からそれぞれ唐草が伸び上下に反転する。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部はケズリとナデがみえる。顎部は薄い。瓦当上端は大きく斜めに面取りされている。平瓦凹面は、凸型台の痕跡と粗いナデがみられ、細かな砂も目立つ。凸面も細かな砂がみられる。

210は中心飾に写実的な葉を置くものか。小片1点の出土であり詳細は不明瞭である。

211は1点のみの出土で、文様区の右端だけが残存している。柏葉状の葉の意匠が陽刻されている。唐草は確認できない。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部はケズリとナデがみえる。

212は1点のみの出土。紡錘形の中心飾から先端が鈎状の唐草が展開する。中心飾脇の唐草は脇葉のようで、短いが外側へ強く反転する。この唐草は中心飾の下でつながっている可能性がある。次の唐草も中心飾脇から上へ伸びて短く巴文状に下へ反転する。続く唐草は不明。瓦当は顎貼り付け技法で、瓦当上端の面取りはわずかに認められる程度である。

213は1点のみの出土。中心部分の文様構成は212に類似する。中心飾は紡錘形の下端に点を重ねたような意匠で、その境付近から唐草が上へ伸びて下へ反転する。紡錘形の部分からも短い線が斜め上に伸びる。唐草の左側には、細い茎に楕円形の葉（？）を陽刻した植物文が続く。瓦当は顎貼り付け技法で、瓦当上端は最大幅13cmの面取りが施されている。平瓦凹面は風化が激しく、横方向の沈線がみられるのみ。凸

面には布目痕がわずかにみられる。

214は1点のみの出土。名護屋城跡で213に近似した文様の右側に配された植物文に似る。緩やかに波打つ茎に内側から順に、上に反転する子葉、下に弧を描く短い子葉、上に伸びる紡錘形の子葉、下に短く伸びる子葉がみられる。瓦当は頸貼り付け技法で、頸部はケズリとナデで仕上げられている。瓦当上端の面取りは最大幅1.5cmに達し、大きく斜めに切られた後にナデを施す。平瓦凹面には凸型台の痕跡がみられる。

k. 桔梗紋軒平瓦

加藤家の家紋である桔梗文を中心飾に用い、左右に唐草を配する。

ア. 桔梗紋軒平瓦 1（第130図215・216）

小片が3点出土した。文様構成は不明。中心飾が突出し、桔梗が立体的に表現されている。唐草は、中心飾の中心付近からやや上向きに伸び、波打ちながら下・上・下に反転するようである。反転ごとに分離している。215・216は中心飾付近で、文様区の両端と平瓦部を完全に欠いている。瓦当は頸貼り付け技法で、接合部にはカキヤブリがみられる。頸部は比較的薄く、ナデで仕上げている。

イ. 桔梗紋軒平瓦 2

桔梗紋軒平瓦1のように中心飾が突出しないものを桔梗紋軒平瓦2とする。雄蕊に沈線がみられないものを桔梗紋軒平瓦2 Aとし、沈線がみられるものを桔梗紋軒平瓦2 Bとした。いずれも唐草は中心飾下半から伸びて下・上に2回反転し、反転付近で分離している。

・桔梗紋軒平瓦 2 A（第130図217・218、第131図219）

花弁の輪郭線が細いものと太いものがあり、さらに雄蕊の長短・雌蕊の違いから範は複数ある。217と218は、花弁の輪郭線が細いもの。上に向く雄蕊の凹凸や左下の雄蕊の長さが短い点が一致し、同範の可能性が高い。花弁の形状や雄蕊の長さが異なる範もある。技法はいずれも大差は無いが、瓦当上端については、前者は面取りが無く、後者は面取りがみられる。瓦当は頸貼り付け技法で、頸部は丁寧なナデで仕上げるものが多い。凹面に凸型台の痕跡がうっすらみられるものがある。

219は、花弁の輪郭線が太いもの。左端を欠く。本資料の瓦当上端の面取りはみられないが、他の資料では面取りが明瞭なものがある。

・桔梗紋軒平瓦 2 B（第131図220～224）

雄蕊に沈線がみられるもの。唐草の太さで2つに分けられる。220・221は唐草が細いもので、花弁の輪郭も細く、花弁間の稜も明瞭である。文様の対比から範は異なる。いずれも瓦当は頸貼り付け技法で、頸部はナデ調整で丁寧に仕上げられている。瓦当上端の調整は、面取り後にナデ調整を施すが強弱の違いがある。平瓦凹面の凸型台の痕跡は不明瞭だが、他の資料に明瞭にみられるものがある。また、平瓦が残存しているものの凹面にはコビキAがみられるものがある。222・223は唐草が太いもの。花弁の輪郭がやや太い。文様構成からは同範の可能性が高い。製作技法も大差は無い。瓦当は頸貼り付け技法で、頸部はナデ調整で丁寧に仕上げている。瓦当上端の面取りは大きく斜めに切っているが、ナデ調整で丸みを持つ。222の平瓦凹面には横方向に弧を描くコビキBの痕跡がみられる。また、222の文様区には細かな砂がみられる。224は、平瓦部凹面にコビキBの痕跡がみられる。

I. 九曜紋軒平瓦

細川家の家紋である九曜文を中心飾に用い、左右に唐草を配する。唐草の違いで、15種類に大別した。大別が系統を示すものもあり、さらに細かく分かれる。

A. 九曜紋軒平瓦 A

唐草の内側の子葉が下に巻き先端が三葉状になるものを組形とすると思われる一群。文様構成からさらに4つに分かれる。

・九曜紋軒平瓦 A a (第132図225～227)

225・226・227は、子葉が下・下・上に反転し、蔓の先端は膨らんで菱形や珠文状になる。子葉は、明瞭な鉤状と不明瞭な部分がある。225と226は同范の可能性が高いが、227は唐草の波打ちが異なる。いずれも瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデで仕上げている。瓦当上端の面取りは不明瞭で、文様区以外の瓦当面は丸瓦で調整が施される。丸瓦凹面は丁寧なナデで仕上げられており、凸型台の痕跡も不明瞭である。凸面はケズリ後粗いナデ調整が施されている。側縁には凹型台と思われる痕跡がみられる。1の平瓦凹面には「元禄七 土山口」の刻印があり、226の平瓦凹面には「元□ 四兵衛」の刻印がある。

・九曜紋軒平瓦 A b (第132図228・229)

内側の子葉が珠文状で、唐草全体としては、子葉が文様区の端部に集約して花状である。228・229は、文様構成や唐草の雰囲気はほぼ同じだが、中心飾に対する唐草の位置や太さが異なる。いずれも瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧な仕上げである。瓦当面について、229は上端の面取りは不明瞭で文様区以外は丁寧なナデ仕上げである。228は、瓦当面に平瓦との接合部を消したと思われる調整がみられる。文様区以外の瓦当面は平瓦まで調整が施され、瓦当上端の面取りが行われている。平瓦凹面は、229は丁寧なナデ調整で仕上げられ、凸型台の痕跡も不明瞭で、228は、ナデで仕上げられているがムラがあり、撫でていない部分に細かな砂がみられる。228の細かな砂は凸面にもみられる。ほぼ全面にみられ、瓦当接合時の横ナデ痕の上にもみられる。

・九曜紋軒平瓦 A c (第132図230)

唐草の子葉がすべて端部に集約し花状である。230は瓦当面がほぼ完形の資料。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデで仕上げられている。瓦当面は文様区以外をナデ調整で仕上げているが、一部右側の唐草に及び、文様が崩れている。瓦当上端は、面取り後にナデ調整が施され、丸みを帯びる。平瓦凹面は丁寧なナデ調整が施され凸型台の痕跡は不明瞭。凸面は228のように細かな砂がみられる。

・九曜紋軒平瓦 A d (第133図231)

唐草の子葉は、内側が三日月形で他は反りがほとんど無い。231は、九曜の中心曜と周曜の距離がまちまちで、円ではなくっている。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部はナデで仕上げられているが、瓦当裏面から平瓦部凸面にかけて細かな砂がみられる。瓦当面は文様区以外をナデ調整で仕上げており、瓦当上端には明瞭な面取りがみられる。平瓦凹面は丁寧なナデ調整で仕上げているが、指頭痕が目立つ。指頭痕には細かな砂が付着している。この文様の軒平瓦には、平瓦凸面だけでなく文様区にも細かな砂が目立つ例がある。

イ. 九曜紋軒平瓦B

唐草の子葉が内側から3本が下に反転し、先端は双葉状に聞くもの。この文様を基本としたものが最も多く出土している。文様構成から2つに分かれる。

・九曜紋軒平瓦B a (第133図232)

最も内側の子葉が長く大きく反転する点と、先端の上向きの子葉も大きく反転する点を特徴とする。下向きの2・3番目の子葉はわずかに弧を描くものと直線的なものがある。いずれも製作技法に大差は無い。232は瓦当面が完形のもの。瓦当は頸貼り付け技法で、頸部はナデにより丁寧に仕上げられている。瓦当面は、文様区以外ナデで仕上げられており、上端の面取りは不明瞭だがナデ調整が施され、丸みを帯びる。平瓦凹面は丁寧なナデ調整が施され凸型台の痕跡は不明瞭。凸面はケズリ後、軽いナデ調整が施されている。

・九曜紋軒平瓦B b (第133図233・234)

先端の双葉が大きく、最も内側の子葉が比較的反転が大きい。233では、下向きの2・3番目の子葉が直線的で、234では短くわずかに弧を描く。いずれも技法に大差は無い。瓦当は頸貼り付け技法で、頸部はナデにより丁寧に仕上げられている。瓦当面は、文様区以外ナデで仕上げられており、上端の面取りは不明瞭だがナデ調整が施され、丸みを帯びる。平瓦凹面は丁寧なナデ調整が施され凸型台の痕跡は不明瞭。凸面はケズリ後、軽いナデ調整が施されている。233の凸面の側縁には凹型台の痕跡がみられる。

ウ. 九曜紋軒平瓦C

細めの唐草で、子葉が下・上・下に巻くもの。文様構成から3つに分かれる。

・九曜紋軒平瓦C a (第133図235・236)

唐草の波打ちが大きい。子葉はいずれも釣り針または三日月形である。中心飾脇の唐草のしなりから、範は複数ある。235は瓦当面から平瓦の大半が残るもの。瓦当は頸貼り付け技法で、頸部はナデにより丁寧に仕上げられている。瓦当面は、文様区以外ナデで仕上げられており、上端の面取りは不明瞭だがナデ調整が施され、丸みを帯びる。平瓦凹面は丁寧なナデ調整が施され、凸型台の痕跡がうっすらと見える。「庄」の刻印がみられる。凸面は粗いナデ調整が施されており、細かな砂がみられる。凸面の端部には凹型台の痕跡がみられる。236は頸部だけの資料。瓦当は頸貼り付け技法で、頸部は丁寧なナデで仕上げられているようである。

・九曜紋軒平瓦C b (第133図237)

九曜紋C aに比べ、唐草の波打が小さく右端の蔓が大きく反転する。飯田丸では237の1点が出土した。瓦当は頸貼り付け技法で、頸部はナデにより丁寧に仕上げられている。瓦当面は、文様区以外ナデで仕上げられており、上端の面取りは不明瞭だがナデ調整が施され、丸みを帯びる。平瓦凹面は丁寧なナデ調整が施され凸型台の痕跡は不明瞭。凸面はケズリ後、軽いナデ調整が施されている。

・九曜紋軒平瓦C c (第133図238)

九曜紋C aに比べ、唐草の波打が小さく子葉の反転も小さい。出土量は多く、製作技法に大差は無い。238は、瓦当は頸貼り付け技法で、頸部はナデにより丁寧に仕上げられている。瓦当面は、文様区以外ナデで仕上げられており、上端の面取りは不明瞭だがナデ調整が施され、丸みを帯びる。平瓦凹面は丁寧な

ナデ調整が施され凸型台の痕跡は不明瞭。凸面はケズリ後、軽いナデ調整が施されている。238の凸面の側縁には凹型台の痕跡がみられる。凹型台の痕跡が残るものは多い。また、文様区にキラコが目立つものや、平瓦凸面に細かな砂が目立つものがある。

工. 九曜紋軒平瓦 D

唐草の内側の子葉が下に反転し、先端が双葉状になるもの。文様構成から4つに分かれる。

・九曜紋軒平瓦 D a (第133図239)

8の1点のみの出土。文様区の右側を欠く。緩やかに波打つ唐草から珠文状の子葉が反転する。蔓の端部は双葉状で、上に反転する子葉が大きな鉤状である。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデで仕上げられている。瓦当面は文様区以外に軽いナデ調整を施し、瓦当上端から平瓦凹面は丁寧なナデで仕上げている。瓦当面を含め、全体的に調整が甘い部分には細かな砂が目立つ。

・九曜紋軒平瓦 D b (第133図240)

唐草の波打ちが弱く、内側の子葉と端部の双葉が分離気味である。右側の唐草がその傾向が強い。子葉はいずれもほぼ同じ大きさで、反転の仕方も似る。240の1点のみの出土で、瓦当面から平瓦までほぼ完形の資料である。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面は、文様区以外ナデで仕上げられており、上端の面取りは無い。平瓦凹面は丁寧なナデ調整が施され凸型台の痕跡は不明瞭。「四郎」の刻印がみられる。凸面は軽いナデ調整で仕上げられている。凸面の側縁には凹型台の痕跡がみられる。全体的に丁寧なつくりの瓦で、各端部はナデ調整が施され弱い稜を持つ。

・九曜紋軒平瓦 D c (第134図241)

唐草の波打ちが弱く、内側の子葉と端部の双葉が分離している。子葉はいずれもほぼ同じ大きさで、反転の仕方も似る。4点出土しており、全て同范の可能性が高い。241は、文様区の右端を欠く。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面は、文様区の上半と外区をナデで仕上げている。上端の面取りは不明瞭だが、ナデ調整により丸みを帯びる。平瓦凹面は丁寧なナデ調整が施され凸型台の痕跡は不明瞭。凸面はケズリ後軽いナデ調整で仕上げられている。その他のものでは瓦当面の調整は同じで、凹面に凸型台の痕跡、凸面に凹型台の痕跡がみられるものがある。

・九曜紋軒平瓦 D d (第134図242)

唐草が中心飾から斜め上方に伸びる以外はほぼ波打ちが無く、子葉が三日月状である。唐草は分離していない。4点出土しており、瓦当面の完形資料は無く小片だが、少なくとも2点は同范である。242は中心飾と右側の唐草が残存し、平瓦の大半を欠く。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面は、文様区の上半をナデで仕上げており、上端の面取りは不明瞭だがナデ調整により丸みを帯びる。本資料では平瓦の調整は不明だが、他の資料からは凹面は丁寧なナデ、凸面はケズリ後ナデである。凹面に「新三良」の刻印がみられるものや、凸面に凹型台の痕跡がみられるものがある。

オ. 九曜紋軒平瓦 E

唐草が上・下・上に反転し、各子葉が分離するもの。中心飾の周囲の配置が崩れ気味である。文様構成から2つに分かれる。

・九曜紋軒平瓦 E a (第134図243)

中心飾の周曜の配置が崩れ、各曜の大きさもまちまちである。唐草の内側の子葉は中心飾の下から斜め上に伸びる。243は文様区の左側が欠けている。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。顎の厚さは薄い。瓦当面は、文様区以外ナデで仕上げられており、上端の面取りは無い。平瓦凹面は丁寧なナデ調整が施され凸型台の痕跡は不明瞭。同範例が1点あり、同じ製作技法である。

・九曜紋軒平瓦 E b (第134図244・245)

中心飾の周曜の配置が崩れ気味。中心飾の中位から鎌状の唐草が連続する。244・245は、文様構成は同じだが同范ではない。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面は、245は文様区の上半と外区をナデで仕上げており、上端の面取りは無くナデ調整により丸みを帯びる。平瓦の凹面は丁寧なナデ、凸面はケズリ後ナデである。244の凹面には「五」の刻印、凸面には凸型台の痕跡がみられる。245の凹面には「勘七」の刻印がみられる。

力. 九曜紋軒平瓦 F (第134図246)

246の1点だけ出土した。瓦当面の左側を欠く。右側の唐草は、両端が鋭く尖る蔓に、下・上に棘状の子葉が突出する。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面は、文様区の上半と外区をナデで仕上げており、上端の面取りは無くナデ調整により丸みを帯びる。平瓦の凹面は丁寧なナデ、凸面はケズリ後ナデである。凸型台と凹型台の痕跡がそれぞれうっすらとみられる。

キ. 九曜紋軒平瓦 G

唐草が2個に分離するもので、内側の反転が強く外側はほぼ反転しないもの。文様構成から5つに分かれる。

・九曜紋軒平瓦 G a (第134図247)

九曜文の周曜の位置が崩れ気味で、内側の唐草が大きな円を描いて下へ反転する。外側の唐草は緩やかな船底状に波打つ。3点出土しているが、中心飾の範傷や内側の唐草の先端部分の違いから、范は2種類ある。247は文様区の左側を欠く。同範例が1点あり、文様区にはいずれもキラコがみられる。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面は、文様区以外をナデで仕上げており、上端面取りは無い。平瓦部の凹面は丁寧なナデ、凸面はケズリ後ナデである。同範例には凹面に凸型台の痕跡がうっすらとみられる。

・九曜紋軒平瓦 G b (第134図248)

九曜文の周曜の位置が崩れ気味で、内側の唐草が大きな円を描いて下へ反転する。九曜紋 G a に近いが、唐草の先端が中心飾に食い込むようにしなる点が特徴である。248の1点のみが出土している。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面の上端面取りは無い。平瓦の凹面は丁寧なナデ、凸面はケズリ後ナデである。凹面には、凸型台の痕跡がうっすらとみられる。

・九曜紋軒平瓦 G c (第134図249)

249の1点のみの出土。中心飾の一部と左側の唐草を欠く。文様区がやや狭いため、唐草も釣針状に小さく反転する。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面の上端面取りは無い。平瓦の凹面は丁寧なナデ、凸面はケズリ後ナデである。凹面には、凸型台の痕跡がみられる。

・九曜紋軒平瓦 G d (第134図250)

250の1点のみの出土。文様区の右側を欠く。内側の唐草は釣針状で、外側は意匠化して鎌状である。瓦当面にキラコがみられる。瓦当は頸貼り付け技法で、頸部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面の上端面取りは無い。平瓦の凹面は丁寧なナデ、凸面はケズリ後ナデである。凹面には、凸型台の痕跡がみられる。

・九曜紋軒平瓦 G e (第135図251)

251の1点のみの出土。中心飾の九曜文は崩れ気味。中心飾下から出た内側の唐草は下向きに反転し、反転付近から伸びる外側の唐草は、両端が尖り文様区の端部に向けて上向きに伸びる。瓦当は頸貼り付け技法のようで、頸部は軽いナデ調整が施されるが凹凸が激しい。瓦当面の上端面取りは無い。平瓦の凹面は丁寧なナデ、凸面はケズリ後ナデである。凹面には、凸型台の痕跡がうっすらとみられ、凸面には凹型台の痕跡がみられる。瓦当面にはキラコがわずかにみられる。

ク. 九曜紋軒平瓦 H (第135図252)

2点出土した。同範関係は不明瞭。252は、瓦当面の左端を欠くが、文様区はほぼ残存している。唐草は、子葉の表現は無く緩やかに上下に波打つ。波打ち毎に分離している。瓦当は頸貼り付け技法で、頸部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面は、文様区以外をナデで仕上げており、上端の面取りは無くナデ調整が施され、弱い稜がある。平瓦の凹面は丁寧なナデ、凸面はケズリ後ナデである。凸面の側縁には凹型台の痕跡がうっすらとみられる。

ケ. 九曜紋軒平瓦 I (第135図253)

唐草の子葉が下と上に反転し、それぞれ分離気味である。蔓の波打ちや子葉の巻きは強い。4点出土した。内側の唐草や中心飾の違いから、範は2種類以上ある。253は瓦当面が完形の資料。文様は、中心飾の九曜文が明瞭で、内側の唐草の先端がほぼ九曜文に接する。瓦当は頸貼り付け技法で、頸部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面は、文様区の上半と外区をナデで仕上げており、上端の面取りは無くナデ調整が施され丸みを帯びる。平瓦の凹面は丁寧なナデ、凸面はケズリ後ナデである。凸面の側縁には凹型台の痕跡がうっすらとみられる。範が異なるものでは、九曜文の中心曜と周曜の間が明確に分離していないものがある。文様区上半のナデは他のものでは明瞭ではない。

コ. 九曜紋軒平瓦 J (第135図254)

内側の唐草は、中心飾の下位から上へ伸び子葉の先端が珠文化し音符状になっている。この唐草の途中から小花状の子葉が分離して中心飾を囲むように反転する。外側の唐草は、船底状に波打ち、間にオタマジャクシ状の珠文が配されている。3点出土しているが、いずれも小片で全体の文様構成は不明瞭。254は、瓦当は頸貼り付け技法で、頸部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面は、文様区以外をナデで仕上げており、上端の面取りは無くナデ調整により丸みを帯びる。平瓦の凹面は丁寧なナデ、凸面はケズリ後ナデである。文様区にキラコがみられる。

サ. 九曜紋軒平瓦 K (第135図255)

唐草が子葉毎に分離気味のもので、下・上・下・上に反転する。最も内側の子葉と、最も外側の子葉の端部は珠文状である。255の1点のみの出土で、谷軒平瓦である。瓦当は頸貼り付け技法で、頸部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面は、文様区以外をナデで仕上げており、上端の面取りは無くナデ

調整により丸みを帯びる。平瓦の凹面は丁寧なナデで仕上げているが、中央部が風化している。使用時に露出した部分か。左側縁には谷瓦の立ち上がりがある。カキヤブリを施し粘土を足しており、丁寧なナデで断面が四角形に仕上げられている。凸面はナデで仕上げているが、全面に細かな砂がみられる。

シ. 九曜紋軒平瓦 L (第135図256)

中心飾の下から唐草が大きく波打ち、下・上・下に反転する。端部以外の子葉の巻きは強く、ほぼ1周する。子葉の分かれ目にはつぼみが細い紡錘形または棒状の意匠で表現されている。256は、全体がほぼ完形の軒平瓦。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当面は、文様区以外をナデで仕上げており、上端の面取りは無くナデ調整により丸みを帯びる。瓦当面には、文様区を中心キラコがわずかに認められる。平瓦の凹面は丁寧な横方向のナデで仕上げており、凸型台の痕跡もみられない。凹面の端部から5cmのところに直径約1cmの釘穴状の穴があるが、貫通していない。また、凹面には「山西」と読める意匠化した刻印がみられる。凸面はケズリ後横方向を中心とした粗いナデが施されている。側縁には凹型台の痕跡がみられる。右側の側縁は、意図的に欠いている。

ス. 九曜紋軒平瓦 M

中心飾の九曜が丸みを帯びて突出し、中心飾の下から花卉文化した唐草が伸びる。文様構成から2つに分かれる。

・九曜紋軒平瓦 M a (第135図257, 第136図258)

唐草は中心飾下から子葉と蔓に分かれ、子葉は中心飾を囲むように反転する。先端が珠文化し勾玉状である。蔓は波打ちながら伸び、子葉が下に反転し、先端が珠文化している。この子葉の先には反転しない子葉が下向きに伸び、蔓の先端はイチョウ葉状になる。257と258では文様構成は同じだが、範は異なる。両者とも製作技法に大差はないが、扁平に近い軒平瓦である。258は特に扁平に近い。257では瓦当面全体、258では文様区を中心にキラコが目立ち、257の下外区には範端と思われる線がある。いずれも瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデで仕上げられている。平瓦の凹面は丁寧な横方向のナデで仕上げており、凸型台の痕跡もみられない。凸面はケズリ後ナデか。凹型台の痕跡は、257では瓦当裏側、258では側縁側にみられる。

・九曜紋軒平瓦 M b (第136図259)

文様構成は九曜紋L aと同じだが、内側の子葉の端部が珠文にならない。3点出土しているが、同範の可能性が高い。濃淡に差があるがいずれも瓦当面にキラコが目立つ。259を含む2点の瓦当面右端に「丸に十字」の刻印がみられる。製作技法はほぼ同一。259は瓦当面が完形のもの。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデで仕上げられている。凹面は丁寧なナデで仕上げているが、凸型台の痕跡が残る。また、「重兵」の反転した刻印がみられる。凸面はケズリ後ナデで仕上げており、側縁に凹型台の痕跡が残るものがある。

セ. 九曜紋軒平瓦 N (第136図260)

唐草にはつぼみの意匠があるもの。唐草は緩やかに波打ちながら子葉が上に反転し、その枝分かれ部分に異形の紡錘形の形をしたつぼみがある。蔓の先端は反転せず上に跳ねるように尖って終わる。小片が4点出土したのみで、全体構成が分かる資料はなく同範関係も不明瞭である。瓦当面にキラコが目立つものがある。260は、文様区の右側を欠く。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデで仕上げられている。

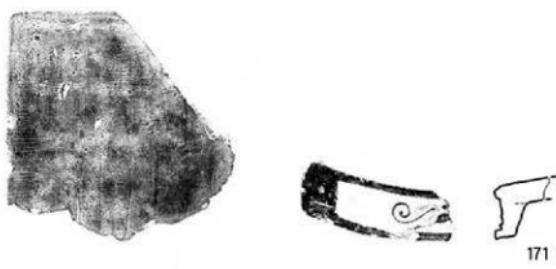
平瓦凹面は風化して判然としないが、丁寧なナデ調整で仕上げられていたと思われる。凸型台の痕跡が明瞭なものもある。凸面はケズリ後ナデか。

ソ. 九曜紋軒平瓦〇（第136図261）

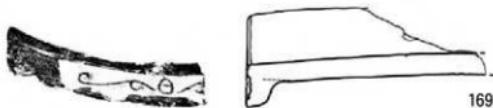
内側の唐草は巴文状に中心飾を囲み、その他は雲文化している。4点以上出土しており、九曜文の範傷からは少なくとも3点は同范である。扁平な瓦で、瓦当面にキラコが目立つものがある。261は同范関係があるものの一つ。文様区の左端を欠く。瓦当は顎貼り付け技法で、顎部は丁寧なナデで仕上げている。瓦当面は文様区以外をナデで仕上げている。平瓦の凹面は丁寧な横方向のナデで仕上げており、凸型台の痕跡もみられない。凸面はケズリ後ナデか。

ム. 滴水瓦（第136図262～277、第137図278～281）

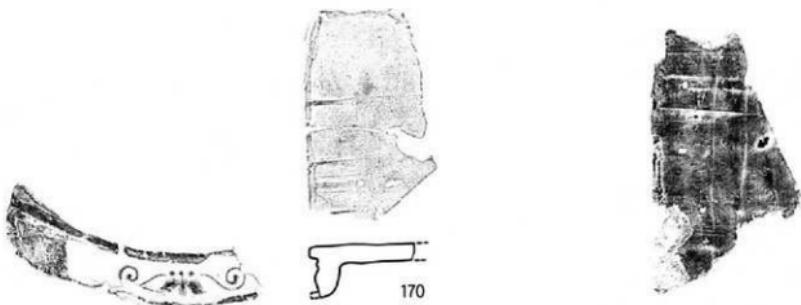
「李朝系瓦」の一つ。過去の報告では朝鮮瓦と記述されたこともある。瓦当面の下半が雲形の輪郭で、先端である中央下部が逆三角形に尖る形状をしており、瓦当部と平瓦の接合角度を鈍角にしている点が特徴である。城内の過去の出土例では、接合角度がほぼ直角のものもある。瓦当面の文様は、中央に年号などの文字が入る部分を2本の隆起線で区画し、その左右に梵字状の円形意匠や雲形が配されるものが特に知られている。今回の調査では瓦当面が完形の資料はない。262・263・264は左上の破片で、梵字状の意匠の右側に「小」の字が陽刻されたもの。過去の出土例からは、文字区を抉んで左に「小」、右に「山」の字がみられる。262・263は同范の可能性がある。製作技法はほぼ同じで、瓦当面は顎貼り付け技法により顎部を平瓦に鈍角に接合し、瓦当裏から平瓦との接合部分まで丁寧なナデで仕上げる。262では瓦当面に平瓦端部との接合線がみられ、263ではそれをナデ調整で消している。瓦当上端は斜めに大きく面取りを施した後、ナデ調整で仕上げている。平瓦凹面は丁寧なナデ調整で仕上げている。瓦当面や平瓦凹面に細かな砂が目立つ。264も技法に大差はない。瓦当面には左側の円形意匠と雲形がみられる。瓦当側縁に範型の凹凸がみられる。細かな砂はみられない。265は「山」の字の陽刻がみられるもの。右側の円形意匠と、中央の文字の一部が残る。慶長四年銘の可能性が高い。瓦当面は顎貼り付け技法だが、平瓦の端部を抉って接合されている。接合角度は鈍角で、瓦当裏面は丁寧なナデ調整で仕上げられている。瓦当上端は、大きく斜めに面取りした後、瓦当面の周縁を含めてナデ調整を施している。瓦当面周縁上部はナデ調整のため文様区側に被り気味である。文様区はほぼ未調整で、細かな砂がみられる。また、上端には平瓦との接合線が残る。平瓦凹面はナデ調整が施されるが、ナデが及ばない部分は細かな砂がみられる。266・267・268は中央に文字が残るもの。266は中央に「慶」の一部と思われる文字と、左側の円形意匠と雲形の一部が残る。焼成が甘く、全体に風化が進んでいる。平瓦はほぼ欠損しているが、接合角度は鈍角のようである。瓦当裏面は、ケズリの後にナデ調整を施している。文様区の上端には平瓦との接合線が残る。267は、「日」と思われるが判然としない。瓦当面・側縁・瓦当裏面に細かな砂がみられる。268は、瓦当面中央下部の逆三角形に尖る部分。「月日」が並列している。「慶長四年八月吉日」の一部と思われる。瓦当裏面は、不安定だがナデ調整で仕上げているようである。269は中央を隆起線で区画するが、文字がないもの。瓦当裏面は丁寧なナデで仕上げている。270・271・272・273・274・275は瓦当面右側の破片。同范関係は不明瞭。270は円形意匠の一部と雲形が残る。雲形の端部が花状の表現である。271は円形意匠と雲形の一部が残る。瓦当裏面は範型に粘土を詰めた際の痕跡がみられ、不安定である。272は円形意匠の一部が残る。瓦当裏面、瓦当面の周縁・側縁、文様区の端部にナデ調整を施す。273は雲形の一部が残る。瓦当面の表面に細かな砂がみられる。274・275は雲形の一部。274は文様が不鮮明で、両者ともに瓦当裏面はナデ調整が施されている。276・277は左側の破片。276は円形意匠と周縁の一部が残る。周縁・側縁・瓦当裏面はナデ調整で仕上げられているが、平滑化されていない部分が目立つ。277は雲形が線で表現さ



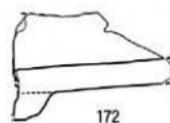
171



169



170



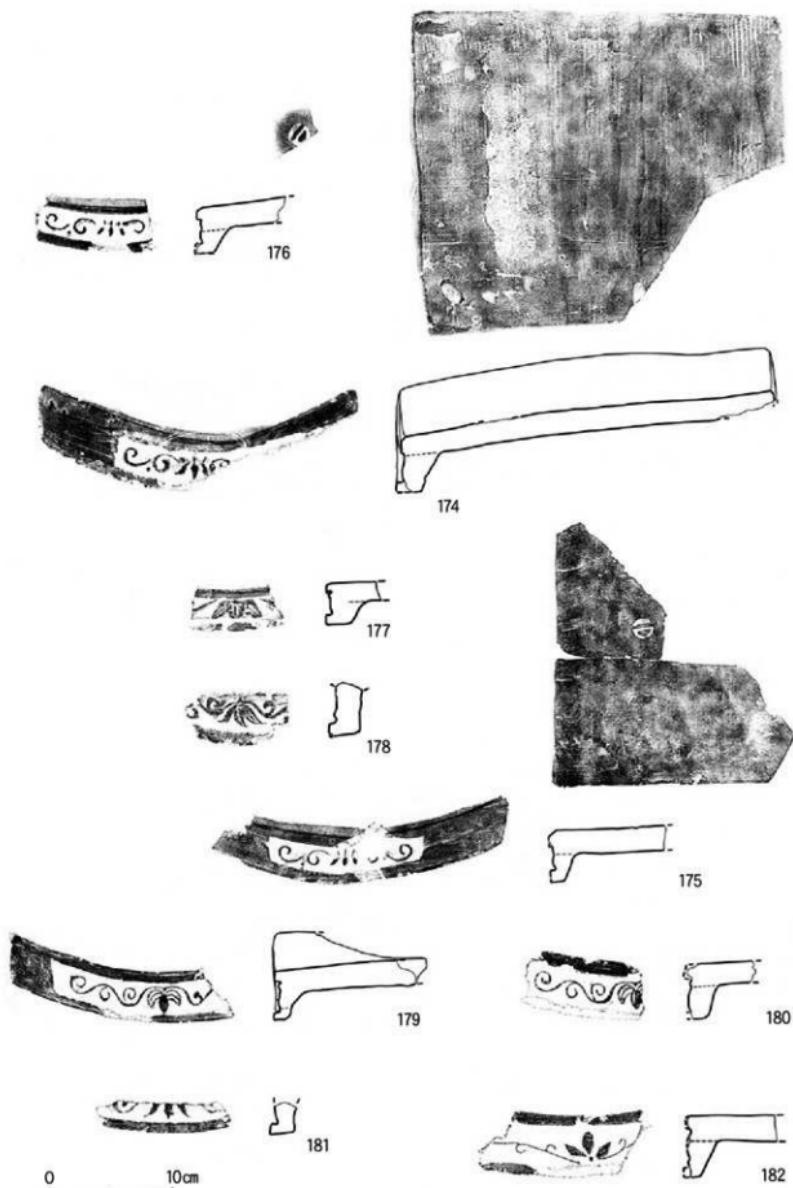
172



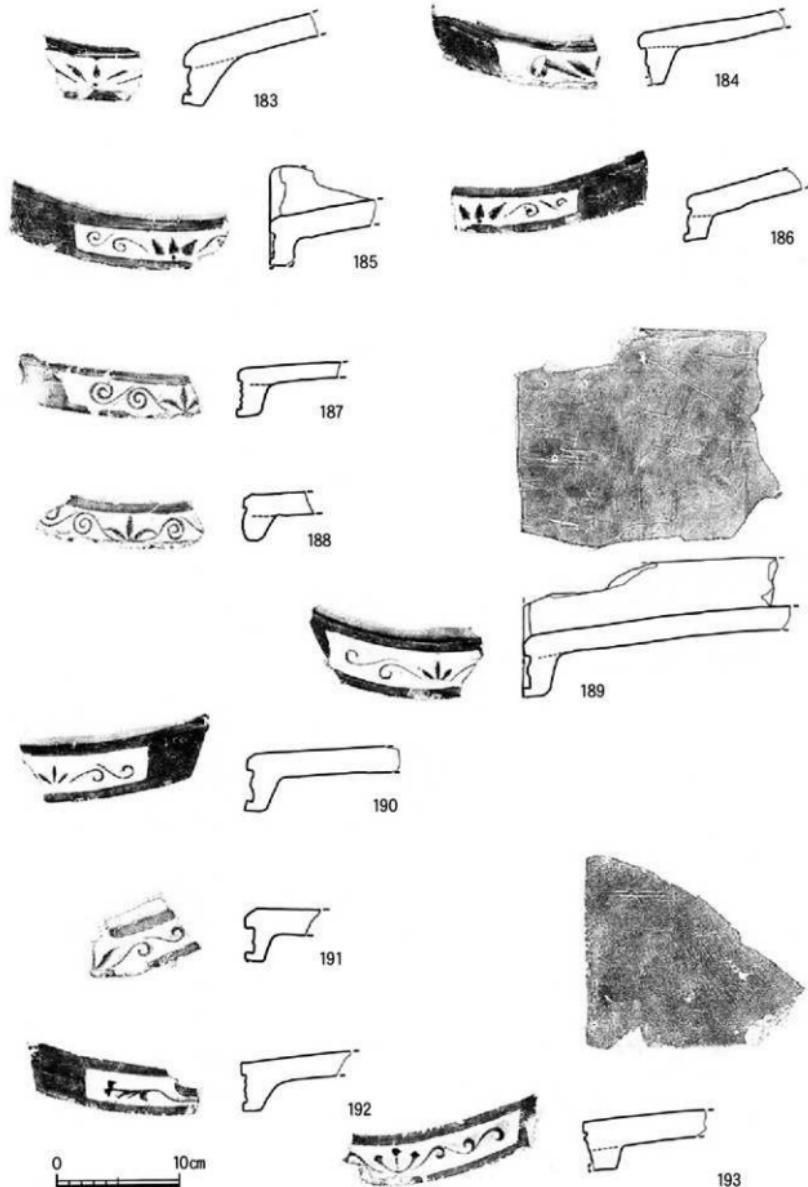
173



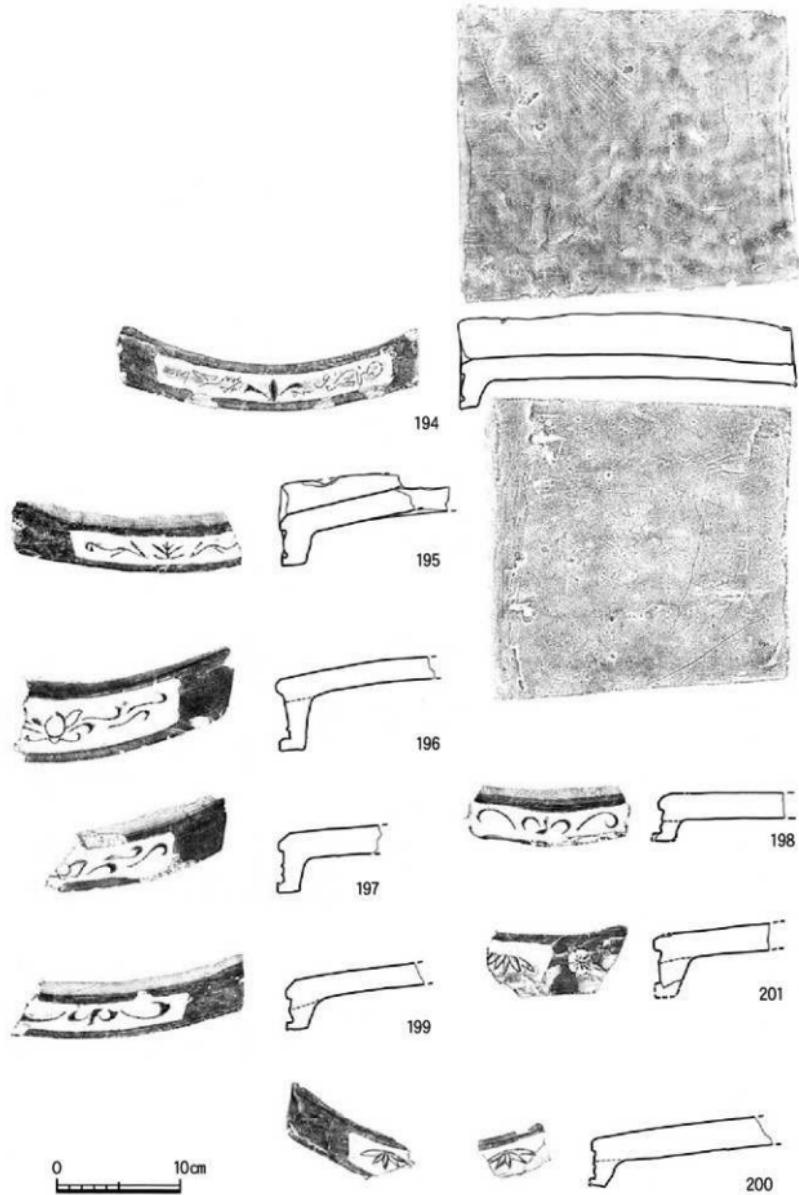
第126図 軒平瓦実測図1 (1/4)



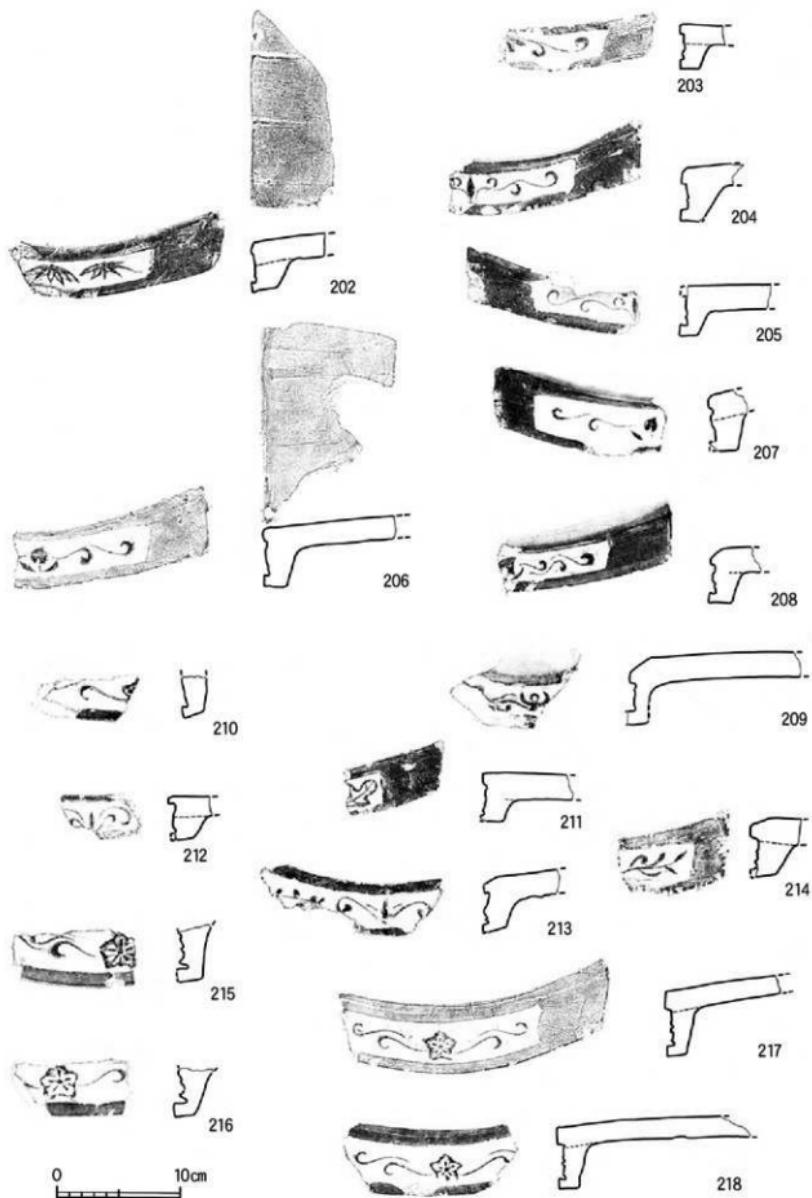
第127図 軒平瓦実測図2 (1/4)



第128図 軒平瓦実測図3 (1/4)



第129図 軒平瓦実測図 4 (1/4)



第130図 軒平瓦実測図5 (1/4)



219



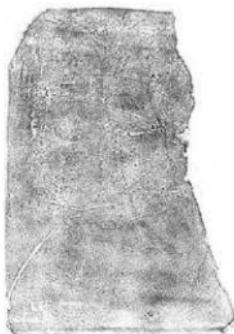
220



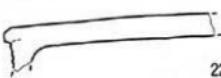
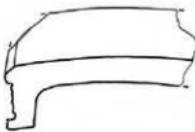
221



223



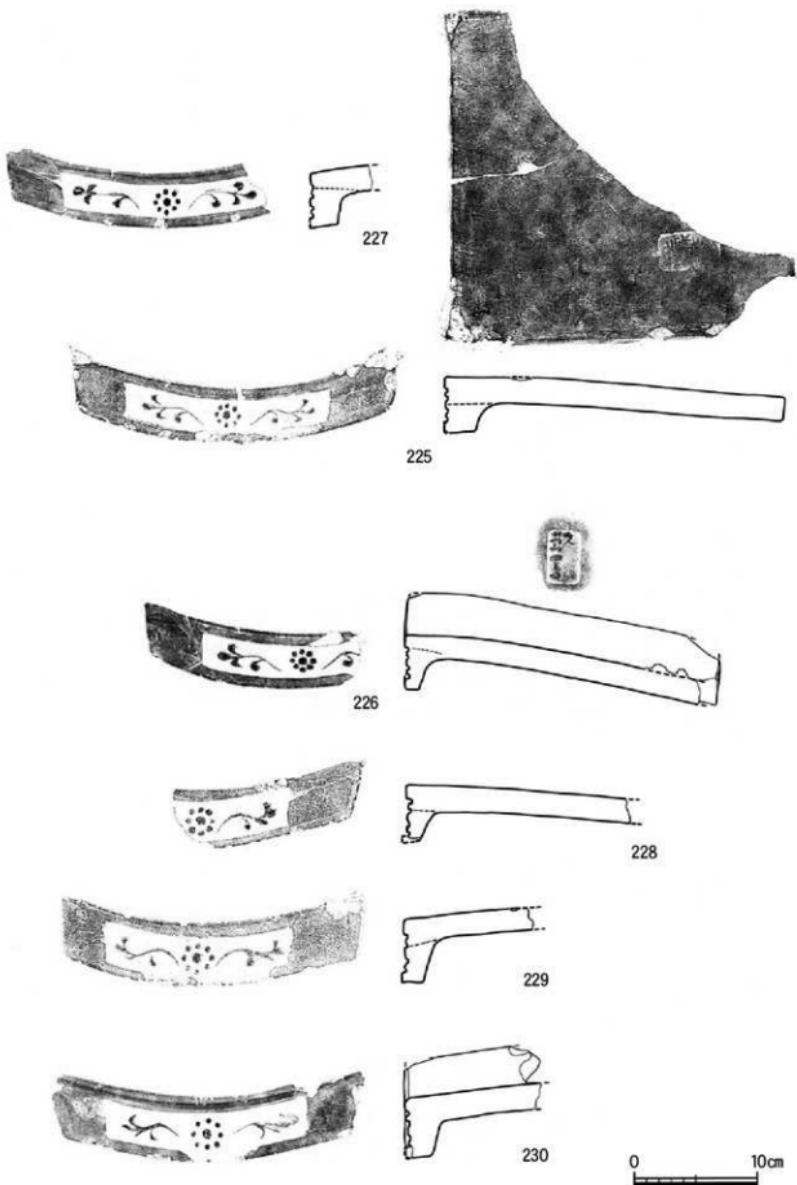
222



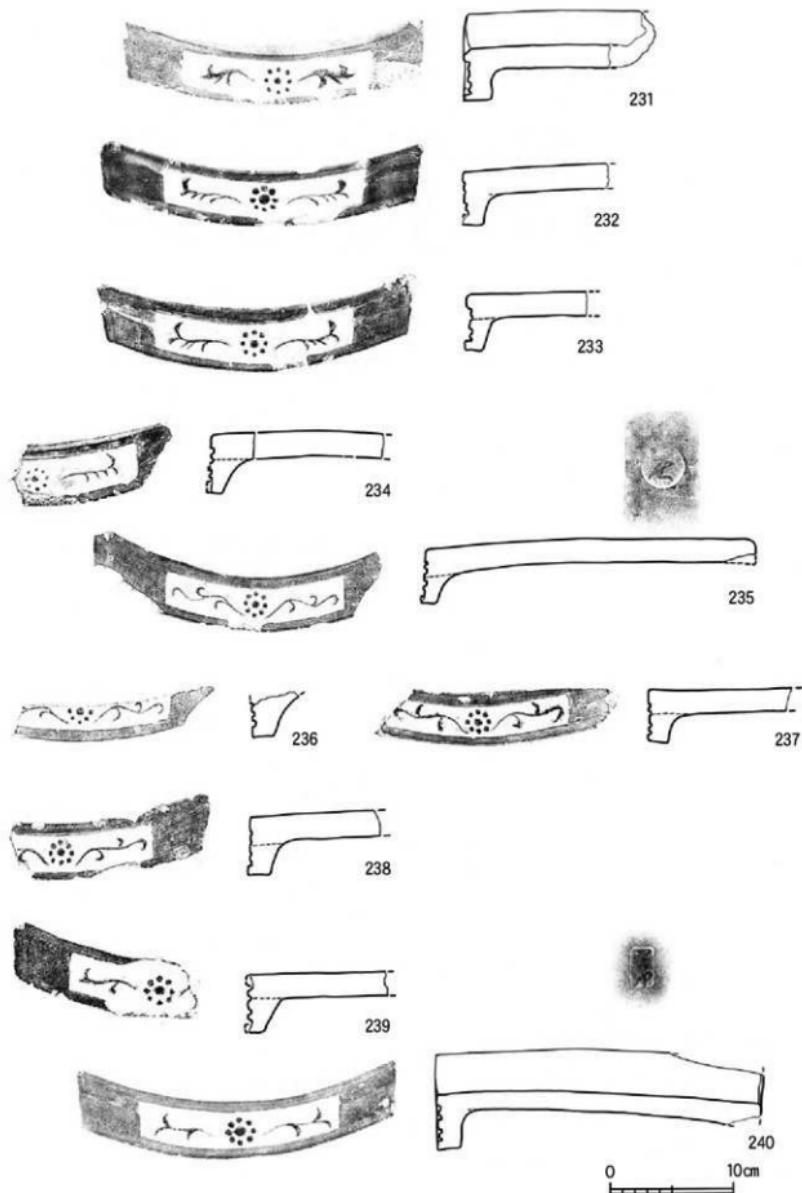
224



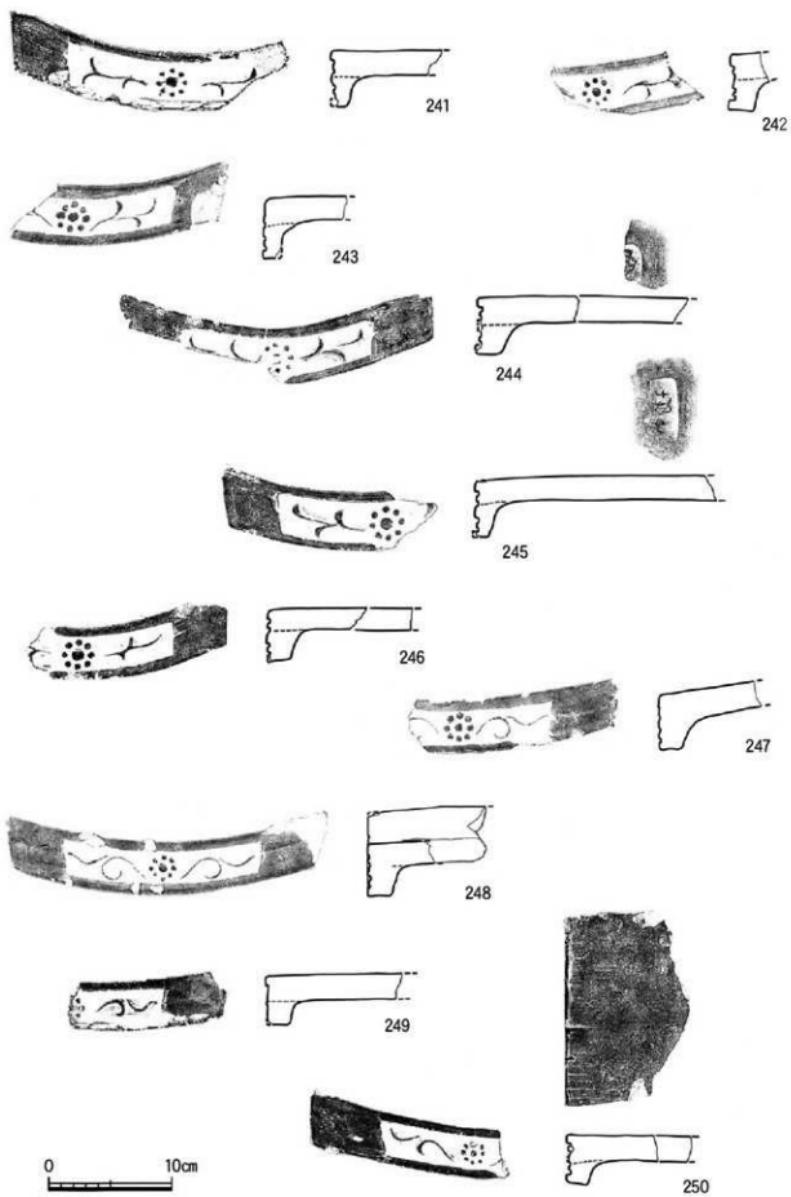
第131図 軒平瓦実測図6 (1/4)



第132図 軒平瓦実測図 7 (1 / 4)



第133図 軒平瓦実測図 8 (1/4)



第134図 軒平瓦実測図 9 (1 / 4)



251



252



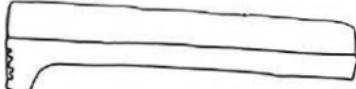
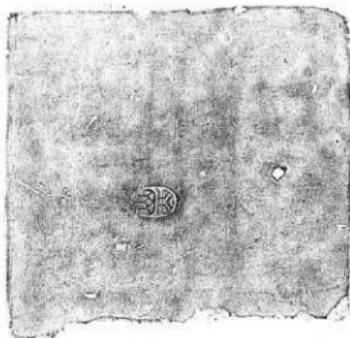
254



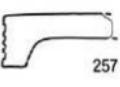
253



255



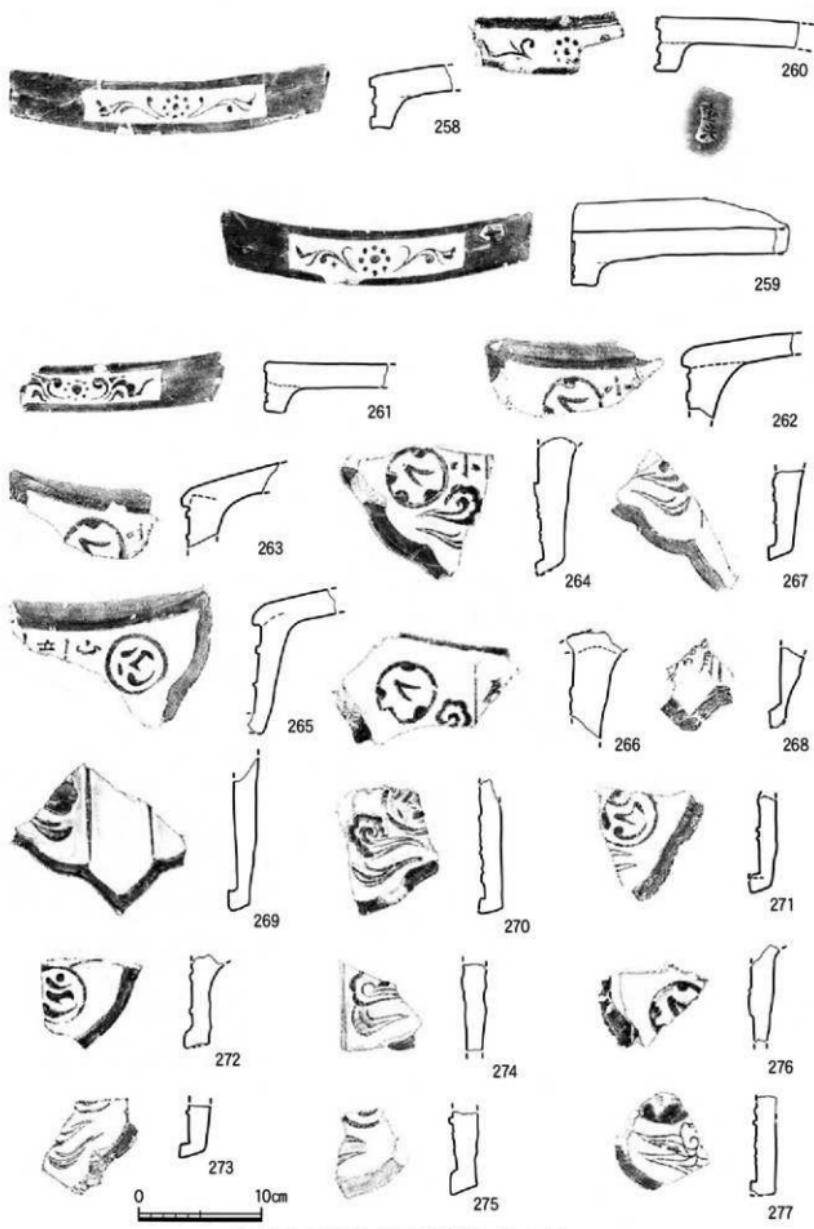
257



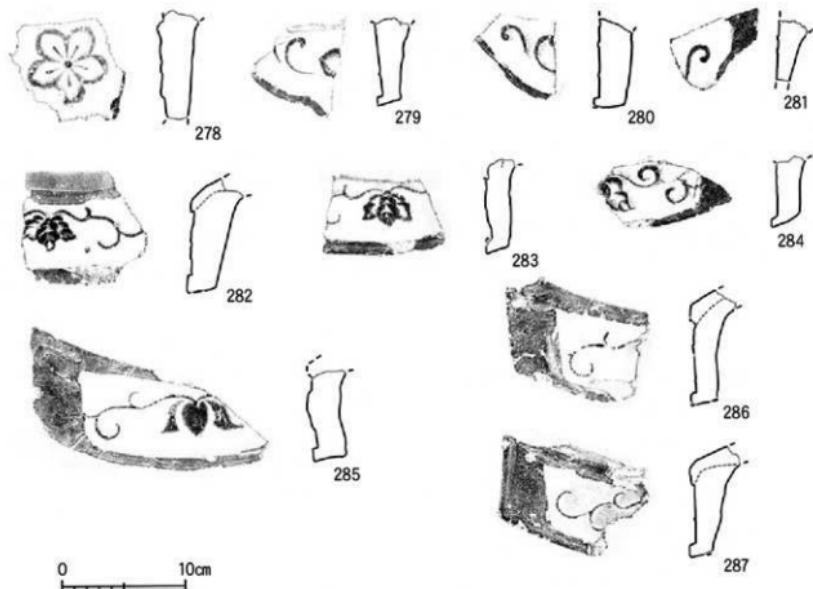
258



第135図 軒平瓦実測図10 (1/4)



第136図 軒平瓦・滴水瓦実測図 (1 / 4)



第137図 滴水瓦・垂瓦実測図（1／4）

れている。文様区は未調整のようだが、周縁・側縁・瓦当裏面はナデ調整が施されている。

中央に文字ではなく家紋などの文様を配したものもある。桔梗文を配した滴水瓦が出土している。278は花弁が接し、輪郭が丸みを帯びるもの。花弁は幅広の輪郭線に縁取られ、丸く窪む。花弁の中心線の稜は弱く、雄蕊は先端が剣先状で花弁の長さの約半分まで伸びる。桔梗文の周りに唐草文が配されているが不明瞭。瓦当裏面はナデで仕上げられているが、風化が激しいため瓦当面や側縁の調整は不明瞭である。279も桔梗文。278と同様に周縁幅が狭い。左の花弁と唐草の一部が残存しており、278と同范の可能性がある。花弁の特徴は278と同じで、唐草は上に伸びて内向きに反転し、分離してさらに外側に伸びる。280は唐草のみの破片だが、279の続きである可能性が高い。279・280は同じ技法で、文様区は未調整だが上端にナデがみられる。周縁・側縁・瓦当裏面はナデ調整で仕上げられている。281は右端の破片。下向きに反転する唐草がみられる。周縁は狭いが、右端は広めである。文様区は未調整のようだが、上端にナデがみられる。周縁・側縁・瓦当裏面はナデ調整で仕上げられている。278・279・280・281はいずれも平瓦を欠いているため接合状況は不明だが、カキヤブリがみられる。

n. 垂瓦（第137図282～287）

軒平瓦の一種だが、瓦当面の上下の幅が広い点と、平瓦との接合角度が鈍角になる点が特徴の「李朝系瓦」である。中心飾が下三葉文と果実のものが出土している。下三葉文は3点出土しており、いずれも範が異なる。282は文様区の左側と右端を欠く。写実的で立体的な三葉文の上から出た唐草は、下向きに伸びながら上・下に反転する。先端は不明。三葉文の右下に小ぶりな珠文がある。瓦当は領貼り付け技法で、

頸部は丁寧なナデで仕上げている。頸部を接合する際には平瓦の端部を大きく抉ってカキヤブリを施しているようである。瓦当上端は大きく斜めに面取りを施し、ナデ調整で仕上げている。283は中心飾部分の破片。平瓦は完全に欠損している。284は中心飾の一部と右側の唐草が残る。平瓦は完全に欠損している。285は中心飾が果実状のもの。重複した葉が果実の脇に立体的に表現されている。唐草は果実の上の同じ起点から両側に伸びる。右側は欠損しているが、左側は緩やかに波打ちながら伸びる蔓から子葉が上・下に反転している。文様区の左端で蔓は途切れている。文様区はほぼ未調整だが、上端には平瓦との接合線を消すためと思われるナデ調整が施されている。瓦当面は頸貼り付け技法で、頸部は丁寧なナデで仕上げている。平瓦は欠損しているため、瓦当上端の面取りも不明瞭。286は中心飾と右側を欠く。範の一致から285と同范であり、文様区のナデ調整など技法もほぼ同じである。287は中心飾と右側を欠く。唐草は、上から下へ緩やかに波打ちながら伸び、上・下・上に反転する。瓦当面の端部にナデ調整を施す。特に上端は強いナデ調整がみられる。

○、軒目板（棟）瓦・軒棟瓦

軒目板（棟）瓦は棟瓦の一種で、軒平瓦の端に軒丸瓦を簡略化した軒丸部を、軒平部の瓦当面よりやや前になるように接合した軒先瓦。軒棟瓦は、棟瓦をもとに軒平部の頸と円形の粘土板で瓦当面を形成したもの。軒丸部の文様の違いで、巴文・蛇の目文・九曜文・その他に大別する。さらに軒平瓦部の文様構成や範の違いで細分される。

ア、巴紋軒目板（棟）瓦（第138図288～291）

軒平部の文様の違いで3種に細分される。288は瓦当面がほぼ完形の資料。軒平部の文様は、左右に広がる花文状の中心飾を内側に反転する勾玉状の唐草が眞る。さらに外側に双葉状の子葉と、波打つ蔓がそれぞれ分離して配される。瓦当面は頸貼り付け技法のようで、頸部は丁寧なナデ調整で仕上げられる。軒平部凹面もナデ調整で丁寧に仕上げられ、凸型台の痕跡がうっすらと残る。凸面は粗いナデ。軒丸部の接合のためか、左側瓦当裏面に凹型台の痕跡が目立つ。軒丸部は、蒲鉾状の体部を軒平部に接合した後、瓦当面を形成し範を押しているようである。その後にナデ調整を施して仕上げている。巴文は左巻きで浅い。軒丸部・軒平部ともに文様区にキラコが目立つ。289は軒平部の右を欠く。巴文は右巻きで中心飾は288に似る。中心飾下から2つ伸びた唐草は、先端が珠文状になる。瓦当面は頸貼り付け技法のようで、頸部はナデ調整で仕上げられる。軒平部凹面もナデ調整で丁寧に仕上げられる。凸面は粗いナデ。軒丸部の接合のためか、左側瓦当裏面に凹型台と思われる痕跡がある。軒丸部は、蒲鉾状の体部を軒平部に接合した後、円板状の瓦当面を接合し範を押しているようである。その後にナデ調整を施して仕上げている。瓦当面と平瓦凹面・軒丸部の体部上面にキラコが目立つ。290の巴文は左巻きで軒平部の右を欠く。軒平部の文様は289と同じ構成だが、範は異なる。技法も289とはほぼ同じ。瓦当面と軒平部凹面にキラコが目立つ。

291は軒平部の右側を欠く。軒平部の文様は蔓の実状の文様から分離した唐草が上・下に反転するもの。瓦当面は頸貼り付け技法のようで、頸部はナデ調整で仕上げられている。軒平部凹面は丁寧なナデ調整、凸面は粗いナデ調整で仕上げられている。軒丸部は、別々に作られた瓦当と体部を軒平部に接合し、範を押してナデで仕上げている。軒丸部の文様は浅い。

イ、巴紋軒棟瓦（第138図292）

292は軒平部が棟瓦で、軒平部の瓦当を形成する頸と、軒丸部の瓦当を棟瓦に接合している。軒平部の文様は、放射状に広がる花弁の菊文を中心飾として、2本の唐草が別々に伸びる。軒平部の頸を接合した後に、軒丸部の瓦当を接合している。範をした後で外から見える部分に関しては丁寧なナデ調整を施して

いる。両瓦当面にはキラコが部分的に認められる

ウ、蛇の目紋軒棟瓦（第138図293）

293の軒平部は蕉状の中心飾から3本に分かれた太い蔓が伸びる。上が雷状で、下二つが子葉状で先端が珠文状になる。軒平部の顎を接合した後に、軒丸部の瓦当を接合している。范をした後で、瓦当裏面を含め外から見える部分に関してはミガキを施している。軒平部にはキラコが部分的に認められ、焼き上がりは全体的に黒味が非常に強い。

エ、九曜紋軒目板（棟）瓦（第139図294～301、第140図302）

294は軒丸部を欠く。軒平部の文様は九曜紋軒平瓦Bと同系統か。軒平部の瓦当は顎貼り付け技法で、顎部はナデ調整で仕上げられる。軒平部凹面は粗いナデ調整で仕上げられる。凸面は粗いナデ。軒丸部の接合のためか、左側瓦当裏面に凹型台と思われる痕跡がある。296は軒丸部の瓦当面を欠く。軒平部の文様は九曜紋軒平瓦C aに近似する。軒平部の瓦当は顎貼り付け技法で、顎部はナデ調整で仕上げられる。軒平部凹面はナデ調整で丁寧に仕上げられる。凸面は粗いナデ。軒丸部は、蒲鉾状の体部を軒平部に接合した後、円板状の瓦当面を接合しているようである。その後にナデ調整を施して仕上げている。295は、軒丸部は完形だが軒平部文様は左端のみ残存している。軒平部文様は九曜紋軒平瓦C cと同じ構成だが、同範かは不明瞭。軒平部の瓦当は顎貼り付け技法で、顎部はナデ調整で仕上げられる。軒平部凹面もナデ調整で仕上げられる。凸面は粗いナデで、側縁に凹型台の痕跡が残る。軒丸部は、蒲鉾状の体部を軒平部に接合した後、円板状の瓦当面を接合しているようである。范を押した後にナデ調整を施して仕上げている。297は一部欠損するが瓦当面が完形に近いもの。軒平部の文様は右側の唐草外側の范傷から九曜紋軒平瓦D dと同範である。298も同範の可能性が高い。軒平部の瓦当は顎貼り付け技法で、顎部はナデ調整で仕上げられる。軒平部凹面もナデ調整で丁寧に仕上げられる。297の凹面に「□良」、298の凹面に「新三良」の刻印がある。凸面は粗いナデ。瓦当裏面に凹型台と思われる痕跡がある。軒丸部は、蒲鉾状の体部を軒平部に接合した後、円板状の瓦当面を接合しているようである。范を押した後にナデ調整を施して仕上げている。299は軒平部文様の中心飾から右側を欠く。文様は九曜紋軒平瓦G cと同文である。軒平部の瓦当は顎貼り付け技法で、顎部はナデ調整で仕上げられる。軒平部凹面もナデ調整で仕上げられる。凸面は粗いナデ。軒丸部の接合のためか、左側瓦当裏面に凹型台と思われる痕跡がある。軒丸部は、蒲鉾状の体部を軒平部に接合した後、円板状の瓦当面を接合しているようである。范を押した後にナデ調整を施して仕上げている。軒平部の文様は九曜紋軒平瓦Iと同範の可能性が高い。瓦当面は顎貼り付け技法で、顎部はナデ調整で仕上げられる。軒平部凹面もナデ調整で丁寧に仕上げられる。凸面は粗いナデ。軒丸部の接合のためか、左側瓦当裏面に凹型台と思われる痕跡がある。軒丸部は、蒲鉾状の体部を軒平部に接合した後、円板状の瓦当面を接合しているようである。范を押した後にナデ調整を施して仕上げている。軒平部の文様区にキラコが目立つ。301・302は、軒平部の文様が同範である。軒丸部の九曜文も同範の可能性が高い。製作技法や焼き上がりがやや軟質で明褐色を呈するなども一致する。軒平部の文様は九曜紋軒平瓦Nと同範の可能性が高い。軒平部の瓦当は顎貼り付け技法で、顎部はナデ調整で仕上げられる。軒平部凹面もナデ調整で仕上げられているが、両者ともに風化が目立つ。凸面は粗いナデ。軒丸部は、蒲鉾状の体部を軒平部に接合した後、円板状の瓦当面を接合しているようである。范を押した後にナデ調整を施して仕上げている。

オ、その他（第139図303・304）

軒丸部の瓦当面のみの資料だが、303の丸に一引両文や、松井家の家紋である304の竹輪に九枚篆文も出

土している。

(3) 鬼瓦・鰐

鬼瓦は文様により桔梗文・九曜文・その他に分けて記述する。

a. 桔梗紋鬼瓦（第140図305～312）

桔梗紋鬼瓦は文様のバリエーションが多いため、花弁が接し輪郭が比較的直線的なものと、花弁が接し輪郭が丸みを持つもの、花弁同士が離れ丸みを持つものに分かれる。

305～307は、花弁が接し花の輪郭が比較的直線的なもの。305は、文様が陽刻されたもの。本来立体的だった文様が、浅く平滑化され、花弁の輪郭や花弁の境が太くなっている。雄蕊も浅く太くみえ、雌蕊との高低差もない。桔梗文の周りは円文で囲まれており、周縁より1段低い。表面はナデ調整で仕上げられる。裏面は綫方向把っ手の両端が残存し、瓦の端部に周縁がある。周縁には条痕がみられ、それ以外の部分には工具痕がみられる。306は桔梗文状の花文。扁平な陽刻で、花弁の境は沈線で雄蕊の表現は無い。雌蕊は半球状に盛り上がる。表面はナデ仕上げで、裏面は工具痕と把っ手の脱落痕と思われるカキヤブリがみられる。307は大型の桔梗文の花弁。花弁の境は稜が明瞭なV字谷で表現され、花弁の中央も明瞭な稜がある。雄蕊は脱落しているが、痕跡からは直線的で先端が剣先状に尖っていたことがわかる。裏面も花弁に合わせた稜がある。桔梗文型と鬼瓦板部は別作りで作られている。表面も裏面も露出する部分については丁寧なナデで仕上げている。

308～310は、花弁が接し花の輪郭が太く丸みを持つもの。308・309は同じ部位の破片で、同範の可能性がある。308が立体的であるのに対し、309は扁平だが、花の輪郭線や雄蕊の配置は近似する。308の雄蕊は剣先状に尖り、中心に線に入る。雌蕊は扁平で雄蕊よりもわずかに突出する。309は308に比べ輪郭が大きい。また雌蕊・雄蕊・花弁の高さがほぼ同じである。308の表面は、文様はほぼ未調整で、端部にナデ調整を施す。309は文様を含めてナデ調整を施している。两者ともに裏面に把っ手があり、309は完全に遺存している。

310は花弁が膨らみ気味になるもの。扁平な花弁に雄蕊が乗り、雄蕊の輪郭も花弁に合わせて膨らんでいる。雄蕊の中心には雌蕊側から2/3まで沈線が入る。雌蕊は扁平で五角形状を呈する。表面の調整はほとんど行われていないが、弁の端部には工具痕がみられる。裏面には把っ手の一部が残る。一方の基部は残存していないが、残存部の基部は雌蕊の裏に当たる。

311・312は、花弁が接し花弁が尖り気味のもの。311は頂部が丸い盾形の隅鬼瓦。文様は立体的で、輪郭線が細く、弁の中心線も明確な稜を持つ。雄蕊・雌蕊は欠損して不明。鬼瓦の右側の破片で、脚部は短い。脚部の先端は内側から外側に斜めに上がる。周縁は表裏にあり、裏面は薄い。表面は全面にナデ調整で仕上げ、裏面は指大の太さの調整痕と線状の工具痕がみられる。把っ手は欠損しているが、上下方向に付けられていたようである。下部の基部にはカキヤブリがみられる。312は、花弁もしくは葉の端部のみが残存し桔梗文かは不明瞭。沢瀉文の可能性もある。円弧状の脚部の形状から、半円形に近い隅鬼瓦で、表面は低い周縁がある。文様区内はハケメとナデ、周縁と側縁は丁寧なナデで仕上げられる。裏面は、周縁は無く平らで、激しい条痕がみられる。

b. 九曜紋鬼瓦・その他（第140図313、第141図314～322）

313は九曜紋鬼瓦の右上部分。文様は脱落しているが、脱落痕が体部に球状に残る。肩は一段で、周縁も輪郭に合わせて内側に同じ段を持つ。周縁には片切り彫り状の溝があり、周縁を内外に分ける。内側は溝底から丸みを持って立ち上がる。周縁はミガキ、文様区・側縁はナデで仕上げられている。裏面は端部

が欠損しているため周縁の有無は不明。ナデ調整で仕上げられている。314は鬼瓦の右上の破片。文様は完全に欠けている。文様は接合式だったようで、文様区にカキヤブリがみられる。周縁内外の肩は一段で、溝は無い。周縁の表面はミガキ、側縁はケズリ後丁寧なナデ、文様区はナデで仕上げられている。裏面は指頭または工具による調整が施されている。315は鬼瓦の右側部分。脚部が直線状で、組み合わせ式の鬼瓦の可能性がある。文様は脱落している。肩は一段で、周縁も輪郭に合わせて内側に同じ段を持つ。周縁には片切り彫り状の溝があり、周縁を内外に分ける。内側は溝底から丸みを持つ。周縁はミガキ、文様区・側縁はナデで仕上げられている。裏面は周縁が全面に周るが、頂部に抉りがある。316は鬼瓦の左鰐部分。表面には手彫りにより葉脈部分を隆起させた葉の模様が彫られている。側縁は一部ケズリ後ナデ仕上げ。裏面は工具による抉りの痕跡が明瞭で、縁を残存させて周縁にしている。317は鰐。文様は無く、表面はミガキ、側縁はケズリで仕上げられている。ケズリの面を丸瓦の跨ぎの部分とすれば、左鰐となるが、左端部にもケズリの面があり、組み合わせ式の鬼瓦の可能性がある。裏面には周縁が巡るが、その内面は工具により抉り取られた痕跡を明瞭に残す。318は隅鬼瓦の周縁。肩は無く312とほぼ同じ半円形に近い形状である。文様区は欠けているため不明。文様区と周縁の段が斜めである点が特徴的。周縁はミガキ、文様区は端部のみナデ調整、側縁はケズリ後丁寧なナデ仕上げである。裏目にも細い周縁があり、ナデ調整で仕上げられている。中央上部に把手接合のカキヤブリがみられる。319は右下の脚部で、脚の形状から隅鬼瓦である。周縁には片切り彫り状の溝があり、周縁を内外に分ける。内側は溝底から丸みを持つ。周縁・側縁はミガキ、文様区はナデで仕上げられている。裏面は、脚部側にも周縁がある。裏面は工具によるナデ調整で仕上げられている。本資料の表面には「元禄五 土山四口」の刻印がある。320は脱落した花文。中心から花弁まで一つずつ作って合わせている。321は鰐瓦の胴部。鱗は1枚ずつ描いている。322も鰐瓦の胴部。

(4) 隅木蓋瓦（第142図323～328）

323は九曜文の隅木蓋瓦。文様区の一部と右側の周縁部を欠く。曜は円柱状に突出している。平面形は六角形で、下部の二面は波状。周縁には片切り彫り状の溝があり、周縁を内外に分ける。周縁の内側は細く、丸みを持つ。周縁の文様区側は輪郭に合い、下部の内側は同じ波を持つ。周縁はミガキ、側縁はケズリ後ナデで、表面にキラコが目立つ。周縁と側縁の境は細い面取りを施す。天井は屋根状で、裏面には細い周縁が下部の二面以外に巡る。裏面は粗いナデで仕上げられている。324も九曜文の隅木蓋瓦。323と近似するが、324では下部の二面が波状に対し、その周縁の内側は直線である。曜は別作りで、断面に半球状の埋め込みがある。表面にキラコが目立つ。裏面は周縁部を欠いている。325は九曜文の隅木蓋瓦。本来は平面形が方形または五角形であったと思われるが、3つの周曜と周縁の一部が残る。天地が不明瞭である。周曜は円柱状に突出しており、断面観察からは個別に作成し、接合後に表面を磨いて仕上げていることがわかる。周縁は波状で、輪郭に合わせて内側に同じ波を持つ。周縁には片切り彫り状の溝があり、周縁を内外に分ける。内側は溝底から丸みを持って立ち上がる。文様区・周縁・側縁は丁寧なナデで仕上げられている。裏面は平らで条痕に近いナデで仕上げられている。326は花文の隅木蓋瓦。桔梗文の可能性がある。表面が平らな花弁の中央が船底状に窪み、沈線を入れている。雄蕊の表現はなく、雌蕊は欠けている。周縁外側は波状で、内側も輪郭に沿う。周縁幅は端部で狭くなる。表面・側縁は文様も含めてナデ調整で仕上げられ、裏面は粗いナデ調整か。327も隅木蓋瓦だが文様部分を欠いている。形状技法は325とほぼ同じだが、側縁の仕上げがやや粗い。328は隅木蓋瓦の天井部。天井部は2面で屋根状に組まれており、各面に釘穴が一つある。後端には三角形の切込みがある。

(5) その他の道具瓦 (第143図329～第146図357、第152図379)

329は桔梗文の飾板瓦。城内で出土した事例からは、平面形が長方形を呈するものである。中央の文様は、花弁が接し、輪郭が直線に近い桔梗文が陽刻されている。輪郭は3mmほどの幅で、花弁間の稜は明瞭だが花弁中央の稜は曖昧である。雄蕊も立体的で先端は尖る。周縁は桔梗文と唐草が施される。側縁はケズリで、周縁との端部はナデが施されている。裏面はナデ調整。330も飾板瓦か。円で区画された中に花文が隆起線で表現される。花弁は5弁のようで、花弁間に雄蕊が表現されている。表面の花文は範傷も明瞭で、未調整の可能性が高いが、その他の部分はナデ調整が施されている。円の脇に固定用と思われる釘穴が2箇所ある。一辺が残っていることから方形の板瓦であった可能性が高い。

331・332・333・334は鳥食。いずれも九曜文で、鳥体部分のみが残存し食（伏間）部分は欠損している。331の文様区径は11.5cm。瓦当面にキラコがみられる。瓦当面は厚く、筒部との間には段がある。文様区は一部ナデ調整で、周縁・側縁・筒部はナデ調整で仕上げられている。筒部の断面は梢円形で峰に稜は無い。332の文様区径は11.5cm。曜の断面形はいずれも丸みを持ち、瓦当面にはキラコがみられる。瓦当面は厚く、筒部との間には段がある。文様区は曜の表面以外はほぼ未調整で、周縁・側縁・筒部はナデ調整で仕上げられている。筒部の断面は不安定な円形で峰に稜は無い。333の文様区径は11.8cm。瓦当面は厚く、筒部との間には段がある。文様区は曜の表面以外はほぼ未調整で、周縁・側縁・筒部はナデ調整で仕上げられている。筒部の峰には明瞭な稜があり、鳥体の頂部まで続く。334の文様区径は11.5cm。瓦当面の各曜の周囲に範傷が目立つ。筒部から瓦当面は、自然に広がるように接合されている。筒部の峰には明瞭な稜があり、鳥体の頂部まで続く。曜以外の文様区はほぼ未調整だが、文様区と周縁の間の段付近がナデ調整され、段が不安定になっている。

335は棟込瓦か。板状の平坦な体部から弧を描く隆起線が立ち上がる。隆起線は幅約3cm、高さ約1.8cmで断面形は長方形。弧を下弦にした場合、右上が直角に切られた端部で、5cmほどのところから左への角度で切られている。上下方向の体部断面は裏側上端に面取りがあり台形状になる。裏面には方形の脱落痕とカキヤブリがみられる。表面・側縁は丁寧なナデ調整、裏面もナデ調整で仕上げられている。

336は雁振瓦。凸面の一方に目板状の重ね目が接合されたいわゆる角桟伏間で、もう一方には水切り状の細い溝が彫られている。凸面は丁寧なナデ調整、凹面はナデ調整で仕上げられている。凹面には横方向の条痕がみられるが、コビキの痕跡かは不明瞭。

337は雁振瓦。断面形が円弧ではなく稜のない山型になる。山型の頂部に釘穴が1箇所みられる。側端には玉縁状の重ね目が突出する。もう一方の側端側凹面は大きく面取りが施されている。凸面はやや風化しているがナデ調整で仕上げられ、「茂兵衛」の刻印がみられる。凹面は布目と細かな砂がみられる。

338・339・340・341・342は輪違い。338・339・340は行基葺き状に後端がすぼまるもの。338は表面と後端が残り全長が13cmとわかる。後端凹面側は大きく面取りが施されている。339は338と同じ技法で作られているが表面が欠損しているため全長は不明。他の輪違いに比べやや全長が長いようである。340も同様の技法だが、凹面や後端の面取りが丁寧である。341は表面と後端の区別がつきにくい。側縁・凹面の両端に面取りを施している。凹面にはコビキBの痕跡が残る。342は後端側凹面が大きく面取りされて薄くなっている。凹面にはコビキBの痕跡が残る。

343は袖瓦。湾曲が非常に緩い平瓦側縁に、水切りが付く。水切りの方向からは左の袖瓦である。凹面と水切りは丁寧なナデ調整で仕上げられており、凸面と水切りの裏面は粗いナデ調整。

344は掛瓦。全長は27cmで、凹面側縁に水切り状の立ち上がりがある。凹面に「元禄 小山口」の刻印がある。凹面・側縁・側端は丁寧なナデ調整で仕上げられ、凸面は粗いナデ調整で凹型台の痕跡がみられる。

345・346は谷丸瓦。345は谷の右側の瓦。水返しが付いていた痕跡があるが欠損している。接合部には

カキヤブリがみられる。丸瓦体部には直径約1.5cmの釘穴と「丸に一引き文」の刻印がある。後端には玉縁が付き、凹面の端部は大きく面取りされている。凹面にはコビキBの痕跡がみられる。346は谷の左の瓦。346は水返しが付く。丸瓦体部には直径約1.3cmの釘穴と九曜文の刻印がある。後端には玉縁が付くようだが欠損している。凹面の端部は大きく面取りされている。凹面にはコビキBの痕跡と粘土板の継じ合わせ目と思われる痕跡がみられる。

347は谷平瓦。凹面に弧状の隆起がある。凹面は丁寧なナデ調整、凸面は粗いナデ調整で仕上げられている。胎土に砂粒が多くやや脆い。

348は谷平瓦。凸面に水切り用の溝が彫られている。凹面は丁寧なナデ調整で、「源」の刻印がみられる。凸面は粗いナデ調整で、弓状圧痕や凹型台の痕跡と細かな砂がみられる。

349は谷平瓦か。側端に重ね目が2.5cm程の長さで突出する。厚さが5cm程で、非常に分厚い瓦である。凹面は丁寧なナデ調整、凸面はミガキに近い丁寧なナデ調整だが工具痕が目立つ。

350は谷平瓦。端部の一端が斜めに切られている。凹面に細かな砂と九曜文の刻印がみられる。

351・352・353・354・355・356は使用位置が不明瞭な瓦。351は丸瓦の両端を斜めに切った瓦。水返しも玉縁も無く全長も11.5cmと短い。凹面にはコビキBの痕跡がみられる。352は右側を鋭角に切った平らな板瓦に三角形の水返し状の突起が付く。353は左側を鈍角に切った平瓦部に水返し状の突起が付く。湾曲は緩い。354は右側を鈍角に切った平瓦部に水返し状の突起が付く。後端も鈍角に切られている。凹面には九曜文の刻印がある。355は左側を鈍角に切った平瓦部に水返しが付く。凸面に細かな砂と凹型台の痕跡がみられる。356は平瓦。厚さが4cmほどで分厚い瓦。湾曲は緩く、凸面側に鱗状の重ね目が突出する。凸面は丁寧なナデ調整。凹面はやや粗いナデ調整か。

357は板瓦。平面形は25cm四方のほぼ正方形で、四方に幅3cm程の鱗状の重ね目が突出する。重ね目は上下・左右で突出が表側・裏側と異なり、隣の瓦と交互に重なりながら貼られたようである。四方に断面形が2段になる釘穴が設けられている。

358は板瓦か。平らな瓦。直径2.2～2.3cmの釘穴が2箇所みられる。右側に重ね用の段差がある。2次的に加工されている。

379は文様の一部か。組み合せ式の瓦のようである。

(6) 丸瓦（第147図359～第150図370）

軒丸瓦が多種に及んでおり、丸瓦も分類できる可能性がある。完形に近い資料を中心に管見の限り法量や技法について差をみたが、資料の全体量からすればごく一部であり、分類番号を付けることはあえて避けた。今回は、完形資料の掲載にとどめる。

359は前端左側を欠く。凸面は縱方向に2cm程の幅のナデ調整がみられる。凹面はコビキAの痕跡が明瞭で、玉縁部分には2mm程の幅の繊維を粗く編んだものの圧痕と布目痕がみられる。凹面の体部には吊り紐・布目痕と、工具による棒状のケズリ痕が数条みられる。凹面の前端部・側面・玉縁まで面取りが施され、側面の端部のみ軽くナデ調整を施している。

360は前端の一部を欠く。分厚い丸瓦である。凸面は2cm幅の縱方向のナデ調整が施されている。凹面はコビキAの痕跡とやや粗い布目痕がみられる。端部は全て面取りを施しており、前端部は面取り後ナデ調整で仕上げられている。側面の前端部側はナデ調整を施され丸みを帯び、後端部側は水平に仕上げられている。釘穴は無い。

361は前端から側面の一部と玉縁の一部を欠く。玉縁は短め。凸面の後端側は横方向の弱いナデ調整がみられるが、大半は縱方向の丁寧なナデで仕上げられている。ナデの単位は1.5cm幅。凹面はコビキAの痕跡が明瞭で、吊り紐の痕跡がある。面取りは端部の全体に施され、ほぼ未調整である。釘穴は無い。

362は一方の側面を欠く。玉縁が長い。凸面は縦方向のナデ調整が施されている。凹面はコビキAの痕跡が明瞭で、布目痕と太目の吊り紐の圧痕も明瞭である。玉縁側は粗い編み物痕が見られる。前端・側面・玉縁には面取りをした後で軽いナデ調整が施され、側面の端部は水平に仕上げられている。釘穴は無い。

363はほぼ完形。凸面の体部の両端は横方向の軽いナデ調整がみられるが、他の部分は縦方向の丁寧なナデ調整で仕上げられる。凹面はコビキの痕跡は不明瞭で、粗い編み物の痕跡と吊り紐痕がみられる。前端・側面・玉縁には面取りをした後で軽いナデ調整が施され、側面の端部は水平に仕上げられている。前端と側面の端部は丸みを帯びている。釘穴は無く、凸面の後端側に「源」または「次」の刻印がある。

364は前端の一部が欠いている。凸面は縦方向に2cm程の幅のナデ調整がみられる。凹面はコビキBと細かな布目痕がみられる。前端部は大きく面取りが施されている。側面から玉縁までも面取りが施され、側面の端部はナデ調整を施し丸みを帯びる。釘穴は無く、体部後端に近い部分に「丸に一引き文」の刻印がある。

365は前端・側面・玉縁の一部を欠くが、ほぼ完形の丸瓦。全体的に丁寧な作りの瓦である。体部長が29cmで、やや長い。凸面は前端に横方向の弱いナデ調整がみられるが、他はほぼ縦方向の丁寧なナデ調整で仕上げられている。ナデの幅は6~8mm前後である。凹面の体部は布目痕と吊り紐痕がみられるが、コビキについては不明瞭。玉縁部分には布目痕と粗い編み物の圧痕がみられる。前端・側面・玉縁には面取りをした後で軽いナデ調整が施され、側面の端部は水平に仕上げられている。釘穴は無く、凸面に「勘」の刻印がある。

366は前端を欠く。凸面の後端側は横方向の弱いナデ調整がみられるが、大半は縦方向の丁寧なナデで仕上げられている。凹面はコビキBの痕跡と、粗い編み物痕、布目痕がみられる。面取りは凹面端部全体に行われており、面取り後は軽くナデ調整が行われている程度ではほぼ未調整。側面部はやや尖り気味である。釘穴は無く、凸面の後端側に「丸に二つ引き文」の刻印がある。

367は体部後端が一部欠損している。凸面は縦方向のナデ調整が施される。幅1.3cmほどで、施した単位が体部前半と後半に分かれる。凹面の面取りは全体的に大きく、側面は尖り気味になる。コビキBの痕跡が明瞭で、布目痕・吊り紐痕がみられる。釘穴は無く、「車文」の刻印がある。

368は後端と玉縁の一部を欠く。調整が丁寧で規格的な瓦である。凸面の後端側は横方向の弱いナデ調整がみられるが、大半は縦方向の丁寧なナデで仕上げられている。ナデの単位は1.2cm程の幅。凹面はコビキの痕跡は不明瞭で、布目の端部がみられる。前端・側面・玉縁は面取り後ナデ調整が施されている。側面の端部は水平に仕上げられている。釘穴は無く、凸面の後端部に「元禄七 土山四□□」の刻印がある。

369は前端と側面の一部を欠く。玉縁は短め。凸面の体部の両端は横方向のナデ調整がみられ、他の部分は縦方向の丁寧なナデ調整で仕上げられる。凹面にはコビキBの痕跡が明瞭である。凹面の面取りは前端・側面・玉縁に及ぶが、やや不安定である。面取り後ナデ調整が施され、側面の端部は水平に仕上げられている。釘穴は無い。

370は前端の一部を欠く。凸面の調整は縦方向のナデが主体のようだが、単位は不明瞭。凹面には粗い編み物の痕跡がみられる。布目の痕跡は部分的である。前端・側面・玉縁は面取り後ナデ調整が施されている。側面の端部は水平に仕上げられている。釘穴は無く、凸面に「少」の刻印がある。

(7) 平瓦 (第151図371~373, 第152図374~378)

軒丸瓦同様に軒平瓦も多種に及んでおり、平瓦も分類できる可能性があるが、今回は完形資料を掲載するに止める。弧を持つ断面を横にした際の上下を側端とし、広狭の差がある場合は広端・狭端とする。側端と直交する辺を側縁とする。

371はほぼ完形の瓦。広端・狭端は25cmと24cmで、あまり差はない。凹面の狭端側10cm程度が風化しており、瓦葺き時の露出部分と判断している。凹面は丁寧なナデ調整で仕上げられており、コビキや凸型台の痕跡も不明瞭である。凹面狭端側に丸い枠に「半」の刻印がある。両側端は凹面側をわずかに面取りしている。側縁はナデ仕上げで、凹面側の端部は丸みを帯びている。凸面は、軽いナデ調整で仕上げられており、細かな砂もみられる。コビキの痕跡は不明瞭。側縁側の端部に凹型台の痕跡が明瞭に残る。

372・373は四隅の1箇所が欠けている。いずれも広端・狭端の差はないが、一方の側端の凹面に風化した部分があり、瓦葺き時の露出部分と判断している。凹面は丁寧なナデ調整で仕上げられており、コビキや凸型台の痕跡も不明瞭である。372の凸面には細かな砂が全面にみられ、いわゆる弓状圧痕がみられる。凹面に「五十」の刻印がある。373はヘラ状工具の痕跡が残る。凹面の瓦葺き時露出部分に隅丸長方形の枠に「土山彌□」の刻印がある。両側端の凹面側はわずかに面取りしている。側縁はナデ仕上げで、凹面側の端部は丸みを帯びている。373の凸面は、軽いナデ調整で仕上げられており、コビキの痕跡は不明瞭。側縁側の端部に凹型台の痕跡が明瞭に残る。

374は全長が34cm程の長い瓦。狭端側の凹面に13cmほどの風化した部分があり、瓦葺き時の露出部分と判断している。凹面はナデ調整により平滑化した後で丁寧なナデを格子状に施している。広端側に凸型台の痕跡と、コビキAと思われる条痕がわずかにみられる。両側端の凹面側はわずかに面取りしている。側縁はナデ仕上げで、凹面側の端部は丸みを帯びている。凸面は軽いナデ調整で、側縁に凹型台の痕跡がみられる。狭端側の端部にコビキAと思われる斜めの条痕があるが、不明瞭である。

375は凹面に刻印がある。凹面にはコビキBの痕跡がみられる。376は狭端の一部か。凹面に桔梗文状の刻印がある。凹面は丁寧なナデ調整、凸面は粗いナデ調整である。377は凸面に工具による棒状圧痕がみられる。378は凸面に型押ししたような圧痕と凹型台の痕跡がある。

今回、飯田丸出土の瓦について、文様の多様さの紹介にとどめている。編年や技法の変化については、本丸御殿出土瓦を報告した後に城内出土瓦としてまとめる。飯田丸出土の文様瓦については全て目を通したが、軒丸瓦・軒平瓦ともに九曜文の種類の多さが突出する。細川家の家紋であり、熊本城の存続期間からすれば当然の結果である。九曜紋軒丸瓦については、工業製品的に仕上がりが整っていることもあり一見しても差が見出しにくい文様だが、範や技法が多彩であることがわかった。文様区・各曜の計測でグルーピングをしたが、有効なものもあれば、グルーピングに疑問があるものもある。九曜紋軒平瓦については、文様の系統がつかめそうである。元禄年間を示した刻印もあり、時間軸上の定点になる可能性がある。系統の整理と分析をさらに進め、軒丸瓦との相関関係を探っていく。九曜文以外では、三巴紋軒丸瓦のバリエーションの多さが注目される。家紋を使用しない段階の資料を相当含むと思われ、飯田丸に限らない使用場所も検討する必要がある。三巴紋軒丸瓦と組み合うと思われる上下三葉紋軒平瓦等の古式の軒平瓦についても同様で、軒丸瓦と合わせて分析を進める。近年、注目される李朝系瓦については、今回も朝鮮半島製と言えるものは確認できなかった。加藤家の本城・支城の関係を踏まえ、朝鮮半島の状況も含めて今後検討する必要がある。桐紋軒丸瓦は、範は少なくとも4種類以上ある。同範関係が指摘される名護屋城跡の例と対比することで、生産・流通を分析していくかねばならない。



288



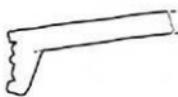
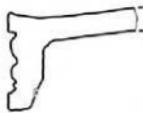
289



290



291

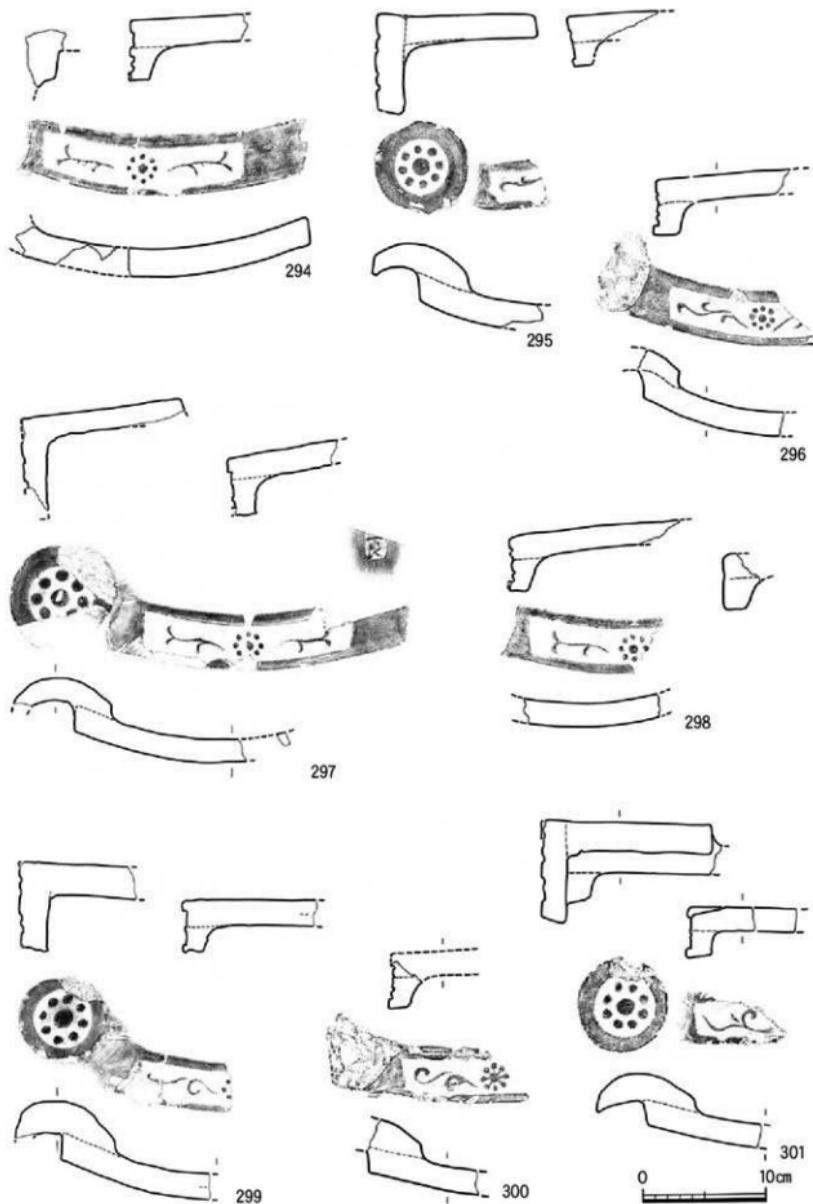


292

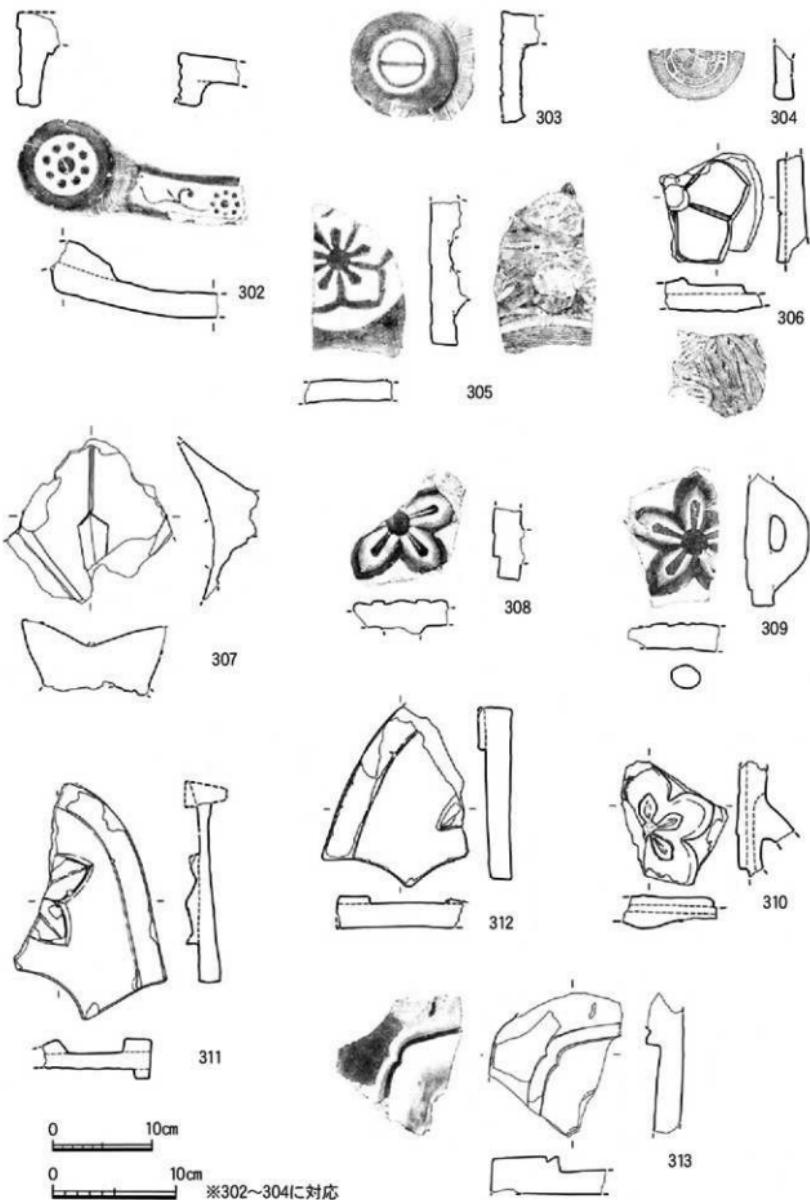


293

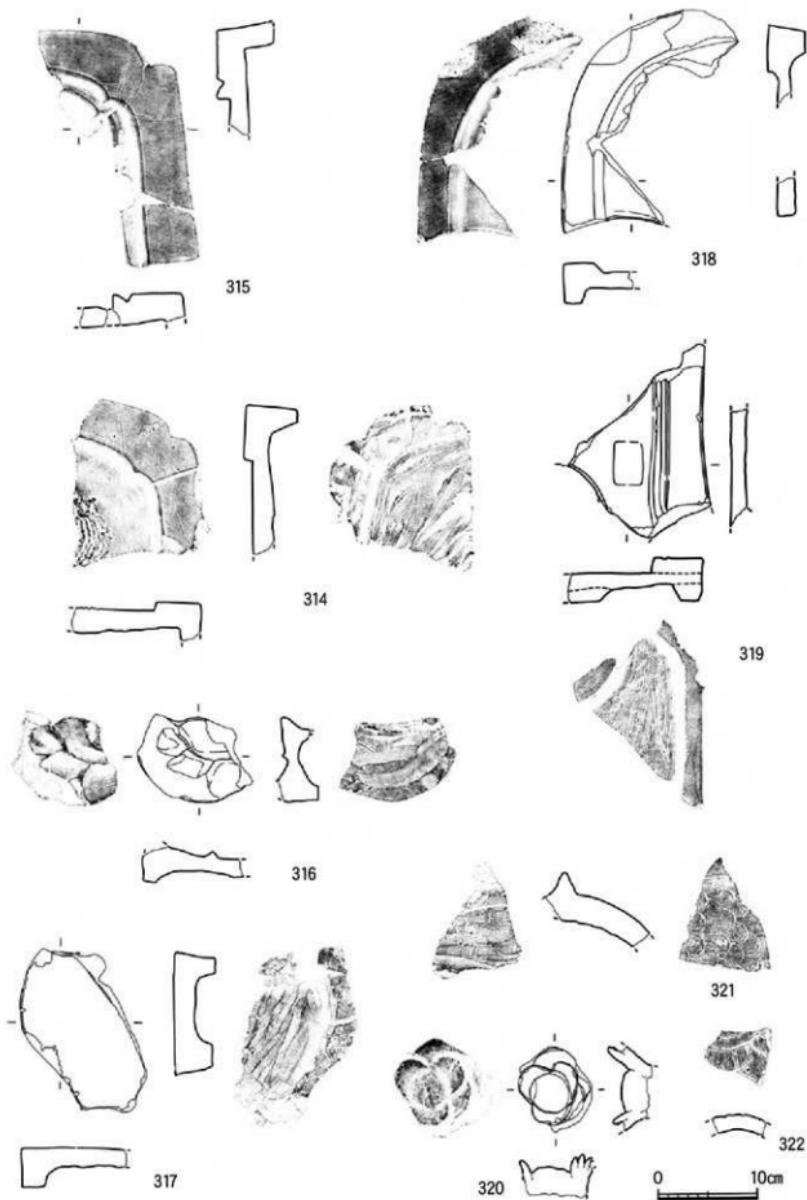
第138図 軒目板(棟)瓦実測図1 (1/4)



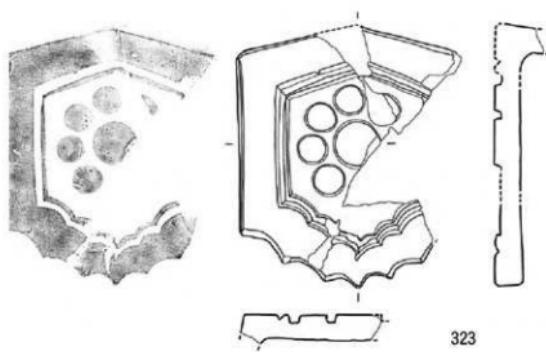
第139図 軒目板(棟)瓦実測図2 (1/4)



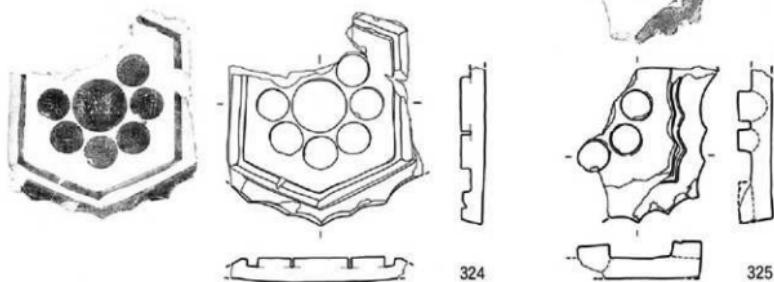
第140図 軒目板（棟）瓦実測図3・鬼瓦実測図



第141図 鬼瓦他実測図 (1/5)

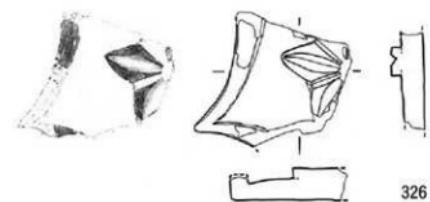


323

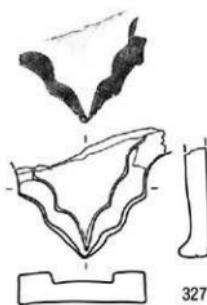


324

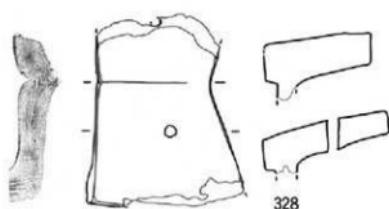
325



326



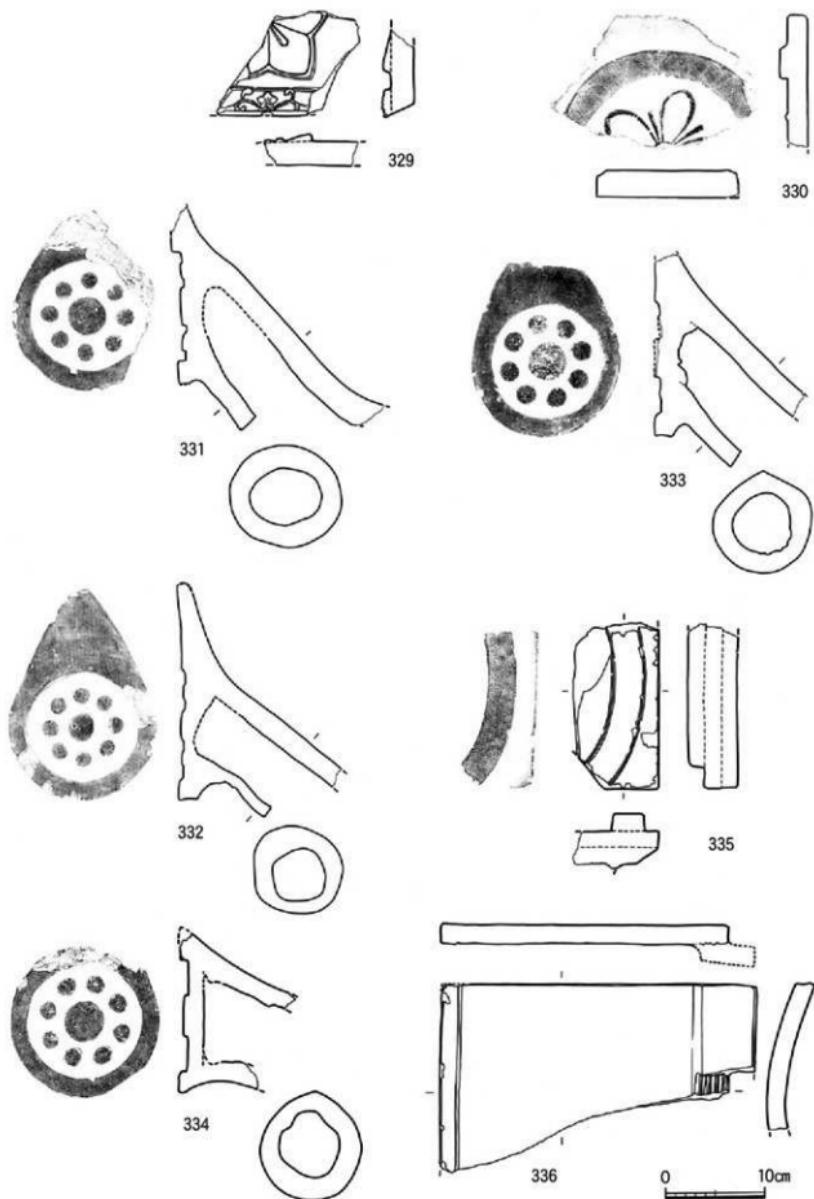
327



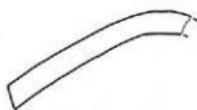
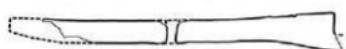
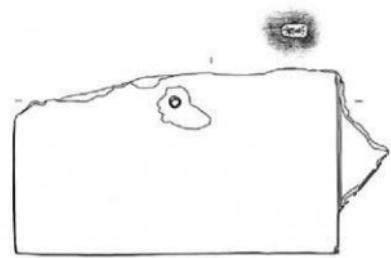
328

0 10cm

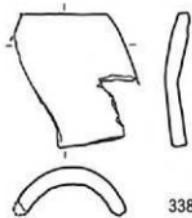
第142図 隅木蓋瓦実測図 (1/5)



第143図 道具瓦実測図1 (1/5)



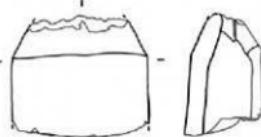
337



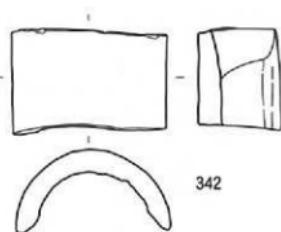
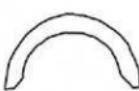
338



339



340



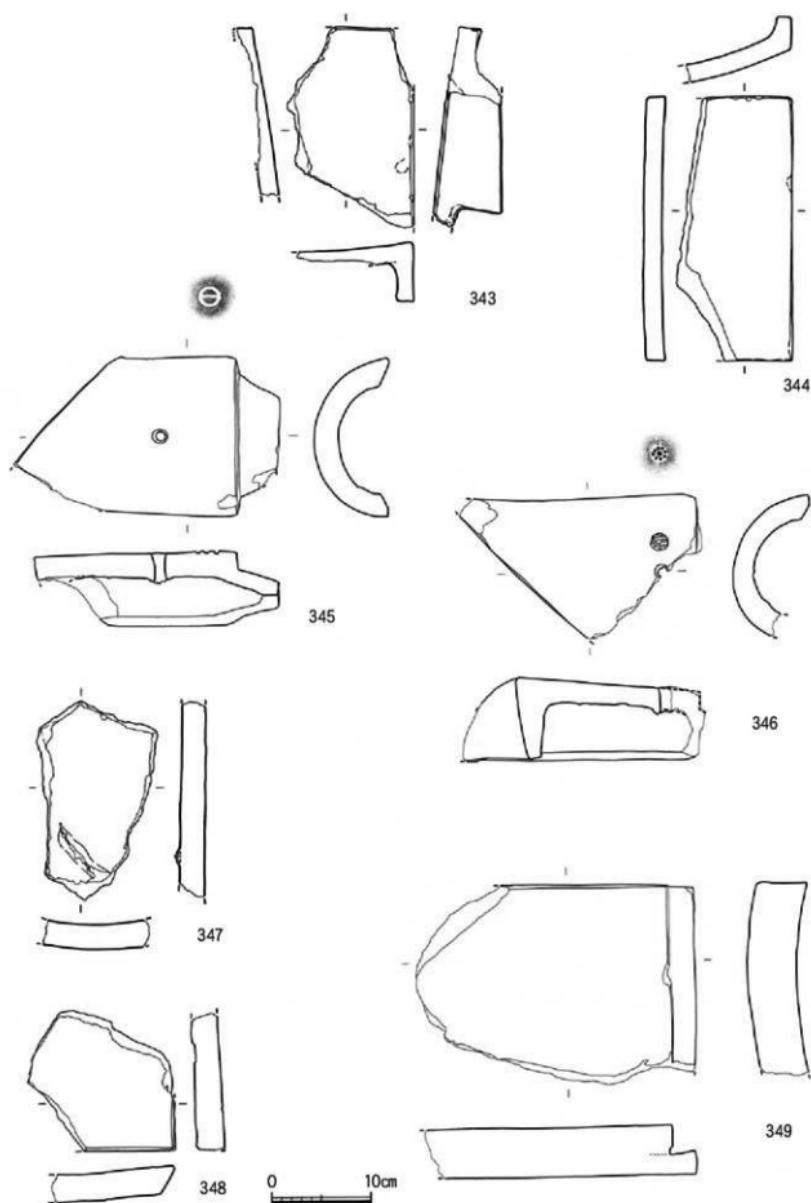
342



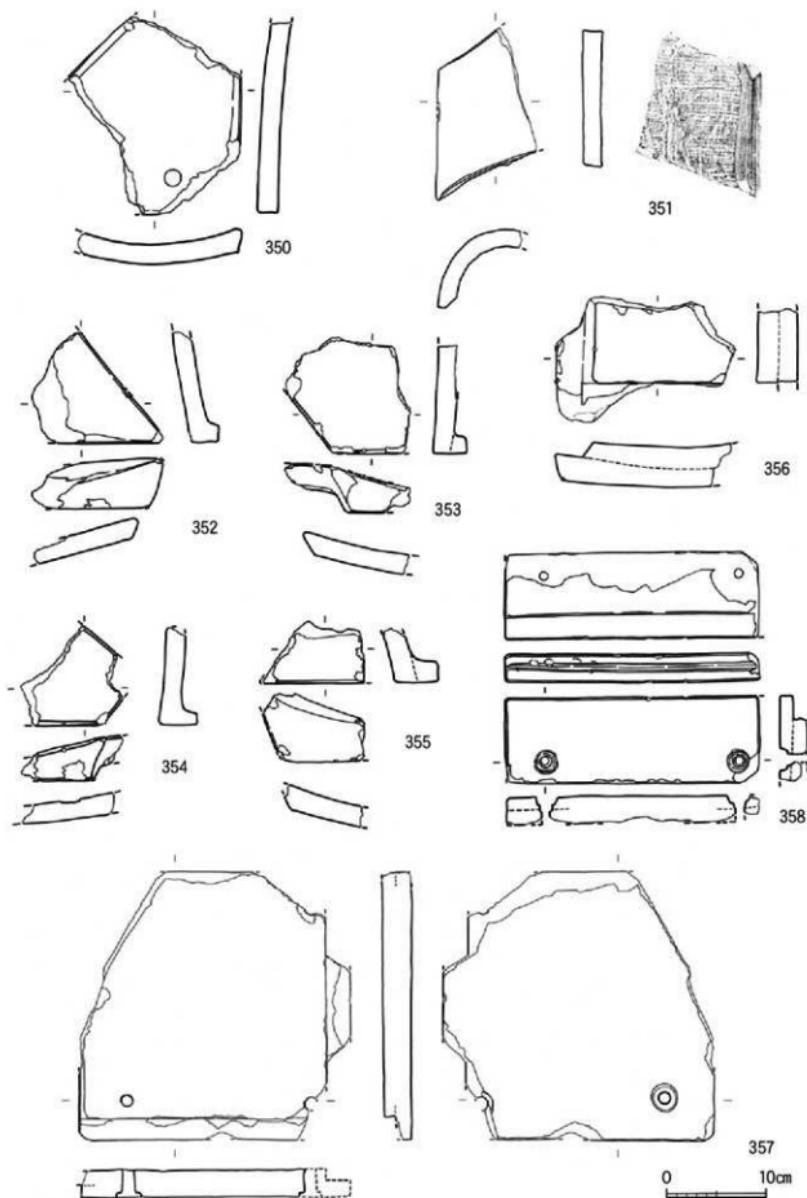
341

10cm

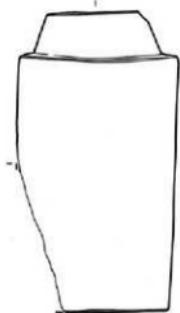
第144図 道具瓦実測図2 (1/5)



第145図 道具瓦実測図3 (1/5)



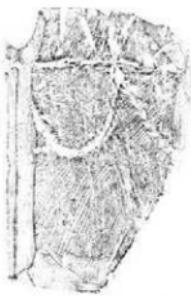
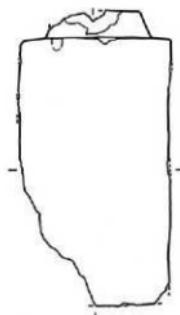
第146図 道具瓦実測図4 (1/5)



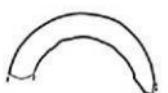
359



360

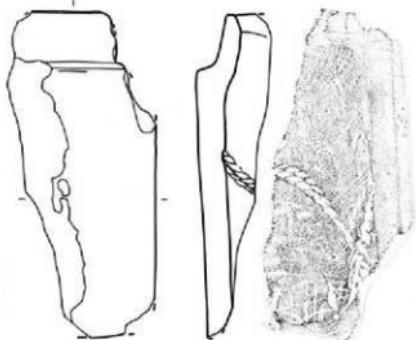


361

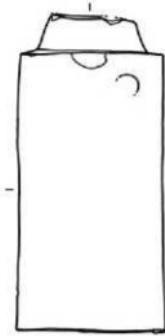


0 10cm

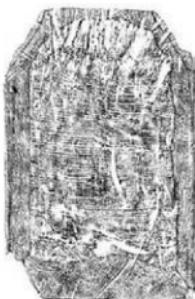
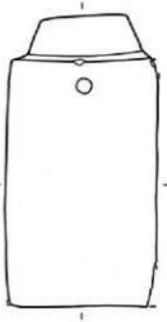
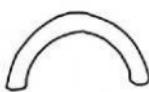
第147図 丸瓦実測図1 (1/5)



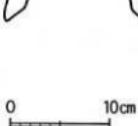
362



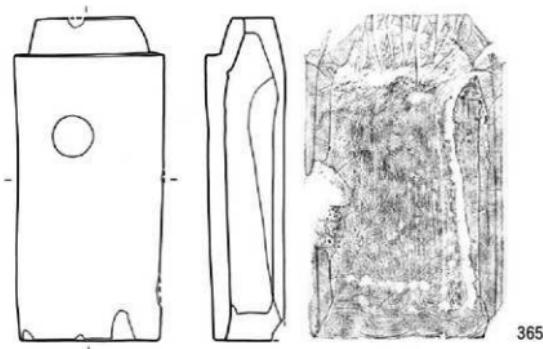
363



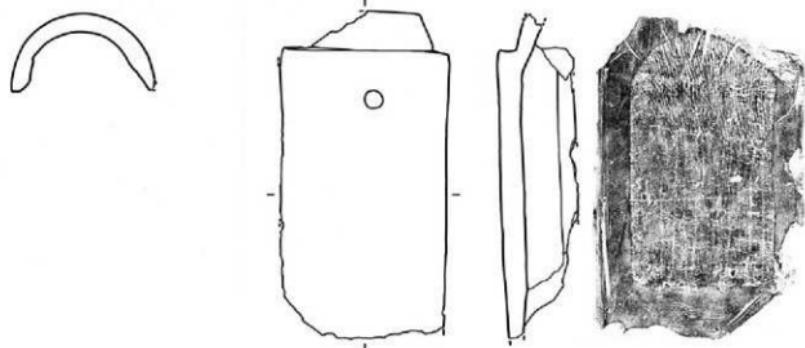
364



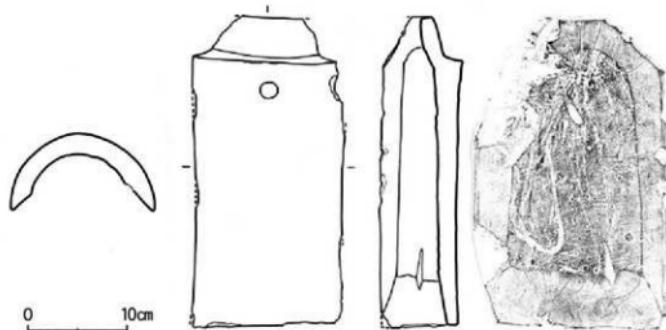
第148図 丸瓦実測図2 (1/5)



365



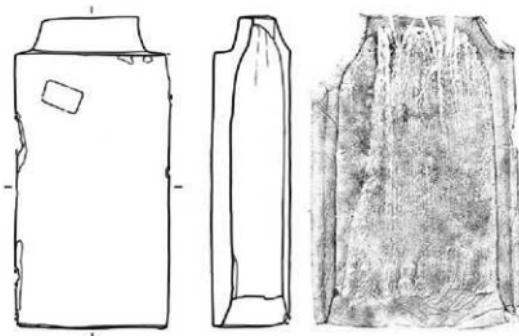
366



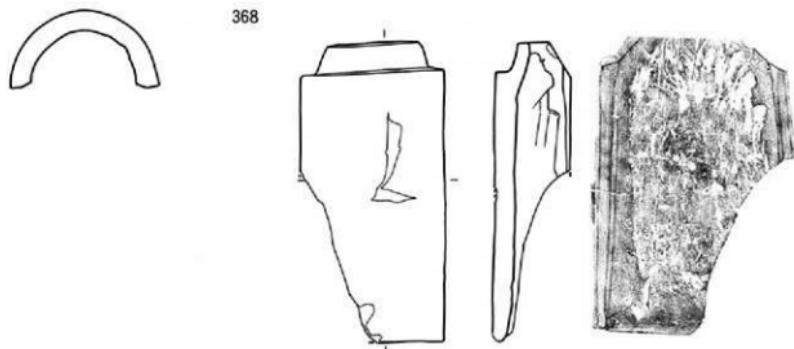
367

0 10cm

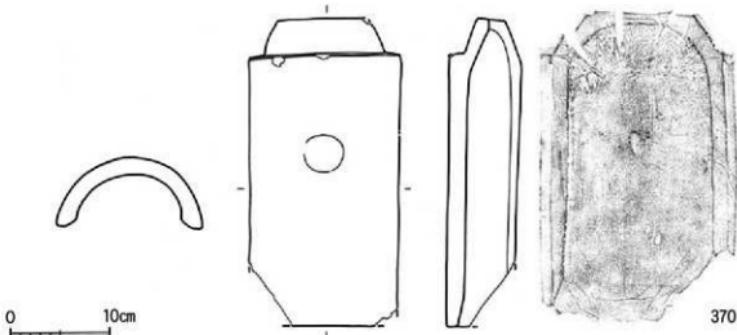
第149図 丸瓦実測図 3 (1 / 5)



368



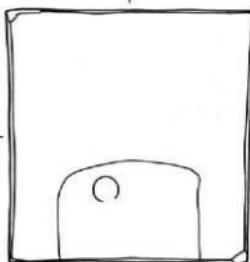
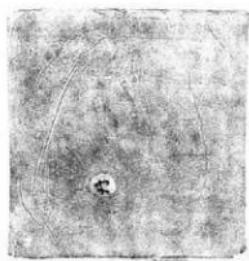
369



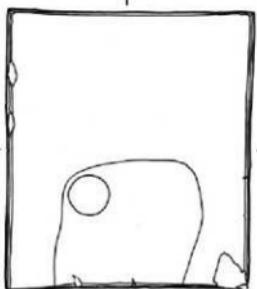
370

第150図 丸瓦実測図 4 (1 / 5)

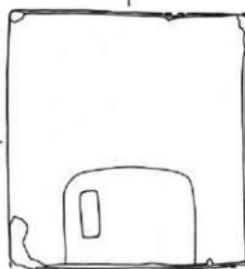
0 10cm



371



372

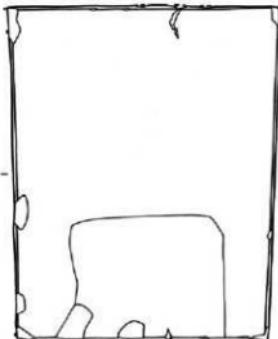


0 10cm

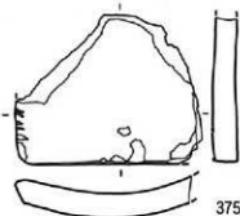


373

第151図 平瓦実測図 (1/5)



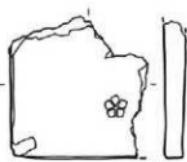
374



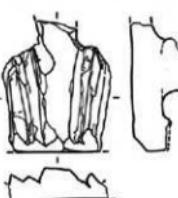
375



377



378



379



第152図 平瓦他実測図 (1/5)

第8表 瓦観察表

軒丸瓦

遺物・実測番号	種類	出土地点	調整	瓦当色調	胎土	焼成	備考
	香号	文様	香号	文様	香号	色	
1. #21	三巴文 L7A	Dトレンチ	横ナデ・ナデ	コビキ痕・布目痕・網み物痕	灰(N6')	赤褐色	不良
2. #22	三巴文 L7A	G10-80・I層	横ナデ・ナデ		灰(N5')	細かな砂粒	良好
3. #21	三巴文 L8A	G10-80・I層	横ナデ・ナデ		灰(N4')	全体的に緻密	良好
4. #20	三巴文 L8A	I.トレンチ	ナデ	コビキ B・布目痕	灰白(5Y7/1)	2mm以下の砂粒	良好
5. S59	三巴文 L9A	A-4	横ナデ・工具ナデ		灰白(10Y6/1)	2mm以下の砂粒	良好
6. S58	三巴文 L9B	A-4	横ナデ・工具ナデ		灰白(75Y6/1)	細かな砂粒	良好
7. S75	三巴文 L10A	A-5	横ナデ・工具ナデ	布目痕	灰(10Y6/1)	3mm以下の砂粒	良好
8. S76	三巴文 L10A	石川工事	ナデ	コビキ B・布目痕	灰(N6')	2mm以下の砂粒	良好
9. #5	三巴文 L10A	G11-79・I層	横ナデ・ナデ		灰(N4')	1~3mm大砂粒	良好
10. S71	三巴文 L10A	五所橋下2T・2層	横ナデ・工具ナデ		灰(75Y6/1)	7mm以下の小石	良好
11. #2	三巴文 L10B	G11-80・I層	横ナデ・ナデ・鉄		灰(N5')	微細な砂粒	良好
12. S73	三巴文 L10B	A-5	横ナデ・ナデ		灰(5Y6/1)	1mm以下の砂粒	不良
13. S72	三巴文 L10B	F95-79・2層	ナデ	コビキ B・横ナデ	灰(N6')	1mm以下の砂粒	良好
14. S74	三巴文 L10C	I.事務室Eトレンチ	指頭痕		灰(N5')	4mm以下の砂粒	良好
15. #4	三巴文 L10C	G11-81・I層	中央に指頭痕		灰(N5')	黒色砂粒	良好
16. #3	三巴文 L10C	6所橋下2T・2層	中央に指頭痕	横ナデ	灰(N6')	細かな砂粒	普通
17. S63	三巴文 L11A	A-4	横ナデ・ナデ		灰黄(25Y7/2)	1mm以下の砂粒	良好
18. #15	三巴文 L11A	I.トレンチ	ナデ・横ナデ		灰(N5')	全体的に緻密	良好
19. S67	三巴文 L11A	A-5	工具ナデ・ナデ	コビキ A・工具痕	灰(75Y5/1)	2mm以下の砂粒	良好
20. #26	三巴文 L11B	G10-81・I層	横ナデ・ナデ		灰(75Y5/1)	全体的に緻密	良好
21. S68	三巴文 L11B	G10-80・I層	ナデ	工具ナデ・ナデ	灰(75Y5/1)	3mm以下の砂粒	良好
22. #13	三巴文 L12A	G10-80・10層	工具ナデ後ナデ		灰(N4')	黒色砂粒・醜い	普通
23. S69	三巴文 L12B	Mトレンチ	ナデ	コビキ A・呂純痕・棒状直痕	灰(5Y6/1)	2mm以下の砂粒	良好
24. #25	三巴文 L12B	G10-80・I層	ナデ		灰(75Y6/1)	砂粒を含む	良好
25. S61	三巴文 L12B	B-6	横ナデ・ナデ		灰(5Y7/1)	2mm以下の砂粒	良好
26. #12	三巴文 L12C	Jトレンチ	横ナデ・ナデ	コビキ B・布目痕・呂純痕・T.工具ナデ	灰(N6')	微細~1mmの砂粒を含む	普通
27. S57	三巴文 L12C	F100-80	横ナデ・工具ナデ		灰(5Y6/1)	4mmの大砂粒あり	良好
28. #29	三巴文 L13A	Dトレンチ	ナデ・横ナデ	コビキ A	灰(N4')	黒色砂粒	良好
29. #1	三巴文 L13A	B-5	横ナデ・ナデ	コビキ B・布目痕	灰(N4')	微細な砂粒・黒色砂粒	良好
30. #10	三巴文 L17A	Mトレンチ	横ナデ・ナデ	コビキ B・粗い編み物痕	灰(N5')	微細な砂粒	良好
31. S60	三巴文 L17A	B-6	ナデ・横ナデ		灰(5Y6/1)	2mm以下の砂粒	良好
32. S62	三巴文 L17A	G11-78・I層	横ナデ・ナデ		灰(75Y6/1)	1mm以下の砂粒	良好
33. #16	三巴文 L18A	F95-81・I層	横ナデ・ナデ		灰(N4')	微細な砂粒	普通
34. #34	三巴文 L24A	Mトレンチ	横ナデ・ナデ	コビキ A・布目痕・粗い編み物痕	灰(N4')	微細な砂粒	良好
35. #28	三巴文 L24A	G10-80・I層	ナデ・横ナデ	コビキ A・布目痕・呂純痕	灰(N4')	黒色砂粒・醜い	良好
36. S64	三巴文 L24B	A-2	横ナデ・ナデ		灰(75Y5/1)	3mm以下の砂粒	良好
37. #17	三巴文 R13A	Hトレンチ	ナデ・横ナデ		暗灰(N3')	角閃石を立つ	良好
38. #400	三巴文 R13A	G10-80・I層	工具ナデ・ナデ		暗灰(N3')	角閃石を立つ	普通
39. #19	三巴文 R14A	G9-78・79・70	横ナデ・ナデ		暗灰(N4')	角閃石を立つ	普通
40. #20	三巴文 R19A	Jトレンチ	ナデ・横ナデ		暗灰(N3')	赤褐色色粒	普通
41. #24	三巴文 R19A	I3トレンチ	ナデ		暗灰(N4')	黒色砂粒と目立つ	普通
42. #403	三巴文 R19A	G10-81・10層	ナデ		暗灰(N3')	1~2mmの大砂粒	良好
43. #402	三巴文 R19A	F88-82・2層	ナデ		暗灰(N3')	黒色砂粒	普通
44. #14	三巴文 R21A	F91-82・2層	横ナデ・ナデ		暗灰(N3')	砂粒を含む	良好
45. #404	三巴文 R21A	F91-82・1層	ナデ		暗灰(N3')	1~2mmの大砂粒	良好
46. #405	三巴文 R21A	F91-82・1層	ナデ		暗灰(N3')	2~5mmの大砂粒	良好
47. #18	三巴文 の他の6所橋下2T・2層	ナデ・横ナデ			暗灰(N4')	角閃石・雲母	良好
48. #408	三巴文 の他のF100-82・I層	ナデ			暗灰(N5Y4/1)	砂粒が目立たない	不良
49. #410	三巴文 の他のF100-82・I層	ナデ			灰(N4')	雲母多い	不良
50. S65	三巴文 の他のG10-81・10層	指頭痕直痕後ナデ			黄灰(25Y6/1)	2mm以下の砂粒	不良
51. #406	三巴文 の他のG8-80・10層	ナデ			灰(N4')	暗褐色・黒色砂粒	良好
52. #407	三巴文 の他のG11-80・I層	ナデ			灰(N5')	角閃石を立つ	良好
53. #409	三巴文 の他の石川工事直痕	ナデ			暗灰(25Y4/2)	黒色砂粒・赤褐色砂粒	不良
54. #111	三巴文 の他のCトレンチ	ナデ			灰(N5')	角閃石を立つ	良好
55. #8	三巴文 菊丸 F91-82・I層	ナデ・横ナデ			黄灰(25Y4/1)	微細な砂粒	不良
56. #7	三巴文 菊丸 F96-81・I層	ナデ・横ナデ			灰(N6')	1~2mmの大砂粒	不良
57. #6	三巴文 菊丸 F100-81・I層	ナデ・横ナデ			暗灰(10YR4/1)	赤褐色色・角閃石	不良
58. #30	三巴文 菊丸 G9-78・79・70	ナデ・横ナデ			灰(N4')	角閃石	普通
59. S66	三巴文 菊丸 F98-82・1層	ナデ・横ナデ	コビキ A・布目痕・横ナデ		灰(N5')	角閃石を立つ	良好
60. #31	三巴文 菊丸 Kトレンチ	ナデ・横ナデ			黄灰(25Y4/1)	微細な砂粒	良好
61. #27	三巴文 菊丸 石川工事・南	ナデ			灰(N6')	1~2mmの大砂粒	不良
62. #401	三巴文 菊丸 F88-82・2層	ケズリ後ナデ			暗灰(N3')	間隙性があり醜い	良好
63. #54	日足文 G10-81・I層	ナデ			コビキ A・横ナデ	黒色砂粒	普通
64. #57	日足文 G10-81・10層	横ナデ・ナデ			灰(N4')	全体的に緻密	普通
65. #53	日足文 Dトレンチ	横ナデ・ナデ			灰(N5')	黒色・白色砂粒	良好
66. #56	日足文 Cトレンチ	横ナデ・ナデ			灰(N5')	砂粒を含む	良好
67. #52	日足文 Kトレンチ	ナデ			灰黄(25Y7/2)	角閃石	不良
68. #55	日足文 G9-78・79・70	横ナデ・ナデ			暗灰(10YR3/1)	黒色色粒	良好
69. #43	日足文 G10-80・10層	ナデ			暗灰(N3')	黒色砂粒	良好
70. #412	日足文 G10-80・1層	ナデ・横ナデ	コビキ B ? ナデ		暗灰(N3')	黒色砂粒	普通
71. #414	日足文 G9-80・1層	ナデ			暗灰(N3')	1mmの大砂粒	良好
72. #459	樹木 五・三樹 F94-79・I層	横ナデ			暗灰(N4')	1cmの大・小の混合	普通
73. #424	樹木 五・三樹 Mトレンチ	ナデ			暗灰(N3')	黒色砂粒	良好
74. #425	樹木 五・三樹 G10-81・I層	ナデ			暗灰(N3')	間隙性があり	普通
75. #651	樹木 五・三樹 F95-81・I層	ナデ(工具痕あり)			暗灰(N3')	砂粒含む	普通
76. #426	樹木 五・三樹 石川工事 A-3	ナデ			黑褐(25Y3/2)	赤褐色色粒	不良
77. #423	樹木 五・三樹 G9-80・10層	ナデ・横ナデ			灰(N4')	1.5cmの大・小の有	不良

遺物	実測 番号	種類 分類	出土地点	調査 瓦当表面	瓦当部下面	瓦当色調	胎土	焼成	備考	
78	#51	陶文	五三編 (朝丸)	F88-82・3層	ナデ・横ナデ	コピキ B・横ナデ・ナデ	灰(N4/)	黒色砂粒	普通	
79	#60	陶文	五三編 (朝丸)	F96-82・1層	ナデ・横ナデ	コピキ B・横ナデ	暗灰(N3/)	黒色砂粒	普通	
80	#58	陶文	四三編 トド立合	E-レジナ下槽	ナデ・横ナデ	灰(N4/)	黒色砂粒	良好		
81	#42	陶文	四三編 トド立合	G8-81・1層	ナデ・横ナデ	灰(SV5/1)	1~2mm大砂粒	不良		
82	#42	陶文	四三編 トド立合	G8-81・1層	ナデ・横ナデ	灰(SV5/1)	黒色砂粒	良好		
83	#417	陶文	その他の Jトレンチ	ナデ・横ナデ	ナデ・横ナデ	黒(N2/)	1mm大の砂粒	不良		
84	#421	陶文	その他の Jトレンチ	ナデ・横ナデ	ナデ・横ナデ	黒(725YR2/1)	赤褐色砂粒	不良		
85	#416	陶文	その他の Jトレンチ	ナデ・横ナデ	コピキ A ? ケズリ後ナデ	暗灰(N3/)	開閉性あり	不良		
86	#419	陶文	その他の Jトレンチ	ナデ	灰(25Y4/1)	黒色砂粒	良好			
87	#418	陶文	その他の Jトレンチ	ナデ	灰(N4/)	黒色砂粒	普通			
88	#43	蛇の目文	Gトレンチ	ナデ・横ナデ	灰(N4/)	全体的に緻密	普通	全体的にキラコ?		
89	#38	粘液文	2段	G9-79	ナデ・横ナデ	灰(N4/)	全体的に緻密	普通		
90	#42	粘液文	2段	Jトレンチ	強いてい・ナデ	灰(N5/)	黒色砂粒	普通	瓦当面中央に指痕	
91	#41	粘液文	2段	Kトレンチ	ナデ	灰(N5/)	黒色砂粒	良好		
92	#40	粘液文	2段	Dトレンチ	ナデ・横ナデ	灰(N5/)	細かな砂粒・粗い	良好	瓦当面に細かな砂粒	
93	#39	粘液文	2段	石垣工事 F95-80	ナデ・横ナデ	暗灰(N4/)	全体的に緻密	良好		
94	#44	粘液文	2段	石垣工事 F95-80	ナデ・横ナデ	灰(N5/)	細かな白色砂粒	良好	瓦当面中央に指痕	
95	#45	粘液文	3段	G10-80・1層	強いてい・ナデ	灰(N6/)	全体的に緻密	良好		
96	#52	粘液文	3段	石垣工事 A-5	ナデ・横ナデ	コピキ A・布目痕・横ナデ	灰(N5/)-灰(N5/)	1mm以下砂粒	良好	瓦当面に細かな砂粒
97	#36	粘液文	3段	G9-78・79・70	ナデ・横ナデ	コピキ B・布目痕・横ナデ	灰(N5/)	黒色砂粒・粗い	良好	瓦当面に細かな砂粒
98	#49	粘液文	3段	Dトレンチ	ナデ・横ナデ	布目痕・横ナデ	灰(N5/)	砂粒多く無い	良好	瓦当面に細かな砂粒
99	#35	粘液文	3段	G10-78	ナデ・横ナデ	灰(N5/)	砂粒を含む	良好		
100	#50	粘液文	3段	Dトレンチ	強いてい・ナデ	灰(N4/)	1mm大砂粒	不良	瓦当面に細かな砂粒	
101	#46	粘液文	3段	G10-79・1層	ナデ・横ナデ	灰(N5/)	黒色砂粒	良好	瓦当面中央に指痕	
102	#48	粘液文	3段	G11-78・1層	ナデ・横ナデ	灰(N5/)	砂粒を含む	良好		
103	#37	粘液文	3段	G11-81・1・1層	ナデ・横ナデ	コピキ B・布・工具痕・横ナデ	灰(白色) (75Y1/1)	砂粒を含む	普通	釘穴あり
104	#34	粘液文	3段	石垣工事 東	工具痕	コピキ A・(布目痕)・工具痕	灰(N4/)	黒色砂粒	良好	
105	#47	粘液文	4段	Dトレンチ	ナデ・横ナデ	コピキ A・(布目痕)・工具に よう強いていナデ	灰(N4/)	砂粒多く粗い	不良	
106	#33	粘液文	4段	石垣工事	ナデ・横ナデ	灰(N4/)	細かな白色砂粒	良好	瓦当面に細かな砂粒	
107	S55	粘液文	4段	五三編下2・2層	T工具・ナデ	灰(N4/)	砂粒3mm以下	良好		
108	#20	九曜文	5-32	G9-78・79・70	横ナデ・ナデ	灰(SV5/1)	砂粒多く粗い	良好	瓦当面に細かな砂粒	
109	#451	九曜文	5-32	石垣工事	ナデ	コピキ A・布目痕・吊締痕	暗灰(2)	白色砂粒	普通	瓦当面に細かな砂粒
110	#460	九曜文	5-32	石垣工事 A-5	ナデ・貼付後ナデ	コピキ B・布目痕	灰(SV5/1)	白色砂粒	普通	瓦当面に細かな砂粒
111	#193	九曜文	18	石垣工事 南	横ナデ・ナデ	灰(G5Y5/1)	1~2mmの大砂粒	良好	瓦当面にキラコ	
112	#202	九曜文	18	G10-33	Gトレンチ	横ナデ・ナデ	灰(4)	瓦当面・瓦凸面に	良好	
113	A52	九曜文	18	G11-81・1・1層	ナデ・貼付後ナデ	コピキ B・布目痕	暗灰黃 (25Y5/3)	砂粒立たない	不良	
114	#209	九曜文	18	F95-79・2層	横ナデ・ナデ	布目痕・横ナデ・ナデ	灰(N4/)		瓦当面・瓦凸面に	
115	#182	九曜文	18	G10-33	石垣工事 南	横ナデ・ナデ	布目痕・粗い編み物痕・吊締痕・横ナデ	灰(N4/)	砂粒多く無い	良好
116	#207	九曜文	18	105-392 ~23	Jトレンチ	横ナデ・ナデ	布目痕・吊締痕・粘土板合せ せじ?・ナデ	灰(N4/)	砂粒多く粗い	良好
117	#462	九曜文	10-54-2	石垣工事 B-3	ナデ	コピキ B・布目痕	灰(N5/)	砂粒多く立つ	良好	釘穴あり。瓦当面に 長い丸穴。釘穴六穴。
118	#446	九曜文	10-54-2	石垣工事 B-4	ナデ	灰(N5/)	黑色砂粒・粗い	普通	良好	釘穴あり。瓦当面に わざかにキラコ
119	S78	九曜文	10-54-2	G8-81・10層	横ナデ・ナデ	布目痕・繩痕・粗い編み物痕	灰(75Y5/1)	砂粒1mm以下	良好	釘穴あり。長い 軒丸穴。
120	#453	九曜文	10-54-2	Dトレンチ	ナデ	コピキ B ?	暗灰(2)	黑色砂粒	良好	瓦当面にキラコ
121	#445	九曜文	10-54-2	石垣工事	ナデ	コピキ B ? - 布目痕・ナデ	灰(N2/)	黑色砂粒	良好	瓦当面にキラコ
122	#448	九曜文	10-54-2	G8-81・1層	ナデ・横ナデ	ナデ	灰(N2/)	黑色砂粒	良好	瓦当面にキラコ
123	#458	九曜文	10-54-2	石垣工事 F95-79	ナデ	灰黃(25Y6-2)	赤褐色砂粒	不良		
124	#205	九曜文	11-52	石垣工事 南	ナデ	暗灰(2)	砂粒多く粗い	良好	瓦当面にキラコ	
125	#447	九曜文	11-52	Gトレンチ	ナデ	暗灰(2)	黑色砂粒・粗い	良好	瓦当面に瓦状の 压痕。キラコ	
126	#184	九曜文	11-52-3	G8-81	横ナデ・ナデ	コピキ B・布目痕・粗い編み 物痕・所々にケズリ痕	暗灰(N3/)	角閃石・石英	良好	瓦当面から瓦凸面 に細かな斜行有
127	#200	九曜文	11-52-3	Gトレンチ	横ナデ・ナデ	灰(N4/)	全体的に緻密	良好	瓦当面に瓦キラコ	
128	#466	九曜文	11-52-3	G10-78・1層	ナデ・横ナデ	灰(N4/)	1~2mm大砂粒	良好	瓦当面にキラコ	
129	#474	九曜文	11-52-3	石垣工事 A-2	ナデ	布目痕・ケズリ・ナデ	灰(5/)	1~2mmの大砂粒	普通	釘穴あり
130	#470	九曜文	11-49	Hトレンチ	ナデ	暗青灰(2)	1~5mmの大砂粒	良好	瓦当面にキラコ	
131	#179	九曜文	11-42	Dトレンチ	ナデ・横ナデ	コピキ B・布目痕・粗い編み 物痕・横ナデ	灰(N6/)-灰(N5/)	黒色・白色砂粒多く 粗い	良好	釘穴あり。瓦当面に 瓦状の压痕。キラコ
132	#457	九曜文	11-42	石垣工事 A-6	ナデ	布目痕・ナデ	灰(SV4/1)	白色・黑色砂粒立つ	良好	
133	#455	九曜文	11-42	石垣工事 A-4	ナデ	灰(N4/)	白色・黑色砂粒多い	良好	瓦当面に細かな斜行有	
134	#465	九曜文	11-42	G8-81・1層	ナデ	灰(N5/)	黑色砂粒多い	良好		
135	#473	九曜文	11-42	G8-81・10層	ナデ	灰(N4/)	1mmの大砂粒	良好		
136	#180	九曜文	11-42-1	石垣工事 南	横ナデ・ナデ	コピキ B・布目痕・粗い編 み物痕・横ナデ	灰(N4/)-灰(N3/)	砂粒を含む	良好	
137	#177	九曜文	11-42-1	石垣工事 南	横ナデ・ナデ	コピキ B・布目痕・ナデ	灰(N4/)	角閃石・石英	良好	
138	#469	九曜文	11-42-1	石垣工事	ナデ・工具痕	灰(5Y5/1)	黑色砂粒	普通		
139	#468	九曜文	11-42-1	石垣工事	ナデ・貼付後ナデ	白色・黑色砂粒	普通			
140	#464	九曜文	11-42-2	石垣工事	ナデ	灰(N5/)	黑色砂粒	良好	周縁に板状压痕	
142	#472	九曜文	11-42-2	石垣工事 A-6	ナデ	黑色砂粒	不良			
143	#208	九曜文	11-42-2	石垣工事 南	横ナデ・ナデ	横ナデ・布目痕・吊締痕	灰(5Y7/1)	細かな砂粒多い	良好	瓦当面・瓦凸面 に細かな斜行有
144	#461	九曜文	11-42-5	Tトレンチ	ナデ	コピキ B・布目痕・ナデ	灰(N4/)	黑色砂粒・開閉性	良好	瓦当面に瓦キラコ
145	#186	九曜文	11-42-5	G10-80・1・1層	横ナデ・ナデ	横ナデ・ナデ	1~3mmの大砂粒	良好	瓦当面にキラコ	

遺物	実測 番号	種類 番号	文様 分類	出土地点	調整	瓦当色調	胎土	焼成	備考
146	*19	九曜文	II-14-2	G1080 - I - 層 26	瓦当表面 横ナデ・ナデ	丸瓦部門面 コビキ B ? - 布目瓶	暗灰(N3/?)	黒色砂粒	良好
147	*20	九曜文	II-14-2	石垣工事 南	横ナデ・ナデ		黒 N2 / (?)	砂粒を多く混い	瓦当面にうっすらキラコ
148	*19	九曜文	II-14-222	石垣工事 南	横ナデ・ナデ	布目瓶・粗い編み物質・漆喰付着	灰(N4/)	黒色砂粒	良好
149	*185	九曜文	II-14-222	石垣工事 南	強いナデ・ナデ・横ナデ			間隙性あり	平瓦凸面にヘラ焼き
150	*187	九曜文	II-14-222	石垣工事 東	横ナデ・ナデ			1~2mm大砂粒	
151	459	九曜文	II-14-223	石垣工事 A-3	ナデ	布目瓶・ナデ	暗灰(N3/) (SPB4/1)	黒色砂粒	良好
152	*197	九曜文	II-14-224	G トレンチ	強いナデ・ナデ・横ナデ	ナデ・横ナデ	暗灰(N3/)	砂粒	良好
153	*191	九曜文	II-14-224	G11-78, 1 層	ナデ・横ナデ			長石・角閃石	不良
154	450	九曜文	II-14-223	石垣工事 B-5	ナデ	布目瓶・ナデ	暗灰(N3/)	3~5mm大の砂粒	良好
155	449	九曜文	II-14-223	石垣工事 B-5	ナデ		暗灰(N3/)	白色・黒色砂粒	普通
156	*188	九曜文	II-14-223	G9-78	工具ナデ・横ナデ			1~2mm大砂粒	不良
157	*198	九曜文	II-15-422	G10-81, I 層	ナデ		灰(SY5/1)	白色砂粒目立つ	良好
158	S77	九曜文	II-15-422	石垣工事 東	横ナデ・ナデ	コビキ B・吊締痕・粗い編み目質・布目瓶・ナデ・横ナデ	灰(7SY6/1)	1mm以下砂粒	釘穴あり
159	454	九曜文	II-15-422	五階槽下2T, I 層	ナデ・貼付後ナデ		灰(N4/)	間隙性	良好
160	*160	九曜文	II-15-422	G8-81, 1 層	横ナデ・ナデ	コビキ A・布目瓶・压痕・ナデ	暗灰(N3/)	砂粒多く混い	瓦当面・瓦当凸面にキラコ
161	*194	九曜文	II-15-422	石垣工事 A-6	横ナデ・ナデ		暗灰(N3/)	1~2mm大砂粒	瓦当面に荒筋多い
162	*195	九曜文	II-15-423	石垣工事 A-6	横ナデ・ナデ	コビキ B・布目瓶・ナデ・横ナデ	暗灰(N3/)	角閃石	良好
163	471	九曜文	II-15-423	石垣工事 A-4	ナデ・貼付後ナデ・工具瓶	コビキ B・布目瓶		1~3mm大の砂粒・間隙性あり	瓦当面・瓦当の未調査部分にキラコ
164	*164	九曜文	II-14-3-2	G9-81, I 層	ナデ・横ナデ		暗灰(N4/)	全体的に緻密	良好
165	*205	九曜文	II-14-3-2	石垣工事 東	横ナデ・ナデ	布目瓶・粗い編み物質・ナデ・横ナデ	暗灰(N3/)	砂粒・石英	瓦当面に荒筋多い
166	456	九曜文	II-14-72	石垣工事 B-5	ナデ・貼付後ナデ・工具瓶		灰(SY6/1)		
167	475	九曜文	その他	石垣工事	ナデ	コビキ B・顕面面・漆喰	灰(N4/)	1~2mm大の砂粒	良好
168	*189	九曜文	その他	G11-80, 1 層	横ナデ・ナデ		灰(10Y6/1)	砂粒多く粗い	良好
								菊丸か	

軒平瓦

遺物	実測 番号	種類 番号	文様 分類	出土地点	調整	瓦当色調	胎土	焼成	備考
169	*117	宝珠文	五階槽・I 層	横ナデ	凸型台压痕・ハケ状工具後ナデ	灰(N4/)	角閃石	普通	瓦面・平瓦部面に細かな砂付着
170	S15	桐文 A	G9-79 F - 1層	ナデ・横ナデ	コビキ A・凸型台压痕	灰(7SY5/1)	砂粒1mm以下	良好	
171	*90	桐文 A	C トレンチ	横ナデ	横ナデ・ナデ	灰(5Y6/1)	黑色砂粒多い	不良	
172	*122	桐文 C	D トレンチ	横ナデ	コビキ B・凸型台压痕・丁寧なナデ	灰(N4/)	全体的に緻密	普通	
173	*123	桐文 B	G8-81, I 層	横ナデ(消耗)	コビキ A・凸型台压痕・ナデ	浅黄(25Y7/3)	角閃石・石英	不良	全体的に氧化酸化しい
174	*121	桐文 C	石垣工事 東面	横ナデ	コビキ B・凸型台压痕・丁寧なナデ	灰(N4/)	赤褐色砂	良好	凸面に四型台压痕・弓状台压痕
175	*125	桐文 C	G11-80, I 層	横ナデ	コビキ B ? 丁寧なナデ・横ナデ・刻印	灰(N6/)	黑色砂粒・間隙性	良好	
176	*124	桐文 C	石垣工事 A-4	横ナデ	凸型台压痕・丁寧なナデ・横ナデ・刻印	灰(N5/)	黑色砂粒目立つ	良好	
177	494	二重文 A	K トレンチ	ナデ	凸型台压痕・軽い面取後ナデ	灰(10Y4/1)	黑色砂粒多い	良好	
178	493	二重文 A	I トレンチ	ナデ		灰(5Y5/1)	1mm以下細砂粒	不良	
179	*129	二重文 C	K トレンチ	ナデ		灰(N4/)	砂粒少・硬質	良好	
180	*128	二重文 C	G10-80, 10層	横ナデ	凸型台压痕・ナデ	灰(N4/)	砂粒少・脆い	不良	全体的に氧化酸化しい
181	*126	二重文 D	G11-80, 1 層	横ナデ		灰白(7SY7/1)	1~2mm大の砂粒	不良	凸面に四型台压痕・弓状台压痕
182	437	二重文 Aa	F95-79, 2層	横ナデ	ナデ	灰(NS/)	黑色砂粒	普通	
183	*119	二重文 Ab	G10-80, I 層	横ナデ	粗いナデ・細かな跡	灰(NS/)	全体的に緻密	良好	瓦面・平瓦部面に細かな砂付着
184	*120	二重文 Ab	G11-81, I 層	ケズリ後ナデ	凸型台压痕・工具ナデ	灰(NS/)	黑色砂粒	普通	
185	*111	二重文 Ad	石垣工事 A-6	横ナデ	凸型台压痕・横ナデ	灰(NS/)	1~2mm大砂粒	良好	
186	*112	二重文 Ad	D トレンチ	横ナデ	ケズリ後ナデ	灰(NS/)	黑色砂粒	良好	凸面にコビキ B前
187	498	二重文 Ba	F88-82, 3層	ナデ	コビキ B・凸型台压痕	灰(NS/)	赤褐色砂粒	普通	凸面にコビキ B前
188	501	二重文 Ba	F88-82, 3層	ナデ	コビキ B・凸型台压痕	灰(NS/)	黑色砂粒	良好	
189	*109	二重文 Bb	G9-80 下段, 1 層	丁寧なナデ	凸型台压痕・ナデ	灰(NS/)	1~2mm大砂粒	良好	
190	*110	二重文 Bb	石垣工事 A 表面	横ナデ	凸型台压痕・横ナデ	灰(NS/)	灰黒色砂粒	良好	
191	492	二重文 Bc	五階槽下2T, 2層	ナデ		灰黄(25Y7/2)	角閃石・石英	普通	
192	*108	二重文 C	石垣工事 B-4	横ナデ	丁寧なナデ・横ナデ	灰(NS/)	細砂粒多・脆い	良好	
193	*107	二重文 D	石垣工事 南	ケズリ後ナデ	コビキ A ?, 凸型台压痕・ナデ・横ナデ	灰(NS/)	砂粒を含む	良好	凸面に四型台压痕・細かな砂付着
194	*104	二重文 E	石垣工事 南	ナデ	コビキ A・凸型台压痕・丁寧なナデ	灰(NS/)	砂粒を含む	良好	凸面に四型台压痕・細かな砂付着
195	*105	立本文	G11-80, I - 層	横ナデ	コビキ A・凸型台压痕・工具ナデ	暗灰(N3/)	非常に緻密	良好	凸面に四型台压痕・細かな砂付着
196	*113	蓮花文 A	G11-80, I - 層	横ナデ	コビキ A ?, ナデ	灰(NS/)	白色・黒色砂粒	良好	
197	*118	蓮花文 B	C トレンチ	横ナデ	丁寧なナデ	灰(NS/)	角閃石	良好	瓦面と額の一部に細かな砂
198	436	鳥文 A	石垣工事 東	横ナデ	凸型台压痕・横ナデ・ナデ	灰黄(25Y6/2)	黒色・黒色砂粒	良好	
199	*127	鳥文 B	石垣工事 A-4	横ナデ	凸型台压痕・横ナデ	灰(NS/)	黑色・黒色砂粒	良好	
200	*114	従文 A	D トレンチ	横ナデ	凸型台压痕・工具ナデ	灰(NS/)	1~2mm大の砂粒	普通	

201	S16	兼文	B	G11-80・I層	ナデ・横ナデ	凸型台座痕・ナデ	灰(5Y6-1)	2mm以下砂粒・小石	
202	S80	兼文	C	石組工事	B-6	ナデ	凸型台座痕・粗ナデ	灰(N6)	小石・長石
203	496	半斎文		G10-80・10層	ナデ	凸型台座痕・ナデ	灰(N5)	黑色砂粒	
204	*105	その他の		G11-80・I層	横ナデ	ナデ	灰(N5)	黑色砂粒	
205	*106	その他の		Dトレンチ	横ナデ	凸型台座痕・ナデ(工具無あり)	灰(N6)	1mm大砂粒多い	
206	S13	その他の	A-5		ナデ・横ナデ	凸型台座痕・ナデ	灰(N5)	3mm以下砂粒	
207	*93	その他の	G石組工事	B-4	横ナデ	凸型台座痕・ナデ・横ナデ	灰(N5)	砂粒多く崩れ	
208	*89	その他の	Dトレンチ	横ナデ	ナデ	暗灰(N3)	黑色砂粒		
209	*107	その他の	石組工事	A-5	ケズリ・横ナデ	凸型台座痕・ケズリ・ナデ・細かな跡	灰(N4)	良好	
210	*88	その他の		G10-80・I層	横ナデ	灰(N5)	黑色砂粒	普通	
211	*92	その他の		F95-79・I層	ケズリ後横ナデ	丁寧なナデ・横ナデ	灰(N4)	微細砂粒	
212	495	その他の	石組工事	南	ナデ	黄灰(25Y5-1)	細粒・脆い		
213	*87	その他の	Jトレンチ		横ナデ	ナデ?・風化激しい	暗灰(N3)	黑色砂粒	
214	*491	その他の	Kトレンチ		ケズリ後横ナデ	凸型台座痕・ナデ	黄灰(25Y7-2)	良好	
215	*13	粘硬又A	Dトレンチ		横ナデ	凸型台座痕・ナデ	黄灰(25Y7-2)	細密な凹状質	
216	*13	粘硬又A	G10-81・I層		横ナデ	灰(N4)	細密な凹状質		
217	S12	粘硬又A	五脚槽下T2・B脚		ナデ	凸型台座痕・ナデ	灰(75Y5-1)	2mm以下砂粒	
218	*13	粘硬又A	石組工事	B-4	横ナデ	凸型台痕・工具ナデ・横ナデ	灰(N4)	砂粒多く粗い	
219	*13	粘硬又A	石組工事	A-6	横ナデ	凸型台痕・工具ナデ後ナデ	灰(N5)	1mmの大砂粒	
220	*13	粘硬又A	Cトレンチ		横ナデ	凸型台痕・丁寧なナデ	灰(N4)	黑色砂粒	
221	*13	粘硬又A	石組工事	南	丁寧なナデ	凸型台痕・ナデ	黄灰(25Y6-2)	砂粒多い	
222	*13	粘硬又A	G10-80・I層		丁寧なナデ	コビキ B・丁寧なナデ	灰(N5)	砂粒を含む	
223	*13	粘硬又A	G9-78・79・70		横ナデ	ハク形状工具によるナデ後ナデ	暗灰(N3)	黑色・白色砂粒	
224	*13	粘硬又A	石組工事	A-5	丁寧なナデ	コビキB・凸型台痕・ナデ・灰(N6)	砂粒・石英	良好	
225	S1	九曜文	Aa	F95-79・2脚	横ナデ	横ナデ・工具ナデ・丁寧なナデ・細・刻印	灰(5Y5-1)	2mm以下砂粒	
226	*12	九曜文	Aa	I-3トレンチ	横ナデ	丁寧なナデ・刻印・風化	灰(N3-7)	黑色砂粒	
227	*16	九曜文	Aa	石組工事	A-5	横ナデ	凸型台痕?・丁寧なナデ・横ナデ	灰(N7Y7-1)	良好
228	S2	九曜文	Ab	工事	南	ナデ	工具ナデ・丁寧なナデ・細かな跡	灰(75Y6-1)	1mmの大砂粒多い
229	S3	九曜文	Ab	G11-79・I層	ナデ・横ナデ	横ナデ・工具ナデ・ナデ	灰(75Y4-1)	1mm以下砂粒	
230	*13	九曜文	Ac	G11-80・I層	横ナデ	丁寧なナデ	灰(N4)	2mm大砂粒・粗い	
231	*15	九曜文	Ad	石組工事	A-5	横ナデ	丁寧なナデ・横ナデ	灰(N4)	黑色・白色砂粒
232	*11	九曜文	Ab	五脚槽下・T2	ナデ	凸型台痕・丁寧なナデ	灰(N5)	1~3mmの大砂粒	
233	S4	九曜文	Bb	工事	南	ナデ・横ナデ	丁寧なナデ	灰(5Y6-1)	4mm以下砂粒
234	S6	九曜文	Bb	工事	B-4	ナデ	丁寧なナデ	灰(75Y6-1)	良好
235	S19	九曜文	Ca	Iトレンチ	横ナデ	丁寧なナデ・凸型台痕・刻印	灰(75Y6-1)	2mm以下砂粒	
236	500	九曜文	Ca	G11-81・I・層	ナデ	ナデ	灰(5Y5-1)	2mmの大砂粒	
237	438	九曜文	Cb	F95-80	横ナデ	ナデ	黑(N2)	間隙性が無い	
238	S20	九曜文	Cc	I-3	丁寧なナデ	横ナデ・丁寧なナデ	灰(10Y5-1)	3mm以下砂粒	
239	S8	九曜文	Da	Dトレンチ	ナデ・横ナデ	丁寧なナデ	灰(5Y6-1)	3mm以下砂粒・小石	
240	*15	九曜文	Dc	石組工事	東面	ナデ	丁寧なナデ・刻印	灰(5Y6-1)	良好
241	S9	九曜文	Ea	I-3	丁寧なナデ	ナデ・横ナデ	灰(75Y6-1)	1mm以下砂粒	
242	499	九曜文	Ed	F95-79・I層	ナデ	凸型台痕・ナデ	灰(SV6-1)	2mmの大砂粒	
243	*13	九曜文	Ea	G9-81・I層	横ナデ	丁寧なナデ・横ナデ	灰(75Y6-1) ~ 灰(N6)	砂粒多く・粗い	
244	S17	九曜文	Eb	石組工事	5979-79地	ナデ・横ナデ	横ナデ・丁寧なナデ・刻印	灰(5Y5-1)	砂粒3mm以下
245	S18	九曜文	Eb	石組工事	A-6	ナデ・横ナデ	丁寧なナデ・刻印	灰(N5)	砂粒2mm以下
246	S21	九曜文	Eb	I-3	東	ナデ・横ナデ	丁寧なナデ	灰(75Y6-1)	凹凸型台痕の軌跡
247	*16	九曜文	Ec	G10-78・I層	ナデ	ナデ	灰(5Y6-1)	2mmの大砂粒	
248	*15	九曜文	Ec	I-3トレンチ	横ナデ	凸型台痕・横ナデ	灰(N4)	誠密	
249	S10	九曜文	Ec	I-3	東	ナデ・横ナデ	横ナデ・丁寧なナデ	灰(5Y6-1)	良好
250	S7	九曜文	Ed	工事	南	ナデ・横ナデ	丁寧なナデ	灰(25Y5-1)	良好
251	*17	九曜文	Ge	石組工事	南	ナデ?	凸型台痕・丁寧なナデ・横ナデ・刻印	灰(N4)	砂粒多く・粗い
252	*14	九曜文	Hd	石組工事	工事	ナデ	丁寧なナデ・横ナデ	暗灰(N3/)	2mmの大砂粒
253	S5	九曜文	Ia	I-3	95-80	横ナデ	ナデ・丁寧なナデ	灰(N4)	2mmの大砂粒
254	*497	九曜文	Ia	石組工事	A-6	ナデ	丁寧なナデ	灰(N4)	良好
255	*142	九曜文	Ik	石組工事	A-5	横ナデ	丁寧なナデ・横ナデ	灰(N4)	砂粒多く・粗い
256	*160	九曜文	L	F100-81	横ナデ	丁寧なナデ・刻印	灰(N4)	石英・角閃石	
257	*149	九曜文	Ma	G9-81・I層	横ナデ・一部工具痕	丁寧なナデ	黄灰(25Y6-1)	間隙性高い	
258	*150	九曜文	Ma	Gトレンチ	横ナデ	丁寧なナデ・横ナデ	暗灰(N3)	黑色砂粒	
259	*151	九曜文	Mb	Gトレンチ	横ナデ	凸型台痕・丁寧なナデ・刻印	灰(N4)	砂粒・石英	
260	S11	九曜文	N	I-3	東	ナデ・横ナデ	ナデ?・風化激しい	灰(5Y5-1)	良好
261	*148	九曜文	O	石組工事	東	横ナデ	T.工具ナデ後ナデ・横ナデ	黄灰(25Y6-1)	1~2mm大砂粒

滴水瓦・垂瓦

遺物	実測番号	種類	出土地点	調整	瓦当表面	瓦当背面	胎土	焼成	備考
262	444	滴水瓦	Dトレンチ	ナデ	コビキ B・横ナデ	黄灰(25Y6-1)	黒色・白色砂粒目立ち粗い	良好	未調整部分に纏かな砂付
263	435	滴水瓦	G9-78・79・70	ナデ	ナデ	灰(SV4-1)	白色砂粒	普通	瓦当面に纏かな砂付
264	*84	滴水瓦	G11-81・I層	ナデ	ナデ	灰(N4)	白色砂粒	良好	瓦当面にコマコ

265	#83	滴水瓦	F95-79・2層	工具ナデ	暗灰(N3')	黒色・白色砂粒	良好	瓦背面・平瓦部凹面 細かな凹凸有り。
266	#85	滴水瓦	G11-81・1層	ケズリ?	灰(N4')	微細~1mm砂粒	不良	風化板張り。
267	434	滴水瓦	石垣工事 F95-79	ナデ	暗灰(N3')	白色砂粒	不良	瓦当面に細かな砂
268	432	滴水瓦	F95-79・1層	ナデ	灰(N5')	砂粒目立たない	不良	
269	#101	滴水瓦	G11-80・1層	ナデ	灰(N5')	黑色砂粒	良好	良好・瓦当面欠損
270	#79	滴水瓦	D レンチ	ナデ	暗灰(N3')	細砂多く・無い	良好	平瓦部欠損
271	443	滴水瓦	G11-80・1層	ナデ・指頭板	灰(N6')	1~2mm大砂粒	不良	平瓦部欠損
272	#80	滴水瓦	G11-80・1層	強いナデ	灰(N6')	細密である	良好	平瓦部欠損
273	433	滴水瓦	石垣工事 西	ナデ	灰(N5')	白色砂粒	不良	瓦当面・平瓦部欠損。
274	#82	滴水瓦	G11-80・1層	強いナデ	灰(N4')	黑色砂粒・間隙	良好	平瓦部欠損
275	#77	滴水瓦	F95-79・2層	強いナデ	灰(N5')	黑色砂粒	良好	平瓦部欠損
276	#86	滴水瓦	G11-81・1層	強いナデ	暗青(5PB4/1)	全体的に粗い	普通	
277	#81	滴水瓦	G9-80 F段・1層	強いナデ	暗灰(N3')	黑色砂粒	良好	平瓦部欠損
278	#78	滴水瓦	D レンチ	ナデ	灰(N6')	1mm以下砂粒	良好	平瓦部欠損
279	#02	滴水瓦	G10-80・1層	ナデ	灰(N5')	微細砂粒・間隙性	良好	平瓦部欠損
280	441	滴水瓦	G9-78・79・70	横ナデ・ナデ	灰(N5')	砂粒多い	良好	平瓦部欠損
281	440	滴水瓦	D レンチ	ナデ	灰(5Y6/1)	灰黒色砂粒	良好	平瓦部欠損
282	#97	垂瓦	F レンチ	ナデ	灰(N4')	細砂粒・無い	普通	平瓦部欠損
283	#96	垂瓦	G9-78・79	ナデ	暗灰(N3')	細かな砂粒	普通	平瓦部欠損
284	#100	垂瓦	G10-81・1層	ナデ	灰(N5')	微細~2mm砂粒	良好	平瓦部欠損
285	#95	垂瓦	K レンチ	ナデ	灰(N6')	細砂粒・無い	良好	平瓦部欠損
286	#99	垂瓦	D レンチ	ナデ	灰(N5')	細かな砂粒	不良	平瓦部欠損
287	#98	垂瓦	L レンチ	強いナデ	丁寧なナデ	砂粒多・粗い	良好	平瓦部欠損

軒目板(棟)瓦

遺物	実測 番号	種類	出土点	調整			瓦当色調	焼成	胎土
				側部	軒平部凹面	軒平部凸面			
288	#175	三巴文	G11-81・1層	ナデ	凸型台瓶・丁寧なナデ	相いナデ	ナデ	暗灰(N3')	砂粒を含む
289	#176	三巴文	丁寧	ナデ	丁寧なナデ	相いナデ	ケズリ後ナデ	灰(N4')	良好 1~2mm大砂粒
290	#177	三巴文	丁寧	ナデ	丁寧なナデ	相いナデ	ケズリ後ナデ	灰白(7.5Y7/1)	良好 石英
291	#178	三巴文	丁寧	ナデ	丁寧なナデ	相いナデ	ケズリ後ナデ	灰(N4')	不良 石英
292	#176	三巴文	F95-79・1層	ナデ	凸型台瓶・丁寧なナデ	相いナデ	ナデ	暗灰(N3')	砂粒を含む
293	#178	蛇の目	トレンチ	ナデ・面取	丁寧なナデ	相いナデ	ケズリ後丁寧なナデ	黒(N2')	砂粒少なく緻密
294	S26	九曜文	トレンチ	ナデ	相いナデ	相いナデ	ナデ	灰(N5')	良好 2mm以下砂粒
295	S23	九曜文	F95-79・1層	ナデ・横ナデ	丁寧なナデ	相いナデ	工具ナデ	灰(N5')	良好 3mm以下砂粒 小石
296	S27	九曜文	G11-80・1層	ナデ	丁寧なナデ	相いナデ	工具ナデ	灰(7.5Y5/1)	良好 3mm以下砂粒
297	#177	九曜文	トレンチ	ナデ	丁寧なナデ	相いナデ	ケズリ後ナデ	灰(N6')	良好 1mmの大砂粒
298	S22	九曜文	工具	ナデ・横ナデ	工具ナデ・ナデ・鉛印	ナデ	工具ナデ	灰(N5')	良好 3mm以下砂粒
299	#169	九曜文	工具	ナデ・指頭瓶	工具ナデ	相いナデ	ケズリ後ナデ	灰(5Y5/1)	良好 細かな砂粒
300	S25	九曜文	F95-79	ナデ	丁寧なナデ	相いナデ	工具ナデ	灰(N4')	良好 3mm以下砂粒
301	S24	九曜文	トレンチ	ナデ	ナデ	ナデ	工具ナデ	灰(5Y5/1)	良好 3mm以下砂粒
302	#173	九曜文	工具	ナデ	凸型台瓶・風化	相いナデ	ケズリ後ナデ	黄褐色(10YR7/4)	良好 砂粒多い
303	#174	丸に+引き文	F95-79・1層	横ナデ・工具ナデ	横ナデ・ナデ			暗灰(N3')	良好 砂粒多い
304	488	嵌文	石垣工事	ナデ				灰(N4')	良好 1~2mm大砂粒

鬼瓦

遺物	実測 番号	出土点	調整			瓦当色調	焼成	胎土	備考
			表面	側面	裏面				
305	#71	G10-79・1層	ナデ	ケズリ	ケズリ・ナデ	暗灰(N3')	緻密	良好	桔梗文
306	S44	D レンチ	ナデ	工具ケズリ	灰(N5')	赤褐色砂粒	良好	桔梗文	緻密な砂
307	#163	K トレンチ	丁寧なナデ	ナデ	ナデ	暗灰(N5')	緻密	良好	桔梗文
308	#63	G11-80・1層	工具ナデ	工具ナデ	工具ナデ	灰(N5')	2mm以下砂粒 間隙性 性あり	良好	桔梗文
309	#64	G10-80・1層	相いナデ・ナデ	工具ナデ	ナデ	灰(N4')	黑色砂粒	良好	桔梗文
310	S50	石垣工事 A5	ナデ	ナデ・横ナデ	ナデ・横ナデ	灰(7.5Y5/1)	赤褐色砂粒	良好	桔梗文
311	S49	D トレンチ	ケズリ・ナデ	ナデ	ケズリ	灰(5Y5/1)	黑色砂粒	良好	桔梗文
312	S48	G11-80・1層	丁寧なナデ・ハケメナデ	板状工具による条痕	灰(7.5Y5/1)	1~2mm砂粒 間隙性	良好 花文		
313	#66	トレンチ	丁寧なナデ・丁寧なナデ	やや相いナデ	灰(N4')	5mm大砂粒 間隙性	良好 九曜文		
314	#70	G10-80・1層	丁寧なナデ	ケズリ	灰(N4')	2mm以下砂粒	良好 瓦桂脱落		
315	#164	石垣工事 A2	丁寧なナデ	工具ナデ	相いナデ	暗青灰	5mm大砂粒	良好	瓦当面にキラコ
316	#65	G9-78・79・70	ナデ	ケズリ後指頭瓶	ケズリ	灰(N4')	緻密	良好	木ノ葉文
317	#74	F94-79・1層	丁寧なナデ	ケズリ	ケズリ・未調整	暗青灰	良好	表面周縁に細かな砂	
318	#62	G11-81・上層	丁寧なナデ・工具ナデ	ケズリ後丁寧なナデ	ケズリ後ナデ・工具ナデ	3mm以下砂粒	良好 九曜文		
319	S51	石垣工事 A2	ナデ・沈澱・頸部	ナデ	ケズリ・横ナデ	灰(N5')	砂質感強く粗い	良好	
320	#75	G11-81・1層	表面(指痕)	ケズリ・ナデ	ケズリ	灰(N4')	緻密	良好 花文?	
321	#72	G9-78・79	表面:工具による施文	ケズリ	ケズリ	白色砂粒	良好 梶瓦		
322	#76	G11-81・1層	表面:工具による施文	ナデ	ナデ	暗細砂粒	良好 梶瓦		

隅物蓋瓦

遺物	実測 番号	出土点	調整			瓦当色調	焼成	胎土	備考
			表面	側面	裏面				
323	#161	石垣工事 A4	ナデ・いぶし	ケズリ後ナデ	ハケメ状ナデ	灰(N4')	砂粒・石英	良好	瓦当面にキラコ有り
324	#69	Gトレンチ	丁寧なナデ	工具ナデ	工具ナデ	暗灰(N3')	15mm以下砂粒	良好	瓦当面にキラコ有り

325	S32 石垣工事 A-5	工具ナデ	ナデ	工具ナデ・粗いナデ	灰(7.5Y5/1)	2mm以下砂粒 小石	良好	天地不明瞭
326	*465 石垣工事 A-5	ナデ	橋ナデ	ナデ	灰(N4/)	黑色砂粒	良好	
327	S43 石垣工事 A-5	工具ナデ	ナデ	工具ナデ	灰(N5/)	2mm以下砂粒	良好	
328	*162 石垣工事 A-5	天井部表:丁寧なナデ	天井部表:ナデ		灰(N5/)	黑色砂粒	良好	屋根部分。後端に切れ込み。

道具瓦・その他

遺物・実測 番号・番号	出土地点	表面	調整		表面色調	胎土	焼成	備考
			裏面	他				
329	S46 (G9-8) 1上層	軽いナデ	粗いナデ	裏面:ケズリ	灰(7.5Y5/1)	白色砂粒	良好	板瓦
330	*73 G11-78	文様区(ほぼ未溝痕ナデ)	筒部下面:粗いナデ	筒部内面:粗による強いナデ	灰(N3/)	1~2mm大砂粒	良好	板瓦
331	*166 石垣工事 B-2	筒部下面:ナデ	筒部下面:粗いナデ	筒部内面:粗による強いナデ	灰(N4/)	黑色砂粒	良好	瓦名瓦、キラコ。
332	*167 石垣工事	筒部下面:ナデ	筒部下面:粗いナデ	筒部内面:ケズリ・ナデ	灰(N4/)	砂粒を含む	良好	瓦名瓦、キラコ。
333	*168 石垣工事 A-5	筒部上面:ナデ	筒部下面:ナデ	筒部内面:ケズリ・ナデ	灰(N4/)	1~3mm大砂粒	良好	瓦名瓦
334	S45 五輪椎 F1T・筒部下面:丁寧な3層	筒部下面:粗いナデ	筒部内面:強いナデ	灰(N4/)	1~2mm大砂粒	良好	瓦名瓦	
335	S47 G10-79・1層	丁寧なナデ	裏面:ナデ	灰(N5/)	赤褐色砂粒	良好	赤瓦丸瓦?	
336	S29 G9-80・1層	丁寧なナデ	裏面:横方向の条痕	灰(N4/)	砂粒多い	良好	板瓦丸瓦、木切清。	
337	*216 石垣工事 A-3	ナデ・工具ナデ	布目刷	全面に細かな跡。面取り。	灰(N4/)	砂粒多い	良好	板瓦丸瓦。
338	S33 G10-80・1層	丁寧なナデ	布目刷・粗い編み物痕	灰(7.5Y6/1)	黑色砂粒	良好	輪違い	
339	*217 石垣工事 A-2	ケズリ後ナデ・刻印	布目・粗い編み物痕	灰(N5/)	まれに5mm大砂粒	良好	輪違い	
340	*218 石垣工事 強いナデ	布目刷		灰(5Y6/1)	砂粒多・小石	良好	輪違い	
341	*219 Dトレンチ ナデ	コピキB・布目刷・ナデ。		灰(5Y7/1)	砂粒を含む	良好	輪違い	
342	*219 石垣工事 南	工具ナデ	コピキB・布目刷	灰(5Y4/)	砂粒を含む	良好	輪違い	
343	S31 Rトレンチ 丁寧なナデ	粗いナデ	水切り表面:丁寧なナデ	灰(N4/)	赤褐色砂粒	良好	板瓦丸瓦。	
344	S30 (G9-80)・1層	丁寧なナデ(四面)	粗いナデ		灰(N5/)	2mmの大砂粒	良好	削印。前面に削印。凸面に凹面削印。
345	*24 F100-81・1層	丁寧なナデ・脚印	コピキB・布目刷	水切り部分欠損	灰(N4/)	1~2mm大の砂粒	良好	谷丸瓦(瓦)
346	*213 G9-78・79 70 文様印	丁寧なナデ・九曜文様印	コピキB?・布目刷	水切り表面:丁寧なナデ	灰(N6/)	石英	良好	谷丸瓦(瓦)
347	S40 Kトレンチ 丁寧なナデ	粗いナデ		灰オリーブ (5Y6/2)	砂粒多く窓い	良好	谷平瓦。前面に張状の発起部があり。	
348	S39 G11-80・1層	丁寧なナデ	粗いナデ・工具痕	灰(7.5Y6/1)	4mm大砂粒	良好	谷平瓦。背面に削印。凹面に凹面削印。	
349	*215 Dトレンチ 丁寧なナデ・工具痕	丁寧なナデ・工具痕多数		灰(N6/)	5mm大砂粒	良好	板瓦丸瓦(瓦)の裏。	
350	S41 Dトレンチ ナデ	ナデ		灰(7.5Y5/1)	やや粗い・小石	普通	谷平瓦。前面削印・凹面削印。	
351	*210 Dトレンチ 丁寧なナデ	コピキB・一部布目刷		灰(N4/)	黑色砂粒	良好	谷平瓦(瓦)。	
352	S35 F95-80 ナデ	ナデ		灰(7.5Y5/1)	長行・石英	良好	不明	
353	S26 F95-80 工具ナデ	ナデ		灰(7.5Y6/1)	砂粒多い	良好	不明	
354	S37 F95-80 丁寧なナデ	ナデ		灰(7.5Y5/1)	砂粒	良好	不明。凹面削印。	
355	S34 F95-79 ナデ	ナデ		灰(7.5Y6/1)	長石	良好	不明	
356	S38 G9-81・1層	工具ナデ	工具ナデ	灰(10Y6/1)	2mmの大砂粒	良好	板瓦丸瓦。凹面削印。	
357	*212 石垣工事 東 丁寧なナデ	粗いナデ		灰(N5/)	黑色砂粒	良好	板瓦。西側に斜めに削印。	
358	S42 Kトレンチ 丁寧なナデ	粗いナデ	ナデ	灰黄(25Y7/2)	黑色砂粒	良好	板瓦。直しろし。	
379	S54 G11-80・1層 表:工具による切り出し裏:ナデ			灰(N4/)	緻密	良好	不明。表面に細かな跡(部分)。	

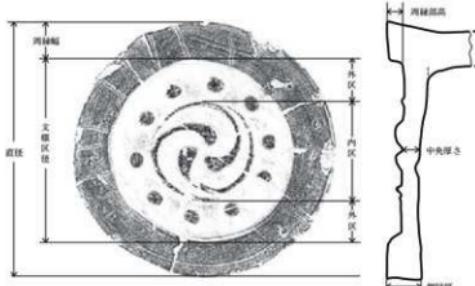
丸瓦

遺物・実測 番号・番号	出土地点	調整		瓦当色調	胎土	焼成	備考
		凸面	凹面				
359	508 Dトレンチ 丁寧なナデ	コピキA・吊り緑痕	面取り後ナデ	暗灰(N3/0)	やや粗い	良好	
360	504 Dトレンチ ケズリ後ナデ	コピキA・吊り緑痕	面取り後ナデ	暗灰(N3/0)	黑色砂粒	普通	
361	515 Lトレンチ 丁寧なナデ	コピキA・吊り緑痕	面取り後ナデ	灰白(5Y7/1)	やや粗く窓い	良好	
362	514 石垣工事 東 丁寧なナデ	コピキA・吊り緑痕	面取り後ナデ	暗灰(N3/0)	やや粗く窓い	良好	
363	512 A-0 丁寧なナデ	工具ナデ	面取り後ナデ	灰黄(25Y6/2)	緻密	良好	
364	507 Rトレンチ 丁寧なナデ	コピキA・吊り緑痕	面取り後ナデ	灰(N5/1)	緻密	良好	凸面削印。
365	502 石垣工事 東 A-4 ケズリ後ナデ	布目刷	面取り後ナデ	暗灰(N3/0)	2mm以下の砂粒	良好	凸面に削印
366	509 石垣工事 南 丁寧なナデ	コピキB・布目刷・粗い編み物痕	大きく面取り後ナデ	灰(5Y5/1)	緻密	良好	凸面に削印
367	505 Cトレンチ 丁寧なナデ	コピキA・布目刷	大きく面取り後ナデ	灰(7.5Y5/1)	2mm以下の砂粒	良好	凸面に削印
368	510 石垣工事 西 丁寧なナデ	工具ナデ	面取り後ナデ	暗青灰(SPB4/1)	緻密	良好	凸面に削印
369	511 Iトレンチ 丁寧なナデ	コピキB?・粗い編み物痕	面取り後ナデ	黑(N2/0)	緻密	良好	
370	513 Gトレンチ ナデ	粗い編み物痕	面取り後ナデ	暗灰(N3/0)	白色砂粒	良好	凸面に削印

平瓦

遺物・実測 番号・番号	出土地点	調整		瓦当色調	胎土	焼成	備考
		凸面	凹面				
371	485 石垣工事 南 丁寧なナデ	粗いナデ		灰黄(25Y6/2)	黑色砂粒	良好	凹面に削印
372	484 石垣工事 南 丁寧なナデ	細かな跡・弓状压痕		暗青灰(SPB4/1)	黑色砂粒	良好	凹面に削印
373	482 五輪椎F1T・2層 丁寧なナデ	粗いナデ		灰(5Y6/1)	細かな跡	良好	
374	476 五輪椎F1T・3層 丁寧な格子状に丁寧なナデ	ナデ		灰(5Y5/1)	1~2mm大砂粒	良好	凹面に削印
375	479 石垣工事 FS29 コピキB・ナデ	ナデ・凹型台柱痕		灰(5Y5/1)	1~2mm大砂粒	不良	凹面に削印
376	480 石垣工事 BS 丁寧なナデ・凸型台柱痕	粗いナデ		灰(N5/)	2~3mm大砂粒	良好	焼き歪み。凹面に削印
377	G7 G11-80・1層 ナデ	工具痕・弓型任痕		灰黄(25Y6/2)	黑色砂粒	良好	
378	478 G11-80・1層 ナデ	[ナデ]		灰(5Y6/1)	細かな跡	不良	

第9表 軒丸瓦・軒平瓦計測表



三巴紋軒丸瓦 L 7 A

遺物番号	種別	出土位置	直径	支承区径	内区				外区				周縁部				中央厚さ	備考
					直徑	巻き	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	側縁厚			
1 #11	L7A	Dトレチ	163	110	7.0	左			○	20	7	10	22	0.7	15			
2 #22	L7A	G10-80・I層	111	7.0	左				○	21	7	10	22	0.7	24	17		
	L7A	G9-81・I層	(160)	(110)	(7.0)	左			○	21	7	10	23	0.5	22	16		
	L7A	Dトレチ	112	69	左				○	21	7	10	20	0.7	22	16		
	L7A	G9-78・79	68	左				○	20	7	10	23	0.6	22	16			
	L7A	A-5	66	左				○	20	(7)	10	22	0.6	24	18			
	L7A	A-4	66	左				○	20	(7)	10	21	0.7	23	16			
	L7A	A-4	165	111	7.0	左			○	21	7	10	23	0.7	22	17		
	L7A	G10-80・I層	155	106	68	左			○	20	7	10	20	0.8	21	16		
	L7A	G11-81・I層			左													

()は復元 []は誤差が5ミリ以上。数値はcm。

三巴紋軒丸瓦 L 8 A

遺物番号	種別	出土位置	直径	支承区径	内区				外区				周縁部				中央厚さ	備考
					直徑	巻き	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	側縁厚			
3 #21	L8A	G10-79・I層	17.0	11.5	89	左			○	12	8	1.0	25	0.8	24	14		
4 S70	L8A	Lトレチ			左						8							
	L8A	Kトレチ	17.5	11.8	89	左			○	14	8	1.0	28	0.8	22	12		
	L8A	石垣工事・南			88	左			○	14	8	1.0	22	0.8	23	14		

三巴紋軒丸瓦 L 9 A

遺物番号	種別	出土位置	直径	支承区径	内区				外区				周縁部				中央厚さ	備考
					直徑	巻き	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	側縁厚			
5 S59	L9A	A-4	17.0	11.5	7.8	左			○	12	9	1.0	23	0.8	23	12		
	L9A	G10-80・I層			左				○	18	9	1.0	26	0.7	20	11		
	L9A	G10-80・I層			左				○	17	9	1.0	25	0.7	25	14		
	L9A	石垣工事	17.0	11.2	7.7	左			○	19	9	1.1	27	0.6	26	12		
	L9A	F95-79			左				○	19	9	1.1	27	0.6	26	12		
	L9A	F100-81・I層	17.0	11.8	80	左			○	19	9	1.1	27	0.6	26	12		

三巴紋軒丸瓦 L 9 B

遺物番号	種別	出土位置	直径	支承区径	内区				外区				周縁部				中央厚さ	備考
					直徑	巻き	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	側縁厚			
6 S58	L9B	A-4	156	10.7	66	左			○	21	9	1.0	20	1.0	19	14		
	L9B	G11-81・I層			左				○	22	9	1.1	19	0.9	20	13		
	L9B	G10-80・I層			左				○	22	9	1.1	27	0.7	27	13		

三巴紋軒丸瓦 L 10 A

遺物番号	種別	出土位置	直径	支承区径	内区				外区				周縁部				中央厚さ	備考
					直徑	巻き	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	側縁厚			
7 S75	L10A	A-5	165	10.4	60	左			○	22	10	1.1	28	1.8	10			
8 S76	L10A	石垣工事	165	10.2	60	左			○	20	10	1.1	28	1.3				
9 #5	L10A	G11-79・I層	160	10.4	60	左			○	24	10	1.1	27	2.0	12			
10 S71	L10A	五箇摺下2T・2層	157	10.0	60	左			○	21	10	1.0	28	2.3	14			
	L10A	G9-78・79	105	60	60	左			○	23	10	1.1	26	1.6	0.9			
	L10A	G9-78・79	162	10.5	60	左			○	22	10	1.2	27	2.4	17			
	L10A	G11-81・I層	58	左					○	22	10	1.1	27	2.0	14			

三巴紋軒丸瓦 L 10 B

遺物番号	種別	出土位置	直径	支承区径	内区				外区				周縁部				中央厚さ	備考
					直徑	巻き	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	側縁厚			
11 #2	L10B	G11-80・I層	165	10.3	67	左			?	19	10	1.2	27	0.8	20	13		
12 S73	L10B	A-5	166	10.3	67	左			○	18	10	1.2	26	0.9	19	10		
13 S72	L10B	F95-79・2層	162	10.3	63	左			○	19	10	1.1	27	0.7	15			
	L10B	A-5	102	67	左				○	20	10	1.2	27	0.9	19	11		
	L10B	石垣工事	102	66	左				○	19	10	1.2	28	0.8	23	14		
	L10B	G9-78・79			左				○	18	10	1.2	27	1.1	13			

三巴紋軒丸瓦 L21

番号	美術 種別	出土位置	直径	支桟 区段	内区				外区				周縁部		中央 厚さ	備考
					直徑	巻き	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	周縁厚	
33	*16	L21A F95-81 I層	145	10.8	80	左			×	1.5	21	0.7	1.8			

三巴紋軒丸瓦 L24

番号	美術 種別	出土位置	直径	支桟 区段	内区				外区				周縁部		中央 厚さ	備考
					直徑	巻き	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	周縁厚	
34	*34	L24A Mトレンチ	17.0	12.0	8.5	左	14.0	○	×	1.7	24	0.8	2.0	1.2	2.1	1.9
35	*28	L24A G10-80 I層	15.7	11.0	7.9	左	14.4	○	×	1.5	24	0.8	2.0	1.0	1.7	1.6
36	S64	L24A A-2							○							
		L24B Mトレンチ	16.6	11.9	(8.8)	左	14.1	○	×	[28]	24	1.0	2.4	1.0	2.6	2.2

三巴紋軒丸瓦 R13

番号	美術 種別	出土位置	直径	支桟 区段	内区				外区				周縁部		中央 厚さ	備考
					直徑	巻き	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	周縁厚	
37	*17	R13A Hトレンチ	16.0	12.0	8.6	右	○	×	1.1	13	0.5	2.0	0.8	1.9	1.7	
38	400	R13A G10-80 I層			8.5	右	○	×	1.1	(13)	0.5	(23)	0.8	2.1	1.8	

三巴紋軒丸瓦 R14

番号	美術 種別	出土位置	直径	支桟 区段	内区				外区				周縁部		中央 厚さ	備考
					直徑	巻き	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	周縁厚	
39	*19	R14A G9-78-29	13.5	9.5	5.7	右	△	×	1.8	14	0.7	(20)	0.7	2.8	2.0	

三巴紋軒丸瓦 R19

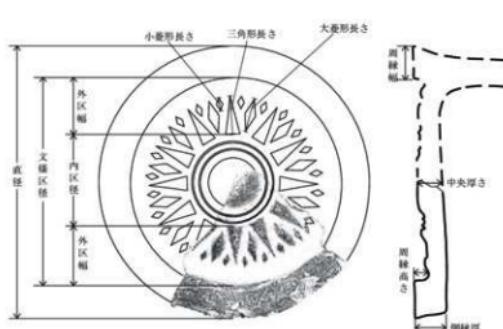
番号	美術 種別	出土位置	直径	支桟 区段	内区				外区				周縁部		中央 厚さ	備考
					直徑	巻き	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	周縁厚	
40	*20	R19A Jトレンチ			8.2	右	△	×	1.3	19	0.8	1.5	0.9	2.4	2.0	
41	*24	R19A T3トレンチ	14.5	10.5	8.3	右	△	×	1.3	19	0.8	1.8	0.8	2.4	1.6	
42	403	R19A G10-80 10層			右	△	×	1.2	19	0.8	1.8	1.1	2.1	1.7		
43	402	R19A F88-82 2層			右	△	×	1.2	19	0.8	1.7	1.0	2.3	1.9		

三巴紋菊丸

番号	美術 種別	出土位置	直径	支桟 区段	内区				外区				周縁部		中央 厚さ	備考
					直徑	巻き	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	周縁厚	
44	*14	R21A F91-82 2層	14.3	10.5	8.3	左	○	×	0.9	31	0.7	2.0	0.6	1.8	1.4	
45	404	R21A F91-82 I層			右	△	×	1.0	(31)	0.7	2.0	0.6	1.7	1.4		
46	405	R21A F91-82 II層			右	○	×	1.0	(31)	0.7	2.0	0.7	1.9	1.2		

三巴紋菊丸 等他

番号	美術 種別	出土位置	直径	支桟 区段	内区				外区				周縁部		中央 厚さ	備考
					直徑	巻き	長さ	くびれ	連結	幅	珠文数	珠文径	幅	高さ	周縁厚	
48	406	不明 F100-82 I層				左	○	×	1.6	21	0.7	2.2				
49	410	不明 F100-82 I層			(7.6)	左	10.4	○	×	1.4	12	0.6	20	0.8	2.0	
50	S65	不明 G10-81 10層	(155)	11.5	(8.1)	右	○	○	1.6	22	0.9	2.0	1.2	[29]	1.8	
51	406	不明 G8-80 10層			9.2	(8.2)	右	14.5		12	0.6	23	1.1			
52	407	不明 G11-80 I層			15.8	(11.0)	(8.4)	16.4	○	1.2	0.7	23	0.7	2.0	1.4	
53	409	不明 行徳工夢東				右	○	×	1.1	11	0.9	23	0.8	(28)		
54	411	不明 Cトレンチ				右	○	×	1.1	11	0.6	24	0.9	(25)	(15)	

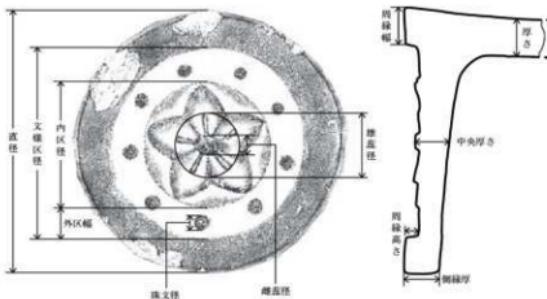


日足紋軒丸瓦

遺物番号	実測番号	出土位置	直径	文様区別	内区別	外区			周縁部			中央厚さ	備考
						幅	三角彫長さ	小彫形長さ	幅	高さ	周縁厚		
63	#54	G10-81 I型	—	—	—	37	30	17	23	0.8	—	—	—
64	#57	G10-81 10枚	(18.4)	(13.6)	(6.0)	38	33	27	(1.2)	27	0.9	21	(1.7)
65	#53	Dトレンチ	—	—	—	39	30	27	1.5	1.2	0.7	2.2	—
66	#56	Cトレンチ	—	—	—	42	31	29	1.8	1.6	0.7	2.3	—
67	#52	Kトレンチ	—	—	—	44	30	28	1.8	(1.5)	0.5	—	—
68	#55	G9-78・79	—	—	—	33	30	28	1.4	0.9	—	—	—
69	413	G10-80 10枚	—	—	—	—	—	—	—	1.7	0.4	2.3	—
70	412	G10-80 I型	—	—	—	33	29	1.6	—	—	—	—	—
71	414	G10-80 1 番	—	—	—	29	26	1.0	—	—	—	—	—

桐紋軒丸瓦

遺物番号	実測番号	種別	出土位置	瓦当部					体部					備考		
				直径	文様区別	周縁部	中央厚さ	幅	高さ	周縁厚	長さ	内径	厚さ	外径	側面幅	
72	#59	五三制	F94-79 I型	(11.2)	(2.1)	1.0	2.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—
73	424	五三制	Mトレンチ	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	小片
74	425	五三制	G10-81 I型	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	小片
75	#61	五三制	F95-81 上 I型	—	—	1.9	1.0	—	—	—	—	—	—	—	—	小片
76	426	五三制	石加工事 A-3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	小片
77	423	五三制	G9-80 10枚	(10.8)	(2.1)	1.0	(2.6)	2.3	—	—	—	—	—	—	—	右1.7 左1.4 右2.0
78	#54	五三制	F88-82 3番	(14.9)	(11.2)	1.7	1.0	(30)	(20)	(11.4)	106	21	136	9.5	1.9	(12.8)
79	#60	五三制	F96-82 I型	—	—	2.0	1.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—
80	#58	四三制	瓦トレンチ下層	(10.4)	2.2	0.7	2.0	1.8	—	—	—	—	—	—	—	—
81	422	四三制	トイレ立会	—	—	2.5	0.8	2.2	—	—	—	—	—	—	—	—
82	420	四三制	G8-81 I型	—	—	2.6	0.7	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—
83	417	その他	トレンチ	—	—	2.6	1.1	2.5	—	—	—	—	—	—	—	—
84	421	その他	F95-81 I型	—	—	1.7	1.2	2.2	—	—	—	—	—	—	—	—
85	416	その他	F94-81 I型	—	—	1.2	0.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—
86	419	その他	Jトレンチ	—	—	2.1	1.0	2.6	—	—	—	—	—	—	—	—
87	418	その他	Dトレンチ	—	—	2.0	1.1	(2.6)	—	—	—	—	—	—	—	小片
88	#43	Gトレンチ	—	—	15.2	5.5	5.0	0.6	1.8	1.1	—	—	—	—	—	—
	Rトレンチ	—	—	—	—	4.1	—	2.3	1.4	—	—	—	—	—	—	—
	Qトレンチ	—	—	—	—	4.2	—	2.3	—	—	—	—	—	—	—	—



蛇の目紋軒丸瓦 2A

遺物番号	実測番号	出土地点	直径	文様区別	内区			外区			周縁部			中央厚さ	備考
					直徑	文様区別	周縁部	幅	珠文数	珠文区別	幅	高さ	周縁厚		
89	#38	G9-78・79	138	9.8	(8.4)	0.9	5.4	0.7	x	x	2.0	0.8	2.2	1.7	—
90	#42	Jトレンチ	140	9.4	(8.2)	0.9	5.2	0.6	x	x	2.0	0.9	2.5	2.0	—
91	#41	Kトレンチ	—	—	(9.2)	(7.8)	1.0	(0.5)	x	x	2.2	0.8	—	1.8	—
	Dトレンチ	—	—	—	—	—	—	(0.6)	x	x	1.9	(0.8)	(1.6)	—	—
	G9-78・79	—	—	—	—	—	—	(0.6)	x	x	(2.2)	(0.8)	(2.2)	—	—
	不明	—	—	—	—	—	—	0.9	(5.2)	0.7	x	x	2.1	0.9	(2.3)
			—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

桔梗紋軒丸瓦 2C

遺物番号	実測番号	出土地点	直径	文様区別	内区			外区			周縁部			中央厚さ	備考
					直徑	文様区別	周縁部	幅	珠文数	珠文区別	幅	高さ	周縁厚		
92	#40	Dトレンチ	—	—	—	—	—	(0.5)	x	x	(2.4)	1.2	—	—	—

桔梗紋軒丸瓦 2 d

遺物番号	実測番号	出土地点	直径	文様区格	内区			外区			周縁部			中央厚さ	備考
					直径	難蕊 径	雄蕊 沈穂	幅	珠文 数	珠文 径	幅	高さ	側縁 厚		
93	+39	石垣工事 F95-80		(118)	(98)	(10)	(56)	10			21	1.0	2.5	2.1	
94	+44	石垣工事 F95-80	164	11.5	(9.0)	0.9	5.0	1.4			22	1.5	2.4	1.6	
95	+45	G19-80 1層						(11)			23	1.0	2.3		
		石垣工事 F95-80						1.1			25	1.2	2.6		
		石垣工事 F95-80		(118)	(9.8)		(56)	(10)			22	1.2	(3.2)	2.1	
		石垣工事 F95-79		(124)	(10.2)	0.9	(54)	1.2			25	1.2	3.0	1.8	
		石垣工事 F95-79		(120)	(10.4)	0.9	(58)	(10)			23	1.3	2.3		
		石垣工事 西		(120)	(9.8)	(0.9)	(56)	(12)			25	1.1	2.4	1.6	
	Kトレンチ							(11)			23	1.2	2.3		
	不明				(102)	0.9	(5.8)							1.9	

桔梗紋軒丸瓦 3 a

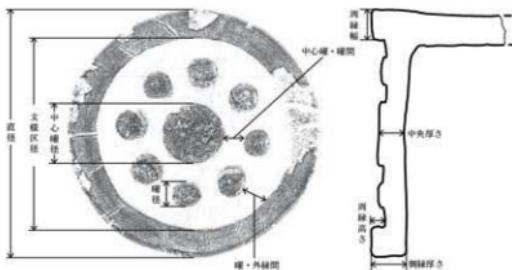
遺物番号	実測番号	出土地点	直径	文様区格	内区			外区			周縁部			中央厚さ	備考
					直径	難蕊 径	雄蕊 沈穂	幅	珠文 数	珠文 径	幅	高さ	側縁 厚		
96	+32	石垣工事 A-5	155	11.2	7.6		3.9	1.8	9	1.0	2.4	0.7			
97	+36	(G978・79	152	11.0	7.5	1.1	4.2	2.3	9	1.0	2.3	0.5	(2.5)	2.2	
98	+49	Dトレンチ	(156)	(10.8)	(7.4)		(4.0)	1.7	9		24	0.7			
99	+35	G10-78 1層	(162)	11.4	7.4	1.1	4.2	2.0	9	1.0	2.3	0.6	2.2	1.8	
100	+56	Dトレンチ	(114)	(7.8)	1.2	4.2	1.9	9	1.1	2.5	0.5	2.1			
101	+46	G10-79 1層	157	10.8	7.4	1.1	(4.2)	1.8	(9)	0.9	2.3	0.7	2.1	1.4	
102	+48	G11-78 1層						1.8	(9)	0.9	2.5	0.7	2.1		
103	+37	G11-81 1層			11.0	7.6	1.2	1.7	9	1.1	2.3	0.8	1.6		
		石垣工事 F95-80						(17)		(10)	23	0.7	2.1		小片
		石垣工事 東	16	11.2	7.5	1.2	4.2	1.7	9	1.1	2.3	0.5	2.3	2.0	
		石垣工事 A-5	152	11.0	7.8	1.1	(4.4)	1.6	9	1.0	2.4	0.8	2.2		
		石垣工事 A-5		(110)	7.5	1.0	(4.4)	1.6	(9)	0.9	(2.1)	0.8	2.1	2.0	
		石垣工事 A-6		(106)	7.4	1.0	(4.2)	1.6	(9)	0.9	2.3	0.8	2.1	1.8	
		石垣工事 南		108	(7.4)	0.9	(4.2)	1.7	(9)	0.9	3.1	0.7	2.1	1.5	
		石垣工事 東			7.4		(4.0)	1.7	(9)	0.8	2.2	0.8	2.1		
		石垣工事 F95-80						1.6	(9)	1.0	2.5	0.8	2.2		
		G10-80 1層		(116)	(7.8)		(4.6)	2.0	(9)	0.9	2.0	0.7	2.3		
		G11-80 1層	159	11.1	7.5	1.2	(4.2)	1.8	(9)	0.9	2.1	0.7	2.2	1.8	
		G11-80 1層	155	10.8	7.3	0.9	(4.4)	1.7	(9)	1.0	2.1	0.7	2.1		
		P95-81 1層		(110)	7.6	1.2	(4.4)	1.8	(9)	0.9	2.4	0.8	2.2	1.9	
	Cトレンチ	152	10.8	7.3	1.1	(4.0)	1.7	(9)	0.9	2.2	0.8	2.4	2.1		
	Dトレンチ		(108)	(7.6)	1.2	(4.4)	1.8	(9)	1.0	2.3	0.8	1.8	1.9		
	Dトレンチ		(100)	7.3	1.1	(4.2)	1.7	(9)	1.1		(0.8)		1.5		
	Eトレンチ		158	10.7	7.6	(1.0)	(4.2)	1.6	(9)	1.1		(0.8)			
	トイ立	2031226	155	10.6	7.5	1.1	(4.2)	1.6	(9)	1.0	2.5	0.9	2.2	1.7	

桔梗紋軒丸瓦 3 C

遺物番号	実測番号	出土地点	直径	文様区格	内区			外区			周縁部			中央厚さ	備考	
					直径	難蕊 径	雄蕊 沈穂	幅	珠文 数	珠文 径	幅	高さ	側縁 厚			
104	+34	石垣工事 東	150	10.6	7.4	1.1	4.2	1.6	9	1.0	2.0	0.6	2.0	2.1		
		石垣工事 東(1)		11.0	7.8	1.0	4.2	1.6	9	0.9	2.2	(0.5)				
		石垣工事 東(2)		11.0	7.6	1.1	4.2	1.6	9	1.0	2.1	0.5	2.1	2.0		
	Cトレンチ			11.2	7.6	1.2	4.2	1.6	9	1.0	2.1	0.8	1.7			
	Dトレンチ			154	(112)	7.6	1.1	4.2	1.8	9	1.0	2.0	0.6	2.4	2.0	
	Kトレンチ			(154)	10.6	7.4	1.1	4.2	1.7	9	1.0	2.3	0.6	1.9	2.0	

桔梗紋軒丸瓦 4

遺物番号	実測番号	出土地点	直径	文様区格	内区			外区			周縁部			中央厚さ	備考
					直径	難蕊 径	雄蕊 沈穂	幅	珠文 数	珠文 径	幅	高さ	側縁 厚		
105	+47	Dトレンチ						1.5		1.0	2.5	0.6			
106	+33	石垣工事			(7.9)	1.3	(4.2)	1.6	(7?)	1.0	2.3	0.6	2.0	2.0	
107	S55	五輪階下 2 T 2層						1.2	(4.4)	1.55	(0.8)	(2.3)	(0.6)	2.0	1.8
		石垣工事 南													



九曜紋軒丸瓦(9.5-3-2)

遺物番号	実測番号	出土地点	瓦当部								備考	
			直径	文様区径	中心窓径	窓径	中心窓と窓の間隔	窓と外縫の間隔	周縫部	中央厚さ		
幅	高さ	周縫厚										
108	+201	G9-78・79・70	165	95	30	19	0.7	0.6	3.4	0.5	2.1	20
109	451	石垣工事	165	95	31	18	0.7	0.5	3.3	0.5	1.8	
110	460	石垣工事 A-5	170	97	32	20	0.6	0.6	3.2	0.5	1.9	
	G10-80 1層他		165	95	31	18	0.8	0.6	3.3	0.4	2.5	20
	G9-81 1号・他		160	95	32	18	0.7	0.5	3.2	0.5	2.3	21
	F95-81 1層		165	97	32	20	0.8	0.8	3.3	0.4	2.1	20
	Kトレンチ		160	95	30	18	0.7	0.6	3.3	0.4	(2.4)	21
	石垣工事 B-6		160	94	30	19	0.6	0.6	3.3	0.5	(2.1)	19
	石垣工事 A-3		165	95	31	19	0.7	0.5	3.4	0.5	2.5	20
	石垣工事 A-4		162	95	31	20	0.7	0.6	3.3	0.5	2.2	22
	石垣工事 A-5		165	97	32	20	0.8	0.6	3.1	0.5	2.3	23
	G10-81 1層		160	93	30	18	0.7	0.6	3.3	0.5	2.0	20
	G10-80 1層											

九曜紋軒丸瓦(10.5-3.3-1.8)

遺物番号	実測番号	出土地点	瓦当部								備考	
			直径	文様区径	中心窓径	窓径	中心窓と窓の間隔	窓と外縫の間隔	周縫部	中央厚さ		
幅	高さ	周縫厚										
111	+193	石垣工事 南	156	107	32	15	0.8	0.5	2.2	0.6	2.2	25
112	+200	Gトレンチ	145	105	32	18	0.9	0.9	2.0	0.3	1.6	18
113	452	G14-81 1層	150	108	35	19	0.8	0.7	2.0	0.5	1.8	16
114	+209	F95-79 2層	150	105	36	18	0.6	0.8	2.1	0.5	2.0	23
115	+182	石垣工事 南	158	105	36	25	0.6	0.6	2.6	0.3	2.0	長い軒丸瓦
	石垣工事 南		150	105	33	15	1.0	1.0	2.2	0.5	2.1	22
	石垣工事 A-3		142	105	32	18	0.9	0.9	1.5	0.3	2.3	25
	石垣工事 B-3		140	105	33	18	1.0	1.0	1.8	0.3	2.4	26
	G10-80 1層											

九曜紋軒丸瓦(10.5-3.9-2)

遺物番号	実測番号	出土地点	瓦当部								備考	
			直径	文様区径	中心窓径	窓径	中心窓と窓の間隔	窓と外縫の間隔	周縫部	中央厚さ		
幅	高さ	周縫厚										
116	+207	トレンチ	150	105	39	21	0.5	0.6	2.1	0.4	2.2	23
	石垣工事 東		148	105	39	21	0.4	0.6	2.2	0.6	2.7	24
	石垣工事 東		(150)	105	38	21	0.5	0.6	2.3	0.4	1.9	25
	石垣工事 西		151	106	38	18	0.7	0.6	2.3	0.7	2.5	22
	G10-80 1層		(148)	(105)	39	23	0.5	0.6	(2.4)	0.5	(18)	24

九曜紋軒丸瓦(10.5-4-2)

遺物番号	実測番号	出土地点	瓦当部								備考	
			直径	文様区径	中心窓径	窓径	中心窓と窓の間隔	窓と外縫の間隔	周縫部	中央厚さ		
幅	高さ	周縫厚										
117	462	石垣工事 B-3	150	106	38	22	0.6	0.6	2.2	0.5	1.6	18
118	446	石垣工事 B-4	150	105	39	21	0.8	0.6	2.0	0.7	2.1	19
119	S78	G8-81 10層	153	105	40	21	0.7	0.5	2.5	0.7	2.1	20
	Kトレンチ		(150)	(105)	39	22	0.5	0.7	2.4	0.4		117に近似
	石垣工事 西		145	107	41	20	0.5	0.5	2.0	0.4	1.7	21
	石垣工事 南		148	105	40	20	0.6	0.7	2.1	0.7	2.4	21
	Kトレンチ		145	105	38	21	0.7	0.6	2.0	0.6	2.0	19
	石垣工事 B-4		148	105	40	21	0.7	0.5	2.0	0.7	2.1	19
	G10-81 1層他		151	107	(39)	20	0.7	0.7	2.1	0.5	2.4	
	石垣工事 B-4		153	107	40	21	0.6	0.5	2.0	0.7	2.1	19

九曜紋軒丸瓦(10.5-4.2-2)

遺物番号	実測番号	出土地点	瓦当部								備考
			直径	文様区径	中心曜径	曜径	中心曜と裏の間隔	曜と外縁の間隔	周縁部	中央厚さ	
120	453	Dトレーナー	145	105	45	20	0.5	0.4	[22] 0.3	19	18
121	445	E事	155	105	42	20	0.5	0.5	[26] 0.4	21	21
122	448	G8-81 1層	158	105	42	19	0.6	0.6	[26] 0.4	19	20
123	458	石垣工事F95-79	155	113	42	19	0.8	0.8	[23] 0.6	[25]	28

九曜紋軒丸瓦(11.3.5-2)

遺物番号	実測番号	出土地点	瓦当部								備考
			直径	文様区径	中心曜径	曜径	中心曜と裏の間隔	曜と外縁の間隔	周縁部	中央厚さ	
124	+25	E事 南	152	110	30	19	1.5	0.7	19	0.6	25
125	447	Gトレーナー	146	110	33	22	0.8	0.8	17	0.3	25
		G10-78 1層	150	110	32	22	0.9	0.6	19	0.5	25
		Cトレーナー	150	110	35	20	1.0	0.7	19	0.5	20
											[20]

九曜紋軒丸瓦(11.3.8-2.3)

遺物番号	実測番号	出土地点	瓦当部								備考
			直径	文様区径	中心曜径	曜径	中心曜と裏の間隔	曜と外縁の間隔	周縁部	中央厚さ	
126	+184	G8-81 10層	160	112	40	23	0.6	0.6	20	0.8	21
127	+200	Gトレーナー	145	110	38	23	1.0	0.4	16	0.4	25
		(15.7)	113	40	23	0.6	0.6	21	0.8	20	16
		Kトレーナー	150	110	41	23	0.7	0.5	21	0.6	20
		石垣工事A-5	(15)	113	40	23	0.7	0.7	19	0.7	19
		石垣工事	(15)	113	40	23	0.7	0.7			

九曜紋軒丸瓦(11.4-1.9)

遺物番号	実測番号	出土地点	瓦当部								備考
			直径	文様区径	中心曜径	曜径	中心曜と裏の間隔	曜と外縁の間隔	周縁部	中央厚さ	
128	466	G10-81 1層	(15.7)	110	41	19	0.8	1.0	22	0.5	18
129	474	E事 A-2	155	110	41	19	0.8	0.9	19	0.7	[20]
130	470	Lトレーナー	152	110	40	18	0.7	0.8	20	0.5	21
		Lトレーナー	(15.2)	108	40	18	0.8	0.7	20	0.6	[21]
		E事 南	155	110	41	19	0.7	0.8	22	0.5	20
		G8-81 1層	150	110	40	19	0.8	0.9	17	0.7	22
		G10-80 1層	(15.2)	110	40	19	0.8	0.9	18	0.7	21
		E事 南	(15.4)	110	41	19	0.7	0.8	20	0.5	[20]

九曜紋軒丸瓦(11.4-4.2)

遺物番号	実測番号	出土地点	瓦当部								備考
			直径	文様区径	中心曜径	曜径	中心曜と裏の間隔	曜と外縁の間隔	周縁部	中央厚さ	
131	+179	Dトレーナー	(15.2)	110	40	23	0.8	0.6	20	0.6	
132	457	E事 A-6	155	110	40	23					文様不明瞭
133	455	E事 A-4	152	107	38	21					文様不明瞭
134	465	G8-81 1層	154	108	41	20	0.8	0.7	20	0.7	24
135	473	石垣工事B-4	(15.7)	110	40	20	0.7	0.7	23	0.8	23
		G10-80 1層	165	110	40	23	0.8	0.6	[29]	0.6	22
		Dトレーナー	156	110	40	23	0.8	0.6	[24]	0.6	20
		石垣工事 A-4	160	110	40	23	0.8	0.7	21	0.6	19
		石垣工事 東	160	112	40	22	0.8	0.8	23	0.7	[25]
		石垣工事 F95-80	157	110	40	23	0.8	0.7	20	0.6	20
		Gトレーナー	157	112	40	22	0.8	0.7	21	0.6	19
		五輪橋下 1T2層	(15.8)	110	40	20	0.8	0.7	[26]	0.6	21
		五輪橋下 3T2層	(15.4)	110	40	20	0.8	0.7	22	0.8	20
		Dトレーナー	(15.1)	111	41	20	0.8	0.7	21	0.6	21
		Dトレーナー	150	108	40	20	0.7	0.8	21	0.6	23
		Dトレーナー	154	108	41	20	0.7	0.8	20	0.7	22
		F95-79 2層	110	40	20	(0.8)	(0.7)	[24]	(0.7)	[21]	17
		G10-80 1層	(15.7)	110	41	20	0.7	0.8	21	0.8	28
		G10-80 1 層	(15.6)	110	41	20	0.7	0.7	21	0.8	20
		G10-80 1 層	154	107	41	20	0.7	0.7	23	0.5	[20]
		G11-81 1層	(15.1)	110	41	20	0.7	0.7	19	0.7	18
		石垣工事 F95-80	153	109	40	20	0.7	0.7	20	0.8	25
		石垣工事 東	152	110	40	20	0.7	0.8	23	0.8	20
		石垣工事 A-4	160	110	41	20	0.6	0.8	21	0.5	19
		石垣工事 A-4	109	40	20	0.8	0.8	18	0.5	18	20
		石垣工事 A-5	152	110	40	20	0.6	0.7	19	0.8	23
		石垣工事 A-5	(15.4)	110	41	20	0.8	0.8	20	0.8	22
		G11-81 1層	(15.6)	108	40	20	0.7	0.7	22	0.7	21
		Jトレーナー	(15.5)	110	39	21	0.9	0.6	23	0.5	18
		石垣工事 A-6	(15.6)	110	41	21	0.9	1.0	21	0.8	23
		石垣工事 東	154	107	41	20	0.7	0.7	23	0.7	23
		石垣工事 A-4	150	110	39	20	0.8	0.7	18	0.5	22
		Kトレーナー	(15.2)	108	40	20	0.7	0.8	[26]	[0.8]	[20]
		石垣工事 A-5	(15.8)	110	40	20	0.7	0.8	23	0.8	20

(8) 刻印（第153～168図）

a. 瓦の刻印について

飯田丸から出土した瓦のなかで、刻印のあるものについて述べる。刻印の種類としては、年号が記されたもの、工人の名前を記したもの、工人の名前の一部と思われる漢字一字を表したもの、記号的なものに大きく分類することができる。

年号入りの刻印としては、元禄年間のものが大半を占め、宝永年間のものも数点みられた。刻印のパターンとしては、第153図の「元禄五中ノ 小山 安兵衛」のように、年号・製作地・製作者の三つを記すものが最も多い。判は角形と丸形のものが見られた。元禄・宝永年間の刻印を持つ瓦は飯田丸に限らず、城内の各所の発掘調査で出土している。17世紀末から18世紀初頭の年号入りの刻印が多く見られるのは、この時期の工人たちが好んで使用したためか、この時期に城内で瓦の葺き替えが一斉になされたのか、明らかではない。

この時期の城内修補としては、元禄16（1703）年に小天守下の石門部分の石垣の積み直しに伴って、上部に建てられていた櫓が解体・再建され、翌17（1704）年に完成している。このほかにも、城内の櫓以外の建築物の修復等が行われている可能性があり、今後検討を要する。また、地震や大雨・洪水等の災害による破損・修復についても考慮に入れる必要がある。

職人の名前を表した刻印には、第153図の「土山 弥右衛門」のように地名と名前を記すもの、第159図の「巳 五右衛門」のように製作年の十二支と名前を記すもの、名前のみが記されたもの、第154図の「作半左衛門」のように製作者であることを明示したものが見られた。

次に、丸形に「五」のように福田五右衛門の漢字一字を記したものや、漢字一字に十二支を組み合わせたものも見られた。なお、同じ「五」と記された刻印でも複数の範が存在している。これは、破損によって新たに範が作られたこと、世代によって範を作り変えたこと、同一人物が複数の範を使い分けていることなどが考えられる。

このほかに、工人の名前を示す刻印としては第161図にある「猿渡」や北村家を示す「北」のように苗字を記したものもある。熊本藩では、百姓や町人らが献金等の「寸志」によって苗字・帶刀御免を受ける事例が近世中期以降増加する。寛政11（1799）年から明治3（1870）年までの熊本藩住民の様々な社会活動について、藩が評価・褒賞した記録である「町在」（永青文庫蔵）には、小山・土山の瓦師たちが寸志を行ない、賞美されたことが記されている。刻印に苗字が記されるようになる意味は、寸志による苗字御免の獲得との関係を視野に入れ、検討する必要があるだろう。

記号的な刻印の種類としては、九曜・桔梗・丸に一つ引きのように家紋として使用されるものほか、丸や菱、花形などが見られる。これらの刻印が、製作者を示すものか、瓦を発注した細川家臣を示すものとして利用されたのか、もしくは瓦を葺く過程での目印として使用されたのかなどは、今後検討していく必要がある。

以上の刻印のほかに、「御用」と記されたものも見られ、目的によって判が使い分けられていたと考えられる。

なお、小山・土山で製作された瓦のほかに、近代以降に柳川で製造されたことを示す刻印を持つ瓦が出土している。第168図の「筑後山門郡 江崎元製 川北村字柳川」とある刻印から、筑後国山門郡川北村で製造されたことがわかる。現在の福岡県柳川市三橋町にあたり、塩塚川沿岸には文久2（1862）年創業の江崎洋瓦本店が現在も操業している¹⁾。また、「甲斐田謹製」とある甲斐田家は大正から終戦の頃にかけて筑後柳川で広く瓦を扱っていた²⁾。

b. 瓦師について

瓦の刻印に「小山」・「土山」とあるのは、瓦の製造された地名を指していると考えられる。「小山」は現在の熊本市東区小山、「土山」は上益城郡益城町小池にあたる。瓦師福田家の先祖附によれば、小山での瓦の製造は加藤清正の頃より行なわれていたとされる。元和8(1622)年の加藤家分限帳³⁾には「一、参拾人扶持 瓦焼拾五人」と記されており、加藤家は瓦製造のための職人集団を召抱えていたことが知られる。

細川氏入国後の瓦師は、当初御作事頭の配下に置かれた。その後、安永7(1778)年に御郡代支配となり、瓦師の中から瓦師横目を置くことになった。しかし、天明6(1786)年には再び御作事頭支配となり、さらに文化7(1810)年には御郡代支配となっている。

次に、小山・土山で瓦の製造を行った主な瓦師について述べる。瓦師棟梁の概要や系図は『土山の歴史』、『肥後讀史總覽』、『益城町史 史料・民俗編』、『益城町史 通史編』などによって紹介されている。今回はすでに刊行されているものから瓦師棟梁を勤めた主な家の系図を作成し、掲載した。しかしながら、史料の制約上、数代の欠落等がみられる。史料調査による人名の捕捉については今後の課題である。

猿渡家

猿渡家	初代	二代目	三代目	四代目
	甚左衛門	庄右衛門	庄右衛門	甚四郎
			瓦師棟梁(享保元一寛延2)	瓦師棟梁(寛延2一安永7)
		享保20年2月5日没(88歳)	宝暦5年4月7日没(71歳)	天明5年1月29日没(73歳)
	五代目	六代目	七代目	八代目
	庄右衛門	庄左衛門	庄左衛門	龍造
	(茂七・庄右衛門)	(喜文)	(五郎助)	
	瓦師棟梁(安永7一天明6)	瓦師棟梁(天明6一天保3)	瓦師棟梁(天保3一天保14)	瓦師棟梁(天保14一?)
	天明7年5月没	天保3年9月29日(76歳)	天保14年1月22日没(52歳)	

北村家

初代北村与兵衛は加藤清正の入国に伴って江戸浅草より土山に移住したと伝えられている。扶持を拝領し、瓦師棟梁に任命された。二代目の太右衛門も瓦師棟梁に任命され、毎年米5俵が与えられ、120石の引高が設定されている。以降幕末まで、北村家は代々瓦師棟梁等を勤めた。

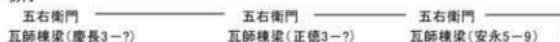
北村家	初代	二代目	三代目	四代目	五代目
	与兵衛	太右衛門	太右衛門	茂兵衛	甚次郎
	瓦師棟梁	瓦師棟梁	瓦師棟梁	瓦師棟梁(寛保2一安永4)	瓦師棟梁(安永9一文化10)
				寛政2年9月没(78歳)	
	六代目	七代目	八代目		
	角右衛門	新藏	嘉市		
	(平左衛門)				
	瓦師棟梁(文化10一天保11)	瓦師棟梁(天保11一弘化3)	瓦師棟梁(弘化3一?)		
	天保11年4月28日没(77歳)	弘化3年7月10日没(54歳)			
	九代目	十代目	十一代目		
	清藏	清兵衛(多門)	清兵衛(多門)		
	瓦師棟梁(文化3一弘化元)	瓦師棟梁(弘化3一?)	瓦師棟梁(弘化3一?)		
	安政3年10月28日没(84歳)	明治7年3月没(73歳)			

福田家

初代福田五右衛門は慶長3（1598）年に「熊本御城御造営之節瓦師棟梁職」に任じられ、小山村に居住したと伝えられる。その後、小山の瓦土が乏しくなったことから寛文12（1672）年に鷹手水土山村に移った。代々、瓦師棟梁や瓦師横目などの職を勤めた。なお、福田家は土山へ転居しているが、一部は小山に残り瓦の製造を続けているようである。『肥後讀史總覽』には小山村瓦師棟梁福田勘次郎が文化7（1810）年に死亡し、息子の順太が瓦師棟梁を拝命したとある。

福田家について『熊本市史』では、「同家は、もと清正公が朝鮮から伴つて来られた、所謂『高麗人』の子孫」という伝承を紹介している。

福田家 初代

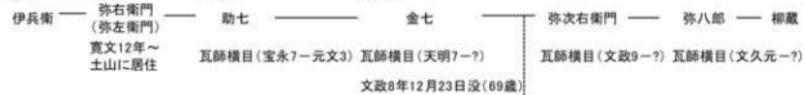


儀平太 (林右衛門)	常右衛門	五四郎
瓦師棟梁(天明6-文化3) 文政9年3月1日没	瓦師棟梁(弘化元-?) 明治3年2月8日没(86歳)	

芦原家

初代芦原伊兵衛は蒲生飛驒守氏郷に仕えていたが、天正18（1590）年の蒲生家の会津転封に伴い浪人となり、その後詫磨郡本庄手永小山村に居住したとされる。伊兵衛の死後、子の弥右衛門は渡世の手段として瓦職を覚え、小山村に扶持方・家屋敷を拝領した。その後、小山村の瓦土が少なくなったことから寛文12年に土山に移り、御用瓦の製造にあたった。その後、芦原家は瓦師横目等の職を勤めている。

芦原家 初代



文政8年12月23日没(69歳)

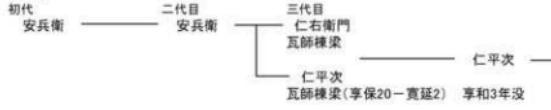
善五郎 — 楊右衛門

半助 — 文太 — 角馬

坂上家

坂上家の記録によれば、初代の坂上安兵衛は江戸浅草に居住し、加藤清正の入国に伴って鷹手水小池村の内土山に居住し、4人扶持を拝領、帶刀御免を受けた。築城にあたっては瓦焼を勤めた。二代目安兵衛も細川忠利入国後に瓦師として取り立てられ、御用瓦を製造した。その後、坂上仁右衛門と弟仁平次は享保9（1724）年に御用瓦師持懸で、熊本藩家老である松井求馬の家臣となっている。

坂上家 初代



仁平次
瓦師棟梁(享保20-寛延2)
享和3年没

五代目 順七	六代目 栄太	七代目 順藏
文政7年11月没	万延2年1月没	

北村家や坂上家の記録によれば、加藤清正の入国に伴って江戸浅草から土山に居住したとある。しかしながら、「武江年表」によれば江戸で瓦が焼き始められたのは正保2（1645）年となっており、江戸城の造営や再建等に必要な瓦は京・大坂からの遠距離輸送によってまかなわれていたとの見解がある^①。清正が江戸より瓦師を連れて入国したという説は今後検討を要する。

本報告では、刻印から瓦師の名前や年代等の特定は行なわず、刻印の判読のみにとどまった。刻印のうち、判読できなかった文字を□・〔 〕で示した。また、判読できなかったものについても、同文と思われる刻印から文字が比定できるものについては（ ）で示した。

〔註〕

- 1) 福岡県教育委員会「有明海沿岸道路大川バイパス関係埋蔵文化財調査報告 第12集 矢加部町屋敷遺跡Ⅳ 蒲船津西ノ内遺跡・蒲船津水町遺跡」2012
- 2) 富樫卯三郎「カヤブキの棟瓦一月翁公の蕉夢庵についてー」「夜豆志呂 64号」八代史談会 1982
- 3) 山田康弘・高野和人編『青潮社歴史選書4 肥後加藤侯分限帳』青潮社 1987
- 4) 上原真人『歴史発掘① 瓦を読む』講談社 1997

〔参考文献〕

- (1) 坂上一雄『土山の歴史』1959
- (2) 平野流香『熊本市史 復刻版』熊本市 青潮社 1973
- (3) 松本雅明監修『肥後歴史総覧 上巻』鶴屋百貨店 1983
- (4) 森田克行「畿内における近世瓦の成立について」「撰津高櫻城」高櫻市教育委員会 1984
- (5) 益城町史編さん委員会編『益城町史 史料・民俗編』益城町 1989
- (6) 益城町史編さん委員会編『益城町史 通史編』益城町 1990
- (7) 後藤宏爾「名護屋城跡出土の軒平瓦」「研究紀要第2集」佐賀県立名護屋城博物館 1996
- (8) 宮崎博司「名護屋城跡出土の軒丸瓦」「研究紀要第3集」佐賀県立名護屋城博物館 1997
- (9) 宮崎博司「肥前名護屋城跡出土の節瓦」「研究紀要第5集」佐賀県立名護屋城博物館 1999
- (10) 熊本市教育委員会『特別史跡 熊本城跡 石垣保存修理工事・発掘調査報告書』1999
- (11) 芦北町教育委員会『佐敷城跡』2004
- (12) 八代市教育委員会『麦島城跡』2006
- (13) 山崎信二『近世瓦の研究』同成社 2008



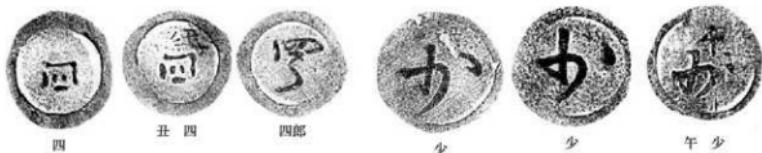
0 5cm

第153図 出土瓦刻印拓本1 (1/2)



第154図 出土瓦刻印拓本2 (1/2)

0 5cm

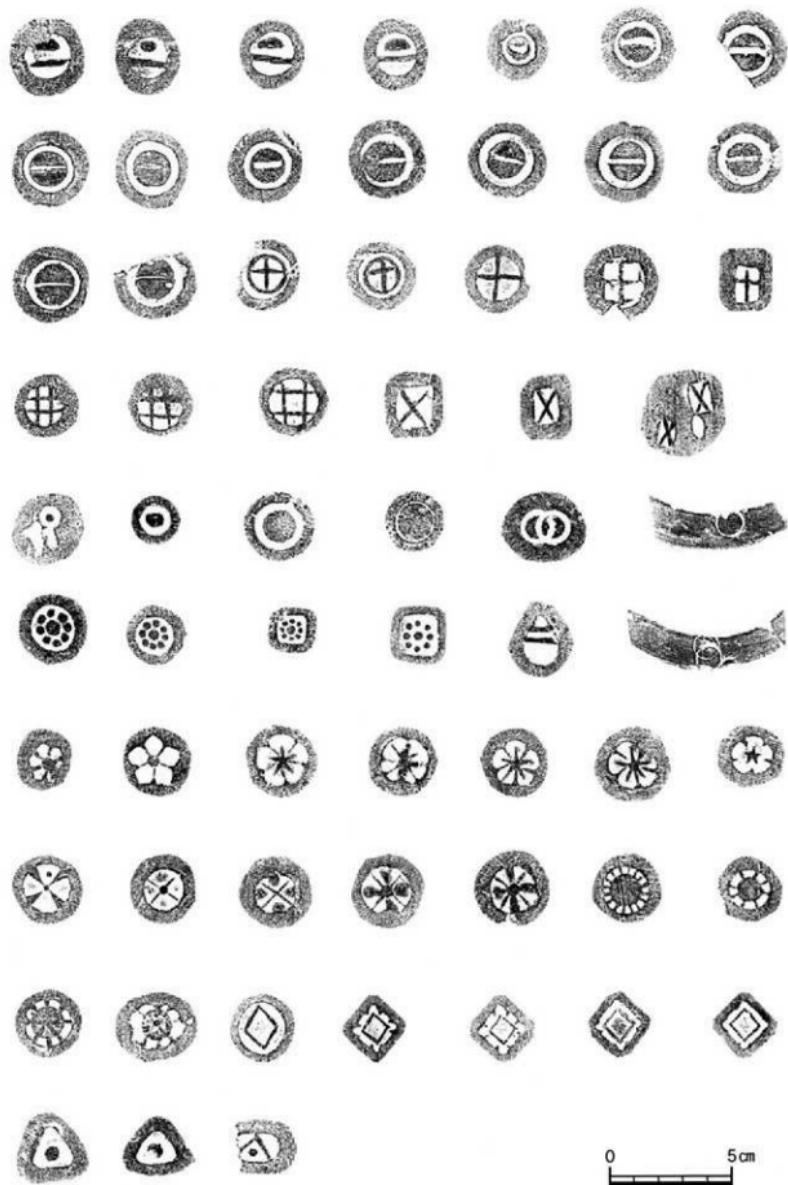


第155図 出土瓦刻印拓本 3 (1 / 2)





第156図 出土瓦刻印拓本4 (1/2)



第157図 出土瓦刻印拓本5 (1/2)



第158回 出土瓦刻印拓本6 (1 / 2)

0 5cm



第159回 出土瓦刻印拓本 7 (1 / 2)

0 5cm



0 5cm

第160図 出土瓦刻印拓本 8 (1/2)



第161図 出土瓦刻印拓本9 (1 / 2)

0 5cm



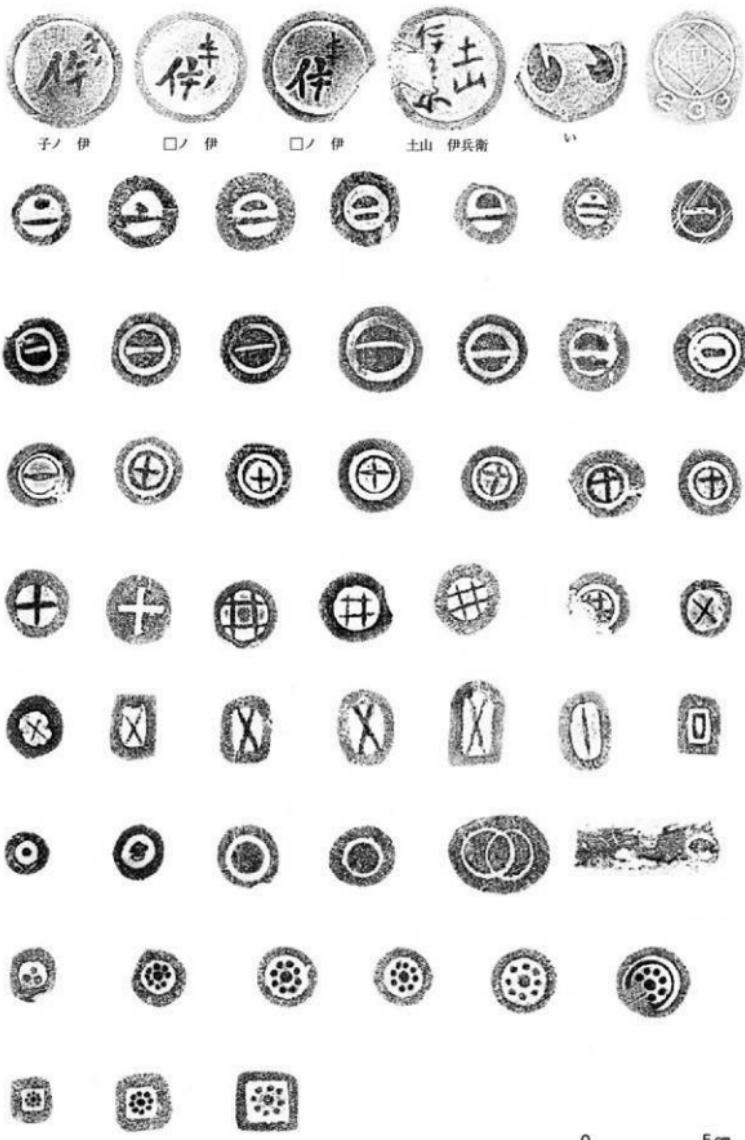
第162図 出土瓦刻印拓本10 (1 / 2)

0 5 cm

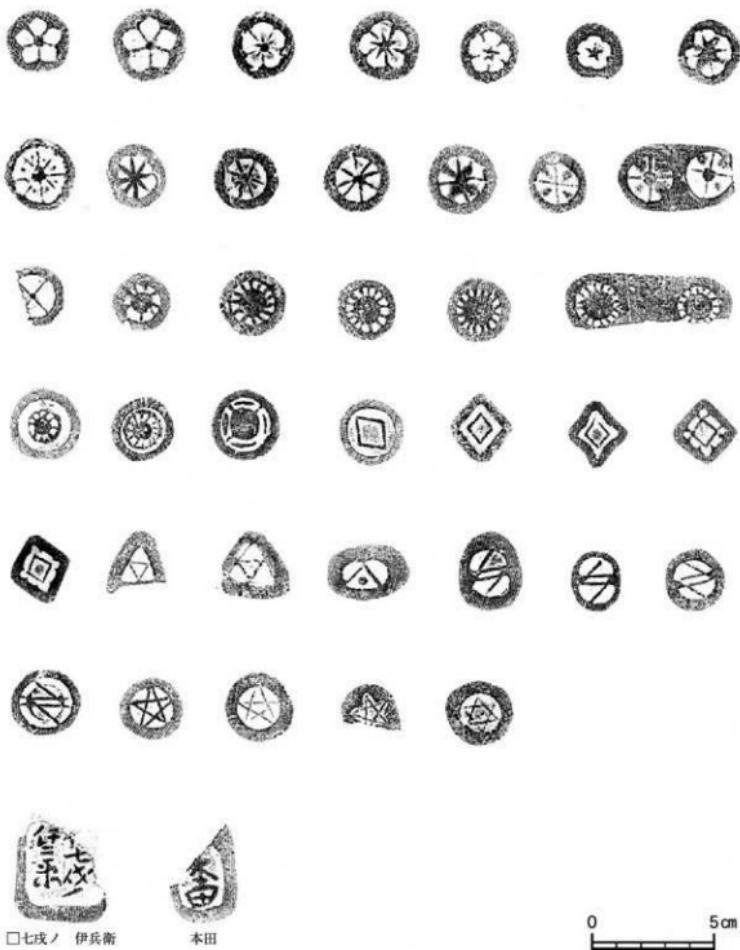


第163図 出土瓦刻印拓本11（1／2）

0 5cm



第164図 出土瓦刻印拓本12 (1 / 2)



第165図 出土瓦刻印拓本13 (1 / 2)



五右衛門



五右衛門



一右衛門



一右衛門

(衛門)
一右[]

二郎兵へ



土□ 又四良



[]



五



猿渡



猿渡 []

(猿渡)
□□甚

山西



北村□□



元禄七 土山[]



[]



重兵

元[]土山 四右衛門
(土) □山 弥右衛門

四郎



五郎兵衛



[]勘七



新二良



太三□



庄



山本郡平



第166図 出土瓦刻印拓本14 (1 / 2)

0 5cm



第167図 出土瓦刻印拓本15 (1 / 2)



(門郡)
筑後山[]
江崎元製
川北村字柳川



筑後山門郡
江崎元製
川北村字柳川



筑後山門郡
江崎元製
川北村字柳川



[]
山門郡柳川村
江崎(元)



柳河[]
下河竹松製



(後)
筑倉□
山門郡
合名
柳川散田



筑羽後
柳川
竹松
散田



下川末[]



下河竹松製



(甲)
斐田謹製



昭和三十年修補 []年修補



△



0 5 cm

第168図 出土瓦刻印拓本16 (1/2)

第5章　まとめ

1. 遺構

飯田丸は正保年間頃には本丸扱いとされた場所で、「たけの丸」「嶽ノ丸」とも呼称され、二ノ丸から西櫓御門を利用して直接上位の数寄屋丸や御本丸に通じた要衝の地点であった。平時は清正御室「竹之丸殿」の居所として利用された可能性があるが、天守西側の平左衛門丸が「加藤平左衛門屋敷」とあり、平左衛門預り曲輪であったと推定されるように、戦時になると飯田覚兵衛が曲輪防衛の責任者となる曲輪に由来する呼び名であったとも推定される。

飯田丸の五階櫓や百間櫓は西南戦争までに撤去されており、西櫓御門のみが残されていた¹⁾。石垣の特徴から、飯田丸曲輪の造成は大天守台やその下段の平左衛門丸の普請後に着手され、東竹ノ丸に先行する形で完成しており、その時期は大天守台竣工の慶長4・5年を大きく経過しない段階に比定できる。新城着手の早い時期に普請された理由は、御本丸の西面を防護する場所で虎口も置かれたこと、また、同時期に南側に独立して置かれた西竹ノ丸五階櫓と札櫓御門で連絡する曲輪としたように、御本丸南面の防護を担う曲輪造成が築城初期には特に急がれたことが推測できる。

飯田丸五階櫓は当初の曲輪隅を張出させて櫓台に改造しており、慶長後半以降の加藤氏統治代の改造とみられる。櫓台の大型化は防衛計画の見直しに相当する。慶長後半期は「清正自身がこの時期に何らかの危機感を抱き、国内各地の城郭の改造を推し進め、その防衛体制を強化していくことは確実」との指摘もあり²⁾、加藤氏の本城支城体制を通じた築城と改造の分析検討が必要となる。

西南戦争時に砲台として利用されたらしい飯田丸五階櫓の跡地では、櫓台の北西部に礎石列が良好に残っていて、それは柱間6尺5寸で『御城内御絵図』の柱や間仕切りの位置とも一致していた。しかし、他の櫓台上面は大きく攪乱を受けていた。攪乱は、明治22年大地震での櫓台南部の崩落と、その後の修復工事に原因するものだった。この前年、熊本鎮台は第六師団となり、歩兵第十一旅団本部が飯田丸に移っていた。被災した石垣の修復は陸軍が行ったが、多くは谷積みを採用したものであった³⁾。

百間櫓跡の石塁でも西南戦争の痕跡や遺物の出土があった。礎石の一部は『御城内御絵図』の柱位置と一致したが、その多くは撤去されていた。西櫓御門は、明治7・8年頃に上部の櫓部分を撤去し、平屋で切妻の瓦屋根に改築されていた。「向埋御門」では柱の追加や上部石塁の撤去による加重軽減工事がされていたが、こうした改造も当城郭を鎮台とした陸軍が行ったものとみられる。

五階櫓台北側の百間櫓台36mと同東側の曲輪南辺40mと曲輪東辺26mの石塁は、内壁となる石垣を根元の一石を残す形で撤去されていた。熊本城跡では同時期とみられる同様な石塁の改変が、数寄屋丸南辺石塁や西辺石塁、西出丸の奉行丸西辺石塁で認められ、西出丸の西大手門から北の戌亥櫓の間の石塁の場合は前面の石垣も撤去されている（第169図参照）。この西出丸での石塁撤去の様子は古写真があり、その撤去は明治8年から9年と推定されている⁴⁾が、西南戦争開戦直前にはその跡地には敵弾避けの堡籠を設置した写真があり、石塁の撤去と堡籠設置が連関して実施されたとも推測できる。この事例からすると、史料で確認できない石塁内壁撤去も同様の目的をもって鎮台が主体的に行なった対戦争措置であった可能性が強い。

『隈岡大尉陣中日誌』には、2月15日から「城ノ内外石垣及ビ法花坂近傍等ノ藪ヲ刈リ掃除ニ着手シ」、同16日も「同ジク城内外石垣等ノ掃除及ビ城内各處ニ櫻門設置ニ着手ス」、18日には「城内外ノ掃除及ビ櫻門落成、城内顔ル清潔」とあり、防戦の準備に櫻・門を築くとともに石垣の掃除を行っている。開戦直前の切迫した時期に櫻・門の設置と併記されている「石垣等ノ掃除」とは、来る西郷軍との対戦に向けた台場構築のための石垣の内壁撤去といった措置を含んでいた可能性も考えておきたい。

すなわち、幕末になると西洋軍事学が採用され軍事施設や装備などが大きく変化することになる。時代は特に大砲を使用する砲戦中心へ移行していた。「西洋式の稜堡は、石垣・石壁は用いない。石垣に砲弾があたった際、石材が飛び散って危険だからである。そのため十七世紀以降、西欧の城の墨壁面は、土塁が主流であった。土塁であれば、砲座から大砲を撃つ際の震動も吸収できる。多くの墨壁は柴土居であった」という⁵⁾。幕末に登場する品川台場や五稜郭といった洋式の稜堡式城郭は石垣が基礎に採用されていたが、砲台の主たる部分は土居仕上げとしていたように、陣地造営の方法は從来の城郭觀からの転向を余儀なくされていた。熊本城跡での西南戦争に際しても着弾した砲弾の威力を減少させる理由から、石塁そのものや石塁内壁の撤去をおこなっていたのではないだろうか。

西南戦争直後に両軍の戦力の配置状況を記録した「両軍配備図」が作成されている（第18図参照）。この図を参考に大砲の砲台や歩兵台場、竹柵・鹿柴（サカモギ）・地雷などを現在の地形図に落としてみた（第169図）。砲台は四斤山砲や四斤野砲を馬具櫓、飯田丸・本丸の御裏五階櫓跡東や同所長局跡の石垣上、櫛方櫓跡、通称「監物台」の東辺と北隅櫓、埋門近く、三ノ丸新堀門西側石垣上などに配置している。櫛方櫓跡や馬具櫓跡に置かれた砲台は戦争前後の古写真が残っていて、石垣天端上に高さ0.8～1mほどの堡籠による胸壁があり、大砲用とみられる隙間が開けられていた⁶⁾。櫓台がない場合も「監物台」の東辺の砲台のように堡籠の背後を砲座としたようである。

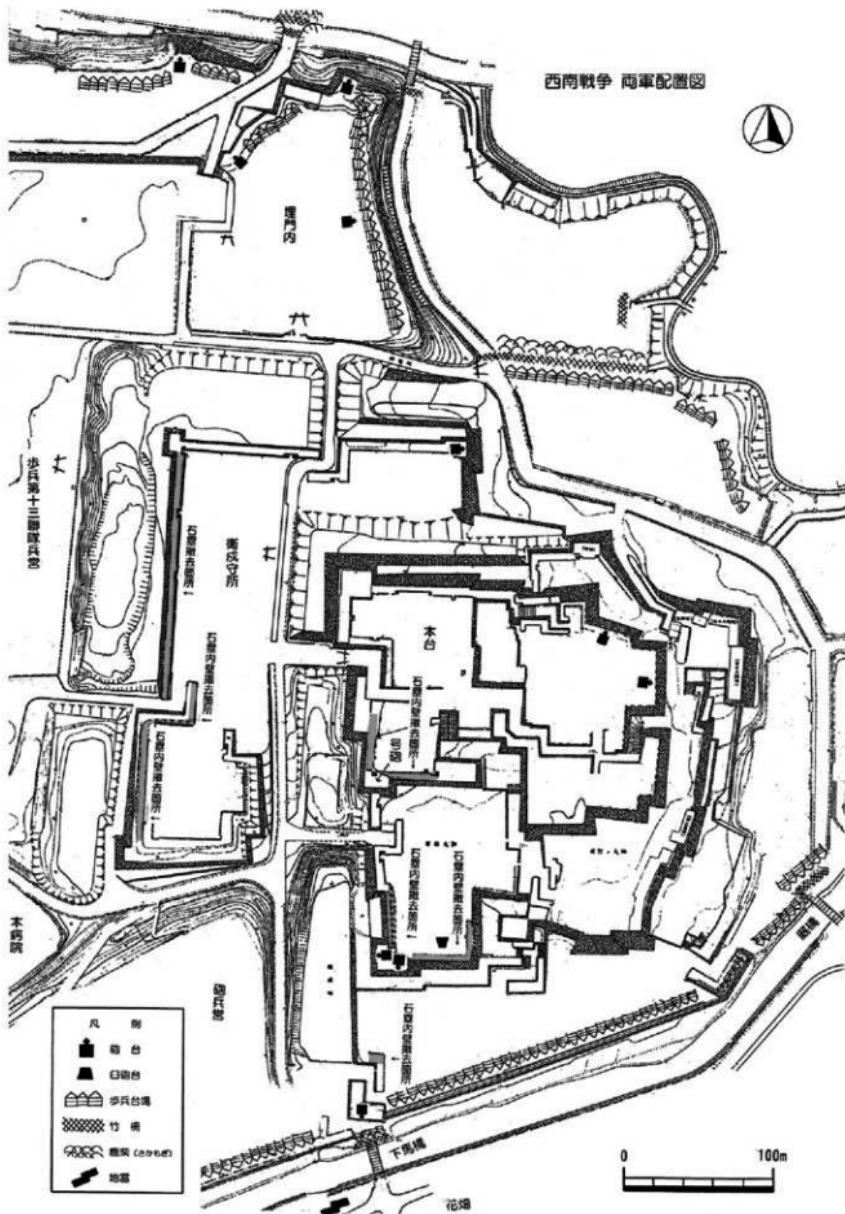
『熊本鎮台戦闘日記』⁷⁾によれば、飯田丸には砲兵隊を配置し、山砲・野砲・臼砲が配備され、彈薬庫も置かれていた。「両軍配備図」の五階櫓台上の二つの砲座は山砲と野砲用とみられ、曲輪の平坦面には「モルチール砲」（臼砲）砲座が一つ設けてあった。先述したように飯田丸や数寄屋丸では城下方面を俯瞰できる東・南側と西側の石塁に関して内壁を撤去し斜面仕上げとしていた。斜面であれば障壁となる石塁にできるだけ近づいて砲座を設けることが可能となる。また、斜面上に足場となるテラスを設ければ、石垣を胸壁とした小銃射撃用の台場に利用できたことが推測できる（第170図参照）。

次に当発掘調査での近世に属する遺物の出土状況によると、16世紀末～17世紀前半と19世紀初頭～中頃の二時期に出土量のピークがある結果となった。調査目的が五階櫓や百間櫓の復元検討資料を得るというものの、曲輪中央部に想定される「竹之丸殿」の居所に因む遺構の確認はできなかったが、西櫓御門が使用されていた期間と重なる前者には肥前産陶器や中国産陶磁器の皿・碗が出土するなど食器を中心とした遺物が出土し、17世紀後半以降になると遺物の量が極端に少なくなる結果となった。江戸中期とともに西櫓御門が閉鎖され曲輪の北東隅には門が設けられて閉鎖的な空間に変貌し、曲輪内にある蔵や櫓を利用した収蔵機能中心の曲輪へと大きく変化したことの反映であろう。

出土品には大量の瓦があるが、17点の桐紋軒丸瓦があった。桐紋は言うまでもなく豊臣秀吉の家紋であり、肥前名護屋城跡出土品を中心とした同範関係の研究も進められており、今後、他の遺跡との同範関係などの確認が必要となる。また、李朝系瓦には軒丸瓦に1種、軒平瓦に2種が確認されている。近世初頭のものには韓国の遺跡や加藤領支城との供給・生産での関係を窺わせる資料があり、更なる検討が必要である。このほかに瓦の刻印も多く確認できた。瓦製作技法の解明や使用建築の特定、瓦師の史料分析などによって刻印瓦の編年が進めば時代判定の有効な考古資料となりえるので、今後も資料集成を鋭意進めていきたい。

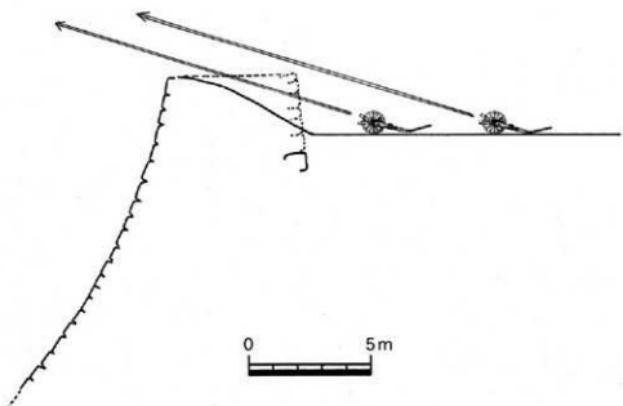
なお、後述のように、当地点の発掘で特筆すべき遺物に西南戦争に係るものがある。小銃弾や同銃薬莢、四斤山砲砲弾片、「モルチール砲」（臼砲）の20ドライム砲弾片の出土は、官軍の砲台設置や西郷軍の砲弾が着弾したという『熊本鎮台戦闘日記』の記述を裏付け、当該戦場の修羅場をイメージさせるのに充分であり、熊本城跡が最後の内戦の戦争遺跡であったことを雄弁に物語るものである。

以上のように今次の発掘調査では、近世城というだけでなく西南戦争遺跡として調査研究する視座が熊本城跡では重要であることを再認識させる結果となった。中世に始まる熊本城跡の多様な歴史的価値を明



第169図 西南戦争籠城時の官軍守備配置図

熊本博物館所蔵 明治11年製作「両軍配置図」を元に作成



第170図 四斤山砲と石垣内壁の撤去関係図

確していくためにも、十分な用意と注意を持って調査と研究に臨んでいく姿勢が必要であることに改めて気付くことになった次第である。

なお、当調査研究センターでは現在、熊本城跡の歴史や特色を考察する上で基本資料となる史料や絵図の調査を進めており、第2章ではその成果を開陳している。従前から熊本県立図書館所蔵の「平山城肥後国熊本城廻絵図」について、正保城絵図写しとの指摘があった⁸⁾。今回、同館所蔵の「肥後國熊本城廻之絵図」及び永青文庫所蔵「熊本城図」の二点も「平山城肥後国熊本城廻絵図」と描写範囲が異なるだけで同一内容の城絵図であることを改めて確認できた（第12図～第14図参照）。この三葉は、これまで不明とされてきた熊本城の正保城絵図の下絵図か控え絵図の可能性が高い。幕府へ提出した公式の城絵図の存在が確認できれば、今後の熊本城研究に果たす役割は大きいものがある。また、永青文庫所蔵の「御城図」（第15図）は、江戸中期（「熊本城 城郭侍屋敷古図集成」）、あるいは江戸後期（「永青文庫」）とされてきたが、18世紀初頭から半ばにかけて製作された絵図であり、寛永以来の史料に「木がたの絵図」「木形」「御城形」と呼ばれた立体模型付きの絵図の一例であることが推定できた。さらに、「御城内御絵図」（第16図）は明和6年（1769）頃の製作とされてきたが、原本にある付け札などの解析を進めた結果、安永2年（1773）を過ぎた頃の様子を描いたものであることが明らかになった。

〔註〕

- 1) 富田紘一「古写真に探る 熊本城と城下町」肥後上代文化研究会 1993
- 2) 高瀬哲郎「南関城の石垣構築について」「南関城跡IV」南関町教育委員会 2011
- 3) 奉公丸南東の石垣や百間石垣、平左衛門丸南西石垣など。
- 4) 註1) 文献に同じ
- 5) 西ヶ谷恭弘「五稜郭を訪ねる」「五稜郭」P H P 研究所 2004
- 6) 「西南戦争アルバム」（財）熊本城顕彰会 1997.
- 7) 「熊本鎮台戦闘日記」東京大学出版会 1977
- 8) 加藤理文「熊本城」「よみがえる日本の城 12」学習研究社 2005

2. 遺物

出土遺物の時期には古代～現代までがあり、うち量的主体は近代である。本報告書では、近代の資料についても積極的に扱い、掲載することとした。当然のことながら、熊本城の本質的価値は主に藩政期にあるが、近代において鎮台・旧日本陸軍の拠点であったことも看過できない歴史であり、この点を重視したものである。

なお、本文中でも述べたが、本報告書では石製品のうち石塔・石臼の報告は行なっていない。石塔・石臼は、石垣の裏込めに使用されたもので、石垣解体修理工事の際に出土し、採集した破片・各部位片であるが、採集後の管理不備から整理作業着手が遅れ、報告書作成期限に掲載を間に合わせることができなかつた。今後、稿を改めて報告することとする。

(1) 陶磁器・土器類

a. 概要

近世資料をみると、その時期には、2つのピークが認められる。16世紀末～17世紀前半と19世紀初頭～中頃である。前者は主に加藤治世期の資料である。肥前産陶器が主体で、他、備前焼鉢、景德鎮窯系・漳州窯系などの中国磁器青花片がみられる。後者、すなわち江戸後期～幕末期の資料は、肥前系磁器染付が主体である。上記以外の時期の产品は極少量である。

近代の資料は、鎮台・旧日本陸軍の軍用地であった時代のものである。このことを象徴するのが軍用食器の出土で、主に20世紀前半の产品である。図線（酸化クロム）、星章文（貼付文）、所有者名（上絵）を施すなど定型化した軍用食器の他でも、ほぼ同時期に比定される飯碗など供膳具の多くは旧日本陸軍において使用されていたものと考えられる。例えば、第89図39の釉下彩鉢は、口縁部の形状から、同じ器形の個体を効率的に重ねて収納することを意図した形態と想定され、これも軍使用ならではの資料とみられる。第89図44の記念杯は、第4章で詳述したように、昭和15年（1940）、熊本市清水台に設置された陸軍幼年学校の営内社である雄健（おたけび）神社の創建に際して関係者に配布されたものと考えられる。本資料の出土も、当時の熊本城における旧日本陸軍拠点としての土地利用状況を如実に示す資料といえよう。

近代の磁器染付・釉下彩の絵付け技法において、ゴム版絵付けが目立つことに注目する。この技法は、大正末～昭和初期に実用化したとされるものである¹⁾。熊本市域における関連事例として、大江跡群第121次調査における陶磁器の一括資料を挙げておく²⁾。この調査区は、明治44年（1911）に開校した高校敷地内にあり、本事例は開校当時の校舎の基礎下部において一括廃棄されたものである。これらの絵付け技法をみると、銅版絵付け・吹き墨（エアスプレー）が主体で、ゴム版絵付けのものは1点も無い。なお、共伴資料には、開校と同時に実施された加藤清正三百年忌の際に配布された土師器の記念杯があり、廃棄時期は明治44年に限定することができる。本事例から、熊本市域においてゴム版絵付け製品が普及するのは、明治末年以降とができる。翻って、本報告資料のなかに認められるゴム版絵付けを施した統制陶器、すなわち昭和16～21年（1941～46）の产品は、市域における当該技法資料の流通時期を具体的に示すものといえる。

器種組成をみると、近世～近代を通して偏在性が認められる。近世初期における数点の備前焼鉢を除いて食物調理具や貯蔵具は殆どみられず、ほぼ供膳具で占められている。このことは、前述した時期の偏りと併せ、本調査区における土地利用の形態を反映するものであろうが、具体的な内容は、金属製品など他形態の検討や文献史料調査を踏まえた今後の課題としておきたい。

以下、注目すべき資料について特記する。

b. 網田焼皿の認定（第77図12）

五階御櫓跡の櫓台において出土した染付皿は網田焼の可能性が極めて高い。網田焼は、熊本県宇土市に

において生産された熊本県内最大の磁器窯である。寛政5年（1793）に創業され、昭和初期まで存続した。初期においては藩の保護・育成政策もあって藩窯として大いに繁栄し、この時期の製品には優品も多い。「凡そ瓷器は肥後網田山を第一とし、薩州及び肥前松浦諸窯これに注ぐ」とまで称されたという。しかし、文化3年（1806）以降、段階的に藩の保護・育成政策が打ち切られ、文政10年（1829）には藩窯から完全に脱して民間経営の窯となる³⁾。なお、近代においては、磁器土の調達不足によるためであろう、粗質な陶器生産が主体となっていくことを付記しておく。

宇土市教育委員会が所蔵する、端反挽・小丸挽を主体とする19世紀初頭～中頃の窯資料を実見する機会を得た⁴⁾。当該資料は、全体に粗製品が多く、おそらくは民窯となった時期以降のものと考えられる。このなかに、本報告資料の染付皿に特徴が合致する資料が数点認められた。すなわち以下の特徴である。第4章でも触れたが、改めて記す。①呉須は暗緑色の発色で、内面には二重格子文を描いている。②内底の蛇の目釉剥ぎは粗く、釉が搔き取りきれずに筋状に残っており、さらに、重ね焼きした上部の個体の高台の圧痕が認められる。③高台（内外）と内底において釉の爛れが顕著であり、爛れた部分には透明な短い針状の付着物が認められる。この特徴は網田焼固有の属性とみられ、他の小中皿においても普遍的に認められる。以上の合致から、本報告資料は網田焼の可能性が高いと考えられる。产地同定は、当該期における流通形態を捉えるうえで有効であり、本報告における知見は大きいといえる。ちなみに、現段階において熊本市内各所における発掘調査資料を概観すると、上記の特徴などの一致から、皿については網田焼と認定し得る資料が多く、網田焼の流通が熊本市域、特に城下において活発であったことが窺われる。

c. 英国ドーソン窯産の硬質陶器小皿（第77図13）

ドーソン窯硬質陶器の出土は県内初例であり、特記しておく。岡 泰正によれば、英国ドーソン窯の製品は、オランダ商船によって長崎にもたらされ、それには当時の日本における唐物（輸入品）に対する好奇心やエキゾティシズム（西洋趣味）が関わっていたと考えられるという。本報告資料と同形態品は、1837～1864年に生産され、主に幕末の元治年間に輸入された。銅版転写による内面文様は裏印に記されているパターン「GEM」、すなわち宝石という意味である。連続する葉のモチーフを加飾した文様で、その起源はビザンティン美術にあるという⁵⁾。

ドーソン窯製品の出土事例は、長崎市各所における報告資料の他、管見によれば、九州管内では垂水・宮之城島津家屋敷跡⁶⁾などが挙げられる。本報告資料と同形態品は、長崎市勝山町遺跡・出島和蘭商館跡に好例がある⁷⁾。ただし、長崎市出土資料と本報告資料を比べると、裏印の陰刻（インプレスドマーク）「DAWSON3」において差異が認められる。長崎市資料は横書き、本報告資料は円形のデザインである。この差異が何に由来するのかは不明である。

以上、本調査区におけるドーソン窯硬質陶器は嗜好性の高いものといえる。富裕層の所有が考えられ、それは藩制末期における上級武士か、あるいは明治初期における鎮台上級官と想定される。

d. 不明壺（第87図10～第88図18）

百間御櫓跡において一括廃棄された、時期・生産地・用途のいずれも不明の壺2種である。出土事例は、現在のところ本報告資料の他、昭和35年、天守再建以前に熊本城の大小天守櫓台において多量に採集された破片資料、熊本城本丸御殿跡発掘調査における少量の出土資料を挙げるのみである。熊本城内ののみ、それも少ない地点からの出土であり、極めて限定的な分布状況といえる。時期については、不明瞭ながら、以下の理由から近代と想定される。①共伴資料中に近代の产品とみられる関西系陶器小碗（第88図19）が認められる。②大小天守櫓台の採集破片資料には明らかな二次焼成品は認められない。このことは、人々、そこに存在したのではなく、明治10年（1877）2月19日の天守焼失以降に大小天守櫓台に持ち込まれた（廃棄された）ことを示すと考えられる。

不明壺は、焼成・形態差から一見別々のa・b類2種に大別されるが、第4章で詳述したように、これ

らは相互に関連するものである。なお、各個体をみると、製作技法や器形において小異が認められ、同じ使用形態を意図しながらも、未だ製作技法が安定化していない段階における製品と考えることができる。このことは、前記の分布状況と併せ、不明壺の製作が限定された状況・時期において行なわれた可能性を示している。用途については、熊本城研究の第一人者である富田紘一による興味深い見解がある。「有孔であるから単なる器とは考えられない。西南戦争のおり突撃隊の武器として、熊本城の清正公のホウロクダマを参考にしてガラス瓶に鉄釘などを詰めた一種の手榴弾を作製したとある。あるいは、この資料がそのホウロクダマであるのかもしれない。」⁸⁾。思いつきの感もあるが頗る聴るべき説である。この見解を探るならば、不明壺は西南戦争の舞台となった熊本城の歴史的特性を如実に語る資料と評価できる。いずれにせよ、不明壺の価値付けは、その特異性ゆえに不可避の課題である。今後の追調査をお約束したい。

(2) 金属製品

a. 概要

近世～近代の資料では、鉄釘（和釘）、武器・軍用品の出土が目立つ。近世・近代を通して、詰まるところ軍事施設であった熊本城の性格を鑑みれば当然のことといえる。一方、現代の資料をみると、コンビーフ缶の開封に用いる付属の巻き取り鍵や缶ジュースの開封に用いる缶切などの出土が挙げられる（第99図197・198）。熊本城の歴史は、現代においては、文化財・史跡としての、さらには副次的な価値である観光地・都市公園としての歩みがある。上記2点の資料は、軍事施設から平和な時代の観光地・都市公園へと変容した姿を如実に示す資料として、あえて報告したものである。以下、注目資料について特記する。

b. 鉄釘（和釘）

鉄釘は欠損や錆化により図面を掲載しなかったものを含め、五階御櫓台下の小段に設けたトレチと百間御櫓台において多く出土しており、特に前者における偏在性が高い。前者は、本来、五階御櫓の建築部材として使用され、五階御櫓解体の際に落下したものと考えられる。これに関連して触れておきたいのは、五階御櫓台上における鉄釘の出土状況である。出土は極少量で実測図掲載に耐え得るようなものは無く、このことは、解体後の櫓台において廃材の整理あるいは整地が行なわれた可能性を示している。解体後の五階御櫓台は、西南戦争時には砲台として利用されており（後述）、整理・整地はそのための措置であったとみられる。「西南戦争 畿岡大尉陣中日誌」⁹⁾において、熊本城攻防戦の準備作業として、2月15日「城ノ内外石垣……等ノ藪ヲ刈リ掃除ニ着手シ」、同16日「城内外石垣等ノ掃除及ビ城内各處ニ櫻門設置ニ着手ス」、同18日「城内外ノ掃除及ビ櫻門落成、城内顚ル清潔」などの記述がある。その作業の一つとして五階御櫓台においても行なわれたであろう「掃除」が、上記の鉄釘の出土状況に反映したものと考えたい。

なお、第4章2において、頭部の製作技法から鉄釘をa・b類の2種に分けて報告した。この差異は、機能差・時期差に関わるものではないが、技法上の癖、すなわち工人の単位差を反映したものと捉えられる。熊本城の普請において、複数の工人の単位が関わったことを示すものである。

c. 近世の武器類

火縄銃弾・火縄銃のカラクリ部品・口薬入れなどが出土しており、火縄銃弾の点数が多い。火縄銃弾には鉛製と鉄製があり、大きさも、火矢筒あるいは大鉄砲銃弾（第95図74）から二匁銃弾（あるいは榴霰弾子か、第95図94）まで様々である。大きさからゲベール銃弾の可能性を指摘できるものもある。このように、他の銃型式や榴霰弾子の可能性もあるものを含めた25点が出土している。出土位置は、百間御櫓台に多い傾向はあるものの明確な偏在性は認められない。注目されるのは、殆どが未使用弾であることである。銃弾は、通常、銃腔を通る際の急激な摩擦により錫バリは消失し、着弾のショックにより大きく変形、あ

るいは破損する。使用の末・既は、これらの観察から判断したものである。火縄銃のカラクリ部品（第95図95～100）は、全て百間御櫓台の2つの隣接するグリッド（F90-82グリッド・F91-82グリッド）からの出土であり、これらは、同じ部品の出土点数から少なくとも3丁分が存在している。

第16図「城内御絵図」（明和六年-1769銘）をみると、飯田丸曲輪内に「鉄炮蔵」「御持筒組御道具入」と表記された2棟の建物がみられる。本報告の火縄銃弾・火縄銃のカラクリ部品・口薬入れは、いずれも櫓台の出土ではあるが、上記のような曲輪内における施設の存在と関連する可能性を指摘できる。

d. 近代の武器類-西南戦争関連武器類の出土状況-

明治10年（1877）の西南戦争における熊本城攻防戦に関わる可能性が高い資料について特記する。第18図「両軍配備図」や第5章1において示したように、飯田丸五階御櫓台において砲台が設置されたと考えられる。そのため本項では、西南戦争と同時代性が評価される火砲関連資料¹⁰⁾、加えて小銃関連資料を扱うこととする。

「熊本鎮臺戦闘日記」の検討

まずは、「熊本鎮臺戦闘日記」¹¹⁾（以下「日記」）から、飯田丸における戦闘関連記事を抜粋する。

- 2月22日 戦闘日記「飯田丸砲臺ヨリ榴弾及び榴弾ヲ連發シ下馬橋ノ守兵ト共ニ防戦ス賊モ…花畠ノ地ニ據り射撃スルコト最モ劇シ」。武庫日誌「此日戦争最モ激烈ナルヲ以テ兵器ノ損傷及ヒ弾薬ノ消耗從テ多シ即チ飯田丸ヲ以テ支給場トシ銃工若干名ヲ派遣シ小損ノ器具ヲ修理セシム」
- 2月23日 武庫日誌「賊の昨夜築造セシ花岡山及ヒ四方地村砲臺の處在ヲ確認シ乃チ藤崎及ヒ飯田丸ノ砲臺ヨリ山野砲及ヒ二十門臼砲等ヲ連發シテ之ヲ掃蕩セント欲ス」
- 2月24日 会計日誌「一ハ洗場山崎ヨリ一ハ高田原ヨリ並ニ懸廊ヲ襲フ又擊テ之ヲ卻ク下馬飯田丸守兵モ亦發砲シテ之ニ應ス」
- 2月25日 会計日誌「弾薬ノ欠乏ヲ慮リ夜中探射ノ為メニ各守地ヘ『エンピール』銃ヲ備ヘシム」。武庫日誌「十四聯隊ノ携帯セルモノハ悉ク『エンピール』銃ナルヲ以テ之ヲ『スナイドル』銃ニ替ヘシメ且各保壘ニ『エンピール』銃ヲ給與シ夜間ノ探偵射撃ニ供ス」
- 2月28日 武庫日誌「賊弾飯田丸兵器庫ニ落下シ大ニ庫内ヲ破壊ス當時銃工ヲ督シ頻リニ『スナイドル』銃ヲ修理セシム」
- 3月1日 会計日誌「賊兵安巳橋ヨリ來ルヲ見ル我カ嶽ノ丸飯田丸ノ砲兵榴弾ヲ發シ之ヲ逆撃ス」
- 3月2日 会計日誌「花岡山ノ賊弾頗リニ來ルヲ以テ飯田丸ノ守兵應戰ス」
- 3月4日 武庫日誌「花岡山及ヒ段山ノ賊壘ヨリ大小砲ヲ以テ我カ飯田丸並ニ懸廊ノ守地ヲ射撃スルコト間断ナシト雖モ兩守地ノ兵ハ肯テ應戰セス」
- 3月11日 会計日誌「城ノ南方白川堤ニ砲臺ヲ築キ砲二門を以テ飯田丸ヲ攻ム…寺原ニ砲臺ヲ築ク本丸及ヒ千葉城飯田丸ノ各砲臺ヨリ榴弾ヲ連發シテ遂ニ之ヲ拂除ス」
- 3月13日 会計日誌「飯田丸千葉城ノ如キモ亦安巳橋及ヒ花岡山ノ賊ト砲戦シ段山ノ聲援ヲナス」
- 3月16日 武庫日誌「花岡山及ヒ山崎等ノ賊弾カ飯田丸ノ兵器庫ニ落下スルモノ未タ全滅セス又『スナイドル』銃弾薬ノ大ニ減少スルヲ覺フ蹟『エンピール』銃弾薬ハ夜間ノ探射ニ要ス…砲弾ノ消耗漸ク減スト雖モ藤崎懸廊飯田丸野砲營諸壘ノ如キハ敢テ異ナラス」
- 3月17日 会計日誌「飯田丸ノ守兵下通町及ヒ白川堤ノ賊ト砲戦ス」
- 3月21日 武庫日誌「過日來花岡山及ヒ山崎ノ賊壘ヨリ我カ飯田丸ノ兵器庫ヲ砲撃ス屋上ノ為ニ破壊シ恰モ蜂巣ノ如シ」
- 3月22日 武庫日誌「午前第九時我カ飯田丸ノ守兵下通町白川堤ノ賊ト砲戦シ同第十一時四十分ニ至リテ息ム」
- 3月25日 会計日誌「飯田丸及ヒ懸廊ノ守兵花岡山及ヒ長六橋を砲撃スルコト六回」

4月5日 武庫日誌「安巴橋近傍ノ戦壘ヨリ射撃セシ二十挺臼砲ノ弾丸類ニ我カ飯田丸ニ落下シ甚々危殆ナルヲ以テ厚サー寸許ナル木板數十枚ヲ以テ該所土蔵（兵器格納所ナリ）ノ屋ヲ重蓋ス且戦弾ヲ飯田丸野砲々廠ニ發射セルヲ以テ弾薬車ノ各部分並ニ車輪四個損ス」

4月7日 會計日誌「南方ノ戦聲最甚キヨリ以テ飯田丸ノ守兵發砲シテ之カ聲援ナス」

4月12日 會計日誌「飯田丸ヨリ二本樹地方ノ砲ヲ砲撃ス」

以下、要約と所見を列記する。

①砲台には山砲・野砲・20ドライム臼砲が設置され、榴弾・榴霰弾が発射された。20ドライム臼砲は、射程は短いものの高く放物線を描いて落下する弾道から、敵陣営を上部から破壊する意図で採用されたものと考えられる¹²⁾。

②砲台からは、薩兵の進撃への攻撃、薩軍砲台への攻撃、激戦地における応援射撃が行なわれた。攻撃は頻繁で、攻防戦がやや膠着した3月16日においても飯田丸における砲弾の使用量は減らなかった。なお、「日記」の記述は殆どが火砲による攻撃に関わるものであり、小銃の使用については不明瞭である。

③飯田丸には兵器庫や野砲工廠があり、またスナイドル銃などの兵器修理や弾薬の供給が行なわれた。

④薩軍からの攻撃も頻繁で、20ドライム臼砲弾などが頻繁に着弾している。それは、攻防戦がやや膠着した3月16日においても全く減らないほどであった。薩軍からみても飯田丸が官軍の重要な拠点であったためであろう。兵器庫や野砲工廠にも着弾しており、兵器庫の屋根は蜂の巣のようになった。この状況は、屋根の被害が榴霰弾によるものであったことを示すものである。

⑤小銃についてはスナイドル銃が常用され、エンフィールド銃は夜間の探射に用いるなど、スナイドル銃の弾薬の消耗を抑えるために予備的に配備された。これは、飯田丸の戦闘に直接関わるものではないが、本報告における小銃関連資料を検討するうえで注目される記述である。

関連資料の出土状況－飯田丸における配備の復元－（第171・172図、第10表）

出土資料は第10表に示す通りである。なお、西南戦争に関わる可能性が高い武器類は、原則、全点を第4章2に図面を掲載しているが、四斤砲弾については、報告者の不備から掲載できなかったものが多いことをお断りしておく。

小銃関係資料では、エンフィールド銃弾とスナイドル銃薬莢が多い。エンフィールド銃弾は殆どが未使用品である。これは前記⑤に示したように、エンフィールド銃は予備的な配備であり、結果、殆ど使用されず、さらに戦争後、銃弾が廃棄されたためと考えられる。一方、スナイドル銃については、薬莢は出土するものの銃弾は1点も出土していない。このことは、スナイドル銃弾は発射された、あるいは戦争後に回収されたためと考えられる。小銃弾との関連が指摘できる資料として鉛素材（第97図144）を挙げる。前記④に示したように、飯田丸においては「弾薬の供給」が行なわれた。その具体的な内容は不明だが、あるいは、弾薬の铸造が行なわれていたとも考えられ、鉛素材は、これに関わる可能性を指摘できる。ちなみに鉛素材の重さは30.2gであり、これはスナイドル銃1発の重量にはほぼ相等するものである¹³⁾。

火砲関連資料では摩擦管と四斤砲弾が多い。摩擦管は火砲の発射時に使用する器具であり、発射後はその場に廃棄されたと考えられる。ワイヤーループが残存しているものは未使用品、これが抜けているものは、断定は難しいが使用品の可能性が高いものである。四斤砲弾は全て破片資料である。これらが官軍の未使用弾か、薩軍からの発射弾であるかについては不明である。ただし、後述する出土分布の検討から、多くは官軍未使用弾の可能性が高いとみられる。すなわち、何らかの事情で発射前に破碎した砲弾片をその場に廃棄したものと考えられる。

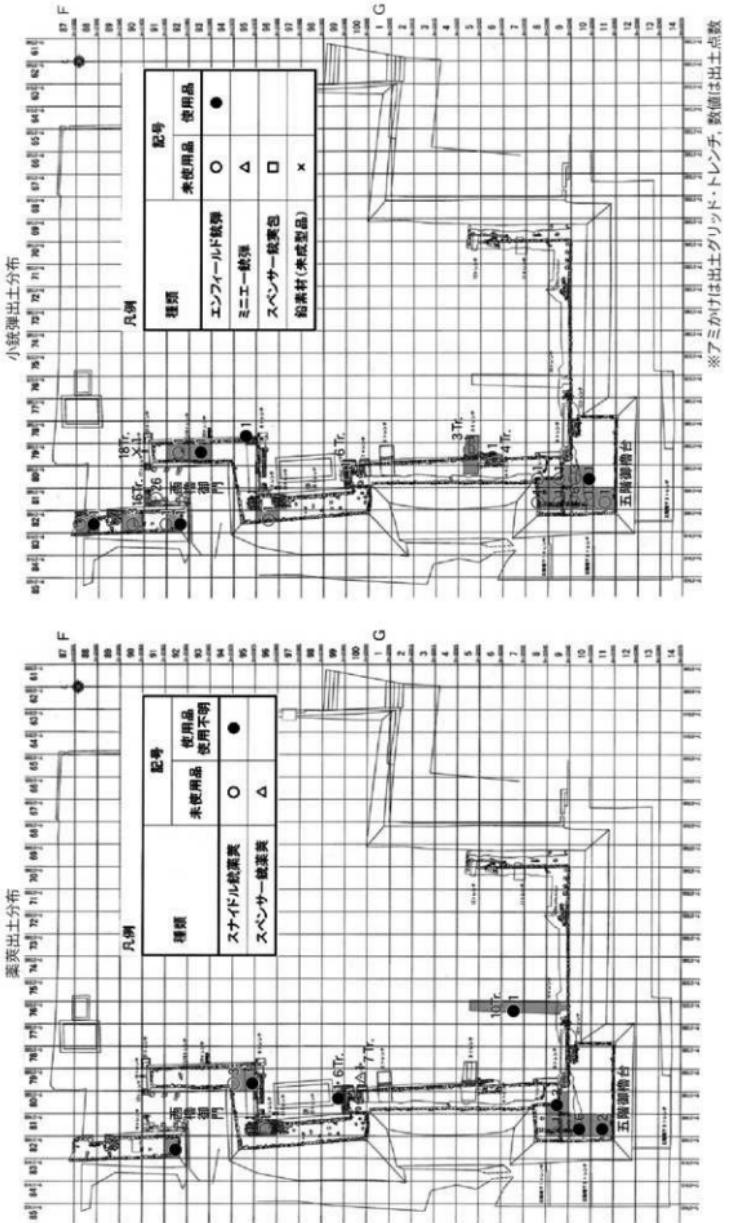
出土分布の検討から、飯田丸における砲台の設置、兵の配置を復元する。まず注目されるのは、上記各形態の全てが同様の偏在性を示すことである。すなわち、五階御櫓台と、西櫓御門を取り囲む虎口周辺の百間御櫓台付近において分布が濃密であることが指摘される。これは、両箇所において砲台が設置され、

第10表 西南戦争関連武器類出土位置一覧

出土位置	使用	点数	出土位置	使用	点数		
エンフィールド銃弾							
五階櫓台	G8-80Gr.	未	1	スペンサー銃薬莢			
	G8-81Gr.	未	1	G9-81Gr.	未	1	
	G9-80Gr.	未	1	百間櫓周辺トレンチ	7トレンチ	未	1
	G9-81Gr.	未	1	I字形摩擦管（「抜け」はワイヤーループが無いもの）			
	G10-80Gr.	未	3	G9-80Gr.	未	1	
	G10-81Gr.	未	6	G11-80Gr.	未	2	
	G11-81Gr.	未	1	G9-80Gr.	抜け	1	
	G10-80Gr.	既	1	G10-80Gr.	抜け	3	
	F88-82Gr.	未	1	F90-82Gr.	未	1	
	F90-82Gr.	未	3	F88-82Gr.	抜け	1	
百間櫓台	F92-79Gr.	未	1	F89-82Gr.	抜け	1	
	F92-82Gr.	未	1	F92-82Gr.	抜け	1	
	F96-82Gr.	未	1	百間櫓台周辺トレンチ	19トレンチ	抜け	2
	F88-82Gr.	既	1	L字形摩擦管（「抜け」はワイヤーループが無いもの）			
	F92-82Gr.	既	1	百間櫓台	F95-79Gr.	抜け	1
	F93-79Gr.	既	1	周辺トレンチ	19トレンチ	抜け	2
	F95-78Gr.	既	1	約子形銅製品			
	3トレンチ	未	1	五階櫓台	G9-81Gr.	—	1
	4トレンチ	未	1	四斤砲弾			
	16トレンチ	未	26	五階櫓台	G9-81Gr.	破片	1
ミニエー銃弾							
五階櫓台	G10-81Gr.	未	1	G10-79Gr.	破片	1	
スペンサー銃実包							
百間櫓台周辺トレンチ	6トレンチ	未	1	G10-80Gr.	破片	1	
鉛素材							
百間櫓台周辺トレンチ	18トレンチ	—	1	G11-80Gr.	破片	1	
スナイドル銃薬莢							
五階櫓台	G9-80Gr.	既	3	G11-81Gr.	破片	1	
	G10-81Gr.	既	6	五階櫓下トレンチ	3トレンチ	破片	1
	G11-81Gr.	既	2	F88-82Gr.	破片	1	
百間櫓台	F95-79Gr.	未	3	F91-82Gr.	破片	1	
	F96-81Gr.	未	1	百間櫓台	F92-82Gr.	破片	1
	F92-82Gr.	既	1	F93-79Gr.	破片	1	
	F95-79Gr.	不明	1	F95-81Gr.	破片	1	
五階櫓台周辺トレンチ	6トレンチ	不明	1	F98-82Gr.	破片	1	
跡跡周辺トレンチ	10トレンチ	不明	1	百間櫓台周辺トレンチ	4トレンチ	破片	2
20ドイム臼砲弾							
その他		石垣工事（東）	破片	—	1		

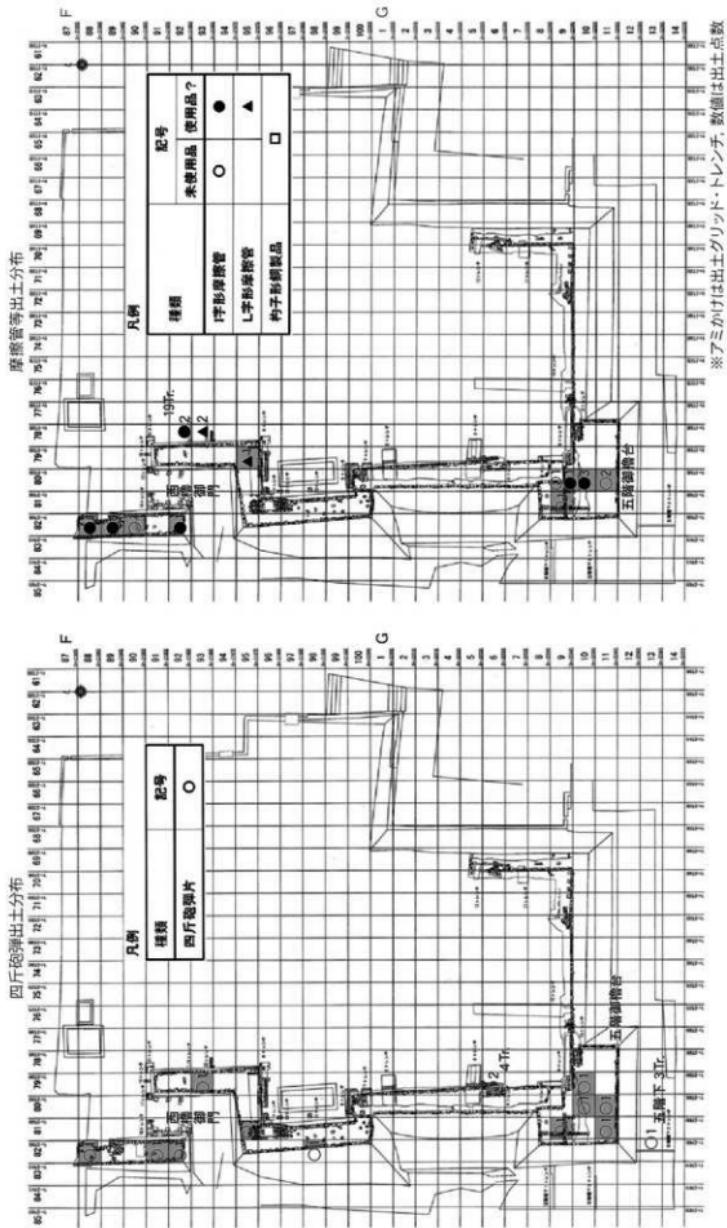
その付近に銃弾が配置された状況を示している。なお、五階御櫓台上のうち南東側においては出土が無く、これは明治22年（1889）の熊本大地震により南東部分が崩落したことによるものである。

次に小銃関連資料について詳述する。エンフィールド銃弾は前述のように殆どが未使用品である。銃腔を通る際の摩擦により生じる施条痕の有無、同様の理由により消失する鑄バリの有無、着弾のショックによる変形の有無などの観察から、使用の未・既を判断したものである。特に出土点数が多いのは、西櫓御門の内側に設けた16トレンチであり、全て未使用品である。これは、万が一、西櫓御門が突破された場合の備えとして、エンフィールド銃弾を配備していたことを示すものと考えられる。スナイドル銃薬莢については、その使用の未・既に注目すると偏在性が指摘できる。スナイドル銃薬莢はセンターファイア方式であり、ベース（底板）中央の雷管における打痕の有無の観察により未・既が判断され、五階御櫓台上のものは全て使用品、百間御櫓台上のものは殆どが未使用品である。これは、一つには五階御櫓台から実際に射撃が行なわれたことを示している。「日記」の記述にある、花畠・県庁（古城）など近接する位置まで進出した薩軍兵を攻撃する際のものと考えられる。ちなみにスナイドル銃（砲兵銃）の照尺は800



第171図 西南戦争関連武器類出土分布図1（縮尺任意）

※アミかけは出土グリッド・トレーンチ、数値は出土点数



第172図 西南戦争関連武器類出土分布図2 (縮尺任意)

※アミかけは出土グリッド・トレーンチ、数値は出土点数

ヤード（約731m）である¹⁴⁾。いま一つは、百間御櫓台（西櫓御門虎口周辺）においては、配備はされたものの付近まで薩軍兵が侵出することがなかったため、実際の射撃は殆ど無かったことを示している。

以上、出土資料の属性分析により、配備と戦闘のあり方を復元するとともに、曲輪内における銃弾の供給の実態について可能性を示した。特に、絵図・文献では明らかでなかった百間御櫓台（西櫓御門虎口周辺）における砲台の設置、銃卒の配置と小銃使用などの事項は、近代戦跡の歴史復元において、考古学的分析が有効であることを改めて示したものといえる。

e. 銭貨（第98図184、第104図16）

特に注目される2点について記す。仙台通宝（第98図184）・康熙通宝（第104図16）である。仙台通宝は、平面形から「撫角錢」と称される鉄錢で、天明4年（1784）、石巻にて鑄造が開始され、天明8年（1788）、幕命により鑄造が停止されたものである。幕府が仙台藩に鑄造を許可した条件は仙台領内ののみの通用とすることであったが、実際には領外にも大量に流出し、全国の銭相場を混乱させる要因となったという¹⁵⁾。県内初例である。康熙通宝は、清朝順治18年（1661）の初鑄である¹⁶⁾。背面には、左右に鑄造局名を表す満州文字「寶泉」が認められる。江戸幕府は清朝銭の輸入・流通を禁止していたが、実際には長崎貿易などにより国内へ流入し、流通したものと考えられる。

これら特異な銭貨の出土は、当時、藩庁が置かれ、領外との経済交渉も活発であったであろう熊本城の特徴を示すものとして評価したい。

〔註〕

- 1) 成瀬晃司「江戸から東京へ 陶磁器」「国説 江戸考古学研究事典」柏書房 2001
- 2) 平成22年度、熊本市教育委員会調査。本報告書未刊。
- 3) 福原 透「宇土 肥後細川藩窯網田焼」「平成18年度秋季特別展覧会 八代の歴史と文化 肥後の磁器－その歴史と系譜－」八代市立博物館未来の森ミュージアム 2006
- 4) 宇土市教育委員会のご厚意により実見の機会を得た。
- 5) 岡 泰正「新地唐人荷蔵跡出土のヨーロッパ製磁器について」「新地唐人荷蔵跡」長崎市埋蔵文化財調査協議会 1996、岡 泰正「築町遺跡出土の西洋食器について」「築町遺跡」長崎市教育委員会 1997
- 6) 鹿児島県立埋蔵文化財センター「鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（48）垂水・宮之城島津家屋敷跡」2003
- 7) 長崎市教育委員会「勝山町遺跡」2003、長崎市教育委員会「国指定史跡 出島和蘭商館跡」2010
勝山町遺跡資料については長崎市教育委員会のご厚意により実見の機会を得、また、扇浦正義氏よりご教示を得た。
- 8) 富田紘一「消えた熊本城を探る」「熊本大学放送公開講座 熊本城を科学する」熊本大学 1992
- 9) 原口長之・永田日出男・中村哲也校訂「西南戦争 順岡大尉陣中日誌」熊本史談会 1980
- 10) 純子形銅製品については、用途不明ながら、下記報告書における指摘から火砲関連資料として扱った。
玉東町教育委員会「玉東町文化財調査報告第8集 玉東町西南戦争遺跡 調査総合報告書」2012
- 11) 日本史籍協会「熊本鎮臺戦闘日記」東京大学出版会 1977
- 12) 肇方道弘・肇方浩二「両軍の主要兵器とその威力－戦闘力は火砲の時代」「歴史群像シリーズ21 西南戦争 最強薩摩軍団崩壊の軌跡」学習研究社 1990
- 13) スナイドル銃弾の重量については、本報告資料及び註10文献の観察表を参照した。
- 14) 所 莊吉「新版 國解古銭事典」雄山閣 2006
- 15) 仙台市「仙台市史 通史編5 近世3」2004
- 16) 矢部倉吉「改訂新版 古銭と紙幣」金圖社 2009



飯田丸曲輪（南西より）



飯田丸曲輪（西より）



飯田丸曲輪（南より）



五階御櫓V面石垣（南東より）



五階御櫓G面石垣（東より）



五階御櫓F面石垣（南より）



五階御櫓F面石垣（南西より）



五階御櫓E面石垣（北西より）



五階御櫓E面石垣（北西より）



五階御櫓D面石垣（北より）



五階御櫓調査前（北東より）



五階御櫓O面石垣（北より）



五階御櫓石階段（北東より）



五階御櫓N面石垣（東より）



五階御櫓J面石垣（北より）



五階御櫓石垣（東より）



五階御櫓石垣（東より）



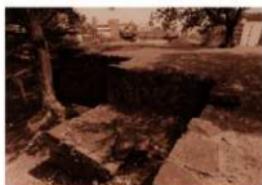
五階櫓台東部調査前（東より）



五階櫓台南西部調査前（東より）



五階櫓台北東部調査前（南東より）



五階櫓台北東部調査前（北西より）



五階櫓台南西部裏込め状況（北より）



五階櫓台南西部裏込め状況（北東より）



五階櫓台整地面検出状況（南東より）



五階櫓台整地面検出状況（南より）



五階櫓台整地面検出状況（東より）



五階櫓台南北土層断面（西より）



五階櫓台南北土層断面（西より）



五階櫓台南北土層断面（西より）



五階櫓台遺構検出状況（北東より）



五階櫓台遺構検出状況（北より）



五階櫓台遺構検出状況（東より）



礎石側面の矢羽根刻印



五階櫓台内部の石垣（南より）



五階櫓台内部の石垣（北西より）



五階櫓台内部の石垣（西より）



五階樁台内部の石垣（西より）



五階樁台内部の石垣（西より）



五階樁台内部の石垣（西より）



五階樁台内部の石垣（西より）



五階樁台内部の石垣（西より）



5トレンチ（北東より）



9トレンチ石積み（北東より）



13トレンチ調査前（北より）



13トレンチ検出状況（北より）



五階御樁下小段調査前（南より）



五階御樁下1トレンチ上位（東より）



五階御樁下1トレンチ下位（東より）



五階御樁下1トレンチ土層（北西より）



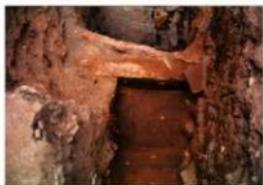
五階御樁下3トレンチ上位（北より）



五階御樁下3トレンチ下位（北より）



五階御樁下3トレンチ下位（南より）



五階御樁下3トレンチ雨落ち溝（南より）



百間御樁調査前（北西より）



百間御櫓第1棟C面石垣（北西より）



百間御櫓第1棟調査前（南西より）



百間御櫓第1棟調査前（南より）



百間御櫓第1棟調査前（北東より）



2トレンチ（東より）



2トレンチV字溝（北東より）



2トレンチ拡張部石垣（東より）



2トレンチ拡張部断面（南より）



3トレンチ（東より）



3トレンチV字溝（北西より）



V字溝分岐部（東より）



24トレンチ（東より）



4トレンチ（東より）



4トレンチ（南東より）



4トレンチ断面（北より）



4トレンチ（東より）



6・7トレンチ（東より）



6トレンチ石階段（北より）



6 トレンチV字溝（北西より）



6 トレンチ断面（西より）



7 トレンチ（東より）



7 トレンチ断面（南より）



百間御櫓第1棟（南より）



百間御櫓第1棟（東より）



百間御櫓第1棟（南東より）



百間御櫓第1棟（北東より）



百間御櫓第1棟下層石垣（北より）



百間御櫓第2棟B面石垣（南より）



第2棟調査前（南より）



百間御櫓第2棟調査前（東より）



百間御櫓第2棟合板調査前（南東より）



百間御櫓第2棟調査前（西より）



百間御櫓第2棟断面（北西より）



向埋御門周辺石垣（南東より）



向埋御門周辺石垣（南西より）



向埋御門周辺石垣（南より）



向埋御門上石垣（東より）



向埋御門上石垣（西より）



向埋御門上断面（西より）



百間御檜第2棟（南東より）



百間御檜第2棟（北より）



向埋御門上（南より）



百間御檜第2棟合坂平場（西より）



百間御檜第2棟合坂石階段（南東より）



1トレーンチ土層断面（北西より）



1トレーンチ（東より）



8トレーンチ（西より）



8トレーンチ向埋御門南口（東より）



8トレーンチ（南西より）



8トレーンチ（南西より）



向埋御門内トレーンチ（西より）



22トレーンチ（南より）



百間御檜第3棟調査前（南西より）



百間御檜第3棟（南より）



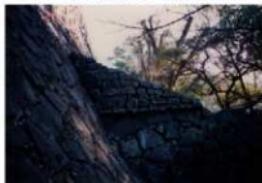
百間御櫓第4棟南面



百間御櫓第4棟調査前（東より）



百間御櫓第4棟調査前（南より）



百間御櫓第4棟石積み（西より）



百間御櫓第4棟石積み（西より）



百間御櫓第4棟遺物（北より）



百間御櫓第4棟遺物（北東より）



百間御櫓第4棟北端（南より）



百間御櫓第4棟（東より）



百間御櫓第4棟（南より）



百間御櫓第4棟石階段（北東より）



石階段平場（南東より）



百間御櫓第2・4棟（北西より）



西櫓御門調査前（南西より）



西櫓御門調査前（北東より）



西櫓御門礎石（北東より）



16トレンチ（北より）



16トレンチ遺物（南より）



17トレンチ（西より）



20トレンチ（東より）



21トレンチ（南東より）



曲輪南辺（西より）



曲輪南辺（北東より）



10トレンチ（北より）



10トレンチ石垣根石（北より）



10トレンチ断面（北西より）



10トレンチ断面（北西より）



10トレンチ断面（北西より）



11トレンチ（西より）



11トレンチ断面（北より）



12トレンチ（西より）



12トレンチ断面（西より）



南辺石壠（北西より）



南辺石壠（西より）



南辺石壠（北東より）



南辺石壠（北西より）



隅御櫓礎石（北より）



隅御櫓礎石（東より）



南辺石壘暗渠（北より）



南辺石壘暗渠（北より）



南辺石壘暗渠（北西より）



南辺石壘暗渠（東より）



曲輪東辺調査前（北西より）



曲輪東辺調査前（北より）



曲輪東面石垣（北東より）



曲輪東面石垣（東より）



曲輪東面石垣（南東より）



東辺石壘（北西より）



東辺石壘（北より）



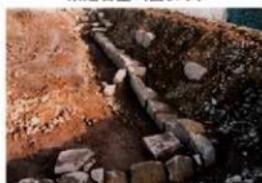
東辺石壘（西より）



東辺石壘（西より）



東辺石壘（西より）



東辺石壘（南西より）



鉄炮蔵跡礎石（西より）



第77図 1



第77図 2



第77図 4



第77図 4



第77図 5



第77図 9



第77図 10



第77図 11



第77図 12



第77図 12



第77図 13



第77図 13



第77図 14



第77図 16



第77図 17



第78図 18



第78図 19



第78図 20



第78図21



第78図23・24



第78図25・26



第78図28



第79図29



第79図31



第79図33



第79図49



第80図51～53



第80図54～59



第80図62・63



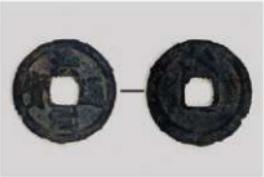
第80図65～69



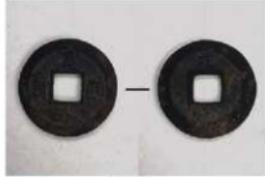
第81図77・78



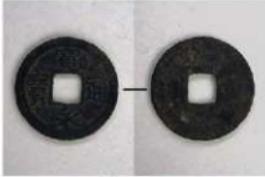
第81図79



第81図80



第81図83



第81図84



第81図91



第82図 1



第84図 2



第85図 18



第87図 4



第87図 8



第87図 9



第87図 11



第87図 12



第87図 12



第87図 13



第87図 13



第87図 14



第87図 15



第87図 15



第88図 16



第88図 17



第88図 18



第88図 18



第88図18



第88図19



第88図19



第88図20



第88図21



第88図22



第88図24



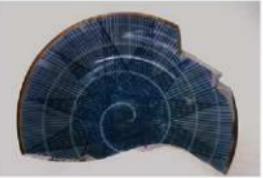
第88図24



第88図24



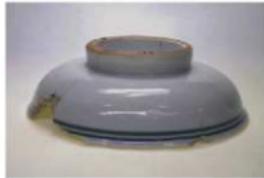
第89図25



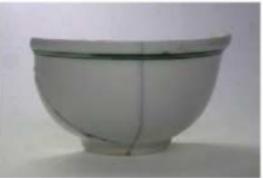
第89図25



第89図26



第89図27



第89図28



第89図30



第89図31



第89図32



第89図33



第89図34



第89図35



第89図36



第89図37



第89図37



第89図38



第89図39



第89図39



第89図40



第89図40



第89図41



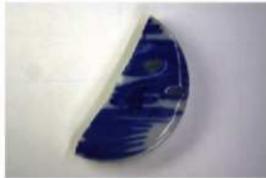
第89図44



第89図44



第89図45



第89図46



第89図47



第90図51



第90図52



第91図54



第91図55



第91図56



第91図56



第92図58、第94図59～61



第95図74～80



第95図88～92・94



第95図96～100



第96図104～106



第95図108～117



第96図118～127



第96図118～127



第97図145・146



第97図147～150



第97図154



第97図155・156・158



第97図157・161・162



第98図164



第98図165・166

第98図167

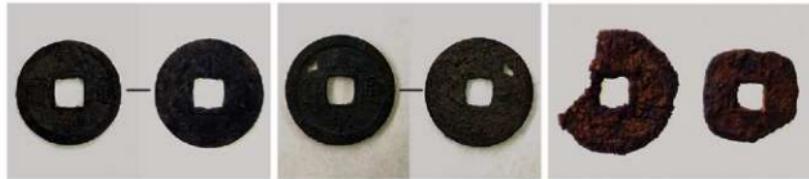
第98図168～170



第98図171～174

第98図176

第98図177



第98図180

第98図181

第98図183・184



第99図190

第99図192

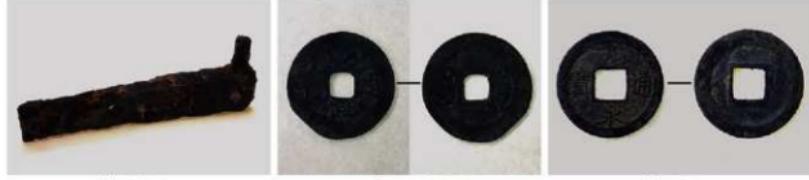
第101図4



第102図1

第102図3

第102図6



第103図7

第104図16

第104図17



第107図 1



第107図 3



第107図 5



第108図 6



第108図 11



第109図 18



第110図 24



第110図 27



第110図 28



第112図 37



第112図 40



第113図 47



第113図 52



第114図 60



第114図 60



第114図 61



第115図 63



第115図 64



第115図68



第115図72・73・74



第115図77



第115図78



第115図79



第115図80



第116図88



第116図89



第116図92



第116図94



第116図96



第117図104



第117図108



第117図111



第117図124



第119図124



第120図130



第121図134



第122図140



第123図144



第123図146



第123図149



第123図149



第124図152



第124図153



第124図154



第125図162



第125図164



第125図166



第126図169



第126図170



第126図172



第127図175



第127図179



第128図183



第128図185



第128図187



第128図188



第128図189



第128図192



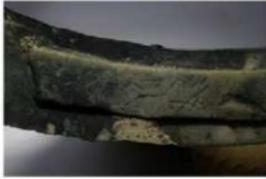
第128図193



第129図194



第129図194右



第129図194左



第129図195



第129図196



第129図198



第129図200



第130図203



第130図204



第130図208



第130図209



第130図211



第130図212



第136図259



第136図261



第136図264



第136図265



第136図266



第136図268



第136図269



第136図277



第136図278



第136図279



第137図282



第137図283



第137図285



第140図311



第142図323



第142図326



第143図332



第143図332横

報告書抄録

ふりがな	くまもとじょうあと はっくつちょうさほうこくしょ							
書名	熊本城跡発掘調査報告書1							
副書名	飯田丸の調査							
シリーズ名	熊本城調査研究センター報告書							
シリーズ番号	第1集							
編著者名	鶴嶋俊彦、美濃口雅朗、金田一精、國武真紀子、木下泰葉							
編集機関	熊本市熊本城調査研究センター							
所在地	〒860-0007 熊本県中央区古京町1番1号 TEL 096-355-2327							
発行年月日	平成26年11月30日							
所取遺跡名	所在地	コード		緯度・経度 (世界測地系)		調査期間	調査面積	調査原因
		市 町 村	遺跡番号	北緯	東經			
くまもとじょうあと いせきぐん 熊本城跡遺跡群 いいだまるちょうさく 飯田丸調査区	くまもとじゅう おうくほんまる 熊本県中央区 本丸1	43201	246 · 247	32° 48' 15°	130° 42' 18°	1998.10.01 ~ 2001.03.28	約1500m ²	史跡整備
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
熊本城跡遺跡群 飯田丸調査区	城郭	近世、近代	石垣、櫓建物、門、排水溝		瓦、陶磁器類、ガラス製品、金属製品、石製品、動物骨			
要旨	<p>熊本市では特別史跡となっている熊本城跡について、国民の理解を促すために昭和35年の復興天守建設を嚆矢として、重要文化財建造物や石垣の修理、櫓・堀などの歴史的建造物復元など、保存・整備・活用に関わる多くの事業を実施してきた。平成9年度には「熊本城復元整備計画」を策定し、市民の歴史的・文化的シンボルを良好な形で後世に継承していく事業に着手している。飯田丸一帯復元整備事業は、その一環で平成10年度の発掘調査に始まり、平成17年度の飯田丸五階櫓復元工事で完了した事業である。</p> <p>飯田丸は、史料では「たけの丸」「鎌ノ丸」とも呼称され、「本丸之内」として扱われ、天守や御殿があった御本丸や字土櫓があった平左衛門丸や敷寄屋丸などの下位にあって、主郭の西辺と南辺の防備を担う重要な曲輪だった。</p> <p>発掘調査は復元事業に関わる地点に限定して実施し、五階櫓や百間櫓の基礎や明治初期に撤去された石垣の根石を確認しており、その成果は五階櫓や石垣の復元に反映されている。調査では瓦に代表される多くの遺物が出土しているが、李朝系の垂瓦など、未知の資料も確認されるなど、今後の継続的調査における課題も新たとなつた。</p> <p>また、熊本城跡周辺は西南戦争の激戦地でもあり、飯田丸は政府軍の砲台として利用されている。発掘調査は限られた面積であったが、砲弾片や小銃弾など多くの戦争遺物が出土し、史料の記述を裏付けることになった。</p>							

熊本城調査研究センター報告書 第1集

熊本城跡発掘調査報告書 1

- 飯田丸の調査 -

2014年11月

発行 熊本市熊本城調査研究センター

〒860-0007 熊本市中央区古京町1-1

TEL (096) 355-2327

印刷 有限会社 あすなろ印刷

〒860-0821 熊本市中央区本山3-3-1

TEL 096-335-8880